秋田県文化財調査報告書第89集

東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅲ

――― 鳥居平遺跡・飛鳥平遺跡・北の林Ⅰ遺跡 ―――

秋田県埋蔵文化財センター

1982・3

秋田県教育委員会

序

十和田湖の南玄関口である鹿角市に、東北縦貫自動車道の建設計画が立てられ、現在工事進行中であります。

この道路通過地（八幡平・十和田錦木間）に埋蔵文化財包蔵地が33か所あることが判明し、秋田県教育委員会は日本道路公団の委託を受け、昭和54年度から発掘調査を実施しております。昭和55年度は19遺跡の発掘調査を無事終了し、今回鳥居平遺跡、飛鳥平遺跡、北の林Ⅰ遺跡の発掘調査成果を報告書として刊行することになりました。

本報告書は、今まで不明分野の多かった鹿角地方の歴史解明に役立つものと考えられ、広く永く活用されることを望むものであります。

最後に発掘調査から報告書刊行までに顧問、専門指導員、日本道路公団、鹿角市、同教育委員会はじめ関係各位から多大の協力を得ましたことについて、心から感謝の意を表するものであります。

昭和57年 3 月

秋田県教育委員会

教育長　畠　山　芳　郎

例　　言

1．本書は東北縦貫自動車道路線内に位置する昭和55年度発掘調査19遺跡のうち、鳥居平遺跡（遺跡番号№７）、飛鳥平遺跡（遺跡番号№８）、北の林Ⅰ遺跡（遺跡番号№９）の発掘調査報告書である。

2．遺跡については機会を見て発表してきたが、本報告書を正式のものとする。

3．発掘調査遺跡の記載は、岩手県境から付した遺跡番号による。

4．報告遺跡の発掘調査においては、次の各氏からご助言、ご教示をいただいた。

秋田大学教授	新野直吉
秋田県鹿角市立十和田中学校長	安村二郎
秋田県立秋田高等学校教諭	塩谷順耳
秋田県立十和田高等学校教諭	大里勝蔵
秋田県鹿角市大日堂禰宜	安倍良行

5．本書　Ⅱの１「地形と地質」は、秋田県立能代北高等学校教諭藤本幸雄氏の執筆である。

6．古陶磁器類の鑑定は、金沢大学法文学部助教授佐々木達夫氏にお願いした。

7．土器の産地同定は、奈良教育大学教授三辻利一氏にお願いした。

8．石器の石質鑑定は、秋田県立博物館学芸主事嵯峨二郎氏にお願いした。

9．^{14}C年代測定は、日本アイソトープ協会にお願いした。

10．花粉分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社にお願いした。

11．遺構内外の土壌の燐分析は、秋田県農業試験場環境部にお願いした。

12．報告書に使用した地図は、建設省国土地理院発行５万分の１、２万５千分の１、日本道路公団作成1,000分の１の地形図である。

13．遺跡の土層、遺物の色調記載は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所　色票監修『新版、標準土色帖』を使用した。

14．遺物の実測には、画像工学研究所のスケッチグラフ卓上型を活用した。

15．遺物の細部観察には、ニコン実体顕微鏡ＳＭ２－10を使用した。

16．本書は下記の調査員、補佐員が協議して作成した。

Ⅰ、Ⅱの２　岩見　誠夫

鳥居平遺跡、飛鳥平遺跡

橋本　高史、　山崎　文幸、　佐藤　幸夫、　安保　　徹、　鈴木　秋良

鈴木　功、　米村　博美、　児玉　均

遺物の実測、採拓、トレース、整理には、上記調査員、補佐員の他次の者があたった。

秋元　広子、　泉沢ルリ子、　神田　愛子、　斎藤トミエ

田村　生子、　奈良　栄子、　奈良美栄子、　前田　エミ

柳沢　照子

北の林Ⅰ遺跡

岩見　誠夫、　藤井　安正、　栗沢　光男、　松岡　忠仁、　児玉　悦郎

高橋　学、　関　直、　田中　和徳

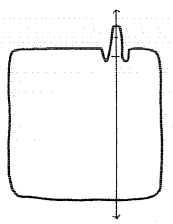
遺物の実測、採拓、トレース、整理には、上記調査員、補佐員の他次の者があたった。

安保　幸子、　津島　満子、　池田　邦子、　奈良　恵、　畠山千代美

17. 遺構法量は次の計測方法によった。

＜主軸方向＞

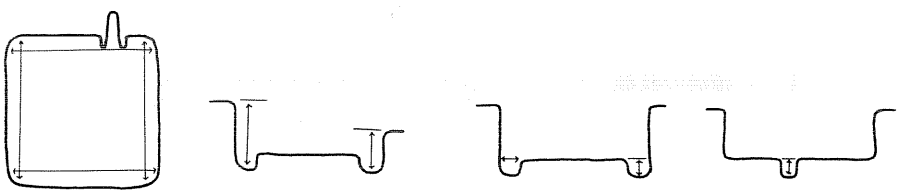
カマドの煙道部、袖部の各中央を結んだ中軸線を住居跡の主軸方向とした。



＜面　積＞

住居跡・土壙は遺構上端の占地面積である。計測にはプラニメーターを用い、3回計測して平均値を算出した。

＜壁　長＞　　＜壁　高＞　　＜壁溝幅・深さ＞　　＜ピット深さ＞



目　　次

序

例　言

Ⅰ　はじめに …… 1

1　発掘調査に至るまで …… 1

2　発掘調査経過 …… 2

3　調査の組織と構成 …… 4

4　調査の方法 …… 5

Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 7

1　地形と地質 …… 7

2　環境と周辺の遺跡 …… 13

鳥居平遺跡

1　遺跡の概観 …… 21

2　調査の方法 …… 25

3　調査の経過 …… 26

4　遺跡の層位 …… 29

5　遺構と遺物 …… 31

6　まとめ …… 54

飛鳥平遺跡

1　遺跡の概観 …… 73

2　調査の方法 …… 75

3　調査の経過 …… 79

4　遺跡の層位 …… 80

5　遺構と遺物 …… 83

6　まとめ …… 186

北の林Ⅰ遺跡

1　遺跡の概観 …… 251
2　調査の方法 …… 251
3　調査の経過 …… 251
4　遺跡の層位 …… 252
5　遺構と遺物 …… 260
6　まとめ …… 413

挿　図　目　次

第１図　地形分類図 …… 8
第２図　露頭柱状図 …… 10
第３図　周辺遺跡分布図 …… 14
第４図　秋田県鹿角市における東北縦貫自動車道路線上の遺跡分布図 …… 17

鳥 居 平 遺 跡

第１図　遺跡位置図 …… 22
第２図　グリッド配置図 …… 23
第３図　遺構配置図 …… 27
第４図　Ｅライン断面図 …… 30
第５図　ＳＩ 029竪穴住居跡 …… 31
第６図　ＳＩ 029竪穴住居跡出土土器 …… 32
第７図　ＳＫ 005土壙 …… 33
第８図　ＳＫ 008土壙 …… 34
第９図　ＳＫ 009土壙 …… 34
第10図　ＳＫ 010土壙 …… 35
第11図　ＳＫ 013土壙 …… 35
第12図　ＳＫ 013土壙出土土器 …… 36
第13図　ＳＫ 014土壙 …… 37
第14図　ＳＫ 015土壙 …… 37
第15図　ＳＫ 017土壙 …… 38
第16図　ＳＫ 017土壙出土土器 …… 38
第17図　ＳＫ 020土壙 …… 38
第18図　ＳＫ 021・022土壙 …… 39
第19図　ＳＫ 021土壙出土土器 …… 40
第20図　ＳＫ 023土壙 …… 40
第21図　ＳＫ 025土壙 …… 40
第22図　ＳＫ 026土壙 …… 41

第23図　ＳＫ026土壙出土土器 …… 41
第24図　ＳＫ030土壙 …… 42
第25図　ＳＤ002溝 …… 43
第26図　ＳＤ003溝 …… 45
第27図　ＳＤ006溝 …… 47
第28図　ＳＤ007溝 …… 48
第29図　ＳＤ003、007溝出土土器 …… 49
第30図　遺構外出土土器 …… 51
第31図　遺構外出土石器 …… 52

飛鳥平遺跡

第１図　遺跡位置図 …… 74
第２図　グリッド配置図 …… 76
第３図　遺構配置図 …… 77
第４図　Ｇライン断面図 …… 81
第５図　ＳＩ036竪穴住居跡 …… 84
第６図　ＳＩ036竪穴住居跡出土遺物（１） …… 85
第７図　ＳＩ036竪穴住居跡出土遺物（２） …… 86
第８図　ＳＩ037竪穴住居跡 …… 89
第９図　ＳＩ037竪穴住居跡出土遺物（１） …… 91
第10図　ＳＩ037竪穴住居跡出土遺物（２） …… 92
第11図　ＳＩ037竪穴住居跡出土遺物（３） …… 93
第12図　ＳＩ037竪穴住居跡出土遺物（４） …… 94
第13図　ＳＩ037竪穴住居跡出土遺物（５） …… 95
第14図　ＳＩ037竪穴住居跡出土遺物（６） …… 96
第15図　ＳＩ037竪穴住居跡出土遺物（７） …… 97
第16図　ＳＩ037竪穴住居跡出土遺物（８） …… 98
第17図　ＳＩ038、039竪穴住居跡 …… 99
第18図　ＳＩ038竪穴住居跡出土遺物 …… 101
第19図　ＳＩ039竪穴住居跡炉 …… 103
第20図　ＳＩ039竪穴住居跡出土遺物（１） …… 105

第21図　ＳＩ039竪穴住居跡出土遺物（２）……106
第22図　ＳＩ002竪穴住居跡……109
第23図　ＳＩ002竪穴住居跡出土遺物（１）……110
第24図　ＳＩ002竪穴住居跡出土遺物（２）……111
第25図　ＳＩ002竪穴住居跡出土遺物（３）……112
第26図　ＳＩ003竪穴住居跡……113
第27図　ＳＩ003竪穴住居跡出土遺物……116
第28図　ＳＩ004竪穴住居跡……118
第29図　ＳＩ004竪穴住居跡カマド……119
第30図　ＳＩ004竪穴住居跡出土遺物……120
第31図　ＳＩ009竪穴住居跡……122
第32図　ＳＩ009竪穴住居跡出土遺物……124
第33図　ＳＩ011竪穴住居跡……125
第34図　ＳＩ011竪穴住居跡出土遺物（１）……128
第35図　ＳＩ011竪穴住居跡出土遺物（２）……129
第36図　ＳＩ011竪穴住居跡出土遺物（３）……130
第37図　ＳＩ012竪穴住居跡……132
第38図　ＳＩ012竪穴住居跡カマド……133
第39図　ＳＩ012竪穴住居跡出土遺物……134
第40図　ＳＩ013竪穴住居跡……135
第41図　ＳＩ013竪穴住居跡カマド……139
第42図　ＳＩ035竪穴住居跡……142
第43図　ＳＩ035竪穴住居跡出土遺物……143
第44図　ＳＩ041竪穴住居跡……144
第45図　ＳＫ008土壙……145
第46図　ＳＫ014土壙……146
第47図　ＳＫ014土壙出土土器……146
第48図　ＳＫ015土壙……147
第49図　ＳＫ016土壙……147
第50図　ＳＫ017土壙……148
第51図　ＳＫ018土壙……148
第52図　ＳＫ020土壙……148

第53図　ＳＫ021土壙……150
第54図　ＳＫ022土壙……150
第55図　ＳＫ022土壙出土土器……151
第56図　ＳＫ024土壙……152
第57図　ＳＫ025土壙……152
第58図　ＳＫ027土壙……153
第59図　ＳＫ028土壙……153
第60図　ＳＫ029土壙……154
第61図　ＳＫ031土壙……155
第62図　ＳＫ033土壙……155
第63図　ＳＫ043土壙……156
第64図　ＳＫ043土壙出土土器……156
第65図　ＳＫ045土壙……156
第66図　ＳＫ046土壙……157
第67図　ＳＫ059土壙……157
第68図　ＳＫ065・066土壙……157
第69図　土壙出土土器……158
第70図　ＳＸ010埋甕……159
第71図　ＳＸ010埋甕実測図……160
第72図　ＳＸ019埋甕……162
第73図　ＳＸ019埋甕実測図……163
第74図　ＳＸ（Ｆ）040焼土遺構……164
第75図　ＳＤ001溝……165
第76図　ＳＤ001溝出土遺物……167
第77図　遺構外出土土器（１）……172
第78図　遺構外出土土器（２）……173
第79図　遺構外出土土器（３）……174
第80図　遺構外出土土器（４）……175
第81図　遺構外出土石器（１）……176
第82図　遺構外出土石器（２）……177
第83図　遺構外出土石器（３）……178
第84図　遺構外出土石器（４）……179

第85図　遺構外出土石器（５）……180
第86図　遺構外出土石器（６）……181
第87図　遺構外出土石器（７）……182
第88図　遺構外出土石器（８）……183
第89図　遺構外出土石器（９）……184
第90図　遺構外出土石器（10）……185
第91図　鳥居平遺跡及び飛鳥平遺跡付近地層断面図……189

北の林Ⅰ遺跡

第１図　グリッド配置図……254
第２図　北の林Ⅰ遺跡遺構配置図……255
第３図　土層図……257
第４図　浮石堆積図……259
第５図　ＳＩ 023竪穴住居跡実測図……261
第６図　ＳＩ 023竪穴住居跡複式炉実測図……262
第７図　ＳＩ 023・025竪穴住居跡出土土器（１）……263
第８図　ＳＩ 025竪穴住居跡出土土器（２）……264
第９図　ＳＩ 024竪穴住居跡および石組炉実測図……265
第10図　ＳＩ 025竪穴住居跡実測図……267
第11図　ＳＩ 025竪穴住居跡炉実測図……269
第12図　ＳＫ 001・002・003・004土壙実測図……270
第13図　ＳＫ 005・006・007・008土壙実測図……272
第14図　ＳＫ 009・010・011土壙実測図……274
第15図　ＳＫ 001・010土壙出土土器……276
第16図　ＳＫ（Ｆ）001・002・003フラスコ状ピット実測図……277
第17図　ＳＫ（Ｔ）001・002・003溝状土壙実測図……279
第18図　ＳＫ（Ｔ）004・005・006溝状土壙実測図……281
第19図　ＳＫ（Ｔ）007・008・009溝状土壙実測図……283
第20図　ＳＫ（Ｔ）010・011・012溝状土壙実測図……285
第21図　ＳＫ（Ｔ）013・014・015溝状土壙実測図……287
第22図　ＳＫ（Ｔ）016溝状土壙実測図……289

第23図　遺構外出土土器（１）……290
第24図　遺構外出土土器（２）……291
第25図　遺構外出土土器（３）……292
第26図　遺構内・外出土石器（１）……293
第27図　遺構内・外出土石器（２）……294
第28図　遺構内・外出土石器（３）……295
第29図　遺構内・外出土石器（４）……296
第30図　遺構内・外出土石器（５）……297
第31図　遺構内・外出土石器（６）……278
第32図　ＳＩ001竪穴住居跡実測図……303
第33図　ＳＩ001竪穴住居跡カマド実測図……305
第34図　ＳＩ002竪穴住居跡実測図……307
第35図　ＳＩ003竪穴住居跡および炭化物出土状況実測図……309
第36図　ＳＩ003竪穴住居跡カマド実測図……312
第37図　ＳＩ003竪穴住居跡出土土器（１）……313
第38図　ＳＩ003竪穴住居跡出土土器（２）……314
第39図　ＳＩ004・005竪穴住居跡実測図……315
第40図　ＳＩ004竪穴住居跡カマド実測図……319
第41図　ＳＩ004竪穴住居跡出土土器……320
第42図　ＳＩ005竪穴住居跡カマド実測図……321
第43図　ＳＩ005・006竪穴住居跡出土土器……322
第44図　ＳＩ006竪穴住居跡実測図……323
第45図　ＳＩ006竪穴住居跡カマド実測図……325
第46図　ＳＩ007竪穴住居跡実測図……326
第47図　ＳＩ007竪穴住居跡カマド実測図……328
第48図　ＳＩ008－Ａ・Ｂ竪穴住居跡実測図……329
第49図　ＳＩ008－Ａ竪穴住居跡カマド実測図……333
第50図　ＳＩ007・008竪穴住居跡出土土器……334
第51図　ＳＩ008－Ｂ・009竪穴住居跡出土土器……335
第52図　ＳＩ009竪穴住居跡出土土器……336
第53図　ＳＩ009竪穴住居跡実測図……338
第54図　ＳＩ009竪穴住居跡カマド実測図……339

第55図　ＳＩ010竪穴住居跡実測図……340
第56図　ＳＩ010竪穴住居跡カマド実測図……342
第57図　ＳＩ010竪穴住居跡出土土器……343
第58図　ＳＩ011竪穴住居跡実測図……344
第59図　ＳＩ011竪穴住居跡カマド実測図……346
第60図　ＳＩ011・012竪穴住居跡出土土器……347
第61図　ＳＩ012－Ａ・Ｂ竪穴住居跡実測図……349
第62図　ＳＩ012－Ａ・Ｂ竪穴住居跡カマド実測図……352
第63図　ＳＩ013竪穴住居跡実測図……353
第64図　ＳＩ013竪穴住居跡カマド実測図……355
第65図　ＳＩ014竪穴住居跡実測図……356
第66図　ＳＩ014竪穴住居跡出土土器……358
第67図　ＳＩ015－Ａ・Ｂ竪穴住居跡実測図……359
第68図　ＳＩ016竪穴住居跡および炭化材出土状況実測図……363
第69図　ＳＩ016竪穴住居跡カマド実測図……366
第70図　ＳＩ016竪穴住居跡出土土器（１）……367
第71図　ＳＩ016竪穴住居跡出土土器（２）……368
第72図　ＳＩ017竪穴住居跡実測図……369
第73図　ＳＩ018竪穴住居跡実測図……371
第74図　ＳＩ018竪穴住居跡カマド実測図……373
第75図　ＳＩ018竪穴住居跡出土土器……374
第76図　ＳＩ019竪穴住居跡実測図……375
第77図　ＳＩ019竪穴住居跡カマド実測図……377
第78図　ＳＩ019・020竪穴住居跡出土土器……378
第79図　ＳＩ020竪穴住居跡実測図……379
第80図　ＳＩ020竪穴住居跡カマド実測図……381
第81図　ＳＩ020・021・022竪穴住居跡出土土器……382
第82図　ＳＩ021竪穴住居跡実測図……383
第83図　ＳＩ022竪穴住居跡実測図……385
第84図　ＳＡ001柱列実測図……387
第85図　ＳＢ001掘立柱建物跡……388
第86図　ＳＢ002掘立柱建物跡……389

第87図　ＳＢ003掘立柱建物跡……370
第88図　ＳＢ004掘立柱建物跡……391
第89図　ＳＢ005掘立柱建物跡……392
第90図　ＳＢ006掘立柱建物跡……393
第91図　ＳＢ007掘立柱建物跡……394
第92図　ＳＢ008掘立柱建物跡……395
第93図　ＳＢ009掘立柱建物跡……396
第94図　ＳＸ（Ｆ）001・002焼土遺構実測図……397
第95図　歴史時代出土石器……399
第96図　歴史時代出土金属器・古銭……400
第97図　ＳＤ001・002・003・004・005・006溝状遺構実測図……402
第98図　ＳＤ007・008溝状遺構実測図……404

表　目　次

第１表　重鉱物組成……10
第２表　周辺遺跡一覧……15

鳥居平遺跡

第１表　ＳＩ029竪穴住居跡観察表……33

飛鳥平遺跡

第１表　ＳＩ036竪穴住居跡観察表……83
第２表　ＳＩ037竪穴住居跡観察表……87
第３表　ＳＩ038竪穴住居跡観察表……96
第４表　ＳＩ039竪穴住居跡観察表……101
第５表　ＳＩ002竪穴住居跡観察表……107
第６表　ＳＩ003竪穴住居跡観察表……115
第７表　ＳＩ004竪穴住居跡観察表……117
第８表　ＳＩ009竪穴住居跡観察表……121
第９表　ＳＩ011竪穴住居跡観察表……123
第10表　ＳＩ012竪穴住居跡観察表……131
第11表　ＳＩ013竪穴住居跡観察表……137
第12表　ＳＩ035竪穴住居跡観察表……141
第13表　ＳＩ041竪穴住居跡観察表……143
第14表　飛鳥平遺跡土壌分析結果……161
第15表　鳥居竪穴住居跡及び飛鳥平遺跡土層断面図説明表……190

北の林Ⅰ遺跡

第１表　ＳＩ023竪穴住居跡観察表……260
第２表　ＳＩ024竪穴住居跡観察表……266
第３表　ＳＩ025竪穴住居跡観察表……268

第４表　ＳＫ001土壙観察表……271
第５表　ＳＫ002土壙観察表……271
第６表　ＳＫ003土壙観察表……271
第７表　ＳＫ004土壙観察表……271
第８表　ＳＫ005土壙観察表……273
第９表　ＳＫ006土壙観察表……273
第10表　ＳＫ007土壙観察表……273
第11表　ＳＫ008土壙観察表……273
第12表　ＳＫ009土壙観察表……275
第13表　ＳＫ010土壙観察表……275
第14表　ＳＫ011土壙観察表……275
第15表　ＳＫ(F)001フラスコ状ピット観察表……278
第16表　ＳＫ(F)002フラスコ状ピット観察表……278
第17表　ＳＫ(F)003フラスコ状ピット観察表……278
第18表　ＳＫ(T)001溝状土壙観察表……280
第19表　ＳＫ(T)002溝状土壙観察表……280
第20表　ＳＫ(T)003溝状土壙観察表……280
第21表　ＳＫ(T)004溝状土壙観察表……282
第22表　ＳＫ(T)005溝状土壙観察表……282
第23表　ＳＫ(T)006溝状土壙観察表……282
第24表　ＳＫ(T)007溝状土壙観察表……284
第25表　ＳＫ(T)008溝状土溝観察表……284
第26表　ＳＫ(T)009溝状土溝観察表……284
第27表　ＳＫ(T)010溝状土壙観察表……286
第28表　ＳＫ(T)011溝状土壙観察表……286
第29表　ＳＫ(T)012溝状土壙観察表……286
第30表　ＳＫ(T)013溝状土壙観察表……288
第31表　ＳＫ(T)014溝状土壙観察表……288
第32表　ＳＫ(T)015溝状土壙観察表……288
第33表　ＳＫ(T)016溝状土壙観察表……289
第34表　遺構内・外出土土器観察表　(1)……299
第35表　遺構内・外出土土器観察表　(2)……300

第36表　遺構内・外出土土器観察表 (3)……301
第37表　遺構内・外出土石器観察表……302
第38表　ＳＩ 001 竪穴住居跡観察表……306
第39表　ＳＩ 002 竪穴住居跡観察表……308
第40表　ＳＩ 003 竪穴住居跡観察表……311
第41表　ＳＩ 004 竪穴住居跡観察表……317
第42表　ＳＩ 005 竪穴住居跡観察表……318
第43表　ＳＩ 006 竪穴住居跡観察表……324
第44表　ＳＩ 007 竪穴住居跡観察表……327
第45表　ＳＩ 008 －Ａ竪穴住居跡観察表……331
第46表　ＳＩ 008 －Ｂ竪穴住居跡観察表……332
第47表　ＳＩ 009 竪穴住居跡観察表……337
第48表　ＳＩ 010 竪穴住居跡観察表……341
第49表　ＳＩ 011 竪穴住居跡観察表……345
第50表　ＳＩ 012 －Ａ竪穴住居跡観察表……348
第51表　ＳＩ 012 －Ｂ竪穴住居跡観察表……351
第52表　ＳＩ 013 竪穴住居跡観察表……354
第53表　ＳＩ 014 竪穴住居跡観察表……357
第54表　ＳＩ 015 －Ａ竪穴住居跡観察表……361
第55表　ＳＩ 015 －Ｂ竪穴住居跡観察表……362
第56表　ＳＩ 016 竪穴住居跡観察表……365
第57表　ＳＩ 017 竪穴住居跡観察表……370
第58表　ＳＩ 018 竪穴住居跡観察表……372
第59表　ＳＩ 019 竪穴住居跡観察表……376
第60表　ＳＩ 020 竪穴住居跡観察表……380
第61表　ＳＩ 021 竪穴住居跡観察表……384
第62表　ＳＩ 022 竪穴住居跡観察表……386
第63表　ＳＡ 001 柱列観察表……387
第64表　ＳＢ 001 掘立柱建物跡観察表……388
第65表　ＳＢ 002 掘立柱建物跡観察表……389
第66表　ＳＢ 003 掘立柱建物跡観察表……390
第67表　ＳＢ 004 掘立柱建物跡観察表……391

第68表　ＳＢ005掘立柱建物跡観察表……392
第69表　ＳＢ006掘立柱建物跡観察表……393
第70表　ＳＢ007掘立柱建物跡観察表……394
第71表　ＳＢ008掘立柱建物跡観察表……395
第72表　ＳＢ009掘立柱建物跡観察表……396
第73表　ＳＸ（F）001焼土遺構観察表……398
第74表　ＳＸ（F）002焼土遺構観察表……398
第75表　歴史時代出土石器観察表……401
第76表　出土金属器観察表……401
第77表　出土古銭観察表……401
第78表　ＳＤ001溝状遺構観察表……406
第79表　ＳＤ002溝状遺構観察表……406
第80表　ＳＤ003溝状遺構観察表……406
第81表　ＳＤ004溝状遺構観察表……406
第82表　ＳＤ005溝状遺構観察表……407
第83表　ＳＤ006溝状遺構観察表……407
第84表　ＳＤ007溝状遺構観察表……407
第85表　ＳＤ008溝状遺構観察表……407

図　版　目　次

鳥　居　平　遺　跡

図版１　鳥居平遺跡遠景（上）６：歌内　７：鳥居平　８：飛鳥平　９：北の林Ⅰ
10：北の林Ⅱ（西▶東）
（下）調査前（東▶西）

図版２　（上）鳥居平遺跡遠景　調査終了時（下が西）
（下）鳥居平遺跡近景　（南▶北）

図版３　（上）鳥居平遺跡近景　（北▶南）
（下）地層図　（西▶東）

図版４　ＳＩ029竪穴住居跡（上）遺構確認面（南▶北）
（下）掘り下げ後（南▶北）

図版５　（上）土壙近景　（南▶北）
（下）土壙近景（北▶南）

図版６　（上）ＳＫ005土壙　（南東▶北西）
（下）ＳＫ009土壙　（南▶北）

図版７　（上）ＳＫ013土壙　（南▶北）
（下）ＳＫ014土壙　（北▶南）

図版８　（上）ＳＫ017土壙　（北▶南）
（下）ＳＫ020土壙　（北▶南）

図版９　（上）ＳＫ021土壙　（北▶南）
（下）ＳＫ022土壙　（北▶南）

図版10　（上）ＳＫ023土壙　（北▶南）
（下）ＳＫ025土壙　（北▶南）

図版11　（上）ＳＫ026土壙　（北東▶南西）
（下）発掘調査風景　（北▶南）

図版12　（上）溝遠景　（南▶北）
（下）ＳＤ002溝　（北▶南）

図版13　（上）ＳＤ003溝　（北▶南）
（下）ＳＤ007溝　（西▶東）

図版14　ＳＩ029竪穴住居跡出土土器
図版15　（上）ＳＫ013土壙出土土器
（下）ＳＫ017・021・026土壙出土土器
図版16　（上）遺構外出土土器
（下）遺構外出土石器

飛　鳥　平　遺　跡

図版１　飛鳥平遺跡航空写真　（上が北）
図版２　（上）飛鳥平遺跡遠景　調査前　（東▶西）
（下）飛鳥平遺跡近景　（東南▶北西）
図版３　（上）ＳＩ036竪穴住居跡　（南▶北）
（下）ＳＩ036竪穴住居跡土器出土状況
図版４　ＳＩ037竪穴住居跡（上）　（東▶西）
（下）　（南▶北）
図版５　ＳＩ037竪穴住居跡（上）複式炉　（西▶東）
（中）炉石除去後
（下）骨片出土状態
図版６　ＳＩ039竪穴住居跡（上）確認面　（西▶東）
（下）掘り下げ後　（南▶北）
図版７　ＳＩ039竪穴住居跡（上）複式炉　（北▶南）
（中）複式炉　（東▶西）
（下）骨片出土状態
図版８　ＳＩ002竪穴住居跡（上）炭化材出土状態　（西▶東）
（下）掘り下げ後　（西▶東）
図版９　ＳＩ002竪穴住居跡（上）炉半截図　（南▶北）
（下）遺物出土状態
図版10　ＳＩ003竪穴住居跡（上）　（南▶北）
（下）　（東▶西）
図版11　ＳＩ004竪穴住居跡（上）全体図　（南▶北）
（下左）カマド　（北▶南）
（下右）カマド　（南▶北）

図版12　ＳＩ009 竪穴住居跡（南▶北）

図版13　ＳＩ011 竪穴住居跡（上）全体図　（南▶北）

（下左）カマド　（北▶南）

（下右）骨片出土状態

図版14　ＳＩ012 竪穴住居跡（上）炭化材出土状態　（南▶北）

（下）掘り下げ後　（南▶北）

図版15　ＳＩ012 竪穴住居跡（上）完掘後　（南▶北）

（下左）カマド　（西▶東）

（下右）カマド　（東▶西）

図版16　ＳＩ013 竪穴住居跡（上）　（南▶北）

（下）　（東▶西）

図版17　ＳＩ035 竪穴住居跡（上）全体図　（東▶西）

（下）カマド　（北▶南）

図版18　（上）ＳＩ041 竪穴住居跡　（南▶北）

（下）ＳＫ008 土壙　（北▶南）

図版19　（上）ＳＫ014 土壙　（南▶北）

（下）ＳＫ016 土壙　（北▶南）

図版20　（上）ＳＫ017 土壙　（北▶南）

（下）ＳＸＦ040 焼土遺構　（東▶西）

図版21　ＳＸ010 埋甕（上）検出面　（東▶西）

（下）半截後　（南▶北）

図版22　（上）ＳＸ010 埋甕　土器半截後

（下）ＳＸ019 埋甕　（南▶北）

図版23　（上）遺跡層位　（西▶東）

（下）ＳＤ001 溝　（西▶東）

図版24　ＳＩ036 竪穴住居跡出土遺物（１）

図版25　（上）ＳＩ036 竪穴住居跡出土遺物（２）

（下）ＳＩ037 竪穴住居跡出土遺物（１）

図版26　ＳＩ037 竪穴住居跡出土遺物（２）

図版27　ＳＩ037 竪穴住居跡出土遺物（３）

図版28　ＳＩ037 竪穴住居跡出土遺物（４）

図版29　（上）ＳＩ037 竪穴住居跡出土遺物（５）

（下）ＳＩ037竪穴住居跡出土遺物（６）
図版30　（上）ＳＩ037竪穴住居跡出土遺物（７）
（下）ＳＩ037竪穴住居跡出土遺物（８）
図版31　（上）ＳＩ038竪穴住居跡出土遺物
（下）ＳＩ039竪穴住居跡出土遺物（１）その１
図版32　（上）ＳＩ039竪穴住居跡出土遺物（１）その２
（下）ＳＩ039竪穴住居跡出土遺物（２）
図版33　ＳＩ002竪穴住居跡出土遺物（１）
図版34　ＳＩ002竪穴住居跡出土遺物（２）
図版35　ＳＩ002竪穴住居跡出土遺物（３）その１
図版36　（上）ＳＩ002竪穴住居跡出土遺物（３）その２
（下）ＳＩ003竪穴住居跡出土遺物その１
図版37　ＳＩ003竪穴住居跡出土遺物その２
図版38　ＳＩ004竪穴住居跡出土遺物
図版39　ＳＩ009竪穴住居跡出土遺物
図版40　ＳＩ011竪穴住居跡出土遺物（１）
図版41　（上）ＳＩ011竪穴住居跡出土遺物（２）
（下）ＳＩ011竪穴住居跡出土遺物（３）
図版42　ＳＩ012竪穴住居跡出土遺物
図版43　（上）ＳＩ035竪穴住居跡出土遺物
（中）ＳＫ014土壙出土遺物
（下）ＳＫ022土壙出土遺物
図版44　（上）ＳＫ043土壙出土遺物
（下）土壙内出土遺物
図版45　ＳＸ010埋甕
図版46　ＳＸ019埋甕
図版47　（上）ＳＤ001溝出土遺物
（下）遺構外土器出土状態
図版48　（上）遺構外出土土器（１）
（下）遺構外出土土器（２）
図版49　（上）遺構外出土土器（３）
（下）遺構外出土土器（４）

図版50　（上）遺構外出土石器（１）
（下）遺構外出土石器（２）
図版51　（上）遺構外出土石器（３）
（下）遺構外出土石器（４）
図版52　（上）遺構外出土石器（５）
（下）遺構外出土石器（６）
図版53　（上）遺構外出土石器（７）
（下）遺構外出土石器（８）
図版54　（上）遺構外出土石器（９）
（下）遺構外出土石器（10）
図版55　発掘調査風景

北　の　林　Ⅰ　遺　跡

図版１　空撮による遺跡全景
図版２　（上）遺跡遠景　（西▶東）
（下）遺跡東の北林中腹から　（東▶西）
図版３　（上）発掘調査終了後　（南東▶北西）
（下）発掘調査終了後　（北西▶南東）
図版４　（上）遺跡遠景　（飛鳥平遺跡から望む）
（下）遺跡近景　（南▶北）
図版５　（上）発掘調査前の遺跡北部のようす
（下）発掘調査前の遺跡南部のようす
図版６　（上）調査風景
（下）調査風景
図版７　（上）調査風景
（下）調査風景
図版８　（上）大湯浮石の散布状況
（下）Ｈラインの土層
図版９　（上）凹地における大湯浮石の堆積状況
（下）10ライン傾斜面の大湯浮石堆積状況
図版10　（上）ＳＩ023竪穴住居跡　（北西▶南東）

（中）石皿出土状況

（下）ＳＩ023竪穴住居跡炉

図版11　（上）ＳＩ024竪穴住居跡　（東▶西）

（下）ＳＩ024竪穴住居跡石組炉

図版12　（上）ＳＩ025竪穴住居跡　（西▶東）

（中）土器出土状況

（下）ＳＩ025竪穴住居跡炉

図版13　（上）ＳＫ008・009土壙　（北▶南）

（中）凹石出土状況

（下）岩偶

図版14　（上）ＳＫ(F)001フラスコ状ピット土層断面

（下）ＳＫ(F)001フラスコ状ピット

図版15　（上）ＳＫ(T)002・009・010・011溝状土壙　（西▶東）

（下）ＳＫ(T)003・004溝状土壙　（東▶西）

図版16　（上）ＳＫ(T)005・006溝状土壙　確認状況　（北▶南）

（下）ＳＫ(T)005・006溝状土壙　完掘状況　（北▶南）

図版17　（上）ＳＫ002・003・004土壙　（北▶南）

（下）ＳＸ(F)001・002焼土遺構　（南▶北）

図版18　（上）ＳＩ001竪穴住居跡確認状況　（南▶北）

（下）ＳＩ001竪穴住居跡　（北▶南）

図版19　（上）ＳＩ003竪穴住居跡確認状況　（南▶北）

（下）ＳＩ003竪穴住居跡　（南▶北）

図版20　（上）ＳＩ004・005竪穴住居跡確認状況　（北▶南）

（下）ＳＩ004・005竪穴住居跡　（北▶南）

図版21　（上）ＳＩ006竪穴住居跡　（北▶南）

（下）ＳＩ007竪穴住居跡　（北▶南）

図版22　（上）ＳＩ008・009竪穴住居跡　（西▶東）

（下）ＳＩ009－Ａ・Ｂ竪穴住居跡　（北▶南）

図版23　（上）ＳＩ010竪穴住居跡　（北▶南）

（下）ＳＩ011竪穴住居跡確認状況　（北▶南）

図版24　（上）ＳＩ011竪穴住居跡　（北▶南）

（下）ＳＩ012－Ａ竪穴住居跡　（西▶東）

図版25　（上）ＳＩ012－Ａ・Ｂ竪穴住居跡　（西▶東）
（下）ＳＩ014竪穴住居跡　（東▶西）
図版26　（上）ＳＩ015－Ａ竪穴住居跡　（北▶南）
（下）ＳＩ015－Ａ・Ｂ竪穴住居跡　（北▶南）
図版27　（上）ＳＩ016竪穴住居跡確認状況　（西▶東）
（下）ＳＩ016竪穴住居跡遺物出土状況　（西▶東）
図版28　（上）ＳＩ016竪穴住居跡覆土土層
（下）ＳＩ016竪穴住居跡東壁ぎわの炭化材
図版29　（上）ＳＩ016竪穴住居跡　（西▶東）
（下）ＳＩ016竪穴住居跡カマド
図版30　（上）ＳＩ016竪穴住居跡　壁際の炭化材
（中）ＳＩ016竪穴住居跡　直刀
（下）ＳＩ016竪穴住居跡　カマド脇出土した土師器
図版31　（上）ＳＩ017竪穴住居跡　（西▶東）
（下）ＳＩ018竪穴住居跡　（北▶南）
図版32　（上）ＳＩ018竪穴住居跡カマド
（下）ＳＩ019竪穴住居跡　（北▶南）
図版33　（上）ＳＩ020竪穴住居跡　（北▶南）
（下）ＳＩ021竪穴住居跡　（北▶南）
図版34　（上）ＳＩ022竪穴住居跡　（南▶北）
（下）ＳＢ002掘立柱建物跡　（東▶西）
図版35　（上）ＳＢ005・009掘立柱建物跡　（北▶南）
（下）ＳＩ016・019竪穴住居跡　ＳＢ006掘立柱建物跡　ＳＡ001住列（北▶南）
図版36　（上）ＳＤ007溝状遺構　（南▶北）
（下）ＳＤ008溝状遺構　（北▶南）
図版37　（上）ＳＤ008溝状遺構の土層
（下）遺跡中央部の住居跡・掘立柱建物跡
図版38　遺構内・外縄文時代出土土器（１）
図版39　遺構内・外縄文時代出土土器（２）
図版40　遺構内・外縄文時代出土石器（１）
図版41　遺構内・外縄文時代出土石器（２）
図版42　遺構内・外歴史時代出土石器・金属器・古銭

Ⅰ　はじめに

1.　発掘調査に至るまで

秋田県の北東部、鹿角市と鹿角郡小坂町を通過する東北縦貫自動車道の建設計画の魁は、昭和40年11月公表の鹿角市・青森市間、同42年11月公表の盛岡市・鹿角市間の基本計画である。次いで昭和43年４月の鹿角市・青森市間約81㎞の第２次施行命令と同46年６月の岩手県二戸郡安代町・鹿角市間約37㎞の第５次施行命令によって、その通過予定区域が知られ、これを受けて同47年11月27日に、鹿角市十和田錦木・小坂町間の路線発表があって、ようやくその具体的な姿を県民に現わしたのである。

このため、秋田県教育委員会では、文化庁と日本道路公団が交わした覚書に基づき、昭和44年８月、鹿角市十和田地区から鹿角郡小坂町の青森県境まで、幅４㎞、延長25㎞にわたって遺跡の分布調査を行い、67遺跡を確認し、その成果を公表した。(註１)昭和48年８月には、鹿角市八幡平、尾去沢、花輪地区で、幅４㎞、延長20㎞の遺跡分布調査と試掘を実施して、46ケ所の遺跡を確認した。(註２)

昭和51年２月12日になると、昭和48年８月実施の鹿角市内遺跡分布調査結果をふまえて、日本道路公団から鹿角市八幡平から同市十和田錦木に至る延長約21.1㎞の路線の発表があり、測量が実施されるに及んだ。

秋田県教育委員会では、日本道路公団仙台建設局鹿角工事事務所の依頼により、昭和52年10月にこの路線上の遺跡分布調査を行い31遺跡の存在を確認した。(註３)昭和55年に新たに２遺跡が発見追加され、現在総計33遺跡となっている。

その後、遺跡の処遇や調査方針について日本道路公団仙台建設局と秋田県教育委員会の間に協議が持たれ、最終的に遺跡は記録保存が決定した。昭和54年２月に遺跡の発掘調査依頼があり、秋田県教育委員会では昭和54年度八幡平地区７遺跡の発掘調査を行った。昭和55年度は追加委託契約をも含めて八幡平、花輪地区19遺跡の発掘調査が４月から実施されたのである。

註１　秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第20集　1970年

註２　秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第24集　1972年

註３　秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道遺跡分布調査報告書（八幡平～十和田錦木）』秋田県文化財調査報告書第56集　1978年

2. 発掘調査経過

発掘調査は昭和55年４月15日から12月13日まで行われた。

４月14日鹿角市花輪中央公民館に発掘調査に参加する作業員に集まってもらい、調査の目的、発掘の仕方と諸注意、勤務内容、賃金等について説明と連絡を行う。４月15日歌内遺跡（小玉班）と、駒林遺跡（小林班）、小豆沢館遺跡取付道路部分（桜田班）の発掘調査に入る。駒林遺跡は工事用車道に予定されている西側部分から発掘を行う。４月16日北の林Ⅰ遺跡(岩見班)、４月22日飛鳥平遺跡（橋本班）の本格的発掘調査に入る。

５月１日駒林遺跡工事用道路部分の発掘調査完了。直ちに隣接部分の調査に移行す。遺構は検出されず、遺物は縄文土器片のみ、小豆沢館遺跡農道上部の拡幅予定地から縄文時代のフラスコ状ピット、竪穴住居跡、平安時代の竪穴住居跡、中世の掘立柱建物跡などを検出、重複多く調査は難行す。５月29日工事用重機待機の中で小豆沢館遺跡取付道路部分の発掘調査を終了す。一方飛鳥平遺跡、北の林Ⅰ遺跡では表土除去も順調に進み、数棟の縄文・平安時代竪穴住居跡の検出報告がされた。

６月１日北の林Ⅱ遺跡、２日上葛岡Ⅱ遺跡の発掘調査に入る。これは桜田班が並行して担当６月９日鳥居平遺跡の粗掘りを橋本班が飛鳥平遺跡と並行して始める。

６月８日小林班は駒林遺跡に実測班を残し、上葛岡Ⅳ遺跡の発掘調査にとりかかる。６月16日駒林遺跡の発掘調査終了。検出遺構は平安時代の竪穴住居跡３棟である。歌内遺跡の発掘調査では、縄文時代のフラスコ状ピット、平安時代の竪穴住居跡の検出が相次ぐ。

７月22日道路公団鹿角工事事務所にて、用地未解決であった発掘調査予定地について協議す。７月30日橋本班中の崎遺跡の刈払いとグリッド設定に入る。

７月23日小林班案内Ⅱ遺跡の試掘と刈払いに入り、８月６日猿ケ平Ⅰ遺跡の試掘と刈払いに移行す。８月８日上葛岡Ⅱ遺跡の発掘調査終了。検出遺構は縄文前期竪穴住居跡２棟。８月18日道路公団鹿角工事事務所と今後の発掘調査行程について協議。８月21日鳥居平遺跡発掘調査終了。本年度追加発掘調査契約６遺跡について文化課から指示あり。22日文化課門間光夫参事、富樫泰時学芸主事来所し、追加契約遺跡の現地踏査を行い、調査員と発掘調査方法について協議す。同日中の崎遺跡発掘調査開始。８月23日追加契約遺跡発掘調査につき、道路公団鹿角工事事務所と用地等の件について協議す。８月28日県立博物館庄内昭男主事、鈴木秋良補佐員、花田孝夫補助員発掘調査応援に来所。８月29日金沢大学法学部助教授佐々木達夫先生発掘調査視察。

９月６日庄内昭男主事、鈴木秋良補佐員、花田孝夫補助員帰秋。９月９日財団法人岩手県埋蔵文化財センター高橋文夫、四ッ井謙吉氏発掘調査視察。９月10日調査専門指導員国学院大学

助教授小林達雄先生各発掘調査現場を視察し指導くださる。９月11日県広報課県政ニュース作成のため北の林Ⅰ遺跡地を取材す。９月12日文化課船木義勝学芸主事、熊谷太郎、柴田陽一郎文化財主事、佐々木金正補助員発掘調査応援に来所。熊谷調査員すぐ下乳牛遺跡の試掘に入る。９月16日飛鳥平遺跡調査一旦終了。縄文中期、後期、晩期の竪穴住居跡、土壙、平安時代の竪穴住居跡の遺構が確認された。同日乳牛、東山地区所在の追加契約遺跡である妻の神Ⅱ遺跡（船木班）と案内Ⅰ遺跡（柴田班）、それに上葛岡Ⅳ遺跡の調査を終了した小林班の案内Ⅱ遺跡の発掘調査が開始された。粗掘の段階では遺物の発見は僅少である。調査顧問奈良国立文化財研究所所長坪井清足先生各遺跡の発掘調査状況を視察し指導くださる。９月24日２ケ年継続調査の歌内遺跡の発掘終了。ここからは縄文時代のフラスコ状ピット、縄文時代竪穴住居跡１棟、平安時代の49棟に及ぶ竪穴住居跡と、12棟の中世の掘立柱建物跡の遺構の検出があった。９月26日青森県埋蔵文化財調査センター所長北山峰一郎氏と調査第三課長工藤泰博氏来所し、北の林Ⅱ遺跡他を視察する。９月27日歌内遺跡の発掘調査を終了した小玉班、西町地区の西町Ⅱ遺跡の発掘調査に入る。中の崎遺跡では排水溝のある平安時代の竪穴住居跡、土師器合口甕棺が発見される。

10月４日東山地区の猿ケ平Ⅰ遺跡の発掘調査に岩見班が入る。同日岩手県北上市教育委員会沼山源喜治氏歌内遺跡他を視察する。西町Ⅱ遺跡は時期不明の竪穴住居跡２棟が検出されたのみで遺物の出土は殆んどない。10月17日小玉班は西町Ⅱ遺跡の調査と並行し、丘陵上の西町Ⅰ遺跡の調査を開始する。10月後半は降雨多く発掘調査難行。北の林Ⅰ遺跡、同Ⅱ遺跡とも遺構の実測に終始する。10月25日北の林Ⅰ遺跡で縄文時代竪穴住居跡３棟、平安時代竪穴住居跡22棟、土壙等の検出実測を終え調査終了する。10月28日明堂長根遺跡の南方で新たに土師器を出土する遺跡を発見、一本杉遺跡（遺跡番号No.33）と命名する。

11月８日船木調査員払田柵跡調査事務所へ帰る。案内Ⅰ遺跡、同Ⅱ遺跡、猿ケ平Ⅰ遺跡では縄文後期の竪穴住居跡、フラスコ状ピットの検出がある。各遺跡の発掘調査とも午前中は、降霜の処理に時間を費やす。11月11日西町Ⅰ遺跡発掘調査終了。出土遺物は縄文土器、弥生土器。遺構は検出されなかった。11月12日西町Ⅱ遺跡及び上葛岡Ⅰ遺跡で縄文中期の竪穴住居跡１棟を検出し調査終了する。11月25日館跡でもあり、縄文中期、平安時代、中世の竪穴住居跡の検出された妻の神Ⅱ遺跡の発掘調査終了する。11月27日道路公団鹿角工事事務所と来年度調査予定の小坂町地内路線上の遺跡分布調査について協議す。案内Ⅱ遺跡下方の平場で縄文土器と竪穴住居跡の一部が検出され、新発見遺跡と認定される。遺跡名は案内Ⅲ遺跡（遺跡番号No.34）とする。

12月２日縄文後期の竪穴住居跡、フラスコ状ピットの検出のあった案内Ⅱ遺跡の発掘調査終了する。12月３日秋田大学教授新野直吉先生、北の林Ⅱ遺跡他を視察する。熊谷太郎、柴田陽一郎調査員能代、秋田に帰る。12月６日猿ケ平Ⅰ遺跡降雪の中で発掘調査終了する。12月８日

孫右ェ門館遺跡より、平安時代の竪穴住居跡1棟検出。焼失家屋のもよう。12月12日小坂町地内の縦貫道路線踏査を実施するも残雪と枯草多く、遺跡の確認は来春の試掘に待つ。孫右ェ門館の発掘調査終了する。12月13日北の林Ⅱ遺跡、中の崎遺跡、下乳牛遺跡の発掘調査が済み、発掘作業はすべて終了する。

3. 調査の組織と構成

調査主体	秋田県教育委員会	
調査顧問	坪井　清足	奈良国立文化財研究所所長
	芹沢　長介	東北大学教授
専門指導員	小林　達雄	国学院大学助教授
	林　　謙作	北海道大学助教授
	桑原　滋郎	多賀城跡調査研究所研究第一科長
	藤沼　邦彦	東北歴史資料館考古研究科長
	須藤　　隆	東北大学助教授
調査担当者	岩見　誠夫	秋田県教育庁文化課　北の林Ⅰ・猿ケ平Ⅰ遺跡
	船木　義勝	秋田県教育庁文化課　妻の神Ⅱ遺跡
	熊谷　太郎	秋田県教育庁文化課　下乳牛遺跡
	桜田　　隆	秋田県教育庁文化課　小豆沢館、北の林Ⅱ、上葛岡Ⅰ・Ⅱ遺跡
	柴田陽一郎	秋田県教育庁文化課　案内Ⅰ、孫右ェ門館遺跡
	小玉　　準	秋田県教育庁文化課　歌内、西町Ⅰ・Ⅱ遺跡
	橋本　高史	秋田県教育庁文化課　飛鳥平、鳥居平、中の崎遺跡
	小林　　克	秋田県教育庁文化課　駒林、上葛岡Ⅳ、案内Ⅱ遺跡
調査補佐員	栗沢　光男、藤井　安正、関　　直、山崎　文幸	
	三ケ田俊明	
補　助　員	松岡　忠仁、阿部　明人、石木田正幸、神田　公男	
	北川　恵一、児玉　悦郎、田中　和徳、畠山　　圭	
	福島　昭彦、小田島幸二、佐藤　幸夫、児玉　　均	
	米村　博美、佐々木金正	
事務補助員	佐藤　順子、金沢万里子	

調査協力	秋田県立博物館主事　庄内　昭男　　補佐員　鈴木　秋良、竹村　昭雄 補助員　花田　孝夫　　東北学院大学学生　高橋　　学　　立正大学 院生　利部　　修
調査協力機関	鹿角市教育委員会　東北縦貫自動車道対策事務所、鹿角市建設部建設 課高速道路対策室

4. 調査の方法

(1) 発掘区の設定

東北縦貫自動車道の調査では、路線内の遺跡地に５ｍ×５ｍのグリッドを設定して発掘を行う。グリッド設定基準線は、歴史時代の遺跡は方位に合わせ、他は日本道路公団の設置した任意二本の中心杭を結ぶ線を設定基準線とし、路線の進行方向に沿わせる。

(2) 測量と実測

地形や遺構状況に応じて、遣り方測量、平板測量、航空写真測量の方法をとる。遺構の実測の縮尺は1/20、遺構配置図は1/200、竪穴住居跡のカマド、石囲炉などの平面図、断面図、土層断面図は1/10を原則とするが、必要に応じて任意の縮尺も活用する。

(3) 遺構発掘と遺物のとりあげ

遺構の発掘は４分割法を原則とし、平面、断面、層序、レベル、遺物の実測は県統一のセクショントレスターに記入し、水糸高は標高を記入する。

遺物の取りあげは、１点１袋、１括１袋とし、遺跡名、グリッド名、遺物の種類、層位、出土年月日の記入された遺物カードを同封する。

遺構・遺物記号は、平城京発掘調査で実施しているものを参考に定めたものを使用する。

記号	遺構	記号	遺構	記号	遺構・遺物	記号	遺物
SA	柵列・柱列	SK	土壙	SX(F)	焼土遺構	RQ	石製品
SB	建物跡	SK(F)	フラスコ状ピット	SX(R)	捨場	RT	貝製品
SC	廊	SK(I)	竪穴状遺構	SX(S)	配石（集石・立石・組石／ストンサークル）	RU	人骨
SD	溝・堀・濠	SK(P)	ピット	SX(U)	土器埋設遺構	RV	紙・布製品
SE	井戸跡	SK(S)	墓	RC	炭化物	RW	木・竹製品
SF	築地・土塁	SK(T)	トラップピット	RM	金属製品	RY	その他
SG	苑池	SL	河川	RN	自然遺物		
SH	広場	SM	道路・橋・階段	RO	骨角製品		
SI	住居跡	SX	その他	RP	土製品		

(4) 写真撮影

実測と同様記録保存の要である写真撮影には、35㎜判小型カメラ2台（ニコンFE）と6×9判の大型カメラ（ホースマンプレス）、ゼンザブロニカETRS6×4.5判とポラロイドカメラを使用する。

35㎜判カメラは、モノクロとカラーリバーサル用に使い分け、大判カメラは特に重要な遺構遺物の検出記録に、フィルムパックを交換し、モノクロ、カラーの撮影をする。撮影は遺構、出土遺物とも1方向三枚撮影を原則とする。また、ポラロイドカメラを日誌や遺構の検討、打合会に活用する。

(5) 遺物整理と実測

① 出土遺物は遺物台帳に記入し、写真や実測図とのスムーズな活用をはかる。

② 土器の内面実測が必要と思われるものは、4分割方法をとり、左$\frac{1}{2}$に外面、右$\frac{1}{2}$に内面および断面を記載する。実測図には輪積痕、巻上げ痕、文様、調整痕を主として記載する。

③ 大破片の実測は、土器の中心線を算出し180度回転して作図する。

④ 破片の拓本は、土器の外面を左に置き、中央に断面、右に内面図を表す方法をとる。

⑤ 石器の実測は、原則として第三投影図法をとる。

II　遺跡の立地と環境

1.　地形と地質

(1)　地形・地質の概要

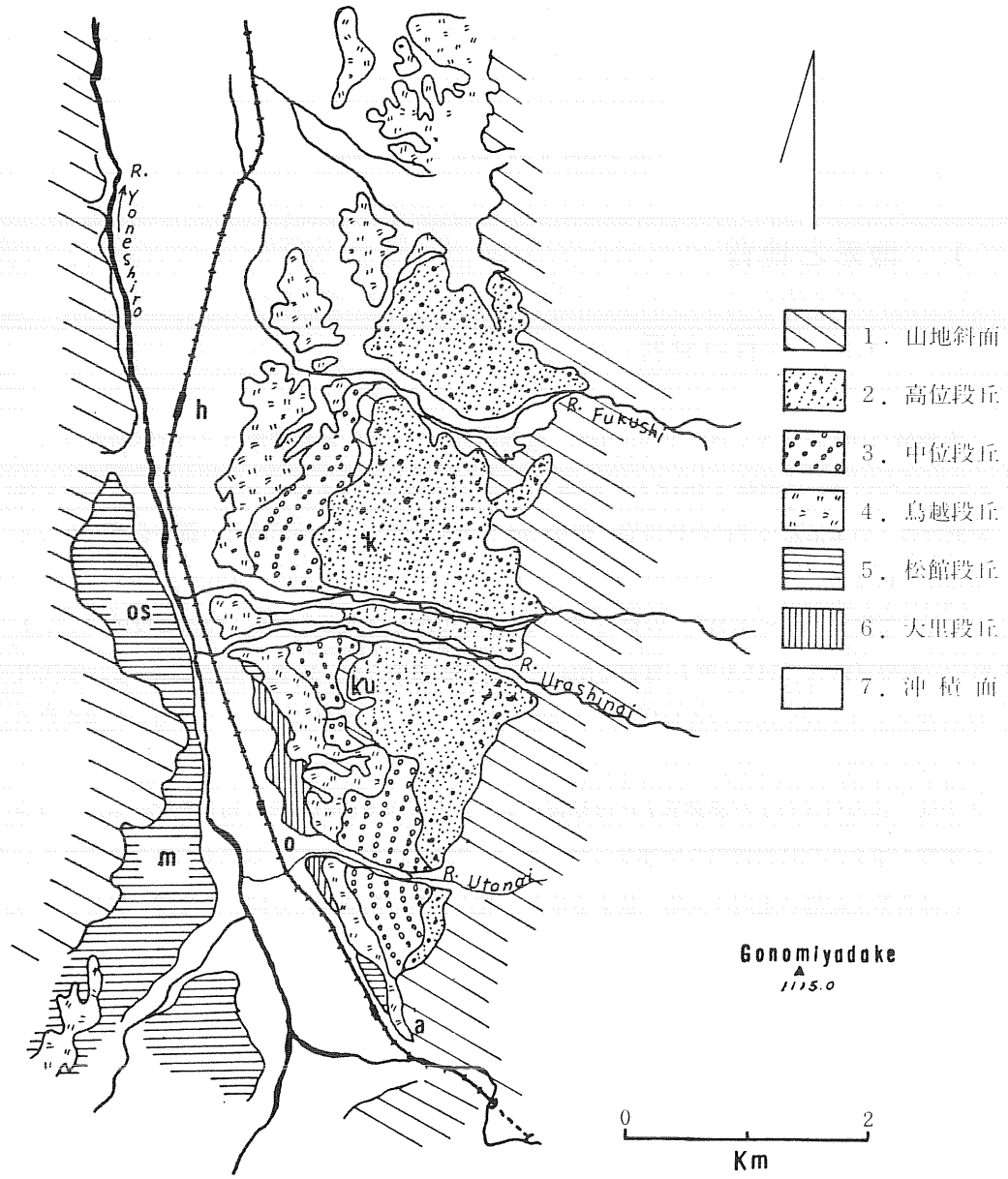
本地域の地形は大きく見て東西の山地、盆地内の段丘地形、沖積低地の三つに区分される。これらについて、秋田県（1973）、内藤（1970）および、日本道路公団の東北自動車道土性縦断図表（日本道路公団仙台建設局：昭和53年）等を参考にして地形地質の概要をまとめると次のようになる。

地形は東側が800～1,100mの標高で、満壮年期の険しい地形を示し、特に皮投岳（1122.4m）、五の宮嶽（1115.0m）などを中心とした起伏量の大きい山塊が南部に連なり、米代川は八幡平より上流では先行谷を形成して東西に流れている。地質は主として新第三紀中新世の火山砕屑岩類からなるが、それらを貫ぬいて石英安山岩や安山岩も分布している。また、福士川上流、谷内付近および湯瀬南方には粘板岩を主とする古生層の露出も知られている。これらの東側山地の山列はほぼ南北に連なっているが、北北東方向にのびる斜面や水系もみられる。これは新第三紀層の走向に大略一致するほか、貫入岩類や断層系の方向ともほぼ一致している。

一方、西側山地は400～600mの標高で、山容も東側山地ほどのけわしさは見られない。地質は東側山地と同様に新第三紀中新世の火山砕屑岩を主とするが、大葛層、大滝層などでは砂岩、泥岩などの砕屑岩が広く発達している。これらの走向は南北方向のものが多い。

花輪盆地南部の段丘面は、花輪高位段丘、花輪中位段丘（内藤、1970）※、鳥越段丘（秋田県、1973）、松館段丘、大里段丘の5段に区分できる。このうち、鳥越段丘は秋田県（1973）、では鳥越段丘と関上段丘に区分されたものであるが、後者は前者の河成二次堆積面であり、構成層の時代的な差異も区分を必要とするほど大きいとはみられないことから一括して使用する。また、松館、大里の各段丘は、内藤（1970）の花輪低位段丘群とされたものである。なお、本報告書Ⅰ（秋田県教育委員会、1981）において、中位段丘と関上面、鳥越面を一括して180～250m面としたが、試錐資料および露頭の観察結果などから中位段丘構成層が花輪以南でやや広く分布することが明らかになったのでこれを区別することにする。次にそれぞれについて簡単に記載する。

※以下、高位段丘、中位段丘と略称する。



第１図　段丘地形図

高位段丘：福士川、浦志内川、歌内川等が盆地に注ぐ山地の末端部からなだらかな斜面で扇状地状に広く分布する。かなり開析されているものの明らかに平坦面を残している。標高は1/2.5万地形図から、浦志内川左岸の扇頂部で350ｍ、葛岡北東の末端部で240ｍであり、平均こう配は7.2 %(4.1°)となる。また、歌内川流域でも320ｍから250ｍまでの高度差を持つ。一方、福士川左岸では350ｍから250ｍまでであるが、右岸では花輪スキー場北東の300ｍから女森西方の200ｍまでと明らかに低い。また、平均こう配も福士川以北では4.4 %(2.5°)と小さくなる。

構成層は径数cmから50cm前後までの亜角礫が雑然と混入した不淘汰礫層であり、地表面に近い部分は数mにわたって風化が進み、礫はくさってマトリックスと大して変わらないかたさになることが多い。段丘面の分布範囲のほかに、葛岡西方では鳥越軽石質火山灰層（内藤、1970）の下に見られたりする。全体的に扇状地堆積物としての層相をよく残している。また、上部は数mが赤褐色の粘土質土になっており、中に未風化の亜角礫もしばしばみられる。最上部には粘土質になった火山灰層もみられる。

ところで内藤（1970）は、上田（1965）の産土神断層をさかいにしてそれ以北の高位面が240m前後、以南が290m前後と異なること、さらに中位段丘の分布範囲が以南に限られること等から断層以南は以北に対して50m程度隆起したことを指摘した。かりに断層以北の河床が安定しているとすれば、前述した福士川をさかいにした（産土神断層およびその延長にほぼ一致する）高位面の平均勾配のちがいは、断層以南のブロックの西に傾動した隆起運動を示唆するものかも知れない。

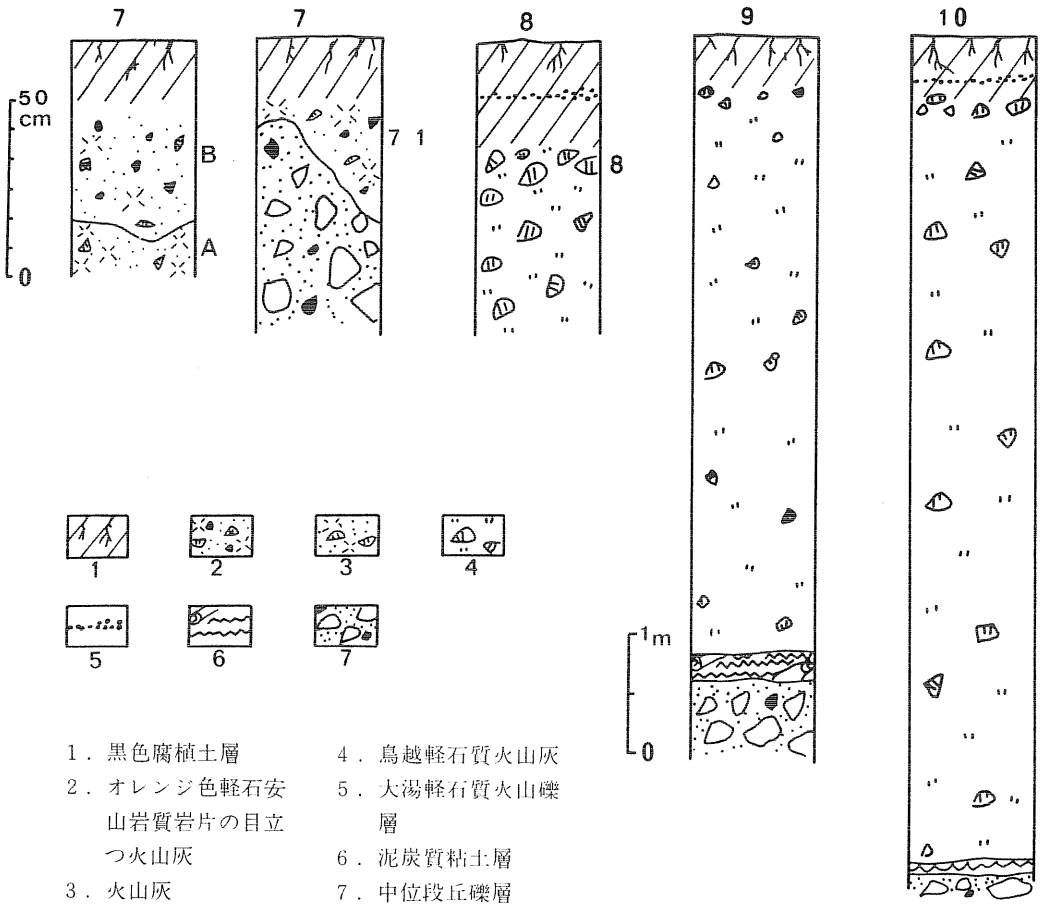
中位段丘：浦志内川下流で標高230mから180m、歌内川下流で270mから220mにかけて分布し、末端部は鳥越軽石質火山灰層の火砕流堆積物におおわれるが明瞭に扇状地状の地形面を残している。平均勾配は柏木森の西方で6.0％（3.5°）である。

構成層は黄褐色のシルトないし砂のマトリックス中に数cmから30cm以上の角礫ないし亜角礫が雑然と混入する礫層で、全体的に塊状であるが末端部では厚さ数cmの連続性のわるいシルトないし砂の薄層を含むこともある。葛岡南方ではN値が70以上の高位段丘礫層の土に、量大6mの厚さの泥炭質粘土層が発達する。この付近は浦志内川の扇状地地形と、歌内川の扇状地にはさまれた湖沼的な堆積環境にあったものであろう。なお、この粘土層の上位に5～6mの厚さで重なる中位段丘構成層は、すでに述べたように不良淘汰の亜角礫からなる礫層であるが、全体的にマトリックスは灰緑色を呈する。同様の色調の構成層は花輪東方の鳥越軽石質火山灰層の下位にもみられる。

鳥越段丘：鳥越軽石質火山灰層の推積面であり、標高は福士川の右岸で170m、左岸から浦志内川にかけて180～190m、歌内川下流で190～200mとなる。火砕流台地としての形態を示しており、段丘面は平坦で段丘崖は急崖となることが多い。

松館段丘：米代川左岸に沿い、尾去から松館、荒町にかけて広く分布し、標高は160～170mで夜明島川、黒沢川等による扇状地の開析された段丘とみられる。構成層は未確認である。

大里段丘：米代川右岸沿いに大里付近まで分布する面で、標高は150～155mと低平であり、構成層も上部はくずれやすい河床性の礫層を主とし、田泥質の砂礫層が重なっている。葛岡西方の段丘崖の下部から中部にかけて、固結度のよい成層した円磨礫を含む砂礫、粘土層が見ら



1．黒色腐植土層
2．オレンジ色軽石安山岩質岩片の目立つ火山灰
3．火山灰（灰分が多い）
4．鳥越軽石質火山灰
5．大湯軽石質火山礫層
6．泥炭質粘土層
7．中位段丘礫層

第2図　露頭柱状図

第1表　重　鉱　物　組　成

重鉱物 / サンプルNo.	鉄鉱物 Fe	角閃石 Ho	単斜輝石 Cpx	斜方輝石 Opx	Opx／Cpx	Cpx／Ho	測定個数
7 — B	70	4	9	17	1.9	2.3	288
7 — A	53	5	12	30	2.5	2.4	322
7 — I	51	5	19	25	1.3	3.8	443
8	59	12	11	18	1.6	0.9	381

申ケ野軽石質火山灰層は角閃石が少なく、Cpx／Ho は2.6（8個平均）に対し、鳥越軽石質火山灰層は 1.4（20個平均）

れるが、これは上部の堆積物と一括するには問題があり、段丘基盤の更新統の一部である可能性がつよい。

ところで、この地域の第四紀地質と地形を特徴づけるものに花輪断層と十和田火山起源の火山砕屑物層があげられる。

花輪断層はほぼ直線的に米代川沿いに北上しており、東西における山地の起伏層、山容のちがい、段丘の非対称的分布等は、東側山地を含む断層の東部地塊が第四紀を通じて上昇傾向がより強かったことを物語っており、注目に値する。一方、火山砕屑物層については内藤(1966、1970)、中川ほか(1972)等によりくわしく知られており、古い方から高市軽石質火山灰層(25,850±1360)、鳥越軽石質火山灰層(12,000±250)、申ケ野軽石質火山灰層(8,600±250)、大湯軽石質火山礫層(3,680±130)、毛馬内軽石質火山灰層(1,280±90)に区分されている。このうち大湯軽石質火山礫層と毛馬内軽石質火山灰層については同一火山活動にともなう降下堆積物、火砕流堆積物であることが知られている。(大池、1974：藤本、1980)。すなわち、中川、ほかにより大湯浮石の^{14}C年代とされたものは同層の下位の炭質物についての値であり、同層の降下時期よりも古い年代値を与えているものであろう。

(2) 発掘地点の地質

鳥居平遺跡

標高219～220mで中位段丘上にあり、上部から約20cmが黒色腐植土で、その下に安山岩の角礫(0.5～3cm)と軽石(0.5～2cm)にとむ火山灰層が約40cmの厚さでみられ、さらに下位の黄褐色の軽石を含む灰分の多い火山灰層に急変する。重鉱物組成からみて7－A、7－B、7－1は申ケ野軽石質火山層の特徴に一致した組成を示す。

飛鳥平遺跡

標高210mで鳥越段丘上にあり、黒色腐植土層は35cmほどで、その中に地表面から20cm位のところに大湯軽石質火山礫層が1～5cmで膨縮しながらみられる。黒色腐植土層より下位は7～15cmの軽石が多い褐灰色火山層でこれは鳥越軽石質火山灰層である(第1表の8)。

北の林Ⅰ遺跡

鳥越段丘上にあり、最上部の30～40cmの黒色腐植土層中に大湯軽石質火山礫層をうすく含む。また、更に下位には7～15cmの軽石が多い褐灰色火山灰があり、4～5mの厚さをもつ。これは鳥越軽石質火山灰層であるが、二次的な堆積構造はみられない。この火山灰層の下位は灰緑色の粗粒な砂に5～30cmの亜角礫が混入する礫層で、中位段丘堆積物とみられ、火山灰層とのあいだに泥炭質の粘土層を10～20cmの厚さでともなう。

参考文献

内藤博夫「秋田県米代川流域の第四紀火山砕屑岩と段丘地形」『地理学評輪』
第39巻第7号　1966年

内藤博夫「秋田県花輪盆地および大館盆地の地形発達史」『地理学評論』
第43巻第10号　1970年

中川久夫・他「十和田火山発達史概要」『東北大地質古生物研究邦報』
第73号　1972年

大池昭二「十和田火山は生きている」『国土と教育』　第26号　1972年

秋田県　『秋田県総合地質図幅、花輪』　1973年

藤本幸雄「十和田火山起源の火山灰層の重鉱物組成（その1）大館、花輪盆地における火山灰層」『大館工業高校研究紀要』　1980年

上田良一「秋田県北部の第三系の層位と造構造運動について」『秋田大地下資源開発研究所報告』　第32号　1965年

2. 環境と周辺の遺跡

東北縦貫自動車道の通過する鹿角は、秋田県の北東隅に位置する。ここは米代川の最上流部にあたり、奥羽山脈中に形成された壮年期の山々と断層盆地からなる。年間の平均気温は花輪の観測によると 9.8 ℃、冬期の最低気温は−22℃にも達したことがあり、年間を通して風向は西にかたむき、風速は小さく、積雪もあまり多くない昼夜の温度較差の大きい内陸的気候(註1)を示す土地である。

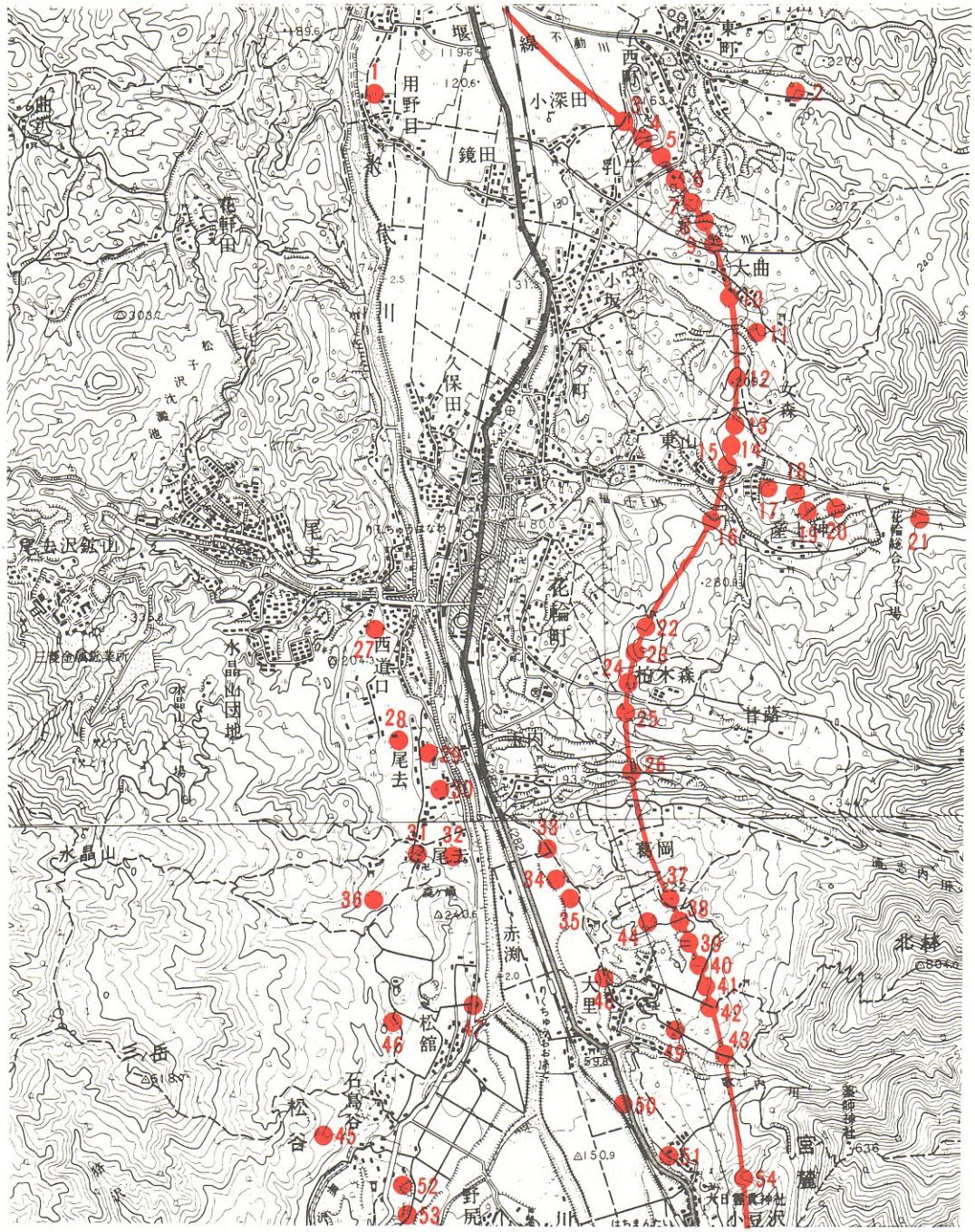
盆地の東には五の宮嶽(1,150 m)、皮投岳(1,122 m)、中岳(1,024 m)などの急峻な地形の壮年期の山が連なり、花輪盆地東の出口、湯瀬渓谷から流れくる米代川の本流は、八幡平地区で熊沢川、夜明島川、歌内川、浦志内川を合流させて盆地の西部を北流し、花輪柴平地区では福士川、乳牛川、間瀬川、草木川、北西の十和田地区にて西流する大湯川、小坂川を入れて大館盆地へ流れ去る。

この水系や盆地周辺には花輪高位段丘、鳥越段丘などと呼ばれる数段の段丘(註2)の発達が見られ段丘上には大湯環状列石をはじめとし、450ケ所以上に及ぶ縄文時代から中世にかけての遺跡(註3)が確認されている。

東北縦貫自動車道の通過が予定され、今年度19遺跡の発掘調査の行われた八幡平地区の小豆沢、大里、玉内（宮麓地区）、花輪地区東の新興住宅地東山と乳牛、東町の柴平の地域には花輪高位段丘、中位段丘、鳥越段丘、大里段丘と呼ばれる標高 150 ～ 270 mにかけて 4 段の段丘面が確認されており、ここに存在する遺跡は「秋田県遺跡地名表」と「鹿角市遺跡地図」に記載のあるように、54ケ所以上の多きにわたる。旧石器時代の遺跡の発見はなく、縄文時代から中世にかけての複合遺跡が殆んどである。米代川対岸の松館、尾去地区にも松館面と呼ばれる標高 160 ～ 170 mの段丘面が開析されており、ここも遺跡が多い。

縄文時代の遺跡は、今年度発掘調査の行われた上葛岡Ⅳ遺跡の早期末のものからはじまり、前期は円筒土器を出土する遺跡が多い。それらの中の一つ、清水向遺跡は昭和29年に発掘調査(註4)が行われ、秋田県で最初に 2 棟の竪穴住居跡が報告されている。中期になると、円筒土器とともに大木式土器を出土する遺跡が多くなる。飛鳥平遺跡、北の林Ⅰ遺跡などでは、円形で石組炉を持つ中期末大木10式の竪穴住居跡が報告(註5)されている。後期は十腰内式土器を出土する飛鳥平遺跡、案内Ⅰ遺跡があり、晩期の遺跡は、前半期の配石を伴う玉内遺跡(註6)と東在家遺跡が著名である。

弥生時代の遺跡は少量の撚糸文土器を出土する上葛岡Ⅲ遺跡、天王山式土器を出土する猿ケ平Ⅰ遺跡がある。立地は高位の段丘上で遺構は確認されておらず、稲作農耕の可能性は低い。



第 3 図　周辺遺跡分布図

第2表　周　辺　遺　跡　一　覧

番号	遺　跡　名（所在地）	時代・時期	遺　　跡　・　遺　　物
1	用野目（用野目）	平安	須恵器
2	餅野Ⅳ（餅野）	平安	土師器
3	西町Ⅱ（西町）	縄文	縄文土器
4	西町Ⅰ（西町）	縄文、弥生	縄文土器、弥生土器
5	下乳牛（下乳牛）	縄文、平安	平安竪穴住居跡、フラスコ状ピット、縄文土器、土師器、須恵器
6	乳牛平（乳牛平）	縄文、平安、中世	縄文土器
7	妻の神Ⅲ（妻の神）	縄文、平安、中世	平安竪穴住居跡、土壙墓、堀立柱建物跡、フラスコ状ピット、縄文土器、土師器
8	妻の神Ⅱ（妻の神）	縄文、平安	縄文竪穴住居跡、平安竪穴住居跡
9	妻の神Ⅰ（妻の神）	縄文、平安	平安竪穴住居跡、土師器、縄文土器、フラスコ状ピット
10	猿ケ平Ⅱ（猿ケ平）	縄文(早期～晩期)	縄文土器(早期、円筒下層ｂ、大木９、10式、十腰内、大洞Ｂ)、縄文竪穴住居跡
11	大曲　　（大曲）	縄文、平安	縄文土器、土師器
12	猿ケ平Ⅰ（猿ケ平）	縄文(中期～晩期) 弥生	縄文土器(大木８ａ式、十腰内Ⅰ式、大洞Ｂ、ＢＣ、C_1式)
13	案内Ⅱ（案内）	縄文	縄文土器(前期、後期)、竪穴住居跡、土壙、配石遺構
14	案内Ⅲ（案内）	縄文、平安	縄文土器(前期、後期)、土師器、須恵器、縄文竪穴住居跡、平安竪穴住居跡
15	案内Ⅰ（案内）	縄文、平安	縄文土器(十腰内Ⅰ式)、土師器、縄文竪穴住居跡、平安竪穴住居跡
16	孫右ケ門館（孫右ケ門館）	縄文、平安	縄文土器、土師器、平安竪穴住居跡、屋外炉
17	東山Ａ（東山）	縄文、弥生	縄文土器(晩期)、弥生土器
18	東山Ｂ（東山）	弥生	弥生土器
19	赤坂Ｂ（赤坂）	縄文、続縄文	縄文土器、続縄文土器
20	赤坂Ａ（赤坂）	縄文	縄文土器
21	日向屋敷Ⅱ（日向屋敷）	縄文	縄文土器
22	中の崎（中の崎）	縄文、平安	縄文土器(後期、晩期)、平安竪穴住居跡、土師器、須恵器、掘立柱建物跡
23	柏木森（柏木森）	縄文、平安	縄文土器(早期、後期、晩期)、土師器、土壙、フラスコ状ピット
24	明堂長根（明堂長根）	縄文	縄文土器(後期、晩期)、土壙、フラスコ状ピット、溝状遺構
25	一本杉（一本杉）	縄文、平安	縄文土器、土師器、須恵器、縄文竪穴住居跡、平安竪穴住居跡、掘立柱建物跡
26	上葛岡Ⅳ（上葛岡）		
27	下平　　（下平）	弥生	弥生土器
28	六角平　（六角平）	縄文	縄文土器(大湯式)
29	三光塚２号（東在家）	平安	硝子玉
30	三光塚１号（東在家）	平安	玉類、勾玉
31	東在家（東在家）	縄文(晩期)	縄文土器(大洞ＢＣ、C_1式)、土偶
32	尾去　　（尾去）	縄文	縄文土器
33	清水向　（清水向）	縄文	縄文土器(円筒下層ｃ、ｄ式、大木ｂ式、円筒上層ａ、ｄ式)、竪穴住居跡
34	駒林　　（駒林）	縄文	縄文土器、住居跡
35	下館　　（下館）	中世	
36	尾去Ａ～Ｄ（尾去）	縄文、平安	縄文土器、土師器
37	上葛岡Ⅲ（上葛岡）	縄文	縄文土器
38	上葛岡Ⅰ（上葛岡）	縄文	縄文竪穴住居跡、縄文土器
39	北の林Ⅰ（北の林）	縄文、平安	
40	北の林Ⅱ（北の林）	縄文、平安	縄文竪穴住居跡、土壙、縄文土器(大木10式)、平安竪穴住居跡、掘立柱建物跡
41	飛鳥平（飛鳥平）	縄文、平安	縄文竪穴住居跡、縄文土器(十腰内Ⅰ式)、平安竪穴住居跡、土師器
42	鳥居平（鳥居平）	縄文	縄文土器、縄文竪穴住居跡
43	歌内　　（歌内）	縄文、平安	縄文竪穴住居跡、土壙、縄文土器(大木８式、後期)、平安竪穴住居跡、土師器
44	上葛岡Ⅱ（上葛岡）		
45	石鳥谷（竹鼻）	縄文	縄文(円筒上層ａ、ｂ層)
46	後口田Ⅱ（後口田）	縄文	縄文土器
47	岩淵　　（岩淵）	縄文	縄文土器
48	大里館（大里、掘合）	中世	
49	大里　　（大里）	縄文	縄文土器(大木９式)
50	下鷲の巣（下鷲の巣）	縄文	縄文(中期、後期)
51	小豆沢館（小豆沢）	縄文、中世	縄文土器
52	下モ和志賀（下モ和志賀）		土器
53	田中館	中世	土器
54	堂の上（堂の上）	縄文	縄文土器

奈良平安期の遺跡としては、県内で墳丘の残っている唯一の古墳、尾去地区の三光塚古墳と東北縦貫道路線上の遺跡、歌内、北の林Ⅰ、同Ⅱ、上葛岡Ⅳ、中の崎、案内Ⅱ遺跡など、数十棟の竪穴住居跡の検出されている平安期後半の集落跡がある。(註7)

環状列石と終末期古墳群のほかに、鹿角の特色ある遺跡を求めるとすれば、中世の館跡があげられよう。42館、もしくは48館と称される城館がせまい盆地周辺に群在する。(註8)

鎌倉時代後期に関東から移住した成田、安保、秋元、奈良の4氏に始まるとされるこの中世の城館は、大里館、玉内館、尾去館、古館、乳牛館などの地名で村落に残る。就中、大里館は鎌倉時代以来安保一族の惣領の本拠で、史料の初見は南北朝にさかのぼる。すなわち、建武3年（1336年）と4年（1337年）に陸奥国北朝党のため攻撃された記録（南部文書）がそれである。大里館以外の館は、戦国期における南部氏と安東氏の確執の記録に散見するが、創建期など不明部分が多い。これらの館は平地に臨む舌状台地を空掘で分断し、主郭を中心に数個の郭を配しており、館上面の平場は、縄文、弥生、奈良、平安時代の人々の居住地でもあって、各時代各種の遺構遺物が出土する。

註1　秋田県教育研究所『秋田県地誌』　研究№104　1969年
註2　藤本幸雄氏の(1)「地形・地質」による。
註3　秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図』　1977年
　　鹿角市教育委員会『埋蔵文化財の保護と開発に関する説明会資料』　1979年
註4　大和久需平・奈良修介『秋田県史考古編』　1960年
　　奈良修介・豊島　昂『秋田県の考古学』　1967年
　　岩見誠夫『半田先生と秋田県の考古学』　1981年
註5　秋田県教育委員会『埋蔵文化財発掘調査報告会発表要旨』　1981年
註6　阿部義平「配石墓の成立」『考古学雑誌54―1』　1965年
註7　註4に同じ
註8　沼館愛三著・盛田稔編『津軽諸城の研究』（草稿）　青森県文化財保護協会　1977年
　　塩谷順耳　「鹿角の館」　『秋田県立博物館研究報告』　第3号　1978年

1．居熊井
2．湯瀬館
3．上山田
4．大地平
5．堂の上
6．歌　内
7．鳥居平
8．飛鳥平
9．北の林Ⅰ
10．北の林Ⅱ
11．上葛岡Ⅰ
12．上葛岡Ⅲ
13．上葛岡Ⅳ
14．駒　林
15．柏木森
16．中の崎
17．孫右エ門館
18．案内Ⅰ
19．案内Ⅱ
20．猿ケ平Ⅰ
21．猿ケ平Ⅱ
22．妻の神Ⅰ
23．妻の神Ⅱ
24．妻の神Ⅲ
25．乳牛平
26．乳　牛
27．西町Ⅰ
28．西町Ⅱ
29．室　田
31．明堂長根
32．上葛岡Ⅱ
33．一本杉
34．案　内

1：50,000

1000 m　0　1000　2000　3000

第4図　秋田県鹿角市における東北縦貫自動車道路線上の遺跡分布図

鳥 居 平 遺 跡

遺 跡 番 号　No. 7

所 在 地　鹿角市八幡平字鳥居平43番地他

調 査 期 間　昭和55年６月９日～８月21日

発掘調査予定面積　3,000 ㎡

発 掘 調 査 面 積　5,100 ㎡

1. 遺跡の概観

(1) 遺跡の立地と環境

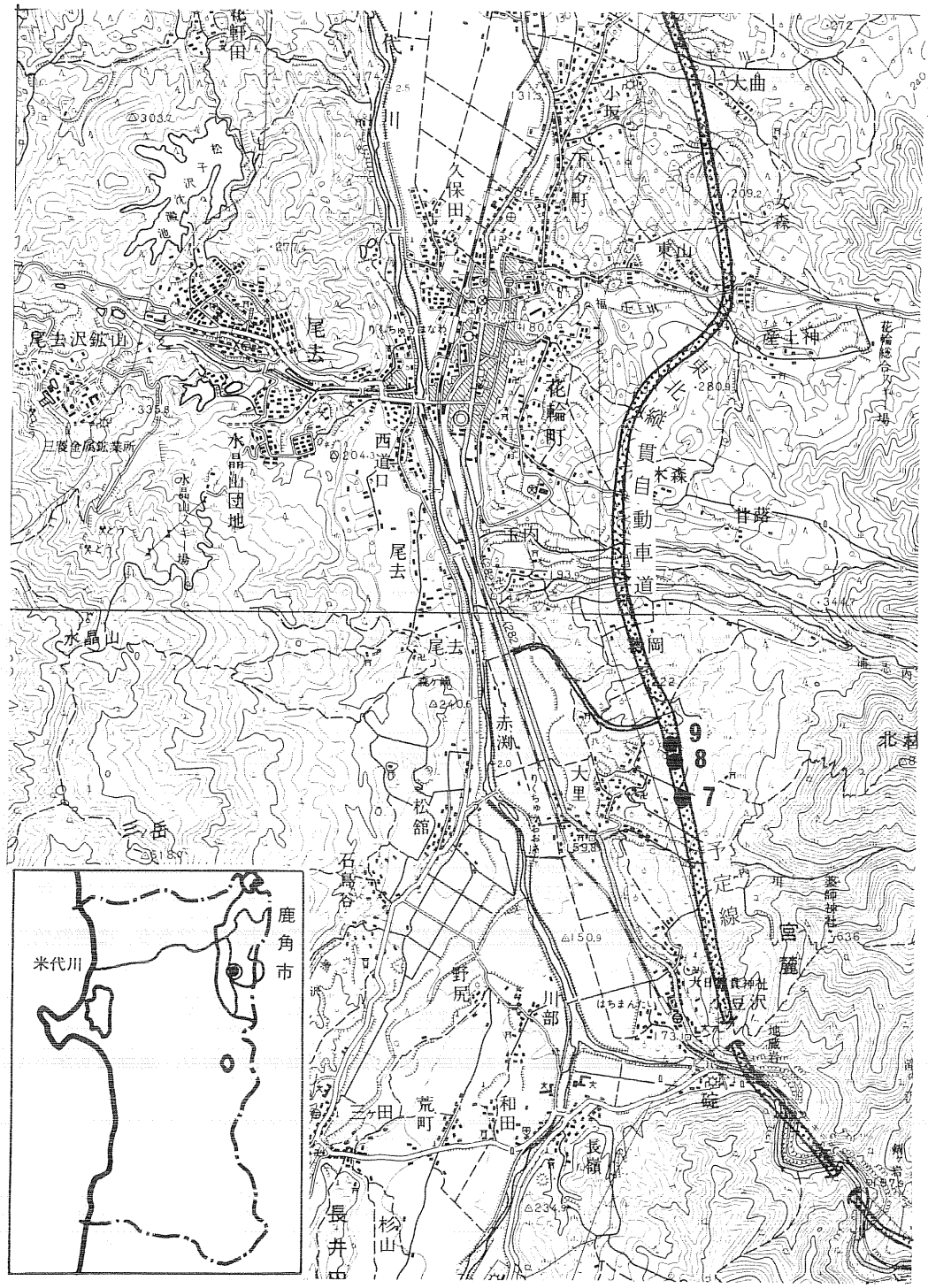
遺跡は国鉄花輪線陸中大里駅の東約1.0㎞に位置する。米代川東岸の発達した中位段丘上にあり、地山面での標高は207～211mの間である。付近の河岸段丘面はかなり密に遺跡が分布している（Ⅱ遺跡の立地と環境　第3図周辺遺跡分布図参照）。遺跡は約6.7％のこう配をなし、遺構は標高209m前後に集中して存在する。

(2) 遺構の分布

鳥居平遺跡は、当初約12.796㎡あるものと思われていたが、市道に接する南側約5,000㎡を除いて削平されていることがわかった。しかし、この遺跡範囲内においても、地山まで掘り下げたところ、東側は削平されている箇所が多く、したがって遺構の分布状態も西側にかたよる結果となる。遺跡範囲の中央やや南西よりにS-I 029が位置し、東側に土壙が点在しているが遺物や遺構が特に集中する箇所はみられない。また土壙同士の切り合いもまったくない。土壙はSK013、017、021、026の4基の土壙からしか遺物は出土しないが、これらの土壙のタイプはそれぞれ違うようだ。その他の土壙からは遺物は出土しないが、これらの土壙との違いもはっきりしない。遺構はほとんどのものが標高209m前後のレベルで検出された。

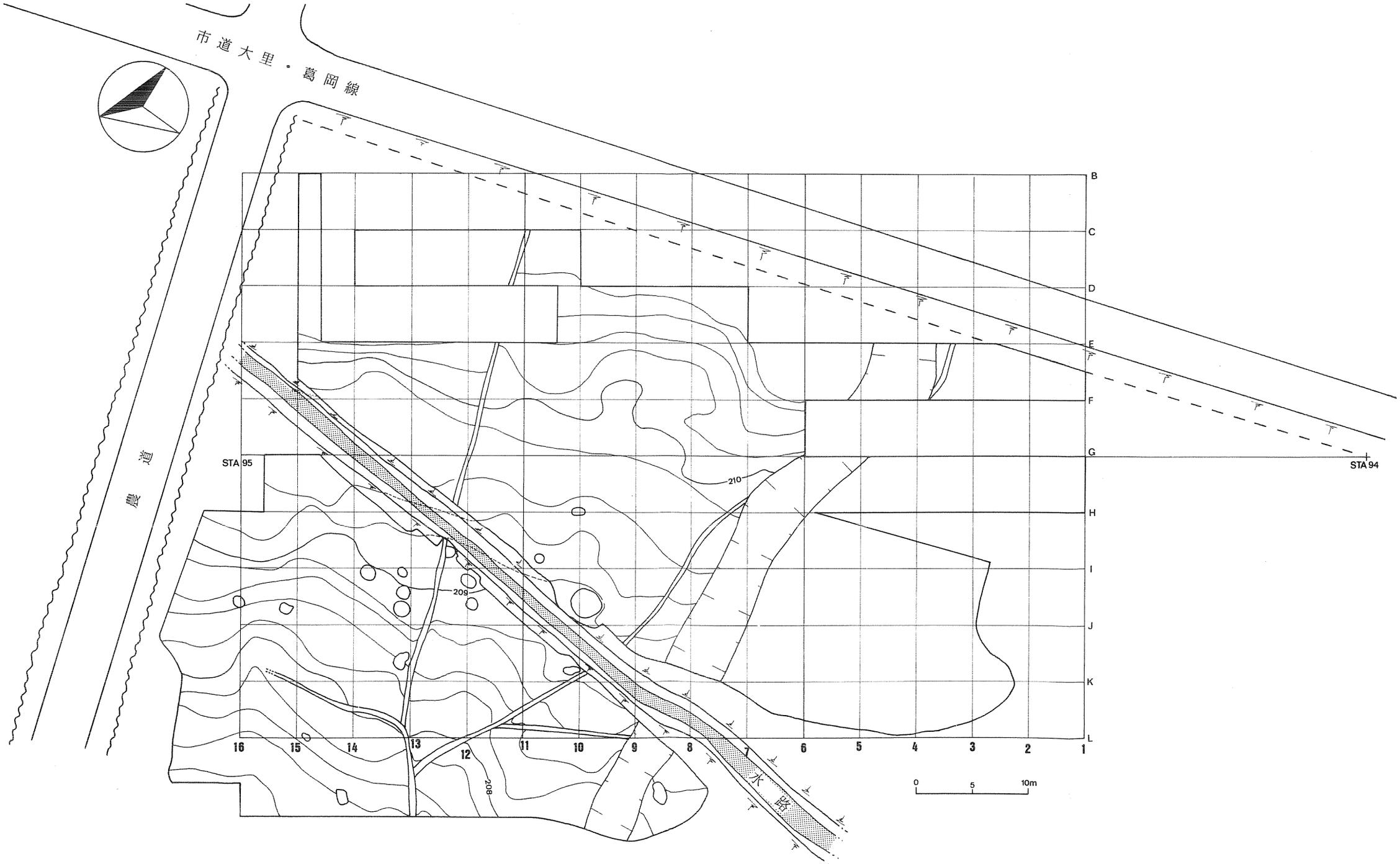
(3) 遺物検出状況

鳥居平遺跡から出土した遺物の量は整理箱で1箱たらずとたいへん少ない。完形に近く復元できたものは、SI 029から出土した縄文時代中期末の2個体の土器だけである。遺構外出土土器の量も極めて少なく、縄文時代中期～後期の土器、土師器、須恵器が出土している。石器の出土量も少なく、10点出土したのみである。遺物は、標準層位の第2、4、6層から、主に出土する。また盛土と思われる第7層からも少量だが、遺物が出土しており、東側にもかかって遺構があったと思われる。



7　鳥居平遺跡
8　飛鳥平遺跡
9　北の林Ⅰ遺跡

第1図　遺跡位置図


市道大里・葛岡線
農道
STA 95
STA 94
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
210
209
208
水路
0
5
10m

第2図　グリッド配置図

2. 調査の方法

鳥居平遺跡の原地形は、遺跡東側に小さな沢が流れ、２つの台地からなっていたものと思われるが、昭和38年頃の耕地整理の際、かなりの部分が削平された。このため、昭和54年度に範囲確認調査を行い、その結果、市道大里・葛岡線に接する南側約3,000㎡を対象に調査を行うこととした。

調査は、５ｍ×５ｍのグリッド法により随時拡張していく事としたが、その基線の定め方、及び、グリッドの名称のつけ方は、以下のとおりである。

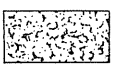
遺跡付近の日本道路公団の施設した道路中心基準杭ＳＴＡ94とＳＴＡ95を結ぶ線を南北基線と定めた。この基線をＧラインとし、西に行くにしたがって、５ｍ毎に、アルファベットが進むものとした（西←……Ｉ、Ｈ、Ｇ、Ｆ、Ｅ……→東）。南北基線は磁北に対して約13°50′偏東している。また、東西基線はＳＴＡ95において南北基線と直交させた。この東西基線を16ラインとし、北に行くにしたがって、５ｍ毎に、数字が増えることとした（北←……17、16、15、14……→南）。各グリッドの名称はこれらの基線の東南隅の交点における数字とアルファベットの組み合わせによることとした（10－Ａ、９－Ｂ……）。

実測は間尺を用いて、原則としてＳ＝1/20で行った。地形図作成等は平板測量によりＳ＝1/200で行った。また、遺跡の層位把握のため、16、15、10、Ｅ、の各ラインの断面の実測を行った。

原則として、遺構の実測図はＳ＝1/40、カマド・埋甕等はＳ＝1/20に統一した。原則として、土器実測図はＳ＝1/2、土器拓影図はＳ＝1/3、石器実測図はＳ＝1/2に統一した。
遺物の写真図版はＳ＝1/2と1/3に統一した。

実測図中のスクリーントーンは下のとおりである。

焼　土


炭化物

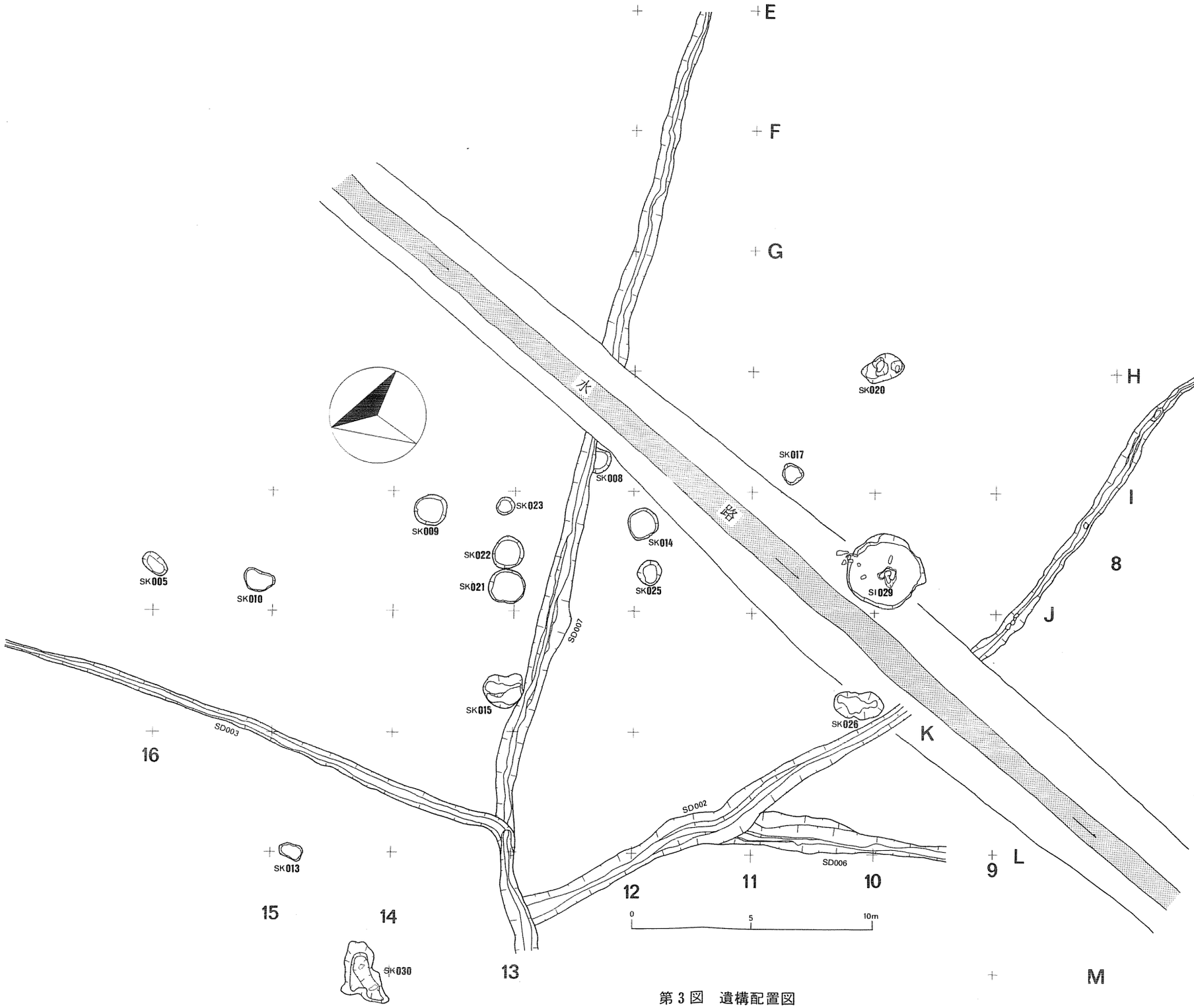
地　山

3. 調査の経過

鳥居平遺跡は東北縦貫自動車道工事のため、昭和55年６月９日～８月21日までの間、発掘調査を行った。調査の全般的な経過は次のとおりである。

昭和53年度に行われた遺跡分布調査により、当初鳥居平遺跡は市道大里・葛岡線の南北両側にわたる約12,796㎡が遺跡の可能性があるものと推定されていたが、ほぼ遺跡全面にわたって昭和38年頃耕地整理がなされており、遺構の残りぐあいや範囲等は未確認であった。このため昭和54年11月17日～11月19日の間、文化課桜田、柴田、高橋、小林の各文化財主事が、遺跡の範囲及び層位状態を確認する調査を行った。この調査で市道大里・葛岡線の北側及び南端部は削平されていること、遺跡の範囲は市道に接する南側約5,000㎡であること、遺跡西側が比較的原地形をとどめていること、地山まで深いところでは１ｍ以上あることなどがわかった。そこで、調査の際は西側を重点的に進めること、盛土部分は機械により排土することとした。

昭和55年４月15日にプレハブを建て、器材の搬入を行い、北隣の飛鳥平遺跡の調査にはいった。５月12日～15日の間、キャタトラとユンボーにより、盛土部分の排土を行った。飛鳥平遺跡の表土剥ぎがほぼ終了した６月９日から作業員の約⅔を投入して鳥居平遺跡の本格的発掘調査を開始した。20日に遺跡西側から時期不明の３条の溝を検出し、ＳＤ001～003とした。その後、機械による表土剥ぎ後の荒れた表面をほぼ整地し終えた24日に業者により５ｍ×５ｍのグリッドの杭打ちを行った。７月７日に土壙を２基検出、ＳＫ004、005とした。さらに精査区域を広げ、遺構の検出に努めるとともに、９日からは、既検出遺構の掘り下げを始め、平行して実測図を作成していった。10日にはさらにＳＤ006、007を検出、15日にはＳＫ008～009、17日にはＳＫ010～012を検出し、実測図を作成していった。その後も数基の土壙が確認され、そのうちの数個は精査の結果、土壙でないことがわかり、そのまま欠番とした。ほぼ精査面が全面におよんだため、８月21日から調査区全体の地形図を作成した。18～21日に実測の残った数基の土壙の実測を行い、21日に発掘調査を終了した。

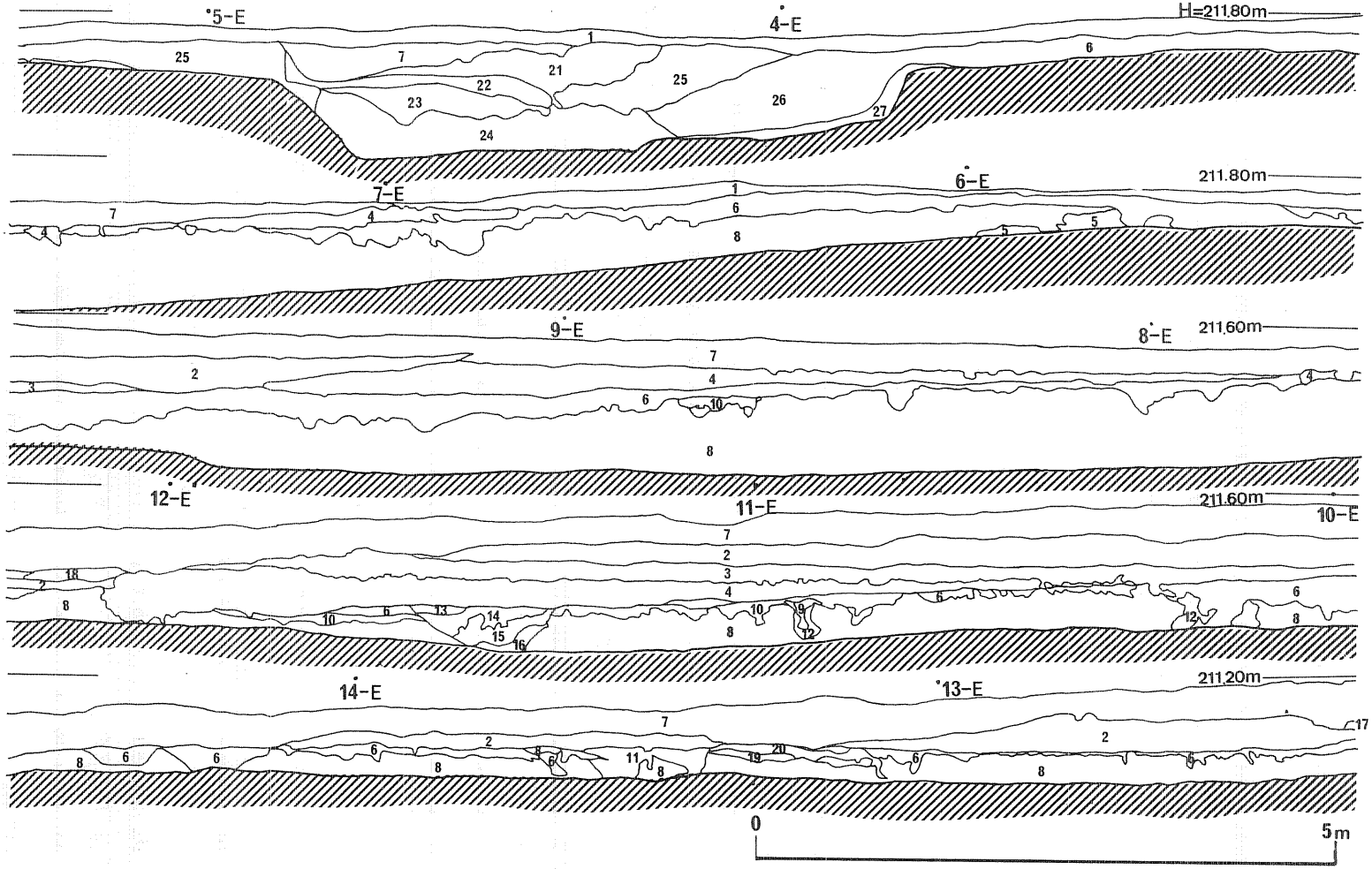

E
F
G
H
I
J
K
L
M
8
9
10
11
12
13
14
15
16
水
SK005
SK008
SK009
SK010
SK013
SK014
SK015
SK017
SK020
SK021
SK022
SK023
SK025
SK026
SK030
SI029
SD002
SD003
SD006
SD007
0
5
10m

第3図　遺構配置図

4. 遺跡の層位

遺跡は米代川の形成した段丘面にあるが、耕地整理のため削平された箇所も多く、第4図の第21～26層は昔あった沢目を耕地整理の際埋めたものと思われる。遺跡の東側のEラインからみた遺跡の層位は下記のとおりである（第4図）。

1. にぶい黄褐色土　10YR4/3　ぼそぼそした土。表土。
2. 暗灰黄色土　2.5Y4/2　白色、黄褐色小粒10%混入。白色の軽石、炭化物極小粒5%混入。盛り土。
3. にぶい黄褐色土　1.75Y4/3　しまりあり。白、黄褐色炭化物極小粒2～3%混入。下部に酸化鉄苑が沈下している。
4. 暗褐色土　10YR3/4　とてもしまりあり。黄褐色小粒10%混入。白色極小粒5%混入。粘性ややあり。
5. 暗褐色土　7.5YR3/4　酸化鉄が厚い帯状にほぼ一様に混入する。粘性あり。
6. 黒褐色土　10YR3/2　3層と同じ位にしまりよし。白色極小～小粒5%混入。
7. 暗褐色土　10YR3/3　7層をベースに褐色（10YR4/4）が極厚い帯状に、しゅ曲しながら混入している。耕地整理の際の盛土と思われる。
8. 黒褐色土　10YR3/2.75　しまりがない。炭化物、黄褐色極小粒混入。地山への漸移層と思われる。
9. 黒褐色土　10YR2.5/2
10. 灰黄褐色土　10YR4/2
11. 黒褐色土　7.5YR3/2　しまりあり。黄褐色極小粒混入。
12. 暗赤褐色土　2.5YR3/3　旧地形の凹みに鉄分が沈澱したものか？
13. 黒褐色土　10YR2.75/2　しまりなし。白色極小粒、火山性軽石混入。
14. 黒色土　10YR2/1　黄褐色砂状粒子20%混入。SD007に流れこんだ土。しまりあり。
15. 黒褐色土　7.5YR2/2
16. 黒褐色土　8.75YR3/2
17. 黒褐色土　2.5Y3/1　稲株混入、旧水田面か？
18. 黒褐色土　2.5Y3/2
19. 明黄褐色土　10YR7/2　浮石層。
20. にぶい黄色土　2.5Y6/4　砂状粒子。下部で酸化激しい。
21～26.　後世の撹乱層。


5-E
4-E
H=211.80m
7-E
6-E
211.80m
9-E
8-E
211.60m
12-E
11-E
211.60m
10-E
14-E
13-E
211.20m
0
5m

第４図　Ｅライン断面図

5. 遺構と遺物

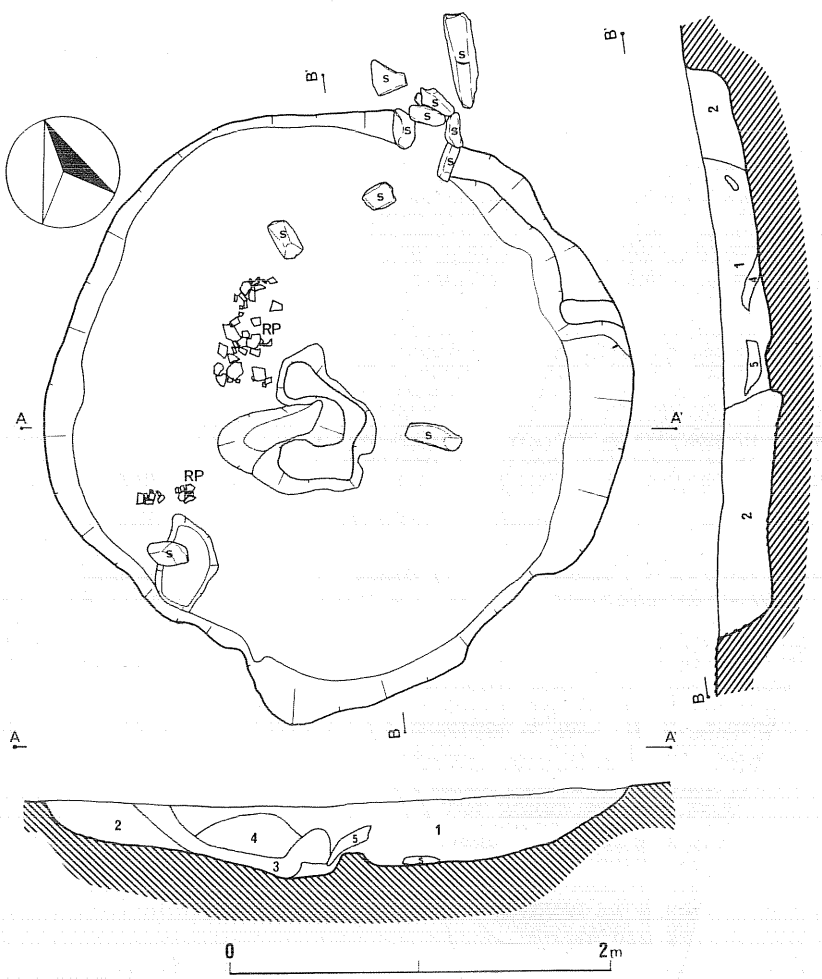
(1) 遺構

ア. 竪穴住居跡

ＳＩ029竪穴住居跡　（第5図　図版4・14）

プラン確認　黄褐色地山土上にて検出された。他の土壙と検出レベルは同等である。

壁面の状態　西側は水路下にあったため、プラン確認も困難を極めたが、壁も西側は不確かであった。東側は比較的しっかりしている。



第5図　ＳＩ029竪穴住居跡

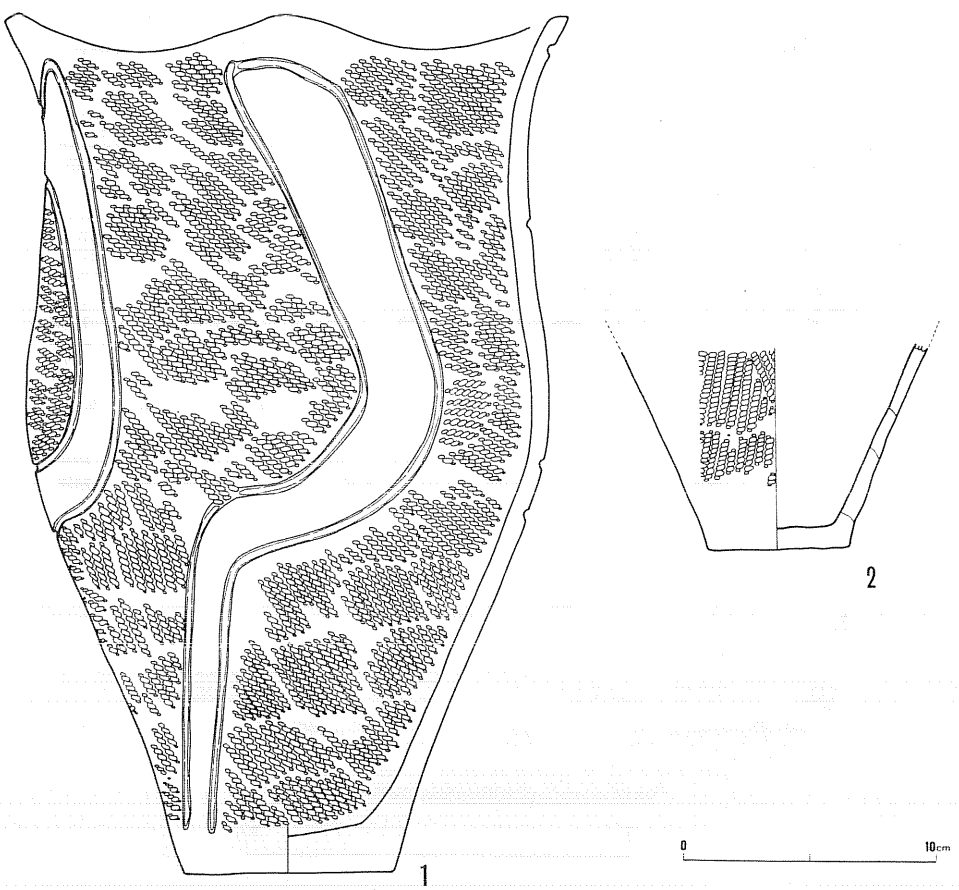
覆土　住居跡の平面プラン確認面から2本の断面で観察した結果は次のとおりである。

1. 黒色土　　10ＹＲ$\frac{2}{1}$　しまりわるし。黄褐色小極小粒含む。
2. 暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{4}$　Ⅰ層に比してしまりよし。黄褐色小～中粒含む。
3. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{2}$　しまりわるし。炭化物、黄褐色極小～小粒含む。
4. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{2}$　Ⅱ層に比してしまりわるし。黄褐色極小粒、酸化鉄含む。
5. 明黄褐色土　10ＹＲ$\frac{6}{6}$　しまりよし。粘性なし。中央部に意識的に盛り上げられている。

床面　ほぼ平坦であるが、中央部に地山土を盛り上げた箇所がある。また南西部からは第6図1の土器とともに粘質土が床面真上から出土した。床面はあまり堅固ではない。

柱穴、ピット　ピット、柱穴等は確認されなかった。

炉　明確な炉は確認されなかった。北部に石組があるが、焼土はまったく認められず、炉と



第6図　ＳＩ029竪穴住居跡出土土器

第 1 表	挿図番号	第 5 図	図版番号	図版 4 ・ 14
遺構名	S I 029	出土地区	9 — I 、 10 — I	
長　　軸	3.24 m	壁　　高	0.30 m	
短　　軸	3.13 m	壁 溝 幅	なし	
面　　積	8.04 ㎡	壁 溝 深	なし	
形　　態	円形	主 軸 方 向	————	
炉	位置	中 央	形　態	地 床 炉

は言い難い。むしろ、中央部のくぼみに焼土があり、ここを地床炉として使っていたのではないだろうか。

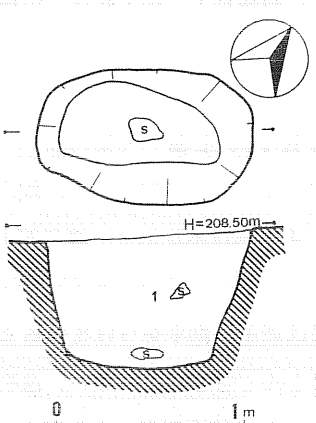
遺物とその出土状態　遺物は第6図の土器2個体がいずれも投げ棄てられた状態で出土した。この2点のものと思われる土器以外はほとんど出土しなかった。第6図1は住居跡中央やや西よりから出土したもので、波状口縁を持つ。単節ＬＲ縄文を縦位、または斜位に施文した後、幅3～4㎜の沈線で区画し、その内側を磨消す。胎土は密で、色調は外面が10ＹＲ7/3にぶい黄橙色、内面が10ＹＲ6/3にぶい黄橙色で、焼成は良好である。縄文時代中期末のものと思われる。器高34.4㎝、口径22.6㎝、底径8.4㎝を計る。第6図2は単節ＲＬ縄文を縦位回転施文した深鉢形土器の胴部下半から底部である。胎土は密、色調は内外面とも10ＹＲ5/1褐灰色である。焼成は普通。残存する器高8.0㎝、底径5.6㎝を計る。やはり、縄文時代中期末のものと思われる。

イ．土　　壙

ＳＫ005土壙　（第7図　図版6）

15－Ｉ、16－Ｉ地区から、地山上面にて検出された。不整楕円形で、壙口部1.15m×0.72m、壙底部0.83 m×0.40 m、最深の深さ0.71 mを計る。底面はほぼ平らで、埋土に数個の礫を伴うが、それほど大きいものではない。遺物は出土しなかった。主軸方位はＮ38°Ｅである。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 褐色土　10ＹＲ4/6　黄褐色土を若干混入する。赤色酸化物小～極小粒を少量ふくむしまりのない土。

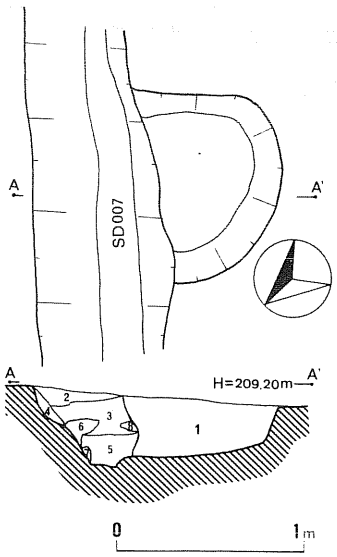


第7図　ＳＫ005土壙

ＳＫ 008 土壙　（第８図）

12—Ｈ地区から地山上面にて検出された。不整楕円形と思われるが、北東部はＳＤ 007 溝によって切られているため不明である。残存する壙口部 1.00ｍ×0.65ｍ、残存する壙底部 0.74ｍ×0.51ｍ、最深の深さ 0.31ｍを計る。底面は平らで、礫はほとんど含んでいない。遺物はまったく出土しなかった。主軸方位はＮ80°Ｗである。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{3}$　黄褐色土極小粒を含む。
2. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{2}$　赤色酸化物極小粒を含む。
3. 褐色土　10ＹＲ$\frac{4}{4}$
4. にぶい黄褐色土　10ＹＲ$\frac{5}{4}$　この層の周辺を赤色酸化物が帯状にとりまく。

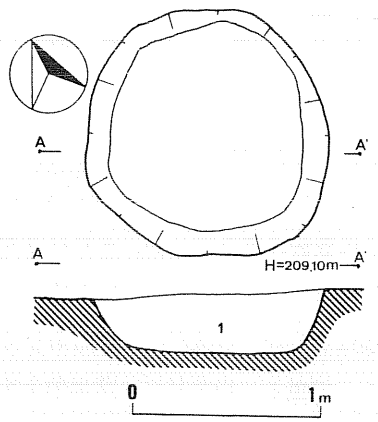


第８図　ＳＫ 008 土壙

ＳＫ 009 土壙　（第９図　図版６）

13—Ｉ地区から、地山と面にて検出された。平面形はほぼ円形を呈する。壙口部 1.30ｍ×1.27ｍ、壙底部 1.08ｍ×1.01ｍ、最深の深さ 0.31ｍを計る。底面は平らで、埋土中に礫はほとんど含んでいない。遺物はまったく出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1、暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{4}$　明黄褐色土（10ＹＲ$\frac{6}{6}$）中粒を少量混入。粘性中。しまりのない土。



第９図　ＳＫ 009 土壙

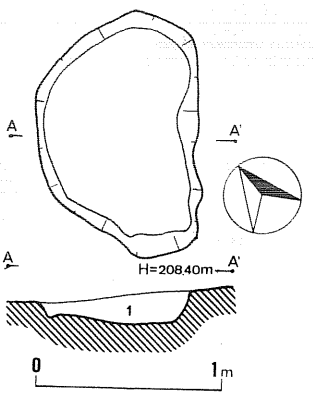
ＳＫ 010 土壙　（第10図）

14—Ｉ、15—Ｉ地区から、地山上面にて検出された。平面形は不定形で、壙口部 1.32ｍ×0.85ｍ、壙底部 1.11ｍ×0.72ｍ、最深の深さ 0.16ｍを計る。北東壁は若干の削平をうけているようだ。埋土中に礫はほとんど含まれていない。遺物はまったく出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1、暗褐色土　10ＹＲ3/3　粘性中で黒褐色土（10ＹＲ2/3）を１％混入。

ＳＫ013土壙（第11図　図版７・15）

14－Ｋ、14－Ｌ地区から、地山上面にて検出された。平面形は不整楕円形を呈する。床面に数個の礫を伴う。第１層、２層とも土器を包含しており、鳥居平遺跡から検出された土壙の中では一番出土量が多い。P.36第12図はＳＫ013出土土器の拓影図である。ほとんどの破片が同一個体のものと思われる。しかし、遺物出土レベルは表土に極めて近く、このため土器の一部がすでに削平されており、接合はほとんどできなかった。波状口縁を持つ深鉢形土器と思われ、単節ＲＬ縄文を縦位、斜位に施す。沈線が一部に施されているが、破片が少ないためどのように区画したかについては不明である。第12図23は別の土器の破片であるが、この土器は地文に単節ＬＲ縄文を施文した後、幅約２㎜の沈線で区画し、内側を沈線に平行の方向で磨消している。23をのぞくものは縄文時代中期のものと思われる。23は縄文時代後期のものと思われる。（23はＳＫ013の検出面レベルより出土したもので、あとで混入した可能性が大きい。したがってＳＫ013は縄文時代中期のものと思われる。）



第10図　ＳＫ010土壙

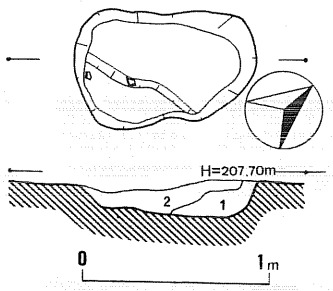
壙口部0.97ｍ×0.58ｍ、壙底部0.82ｍ×0.48ｍ、最深の深さ0.52ｍを計る。主軸方向はＮ13°Ｅである。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 褐色土　10ＹＲ4/4　黄褐色土（10ＹＲ5/6）極小粒混入。粘性中。
2. 暗褐色土　10ＹＲ3/3　粘性中。しまりなし。

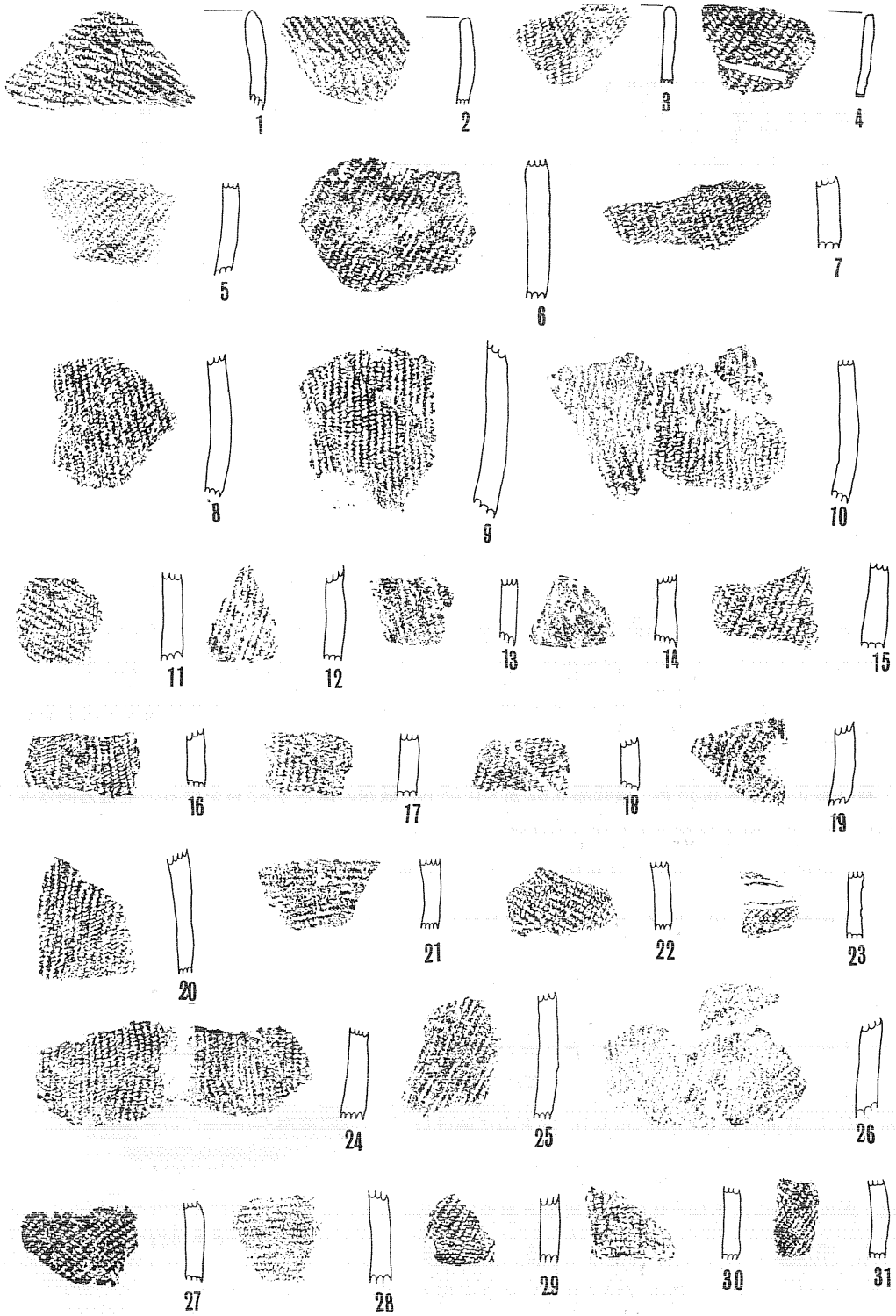
ＳＫ014土壙　（第13図　図版７）

11－Ｉ、12－Ｉ地区から、地山上面にて検出された。平面形は不整円形を呈する。壙口部1.24ｍ×1.20ｍ、壙底部1.05ｍ×1.04ｍ、最深の深さ0.45ｍを計る。底面は若干の凹凸があり、埋土中に礫はほとんど含んでいない。遺物はまったく出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 暗褐色土　10ＹＲ3/3　１をベースに褐色土（10ＹＲ4/6）を２％混入。粘性弱。しまりなし。



第11図　ＳＫ013土壙

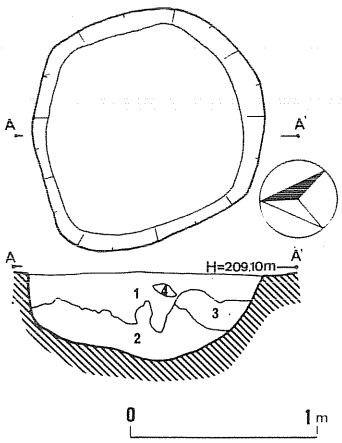


第12図　ＳＫ013土壙出土土器

2. 褐色土　　10YR$\frac{4}{6}$　2をベースに黄褐色土（10YR$\frac{5}{8}$）を混入。粘性弱。しまりなし。

3. 暗褐色土　　10YR$\frac{3}{4}$　褐色土（10YR$\frac{4}{6}$）を1％混入。粘性弱。しまりなし。

4. にぶい黄褐色土　10YR$\frac{4}{3}$　4をベースに灰黄褐色土（10YR$\frac{5}{2}$）を5％混入。粘性なし。しまりなし。



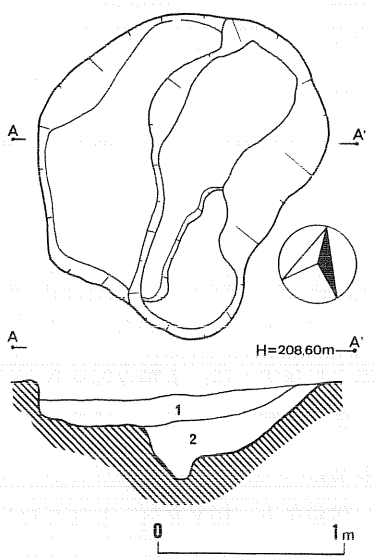
第13図　SK 014 土壙

SK 015 土壙　（第14図）

12－J、13－J地区から、地山上面にて検出された。平面形は不整形を呈する。壙口部1.62 m×1.35 m、壙底部1.46 m×0.40 m、最深の深さ0.33 mを計る。底面は凹凸が激しく、ほぼ南北方向に細長い落ち込みを持つ。埋土中に礫はほとんど含んでいない。遺物はまったく出土しなかった。主軸方位はN 7°Wである。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒色土　　10YR$\frac{2}{1}$　明黄褐色土（10YR$\frac{6}{8}$）小粒1％混入。粘性ややあり。しまりなし。礫混入。

2. 暗褐色土　10YR$\frac{3}{4}$　中央に赤色酸化物が帯状に薄く混入している。粘性中。しまりなし。



第14図　SK 015 土壙

SK 017 土壙　（第15図　図版8・15）

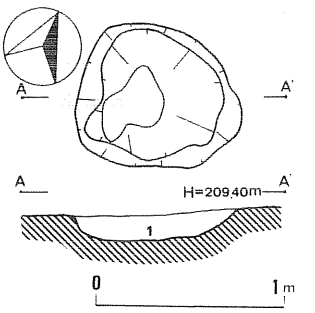
10－H地区から、地山上面にて検出された。平面形は不整円形を呈する。壙口部0.88 m×0.76m、壙底部0.65 m×0.65 m、最深の深さ0.13 mを計る。浅い小土壙である。ほぼ中央に浅い落ち込みがある。埋土中に礫はほとんど含んでいない。

第16図に示した拓影図の土器が第1層中からまとまりなく出土した。1、2は同一個体の土器と思われる。太い撚の単節LR縄文を横位に施文した後、口縁部から5㎜程下を箆状のもので調整しており、口縁部内側を一条の沈線が廻る。また、胴部には、直経8㎜程の突起を持つ。3は単節L

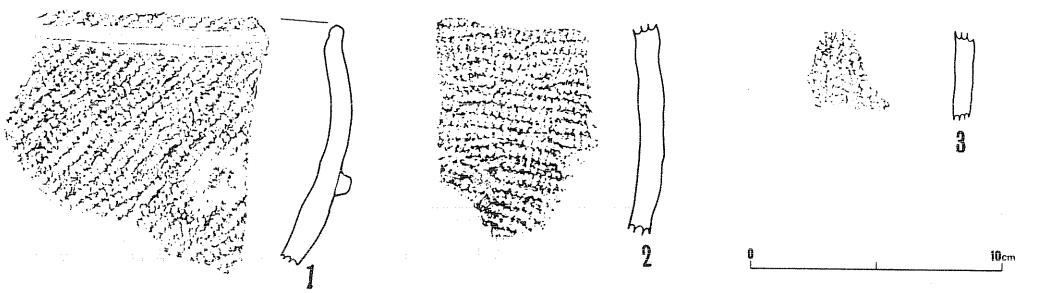
R縄文が施文された土器である。ＳＫ017より出土した土器はこの３点のみであった。これらの土器は縄文時代晩期のものと思われる。なお、接合はできなかったが、１、２と同一個体と思われる土器が、13－Ｉ、15－Ｅなどから出土しており、後からＳＫ017内に混入した可能性が大きく、ＳＫ017の時代を確定づけることは難しい。

断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒褐色土　10ＹＲ⅔　しまりなし。黄褐色小～中粒、炭化物極小粒を混入する。



第15図　ＳＫ017土壙

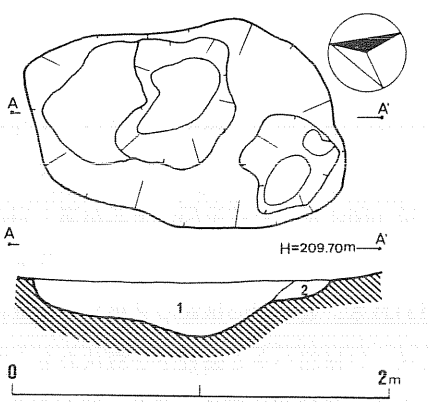


第16図　ＳＫ017土壙出土土器

ＳＫ020土壙　（第17図　図版８）

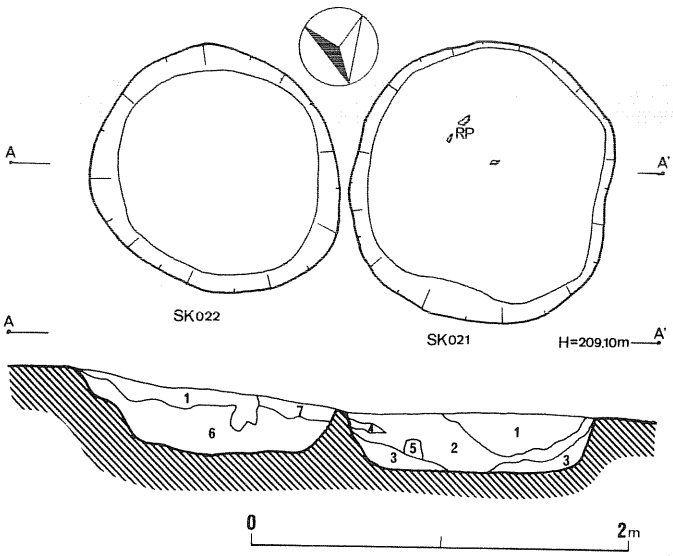
９－Ｈ、９－Ｉ、10－Ｈ、10－Ｉ地区から、地山上面にて検出された。平面形は不整形を呈する。壙口部1.58ｍ×1.04ｍ、壙底部1.02ｍ×0.63ｍ、最深の深さ0.20ｍを計る。底面は凹凸が多く、南側に小ピットを持つ。埋土中に礫はほとんど含んでいない。遺物はまったく出土しなかった。主軸方位はＮ23°Ｗである。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒褐色土　10ＹＲ⅔　しまりなし。黄褐色小～中粒、炭化物極小粒を混入する。



第17図　ＳＫ020土壙

2. 褐色土　10YR4/4　1層に比べてしまりなし。黄褐色極小粒を混入する。



第18図　SK 021・022 土壙

SK 021 土壙　（第18図　図版9・15）

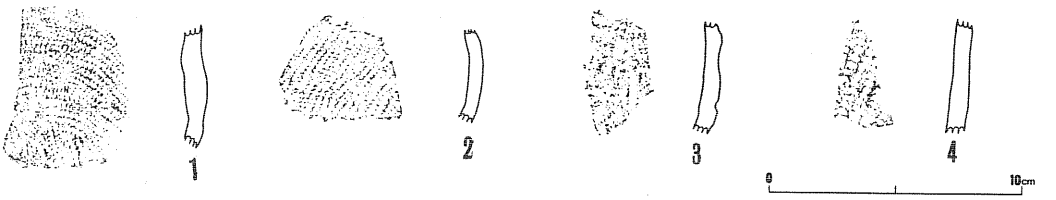
12－I、13－I地区から、地山上面にて検出された。SK 022に隣接している。平面形はほぼ円形を呈する。壙口部1.49m×1.38m、壙底部1.30m×1.23m、最深の深さ0.31mを計る。底面はほぼ平らで、埋土中に礫をほとんど含んでいない。第19図に示す土器が出土した。単節LR縄文を地文として施している。遺物はいずれも第2層中からまとまりなく出土した。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒色土　10YR2/1　1をベースに黄褐色土（10YR5/6）と褐色土（10YR4/4）を1%混入。粘性中。しまりなし。
2. 黒褐色土　10YR3/2　粘性中。しまりなし。明黄褐色土（10YR6/8）極小粒混入。
3. 黒褐色土　10YR2/3　粘性中。しまりなし。明黄褐色土（10YR6/8）極小粒混入。
4. 暗褐色土　10YR3/3　粘性中。しまりなし。
5. 酸化鉄層

SK 022 土壙　（第18図　図版9）

12－I、13－I地区から、地山上面にて検出された。SK 021に隣接している。平面形はほぼ円形を呈する。壙口部1.32m×1.31m、壙底部1.09m×1.04m、最深の深さ0.34mを計る。底面はほぼ平らで、埋土中に礫はほとんど含んでいない。遺物はまったく出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒色土　10YR2/1　明褐色土（7.5YR5/8）3%混入。粘性中。しまりなし。
6. 暗褐色土　10YR3/4　6をベースに黄褐色土（10YR5/8）小～中粒7%混入。粘性弱。しまりなし。

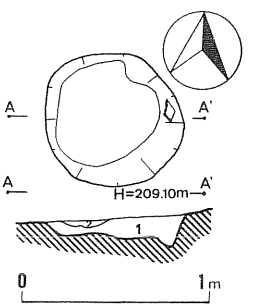


第19図　ＳＫ021土壙出土土器

7. 褐色土　10ＹＲ4/4　7をベースに黄褐色土極小粒混入
粘性弱。しまりなし。

ＳＫ023土壙　（第20図　図版10）

13－Ｉ地区から、地山上面にて検出された。平面形はほぼ円形を呈する。壙口部0.74ｍ×0.71ｍ、壙底部0.54ｍ×0.52ｍ、最深の深さ0.11ｍを計る。底面凹凸が激しく、東側が深くなっている。埋土中に礫はほとんど含んでいない。遺物はまったく出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

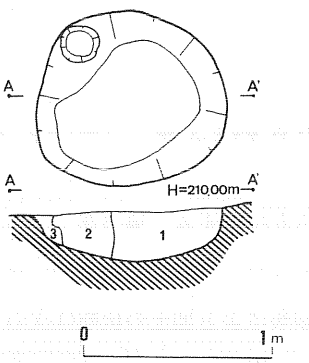


第20図　ＳＫ023土壙

1. 黒褐色土　10ＹＲ2/2　粘性中。しまりなし。黄褐色土（10ＹＲ5/8）1％混入。
2. 黒色土　10ＹＲ2/1　粘性中。しまりなし。

ＳＫ025土壙　（第21図　図版10）

11－Ｉ地区から、地山上面にて検出された。平面形は不整円形を呈する。壙口部0.99ｍ×0.92ｍ、壙底部0.76ｍ×0.62ｍ、最深の深さ0.27ｍを計る。底面はほぼ平らで、埋土中に礫はほとんど含んでいない。北側に小ピットを持つ。遺物はまったく出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

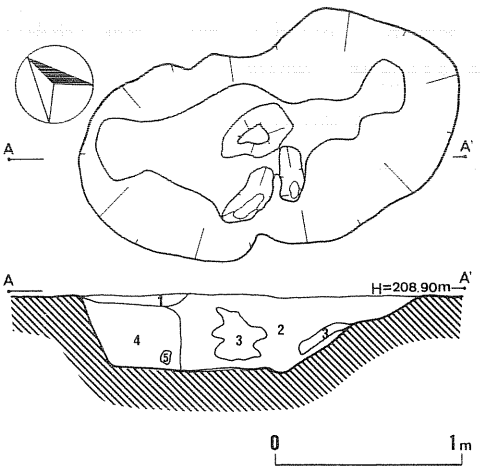


第21図　ＳＫ025土壙

1. 黒褐色土　10ＹＲ2/2　粘性中。しまりなし。
2. 黒色土　10ＹＲ2/1　明褐色土（7.5ＹＲ5/8）中粒2％混入。周りを酸化鉄がかこんでいる。
3. 暗褐色土　10ＹＲ3/3　粘性中。しまりなし。

ＳＫ026土壙　（第22図　図版11）

９－Ｊ、10－Ｊ地区から、地山上面にて検出された。平面形は不整楕円形を呈する。壙口部2.02ｍ×1.20ｍ、壙底部1.65ｍ×0.70ｍ、最深の深さ0.40ｍを計る。底面に３個の小ピットを持つが、その他のところは比較的平らである。断面は東側は急激に立ち上がるが、西側はなだらかである。埋土中に礫はほとんど含んでいない。

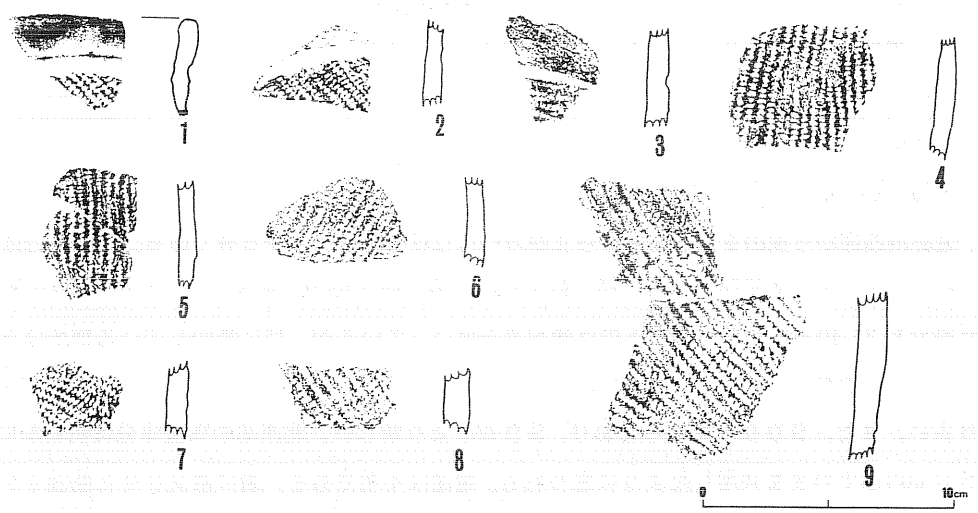


第22図　ＳＫ026土壙

第23図に示す土器９個が出土した。いずれも第２層、４層中からまとまりなく出土したものである。１～３は、地文として単節ＬＲ縄文を施文した後、幅５～７㎜の沈線で区画し、磨消したものである。縄文時代中期のものと思われる。

断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒色土　10ＹＲ 1.7/1　しまりよし。炭化物極小粒混入。下部に酸化鉄を帯状に混入。
2. 黒褐色土　10ＹＲ 2/2　しまりなし。黒色極小粒混入。
3. 黒色土　10ＹＲ 2/1　しまりややよし。ほとんど混入物なし。



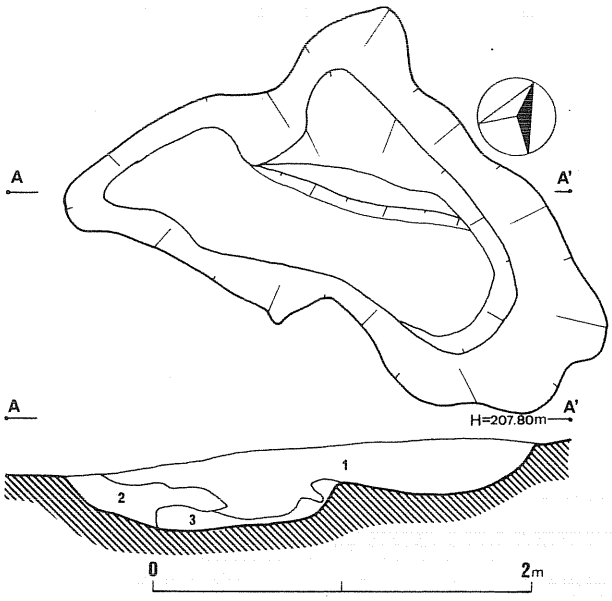
第23図　ＳＫ026土壙出土土器

4. 黒褐色土　10ＹＲ3/2　黄褐色極小～小粒混入。3層と同等のしまり。

5. 黄褐色土　10ＹＲ5/6　砂状。黒褐～暗褐色極小粒少量混入。

ＳＫ030土壙（第24図）

14－Ｌ、14－Ｍ地区から、地山上面にて検出された。平面形は不整形を呈する。壙口部2.95ｍ×1.78ｍ、壙底部2.10ｍ×0.56ｍ、最深の深さ0.39ｍを計る。底面は凹凸があり、埋土中礫はほとんど含んでいない。ほぼ東西方向に一段深い落ち込みがある。また、他の土壙から西側にかなり離れた場所に位置する。遺物はまったく出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。



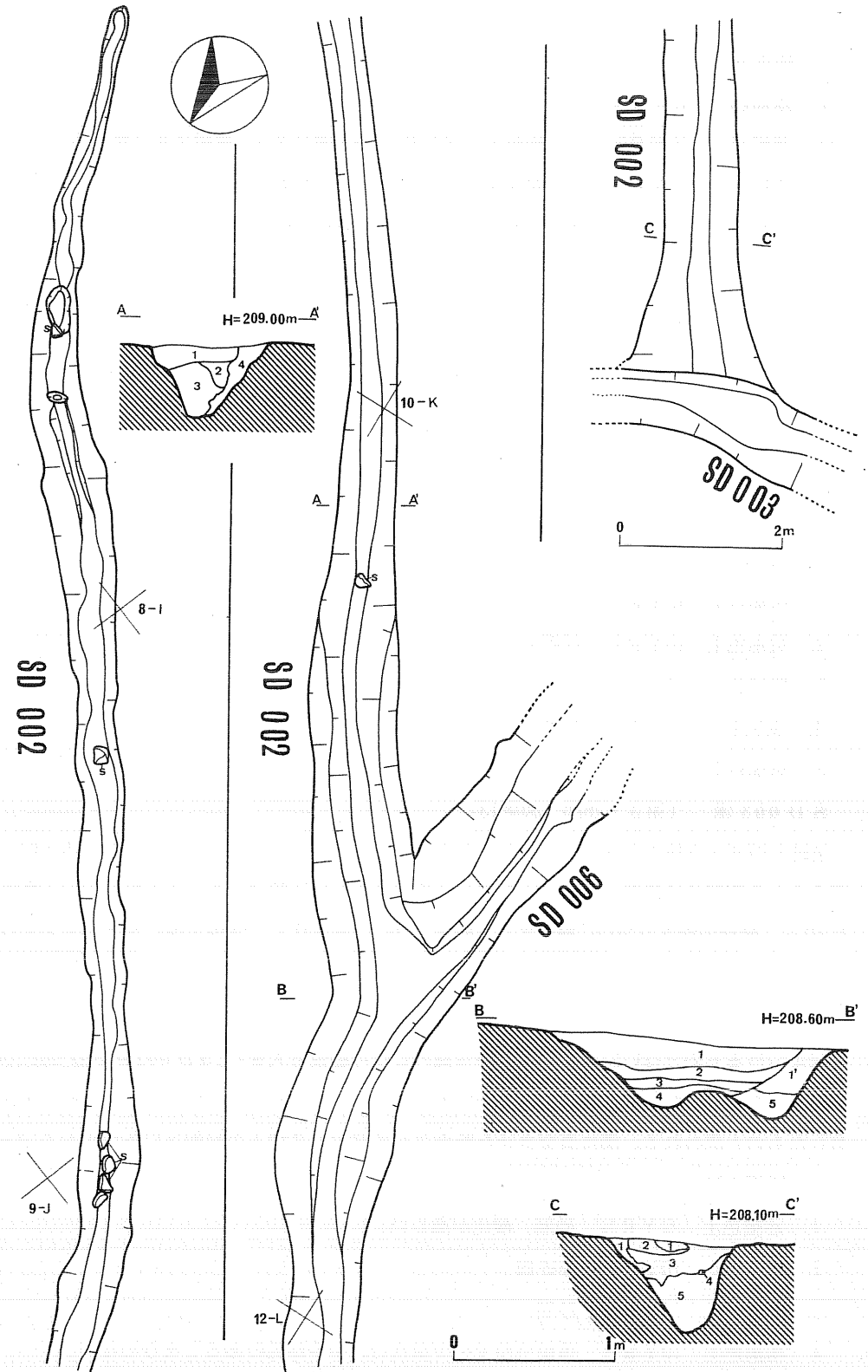
第24図　ＳＫ030土壙

1. 黒色土　10ＹＲ1.7/1　しまりなし。黄褐色極小粒混入。
2. 黒色土　10ＹＲ2/1　しまりなし。黄褐色極小粒混入。
3. 黒褐色土　10ＹＲ2/2　1、2に比べてややしまりよし。

ウ．溝

ＳＤ002溝　（第3・25図　図版12）

遺跡南西部から検出された南東から北西方向にほぼ直線的にのびる溝である。南側部分は削平をうけているため不明である。最大幅1.38ｍ、最小幅0.68ｍ、最深の深さ0.55ｍ、検出された総延長35.40ｍを計る。溝埋土内は礫が若干はいっているが、特に集中している箇所はみあたらない。遺物はまったく出土しなかった。ＳＤ002はＳＤ003に切られており、ＳＤ003より古い。また、ＳＤ006を切っており、ＳＤ006より新しい。北西部の重複部分は明らかに、ＳＤ003がそのまま共用したように思われる。用途は不明である。溝に直交させた断面3か所における埋土の状態は以下のとおりである。（断面図の縮尺は平面図の1/2）


SD 002
SD 002
SD 002
SD 003
SD 006
A
A'
H=209.00m
B
B'
H=208.60m
C
C'
H=208.10m
8-I
9-J
10-K
12-L
S
1
2
3
4
5
1'
0
2m
1m

第25図　ＳＤ００２溝

＜断面Ａ＞

1. 暗褐色土　10ＹＲ3/3
2. 黒褐色土　10ＹＲ3/2　3に褐色土（10ＹＲ1/4)が多量に混入。黄褐色極少粒混入。
3. 黒褐色土　10ＹＲ2/2　やや粘性あり。しまりなし。黄褐色極少粒混入。
4. 黒褐色土　10ＹＲ2/3　上面に酸化鉄の層あり。黄褐色極少粒混入。

＜断面Ｂ＞

1. 暗褐色土　10ＹＲ3/4　1′とほぼ同じであるが、やや黄褐色極少粒の混入量が多い。
1′ 暗褐色土　10ＹＲ3/3　黄褐色極少粒混入。
2. 黄褐色土　10ＹＲ5/8　黒褐色（10ＹＲ3/2）極少粒含む。しまりなし。
3. 黒褐色土　10ＹＲ2/2
4. 黒褐色土　10ＹＲ3/2　黄褐色岩化物極少粒含む。粘性あり。
5. 暗褐色土　10ＹＲ3/3

＜断面Ｃ＞

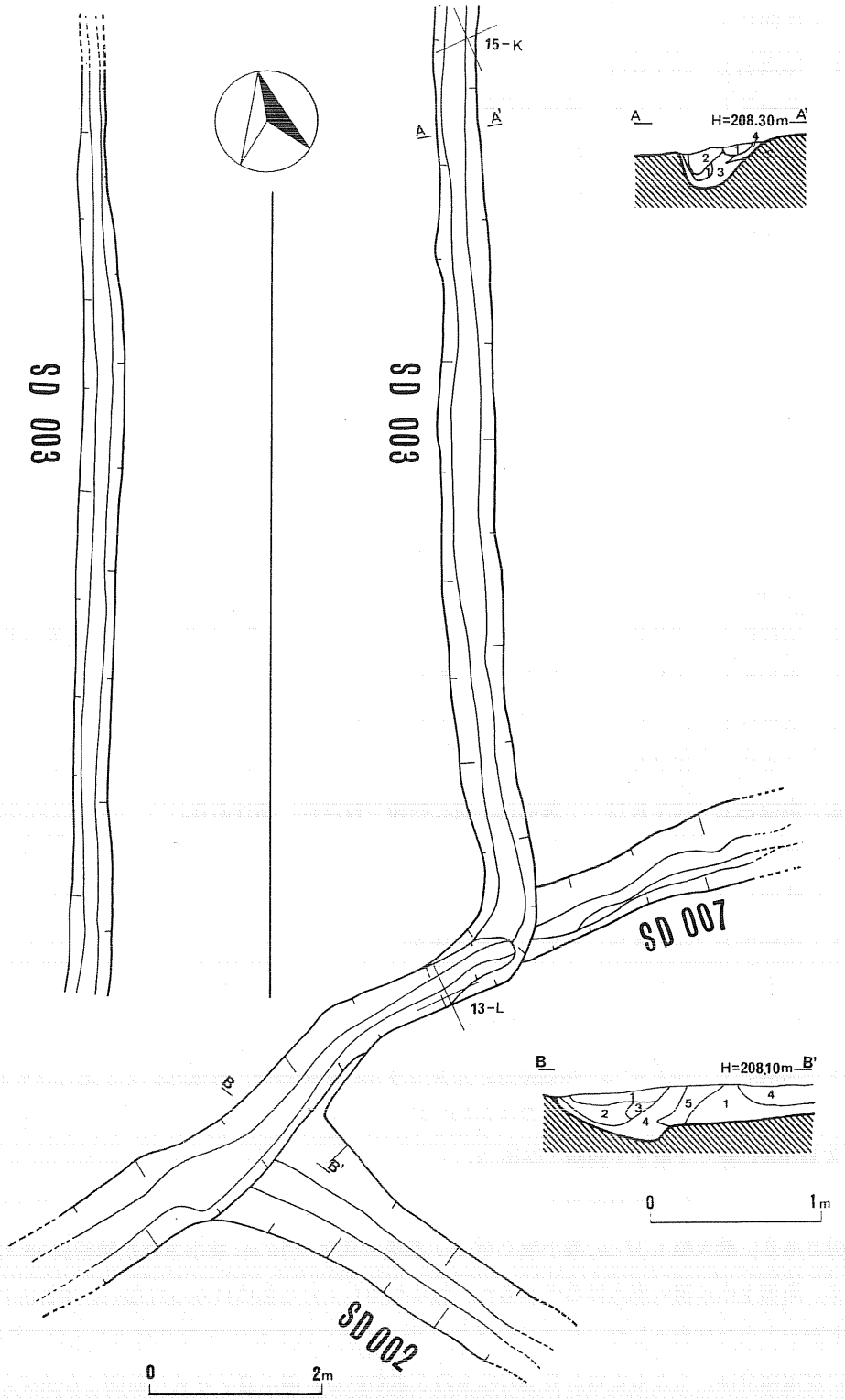
1. 黒褐色土　10ＹＲ2/1.5
2. 黄褐色土　10ＹＲ5/8　浮石層。
3. 黒褐色土　10ＹＲ2/2
4. 黒色土　10ＹＲ2/1　粘性強。
5. 黒褐色土　10ＹＲ3/2

ＳＤ003溝　（第3・26図　図版13）

遺跡北西部から検出された。ほぼ北から南に向かってのびており、13－Ｌ付近で西へ向きを変える。北側部分は道路のため、西側部分は範囲外のため不明である。最大幅0.76ｍ、最小幅0.30ｍ、最深の深さ0.29ｍ、検出された総延長25.80ｍを計る。溝埋土内に礫はほとんどはいっていない。第29図に示す土器片が出土した。1～14は縄文時代のものであり、15は須恵器の甕の破片と思われる。いずれの遺物も底面近くからまとまりなく出土しており、この溝の年代を決定づけるものとはいい難い。あとから混入した可能性も大きい。ＳＤ003はＳＤ002、007を切っており、これらより新しい。西側の部分はそれぞれＳＤ002、007のものをそのまま共有したものと思われる。溝に直交させた断面2か所における埋土の状態は以下のとおりである。

＜断面Ａ＞

1. 赤褐色土　5ＹＲ4/6　砂層。酸化が激しい。
2. 黄褐色土　10ＹＲ5/8　浮砂層
3. 暗褐色土　10ＹＲ3/4　砂層
4. 黒褐色土　10ＹＲ3/2　黄褐色粒子を少量含む。やや粘性のあるしまりのない土。


SD 003
SD 003
15-K
A
A'
A
H=208.30m
A'
4
2
3
SD 007
13-L
B
B'
B
H=208.10m
B'
2
1
3
4
5
1
4
0
1m
SD 002
0
2m

第26図　ＳＤ００３溝

＜断面Ｂ＞

1. 暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{4}$
2. 黄褐色土　10ＹＲ$\frac{5}{8}$　黄褐色砂層。
3. 酸化物のブロック。
4. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{2}$　酸化鉄多く含む。砂まじり。
5. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{1.5}$

ＳＤ006溝　（第３・27図）

遺跡南西部から検出された。ほぼ南から北へ向かって直線的にのびる溝である。南側部分は後世の撹乱のため不明である。最大幅1.46ｍ×最小幅0.55ｍ、最深の深さ0.36ｍ、検出された総延長8.20ｍを計る。溝埋土内に礫はほとんどない。遺物はまったく出土しなかった。

ＳＤ006はＳＤ002に切られており、ＳＤ002より古い。ＳＤ002との重複部分は、もともとはＳＤ006のものと思われる。溝と直交させた断面２か所における埋土の状態は以下のとおりである。

＜断面Ａ＞

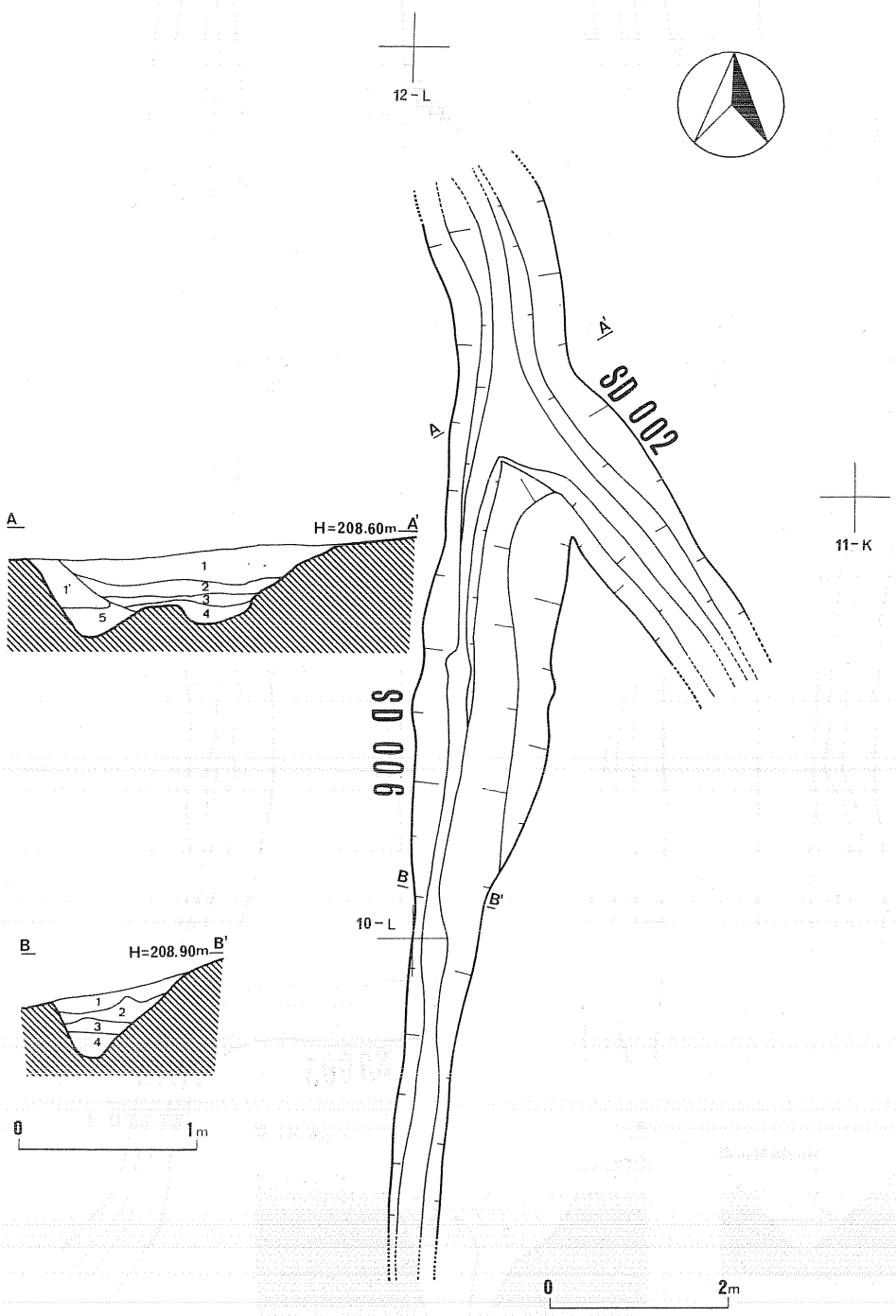
1. 暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{4}$　1′とほぼ同じであるが、やや黄褐色極少粒の混入量が多い。
1′ 暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{3}$　黄褐色極少粒混入。
2. 黄褐色土　10ＹＲ$\frac{5}{8}$　黄褐色（10ＹＲ$\frac{3}{2}$）極小粒含む。しまりなし。
3. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{2}$
4. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{2}$　黄褐色、炭化物極少粒含む。粘性あり。
5. 暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{3}$

＜断面Ｂ＞

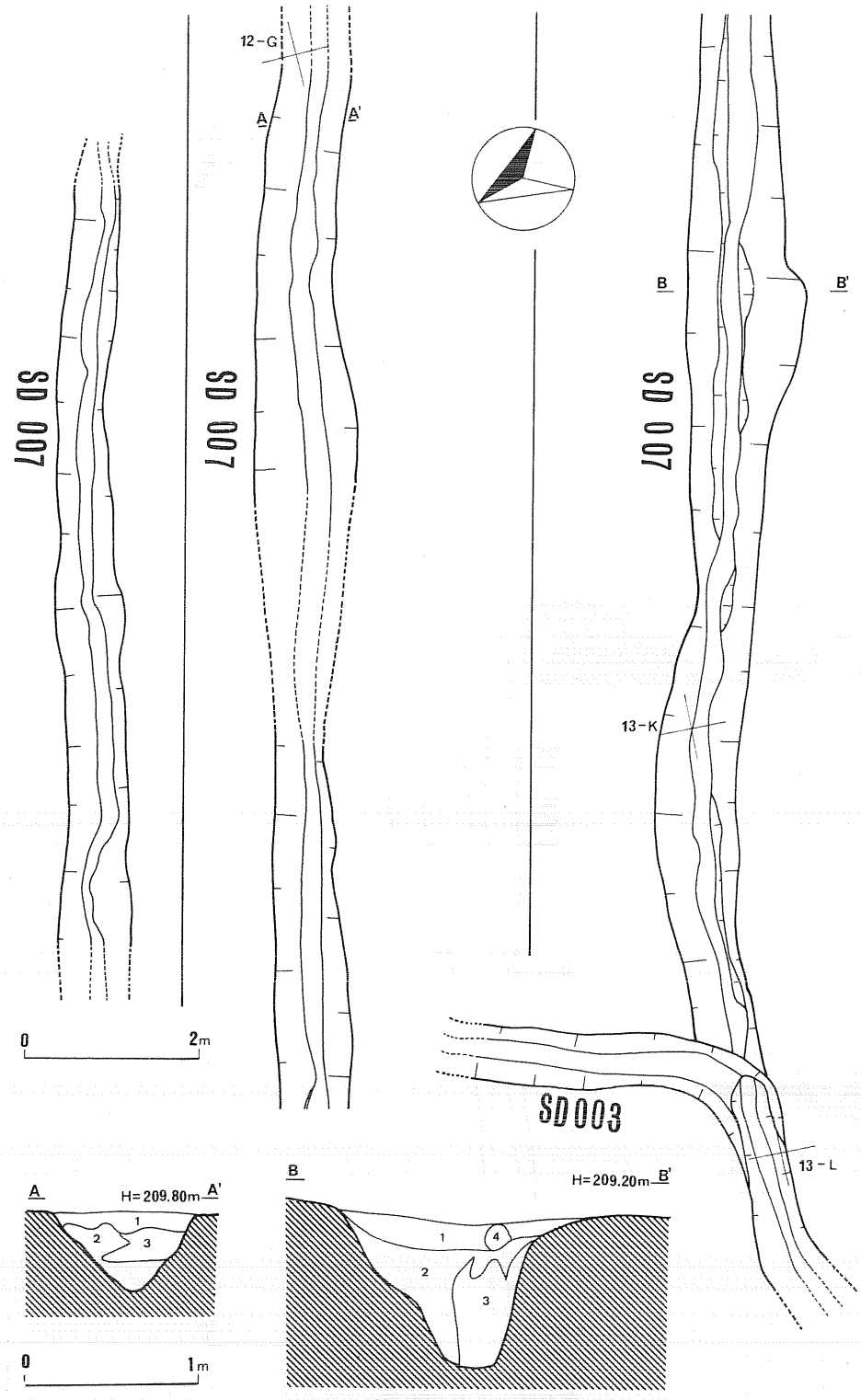
1. 暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{3}$　黄褐色極少粒混入。
2. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{2}$　やや粘性あり。しまりなし。黄褐色極少粒混入。
3. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{2}$　黄褐色極少粒混入。
4. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2.5}{2}$　粘性あり。しまりなし。黄褐色極少粒混入。１、２、３にくらべ４層は黄褐色極小粒の量が多い。

ＳＤ007溝　（第３・28図　図版13）

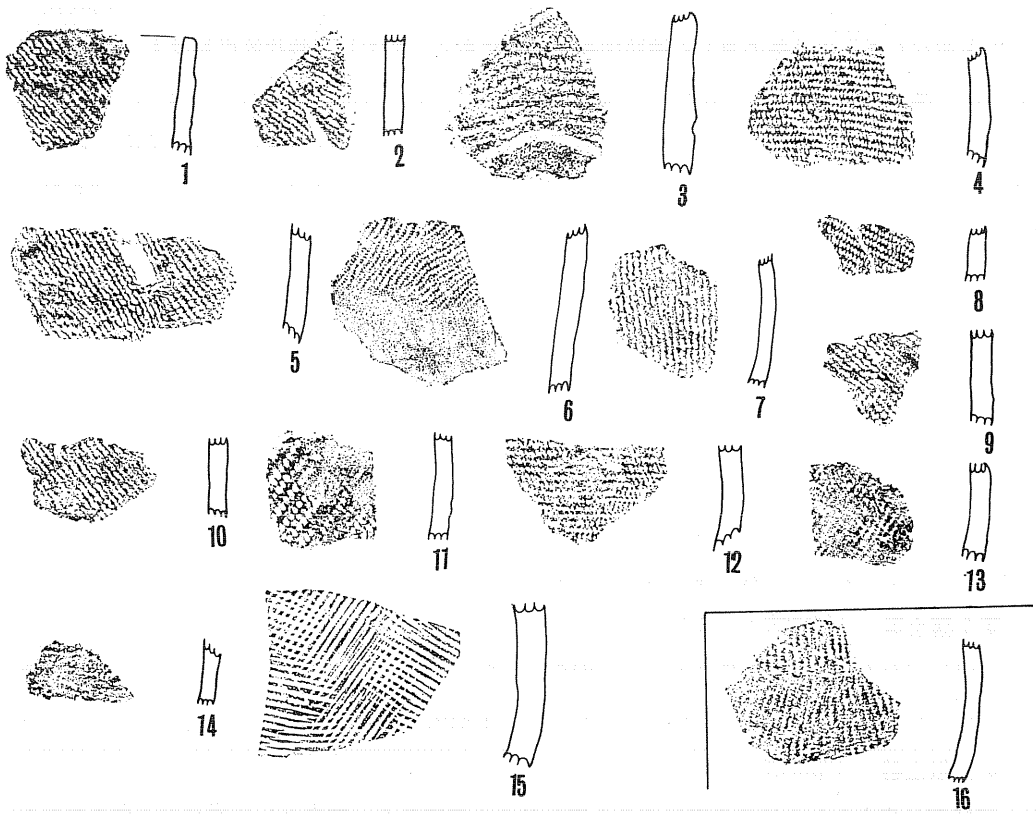
遺跡中央部から検出された東から西へほぼ直線的にのびる溝である。東側部分は道路のため不明である。最大幅1.37ｍ、最小幅0.60ｍ、最深の深さ0.46ｍ、検出された総延長38.10ｍを計る。溝埋土内に礫の混入は若干あるが、特に集中している箇所はみられない。第29図16の縄文土器が１点だけ出土した。ＳＤ007はＳＤ003に切られており、ＳＤ003より古い。ＳＤ003との重複部分は、もともとはＳＤ007のものと思われる。溝に直交させた断面２か所における



第27図　ＳＤ００６溝


SD 007
SD 007
SD 007
12-G
A
A'
B
B'
13-K
SD 003
13-L
0
2m
A
H=209.80m
A'
1
2
3
0
1m
B
H=209.20m
B'
1
2
3
4

第28図　ＳＤ 007 溝



第29図　ＳＤ003、007溝出土土器

埋土の状態は以下のとおりである。

＜断面Ａ＞

1. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{2}$　しまりなし。黄褐色中～大粒火山性軽石10％混入。
2. 暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{4}$　粘性中しまりなし。酸化鉄50％混入。
3. 褐色土　10ＹＲ$\frac{4}{4}$　砂層。
4. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{2}$　明黄褐色極小粒混入。

＜断面Ｂ＞

1. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{2}$
2. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{2}$　黄褐色極少粒混入。
3. 暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{3}$　回りを赤色酸化物が帯状にとりまく。赤色酸化物混入。

4. 赤褐色土　5ＹＲ4/6　赤色酸化鉄層

以上述べたように4条の溝とも遺跡中央部西側に集まっており、時代的推移はあるものの、もとある溝の一部を利用して使用したようだ。したがって、ほぼ同じ目的に使用されたものと思われる。しかし、溝の始まりも終わりの部分も不明のため、時代・性格などは不明である。遺物もＳＤ003、007から数点でたにとどまっており、溝の時代を決定づけることはできなかった。昭和56年度発掘調査を行った中の崎遺跡において、住居跡に伴う溝が確認された。鳥居平遺跡で検出されたこの溝と形態的に一致する点も多い。

(2)　遺物

ア．土　器　（第30図）

鳥居平遺跡から出土した土器はコンテナ半箱分とたいへん少なく、ほとんどが縄文のみ施された小破片である。しかし、縄文中期～平安時代まで、時代的にはバラエティに富んだものが出土している。以下第1類～第5類まで分類した。

第1類土器　（第30図1～5）

口縁部がやや外反する土器である。口縁部は平縁もしくは波状口縁を呈する。地文として縄文を施した後、沈線で区画して磨消す。縄文時代中期末のものと思われる。

第2類土器　（第30図6）

口縁部は真上もしくはやや内反すると思われる土器である。地文として縄文のみ施されたものを本類とした。第30図6は単節ＬＲ縄文が縦位に施文される。

第3類土器　（第30図7～10）

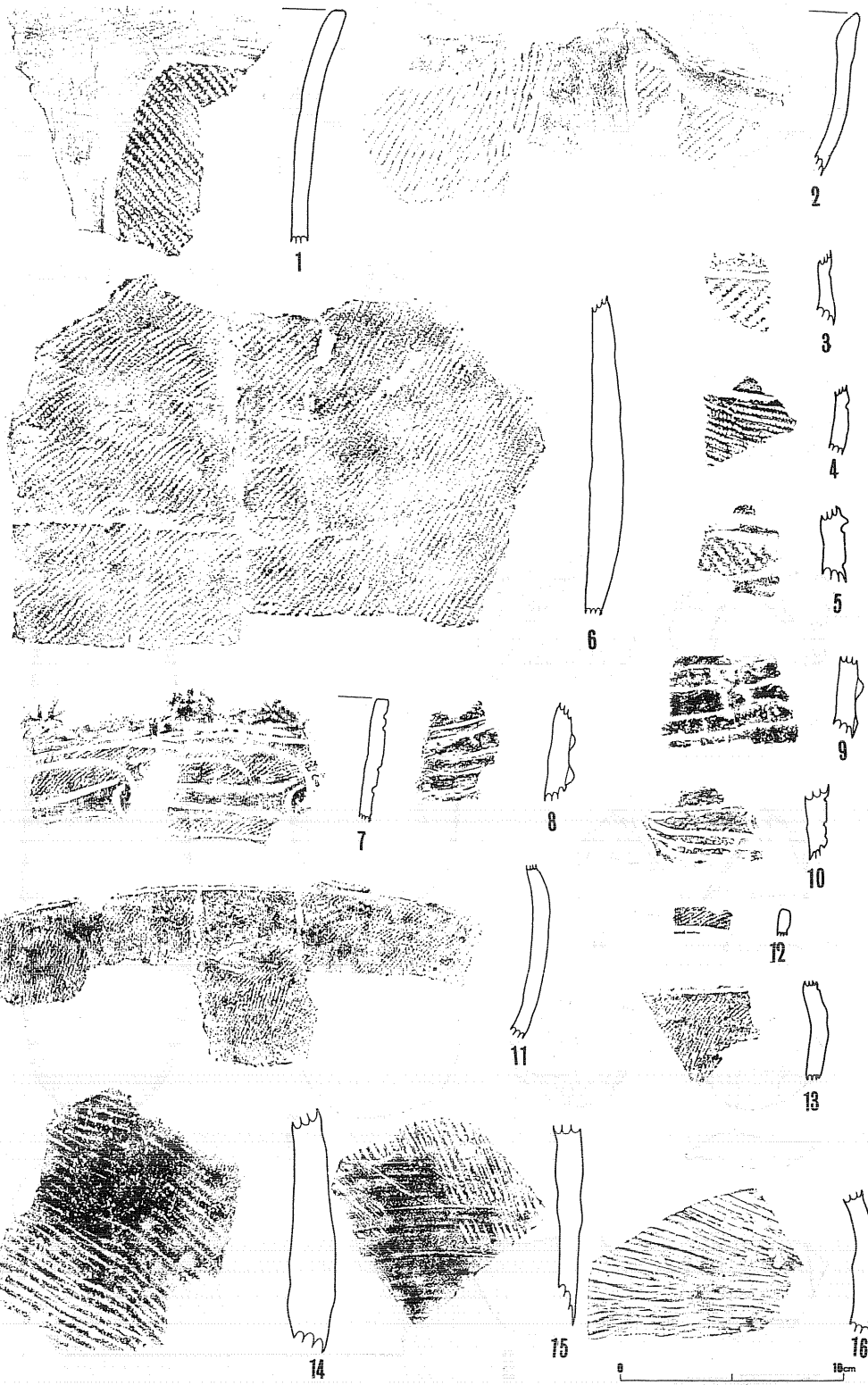
口縁部に突起を持ち、入組文、Ｓ字状文等を持つ土器を本類とした。口縁部は真上もしくはやや外反する。口縁部突起には2個の刻目が施される。縄文時代後期のものと思われる。

第4類土器　（第30図11～13）

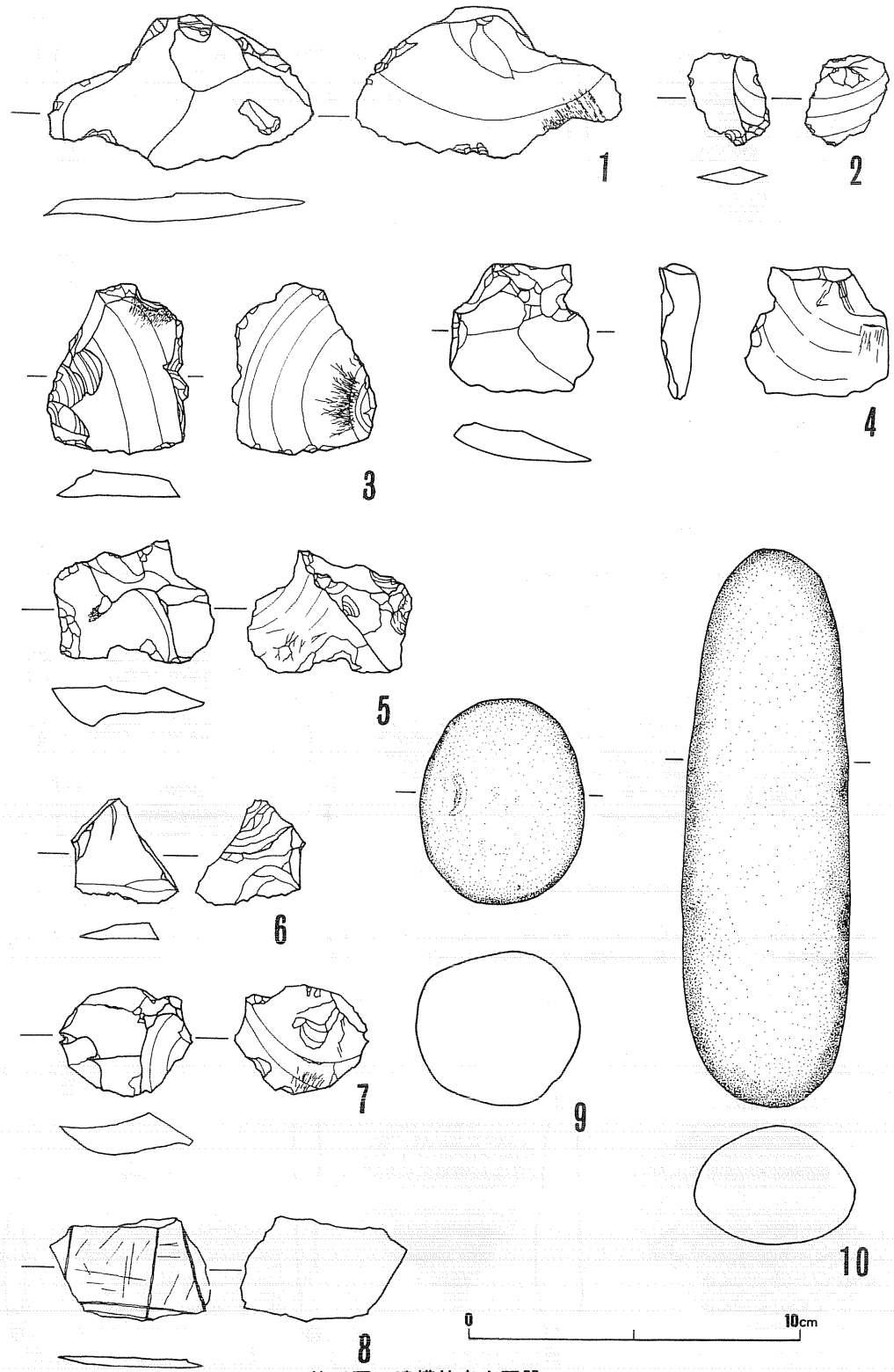
口縁部がゆるやかに内反する鉢形土器である。11と13は同一個体のものと思われるが、撚りの細かいＬＲ縄文を横位に施文し、口縁部に2条の沈線をめぐらす。縄文時代晩期のものと思われる。

第5類土器　（第30図14～16）

平安時代の遺物を本類とした。14～16ともに、須恵器の甕の破片であり、平行叩き目文が施される。



第30図　遺構外出土土器



第31図　遺構外出土石器

イ．石 器 （第31図）

石器の出土量も極めて少なく、10点出土したのみであり、そのほとんどが剥片石器である。

1～7は不定形石器である。石質は、1・4・5・7が硬質泥岩、2・3が硬質頁岩、6が安山岩である。

8は石板と思われるが、表裏面とも研磨されている。石質は粘板岩である。江戸～明治の頃字を刻んだ石板と酷似するが、これには字は刻まれていない。

9は磨石で、両面とも使用された痕跡がある。石質は石英安山岩である。

10は石棒である。石質は凝灰岩である。

6. まとめ

鳥居平遺跡から検出された遺構は縄文時代竪穴住居跡1棟、土壙15基、溝4条である。遺物は遺構内、遺構外合わせても整理箱半箱分と極めて少ない。

竪穴住居跡は縄文時代中期末のものが1棟検出されたが、近隣する他の遺跡の同時期住居跡に比べて炉の形態に差異がみられる。すなわち北に接する北の林Ⅰ、Ⅱ、飛鳥平遺跡で検出された中期末住居跡は石組複式炉を有する。また炉石が火熱を受けもろくなっている。これに対して鳥居平遺跡検出のＳＩ029竪穴住居跡では、粘土を用いて住居跡中央部に窪地を構築して、炉として用いたと思われる。

土壙は15基検出されたがその形態から次の3タイプに分類される。

1. 平面形はほぼ円形であまり深さのないもの…ＳＫ009、010、014、**017**、**021**、022、023、025。

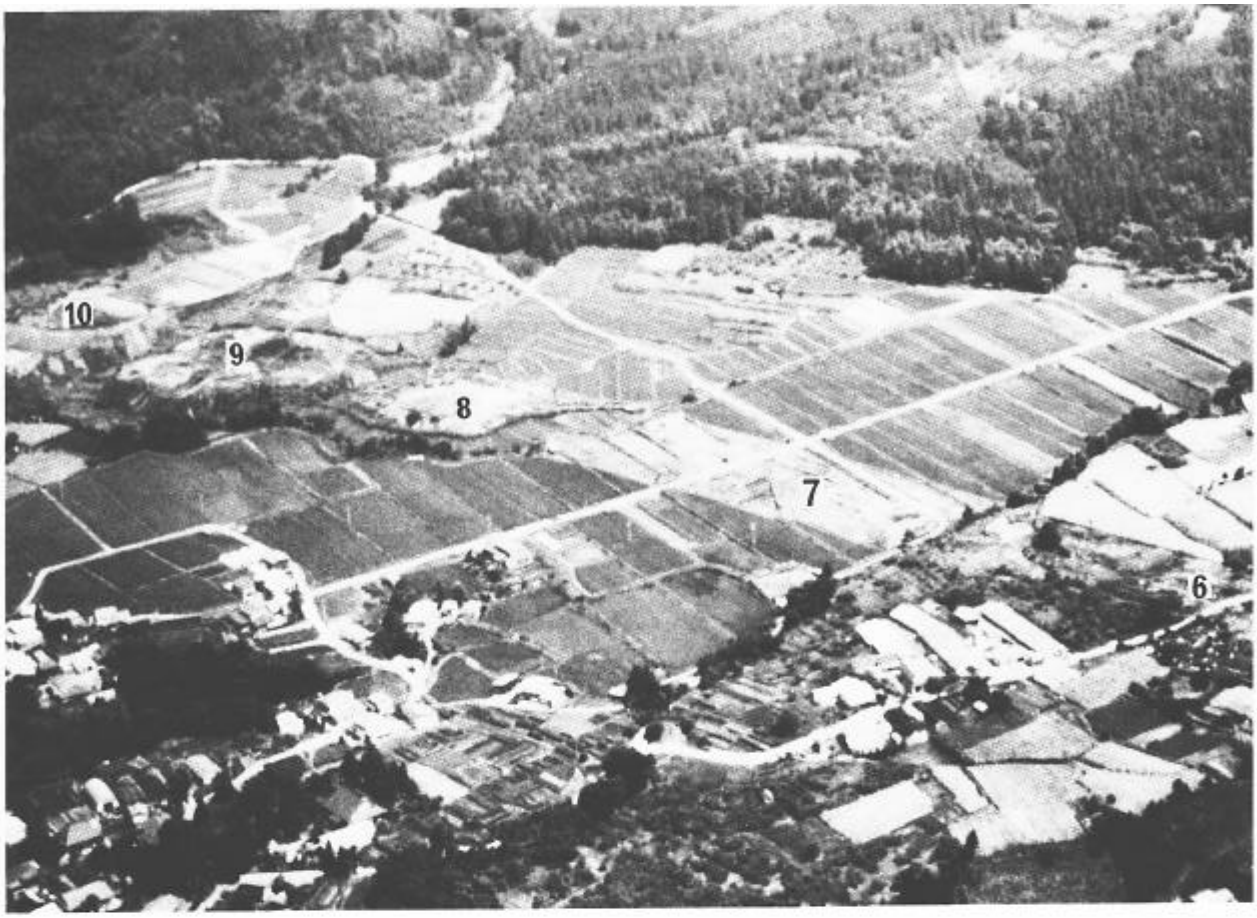
2－a．平面形は楕円形でやや深さのあるもの……ＳＫ005。

2－b．平面形は楕円形であまり深さのないもの……ＳＫ008、**013**。

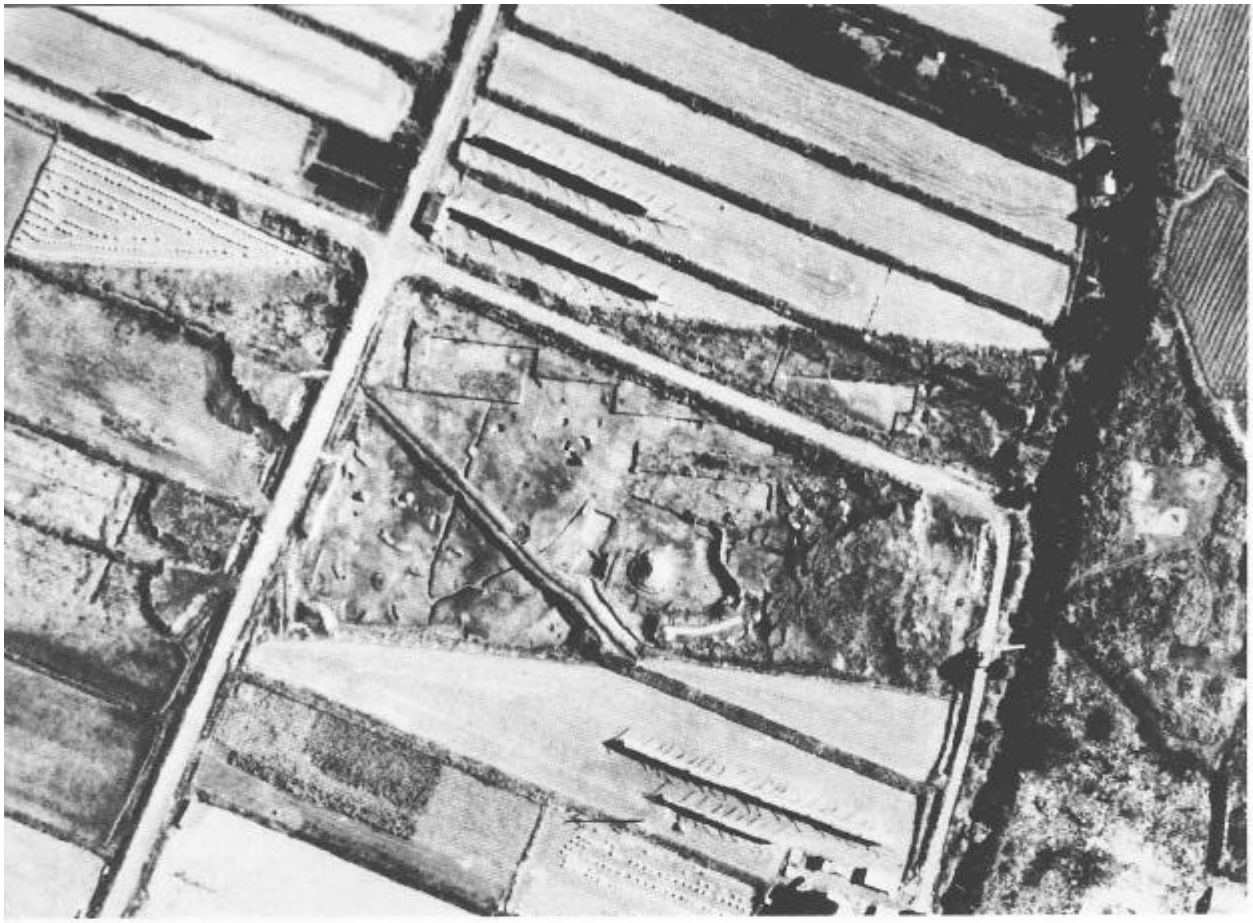
3. 平面形が不定形のもの……ＳＫ015、020、**026**、030。

ゴシック体にしたものが遺物を出土した土壙であるが、各タイプと遺物の伴出関係はないようだ。

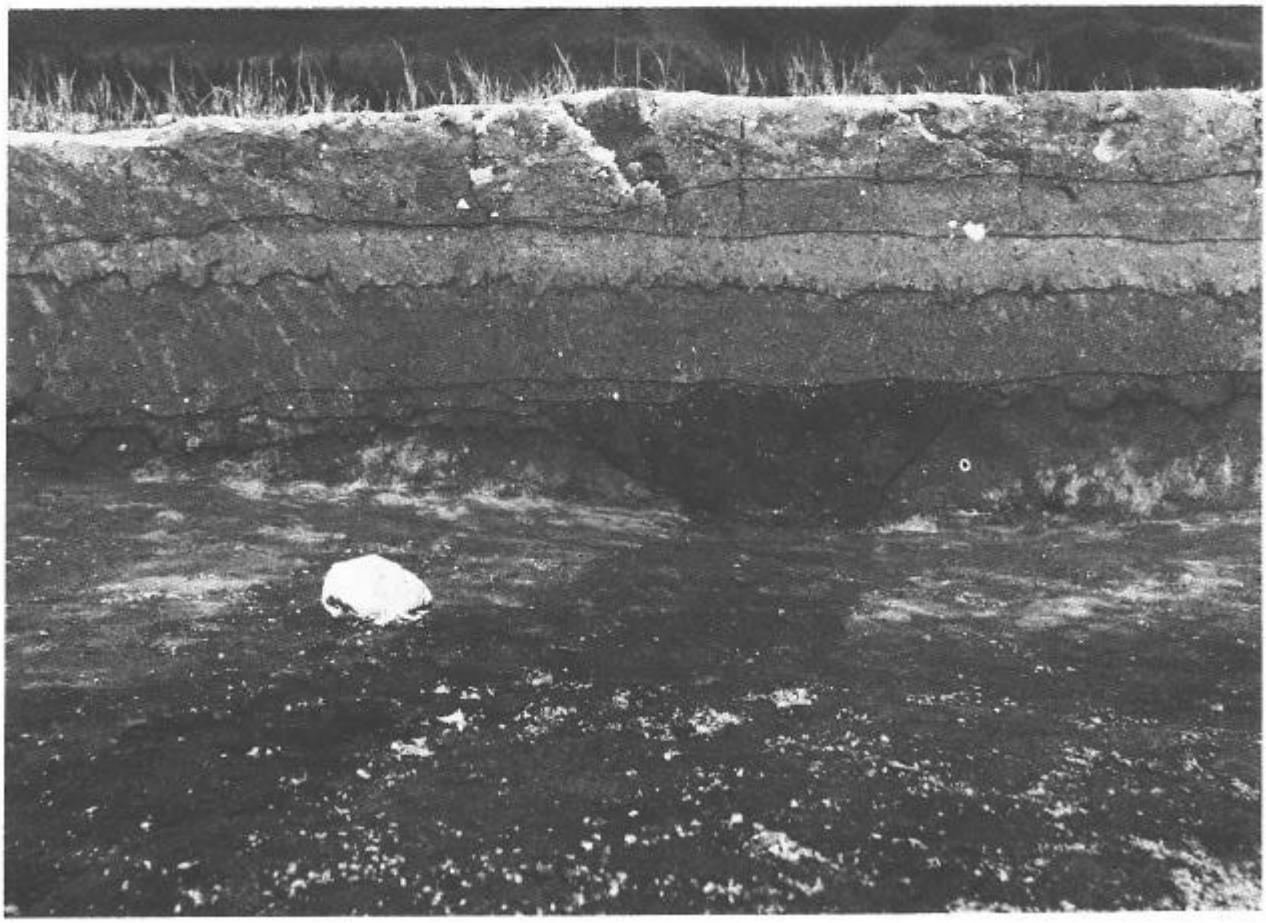
溝は4条検出されているが、西側部分はいずれの溝も共有しており、ほぼ同じ目的に使用されたものと思われる。遺跡東側にある江戸～明治時代の開田の際の溝に切られており、この時期より古いことがわかるが、時期を確定づけることはできなかった。また北約2.7㎞の中の崎遺跡から平安時代の住居跡に伴う溝が検出されており、形態に共通点も多いが、当遺跡の溝ははじまりも終わりの部分も路線外のため不明で、その性格をつかむことはできなかった。



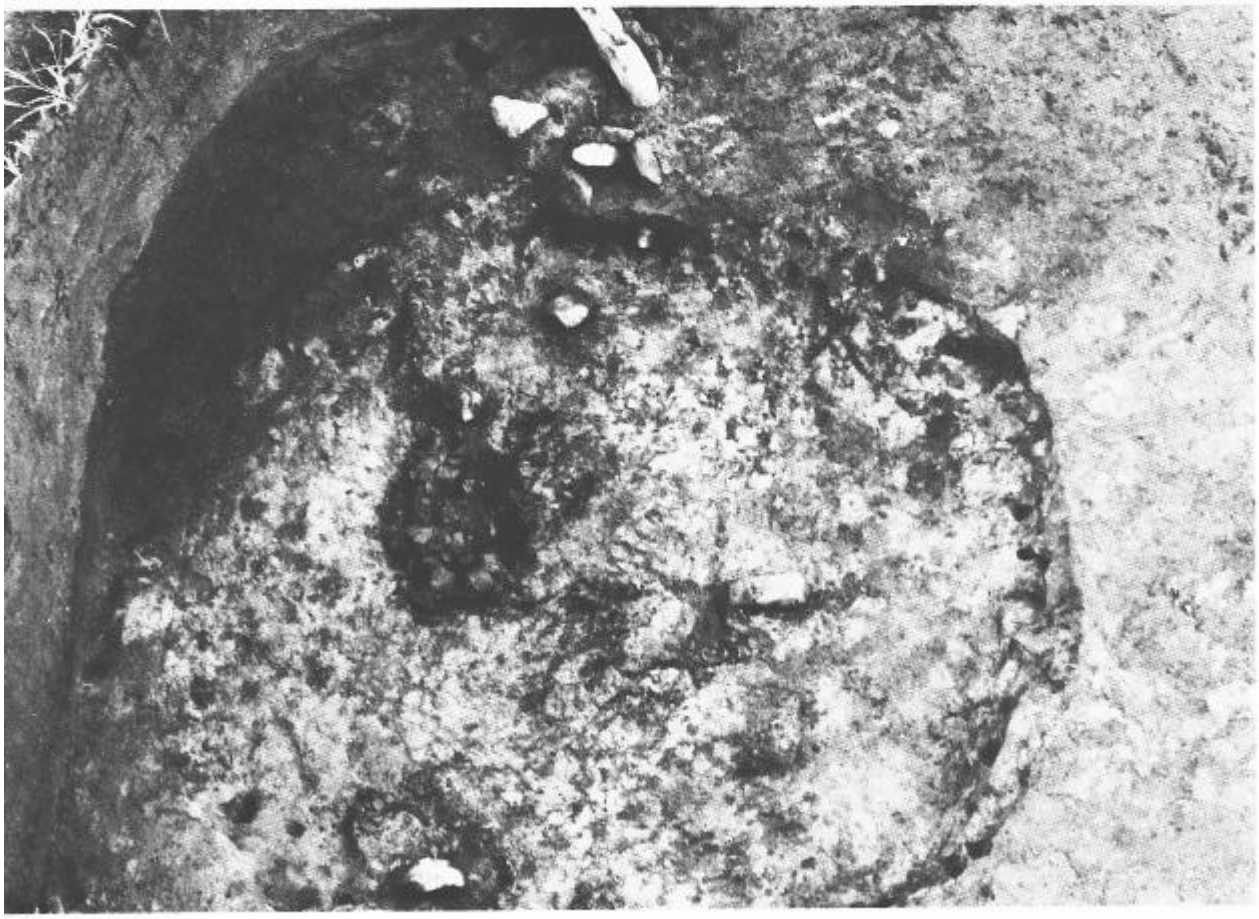
図版1　鳥居平遺跡遠景　（上）　6：歌内　7：鳥居平　8：飛鳥平　9：北の林Ⅰ　10：北の林Ⅱ
（西▶東）
（下）　調査前　（東▶西）



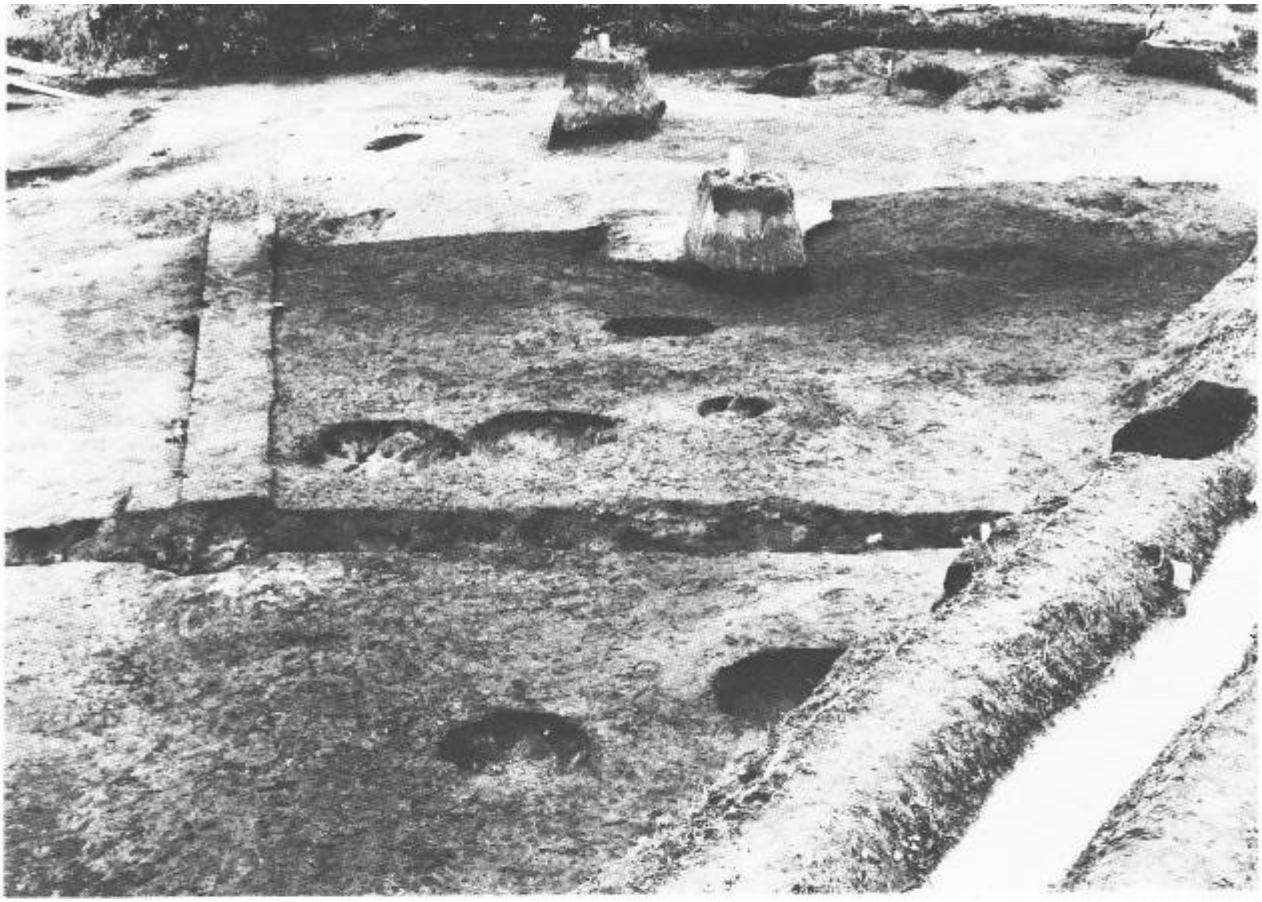
図版２　（上）　鳥居平遺跡遠景　調査終了時　（下が西）
　　（下）　鳥居平遺跡近景　（南▶北）



図版 3　（上）　鳥居平遺跡近景　（北▶南）
　　（下）　地 層 図　（西▶東）

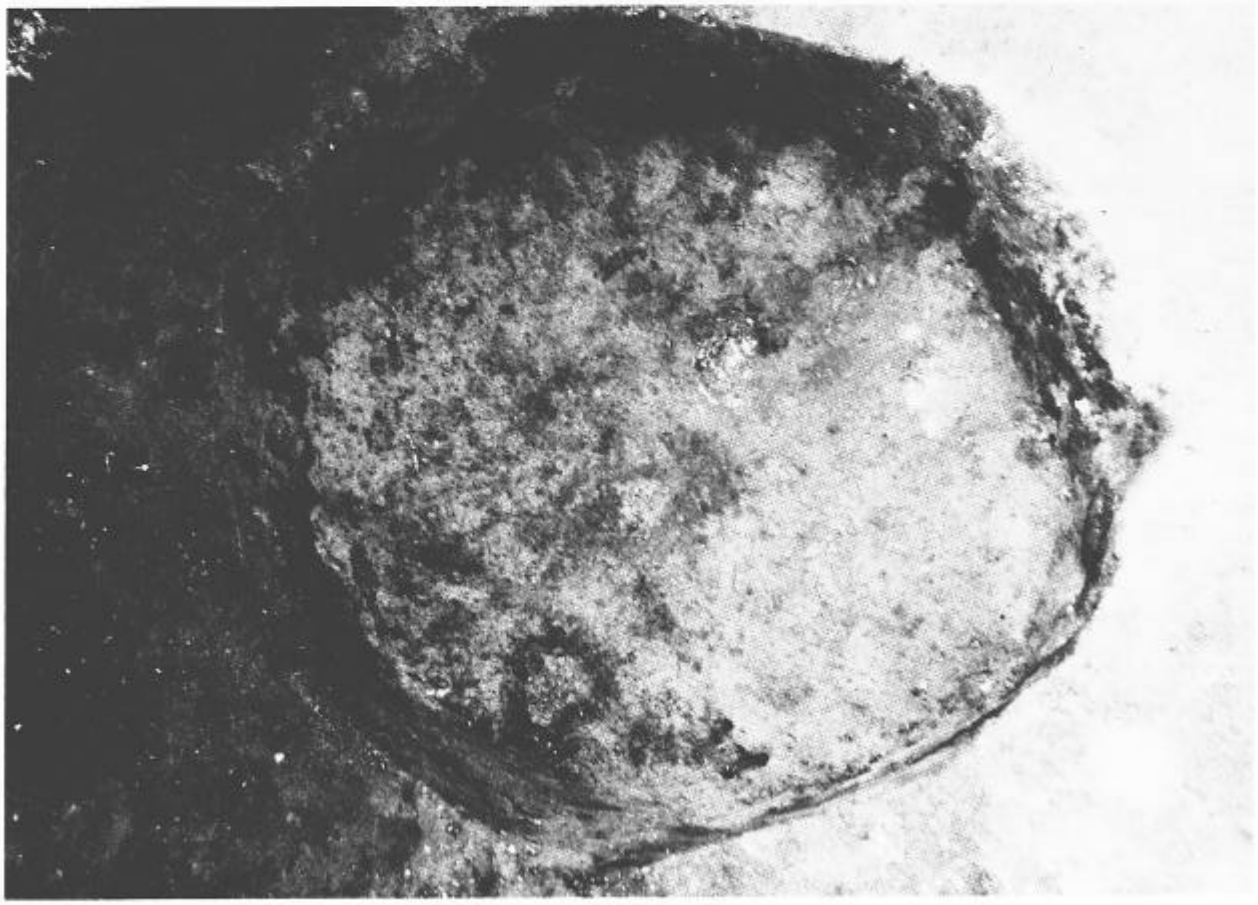


図版4　SI 029 竪穴住居跡　（上）　遺構確認面　（南▶北）
（下）　掘り下げ後　（南▶北）



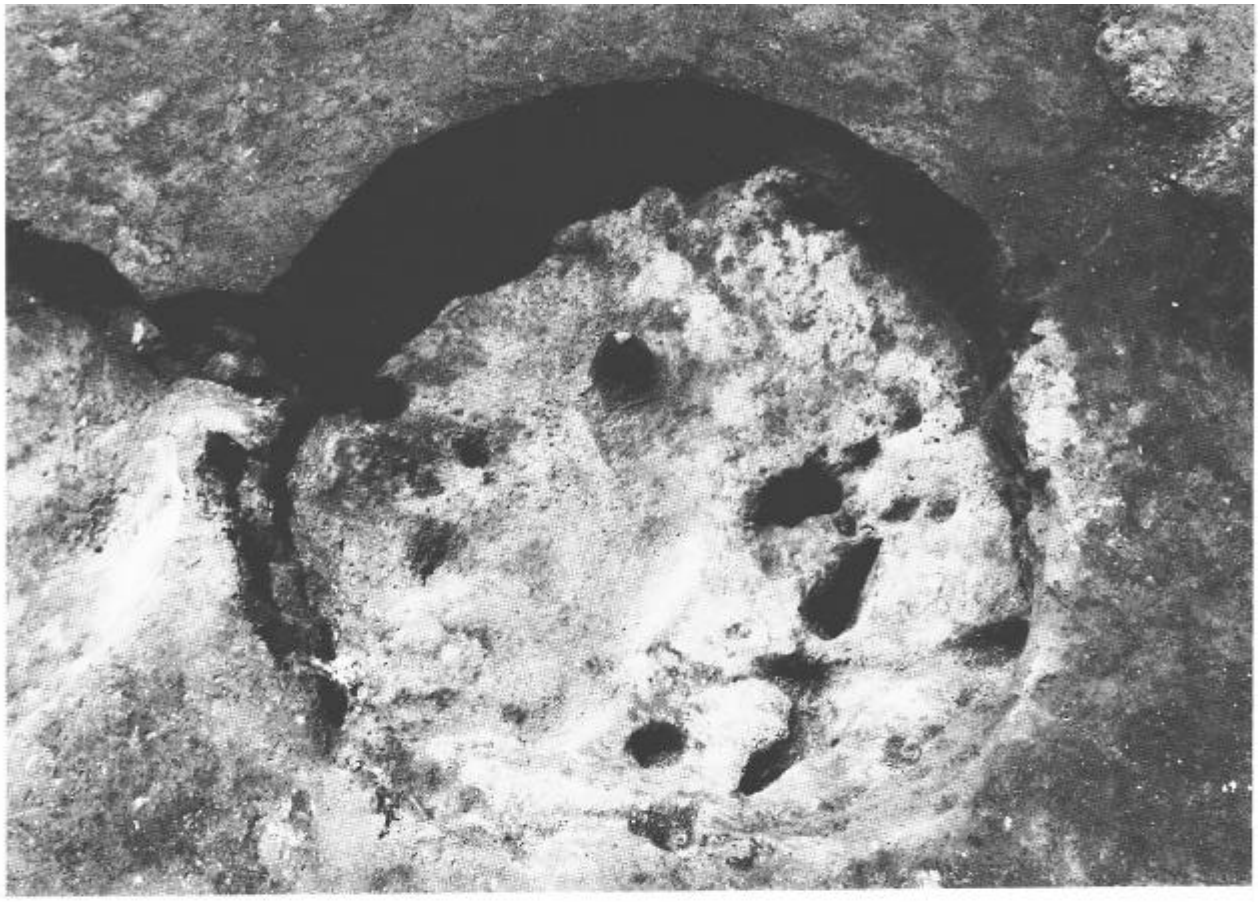
図版5　（上）　土壙近景　（南▶北）
　　（下）　土壙近景　（北▶南）

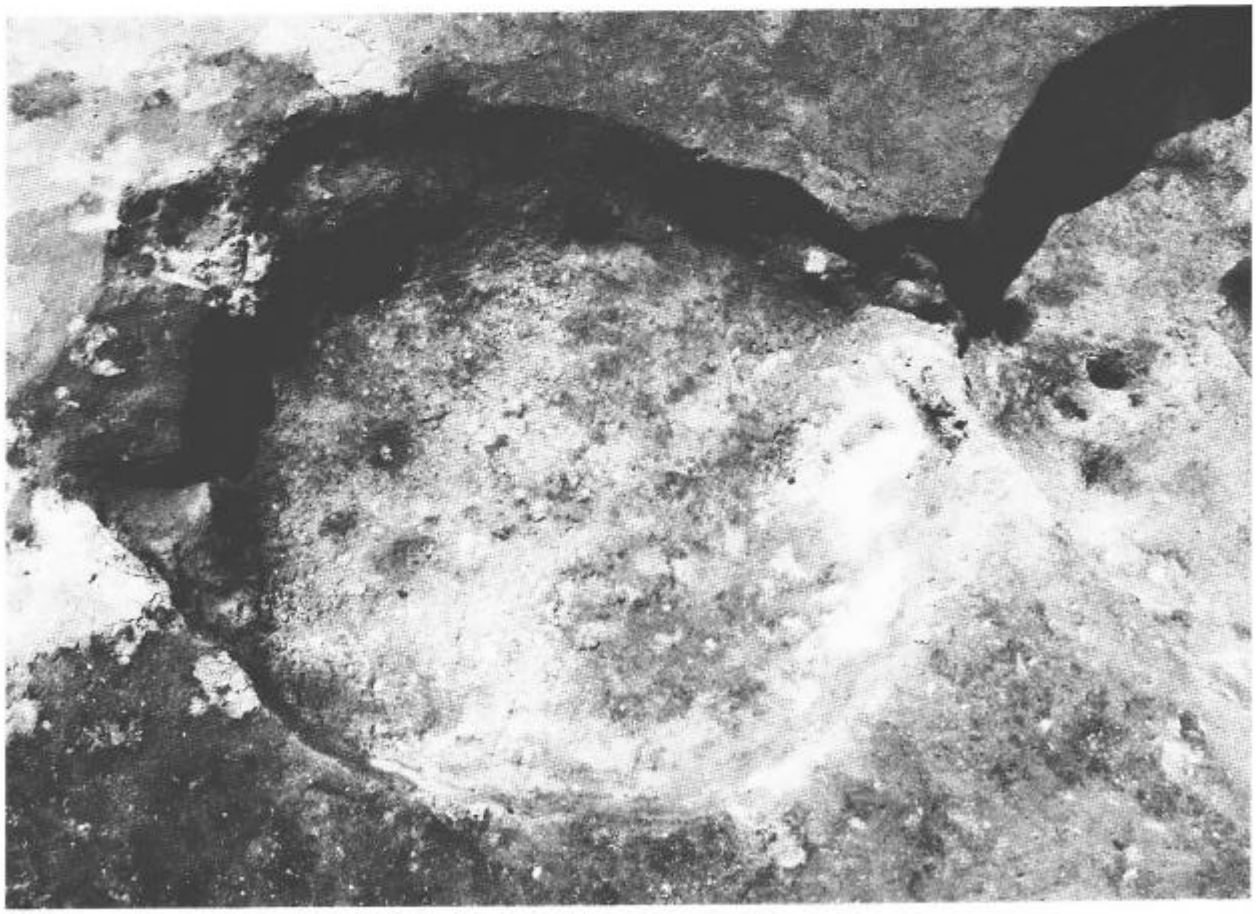
図版6　（上）　ＳＫ005 土壙　（南東▶北西）
　　（下）　ＳＫ009 土壙　（南▶北）



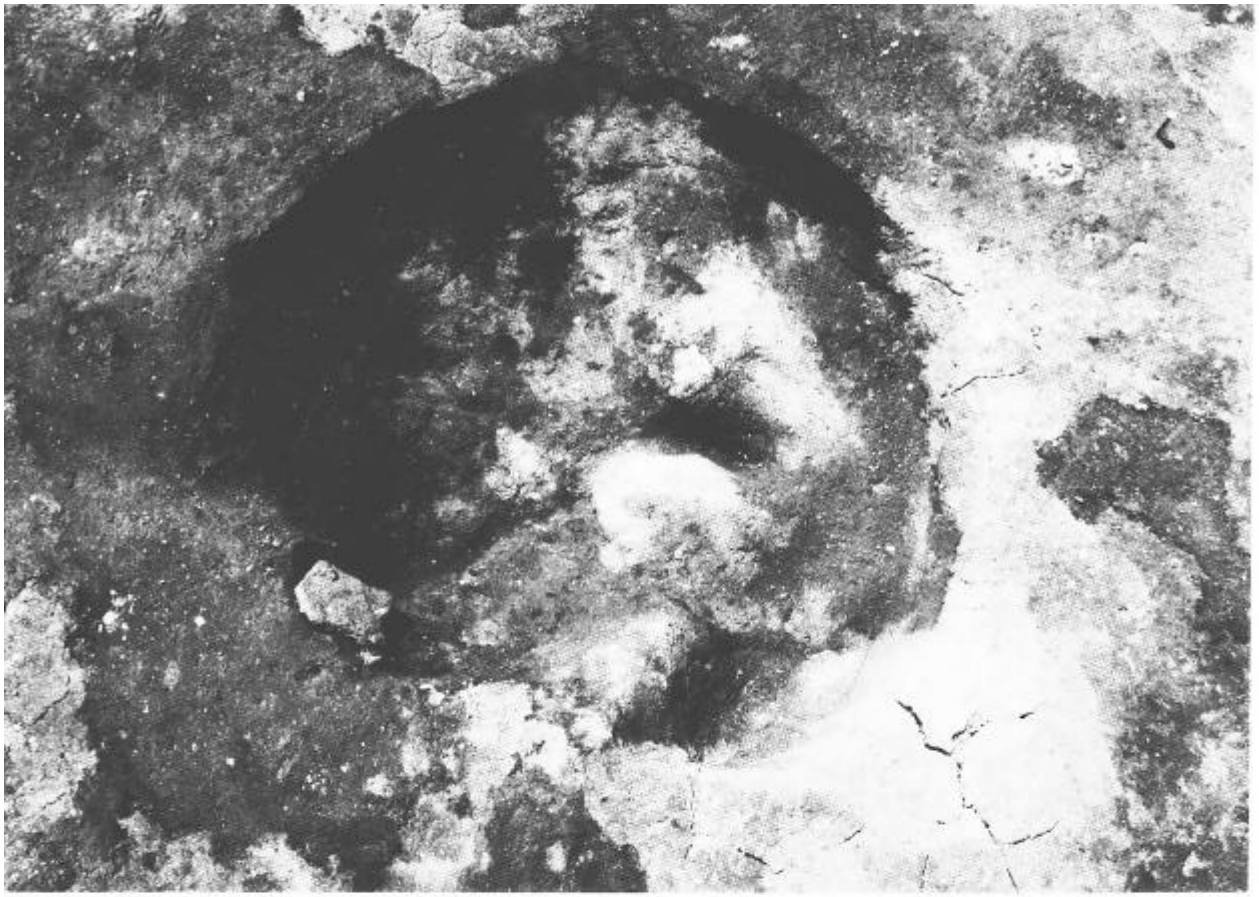
図版7　（上）　SK013土壙　（南▶北）
　　（下）　SK014土壙　（北▶南）

図版 8　（上）　ＳＫ017 土壙　（北▶南）
　　（下）　ＳＫ020 土壙　（北▶南）

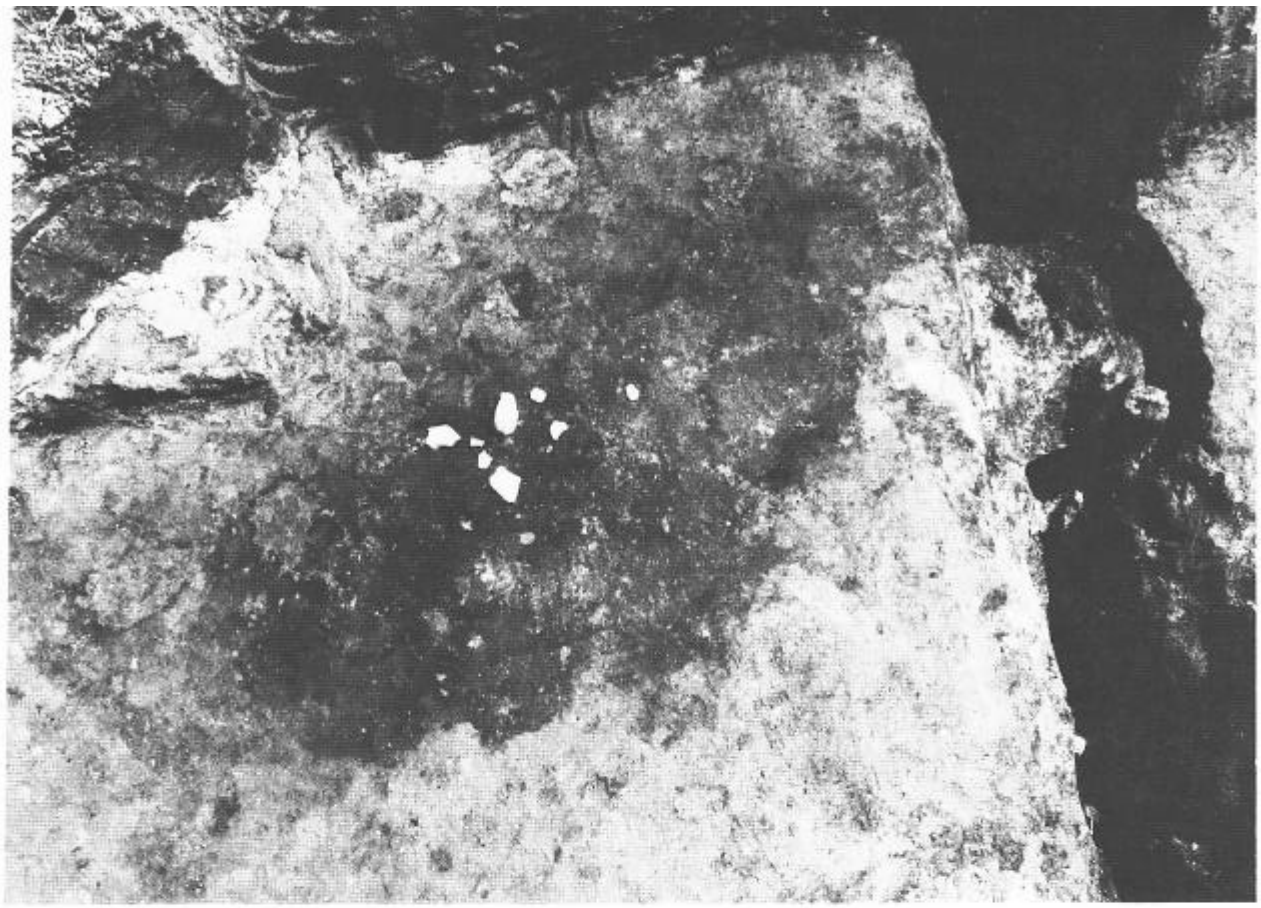




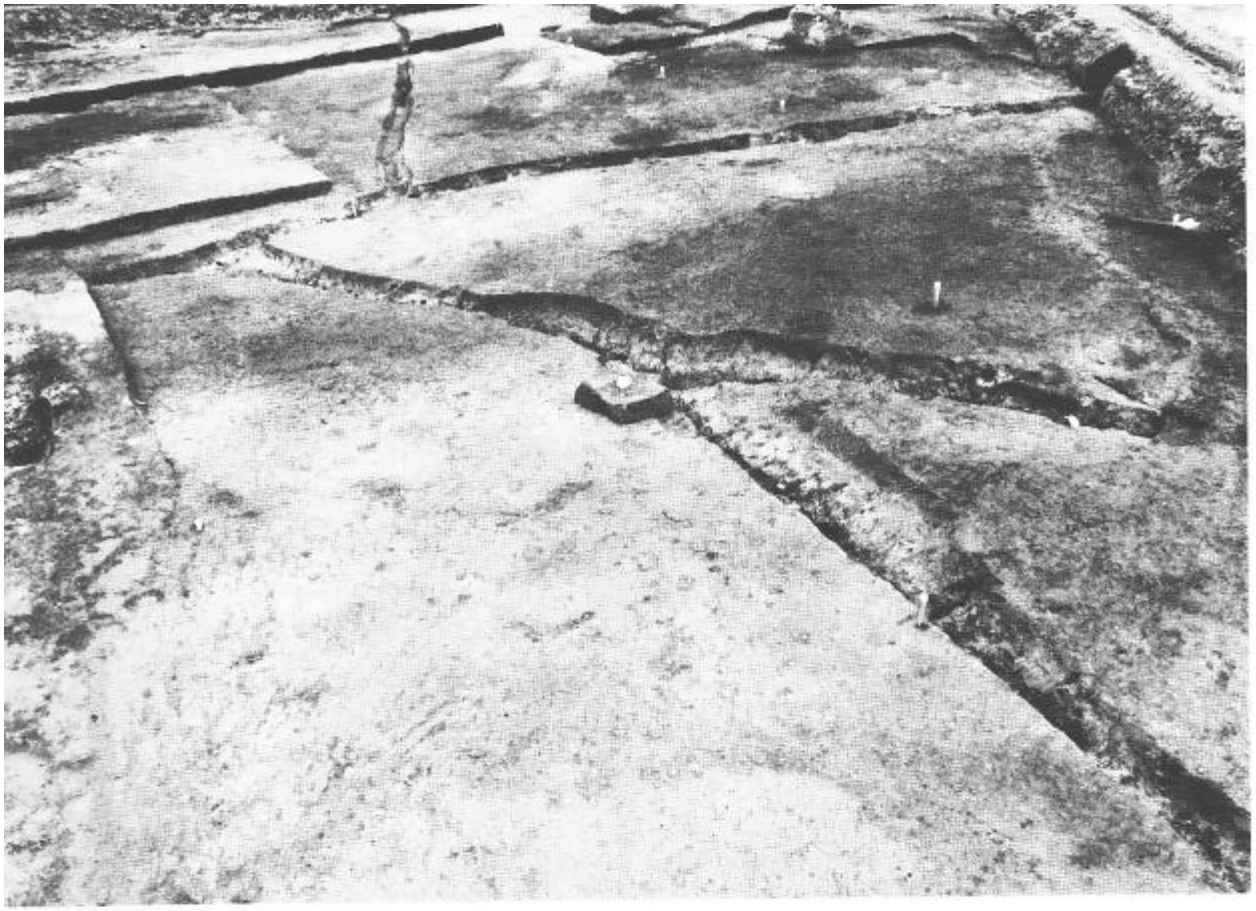
図版 9　（上）　ＳＫ021 土壙　（北▶南）
　　（下）　ＳＫ022 土壙　（北▶南）



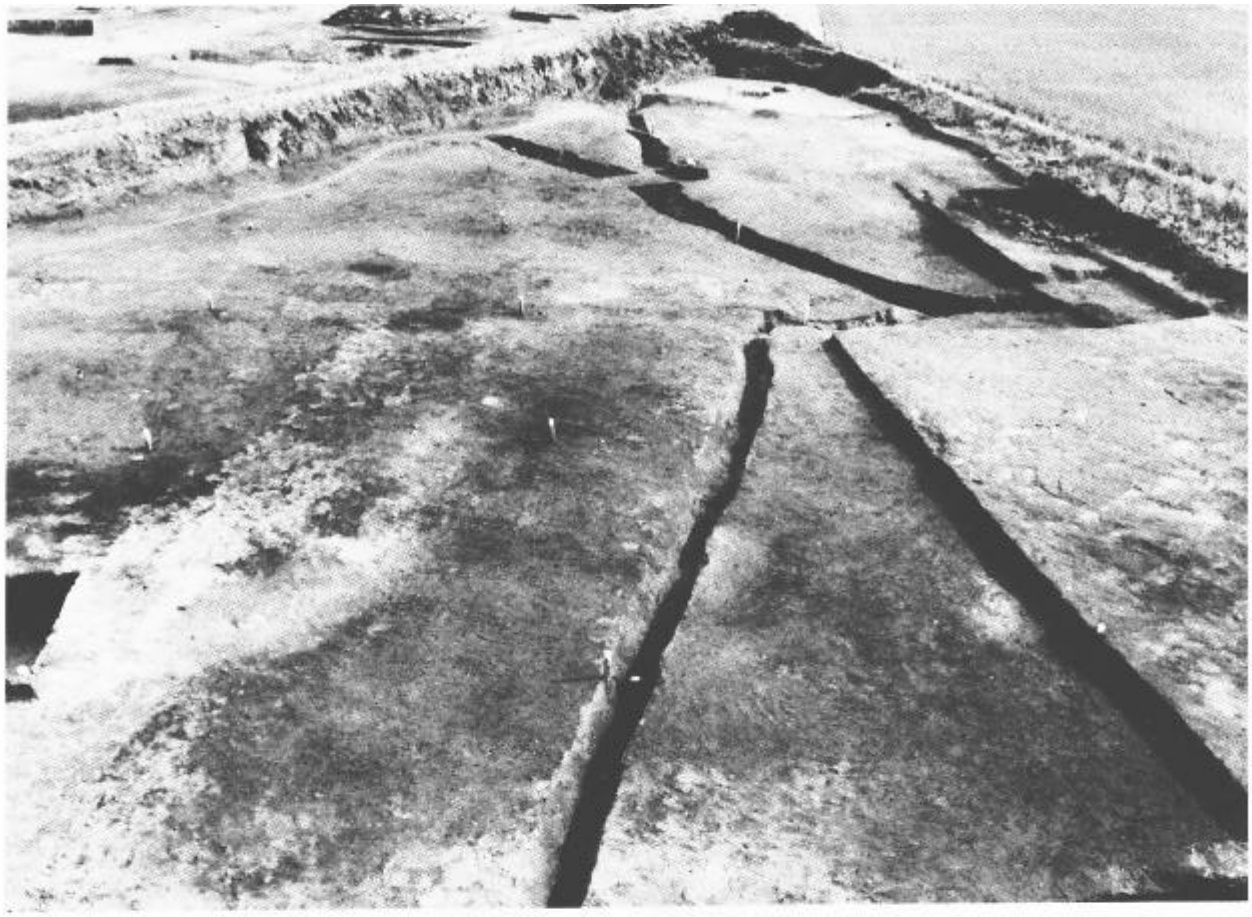
図版10　（上）　ＳＫ023 土壙　（北▶南）
　　（下）　ＳＫ025 土壙　（北▶南）

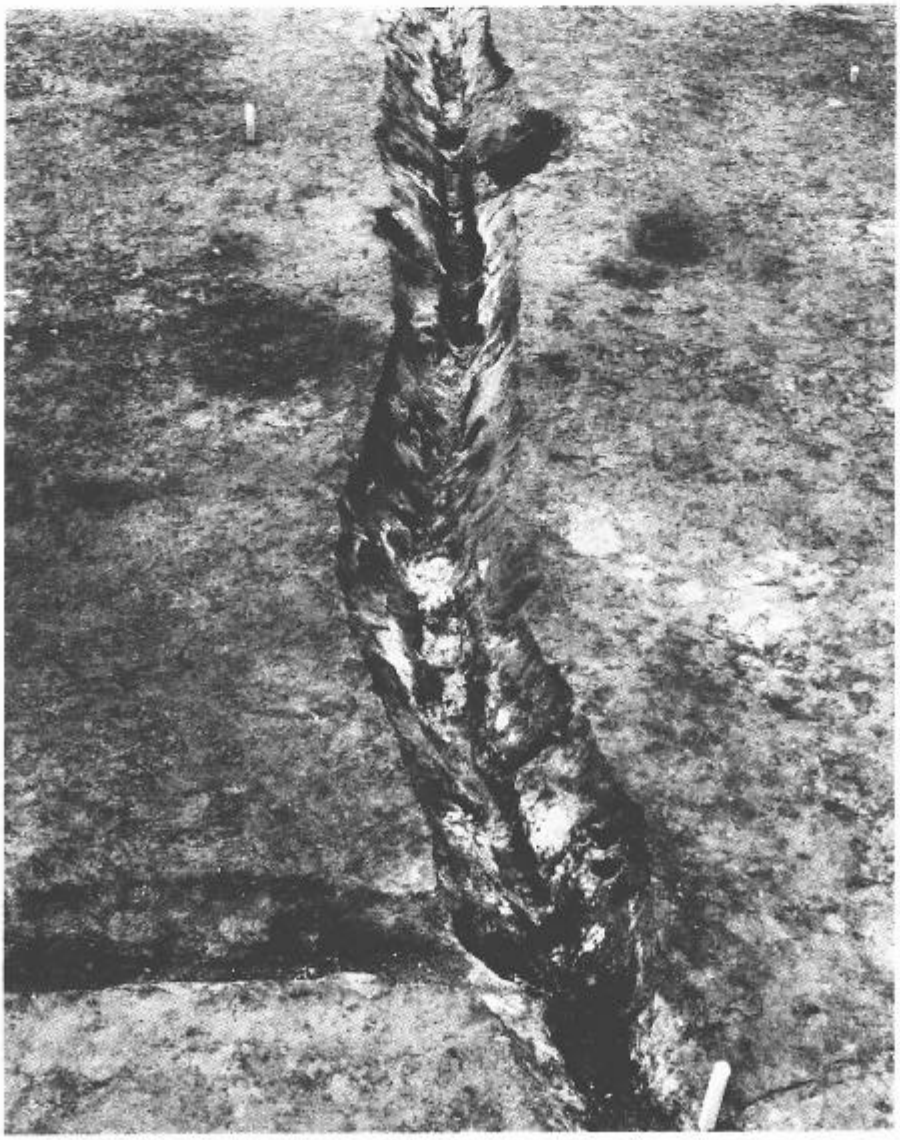


図版11　（上）　ＳＫ026 土壙　（北東▶南西）
　　（下）　発掘調査風景　（北▶南）



図版12　（上）　溝 遠 景　（南▶北）
　　（下）　ＳＤ002 溝　（北▶南）



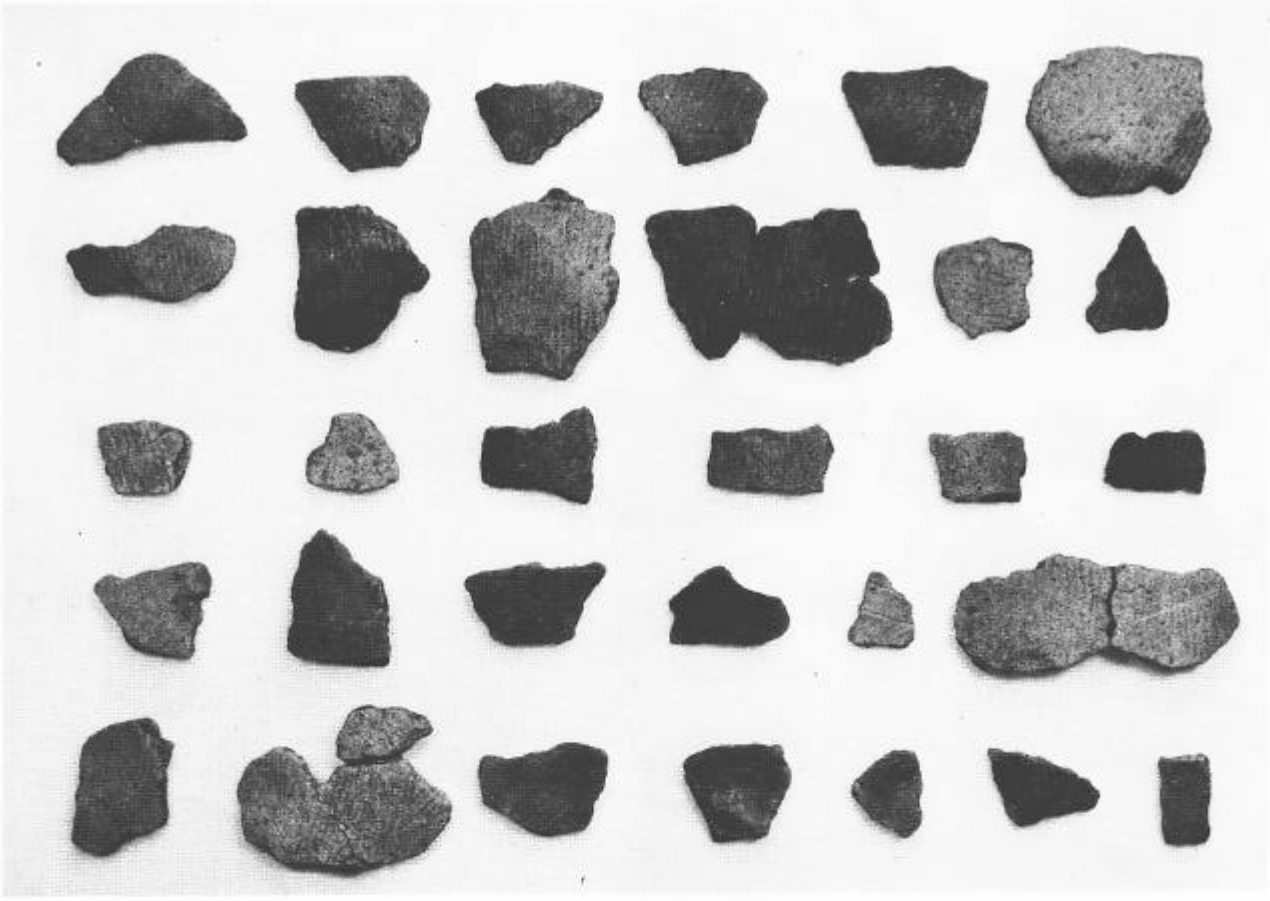


図版13

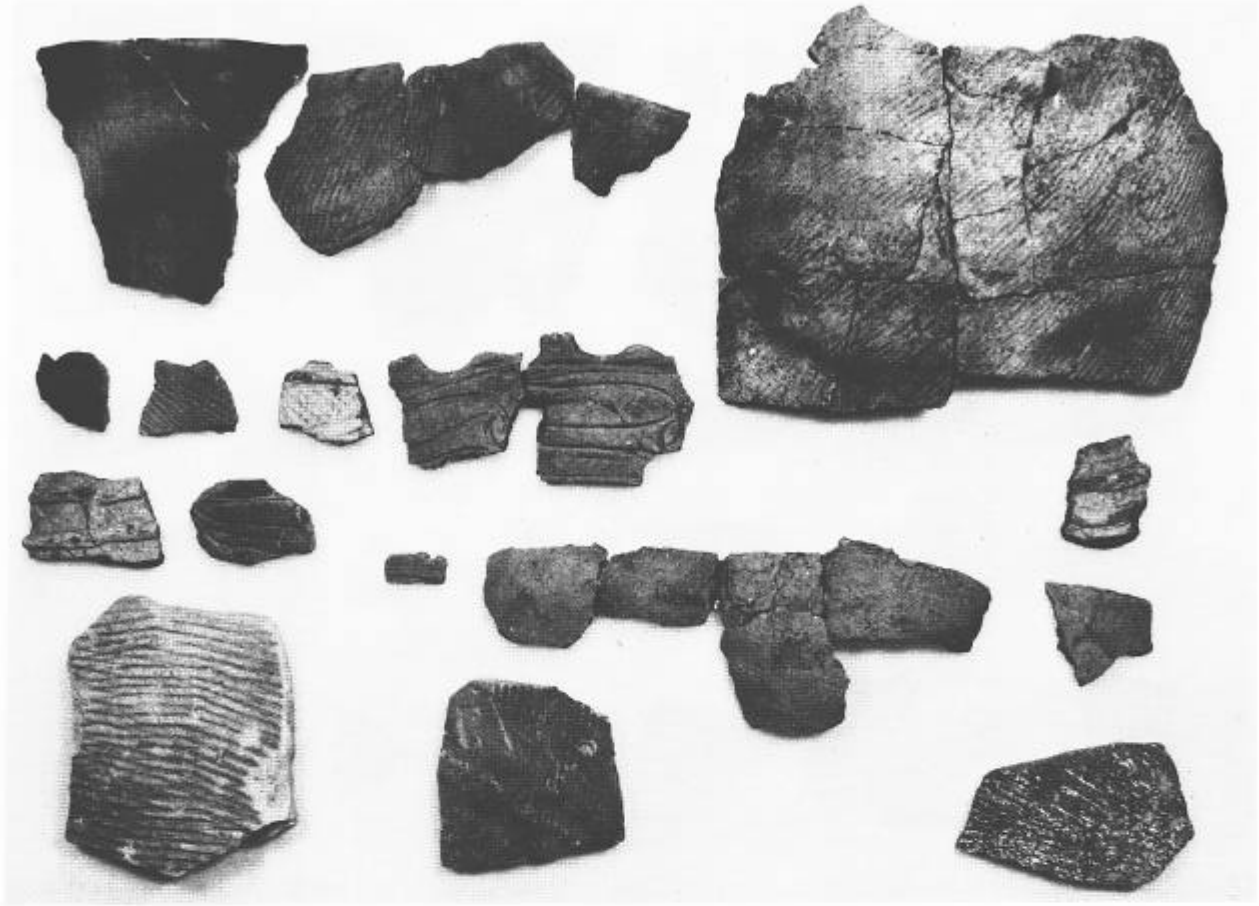
（上）　SD003 溝
（北▶南）

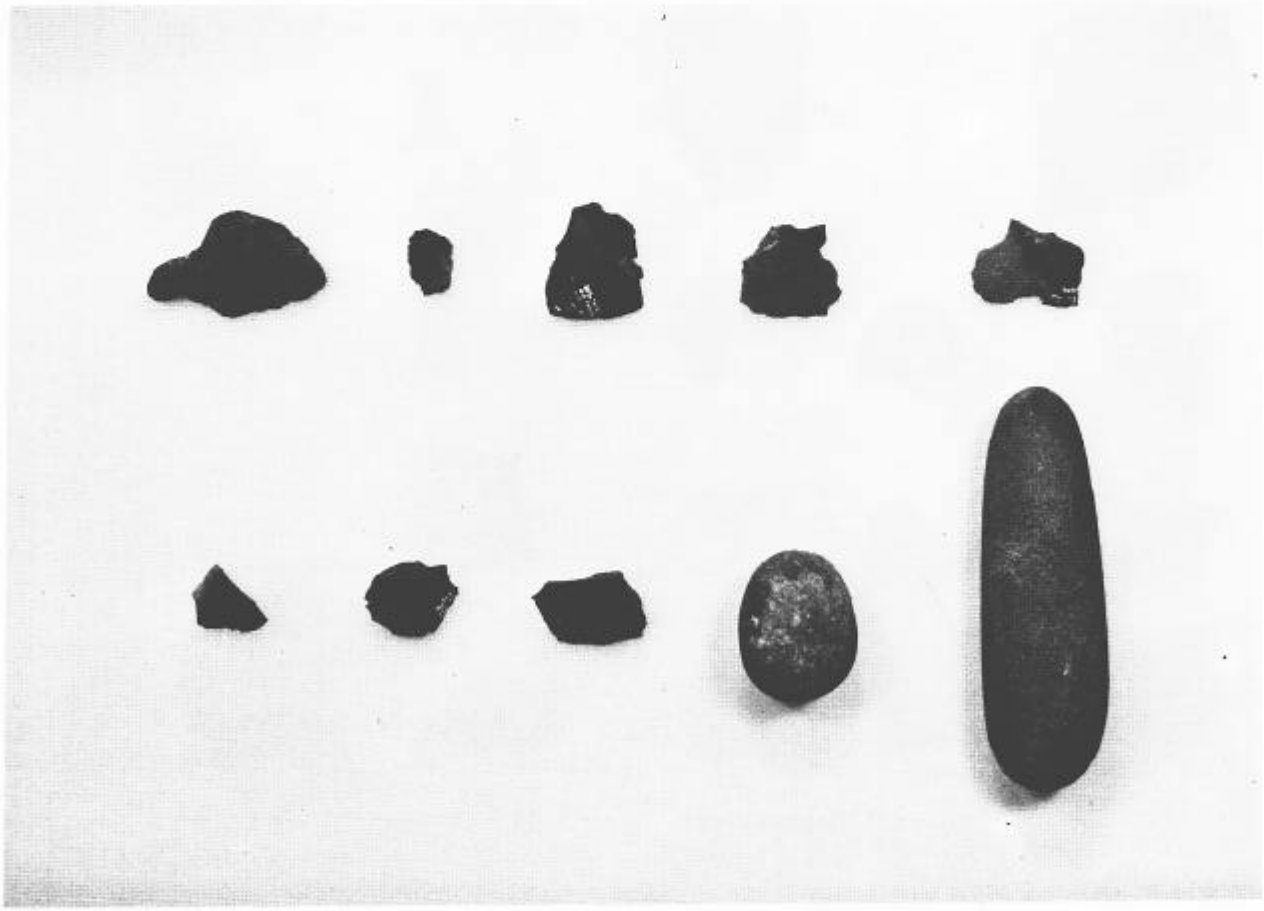
（下）　SD007 溝
（西▶東）

図版14　SI 029竪穴住居跡出土土器



図版15　（上）　ＳＫ013 土壙出土土器
　　（下）　ＳＫ017，021，026 土壙出土土器





図版16　（上）　遺構外出土土器
　　（下）　遺構外出土石器

飛鳥平遺跡

遺跡番号　No.8

所在地　鹿角市八幡平字飛鳥平14番地他

調査期間　昭和55年4月15日～10月1日

発掘予定面積　3,000㎡

発掘調査面積　3,425㎡

1. 遺跡の概観

(1) 遺跡の立地と環境

飛鳥平遺跡は秋田県鹿角市八幡平字飛鳥平14番地に所在する。国鉄花輪線陸中大里駅の東方約1.0㎞、米代川の中位段丘上に位置する。この段丘上には沢がいくつも走っており、北隣りの北の林Ⅰ、南隣りの鳥居平遺跡との境は沢により区切られている。この中位段丘面上は遺跡も豊富である（Ⅱ遺跡の立地と環境　第3図周辺遺跡分布図参照）。遺跡は台地縁辺部の一部に削平をうけたところもあるものの比較的残りがよい。遺構は縁辺部の標高203m前後のところに多く存在する。

(2) 遺構の分布

飛鳥平遺跡は、数回の耕地整理にもかかわらず、台地縁辺部は原地形をとどめたところも多かった。このため、ＳＩ004、013など一部を除いて、ほぼそれらが営なまれていた頃の生活面に近いところで遺構の有無が確認された。しかし、黒褐色土上面で、平面プランを確認するのは極めて困難だったため、地山上面まで掘り下げて検出したり、周溝から推定してプランを出したものも多かった。

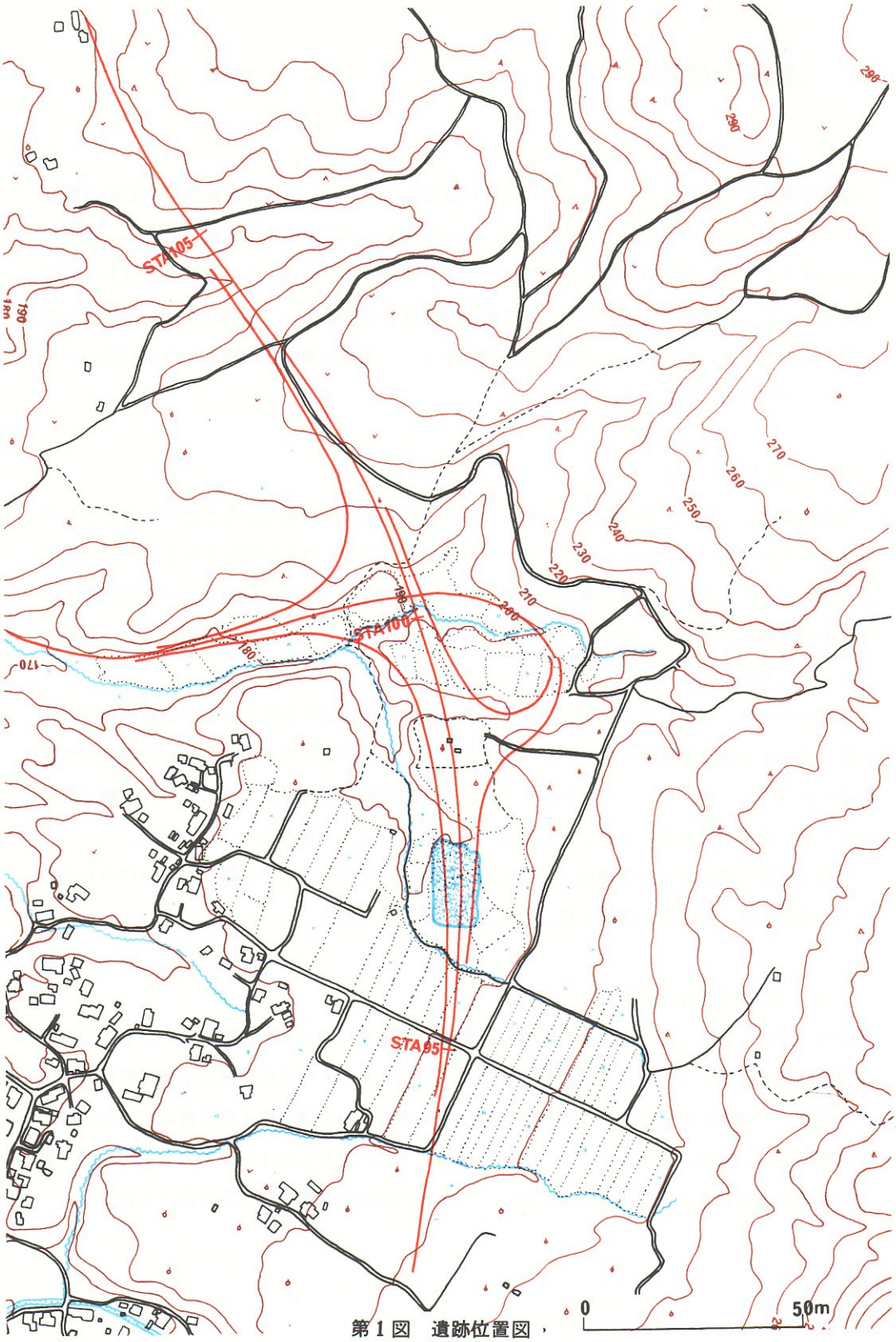
遺構の分布は、縄文時代の竪穴住居跡、埋甕等は台地縁辺部に存在する。平安時代の竪穴住居跡も分布する幅が縄文時代のそれより広いが、概して縁辺部に分布する。遺跡の中央やや東南寄りからピット群が検出されたが、柱列、掘立柱建物跡などは確認できなかった。縁辺部においては、遺構の切り合いも激しく、数棟の住居跡や数基の土壙が切り合っている。

飛鳥平遺跡で検出された遺構は、竪穴住居跡13棟（縄文時代のもの5棟、平安時代のもの8棟）、埋設土器2基、焼土遺構1基、土壙22基、溝1条である。

(3) 遺物検出状況

飛鳥平遺跡において出土した遺物の量は、整理箱で25箱程度と多い方ではない。しかし、縦貫道路線内の遺跡としては、遺構の数と比べて多い方である。竪穴住居跡内では比較的多く出土するが、土壙内においては、土器埋設土壙が2基あるものの遺物出土量は極めて少ない。

遺構外においては、数か所まとまって、投げ棄てられた状態で出土したものもあったが、復元できるものはほとんどなかった。しかし、9－H付近からは量的には多く出土した。


STA105
STA100
STA95
190
180
170
200
210
220
230
240
250
260
270
280
290
0
50m

第1図　遺跡位置図

2. 調査の方法

飛鳥平遺跡は、昭和54年度の範囲確認調査により、道路予定線内のほぼ全域約 3,000 ㎡が遺跡と推定された。

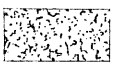
調査は、５ｍ×５ｍのグリッド法により随時拡張していく事としたが、その基線の定め方、及びグリッドの名称のつけ方は以下のとおりである。

遺跡付近の日本道路公団の施設した道路中心基準杭ＳＴＡ96とＳＴＡ97を結ぶ線を南北基線と定めた。この基線をＧラインとし、西に行くにしたがって、５ｍ毎に、アルファベットが進むものとした（西←……Ｉ、Ｈ、Ｇ、Ｆ、Ｅ……→東）。南北基線は磁北に対して約13° 50′偏東している。また、東西基線はＳＴＡ97において南北基線と直交させた。この南北基線を11ラインとし、北に行くにしたがって、５ｍ毎に、数字が増えることとした（北←……12、11、10、９……→南）。各グリッドの名称はこれらの基線の東南隅の交点における数字とアルファベットの組み合わせにすることとした（10－Ａ、９－Ｂ……）。

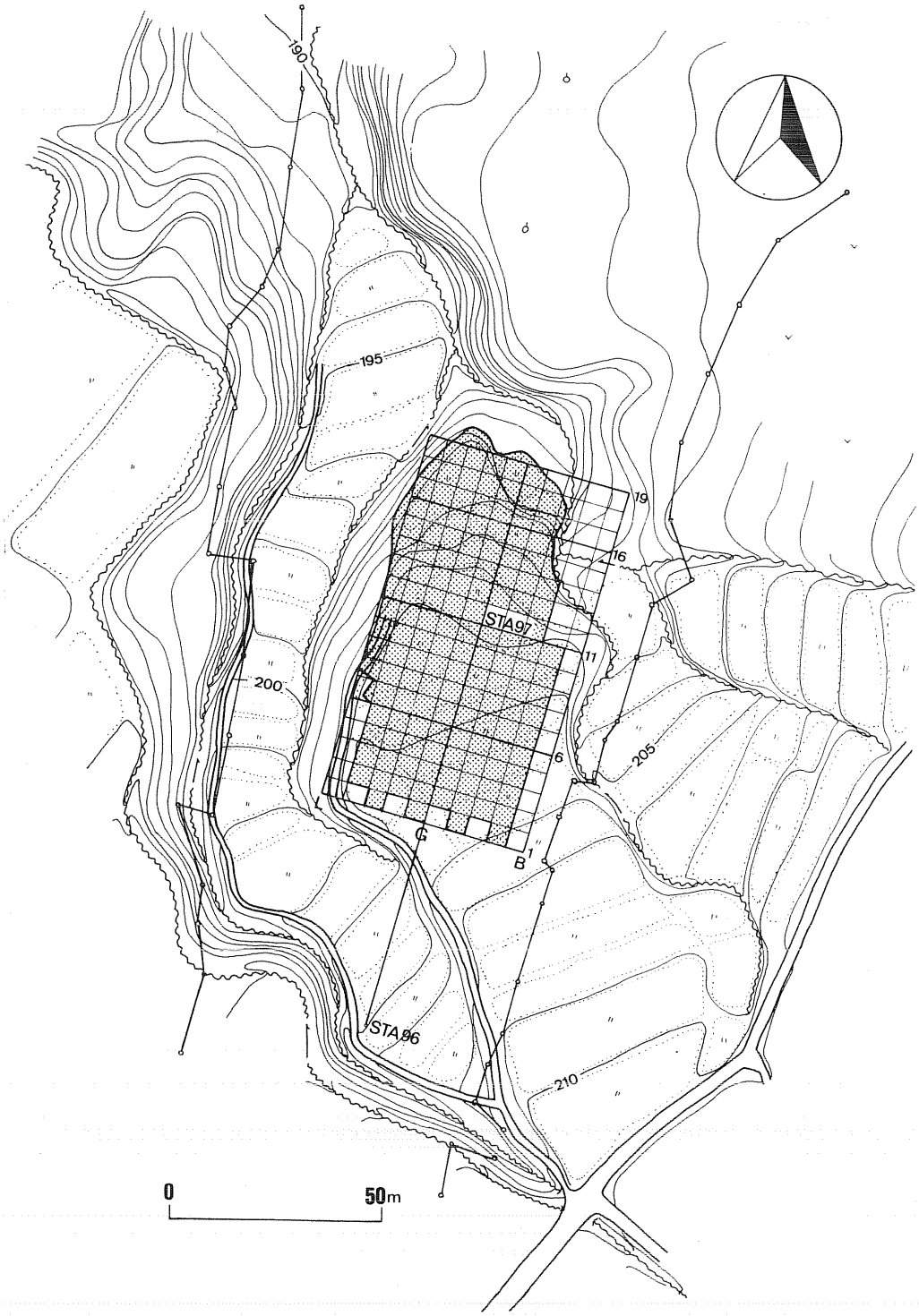
遺構の実測は、遣り方測量を用いて原則としてＳ＝1/20で行った。竪穴住居内のカマド、石囲炉、埋甕などは必要に応じてＳ＝1/10で行った。また、全体の遺構配置図を航空測量により行い、20㎝の等高線で地形図も作成した。

原則として、報告書に使用した遺構の実測図はＳ＝1/40、カマド・埋甕等はＳ＝1/20に統一した。原則として土器実測図はＳ＝1/2、土器拓影図はＳ＝1/3、石器実測図はＳ＝1/2に統一した。遺物の写真図版はＳ＝1/2と1/3に統一した。

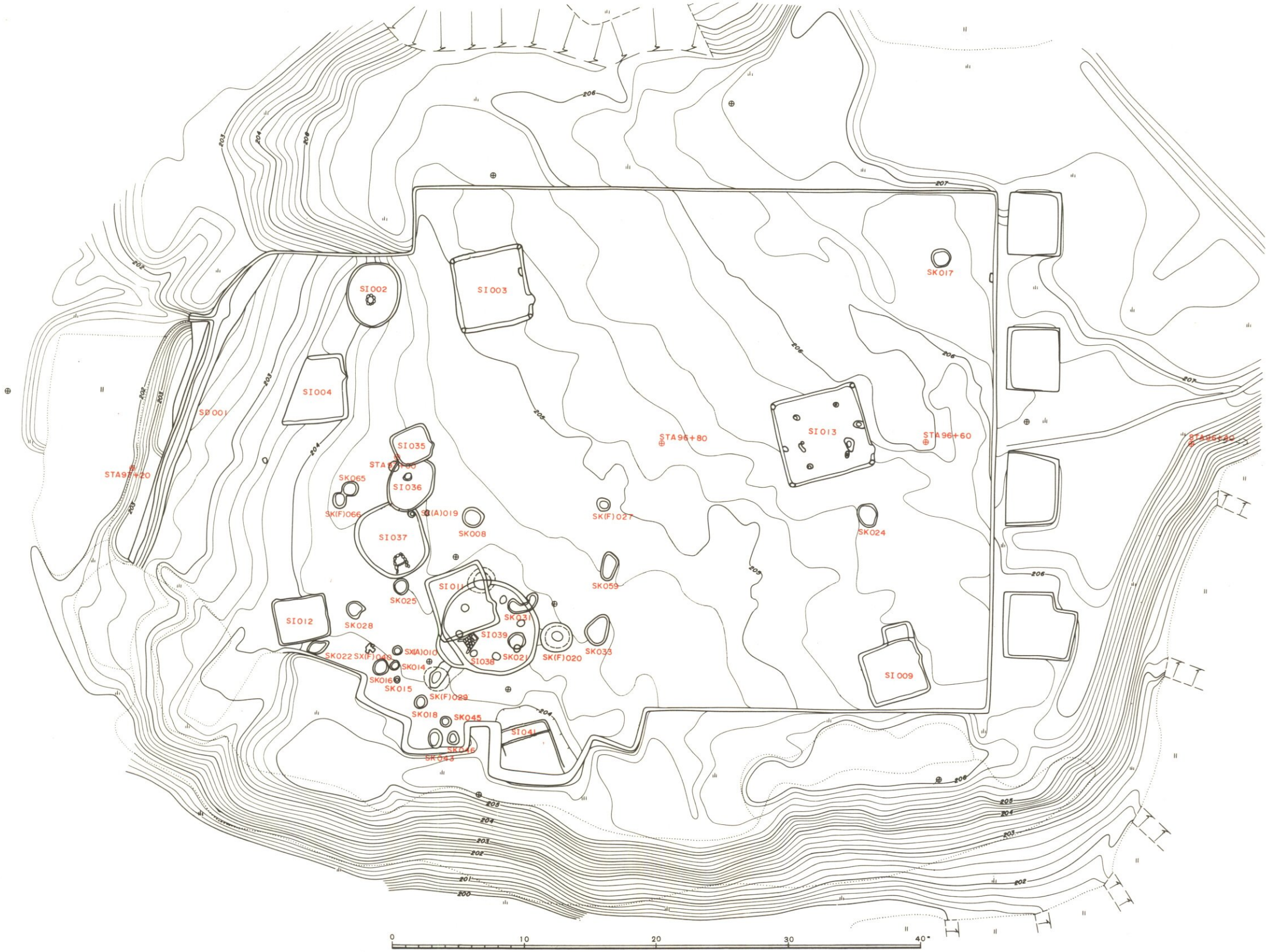
実測図中のスクリーントーンは下のとおりである。

焼土、

炭化物、

地山



第2図　グリッド配置図


SI002
SI003
SI004
SI001
SI035
SI036
SI037
SI011
SI012
SI039
SI038
SI041
SI013
SI009
SK017
SK065
SK(F)066
SK(A)019
SK008
SK025
SK028
SK022
SX(F)023
SX(A)010
SK014
SK016
SK015
SK(F)029
SK018
SK045
SK046
SK043
SK031
SK021
SK(F)020
SK033
SK059
SK(F)027
SK024
STA96+20
STA96+40
STA96+80
STA96+60
STA96+40
206
207
205
204
203
202
201
200
0
10
20
30
40m

第3図　遺構配置図

3. 調査の経過

飛鳥平遺跡は昭和55年４月15日から10月１日にわたって、発掘調査が行われたが、調査の全般的な経過は次のとおりである。

本調査にはいる前に、昭和54年度に飛鳥平遺跡の範囲確認調査を行った。調査は昭和54年11月19日から、数本のトレンチを入れる方法ではじめた。その結果縄文中・後期の土器、土師器、須恵器破片が出土した。

鳥居平遺跡と飛鳥平遺跡を併行して調査する予定のため、両遺跡のほぼ中間にプレハブを設置することとし、昭和55年４月15日その作業を行った。その後、一旦、調査を急ぐ必要のある駒林遺跡に応援に行き、22日から飛鳥平遺跡の本格的発掘調査を開始した。

23、24の両日で業者によるグリッド設定を終え、遺跡北側の低い面から調査にはいった。しかし、遺跡北側の面は開田のさい削平されており、遺物も縄文と平安のものが混在して出土するという状態であった。その後、序々に南側へと表土剝ぎ区域を拡大していった。範囲確認調査で予想されていたとおり、中央の台地上は、遺物が多く出土する。

５月７日、遺跡北側の14－Ｇから溝状の遺構を検出、ＳＤ001とした。19日には、その南側に円形プランのＳＩ002と方形プランのＳＩ003を検出し、精査にはいった。遺構の検出順に遺構番号を付すこととし、その後遺構でないと認められたものはそのまま欠番とした。６月６日に、10－Ｊにおいて土器埋設遺構が検出された。これをＳＸ010とする。縄文時代後期のものと思われる。７月11日から、遺構が重複しているとみられた、10－Ｈ周辺の掘り下げにはいる。その結果、３棟の住居跡であることが確認された（それぞれＳＩ035～037とした）。また、８月18日から、ＳＩ011と重複しているとみられた箇所の精査を開始し、住居跡、土壙等を検出した（ＳＩ038、039、ＳＫ020とした）。南側へと検出区域を広げて行き、２棟の住居跡（ＳＩ009、013とした）、数個のピット群（柱列、建物跡とはならなかった）等を検出した。９月13日までには、ほとんどの遺構の実測等を終了し、９月16日に遺跡全景の写真撮影を行い、一旦遺跡の調査を終了した。

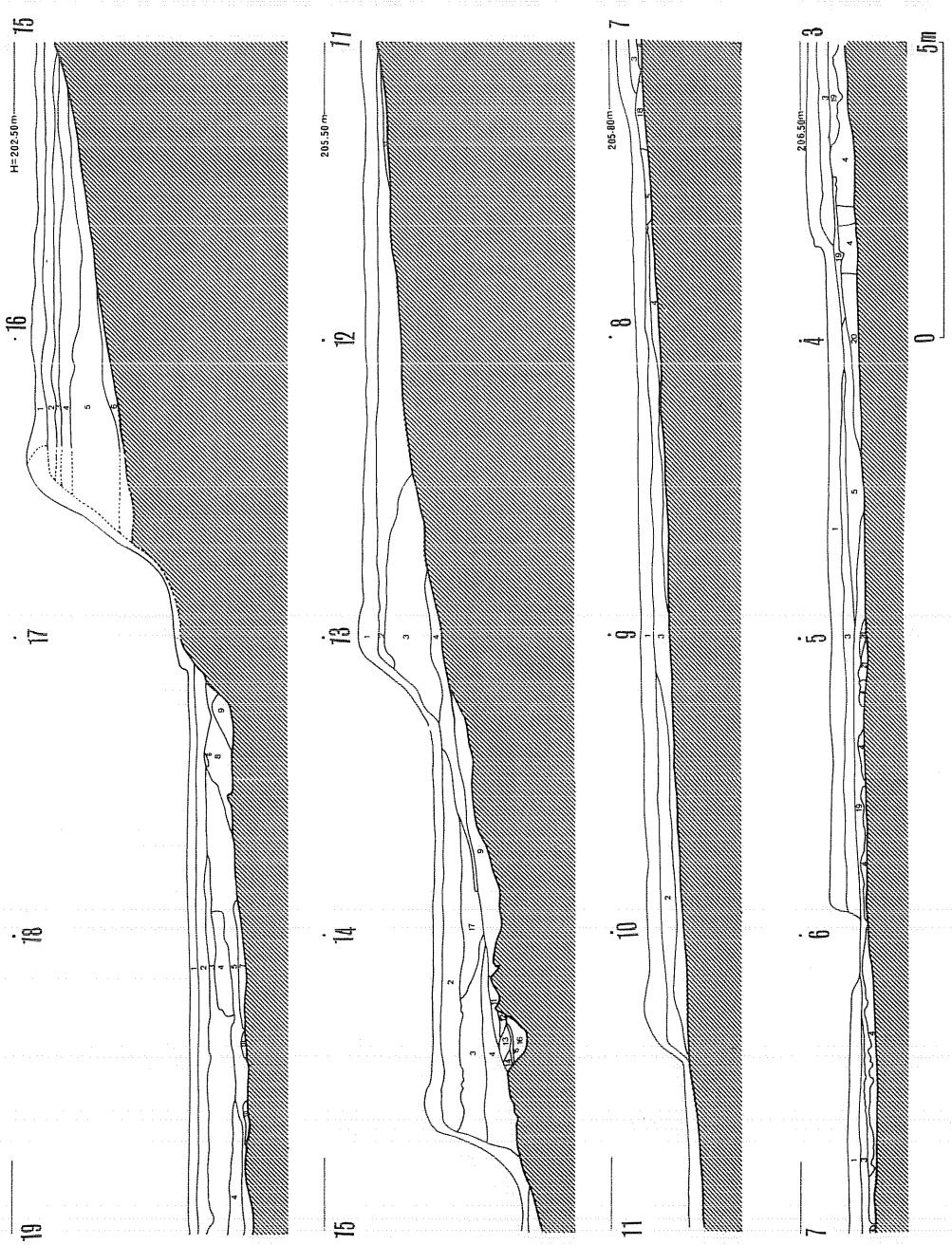
９月30日～10月１日に、ＳＩ037、039の補足調査を行い、飛鳥平遺跡の発掘調査を終了した。

4. 遺跡の層位

遺跡は米代川の形成した段丘上にある。遺跡の南北端は削平されている箇所も多いが、中央部は原地形が比較的よく残っている。遺物は2・3・5・19層から出土するが、浮石層がよく残っているところがほとんどなく、縄文時代、平安時代の遺物が混在するという状態であった。したがって、遺物を層位的におさえることはできなかった。

遺跡中央部を通る南北基線Gラインからみた遺跡の層位は下記のとおりである。（第4図）

1. 黒褐色土　10YR3/2　粘性ややあり。しまりよし。白色小粒5％混入。
2. 暗褐色土　10YR3/4　粘性ややあり。しまりよし。層下部に鉄分沈澱。豆つぶ大の礫2％混入。
3. 暗褐色土　10YR3/3　粘性あり。しまり中。層の所々に鉄分がブロック状に混入。
4. 暗褐色土　10YR3/4　粘性あり。しまりよし。酸化鉄により土が赤味がかっている。中粒礫5％、白色小粒10％混入。
5. 黒褐色土　10YR2/3　粘性ややあり。しまり中。白色小粒5％混入。
6. 黒褐色土　10YR3/2　粘性あり。しまりよし。浮石30％混入。
7. 黒色土　10YR2/1　粘性ややあり。しまり中。浮石1％混入。
8. 黒褐色土　10YR3/2　粘性あり。しまりなし。黒色土（10YR 1.7/1）3％混入。灰白色土（10YR7/1）5％、鉄さび2％混入。
9. にぶい黄褐色土　10YR5/3　粘土層。
10. 黒色土　10YR 1.7/1　粘性なし。しまりなし。浮石5％混入。
11. 黒褐色土　10YR3/2　粘性ややあり。しまり中。褐色土（10YR4/6）2％混入。
12. 黒褐色土　10YR2/2　粘性なし。しまり中。褐色土（10YR4/6）5％混入。
13. 黒褐色土　10YR3/1　粘性なし。しまりなし。砂質層。褐色土（10YR4/6）2％混入。
14. 黒褐色土　10YR2/2　粘性なし。しまりなし。
15. 黒色土　10YR 1.7/1　粘性ややあり。しまり中。
16. 褐色土　10YR4/6　粘性あり。しまり中。黒褐色土（10YR2/2）30％混入。
17. 暗オリーブ褐色土　2.5Y3/3　粘性あり。しまりよし。浮石5％。中粒石1％、小粒礫5％混入。
18. 褐色土　10YR4/6　粘性ややあり。しまりなし。



第4図　Gライン断面図

19. 黒褐色土　　10YR 2/2　粘性ややあり。層上部浮石10%混入。

20. 暗褐色土　　10YR 3/3　粘性なし。浮礫15%、黄褐色土（10YR 5/6）3%混入。

21. 褐色土　　10YR 4/4　粘性なし。しまりなし。黄褐色土（10YR 5/6）10%混入。

5. 遺構と遺物

(1) 遺　構

ア. 竪穴住居跡

(ア) 縄文時代の竪穴住居跡

ＳＩ036竪穴住居跡

第 1 表	挿図番号	第 5 図	図版番号	図版 3
遺構名	ＳＩ036	検出地区	10 － G	
長　軸	3.70 m	壁　高	0.20 m	
短　軸	3.44 m	壁溝幅	―――	
面　積	8.26 ㎡	壁溝深	―――	
形　態	円形	主軸方向	N25°W	
炉	位　置	中　央	形　態	地床炉

プラン確認　黄褐色土地山面においてＳＩ035の西側に不定形プランを確認した。精査したところ、ＳＩ036とＳＩ037を検出した。ＳＩ036はＳＩ035、ＳＩ037と重複している。新旧関係は、新←ＳＩ035、ＳＩ036、ＳＩ037→旧、である。

壁面の状態　壁はしまりよく、ゆるい立ちあがりを持つ。ＳＩ035、ＳＩ037と重複しており、また壁がしっかりしていないため、東西それぞれの壁は確認できなかった。

覆土　ほぼレンズ状の堆積である。上面後期包含層。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

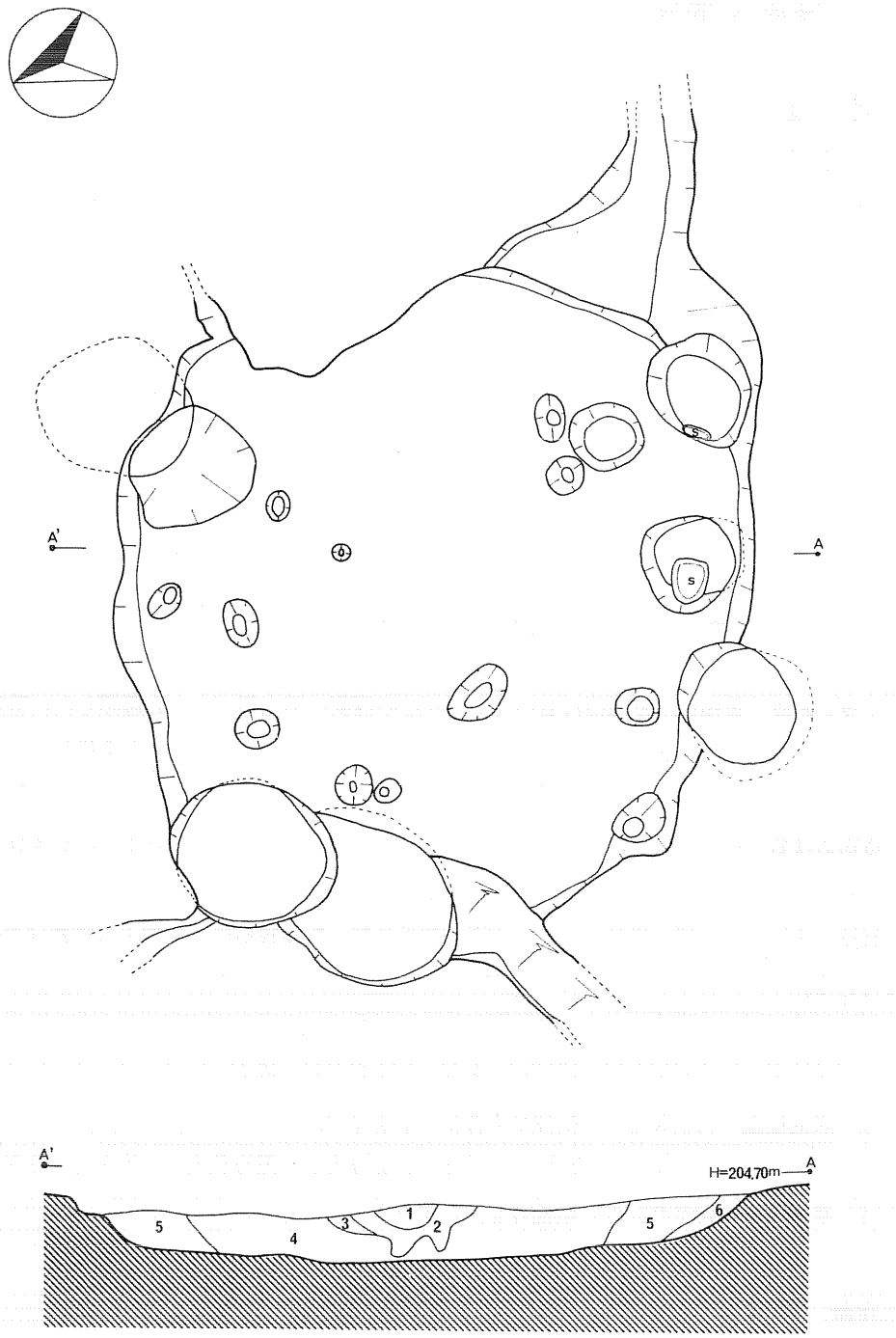
1. 褐色土　10ＹＲ4/4　粘性なし。しまりよし。
2. 褐色土　7.5ＹＲ4/6　粘性ややあり。しまりよし。焼土。
3. 黒褐色土　10ＹＲ2/3　粘性ややあり。しまり中。
4. 暗褐色土　10ＹＲ3/4　粘性ややあり。しまりよし。黒褐色土（10ＹＲ3/2）５％混入。
5. 暗褐色土　10ＹＲ3/3　粘性なし。しまりよし。
6. 黒褐色土　10ＹＲ2/3　粘性なし。しまり中。

床面　平坦で堅固である。

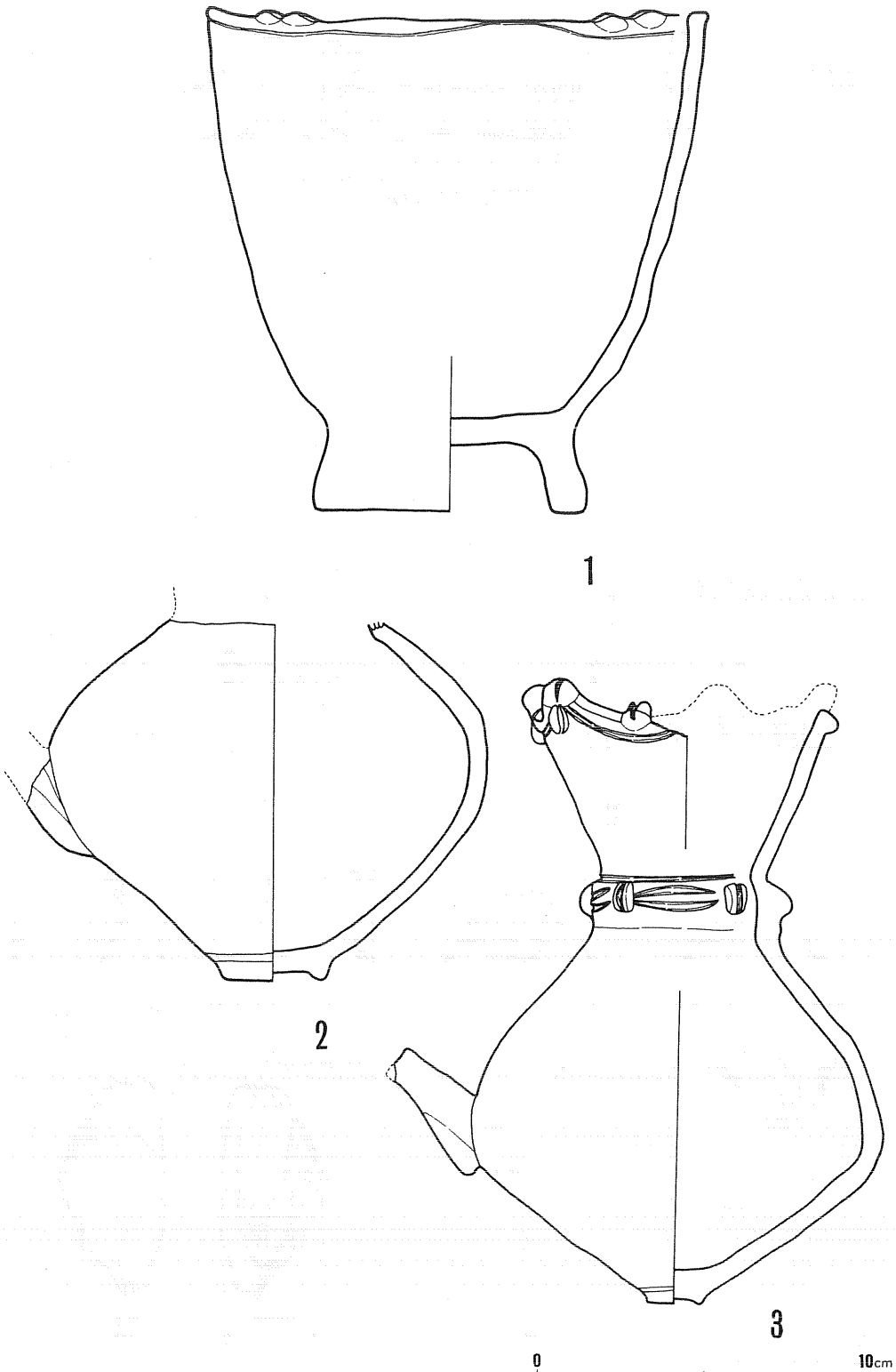
周溝　なし。

柱穴、ピット　17個のピットが確認された（壁際にフラスコ状ピット３個がある）。

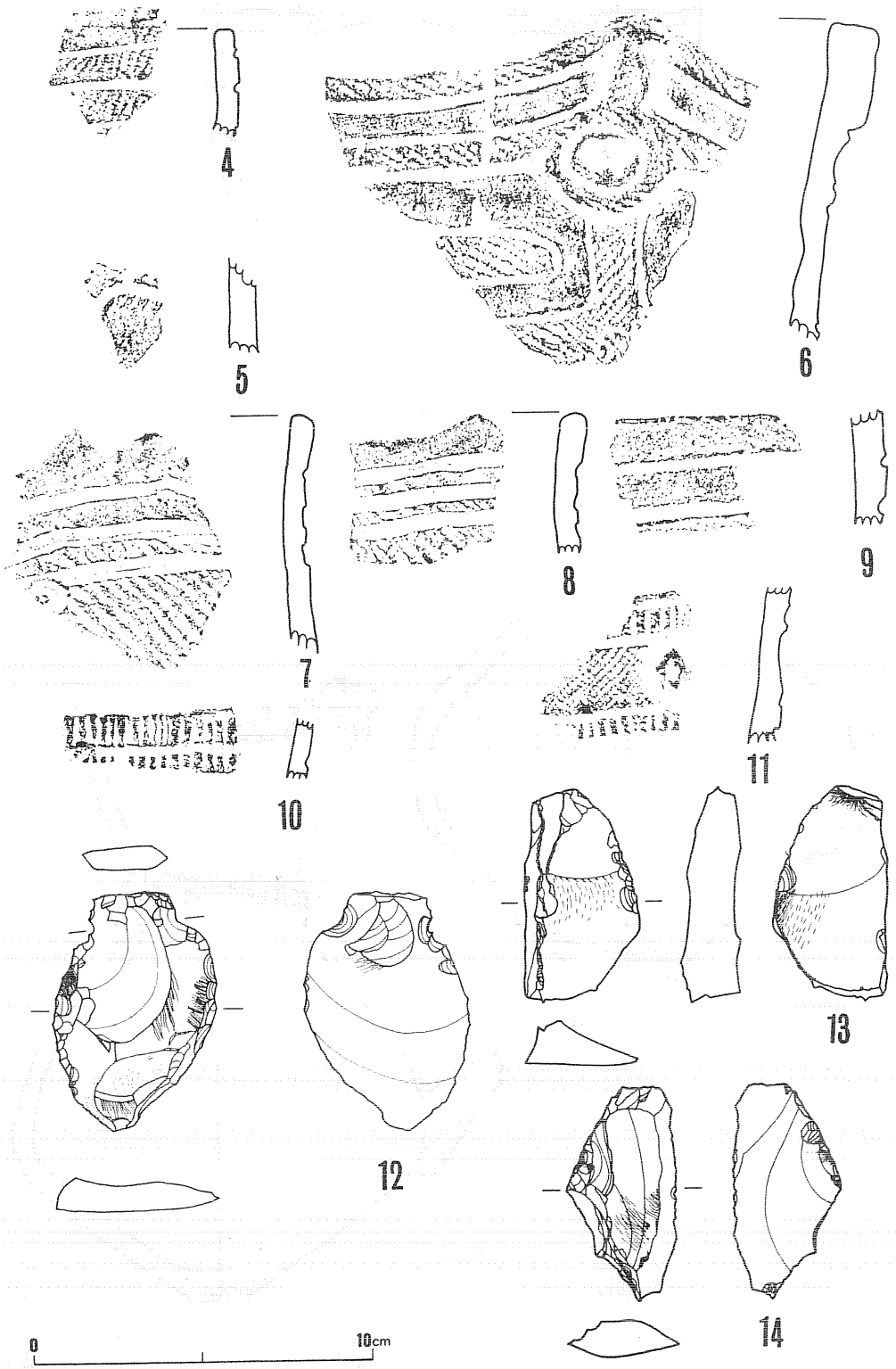
炉　70㎝×50㎝の範囲で住居中央に地床炉を確認した。



第5図　S I 036 竪穴住居跡



第6図　ＳＩ036竪穴住居跡出土遺物（1）



第7図　ＳＩ036竪穴住居跡出土遺物（２）

遺物とその出土状態　第6・7図に示す遺物が出土した。第6図2、3はＳＩ036の埋土の上面から出土したもので、この住居跡に付加するものかは不明である。どちらも注口土器で、注口部分はどちらも貫通している。3の上に接して2が出土した。縄文時代後期のものと思われる。第7図4～9は磨消縄文を施文するものである。区画文となる沈線文が広く太いものが多く、区画文の内外のコントラストが明瞭である。第7図10、11は帯状に刻目を持つもので、11は貼瘤を持つ。

第7図12～14は石器である。12は完形品ではないが石匙と思われる。その他は不定形石器である。石質はいずれも硬質泥岩である。

ＳＩ 037竪穴住居跡

第 2 表	挿図番号	第 8 図	図版番号	図版 4 ・ 5
遺構名	ＳＩ037	検出地区	10－G、10－H、11－G、11－H	
長　軸	5.95 m	壁　高	0.35～0.48 m	
短　軸	4.45 m	壁溝幅	――	
面　積	27.34 ㎡	壁溝深	――	
形　態	円形	主軸方向	N17° W	
炉	位　置	南西端	形　態	複式炉

プラン確認　黄褐色地山土上面において不定形プランを確認した。東壁はＳＩ036に切られており、ＳＩ036より古い。

壁面の状態　壁はしまりがよく、垂直に近い立ち上がりを持つ。東壁が重複のため極一部しか確認できない。

覆土　上部に縄文後期の遺物包含層があり、床直上に中期末遺物包含層がある。その中間層である褐色土からは、遺物が出土しない。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 褐色土　10ＹＲ4/4　粘性なし。しまりよし。砂質層。
1'. 褐色土　10ＹＲ4/4　1をベースに暗褐色土（10ＹＲ3/4）混入
2. 黒褐色土　10ＹＲ2/3　粘性なし。しまり中。
3. 褐色土　10ＹＲ4/4　粘性なし。しまり中。砂質層。
4. 黒褐色土　10ＹＲ2/2　粘性ややあり。しまりよし。
5. にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4　粘性なし。しまりなし。
6. 黒褐色土　10ＹＲ3/2　粘性ややあり。しまりよし。
7. にぶい黄橙色土　10ＹＲ6/4　粘性なし。しまりなし。褐色土（10ＹＲ4/4）2％混入。

8. 褐色土　　10YR4/4　粘性なし。褐色土（10YR4/6）混入。

9. 黒褐色土　　10YR3/2　粘性なし。しまりなし。

10. 黒褐色土　　10YR3/3　粘性なし。しまりなし。

床面　シルト質の平坦で堅固な床である。

周溝　西、南、東の一部に周溝が確認される。北側は小ピットを多数検出しているので、全周していたと思われる。

北側周溝の部分は円盤状土製品等出土しているため拡張部分と思われる。

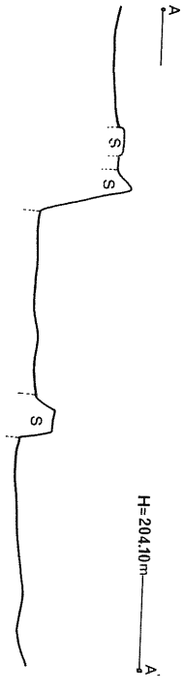
柱穴、ピット　周溝より内側にほぼ等間隔の柱穴4個を検出した。

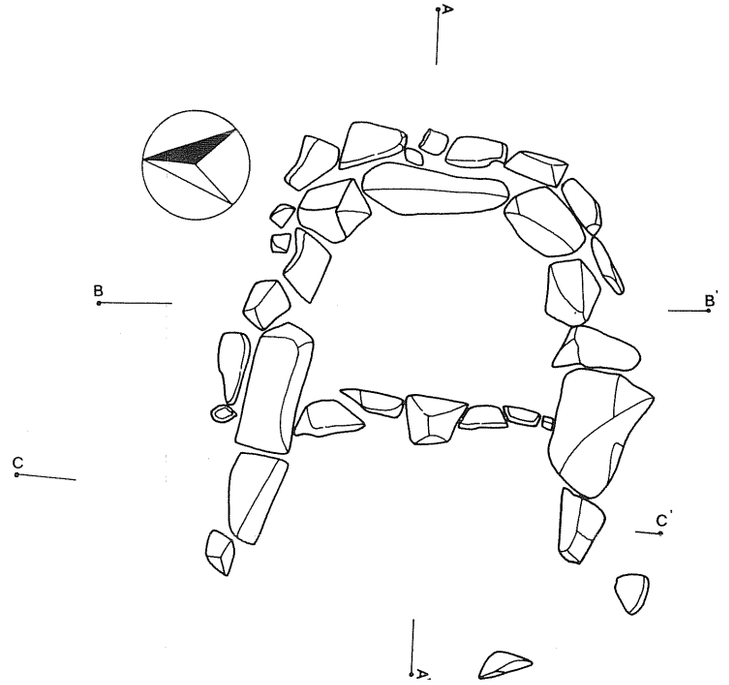
炉　西側壁に接して石組複式炉を検出。長軸1.30m、短軸1.10mでU字形を2つに区分している。これらの石は他の石に比べ、熱を受けもろくなっていた。U字形石組部の一部、石組みが2重になっている。焼土は検出されなかった。

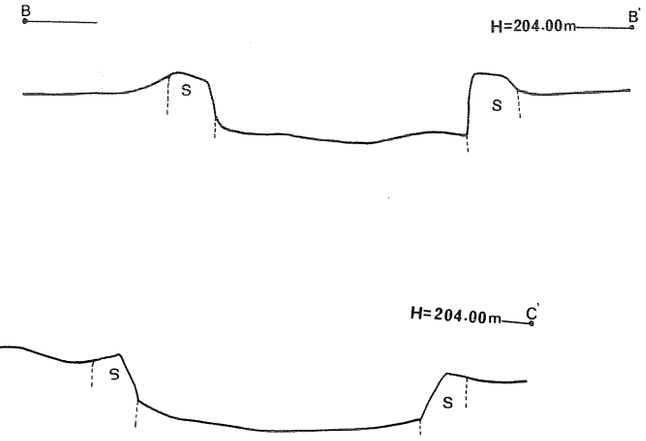
遺物とその出土状態　SI037は遺構自体は縄文時代中期末の竪穴住居跡と考えられるが、覆土の上面が後期遺物包含層のため、遺物は中期から後期までのものが出土する。（第9～16図）

第9図1は口縁部に親指大の突起を1個もつ。幅2～3㎜の沈線で区画したあと、単節LR原体の縄文を縦位に回転させて充填する。第10図2、3、第11図4、6、第12図7は地文として単節縄文を施したものである。4は口縁部に1条の沈線を廻し、無文帯と縄文帯を区画している。第11図5は、単節LR縄文を縦位回転施文したのち、沈線で区画し、その内側を磨消している。第12図8は、沈線で過巻文を構成するもので縄文時代中期のものと思われる。第12図9～13は、いずれも磨消縄文手法を用いたもので、9～12は同一個体の土器と考えられる。13はスペード状の区画文をもつもので、第10号埋甕とほぼ同時期のものと思われる。第12図14～16は網目状撚糸文を施した土器である。第13図に示した土器はいずれも磨消縄文手法を用いたもので、39～42は浮彫的なモチーフを持つものである。口縁は波状口縁をなすものと思われる。区画沈線文は平行もしくは曲線状のものがほとんどであるが、直角に近い区画文を施すものもある。第14図45～54は口縁部にB型突起を持ち、口縁部に刺突文、その下部に沈線による格目状文が施されるものである。第14図55はボタン状貼付文をもつものである。貼瘤の中央には刺突による凹みがある。

第15・16図に示したものが出土石器である。56は完形品ではないが、石匙である。石質は頁岩である。57～63は掻器である。両面加工のもの（58）、半両面加工のもの（57、61）、片面加工のもの（59、60、62、63）がある。石質は57、58、60～63が頁岩、59が硬質泥岩である。64～67は不定形石器である。石質は64、65、67が硬質泥岩、66が頁岩である。69～70は磨石で石質はいずれも安山岩である。



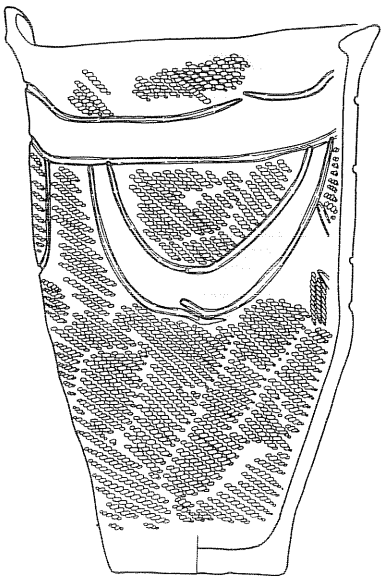




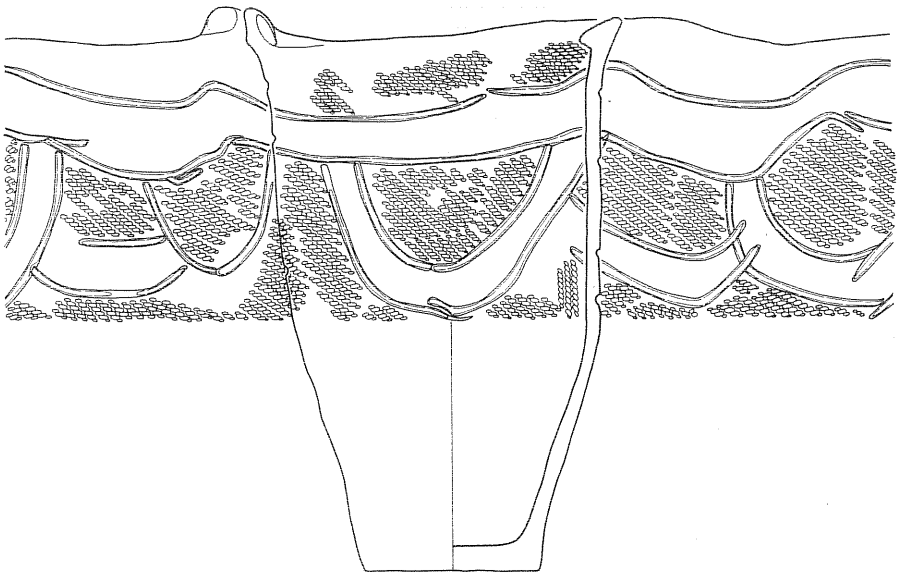
0 2m

0 1m

第8図　ＳＩ037竪穴住居跡

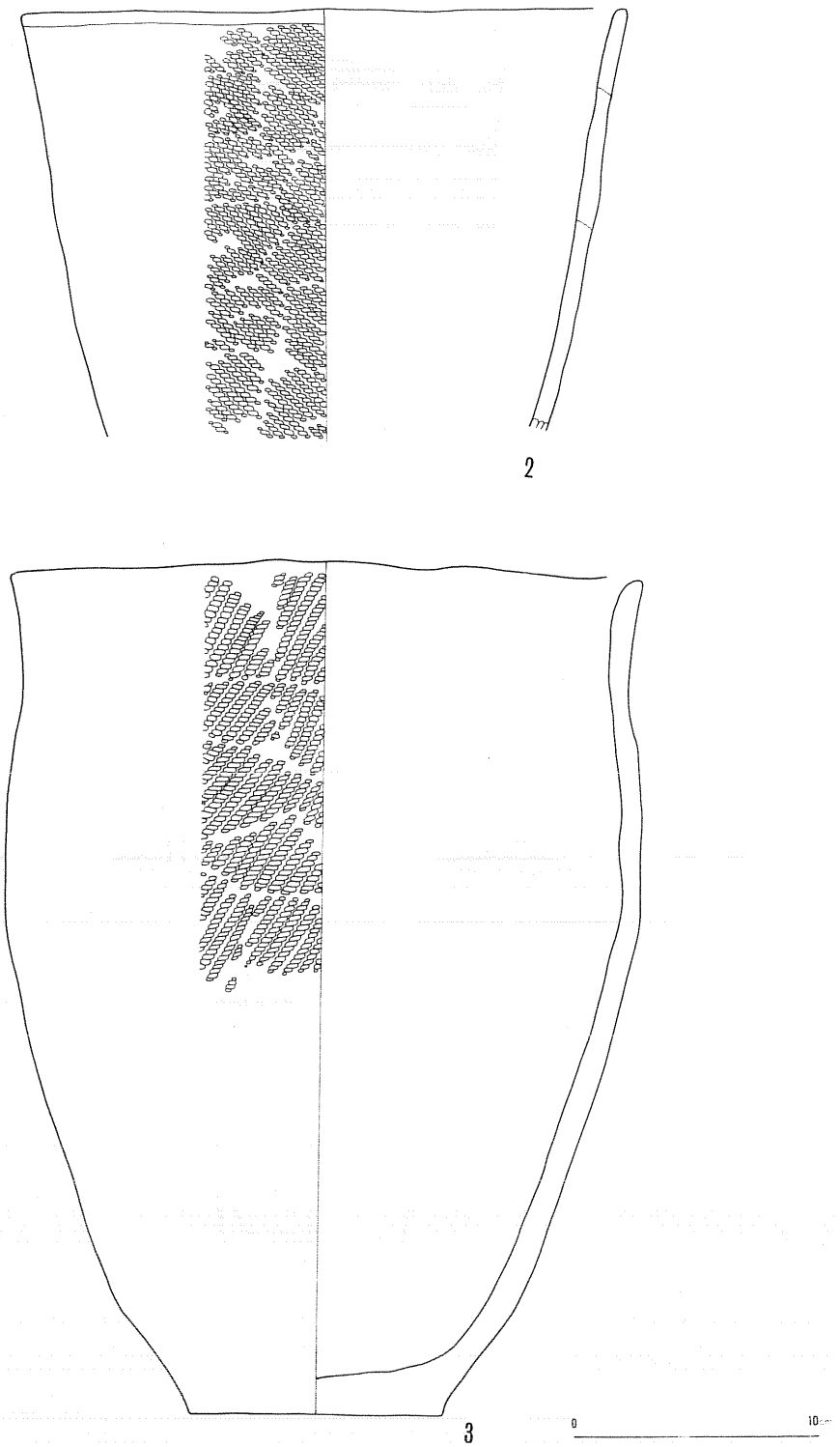


1

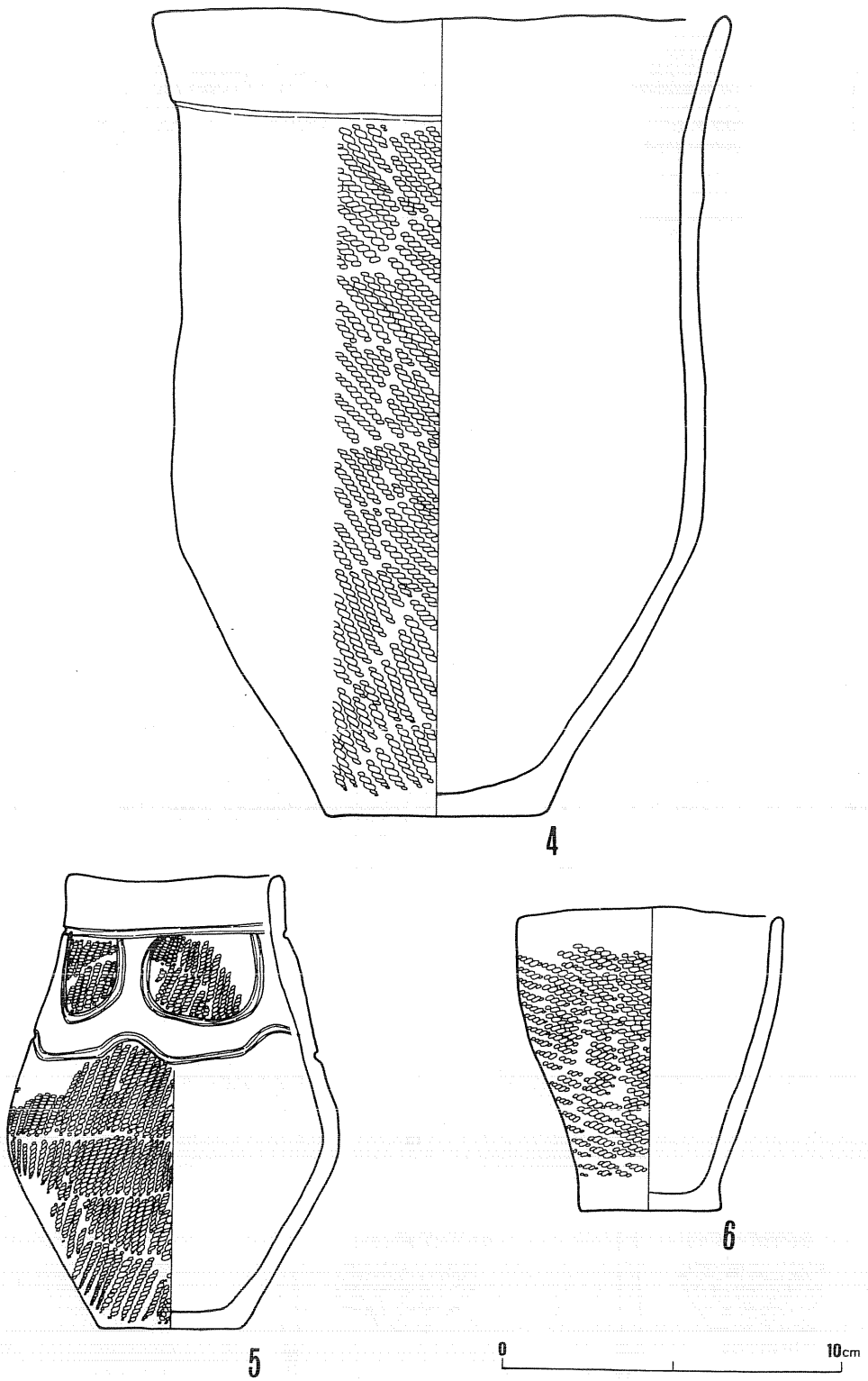


0 10cm

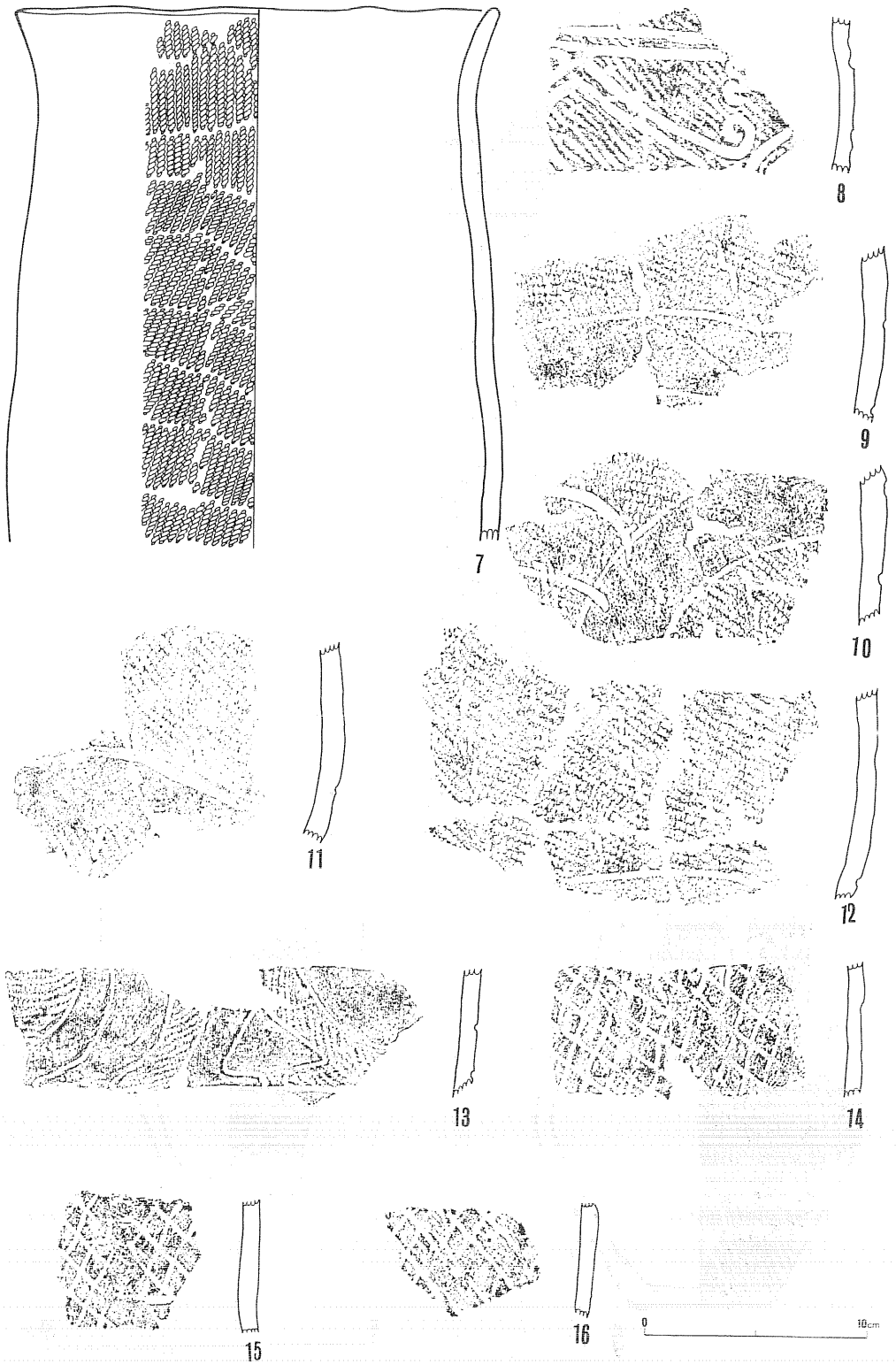
第9図　ＳＩ037竪穴住居跡出土遺物（1）



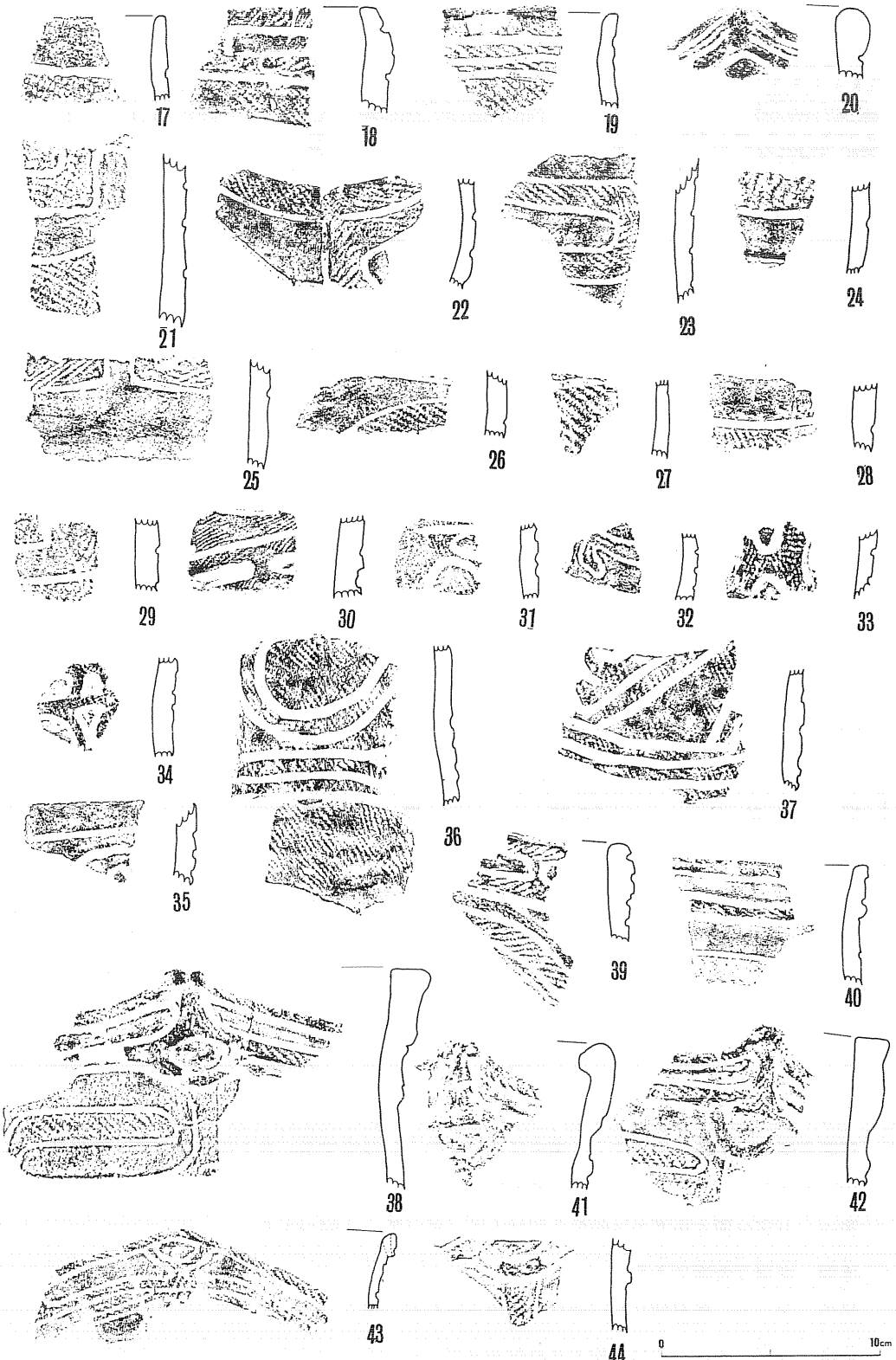
第10図　ＳＩ037竪穴住居跡出土遺物（２）



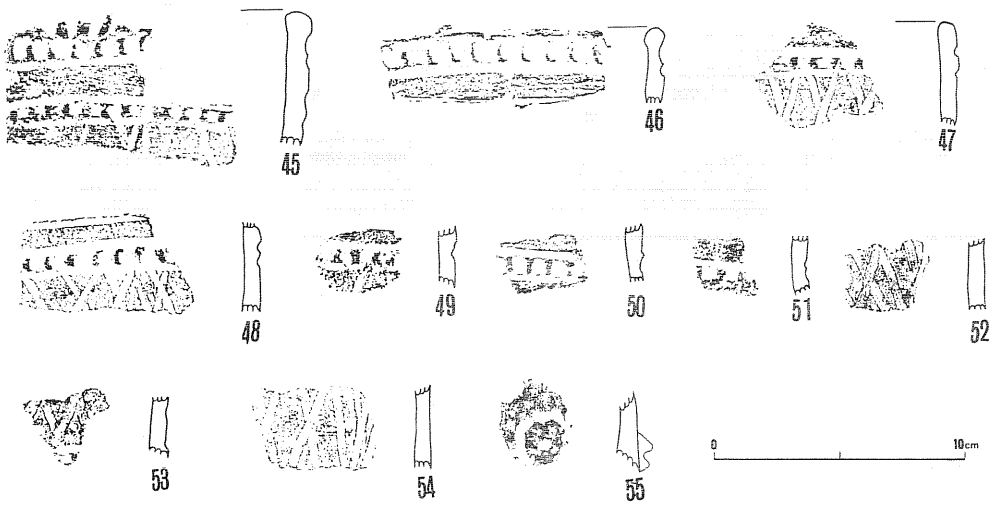
第11図　ＳＩ037竪穴住居跡出土遺物（３）



第12図　ＳＩ037竪穴住居跡出土遺物（４）



第13図　ＳＩ037竪穴住居跡出土遺物（５）



第14図　ＳＩ037竪穴住居跡出土遺物（６）

ＳＩ038竪穴住居跡

第３表	挿図番号	第17図	図版番号	図版６
遺構名	ＳＩ038	検出地区	10－Ｉ、10－Ｊ	
長軸	（2.20ｍ）	壁高	0.26～0.30ｍ	
短軸	（0.85ｍ）	壁溝幅	――	
面積	（2.17㎡）	壁溝深	――	
形態	円形	主軸方向	――	
炉	位置	――	形態	――

プラン確認　黄褐色地山土上面において黒褐色の不整形プランを確認した。精査の結果３棟（ＳＩ011、ＳＩ038、ＳＩ039）の重複プランであった。新旧関係は古い順にＳＩ038、ＳＩ011である。

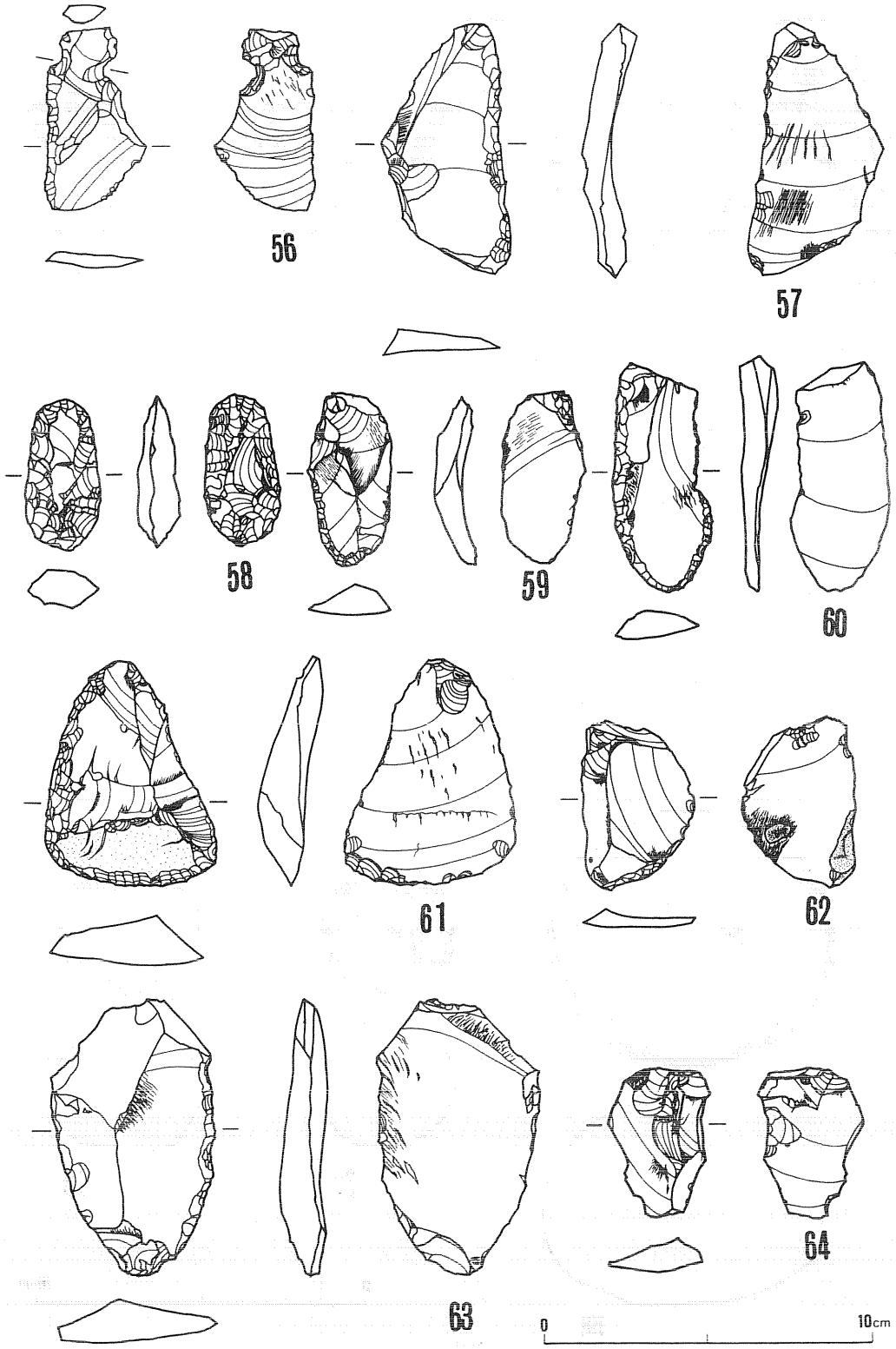
壁面の状態　壁はしまりよく、垂直に近い立ち上がりをする。ＳＩ039と重複しており、全体の70％強をＳＩ039によって切られている。

覆土　上面は縄文後期の遺物包含層である。他は混入土層である。

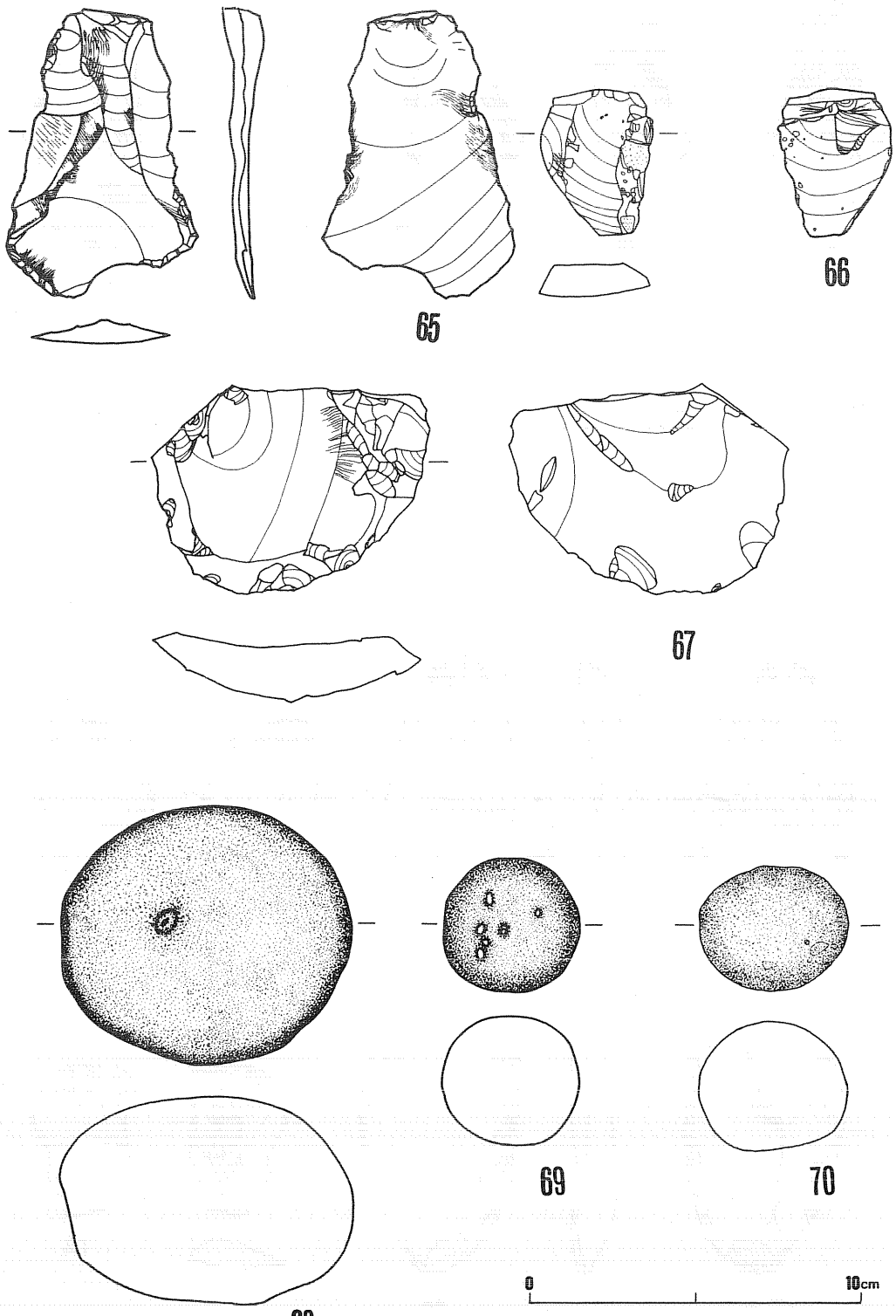
床面　平坦で堅固である。

柱穴、ピット　残存部においては、検出されなかった。

周溝　残存部においては、検出されなかった。



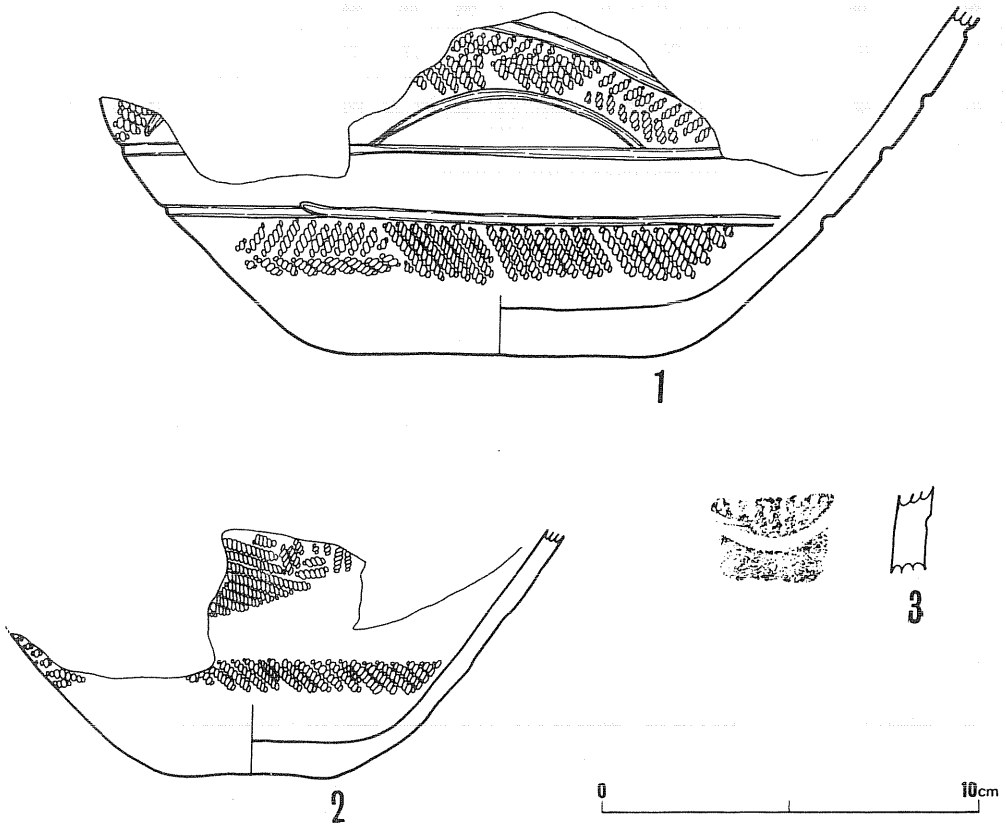
第15図　ＳＩ037竪穴住居跡出土遺物（７）



第16図　ＳＩ037竪穴住居跡出土遺物（８）

0 2m

第17図　ＳＩ038、039竪穴住居跡



第18図　ＳＩ038竪穴住居跡出土遺物

炉　残存部においては、検出されなかった。

遺物とその出土状態　第18図に示す土器が出土した。石器は出土しなかった。第18図１は、やや長い原体の単節ＲＬ縄文、短い原体の単節ＲＬ縄文、短い原体の単節ＬＲ縄文の３種類の縄文原体を使用して、部分的には羽状縄文を施す。その後、沈線で区画し、区画内を磨消している。２は単節ＲＬ縄文を横位、縦位に施文する。外面に輪積痕の跡が明瞭なのが特徴である。１～３とも縄文時代後期のものと思われる。

ＳＩ039竪穴住居跡

第　4　表	挿図番号	第 17 ・ 19 図	図版番号	図版6・7
遺構名	ＳＩ039	検出地区	8－I，8－J，9－H，9－I，9－J，10－I，10－J	
長　　軸	7.14 m	壁　　高	0.25 ～ 0.50 m	

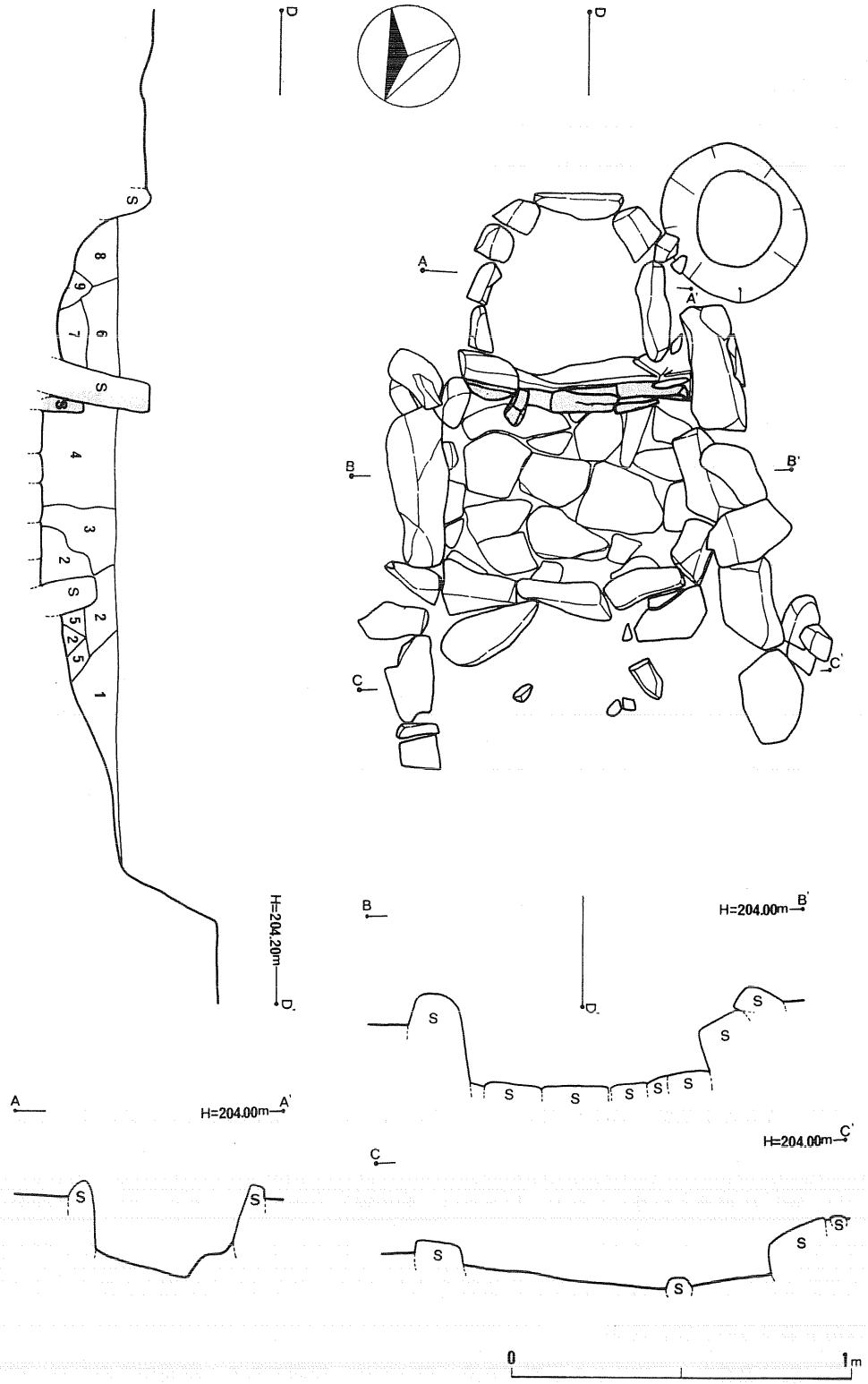
短　　軸	6.78 m	壁　溝　幅	――――――
面　　積	38.11 ㎡	壁　溝　深	――――――
形　　態	円　形	主軸方向	N 25° W
炉　位　置	北西端	形　態	複式炉

プラン確認　黄褐色地山土上面において黒褐色の不整形プランを確認した。ＳＩ011は黒褐色土上面にて、検出したが、その他の黒褐色土の落ち込みは、はっきりしなかった。そこで黄褐色土上面まで掘り下げたところ、ＳＩ039とそれによって切られているＳＩ038を検出した。新旧関係は古い順にＳＩ038、ＳＩ039、ＳＩ011である。

壁面の状態　壁はしまりよく、ほぼ垂直に立ち上がる。壁の¼ほどをＳＩ011によって切られている。

覆土　上面は縄文後期の遺物包含層である。他は混入土層である。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{2}$　粘性ややあり。しまり中。黒褐色土（10ＹＲ$\frac{2}{3}$）15％混入。
2. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{2}$　粘性なし。しまりなし。浮石20～50％含む。
3. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{2}$　粘性なし。しまり中。浮石10～20％含む。
4. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{2}$　粘性なし。しまり中。一部黒褐色土（10ＹＲ$\frac{2}{2}$）混入。
5. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{3}$　粘性ややあり。しまり中。酸化鉄含む。
6. 赤褐色土　5ＹＲ$\frac{4}{8}$　粘性ややあり。しまり中。
7. 明黄褐色土　10ＹＲ$\frac{6}{6}$　粘性ややあり。しまりなし。砂質層。
8. にぶい黄橙色土　10ＹＲ$\frac{6}{4}$　粘性あり。しまりなし。
9. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{2}$　粘性ややあり。しまり中。
10. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{2}$　粘性ややあり。しまり中。にぶい黄橙色(10ＹＲ$\frac{6}{4}$）混入。
11. にぶい黄褐色土　10ＹＲ$\frac{4}{3}$　粘性ややあり。しまり中。
12. 黒色土　10ＹＲ$\frac{2}{1}$　粘性ややあり。しまり中。
13. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{2}$　粘性ややあり。しまり中。
14. にぶい黄褐色土　10ＹＲ$\frac{4}{3}$　粘性ややあり。しまり中。黒褐色土（10ＹＲ$\frac{2}{2}$）10％混入。
15. 暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{3}$　粘性なし。しまり中。
16. 褐色土　10ＹＲ$\frac{4}{4}$　粘性なし。しまりよし。わずかに砂を含む。
17. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{3}$　粘性なし。しまりよし。
18. 褐色土　10ＹＲ$\frac{4}{6}$　粘性なし。しまり中。砂質層
19. 暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{4}$　粘性なし。しまりよし。



第19図　ＳＩ039竪穴住居跡炉

20．黒褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{2}$　粘性ややあり。しまりよし。

21．黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{2}$　粘性なし。しまり中。

22．暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{4}$　粘性ややあり。しまり中。

23．褐色土　10ＹＲ$\frac{4}{4}$　粘性ややあり。しまり中。

24．黒褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{2}$　褐色土（10ＹＲ$\frac{4}{4}$）の混合土。

25．暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{4}$　粘性あり。しまり中。

26．にぶい黄褐色土　10ＹＲ$\frac{4}{3}$　粘性ややあり。しまりなし。

27．にぶい黄褐色土　10ＹＲ$\frac{6}{4}$　粘性あり。しまり中。

28．暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{3}$　粘性ややあり。しまり中。

床面　平坦で堅固である。

柱穴、ピット　同心円上にほぼ等間隔で８個の柱穴が確認された。他に５個のピットがある。

周溝　残存部においては、検出されなかった。

炉　北西端に石組複式炉がある。長軸0.80m、短軸1.20ｍで、Ｕ字形の中を３つに区分している。中央には扁平な石を隙間なく敷きつめている。第19図のスクリーントーン部分の石はよく焼けており、もろくなっていた。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1.　褐色土　10ＹＲ$\frac{4}{4}$　粘性なし。しまりあり。わずかに砂を含む。

2.　黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{3}$　粘性なし。しまりあり。

3.　暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{4}$　粘性なし。しまりあり。

4.　黒褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{2}$　粘性ややあり　°しまり中。

5.　褐色土　10ＹＲ$\frac{4}{6}$　粘性なし。しまり中。砂質層。

6.　にぶい黄褐色土　10ＹＲ$\frac{4}{3}$　粘性ややあり。しまり中。

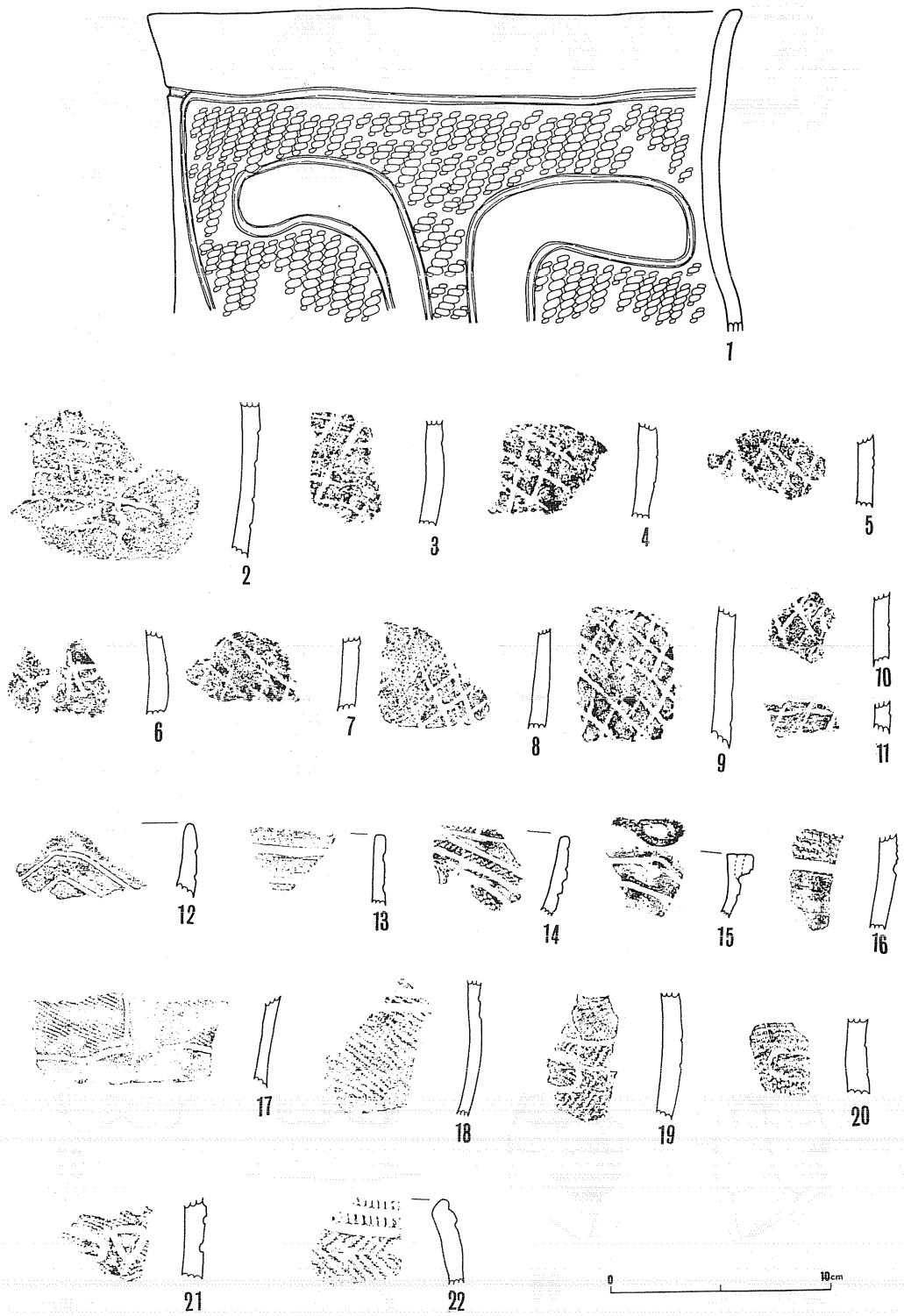
7.　黒褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{2}$　粘性ややあり。しまり中。

8.　黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{2}$　粘性ややあり。しまり中。

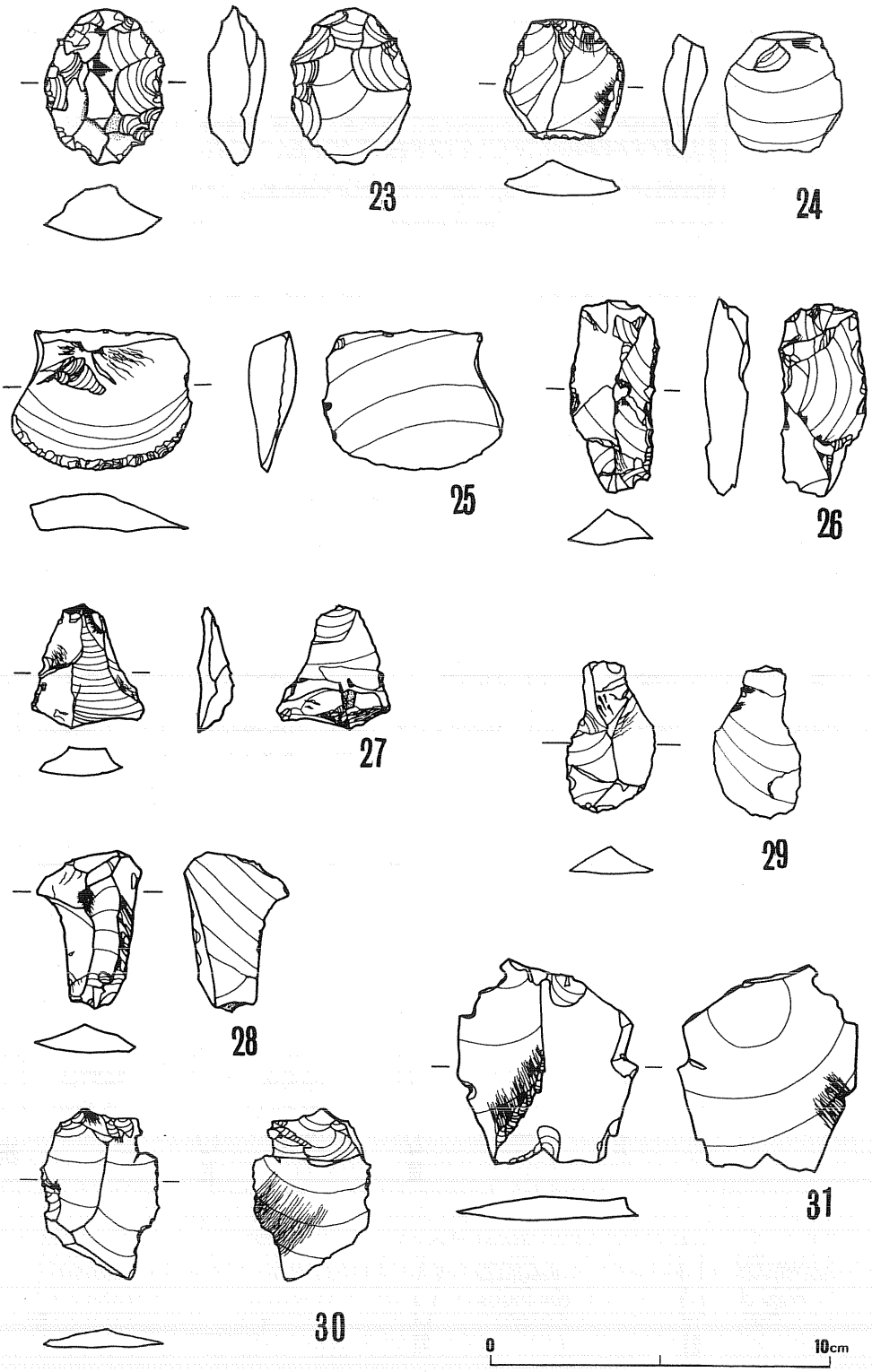
9.　明黄褐色土　10ＹＲ$\frac{6}{6}$　粘性ややあり。しまりなし。

遺物とその出土状態　第20・21図に示す土器が出土した。第20図１は太い撚の単節ＬＲ縄文を施文したあと太い沈線で区画しその内側を磨消す。縄文時代中期末のものと思われる。２～11は、網目状撚糸文を施したもの、12～21は、磨消縄文手法を用いたもの。特に14は磨消部分を１段低くして、縄文部分を浮き出している。15は口縁部に穿孔がある。12～21は、縄文時代後期前葉のものと思われる。22は、口縁部に刻目を持ち、胴部には羽状縄文を施す。縄文時代後期中葉のものと思われる。

第21図は遺構内から出土した石器である。23～25は、掻器である。両面加工のもの（23）、片面加工のもの（24・25）がある。26～31は、不定形石器である。



第20図　ＳＩ039竪穴住居跡出土遺物（１）



第21図　ＳＩ039竪穴住居跡出土遺物（２）

ＳＩ002竪穴住居跡

第 5 表	挿図番号	第 22 図	図版番号	図版8・9
遺構名	ＳＩ002	検出地区	12 — D	
長軸	4.60 m	壁高	0.35 m	
短軸	3.70 m	壁溝幅	————	
面積	13.2 ㎡	壁溝深	————	
形態	円形	主軸方向	————	
炉	位置	中央部	形態	土器埋設石組炉

プラン確認　北側の沢に向って緩傾斜をなす黄褐色地山土上面にて、黒褐色の円形プラン確認した。

壁面の状態　壁はしまりよく、垂直に近く立ちあがりをするが、一部にえぐられているところがある。

覆土　黄褐色土がブロック状に混入する箇所が見られる。多量の炭化材が検出されており、焼失家屋と思われる。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{2}$　粘性なし。しまりよし。褐色土（10ＹＲ$\frac{4}{6}$）15%混入。
2. 黒色土　10ＹＲ$\frac{2}{1}$　粘性あり。しまり中。褐色土（10ＹＲ$\frac{4}{6}$）５%混入。
3. 褐色土　10ＹＲ$\frac{4}{6}$　粘性なし。しまりよし。
4. 褐色土　10ＹＲ$\frac{4}{4}$　粘性なし。しまり中。褐色土（10ＹＲ$\frac{4}{6}$）20%混入。
5. 暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{3}$　粘性ややあり。しまり中。褐色土（10ＹＲ$\frac{4}{6}$）10%混入。炭化物混入。

5′ 暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{3}$　粘性ややあり。しまり中。褐色土（10ＹＲ$\frac{4}{6}$）10%混入。

6. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{3}$　粘性中。しまり中。褐色土（10ＹＲ$\frac{4}{6}$）15%混入。炭化物混入。

6′ 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{3}$　6に炭化物が多量に混入したもの。

7. 暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{4}$　粘性中。しまりよし。

床面　平坦で堅固である。床面の半分を炭化材が覆っていた。

柱穴、ピット　ピット６個が確認された。壁際のＰ01からは口縁部を欠いている土器１点、Ｐ02からは磨石１点が出土した。

炉　８個の川原石を用いた土器埋設石囲炉で、炉中に口縁部を欠いた土器が埋設されていた。炉内の埋土の断面観察結果は次のとおりである。（第22図）

1. にぶい黄褐色土　10ＹＲ$\frac{4}{3}$　粘性なし。しまり中。

2. 黄褐色土　　10ＹＲ5/6　粘性なし。しまりよし。

3. 黄褐色土　　10ＹＲ5/8　粘性なし。しまり中。（浮石っぽい土）

また、埋設土器中の埋土の断面観察結果は次のとおりである。（第23図）

1. 黒褐色土　　10ＹＲ2/3　炭化物20％。焼土５％含む。

2. 褐色土　　10ＹＲ4/6　炭化物５％。粘土と焼土混合土。

3. 明褐色土　　7.5ＹＲ5/6　焼土。

4. 黄褐色土　　10ＹＲ5/6　焼土。粘性あり。

5. 褐色土　　10ＹＲ4/6　炭化物５％。

6. 明褐色　　7.5ＹＲ5/6　焼土。

7. にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4

8. にぶい黄橙色土　10ＹＲ6/4

9. 黄褐色土　　10ＹＲ5/6

遺物とその出土状態　遺物はある程度復元できるものが３点出土したが、その他の破片は少数である。

第23図の土器は炉内に埋設されていたものである。口縁部はないが、現存部より数cm上にあったものと思われる。口縁部近くには、幅２～３㎜の沈線を１～1.5㎝間隔で３条廻し、２～７㎜間隔で垂直に刻目を施す。また、３条の沈線の上から２番目と３番目の沈線間に１個の貼瘤をもつ。第24図２は住居跡の床面に投げ棄てられた状態で出土した。無文で口縁部に７個の突起を持つ台付土器である。第24図３は住居跡の壁面に密着して出土した。胴上部に２条の沈線を廻し、その区画内に単節ＲＬ縄文を縦位に施文する。第25図４～６は住居跡覆土中から破片で出土したものである。４は羊歯状文、５は磨消縄文、６は刻目をもつものである。１～３、５、６は縄文時代後期後葉、４は縄文時代晩期前葉のものと思われる。

第25図７～15は住居跡内から出土した石器で15だけはＳ＝1/4である。７～11は不定形石器、12～14は凹石、15は石皿である。石質は７～10が硬質泥岩、11が硬質頁岩、12、14、15が安山岩、13が凝灰岩である。

^{14}Ｃ年代測定について　日本アイソトープ協会に依頼した測定結果は次のとおりである。

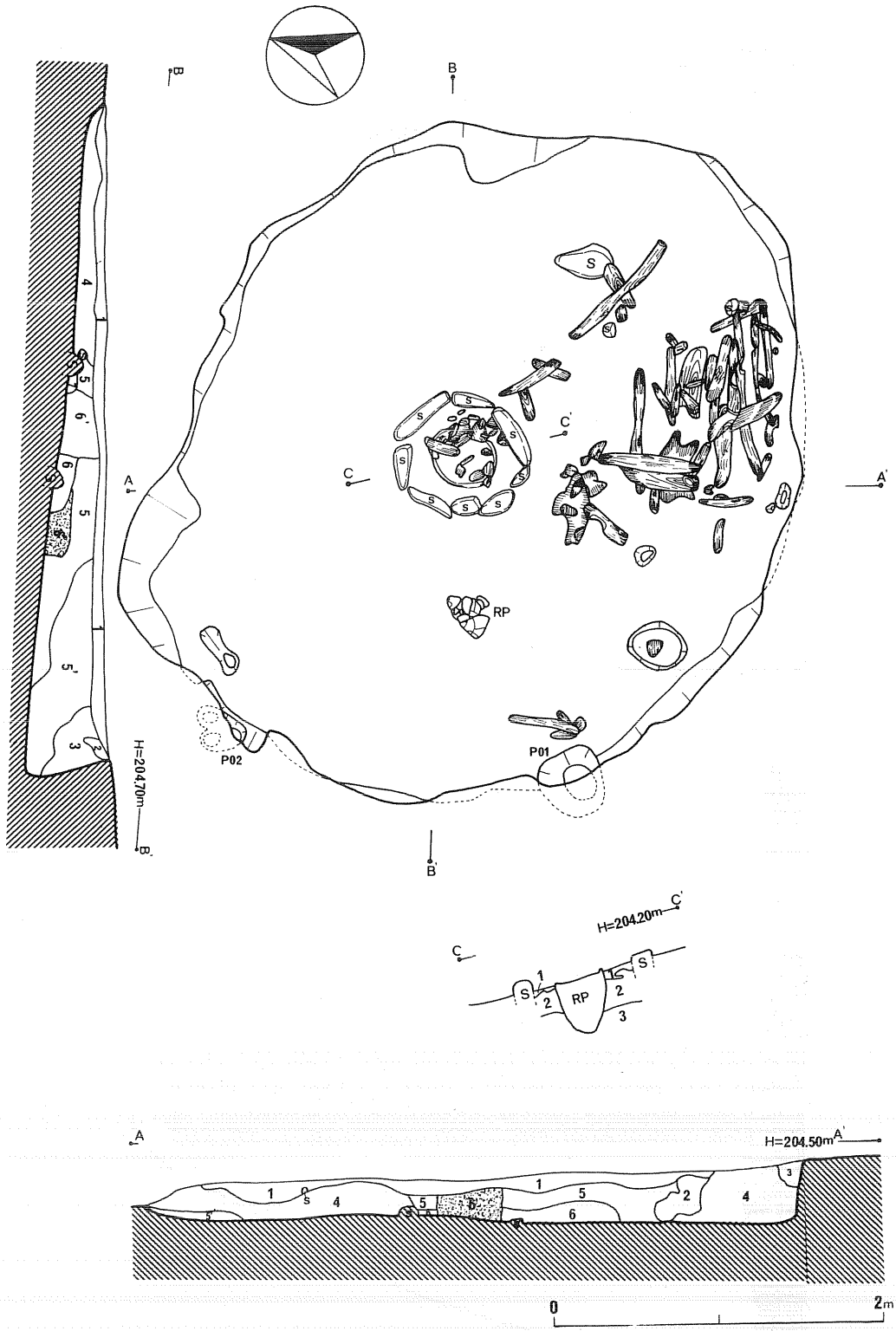
ＳＩ002埋設土器中炭化物　3,230 ± 65ｙＢ．Ｐ．（3,140 ± 65ｙＢ．Ｐ．）

ＳＩ002床面上炭化材　3,120 ± 80ｙＢ．Ｐ．（3,030 ± 75ｙＢ．Ｐ．）

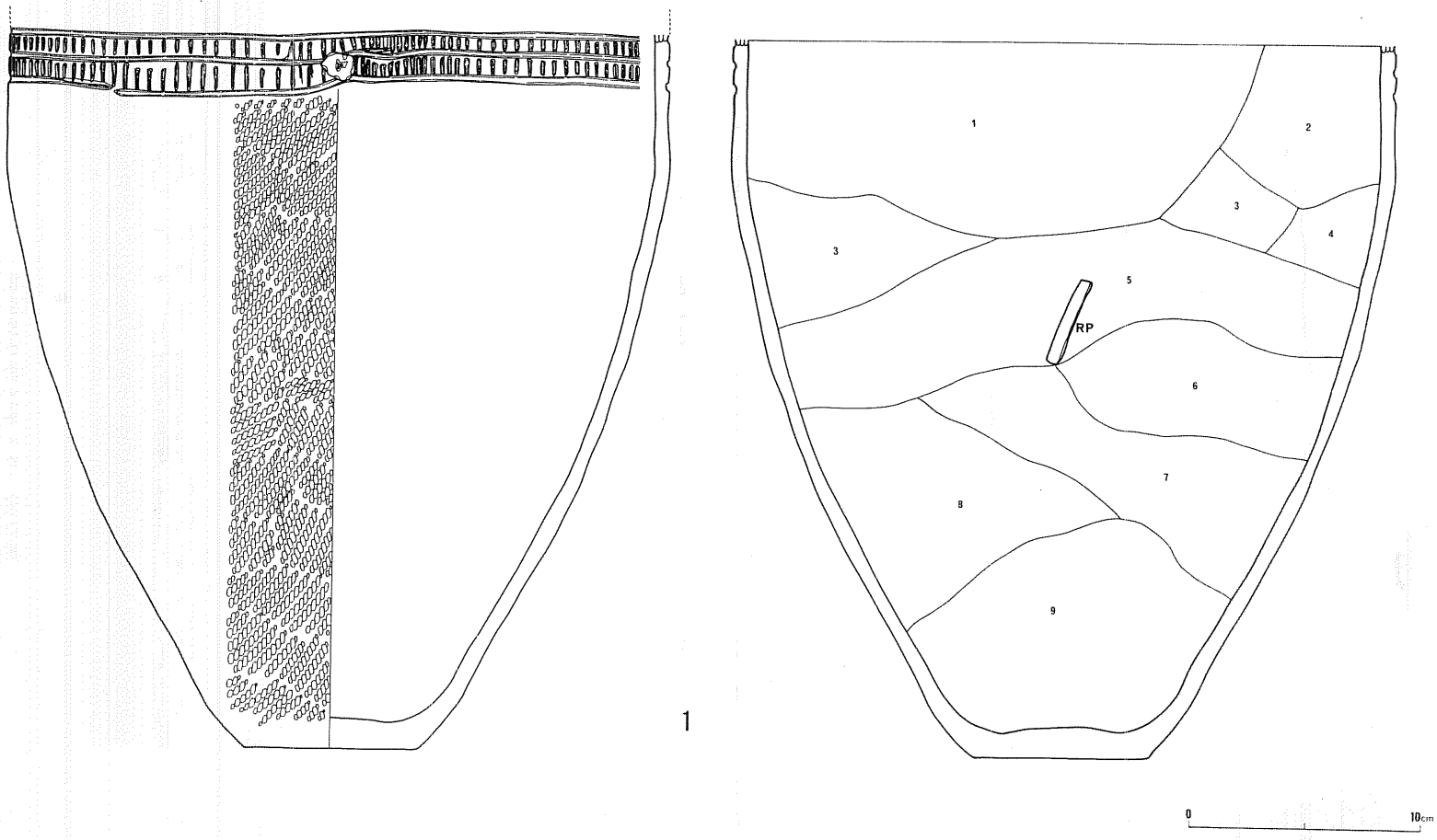
ＳＩ002地山中炭化物　13,100 ± 115ｙＢ．Ｐ．（12,800 ± 110ｙＢ．Ｐ．）

以上のことから、住居跡を構築し、土器埋設炉を設けた時期から、住居跡が焼失し廃棄されるまで、およそ100年間あったものと推定される。

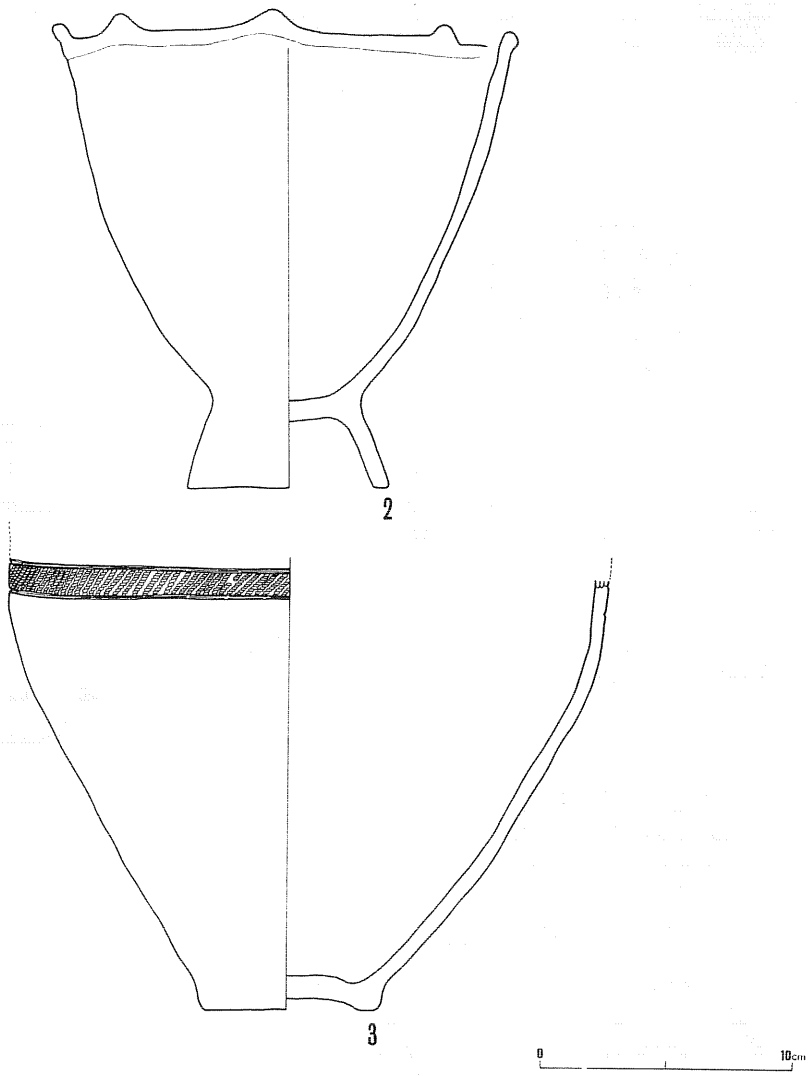
注：^{14}Ｃ年代は西暦 1950年よりさかのぼる年数で、必ずしも真の年代と等しくない。



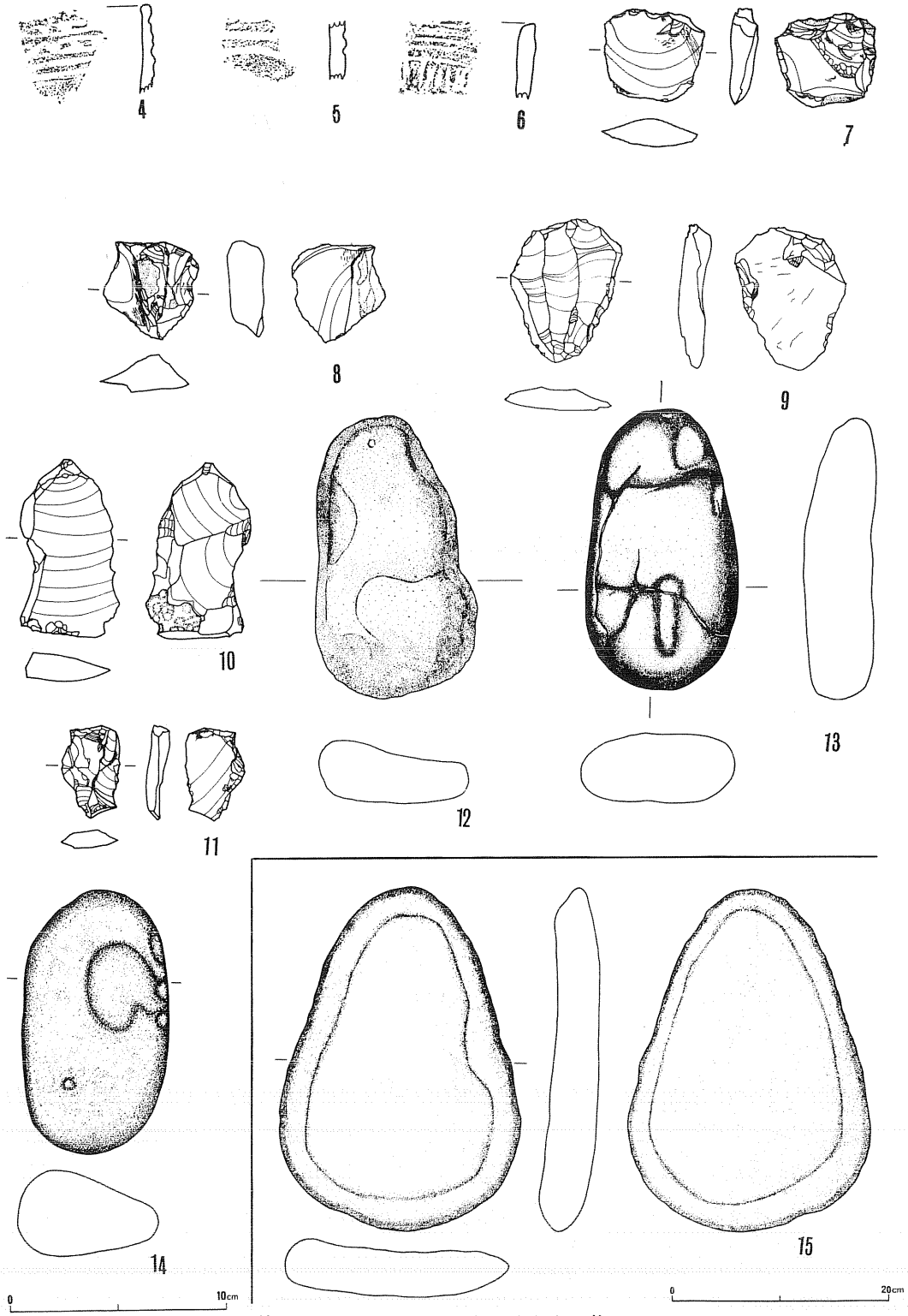
第22図　ＳＩ００２竪穴住居跡



第23図　ＳＩ002竪穴住居跡出土遺物（１）



第24図　ＳＩ００２竪穴住居跡出土遺物（２）



第25図　ＳＩ002竪穴住居跡出土遺物（３）

第26図　ＳＩ003竪穴住居跡

(イ) 平安時代の竪穴住居跡

ＳＩ003竪穴住居跡

第 6 表	挿図番号	第 26 図	図版番号	図 版 10
遺構名	ＳＩ003	検出地区	9－C、9－D、9－E、10－D、10－E	

		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
法量	壁長	5.40m	5.48m	5.60m	5.50m
	壁高	0.26～0.31m	0.22～0.31m	0.22～0.34m	0.17～0.24m
	壁溝幅	0.10～0.20m	0.10～0.21m	0.10～0.21m	0.10～0.20m
	壁溝深	0.01～0.06m	0.05～0.07m	0.04～0.08m	0.02～0.14m

形態	方形	面積	32.63 ㎡	主軸方向	Ｎ7°Ｅ
かまど	位置	南壁西寄り	構築素材	芯部石組	

プラン確認　褐色地山面において、黒褐色の方形プランを確認した。

壁面の状態　壁はしまりよく、垂直に近い立ちあがりを呈する。

覆土　黒褐色土が主でしまりはあまりよくない。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{2}$　粘性なし。しまりなし。砂質層。浮石２％、褐色土（10ＹＲ$\frac{4}{4}$）５％混入。
2. 褐色土　10ＹＲ$\frac{4}{4}$　粘性なし。しまりなし。砂質層。暗褐色土（10ＹＲ$\frac{3}{4}$）10％混入。
3. 暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{3}$　粘性なし。しまりなし。砂質層。褐色土（10ＹＲ$\frac{4}{4}$）３％混入。
4. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{2}$　粘性ややあり。しまりなし。褐色土（10ＹＲ$\frac{4}{4}$）２％混入。
5. 黒色土　10ＹＲ$\frac{2}{1}$　粘性ややあり。しまりなし。

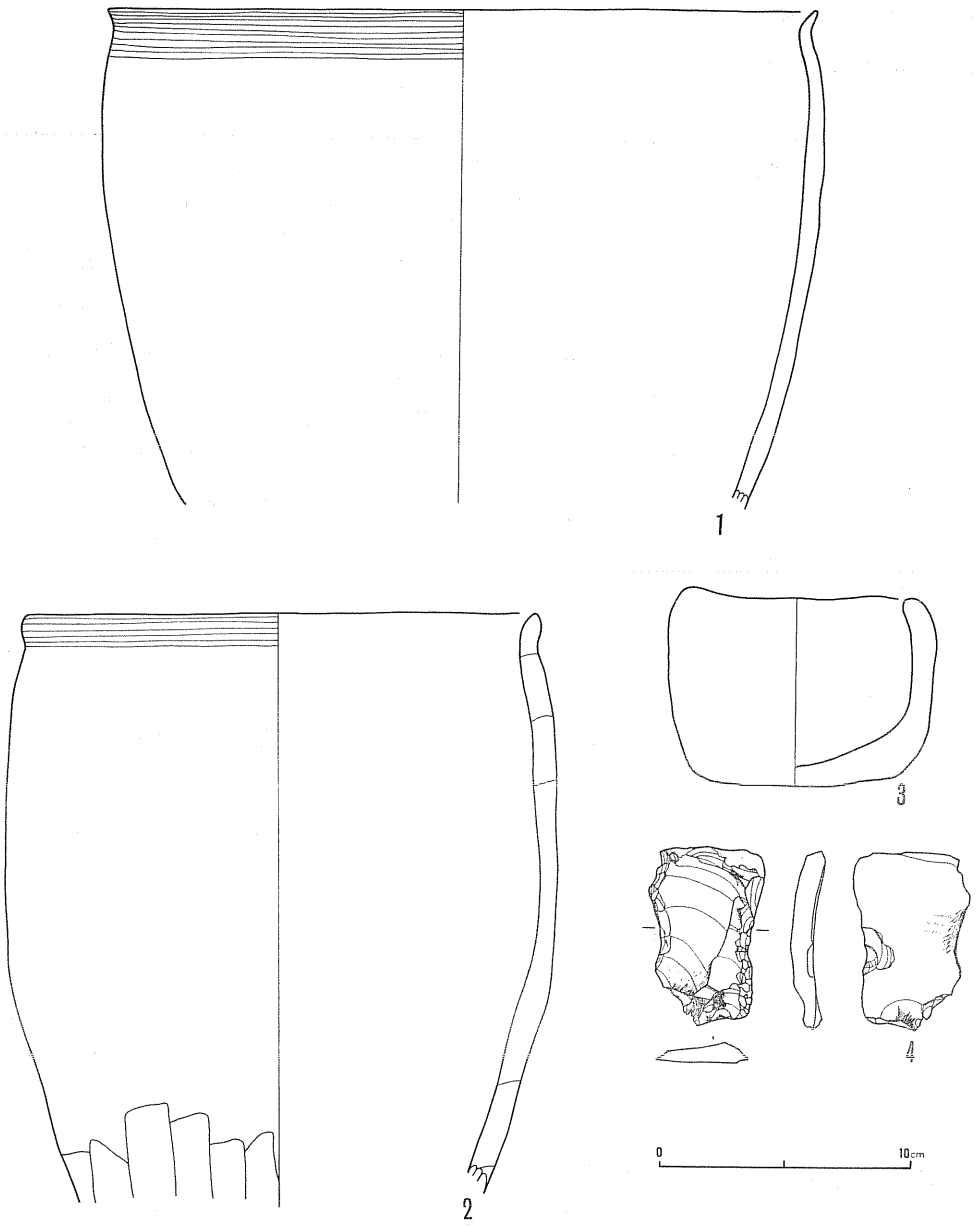
床面　しまりよく、部分的に貼床である。概ね平坦でカマド付近は堅固である。

壁溝　南壁のカマド東側の一部と北壁の東寄りの一部が途切れるだけで、他は廻っている。

柱穴、ピット　住居跡四隅の壁溝内に柱穴が四個確認された。

カマド　遺存状態は不良である。石を芯材として構築されたものと思われる。カマド内の断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 褐色土　10ＹＲ$\frac{4}{4}$　粘性ややあり。しまり中。
2. 赤褐色土　５ＹＲ$\frac{4}{6}$　粘性ややあり。しまり中。
3. 明黄褐色土　10ＹＲ$\frac{6}{6}$　粘性なし。しまりよし。



第27図　ＳＩ００３竪穴住居跡出土遺物

4. にぶい黄橙色土　10ＹＲ7/4　粘性ややあり。しまり中。
5. にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/3　粘性なし。しまりよし。
6. 赤褐色土　5ＹＲ4/6　粘性ややあり。しまり中。
7. にぶい黄橙色土　10ＹＲ6/4　粘性ややあり。しまり中。
8. 赤褐色土　5ＹＲ4/6　粘性ややあり。しまり中。

遺物とその出土状態　第27図に示す遺物が出土した。3だけはＳ＝1/1.5である。　1，2は土師器の甕の破片である。2の胴下半部にヘラケズリがある他は、ロクロ整形後の調整はされていない。

4は掻器であり、片面加工されている。石質は硬質泥岩である。

ＳＩ004竪穴住居跡

第6表	挿図番号	第28・29図	図版番号	図版11
遺構名	ＳＩ004	検出地区	11－Ｅ、11－Ｆ、12－Ｅ、12－Ｆ	

法量	東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
壁長	（3.15m）	（5.70m）	（4.87m）	――
壁高	0.14～0.30m	0.08～0.58m	0.38～0.52m	――
壁溝幅	0.09～0.20m	0.07～0.11m	0.10～0.30m	――
壁溝深	0.04～0.11m	0.02～0.08m	0.04～0.20m	――

形態	方形	面積	（20.38㎡）	主軸方向	Ｎ3°Ｅ
かまど	位置	南壁東寄り	構築素材	芯部石組	

プラン確認　北に緩傾斜をなす黄褐色地山面において黒褐色の台形プランを確認した。

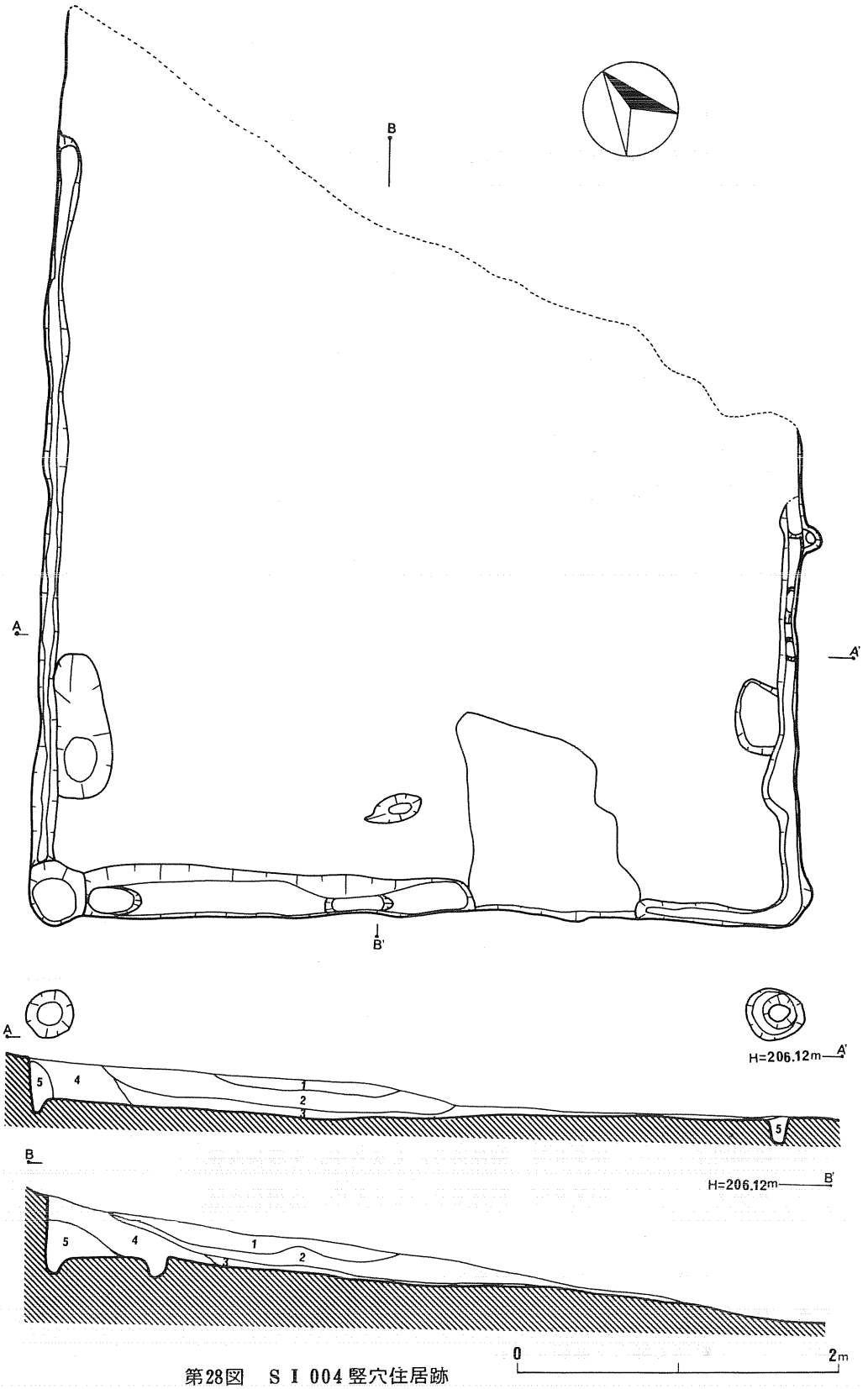
壁面の状態　壁はしまりよく、ほぼ垂直に立ちあがる。斜面にて検出されたため、北壁全部と東西壁の一部は確認できなかった。原形は方形であったと思われる。

覆土　南から北へ緩い傾斜で堆積している。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

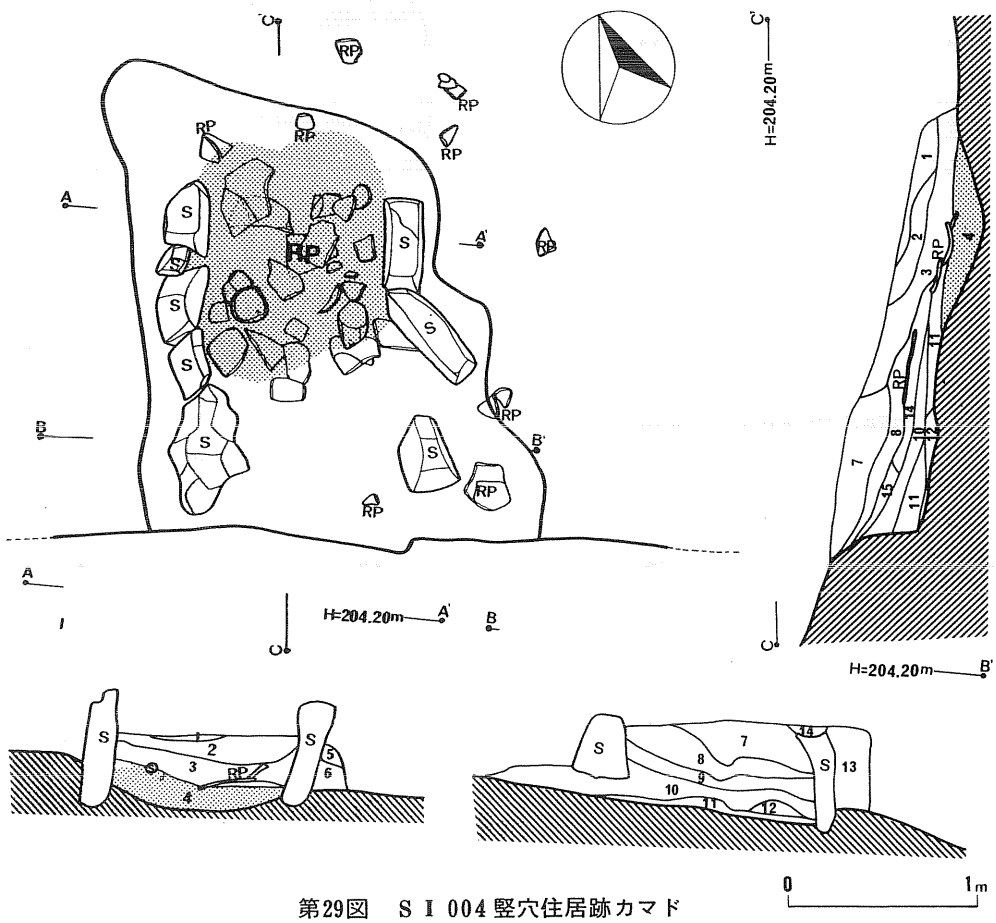
1. 黒褐色土　10ＹＲ3/2　粘性ややあり。しまりよし。浮石5％混入。
2. 暗褐色土　10ＹＲ3/4　粘性あり。しまり中。土器包含層。
3. 黒色土　10ＹＲ2/1　粘性あり。しまり中。土器包含層。
4. にぶい黄橙色土　10ＹＲ6/4　粘性あり。しまり中。黒褐色土（10ＹＲ3/2）5％混入。
5. にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4　粘性あり。しまり中。

床面　ほぼ平坦で、カマド付近は堅固である。

壁溝　カマド部分を除いて確認された。



第28図　ＳＩ004竪穴住居跡

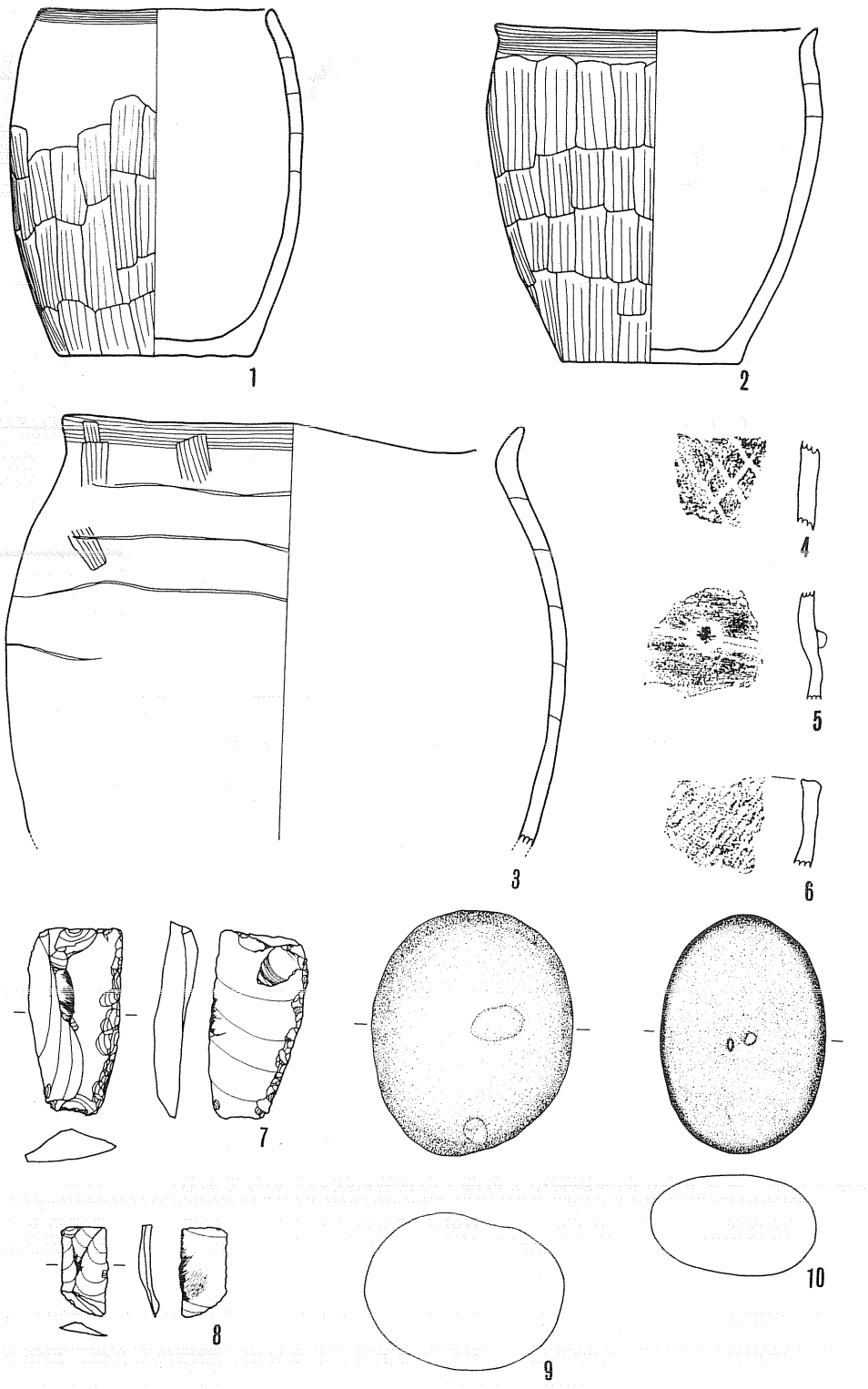


第29図　ＳＩ004竪穴住居跡カマド

柱穴、ピット　住居跡南西隅壁溝内に１個、住居跡外南側の壁溝延長線上に２個のピットが確認された。

カマド　上部削平のため遺存状態不良である。袖部は扁平な石を芯材として構築されているが、天井部、煙道部については不明である。燃焼部において石の支脚と一個体分の土師器片が検出された。カマド内の断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 暗褐色土　　10ＹＲ3/4　粘性ややあり。しまり中。浮石１％、黄褐色土（10ＹＲ5/6）１％混入。
2. 褐色土　　10ＹＲ4/4　粘性あり。しまり中。カマド上面の粘土と思われる。
3. 暗褐色土　　10ＹＲ3/3　粘性ややあり。しまり中。黄褐色土２％、褐色土（7.5ＹＲ4/4）３％混入。



第30図　ＳＩ004竪穴住居跡出土遺物

4. 褐色土焼土　7.5YR4/4　粘性あり。しまりなし。赤褐色土（5YR4/8）1%混入。
5. 暗褐色土　10YR3/4　粘性ややあり。しまりなし。浮石2%混入。
6. 褐色土　10YR4/6　粘性ややあり。しまり中。黄褐色土（10YR5/6）3%混入。
7. にぶい黄褐色土　10YR5/4　粘性なし。しまりよし。浮石1%混入。
8. 褐色土　10YR4/6　粘性ややあり。しまり中。浮石1%混入。
9. 極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性あり。しまり中。褐色土（7.5YR4/6）2%混入。
10. 暗褐色土　10YR3/3　粘性あり。しまり中。黄褐色土（10YR5/6）30%混入。
11. 黒色土　10YR1.7/1　粘性ややあり。しまり中。
12. 黒褐色土　10YR3/2　粘性ややあり。しまりよし。砂質層。
13. 明黄褐色土　10YR6/6　粘性質。しまりよし。
14. 暗褐色土　10YR3/3　粘性あり。しまり中。浮石3%混入。
15. 黒褐色土　10YR3/2　粘性ややあり。しまりなし。褐色土（7.5YR4/6）混入。

遺物とその出土状態　第30図に示す遺物が出土した。1～3は土師器で、体部はヘラケズリによる調整が行われている。4は網目状撚糸文、5は貼瘤をもつもの、6は単節RL縄文を縦位に施文した土器口縁部である。

7～10は石器である。7は石箆でバルブを上にしての右側のみを片面調整している。石質は7、8が硬質頁岩、9、10が安山岩である。

SI009竪穴住居跡

第8表	挿図番号	第31図	図版番号	図版12
遺構名	SI009	検出地区	2－J、3－I、3－J	

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	4.39m	4.30m	4.43m	4.20m
	壁高	0.33～0.38m	0.51～0.45m	0.46～0.48m	0.35～0.46m
	壁溝幅	0.06～0.11m	0.07～0.20m	0.1～0.21m	0.07～0.10m
	壁溝深	0.02～0.07m	0.03～0.10m	0.03～0.10m	0.02～0.08m

形態	方形	面積	20.91㎡	主軸方向	N11°E
かまど	位置	南壁東寄り→増築により中央	構築素材	芯部石組	

第31図　ＳＩ009竪穴住居跡

プラン確認　黄褐色地山土上面において、暗褐色の方形（東側に張出し部あり）プランを確認した。

壁面の状態　壁はしまりよく、垂直に近い立ちあがりをする。

覆土　褐色土と暗褐色土が、ほぼ交互に堆積している。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 褐色土　10ＹＲ4/4　粘性なし。しまり中。黄褐色土（10ＹＲ5/6）５％混入。
2. 暗褐色土　10ＹＲ3/4　粘性なし。しまり中。黄褐色土（10ＹＲ5/6）15％、黒褐色土（10ＹＲ3/2）５％混入。砂質土。
3. 暗褐色土　10ＹＲ3/4　粘性なし。しまり中。
4. 褐色土　10ＹＲ4/4　粘性なし。しまり中。

壁溝　住居跡を全周している。増築部分にも壁溝が全周しており、接点となる旧壁溝部分は埋められている。

柱穴、ピット　住居跡四隅の壁溝内に４個、カマドのある南壁を除いた各壁中間点の壁溝内に３個、増築部分隅に２個の計９個の柱穴が確認された。

カマド　扁平な石を芯材として構築されているが、天井部が崩落している。カマド内における断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

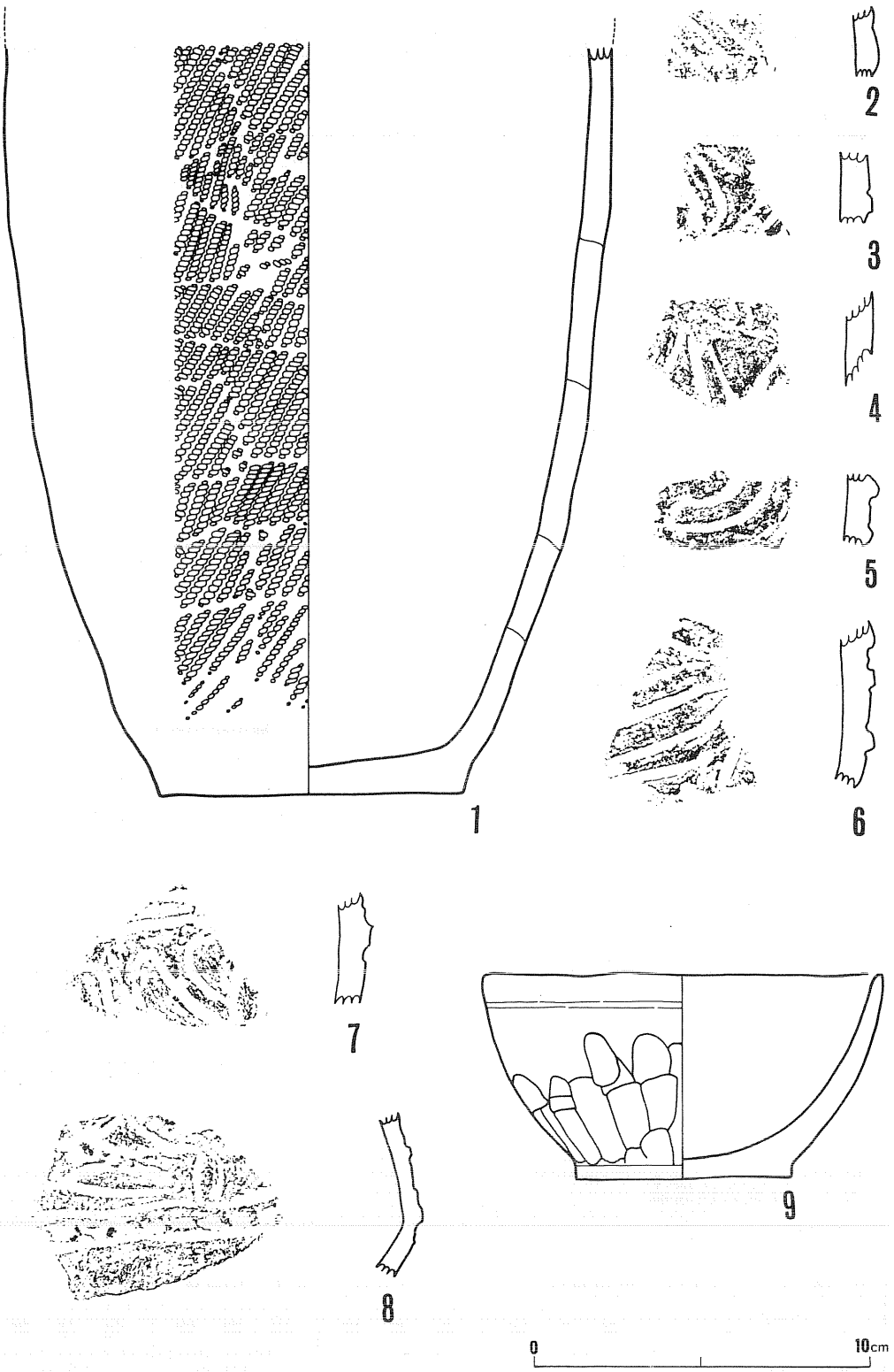
1. 暗褐色土　7.5ＹＲ 3/3　粘性ややあり。しまりなし。極小粒10％混入。
2. 褐色土　7.5ＹＲ 4/4　粘土。カマドの天井に張った粘土と思われる。
3. 赤褐色土　５ＹＲ4/8　粘性なし。しまりよし。褐色土（7.5ＹＲ3/3）10％混入。
4. 黒褐色土　7.5ＹＲ 3/1　粘性ややあり。しまりよし。
5. 褐色土　7.5ＹＲ 4/3　粘性なし。しまり中。極小粒15％混入。
6. 暗赤褐色土　2.5ＹＲ 3/6　粘性なし。しまりよし。

遺物とその出土状態　平安時代の竪穴住居跡であるが、遺物は縄文時代のものも出土している。１は縄文時代の深鉢形土器で胴部に単節ＲＬ縄文を縦位に施文する。２～８は同一個体の土器と思われる。時期は縄文時代後期のものと思われる。９はこの住居跡から出土した唯一の平安時代の遺物で、土師器の坏である。

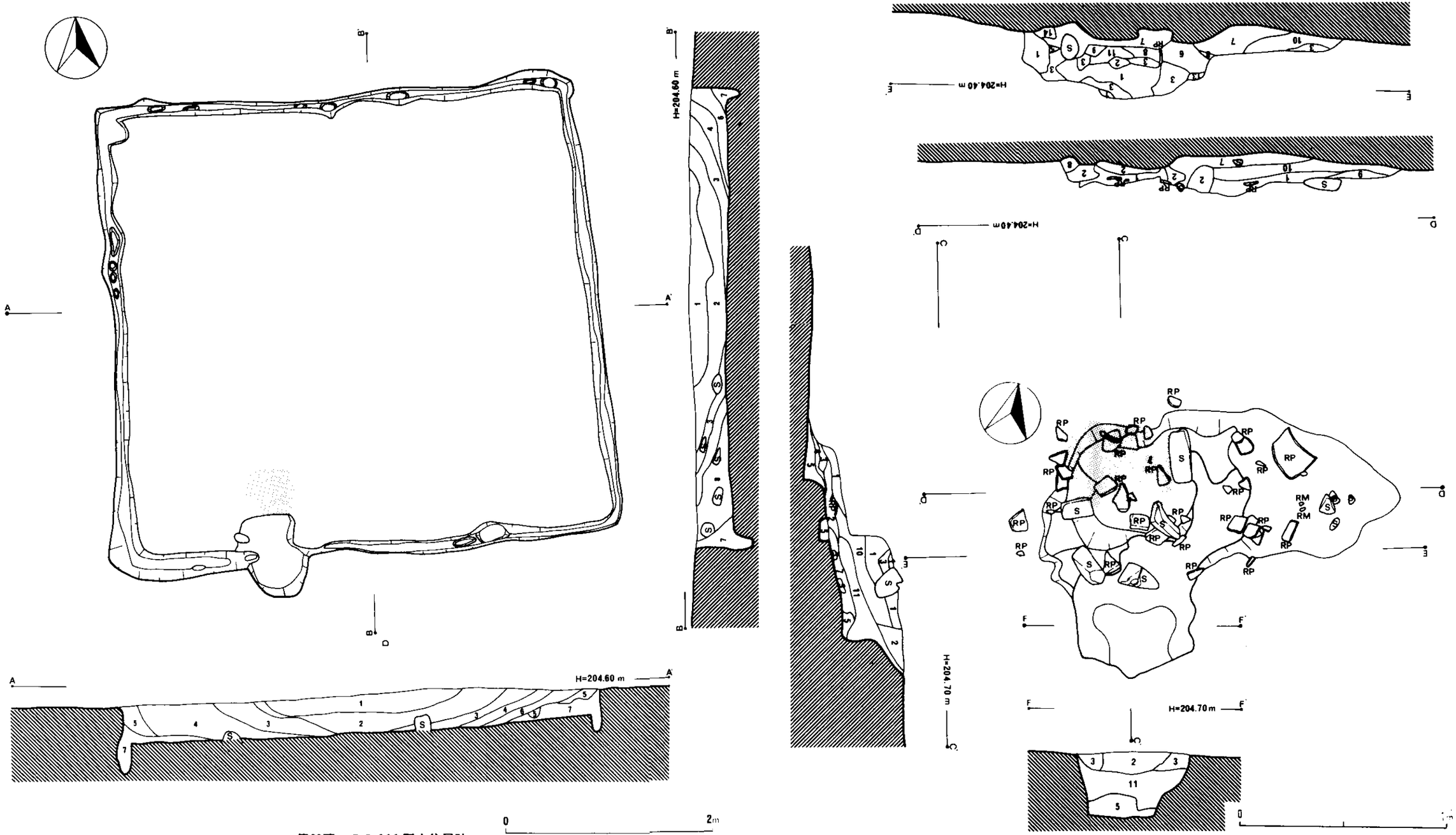
ＳＩ 011竪穴住居跡

第 9 表	挿図番号	第 33 図	図版番号	図 版 13
遺 構 名	ＳＩ 011	検出地区	9－Ｈ、9－Ｉ、10－Ｈ、10－Ｉ	

法量	東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
壁長	4.34m	4.85m	4.97m	4.55m



第32図　ＳＩ００９竪穴住居跡出土遺物



第33図　ＳＩ011竪穴住居跡

		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
法量	壁高	0.21 ～ 0.31m	0.31m	0.30 ～ 0.31m	0.30 ～ 0.31m
	壁溝幅	0.08 ～ 0.11m	0.10 ～ 0.30m	0.09 ～ 0.20m	0.09 ～ 0.11m
	壁溝深	0.02 ～ 0.10m	0.03 ～ 0.21m	0.04 ～ 0.10m	0.03 ～ 0.07m

形態	方形	面積	21.56 ㎡	主軸方向	N 15° W
かまど	位置	南壁西寄り	構築素材	芯部石組	

プラン確認　黒褐色土面にて他の遺構と重複して数個のプランを確認した。ＳＩ011は他の遺構との切り合いが激しくしっかりとプランを把握することが難しかったので、黄褐色土地山面まで一部を掘り下げた。

壁面の状態　壁はしまりよく、ほぼ垂直に立ちあがる。西壁と南壁の一部はＳＩ039の覆土で他と比較して壁は軟弱である。これらの壁はＳＩ039の覆土との相違がわかりにくく、壁溝から推定した部分もあった。

覆土　黒褐色土と暗褐色土がレンズ状に堆積している。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{2}$　粘性なし。しまり中。褐色土（10ＹＲ$\frac{4}{4}$）、浮石10％混入。
2. 暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{4}$　粘性なし。しまり中。褐色土（10ＹＲ$\frac{4}{4}$）、浮石10％混入。
3. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{2}$　粘性なし。しまり中。褐色土（10ＹＲ$\frac{4}{4}$）、浮石５％混入。
4. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{3}$　粘性なし。しまり中。褐色土（10ＹＲ$\frac{4}{4}$）、浮石20％混入。
5. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{2}$　粘性なし。しまり中。褐色土（10ＹＲ$\frac{4}{4}$）、浮石５％混入。
6. 暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{4}$　粘性なし。しまり中。浮石と土の各50％混入。
7. 暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{3}$　粘性なし。しまり中。褐色土（10ＹＲ$\frac{4}{4}$）、浮石５％混入。
8. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{3}$　粘性ややあり。しまり中。

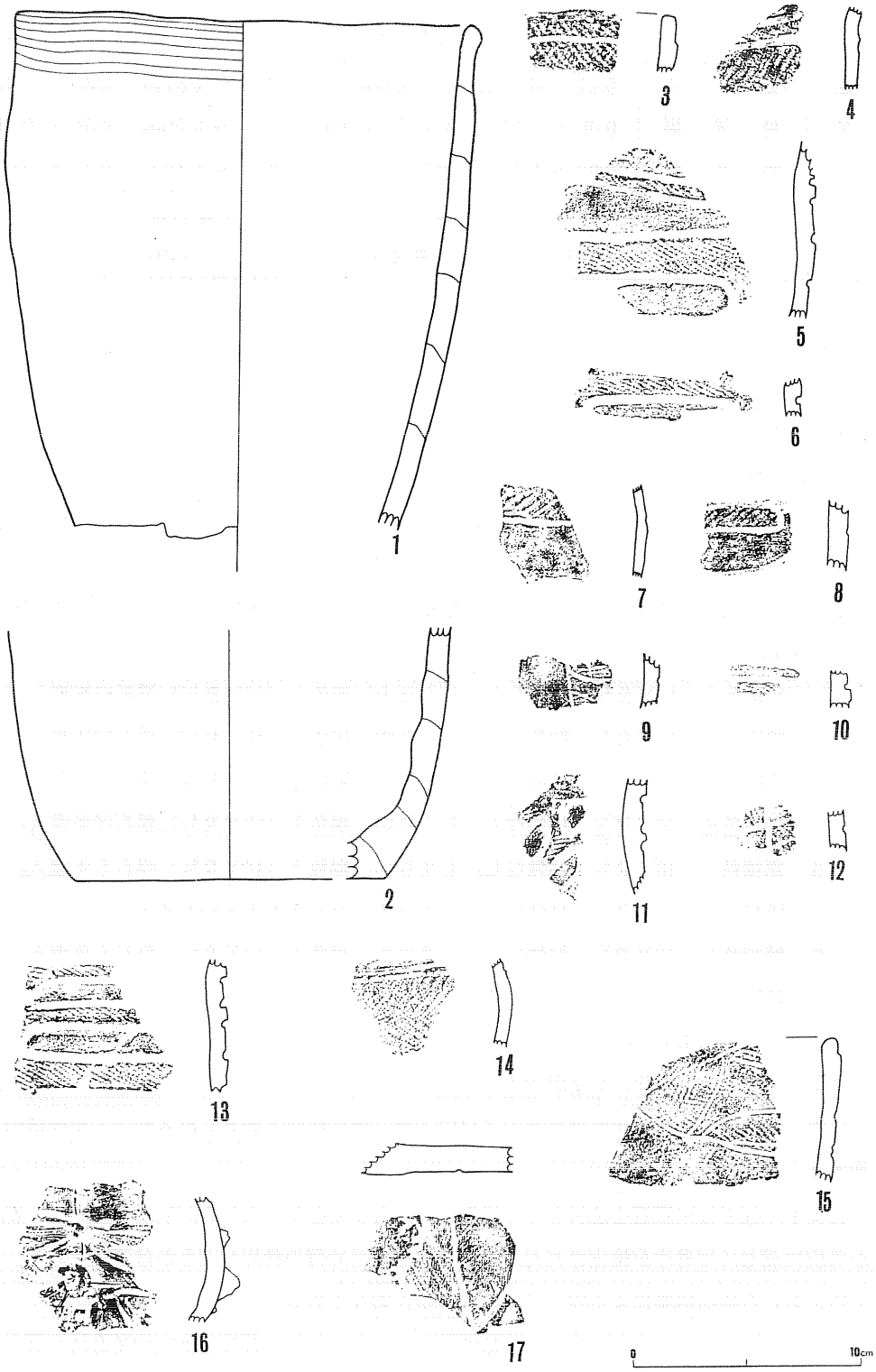
床面　全体が貼床で平坦である。ＳＩ039と重複している部分を除けば堅固である。

壁溝　カマド部分を除いて全周する。

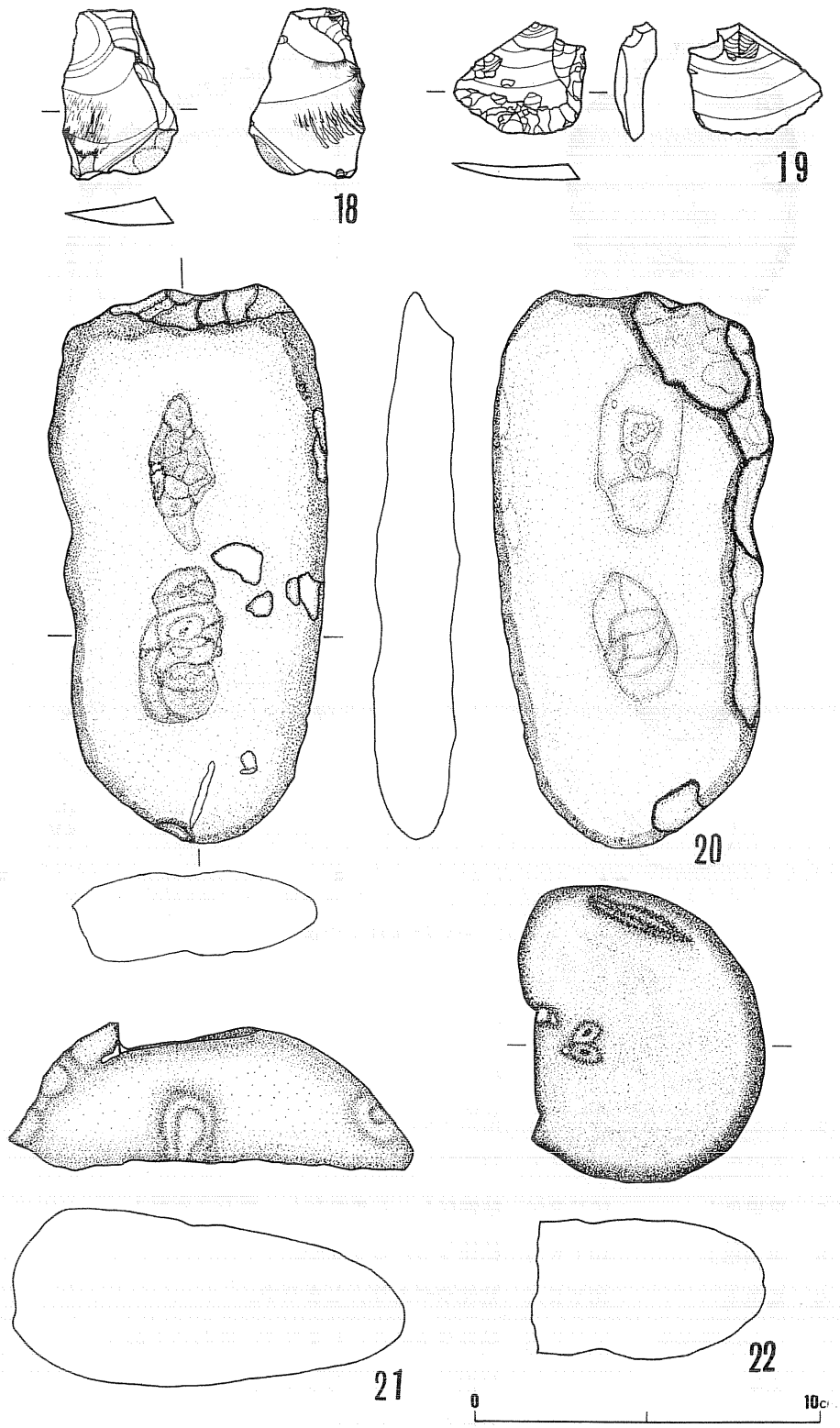
柱穴、ピット　住居跡北西隅壁溝内に柱穴１個、他に柱穴と考えられるピットが壁溝内に５個ある。

カマド　扁平な川原石を芯材として構築されたものである。天井部が崩落している。燃焼部から灰に混じって骨片が検出されたが少量であったため何の骨片かどうかは不明である。カマド内における断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

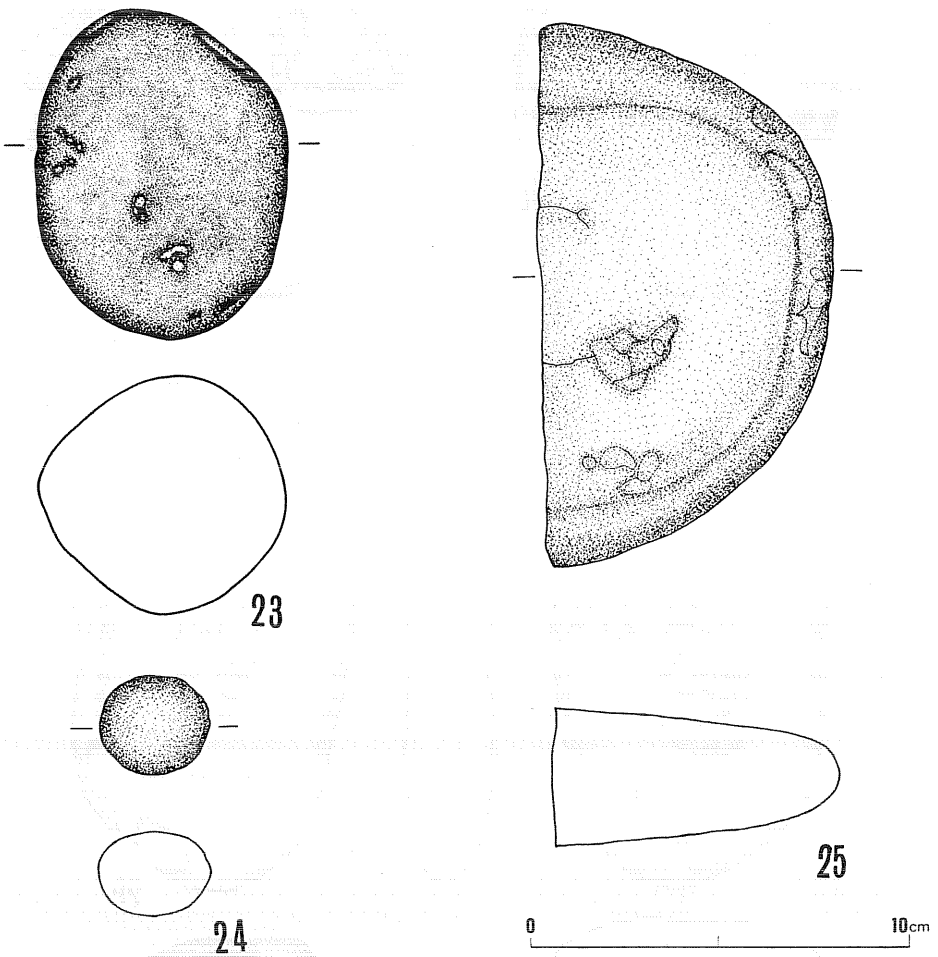
1. 暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{4}$　粘性なし。しまりなし。黄褐色土（10ＹＲ$\frac{5}{8}$）混入。
2. 赤褐色土　５ＹＲ$\frac{4}{6}$　粘性なし。しまりなし。



第34図　ＳＩ011竪穴住居跡出土遺物（１）



第35図　ＳＩ011竪穴住居跡出土遺物（２）



第36図　ＳＩ011竪穴住居跡出土遺物（３）

3. 黄褐色土　10ＹＲ5/6　粘性なし。しまりなし。
4. にぶい黄橙色土　10ＹＲ7/4　粘性なし。しまりなし。
5. にぶい黄橙色土　10ＹＲ6/4　粘性なし。しまりなし。
6. 黒褐色土　10ＹＲ3/2　粘性なし。しまりなし。
7. 黒褐色土　10ＹＲ2/3　粘性なし。しまりなし。浮石２％混入。
8. 黒褐色土　10ＹＲ2/2　粘性なし。しまり中。
9. 褐色土　10ＹＲ4/4　粘性ややあり。しまり中。
10. にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4　粘性ややあり。しまり中。浮石10％混入。
11. 黒褐色土　10ＹＲ3/2　粘性ややあり。しまり中。
12. 黒褐色土　10ＹＲ2/3　粘性なし。しまり中。

13. にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4　粘性ややあり。しまり中。

14. にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/3　粘性ややあり。しまりなし。

遺物とその出土状態　第34～36図に示す遺物が出土した。第34図１、２は土器の甕の胴部と底部である。ロクロ整形後の調整は、表面が磨滅しているため不明である。３～17は縄文時代のものと思われる。14は縄文時代晩期のものと思われるが、その他は縄文時代後期のものと思われる。しかし、３～13と、15、16とでは若干時代的開きがあるように思われる。17は底部に木葉痕を持つものである。

第35、36図はＳＩ011から出土した石器である。18、19は不定形石器、20～22は凹石、23、24は磨石、25は石皿と思われる。なお、25だけはＳ＝1/4である。石質は18、19が硬質頁岩、20、25が凝灰岩、21が石英安山岩、22～24が安山岩である。

ＳＩ012竪穴住居跡

第10表	挿図番号	第37・38図		図版番号	図版14・15
遺構名	ＳＩ012	検出地区	12－Ｉ		
法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	3.75m	3.76m	3.16m	3.23m
	壁高	0.37～0.45m	0.24～0.34m	0.45～0.49m	0.22～0.28m
	壁溝幅	――	――	――	――
	壁溝深	――	――	――	――
形態	方形	面積	12.83㎡	主軸方向	Ｎ5°Ｗ
かまど	位置	東壁北寄り	構築素材	芯部石組	

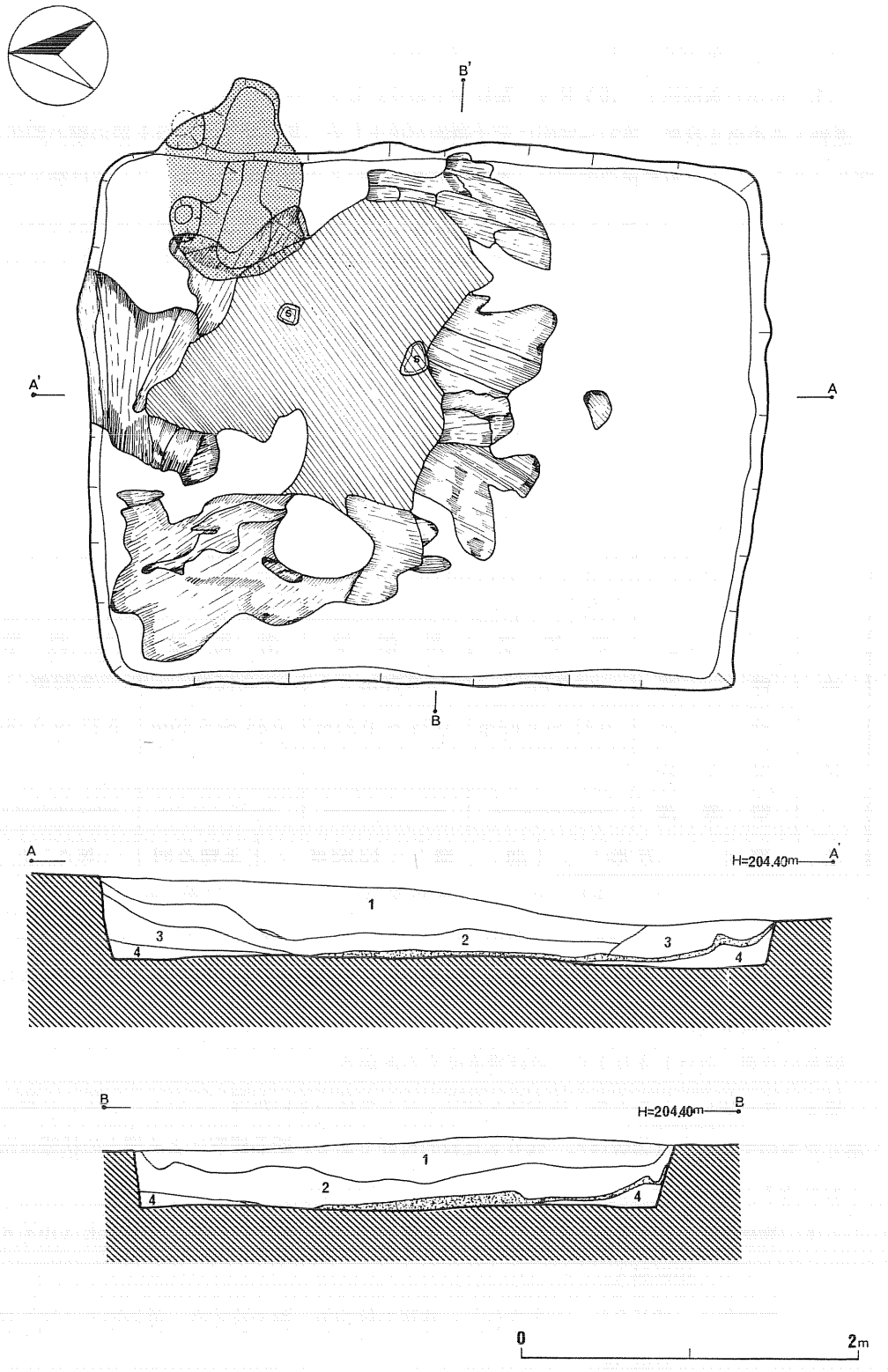
プラン確認　北側の台地縁辺部に向って緩傾斜をなす黄褐色土地山面において黒褐色の方形プランを確認した。

壁面の状態　壁はしまりよく、ほぼ垂直に立ちあがる。

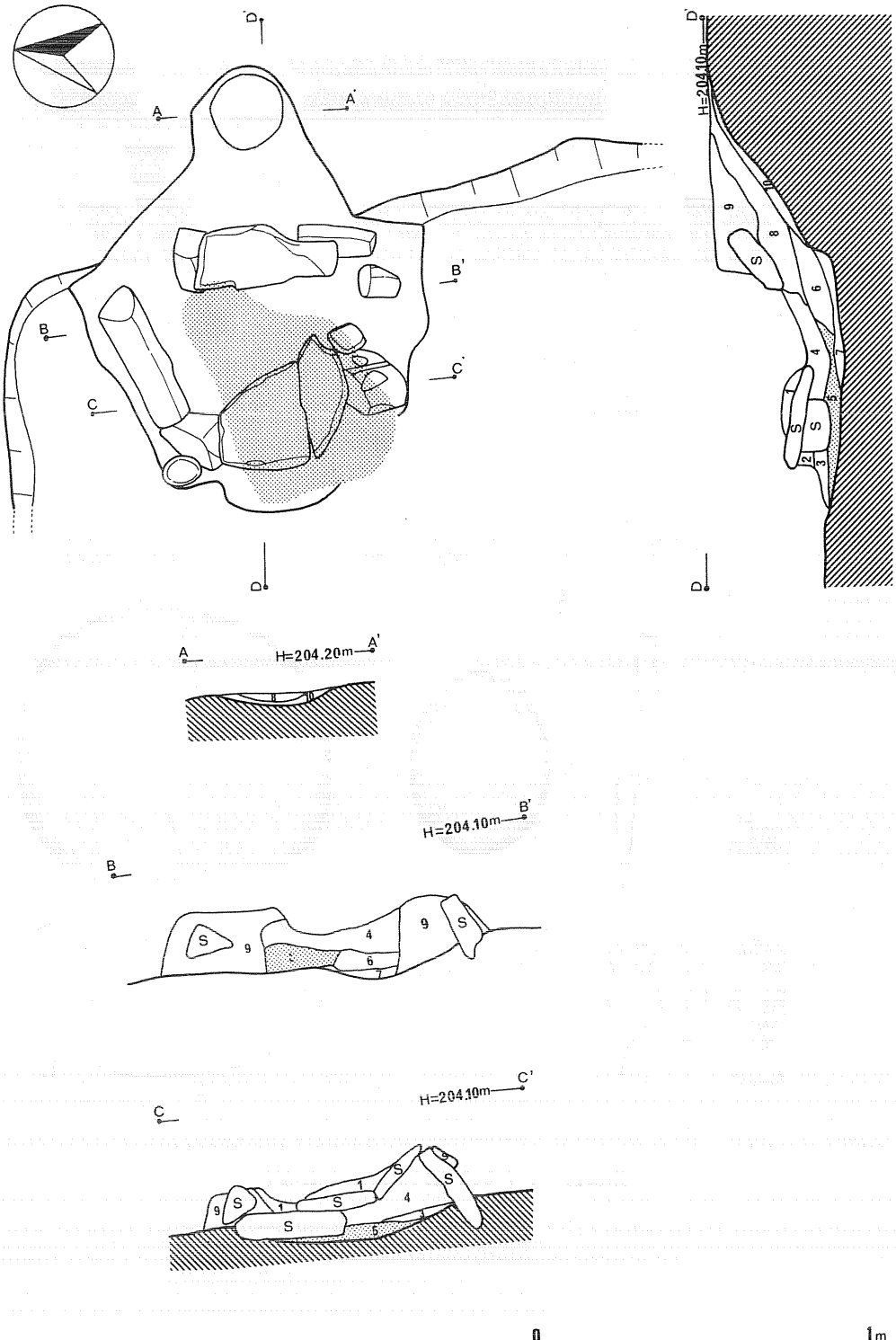
覆土　黒褐色が主であるが、床全体を炭化したカヤ状のものが覆っている。焼失した際に崩落したものであろう（図版14）。残りも比較的良好である。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒褐色土　10ＹＲ2/3　しまりなし。砂質小粒30%、極小粒40%、黄褐色土（10ＹＲ5/8）10%混入。

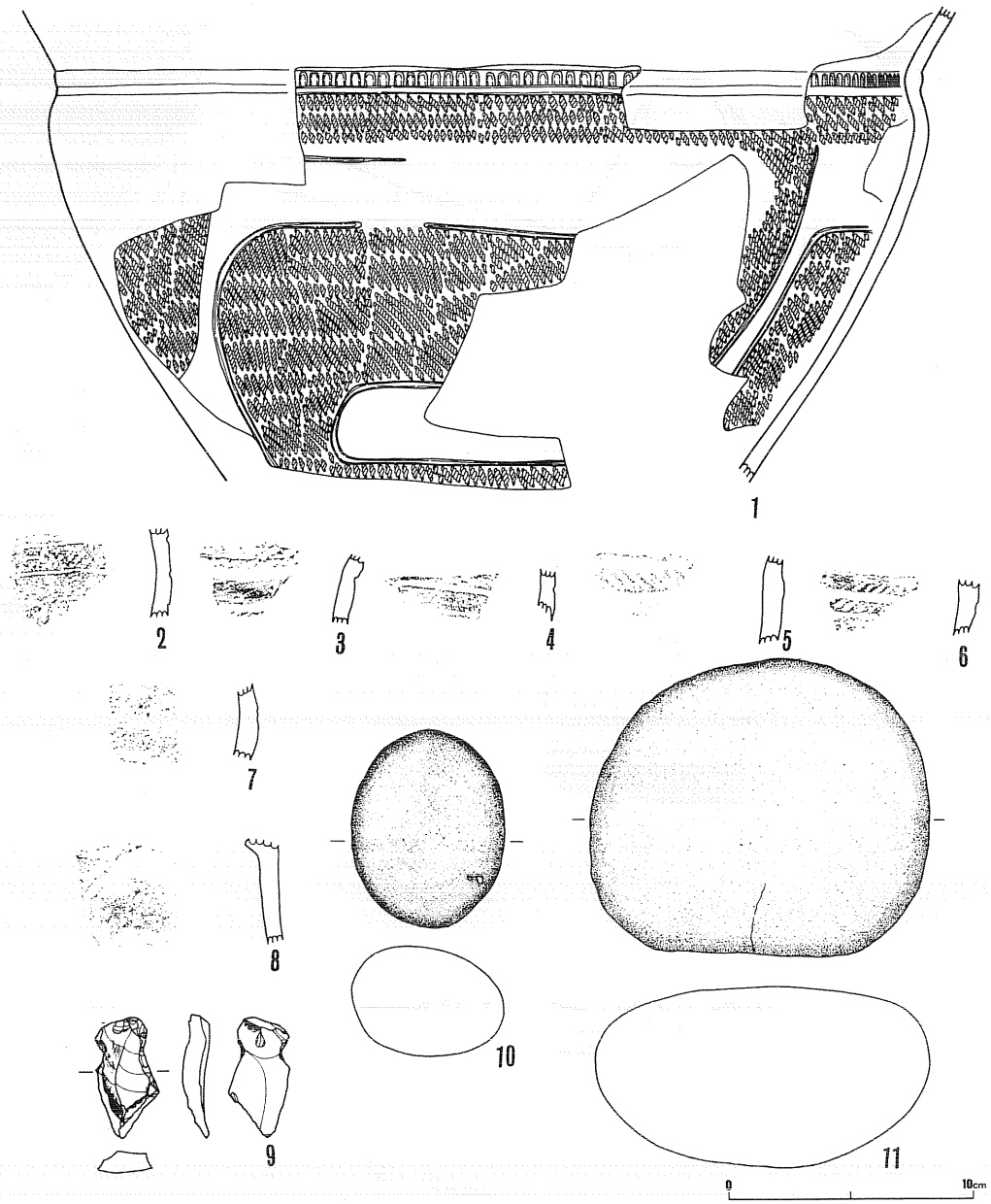
2. 黒褐色土　10ＹＲ2/2　しまりなし。砂質小粒20%、極小粒40%、黄褐色土（10ＹＲ5/8）7%混入。



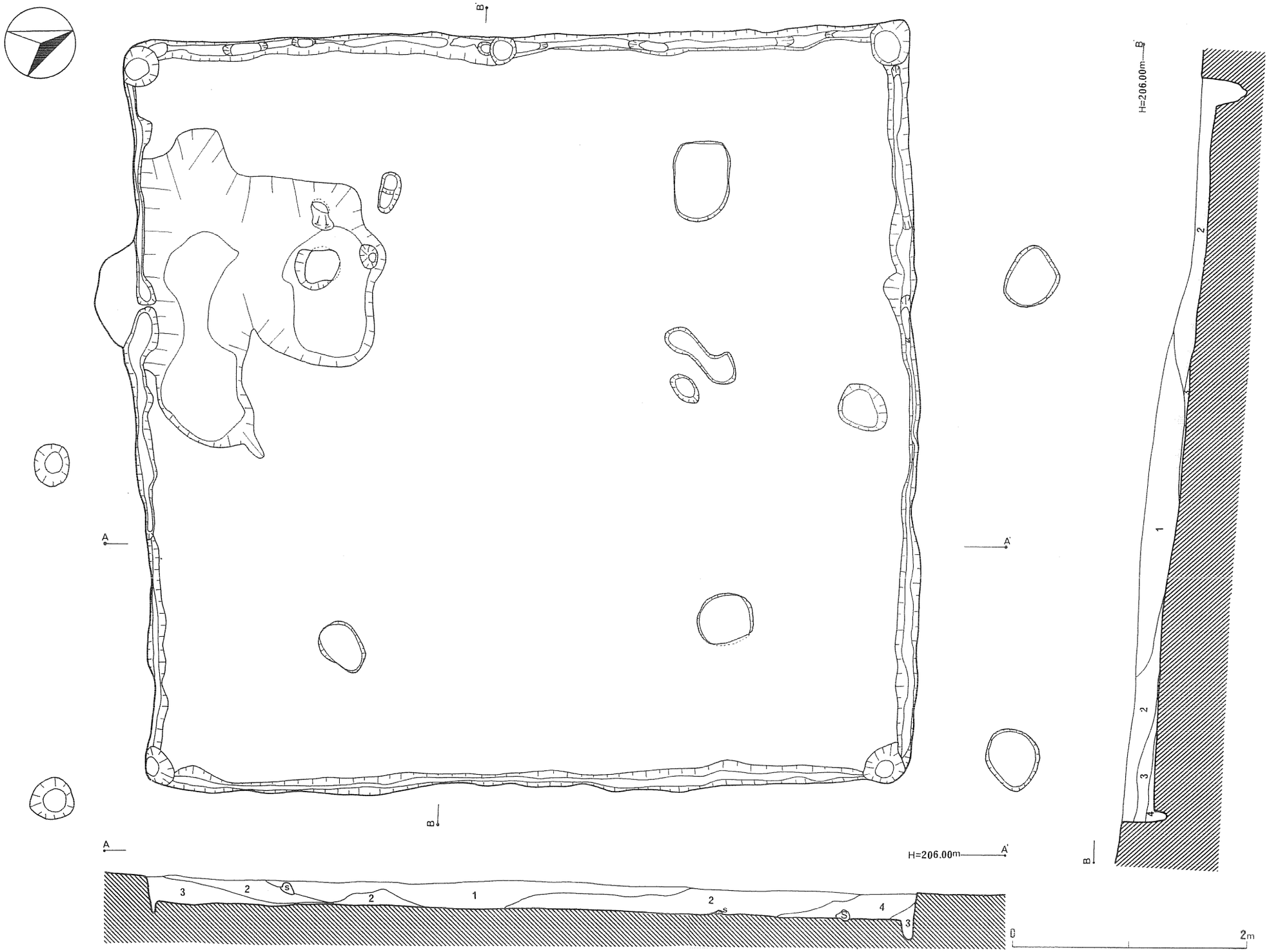
第37図　ＳＩ012竪穴住居跡



第38図　ＳＩ012竪穴住居跡カマド



第39図　ＳＩ012竪穴住居跡出土遺物



第40図　ＳＩ013 竪穴住居跡

3. 褐色土　10YR4/4　しまりなし。砂質小粒20%、極小粒50%。

4. 黒色土　10YR3/1　しまりなし。砂質土。この層にカヤが混入している。上面に炭化物極小粒50%混入。

床面　平坦で堅固である。

壁溝　なし。

柱穴、ピット　なし。

カマド　扁平な石を芯材として構築されたものである。天井部、袖部共に芯材の石が構築当時に近い形で遺存している。煙道は短い。カマド内における断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 赤褐色土　5YR4/8　粘土質。しまり中。石の上にのせた粘土と思われる。
2. 黒褐色土　7.5YR3/1　粘性なし。しまりなし。
3. 黒色土　7.5YR2/1　粘性なし。しまりなし。
4. 褐色土　7.5YR4/4　粘性ややあり。しまりなし。暗褐色土（10YR3/4）10%混入。
5. 赤褐色土　5YR4/8　しまりなし。褐色土（7.5YR4/6）30%混入。
6. 褐色土　7.5YR4/6　粘性ややあり。しまりなし。炭化物2%混入。
7. 暗褐色土　10YR3/4　砂質土。しまりなし。
8. 褐色土　7.5YR4/3　粘性ややあり。しまりなし。暗褐色土（10YR3/4）10%混入。
9. 明褐色土　7.5YR5/6　粘質土。しまりよし。黒褐色（10YR3/2）5%混入。
10. 明褐色土　7.5YR5/6　粘質土。しまりよし。黒褐色（10YR3/2）5%混入。9層よりも焼土の混入率高い。

遺物とその出土状態　第39図に示す遺物が出土した。第39図1は頸部がくびれるもので、口縁は波状口縁を呈したものと思われる。頸部に刻目を施した後、その下部を沈線が1条廻らされている。胴部は磨消縄文が施されているが、沈線ではっきりと区画しているところとそうでないところがある。1～8ともに縄文時代後期のものと思われる。いずれも床直上のカヤ材の上のレベルから出土したもので、あとから混入したと思われる。

9は不定形石器、10は磨石、11は石皿である。石質は、9が硬質泥岩、10、11が安山岩である。

SI 013竪穴住居跡

第 11 表	挿図番号	第 40 ・ 41 図	図版番号	図 版 16
遺 構 名	SI 013	検出地区	3－F、3－G、4－E、4－F、4－G、5－F、5－G	

		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
法量	壁長	6.50m	6.60m	6.30m	6.48m
	壁高	0.21 ～ 0.29m	0.11 ～ 0.30m	0.27 ～ 0.36m	0.11 ～ 0.30m
	壁溝幅	0.06 ～ 0.23m	0.20 ～ 0.25m	0.10 ～ 0.17m	0.06 ～ 0.11m
	壁溝深	0.02 ～ 0.09m	0.05 ～ 0.09m	0.02 ～ 0.10m	0.01 ～ 0.10m

形態	方形	面積	42.15㎡	主軸方向	N 11° W
かまど 位置	南壁西寄り	構築素材	芯部石組		

プラン確認　黄褐色土地上面において黒褐色の方形プランを確認した。

壁面の状態　壁はしまりよく、垂直に近い立ちあがりをする。

覆土　黒褐色土と暗褐色土がレンズ状に堆積している。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒褐色土　10YR2/3　粘性ややあり。しまりなし。浮石5%、極小粒20%混入。
2. 暗褐色土　10YR3/4　粘性なし。にぶい黄褐色砂質土（10YR5/4）20%、黒褐色土（10YR2/3）5%、極小粒30%混入。
3. 黒褐色土　10YR2/3　粘性なし。しまりなし。極小粒10%、小粒2%混入。
4. にぶい黄褐色土　10YR4/3　粘性なし。黒褐色土（10YR2/3）2%、極小粒5%混入。

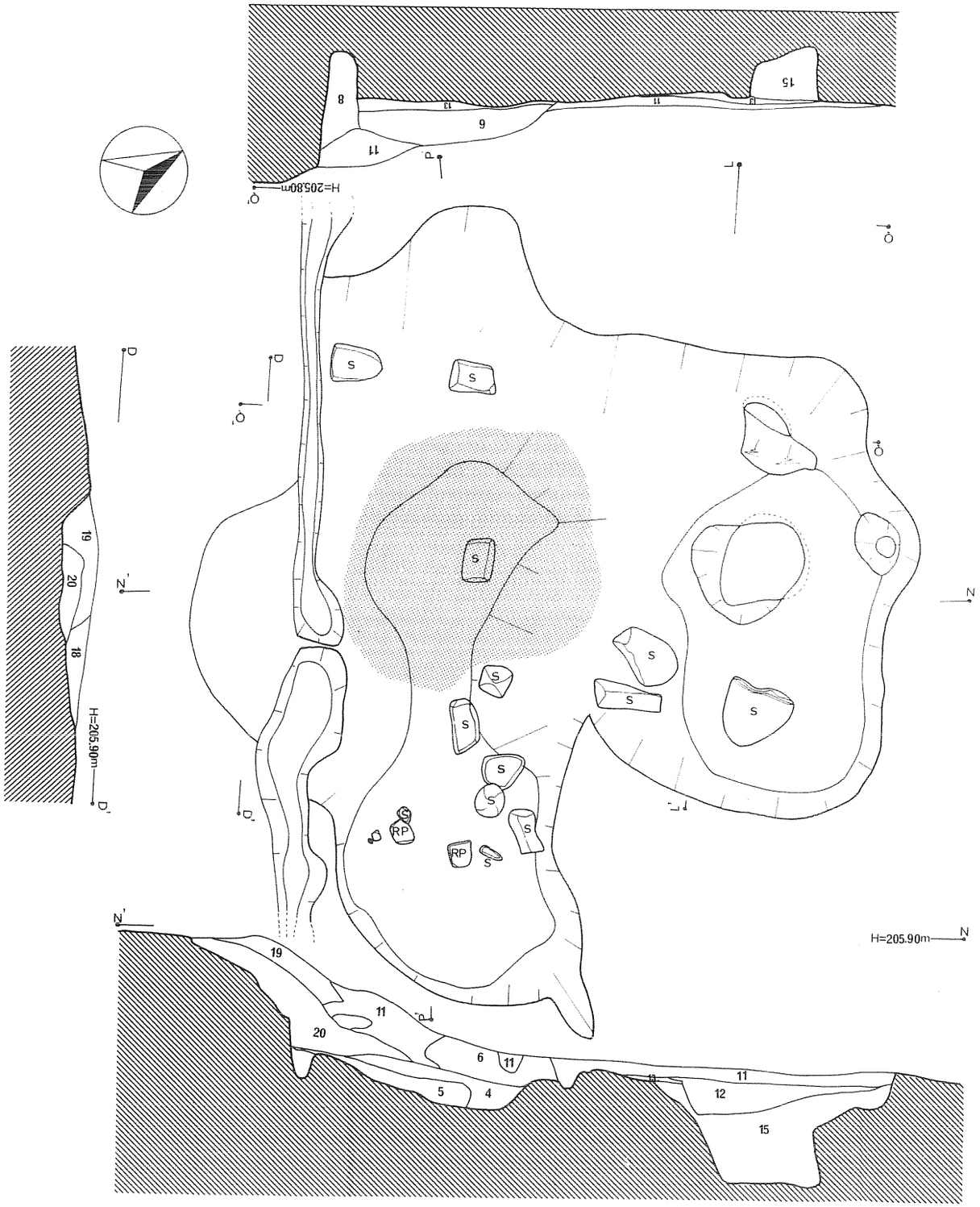
床面　平坦で堅固である。

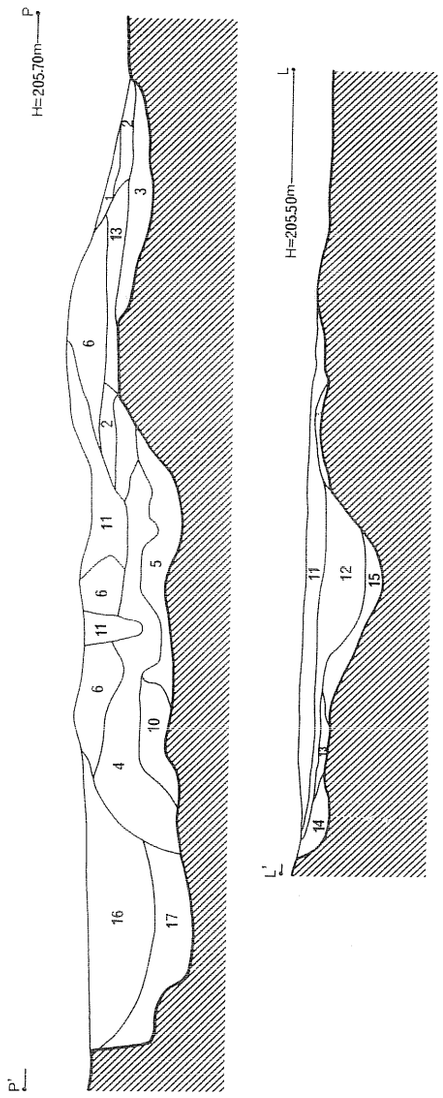
壁溝　ほぼ全周する。

柱穴、ピット　住居跡四隅の壁溝内と西壁中間地点の壁溝内に1個の計5個の柱穴を確認した。他に7個のピットを確認、うち4個は住居跡対角線上に位置する。

カマド　遺存状態不良で、原形を残さない。石を芯材として構築されたものであろう。カマド内における断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒褐色土　10YR3/2　粘性なし。しまりなし。極小粒3%混入。
2. 暗褐色土　10YR3/3　粘性なし。しまりなし。極小粒10%混入。
3. 褐色土　10YR4/6　粘性なし。しまりなし。極小粒5%、暗褐色土（10YR3/3）10%混入。
4. 黒褐色土　10YR2/3　粘性なし。しまり中。褐色土（7.5YR4/4）5%、炭化物2%混入。
5. 暗褐色土　7.5YR3/4　粘性なし。しまり中。炭化物2%混入。
6. 褐色土　7.5YR4/4　粘性ややあり。しまり中。黒褐色土（10YR3/2）10%、極小粒3%混入。





0 1m

第41図　ＳＩ013竪穴住居跡カマド

7．黒褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{2}$　粘性なし。しまり中。炭化物１％、極小粒３％混入。

8．黒褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{2}$　粘性なし。しまりなし。

9．黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{2}$　粘性なし。しまりなし。黄褐色土（10ＹＲ$\frac{5}{6}$）５％混入。

10．褐色土　10ＹＲ$\frac{4}{4}$　粘性なし。しまり中。小粒１％、極小粒３％混入。

11．黒褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{2}$　粘性なし。しまりなし。にぶい黄褐色土（10ＹＲ$\frac{5}{4}$）１％混入。

12．暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{3}$　粘性なし。しまり中。砂質、明黄褐色土（10ＹＲ$\frac{7}{6}$）２％混入。

遺物とその出土状態　遺物は出土しなかった。

ＳＩ035竪穴住居跡

第12表	挿図番号	第42図		図版番号	図版17
遺構名	ＳＩ035	検出地区	10－Ｆ、10－Ｇ、11－Ｆ、11－Ｇ		
法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	3.75m	（1.37m）	2.02m	1.95m
	壁高	0.21～0.25ｍ	――	0.19～0.24ｍ	0.02～0.32ｍ
	壁溝幅	――	――	――	――
	壁溝溝	――	――	――	――
形態	方形	面積	（7.10㎡）	主軸方向	Ｎ21°Ｅ
かまど	位置	南壁西寄り	構築素材	袖芯部石組	

プラン確認　褐色地山面において黒褐色の方形プランを確認。西側がＳＩ036と重複しており、ＳＩ036より新しい。

壁面の状態　壁はしまりよく、垂直に立ちあがる。西壁と北壁の一部はＳＩ036と重複しているため壁が軟弱で不明瞭である。

覆土　レンズ状堆積である。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

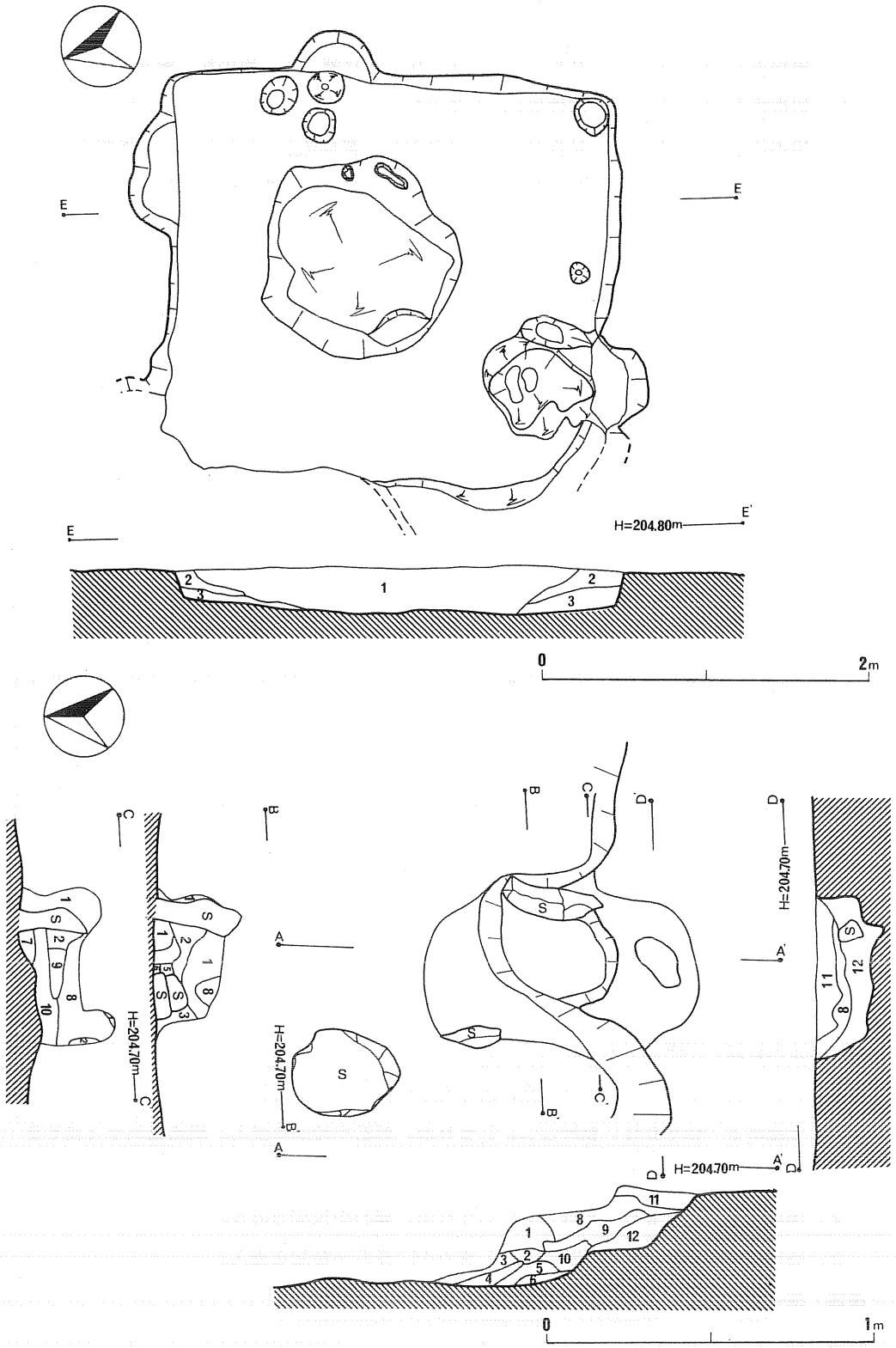
1．黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{3}$　粘性なし。しまり中。浮石小粒30％混入。明黄褐色土（10ＹＲ$\frac{7}{6}$）10％混入。

2．黒褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{2}$　粘性なし。しまり中。浮石小粒30％混入。

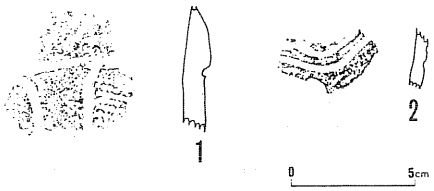
3．暗褐色土　10ＹＲ$\frac{3}{3}$　粘性なし。しまり中。浮石小粒30％混入。

床面　部分的に貼床である。平坦で堅固である。

壁溝　なし。



第42図　ＳＩ035竪穴住居跡



第43図　ＳＩ035竪穴住居跡出土遺物

柱穴、ヒット　東南隅に柱穴１個、その他ピット４個確認した。

カマド　扁平な石を芯材として構築されたものである。崩落して明確に遺存しているのは東側の袖だけである。煙道は短い。カマド内における断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

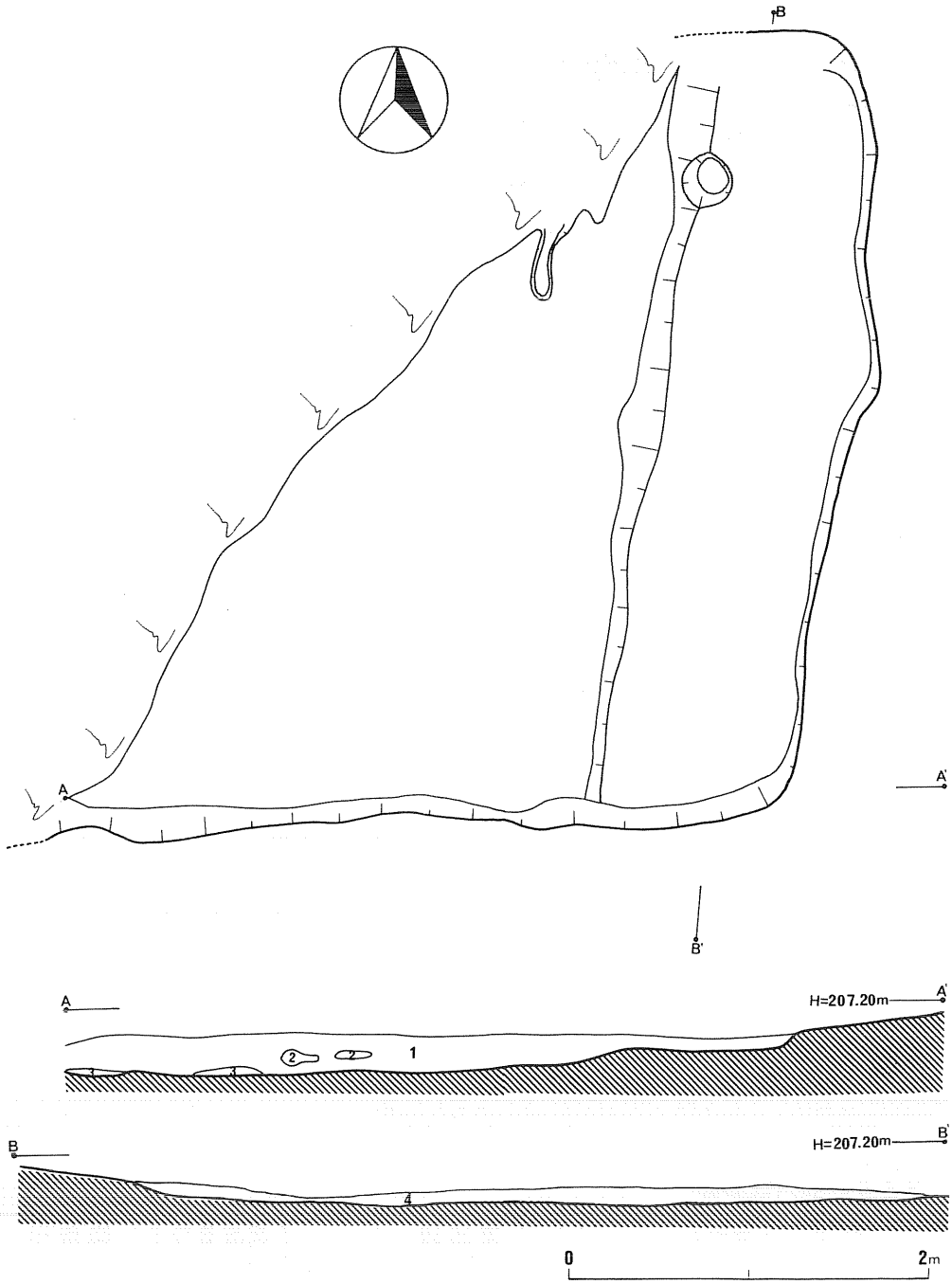
１．褐色土　10ＹＲ4/4　粘性なし。しまり中。明黄褐色土（10ＹＲ6/6）混入。
２．黒褐色土　10ＹＲ2/3　粘性あり。しまりなし。灰質層。
３．褐色土　10ＹＲ4/4　粘性なし。しまりなし。灰質層。
４．褐色土　7.5ＹＲ4/4　粘性なし。しまりなし。
５．褐色土　7.5ＹＲ4/3　粘性なし。しまりなし。
６．黒褐色土　10ＹＲ2/2　粘性なし。しまり中。
７．黒褐色土　10ＹＲ3/2　粘性あり。しまり中。
８．褐色土　10ＹＲ4/4　粘性なし。しまりよし。黒褐色土（10ＹＲ3/2）混入。
９．黒褐色土　7.5ＹＲ3/2　粘性なし。しまりなし。
10．黒褐色土　10ＹＲ2/2　粘性ややあり。しまりなし。わずかに焼土を含む。
11．黒褐色土　7.5ＹＲ3/2　粘性なし。しまりよし。焼土を含む。
12．暗褐色土　10ＹＲ3/3　粘性ややあり。しまりなし。

遺物とその出土状態　縄文時代の土器が２片、土師器の坏の破片が数片出土したのみである。第43図の土器はいずれも縄文時代後期のものと思われる。

ＳＩ041竪穴住居跡

第13表	挿図番号	第26図	図版番号	図版18
遺構名	ＳＩ041	検出地区	8－K、9－K	

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁長	4.12m	――	（1.37ｍ）	（0.67ｍ）
	壁高	0.04～0.10ｍ	――	――	――



第44図　S I 041 竪穴住居跡

法量		東側壁	西側壁	南側壁	北側壁
	壁溝幅	―――	―――	―――	―――
	壁溝深	―――	―――	―――	―――

形態	方形	面積	（11.70㎡）	主軸方向	
かまど	位置	―――	構築素材	―――	

プラン確認　台地西端の黄褐色土地山上面において黒褐色の台形プランを確認した。西と北壁は農道工事の際、削平されている。

壁面の状態　壁の大部分が削平を受けているため現状からの推察であるが、壁はしまりよく垂直に近い立ちあがりをする。

覆土　黒褐色土を主とし、ブロック状に褐色土、にぶい黄褐色土が混入している。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

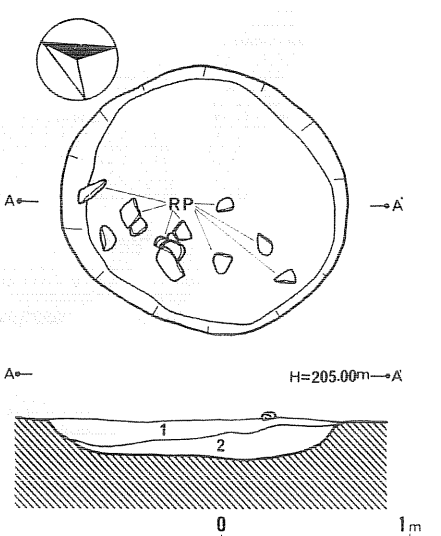
1. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{2}$　粘性ややあり。しまり中。浮石極小10％混入。にぶい黄褐色土（10ＹＲ$\frac{5}{4}$）５％混入。
2. にぶい黄褐色土　10ＹＲ$\frac{5}{4}$　粘性なし。しまり中。黒褐色土（10ＹＲ$\frac{2}{3}$）20％混入。
3. 褐色土　7.5ＹＲ$\frac{4}{6}$　粘性なし。しまり中。
4. 黒褐色土　10ＹＲ$\frac{2}{3}$　粘性なし。しまり中。黄褐色土（10ＹＲ$\frac{5}{6}$）大粒５％混入。

壁溝　確認されなかった。

柱穴、ピット　確認されなかった。

カマド　検出されなかったが、飛鳥平遺跡の他の住居跡のカマドは一例（ＳＩ012の東壁）を除いて南壁にあるため、削平を受けている南壁西寄りにカマドが構築されてあった可能性もある。

遺物とその出土状態　遺物は出土しなかった。



第45図　ＳＫ008土壙

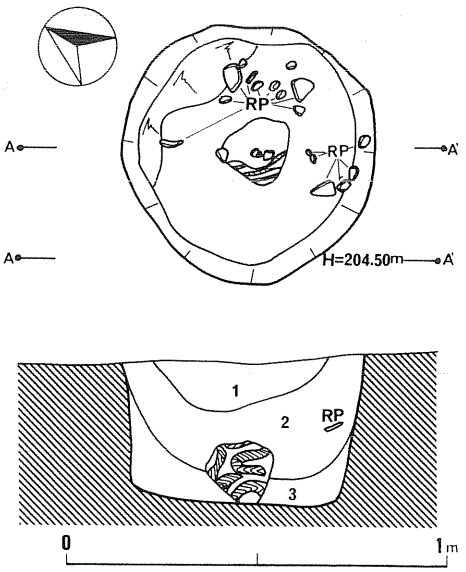
イ．土　　壙

ＳＫ008土壙　（第45図　図版18）

９－Ｇ、９－Ｈ地区から地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。壙口部1.50

m×1.37m、壙底部1.31m×1.24m、最深の深さ0.20mを計る。底面はほぼ平らで、埋土中に礫はほとんど含んでいない。遺物は埋土上層から縄文土器が数片出土した。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

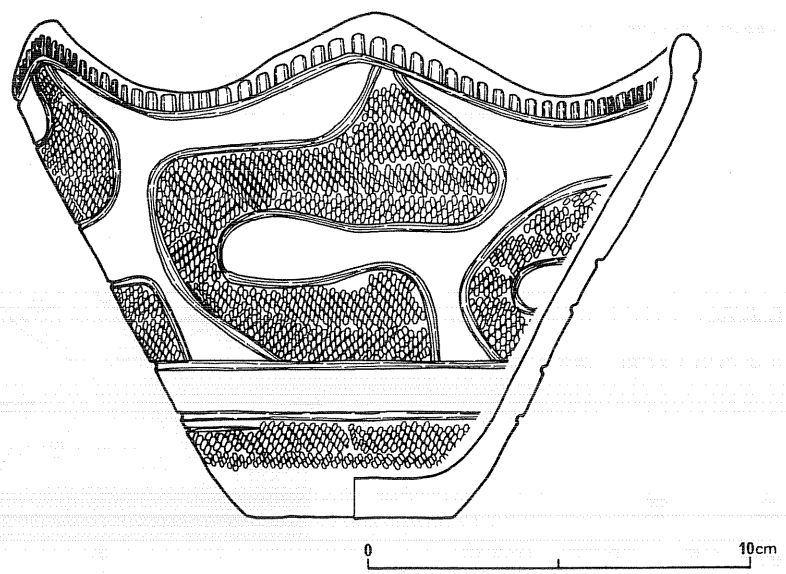
1. にぶい黄橙色土　10YR7/3　粘性なし。しまりあり。浮石層である。黒褐色土（10YR3/1）10%混入。
2. 黒褐色土　10YR3/1　粘性ややあり。しまりあり。にぶい黄橙色（10YR7/3）の浮石10%混入。



第46図　SK014土壙

SK014土壙　（第46図　図版19）

10－J、11－J地区から地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。壙口部



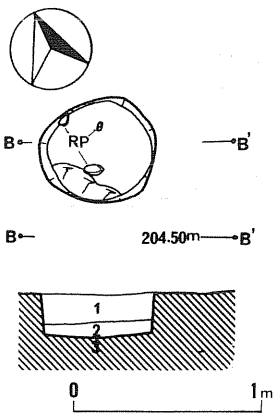
第47図　SK014土壙出土土器

1.35m×1.26m、壙底部1.12m×1.20m、最深の深さ0.75mを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面もほぼ平らである。埋土中に礫はほとんど含まれていない。底面から完形の鉢形土器1点が出土した。第47図がその土器で、口縁部は5つの波状口縁からなる。胴部に羽状縄文を施したあと、沈線で区画し、その外側を磨消している。その他、第2層中から縄文土器の破片が数点出土した（第69図1）。いずれも縄文時代後期のものと思われる。断面観察による埋土の状態は次の通りである。

1. 黒色土　10YR2/1　粘性ややあり。しまり中。
2. 黒褐色土　10YR2/3　粘性あり。しまり中。
3. 暗褐色土　10YR3/3　粘性ややあり。しまり中。

SK015 土壙　（第48図）

10－J、11－J地区から地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。壙口部0.62m×0.55m、壙底部0.55m×0.53m、最深の深さ0.25mを計る。壁は垂直に近い立ち上がりをし、底面はほぼ平らである。礫はほとんど含まれていない。第2層から土器が数点出土した。いずれも地文に単節LR縄文を施したものである。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

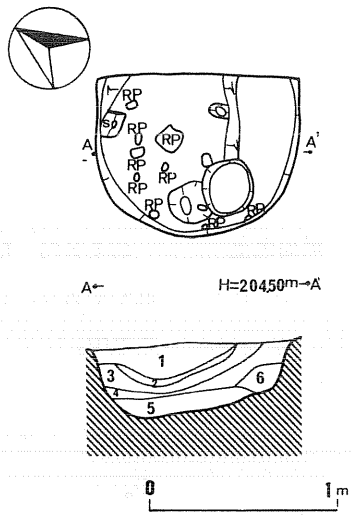


第48図　SK015 土壙

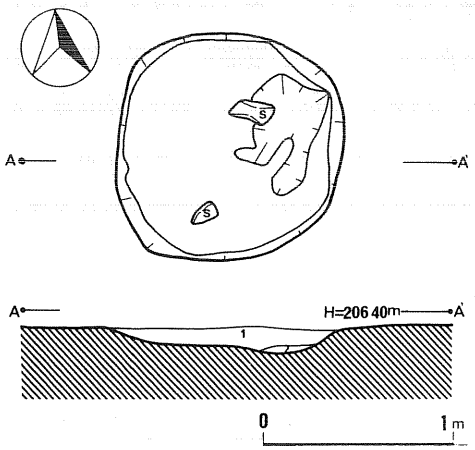
1. 黒褐色土　10YR3/2　粘性ややあり。しまり中。
2. にぶい黄褐色土　10YR4/3　粘性あり。しまり中。
3. 黄褐色土　10YR5/6　粘性あり。しまり中。地山。

SK016 土壙　（第49図　図版19）

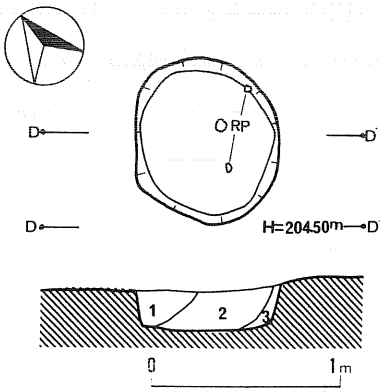
11－J地区から地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。壙縁部1.07m×0.86m、壙底部0.98m×0.83m、最深の深さ0.38mを計る。底面から壁面への境はゆるやかで、底面は北西側がやや深くなっている。埋土中に若干の礫が含まれている。第69図2、3に示す土器が出土した。いずれも同一個体の土器の破片と思われる。体部に羽状縄文が施される。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。



第49図　SK016 土壙



第50図　ＳＫ017土壙

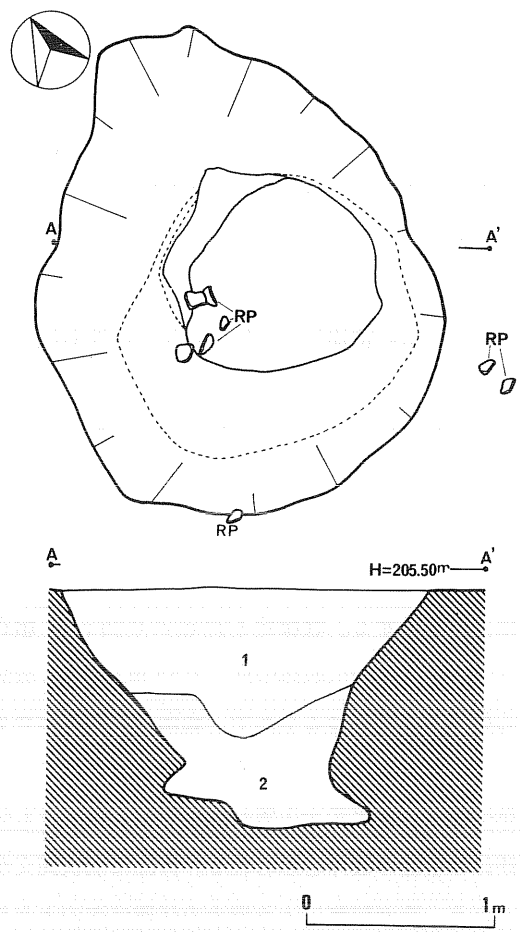


第51図　ＳＫ018土壙

1. 褐色土　10ＹＲ4/4　粘性ややあり。しまり中。
2. にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4　粘性あり。しまり中。
3. 黒褐色土　10ＹＲ3/1　粘性あり。しまり中。
4. 褐色土　10ＹＲ4/4　粘性ややあり。しまり中。
5. 黒褐色土　10ＹＲ3/2　粘性ややあり。しまり中。
6. 黄褐色土　10ＹＲ5/6　粘性なし。しまり中。

ＳＫ017土壙　（第50図　図版20）

３－Ｄ、３－Ｅ地区から地山上面に



第52図　ＳＫ020土壙

て検出された。平面形は円形を呈する。壙口部1.20m×1.18m、壙底部1.12m×1.11m、最深の深さ0.14mを計る。底面はほとんど平らで浅い土壙である。埋土中に小礫を含む。遺物はまったく出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒褐色土　10YR$\frac{2}{3}$　粘性ややあり。しまり中。
2. 黒色土　10YR$\frac{2}{1}$　粘性ややあり。しまり中。

SK018 土壙　（第51図）

10－K地区から地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。壙口部0.90m×0.76m、壙底部0.75m×0.70m、最深の深さ0.20mを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面もほぼ平らである。埋土中に礫はほとんど含まれていない。遺物は第2層中から縄文時代の土器の小破片が数点出土した。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 暗褐色土　10YR$\frac{3}{3}$　粘性ややあり。しまり中。
2. 黒色土　10YR$\frac{2}{1}$　粘性ややあり。しまり中。
3. 褐色土　10YR$\frac{4}{4}$　粘性ややあり。しまり中。

SK020 土壙　（第52図）

9－I地区から地山上面にて検出された。平面形は不整円形（フラスコ）を呈する。壙口部2.60m×1.96m、頸部1.18m×0.92m、壙底部1.54m×1.42m、最深の深さ1.25mを計る。壙口部からゆるやかにくびれて頸部に至り、壙底部にかけては急激に広がるいわゆるフラスコ状ピットである。埋土中に礫はほとんど含んでいない。第69図4～14に示す土器が出土した。4～13は磨消縄文手法を用いたもの、14は網目状撚糸文土器で、いずれも縄文時代後期のものと思われる。主軸方位はN18°Wである。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 暗褐色土　10YR$\frac{3}{3}$　上面に黒色土（10YR$\frac{1.7}{1}$）に赤色酸化化を極小粒混入。
2. 褐色土　10YR$\frac{4}{4}$　粘性ややあり。黄褐色粒子を含む。

SK021 土壙　（第53図）

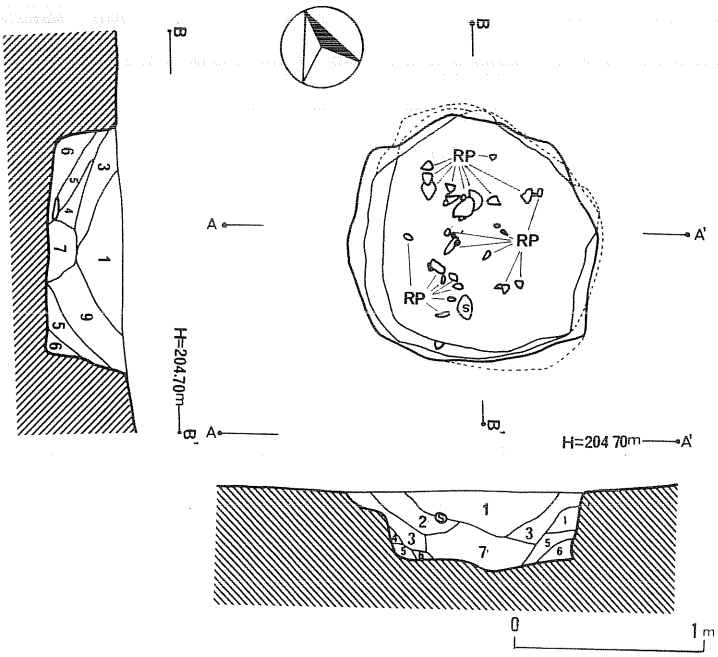
9－I地区から地山上面にて検出された。平面形は不整円形を呈する。壙口部1.30m×1.25m、壙底部1.42m×1.14m、最深の深さ0.42mを計る。壁は、東側は垂直に近いか、ややえぐれている。西側は中間に1段平らになっている箇所がある。底面はほぼ平らである。埋土中に礫が若干含まれている。第69図15に示す土器が出土した。15は縄文時代後期のものと思われる。主軸方位はN57°Wである。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒色土　10YR$\frac{2}{1}$　粘性なし。しまり中。浮石小粒30%混入。
2. 黒褐色土　10YR$\frac{2}{2}$　粘性なし。しまり中。浮石小粒25%、炭化物5%混入。
3. 暗褐色土　10YR$\frac{3}{3}$　粘性なし。しまり中。浮石小粒40%混入。
4. 黒褐色土　10YR$\frac{3}{2}$　粘性なし。しまり中。浮石小粒10%混入。

5. 褐色土
10ＹＲ4/4　粘性なし。しまり中。浮石小粒５％混入。

6. 黒褐色土
10ＹＲ3/2　粘性なし。しまり中。浮石小粒20％混入。

7. 黒褐色土
10ＹＲ2/2　粘性なし。しまり中。

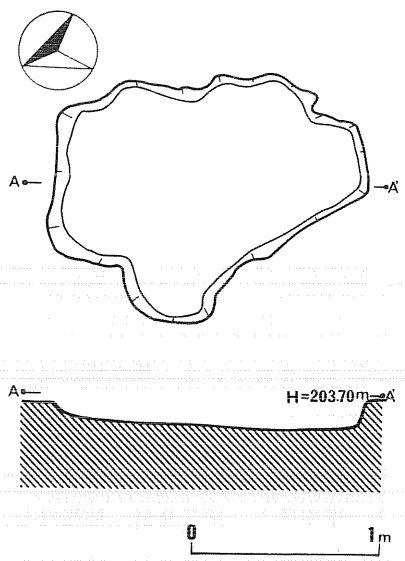


第53図　ＳＫ021土壙

ＳＫ022土壙

（第54図
図版43）

12－Ｉ、12－Ｊ地区から地山上面にて検出された。平面形は不整形を呈する。壙口部1.70ｍ×1.32ｍ、壙底部1.58ｍ×1.20ｍ、最深の深さ0.15ｍを計る。壁は不明確な箇所も多く、全体的に浅い土壙である。第55図に示す土器が土壙ほぼ中央から、やや頭を傾けた状態で出土した。秋田県内では出土例が稀な蓋付土器である。縄文は施されておらず、体部に片側２ケ所ずつの穿孔部分と一致して底部に刻目が施されており、紐状のものでつり下げて使用したものと推察される。また穿孔部に対して90度横位回転した部分に粘土を貼付して盛り上げた部分がある。全体に朱塗りされており、胴下半から底部にかけての一部に焼けた跡がある。胴体と蓋の部分は竹ひご状のもので突き刺して分離したものと思われる。

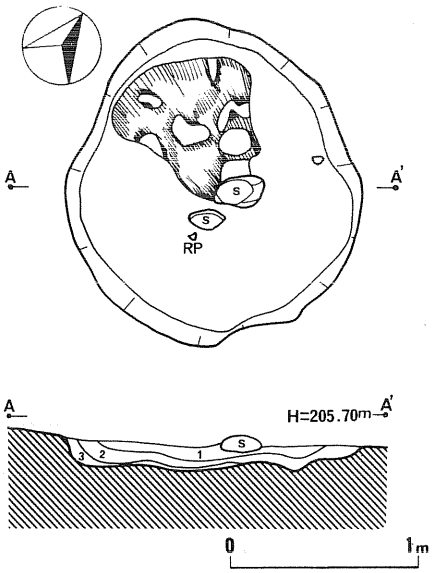


第54図　ＳＫ022土壙

飛鳥平遺跡の北方約0.3 kmにあたる北の林Ⅱ遺

第55図　ＳＫ022土壙出土土器

跡においても同様の土器が出土している（秋田県教育委員会「東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅳ」北の林Ⅱ遺跡　昭和57年）が、やや形態を異にする。本遺跡から出土したものは、胴部が片側2か所ずつ穿孔されているが、蓋の部分には穿孔されていない。これに対して北の林Ⅱ遺跡出土のものは蓋の部分にも穿孔があり、仮に紐などでぶらさげて使用したものと考えると、蓋を開いた状態で使用できる。蓋付土器の用途については不明であるが、他県の出土例と比較すると縄文時代後期に集中するところに共通点があると言えよう。



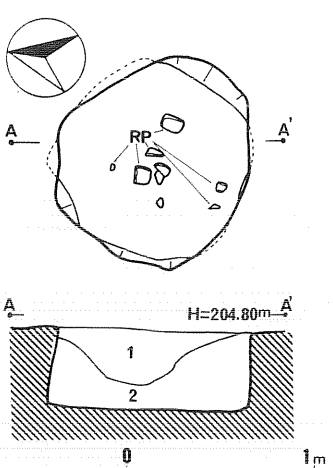
第56図　ＳＫ024土壙

ＳＫ024土壙　（第56図）

3－H、3－G、4－G地区から地山上面にて検出された。平面形は円形を呈する。壙口部1.74ｍ×1.56ｍ、壙底部1.52ｍ×1.45ｍ、最深の深さ0.17ｍを計る。壁はゆるやかな立ち上がりを呈する浅い土壙である。土壙はほぼ中央に扁平な石があった。また、北東部には炭化材があったが、その下の土が焼けた状態にはなっておらず、あとで廃棄された可能性もある。遺物は図中に示した土師器片1点が出土したのみである。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 褐色土　　10ＹＲ¼　粘性ややあり。
2. 黒褐色土　　10ＹＲ⅔　粘性ややあり。
3. にぶい黄褐色土　10ＹＲ⅝　粘性ややあり。

土壙内から出土の炭化材を日本アイソトープ協会に依頼して^{14}C年代測定したところ、1,140±80ｙＢ．Ｐ．（1,100±75ｙＢ．Ｐ．）と測定結果が出ており、他の平安時代の竪穴住居跡の一部の営なまれていた頃と同じものと推察される。



第57図　ＳＫ025土壙

ＳＫ025土壙　（第57図）

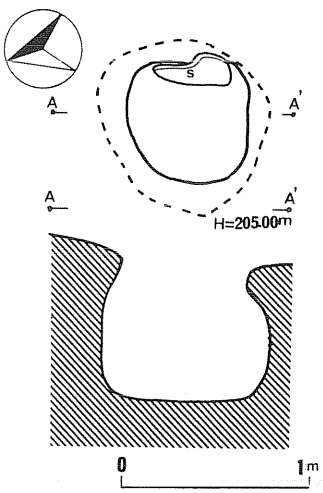
10－H、10－Ⅰ、11－H、11－Ⅰ地区から地山上

面にて検出された。平面形は不整円形を呈する。壙口部1.10m×1.02m、壙庭部1.05m×0.97m、最深の深さ0.42mを計る。壁は垂直に立ち上がるか、えぐれる。底面はほぼ平らである。第69図16の土器が第1層中からまとまりなく出土した。単節LR縄文を施したあと、一部に沈線が施されているが、明確な磨消痕はみられない。主軸方位はN41°Wである。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒褐色土　10YR$\frac{2}{2}$　粘性ややあり。しまりよし。
2. 暗褐色土　10YR$\frac{3}{3}$　粘性ややあり。しまりよし。

SK027土壙　（第58図）

7－G地区から地山上面にて検出された。平面形は円形（フラスコ）を呈する。壙口部0.75m×0.70m、頸部0.82m×0.78m、壙底部0.90m×0.85m、最深の深さ0.80mを計る。いわゆるフラスコ状ピットで、開口部に1個の礫を伴なっていた。遺物はまったく出土しなかった。

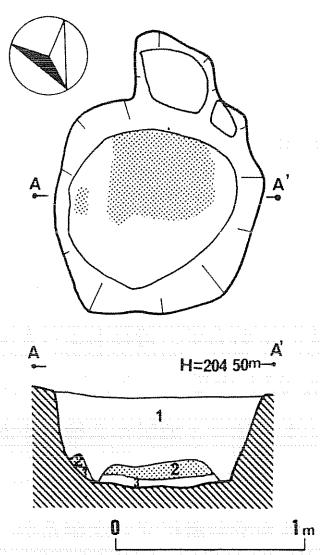


第58図　SK027土壙

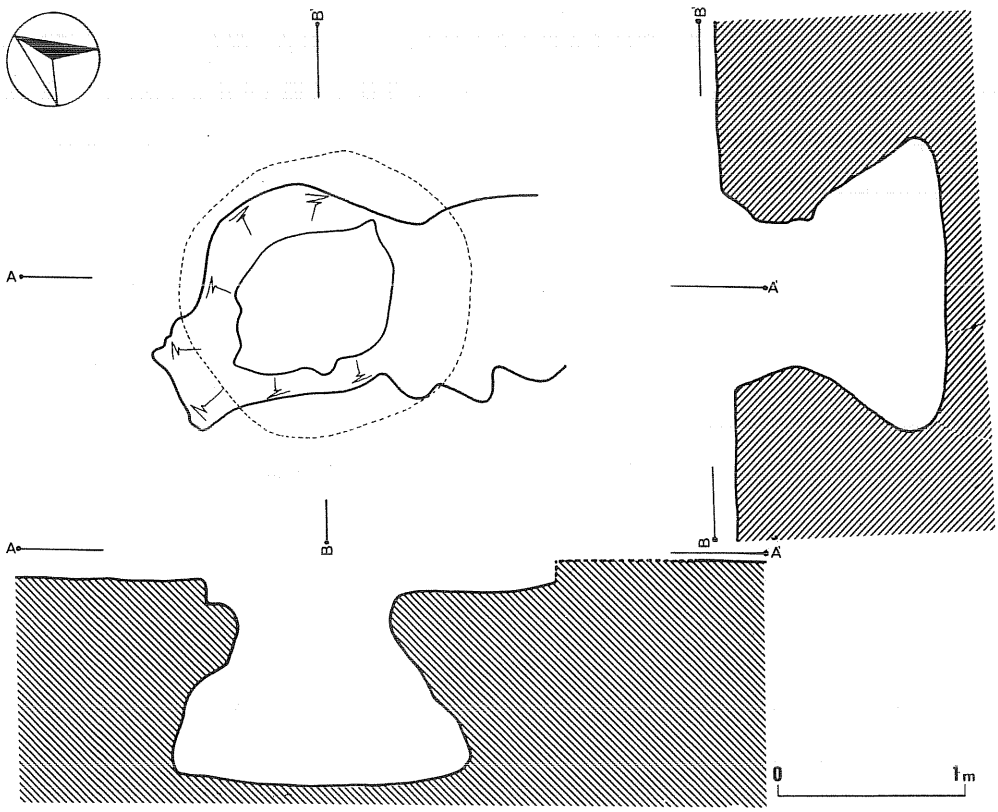
SK028土壙（第59図）

11－I地区から地山上面にて検出された。平面形は不定形を呈する。壙口部1.50m×1.10m、壙底部0.90m×0.85m、最深の深さ0.47mを計る。断面形は逆台形を呈する。南側に同様の落ち込みがあるが、この土壙に付随したものかは不明である。下層部から焼土層が検出された。第69図17、18に示す土器が出土した。磨消縄文手法を用いた土器口縁部であり、縄文時代後期のものと思われる。主軸方位はN32°Eである。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. にぶい黄褐色土　10YR$\frac{5}{4}$　粘性ややあり。しまり中。
2. 赤褐色土　5YR$\frac{4}{8}$　粘性ややあり。しまり中。
3. 黒褐色土　10YR$\frac{2}{2}$　粘性ややあり。しまり中。



第59図　SK028土壙



第60図　ＳＫ029土壙

ＳＫ029土壙　（第60図）

10－Ｊ地区から地山上面にて検出された。平面形は壙口部では不定形を呈するが、壙底部においてはほぼ円形を呈する。壙口部1.55ｍ×1.45ｍ、頸部　1.45ｍ×0.80ｍ、壙底部1.50ｍ×1.10ｍ、最深の深さ1.00ｍを計る。いわゆるフラスコ状ピットである。埋土中に礫はほとんど含まれておらず、遺物もまったく出土しなかった。

ＳＫ031土壙　（第61図）

9－Ｉ、10－Ｉ地区から地山上面にて検出された。平面形は不定形を呈する。壙口部2.44ｍ×0.50ｍ、壙底部2.34ｍ×0.40ｍ、最深の深さ0.46ｍを計る。北側が深く落ち込んでおり、北側の壁はやや急激に立ち上がるが、南側は浅くゆるやかである。また十数個の浅い小ピットがあり、南側に多く分布している。遺物はまったく出土しなかった。主軸方位はＮ22°Ｗである。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

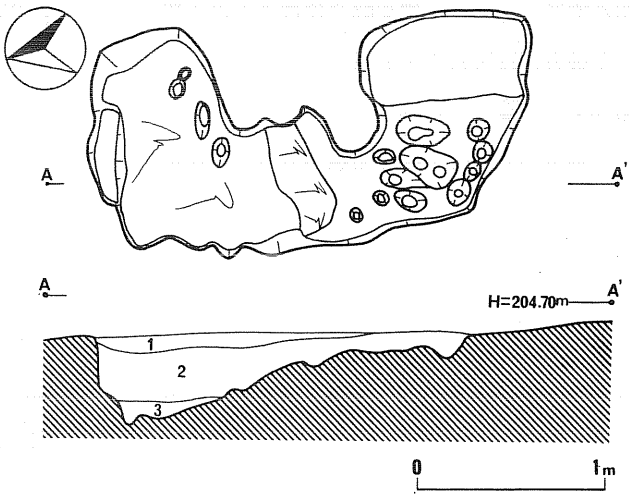
1.　暗褐色土　10ＹＲ3/4　粘性なし。しまりよし。浮石小粒20％混入。

2. 黄褐色土

10ＹＲ5/6　粘性なし。しまり中。

3. にぶい黄褐色土

10ＹＲ4/3　粘性なし。しまり中。



第61図　ＳＫ031土壙

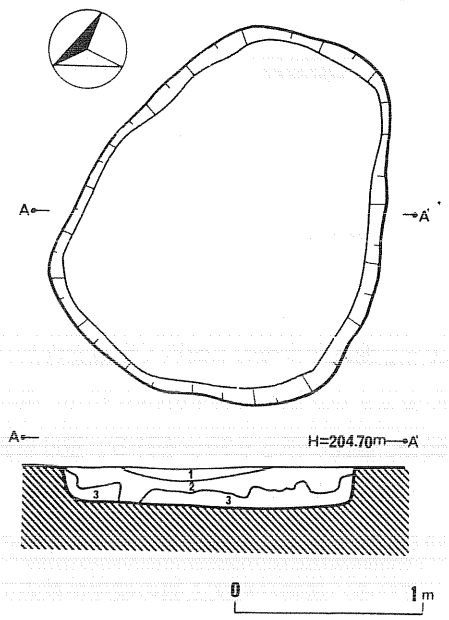
ＳＫ033土壙（第62図）

7－Ｉ、8－Ｉ地区から地山上面にて検出された。平面形は不整楕円形を呈する。壙口部2.03ｍ×1.55ｍ、壙底部1.92ｍ×1.45ｍ、最深の深さ0.20ｍを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面もほぼ平らである。埋土中に礫はほとんど含まれない。遺物はまったく出土しなかった。主軸方位はＮ53°Ｗである。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒褐色土　10ＹＲ2/2　粘性ややあり。しまりなし。浮石１％。
2. 黒褐色土　10ＹＲ3/2　粘性ややあり。しまりなし。
3. 褐色土　10ＹＲ4/4　粘性ややあり。しまりなし。

ＳＫ043土壙　（第63図）

10－Ｊ地区から地山上面にて検出された。平面形は不定形を呈する。壙口部1.30ｍ×1.06ｍ、壙底部1.20ｍ×0.62ｍ、最深の深さ0.72ｍを計る。南東側にピットがあり、その部分の壁はえぐれている。また西側にも一部えぐれた部分があり、そこから第64図に示す土器が出土した。その他の壁は概ねなだらかである。第64図の土器は口縁部を欠いており、また台付であったと思われる台部を欠いてい

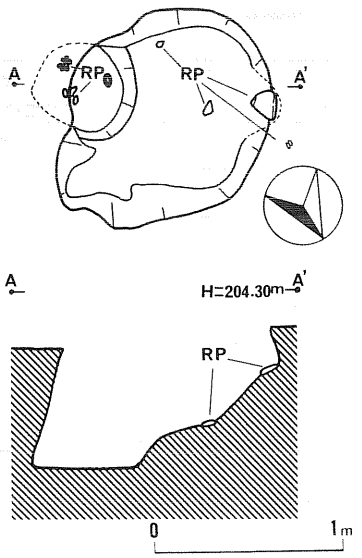


第62図　ＳＫ033土壙

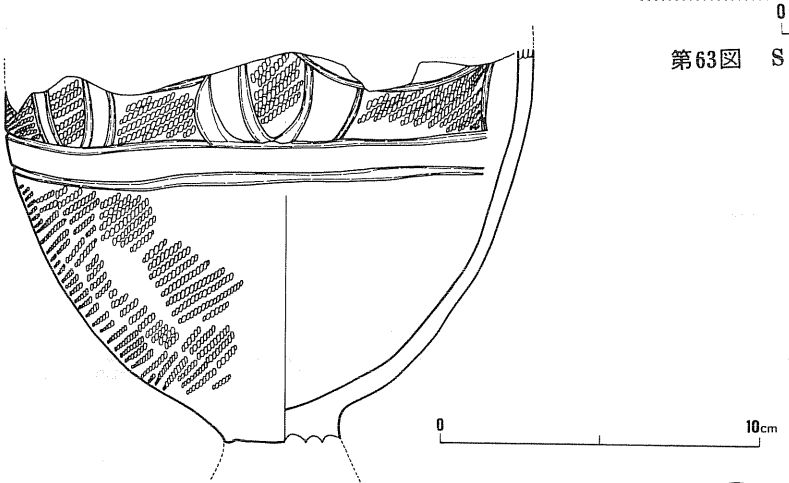
る。胴部はＬＲ縄文を施したあと沈線で区画し、その内側を磨消している。縄文時代後期のものと思われる。主軸方位はＮ77°Ｅである。

ＳＫ045土壙　（第65図）

10－Ｊ地区から地山上面にて検出された。平面形は不整楕円形を呈する。壙口部1.00ｍ×0.59ｍ、壙底部0.85ｍ×0.27ｍ、最深の深さ0.32ｍを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面もほぼ平らである。土壙底部から礫１個が検出された。遺物は縄文土器が数点出土したのみである。主軸方位はＮ１°Ｗである。



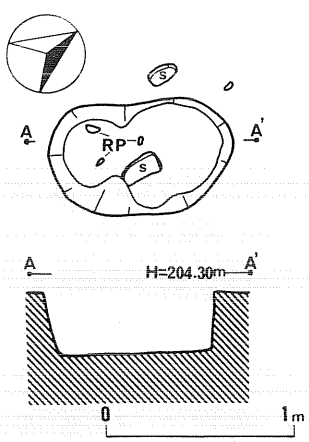
第63図　ＳＫ043土壙



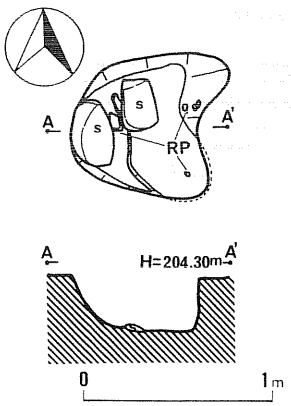
第64図　ＳＫ043土壙出土土器

ＳＫ046土壙　（第66図）

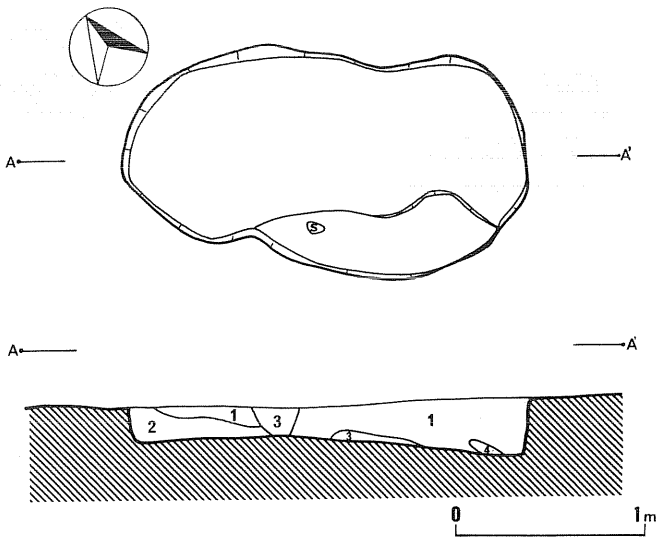
10－Ｊ地区から地山上面にて検出された。平面形は不整形を呈する。壙口部0.93ｍ×0.75ｍ、壙底部0.72ｍ×0.60ｍ、最深の深さ0.30ｍを計る。壁は東側は急激に立ち上がり、一部にえぐれているところもあるが西側はややゆるやかである。土壙底部にやや大きめの礫を数個伴なっている。遺物は縄文土器の破片が数点出土した。主軸方位はＮ42°Ｅである。



第65図　ＳＫ045土壙



第66図　ＳＫ046土壙

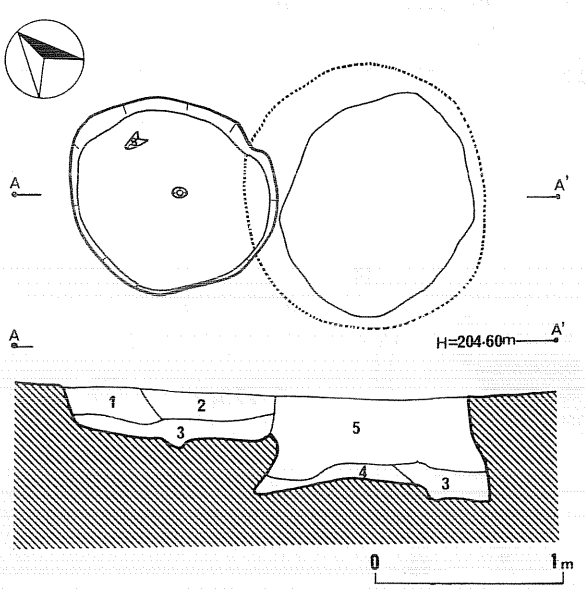


第67図　ＳＫ059土壙

ＳＫ059土壙　（第67図）

7－Ｈ地区から地山上面にて検出された。平面形は不整楕円形を呈する。壙口部2.12ｍ×1.14ｍ、壙底部2.08ｍ×1.08ｍ、最深の深さ0.31ｍを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は南東側がゆるやかに深くなっており、南側は若干高くなっているが、それほど明確なものではない。遺物は第69図20に示す縄文土器が出土した。主軸方位はＮ 83° Ｗである。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 黒褐色土
   10ＹＲ2/3　粘性ややあり。しまり中。
2. 暗褐色土
   10ＹＲ3/4　粘性ややあり。しまり中。黒色土（10ＹＲ2/1）大粒15%混入。
3. にぶい黄褐色土
   10ＹＲ4/3　粘性ややあり。しまり中。黒色土（10ＹＲ2/1）大粒30%混入。
4. にぶい黄橙色土



第68図　ＳＫ065・066土壙

第69図　土壙出土土器

10ＹＲ5/4　粘性なし。しまり中。

ＳＫ065土壙　（第68図）

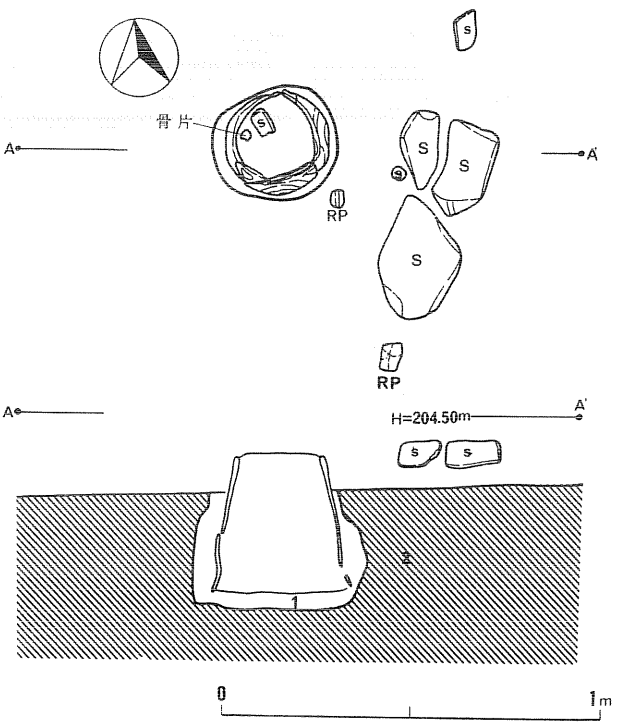
11－Ｇ地区から地山上面にて検出された。平面形は円型を呈する。壙口部1.15ｍ×1.04ｍ、壙底部1.05ｍ×0.90ｍ、最深の深さ0.30ｍを計る。底面ほぼ中央部に浅い小ピットを伴うが、その他はほぼ平らである。南東部でＳＫ066を切っている。遺物はまったく出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

1. 暗褐色土　10ＹＲ3/4　粘性ややあり。しまり中。浮石極小粒３％混入。
2. にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3　粘性ややあり。しまり中。褐色土（10ＹＲ4/6）10％混入。
3. 黒褐色土　10ＹＲ3/2　粘性ややあり。しまり中。暗褐色土（10ＹＲ3/4）５％混入。浮石極小粒１％混入。

ＳＫ066土壙　（第68図）

11－Ｇ地区から地山上面にて検出された。平面形は円型（フラスコ）を呈する。壙口部1.21ｍ×1.00ｍ、頸部1.32ｍ×1.08ｍ、壙底部1.40ｍ×1.25ｍ、最深の深さ0.53ｍを計る。いわゆるフラスコ状ピットであるが、西側の壙口部はＳＫ065によって切られている。底面は若干の凹凸がみられる。遺物はまったく出土しなかった。断面観察による埋土の状態は次のとおりである。

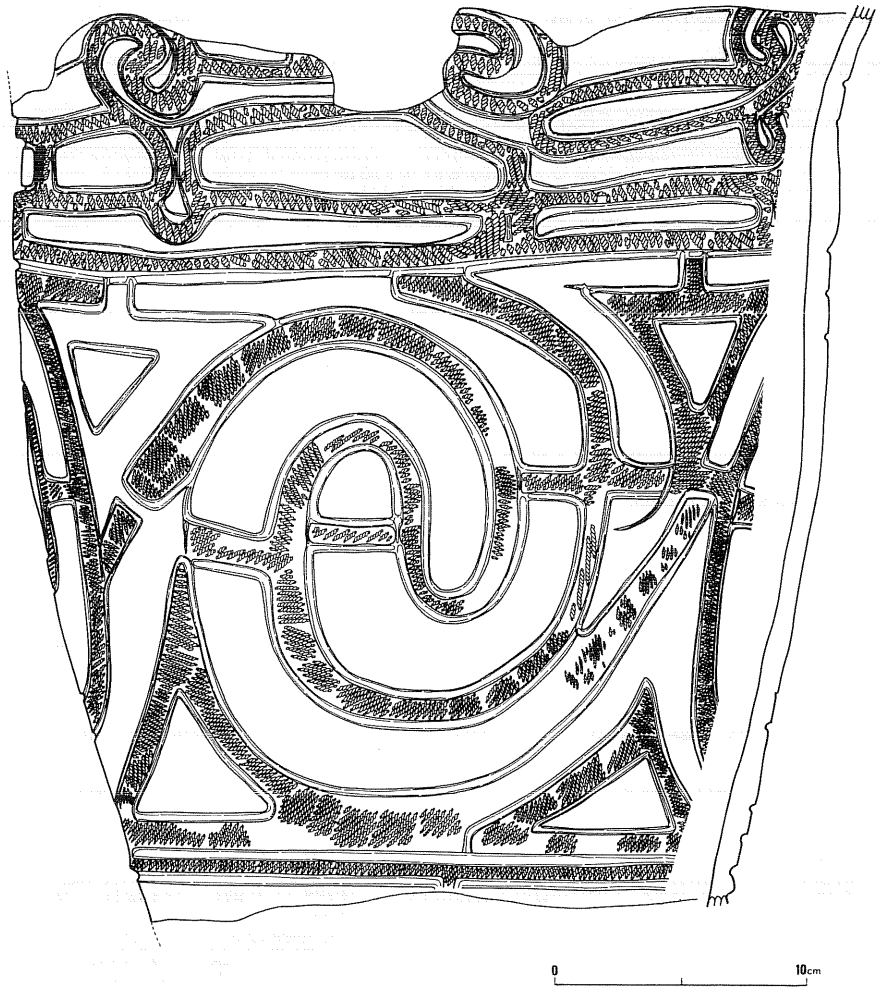
3. 黒褐色土　10ＹＲ3/2　粘性ややあり。しまり中。暗褐色土（10ＹＲ3/4）、浮石極小位１％混入。
4. 黄褐色土　10ＹＲ5/6　粘性ややあり。しまり中。
5. 暗褐色土　10ＹＲ3/4　粘性ややあり。しまり中。褐色土（10ＹＲ4/6）10％混入。



第70図　ＳＸ010埋甕

ウ．埋　　甕

ＳＸ010埋甕（第70・71図　図版21・22・45）



第71図　ＳＸ010 埋甕実測図

図版21に示すように、第2層黄褐色土地山面にて土器底部を検出した。土器よりやや大きめに掘って、土器は倒立して埋められていた。東側に数個の礫が配されているが、埋甕の上部には礫はなかった。黄褐色土上面にて検出したが、実際の掘り込み面は東側の礫と同等のレベルだったと思われる。

次に文様構成であるが、大きく口縁部文様体と胴部文様体に分けて考えることができる。口縁部文様体は単節ＲＬ縄文を施したあと、沈線で幾可学的文様を描き、磨消しており、縄文部分と磨消部分は明確に区体されている。胴部文様体は4単位の幾可学的文様を施すが、細部においては各単位の文様構成に差異がみられる。また、縄文部分と磨消部分が明確に区別し得ない箇所もある。底部は欠けているため、全体的には不明であるが、磨消によって土器表面を調整した痕跡がある。土器底部が欠落しているが人為的なものかは不明である。縄文時代後期前葉のものと思われる。

半截して断面観察した結果は次のとおりである。

1. 暗褐色土　10ＹＲ¾　粘性ややあり。炭化物微粒子混入。
2. 褐色土　　10ＹＲ⁴⁄₄　粘性ややあり。暗褐色土混入。

ＳＸ019埋甕　（第72・73図　図版22・46）

地山上面にて、暗褐色土の図形の落ち込みと土器口縁部を検出した。ＳＸ010とは違い、掘方は土器よりかなり大きく、また正立して埋められていた。口唇部を除いて、全体に単節ＲＬ縄文が施されている。

遺構を半截した結果は次のとおりである。

1. 暗褐色土　10ＹＲ¾　粘性なし。しまり中。
2. 褐色土　　10ＹＲ⁴⁄₆　粘性なし。しまり中。

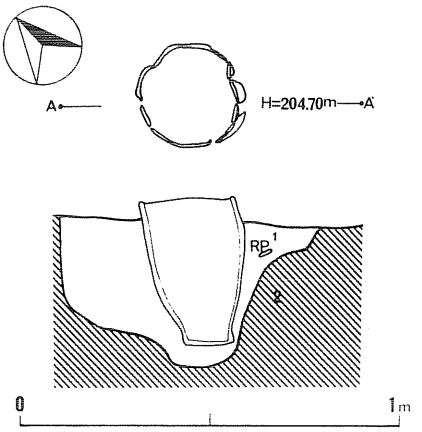
第14表　飛鳥平遺跡土壌分析結果

（Ｐの定量：mg / 100g）

試料名	試料の状況	原土水分率(%)	全リン酸	Ca－Ｐ	Aℓ－Ｐ	Fe－Ｐ
ＳＸ010	土器外の土	35.2	189	0.2	54.8	7.3
ＳＸ010	土器内埋土(上)	21.4	241	—	—	—
ＳＸ010	土器内埋土(中)	39.3	366	0.3	86.1	4.3
ＳＸ010	土器内埋土(下)	38.0	487	—	—	—
ＳＸ019	土器外の土	37.3	308	0.2	87.0	2.3
ＳＸ019	土器内埋土	34.0	306	0.2	82.3	4.4.

分析法：過塩酸分解による全Ｐの定量（抽出）―― バナドモリブデン酸法、比色定量による。

埋甕埋土中の燐分析について　秋田県農業試験場に土壌分析を依頼したところ、P.161第14表に示す結果となった。



第72図　ＳＸ019埋甕

岩手大学農学部の吉田稔教授によると、「成人の生体重の約１％がリン（Ｐ）であり、その約75％が骨及び歯に含まれる。いま、体重50kgの成人の骨の約半分が拾われて甕の中に入れられたとすると、骨に含まれるＰは約200ｇである。また、甕の全体積は約14ℓ（合甕の実測値より推定）とし、この８分目を土壌が占めていたとし、そのみかけの体重を0.7とすると、その乾土重量は約８kgとなる。すなわち、この土壌にはＰとして2.5以上存在する」(註)はずであると述べている。この分析結果は合口甕棺内の土壌分析結果によるものであるから、そのままあてはめることはできないかもしれないが、飛鳥平遺跡の２例についてみると最高値でも0.487％とはるかに及ばない。しかし埋甕埋土外の土壌の全リン酸の割合と比較すると、1.3～2.6倍と極めて多い。このことから推定すると、乳幼児用の埋設施設としての埋甕ということが考えられる。しかし、副葬品その他、乳幼児用埋設施設と積極的に証明するものは出土していないので、確定的なことは言えない。

これに対してＳＸ019の方は土器内外の土の全リン酸の量はほとんど同じであり、乳幼児埋設施設とは違った、たとえば植物貯蔵施設等の性格をもつものかもしれない。

註：沼山源喜治他「岩手県和賀郡江釣子村本宿羽場遺跡緊急調査報告」江釣子村教育委員会，1972年。

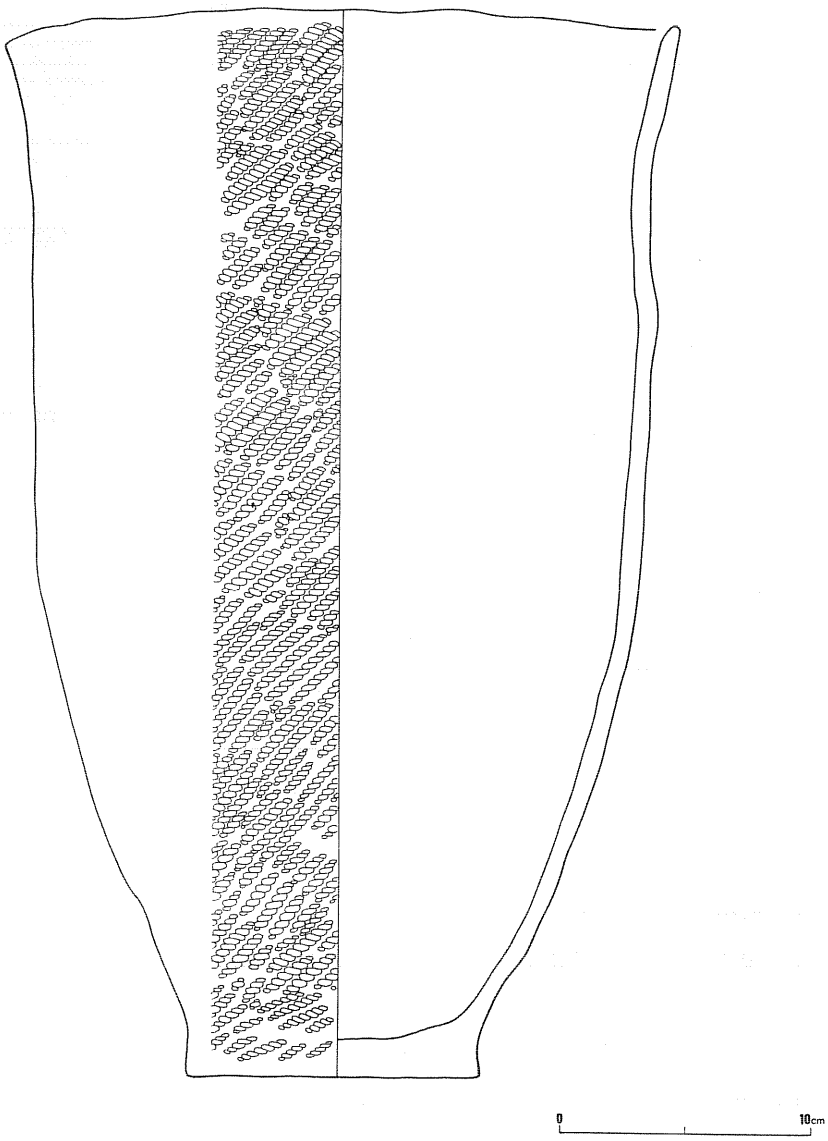
エ．焼土遺構

ＳＸＦ040焼土遺構　（第74図　図版20）

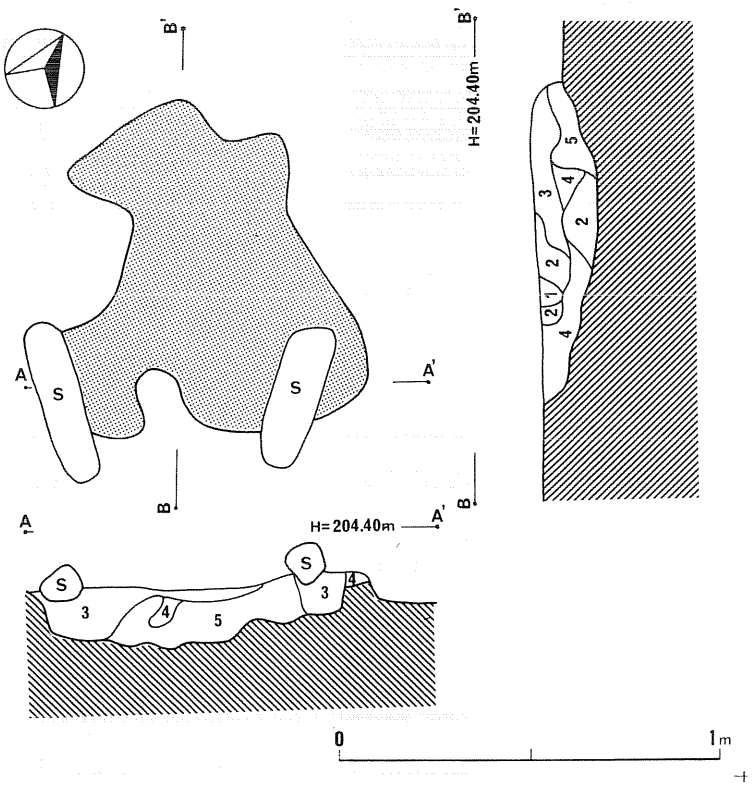
11－Ｉ、11－Ｊ地区から、約0.90m×0.90ｍの不整形の焼土遺構が確認された。焼土の南側には約0.40m×0.10ｍのほぼ同じ大きさの礫２個を伴っていた。炉石のような役割をしたものと思われる。遺物は出土しなかった。

遺構２か所を半截した断面観察結果は次のとおりである。

1. 黒褐色土　10ＹＲ3/2　粘性なし。しまり中。
2. 赤褐色土　５ＹＲ4/8　粘性なし。しまり中。焼土。



第73図　　S X 019 埋甕実測図



第74図　ＳＸ（Ｆ）040焼土遺構

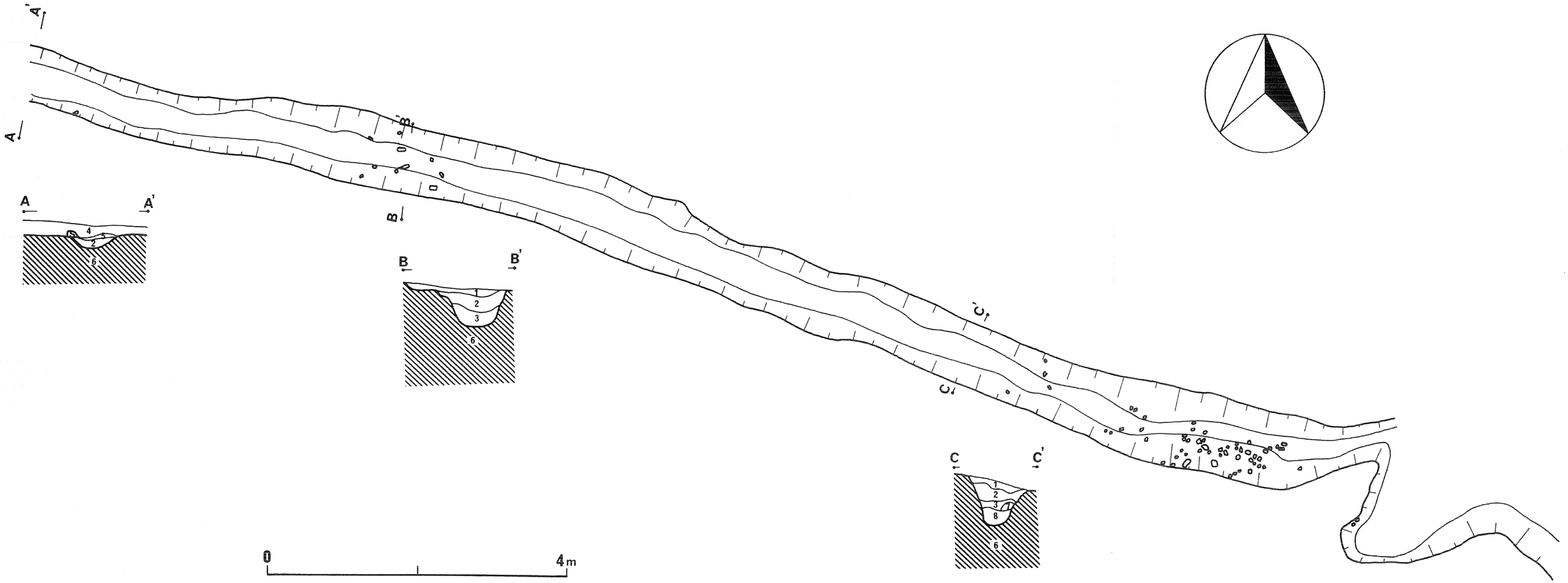
3. 暗褐色土　10ＹＲ3/3　　粘性なし。しまり中。
4. 褐色土　　7.5ＹＲ4/6　粘性なし。しまり中。焼土。
5. 赤褐色土　5ＹＲ4/6　　粘性なし。しまり中。焼土。

オ．溝

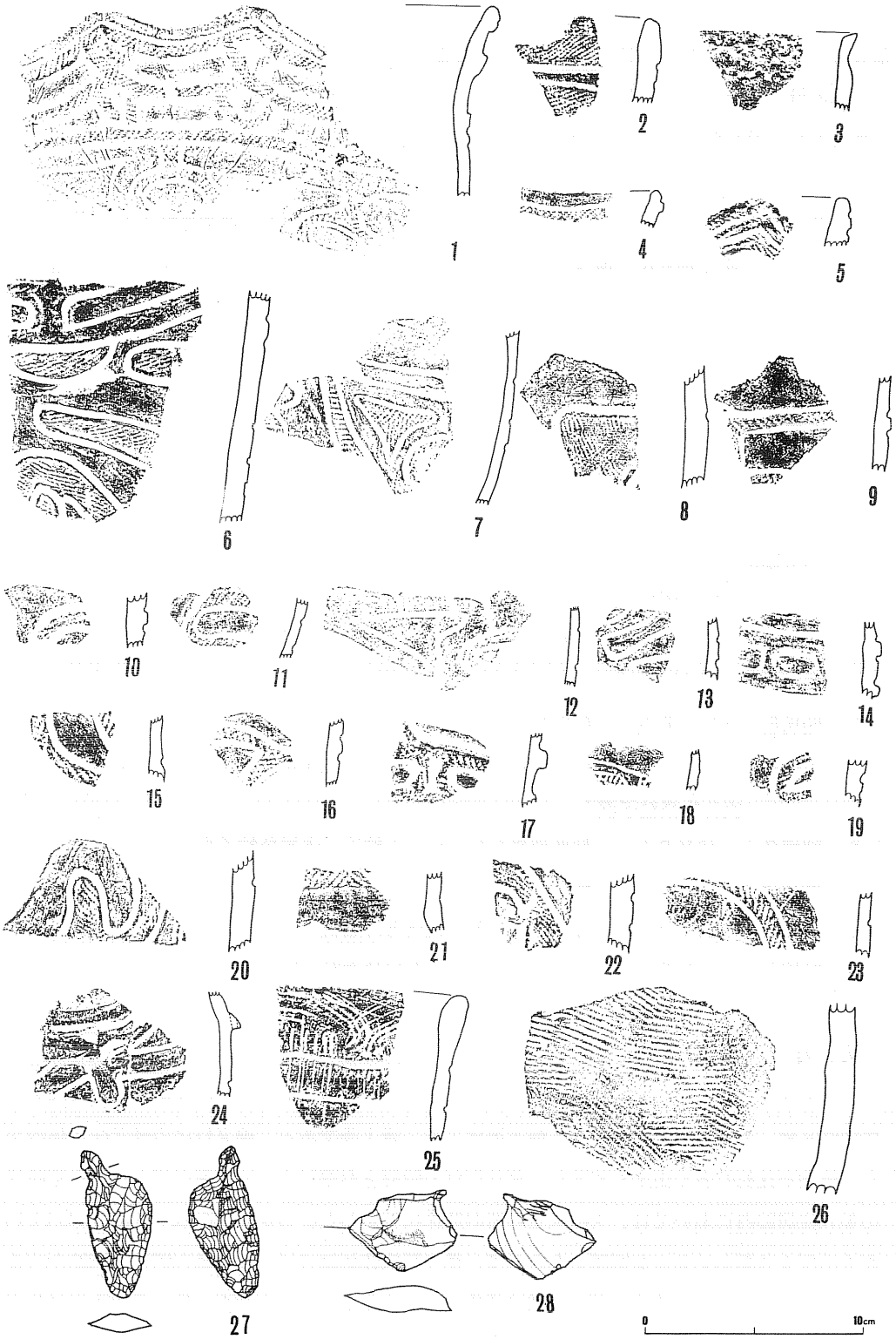
ＳＤ001溝　（第75図　図版23・47）

遺跡を形成する台地縁辺部の北端より検出された。西側は削平されており不明である。東側は遺跡北側から流れる沢目に接続するようだ。最大幅1.06ｍ、最小幅0.70ｍ、検出された総延長19.20ｍを計る。

遺物は第76図に示すものが出土した。1～23はいずれも磨消縄文手法を用いたものであるが、数個体分あるものと思われる。24は穿孔をもつもので蓋付土器の一部となる可能性がある。25はカキ目文が施文されたものである。1～25は縄文時代後期前葉のものと思われる。26は須恵器の甕の破片である。このように縄文時代の土器が大半を占めるとはいえ、平安時代の土器も



第75図　ＳＤ001溝



第76図　ＳＤ００１溝出土遺物

混在しており、この溝は平安時代以降のものと思われる。

27は石匙で、28は不定形石器である。石質はいずれも硬質頁岩である。

溝と直交させた断面3ケ所における埋土の状態は次のとおりである。

＜断面A＞

2. 黒褐色土　10YR 3/2　粘性なし。しまりなし。砂粒子混入。黄褐色粒子混入。炭化物微粒子混入。
4. 黒褐色土　10YR 2/2　粘性あり。標準層位の第Ⅲ層にあたる。白色粒子含む。小礫含む。この部分のみ厚く堆積したもの。
5. 黒色土　10YR 2/1　大量に浮石を含む。サラサラした土。
6. 黄褐色土　10YR 5/6　地山

＜断面B＞

1. 暗褐色土　10YR 3/3　粘性なし。ロームブロック30%混入。
2. 黒褐色土　10YR 3/2　粘性なし。しまりなし。砂粒子混入。黄褐色粒子混入。炭化物微粒子混入。
3. 暗褐色土　10YR 3/4　粘性ややあり。ローム粒子。赤褐色粒子混入。

＜断面C＞

1. 暗褐色土　10YR 3/3　粘性なし。ロームブロック30%混入。
2. 黒褐色土　10YR 3/2　粘性なし。しまりなし。砂粒子混入。黄褐色粒子混入。炭化物微粒子混入。
3. 暗褐色土　10YR 3/4　粘性ややあり。ローム粒子、赤褐色粒子混入。
6. 黄褐色土　10YR 5/6　地山。
7. 黒色土　10YR 1.7/1　粘性あり。混入物ほとんど含まず。
8. 暗褐色土　10YR 3/3　ロームブロック、黄褐色微粒子30%混入。

カ．小　　結

飛鳥平遺跡で確認された遺構は以上述べたように、縄文時代竪穴住居跡5棟、平安時代竪穴住居跡8棟、土壙22基、埋甕2基、焼土遺構1基、溝1条である。縄文時代の竪穴住居跡内からは遺物が比較的多く出土しており、それぞれの時期と形態について把握ができた。平安時代の竪穴住居跡内においては、火山灰との新旧関係に留意した。しかし層の残りが悪く、SI013が火山灰より新しいことが判明したのみで、他の竪穴住居跡については新旧関係の判断ができなかった。土壙については一部に多数の遺物を出土するものがあったが、概して出土量は少なく、時代別にその形態をつかむことはできなかった。

(2) 遺　物

ア．土　　器

飛鳥平遺跡の遺構外から出土した土器は整理箱約10箱程と多い方ではない。しかし、土器の時代は縄文時代草創期・中期・後期・晩期・平安時代とバラエティにとんでいる。ここでは縄文時代の土器を第Ⅰ～Ⅴ群に分類してそれぞれについて述べてみる。

第Ⅰ群土器

縄文時代草創期に属すると思われるものを本群とした。

第1類土器　（第79図109～112　図版49）

わずか4個の小破片が出土したのみである。いずれも爪形文が施されたもので、沈線に対して斜めに同方向のものを4段施すもの（110、111）と、交互に施すもの（109、112）がある。

第Ⅱ群土器

縄文時代中期に属すると思われるものを本群とした。

第1類土器　（第77図1～4　図版48）

口縁部や胴部に渦巻状の沈線文や隆沈文を施す。口縁部は厚く形作られる。

第Ⅲ群土器

縄文時代後期に属すると思われるものを本群とした。さらに第1～9類まで分類される。

第1類土器　（第77図5～8　図版48）

沈線区画にそって単節縄文を充填したものを本類とした。口縁は平縁をなす。

第2類土器　（第77図9～14　図版48）

網目状撚糸文を施すものを本類とした。網目の間隔の広いもの（9～12）と、狭いもの（13、14）がある。

第3類土器　（第77図15～39、第78図40～79、第79図80～101　図版48・49）

磨消縄文手法を施すものを本類とした。口縁部は平縁をなすもの、波状をなすもの、突起をもつもの（23・24）がある。19は口縁部折返痕が明確である。口唇部に竹管文を刺突したもの（28）もある。地文はほとんどが単節の縄文であるが、稀に無節のもの（92・97）もある。本遺跡中最も出土例の多いのがこの類で、縄文時代全遺物のおよそ70%を占める。

第4類土器　（第79図102～106　図版49）

第3類土器と同じく磨消縄文手法を施すもの（102・103・106）もあるが、凸帯をはっきりと浮き出させたモチーフをもつものを本類とした。102・103・106は縄文施文部を凸帯にして浮き出し、磨消部分は円形もしくは楕円形の凹部を形成する。105は穿孔されており、蓋付土器の一部の可能性がある。いずれの土器もシンメトリカルな文様で構成されている。

第5類土器　（第79図107・108　図版49）

カキ目状文様のあるものを本類とした。楕状のもので細沈線を円孤状に描いて施文する。口縁は平縁をなす。

第6類土器　（第79図113～118　図版49）

口縁部にB形突起、その下部に帯状に刺突を1条廻す。胴部は格子目状の沈線が施文されるものを本類とした。刺突は竹管様のものを用いている。また胴部の格子目状沈線文は右上がりのものを施文してのちに、左上がりのものを施文する。

第7類土器　（第80図119～123、125～133　図版49）

平行帯状文、あるいは平行沈線や孤状沈線で入組文を構成し、磨消縄文手法を施したものを本類とした。口縁部は大きな波状もしくは突起を持つものと思われる。口唇部に刻目をもつもの（126）もある。磨消部分は丹念に研磨されており、縄文部分が浮彫的になっているのが特徴である。研磨が顕著な箇所は磨消部分と縄文部分を区画した沈線が消滅したところもある。

第8類土器　（第80図124、134～140　図版49）

刻目状の刺突をもつものを本類とした。口縁部に貼瘤をもつもの（135）もある。刻目の施文方法も2タイプある。すなわち134～138は平行沈線や入組沈線の区画内の全面に刻目を施文する。これに対して139・140は、磨消縄文帯のほぼ中央部に、磨消縄文帯を区画している沈線とは接さずに刻目を施文する。

第9類土器　（第80図141～143　図版49）

入組文がさらに発達した段階のものを本類とする。いずれの土器も貼瘤を持ち、磨消縄文が施される。

第Ⅳ群土器

縄文時代晩期に属すると思われるものを本群とした。さらに第1～2類に分類されるが、個数は極めて少ない。

第1類土器　（第80図144　図版49）

羊歯状文をもつものを本類とした。1点出土したのみである。

第2類土器　（第80図145　図版49）

口縁部に2条、口縁部内側に1条の沈線を廻す。よく研磨された無文の壺の頸部である。

第Ⅴ群土器

縄文のみのものを本群とした。さらに第1～2類に分類される。

第1類土器　（第80図146　図版49）

羽状縄文を施したものを本類とした。146は単節ＲＬ原体の縄文を交互に横位、縦位に回転する手法により羽状縄文を形成させたものである。

第２類土器　（第80図 147 ～ 151　図版49）

器面一帯に単節縄文を施したものを本類とした。口縁は平縁をなす。

イ．石　　器

遺構外の石器は103点出土した。特に多く出土した地区はなかった。以下、それぞれの器種別に述べる。

石鏃　（第81図１～３　図版50）

１は平基無茎鏃、２は円基鏃、３は凸基有茎鏃である。石質はいずれも頁岩である。

石匙　（第81図４～７　図版50）

縦型のもの（４・７）と横型のもの（５・６）がある。石質は４～６が頁岩、７が硬質泥岩である。

掻器　（第81図９～12、第82～85図　図版50～52）

刃部に再調整が顕著に施されたものを一括して含む。９はほぼ全縁辺部にわたり両面加工されている。13～15は剝離打面部を除く縁辺部に片面加工がなされる。その他のものも刃部調整は片面加工のものが大部分である。石質は９～11、14～16、18、20、22～27、29、31、35、38、39～42、45、46、48が硬質泥岩、12、13、17、19、27、28、30、32～34、36、37、43、44、47が頁岩である。

不定形石器　（第86～89図　図版52～54）

刃部に再調整のほとんどがみられない剝片石器を一括して含む。石質は49、51、54、55、57～60、62、63、65～71、74、75、78～80、82～86、88～90が硬質泥岩、50、52、53、56、61、64、72、73、76、77、81、87、92が頁岩、91、93が玉髄である。

石板　（第90図94～97　図版54）

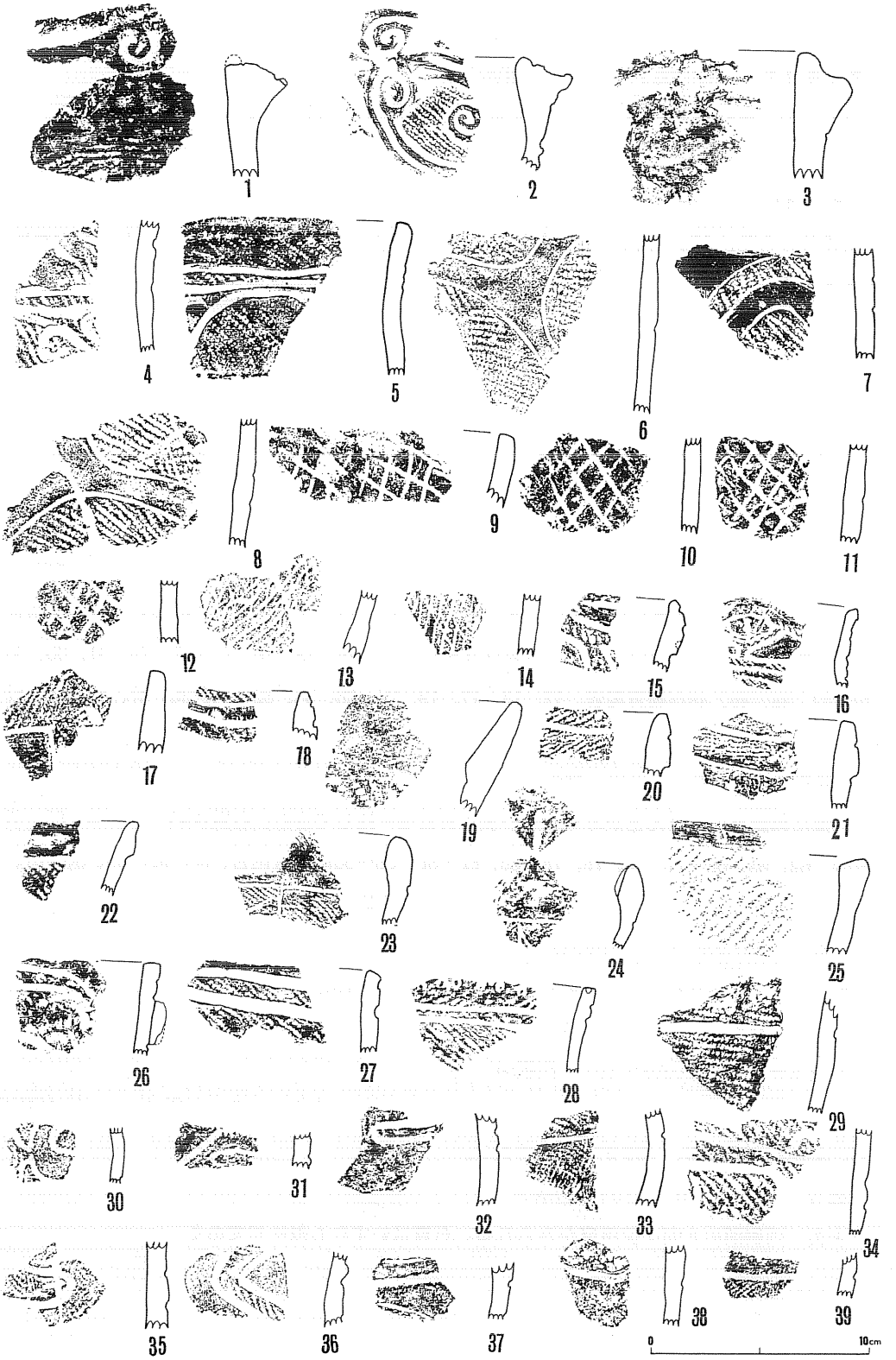
板面に文字はみられないが、梵字等を刻んだ石板の一部と思われる。新しい時期のものと考えられる。石質はいずれも粘板岩である。

磨製石斧　（第90図98～ 101　図版54）

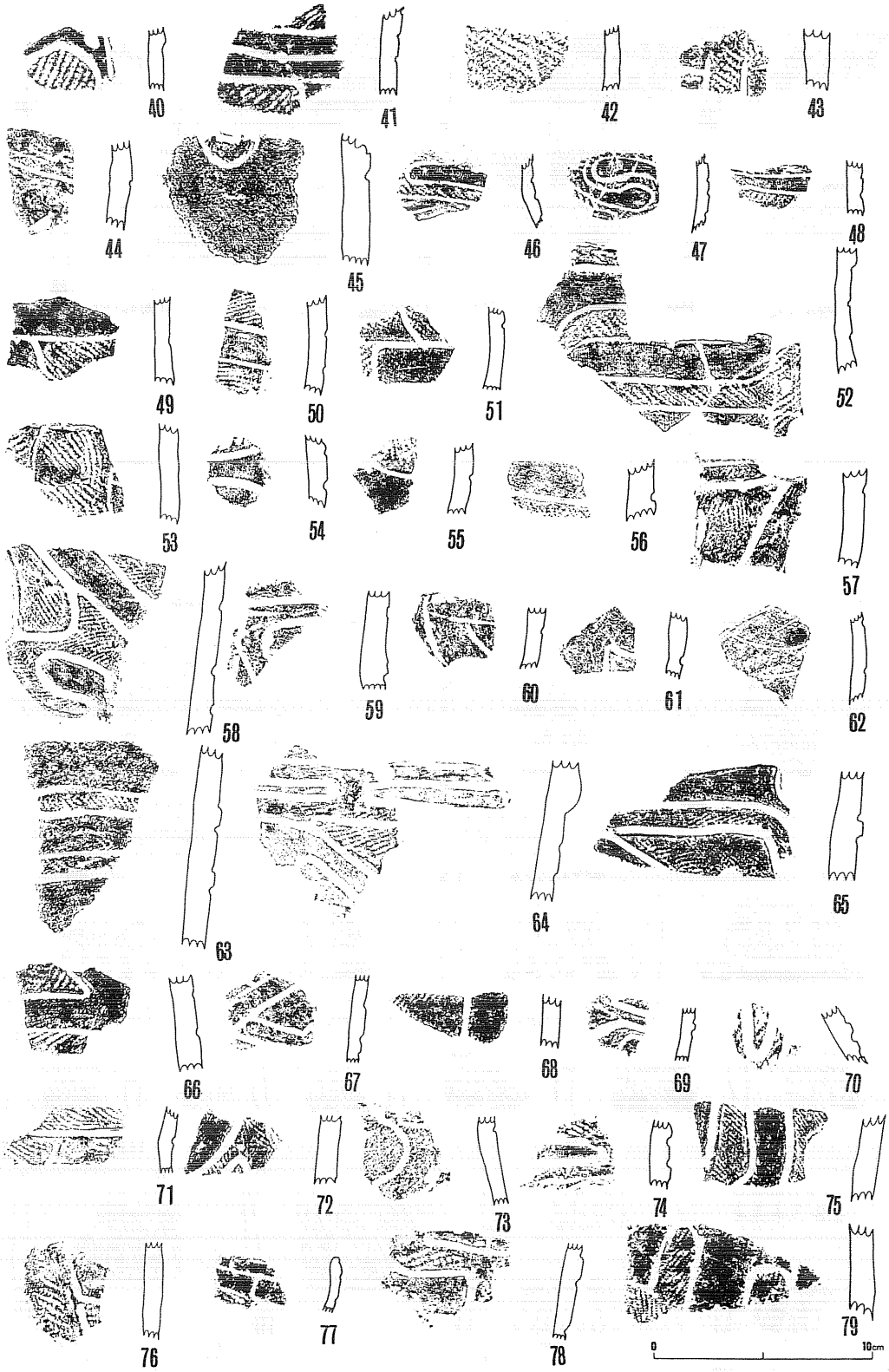
101は刃部を欠いており不明であるが、その他のものは両刃である。石質は98、101が凝灰岩、99が凝灰質砂岩、100が安山岩である。

砥石　（第90図 102 、 103　図版54）

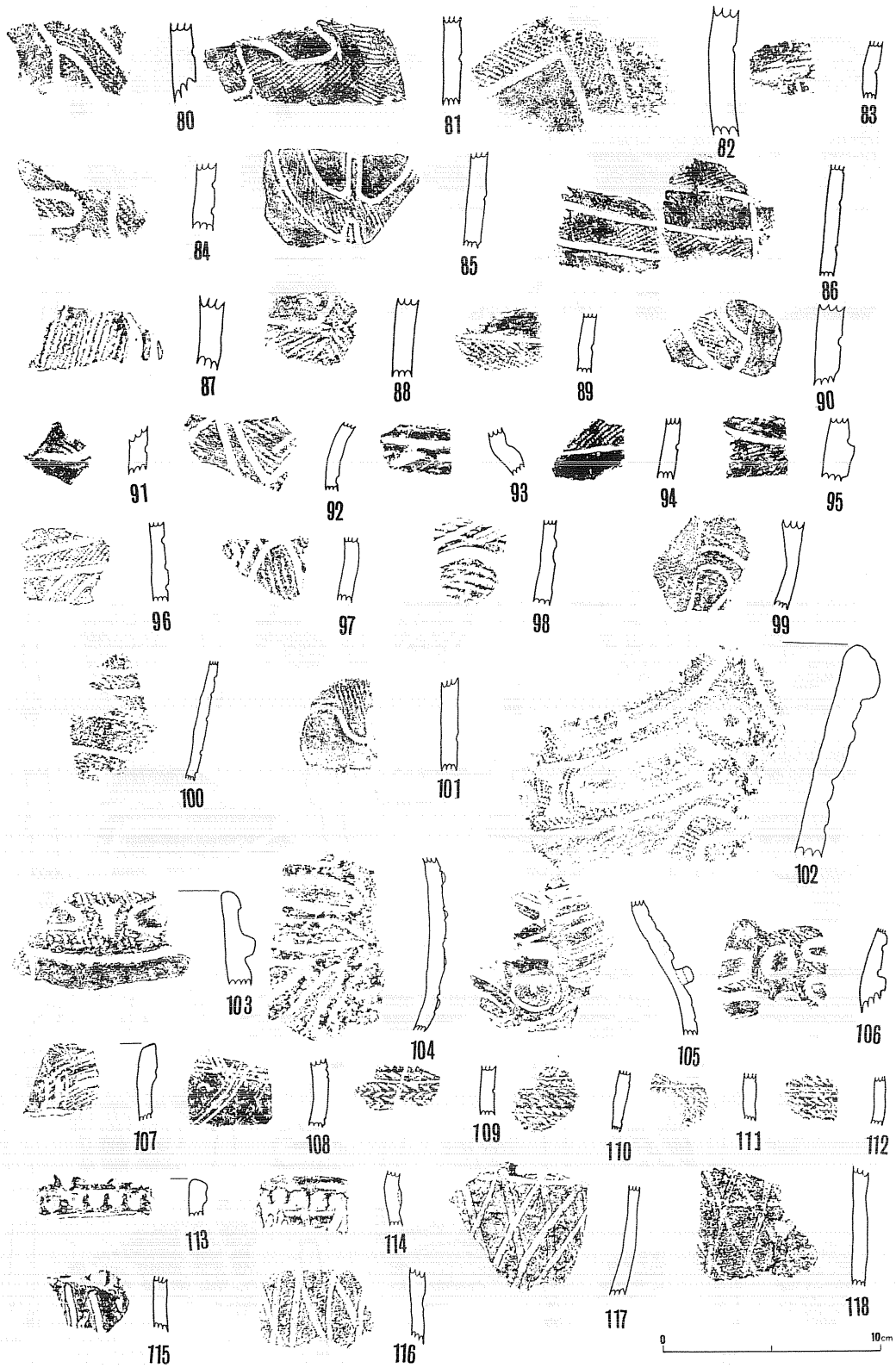
表裏、両側面の４面に使用痕がみられる。石質はいずれも凝灰岩である。



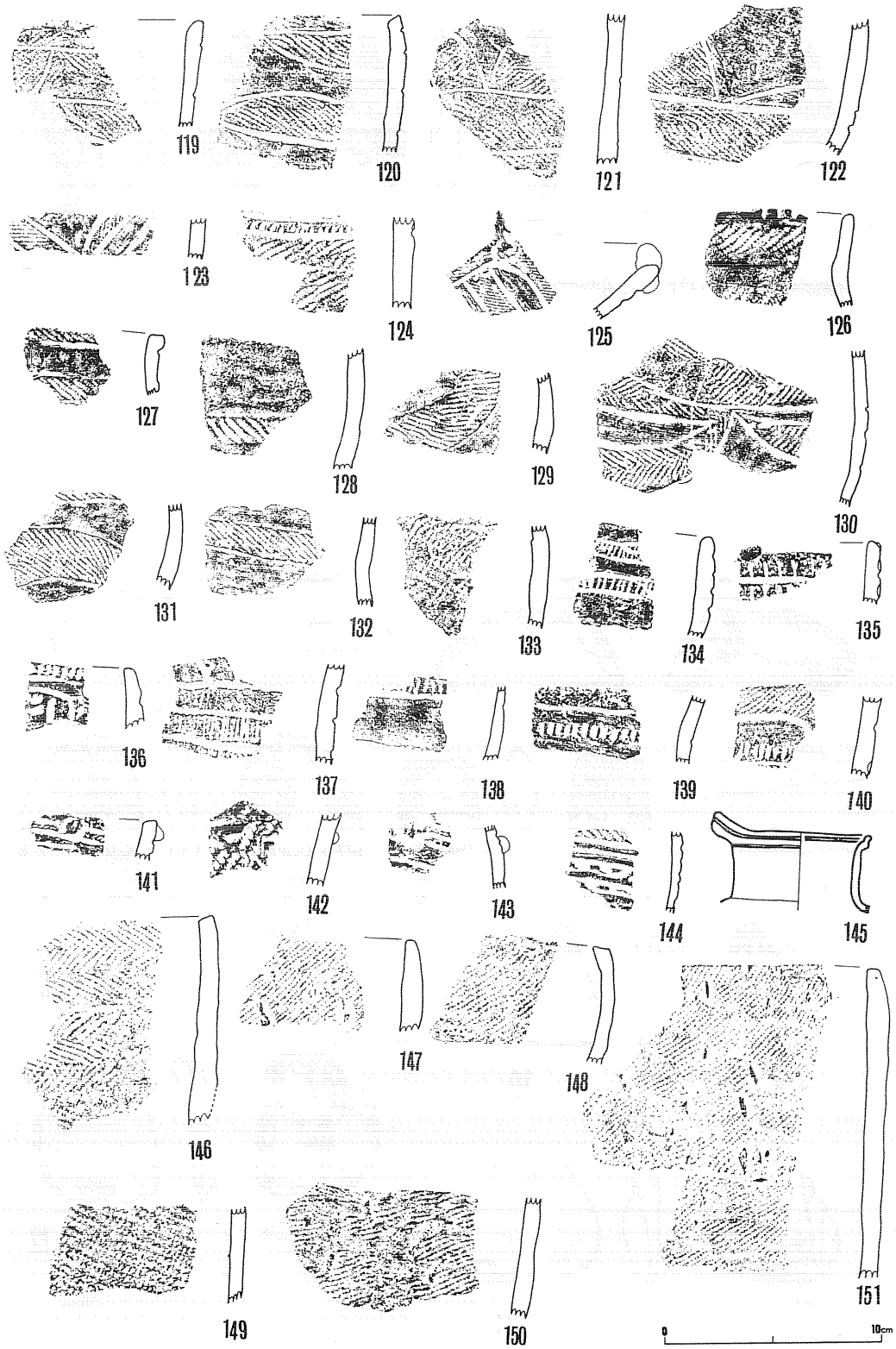
第77図　遺構外出土土器（1）



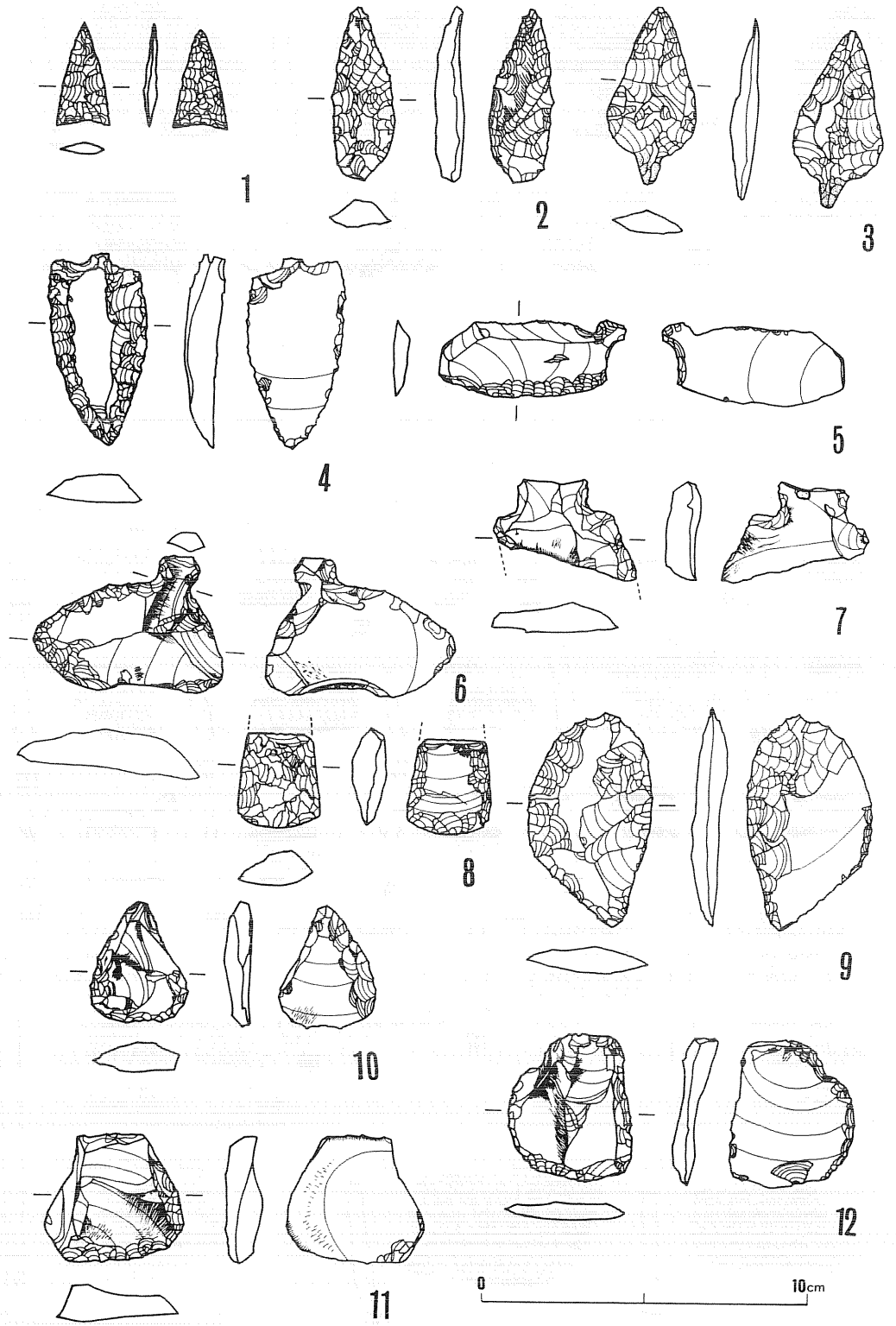
第78図　遺構外出土土器（２）



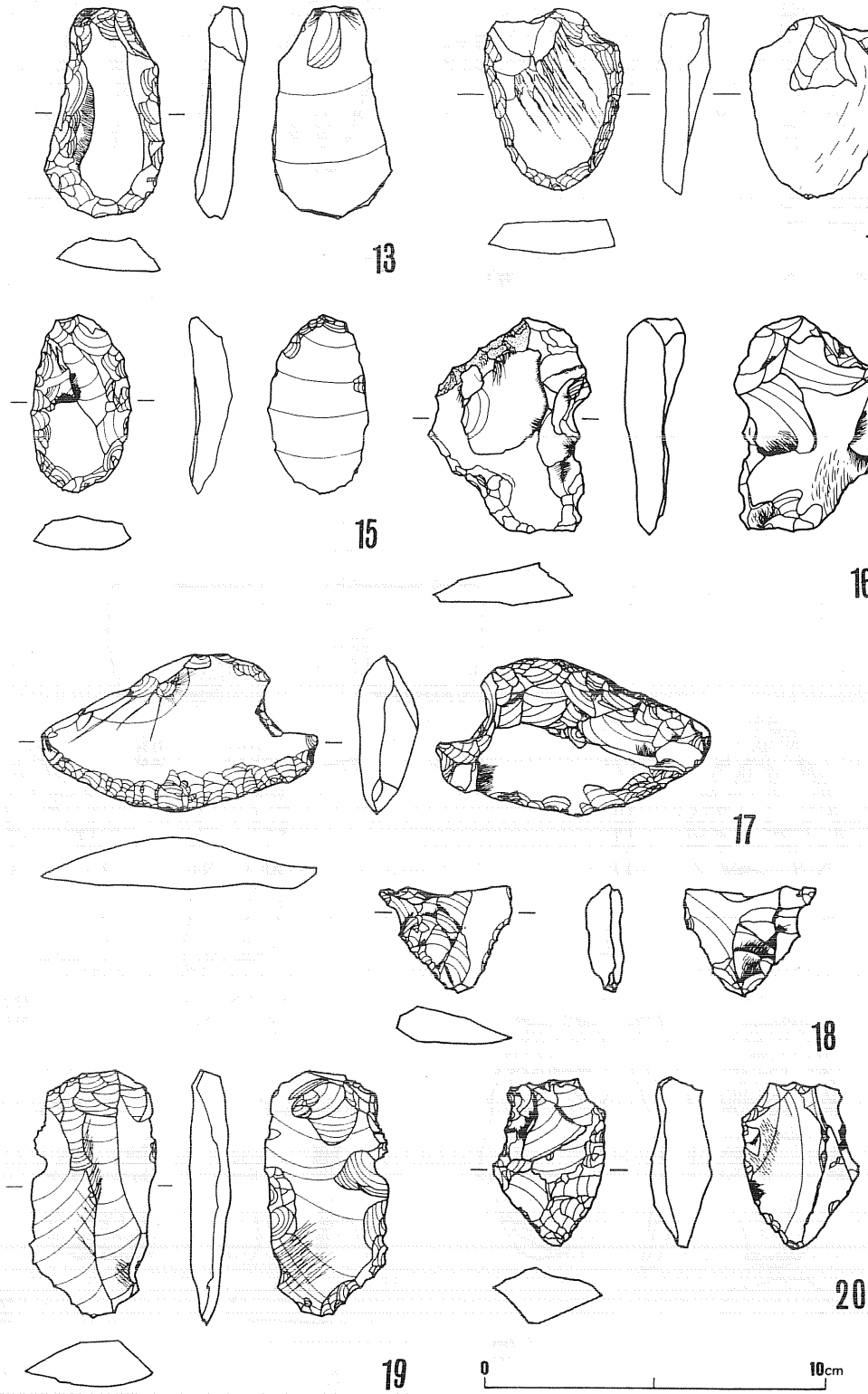
第79図　遺構外出土土器（3）



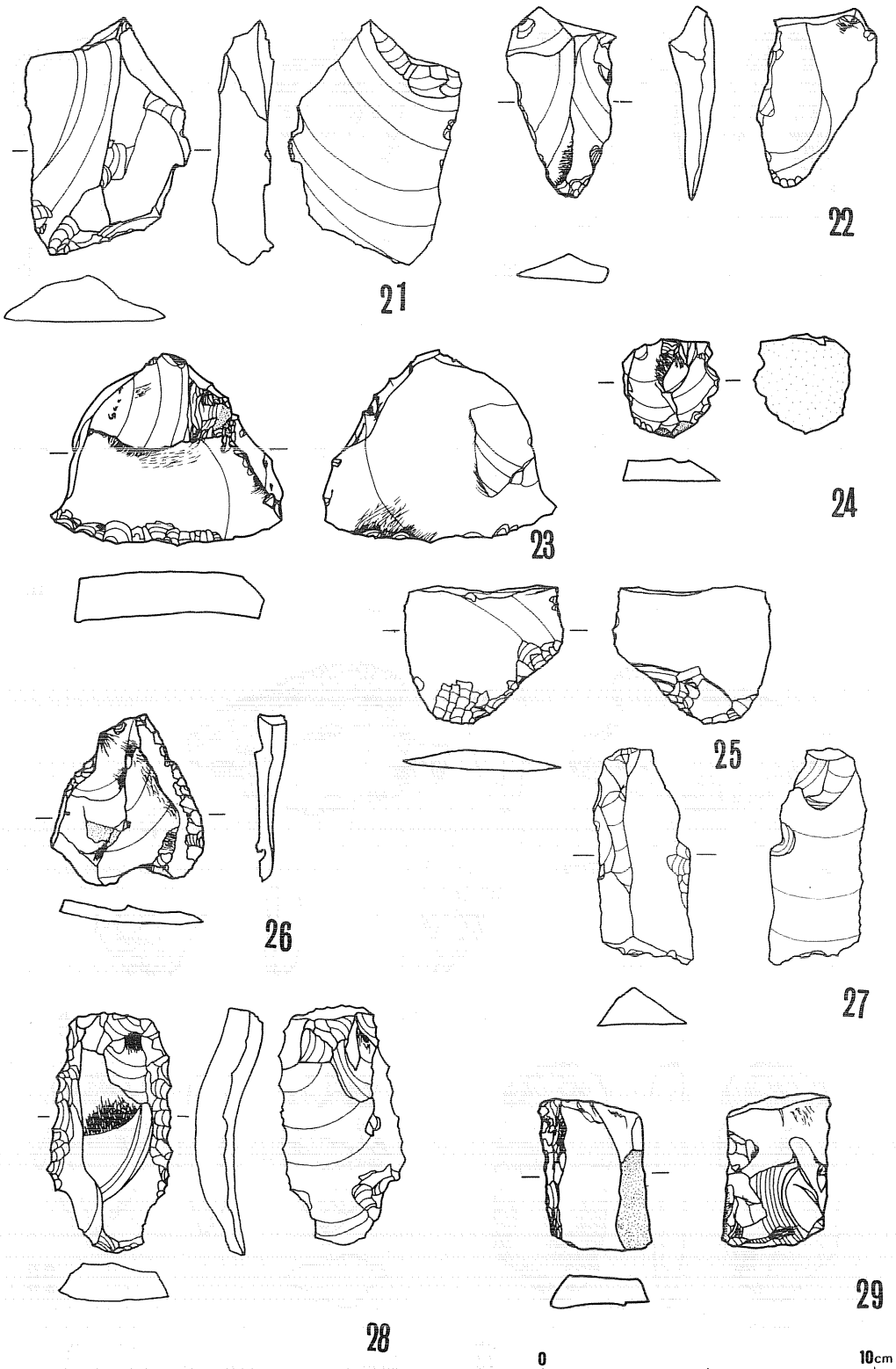
第80図　遺構外出土土器（4）



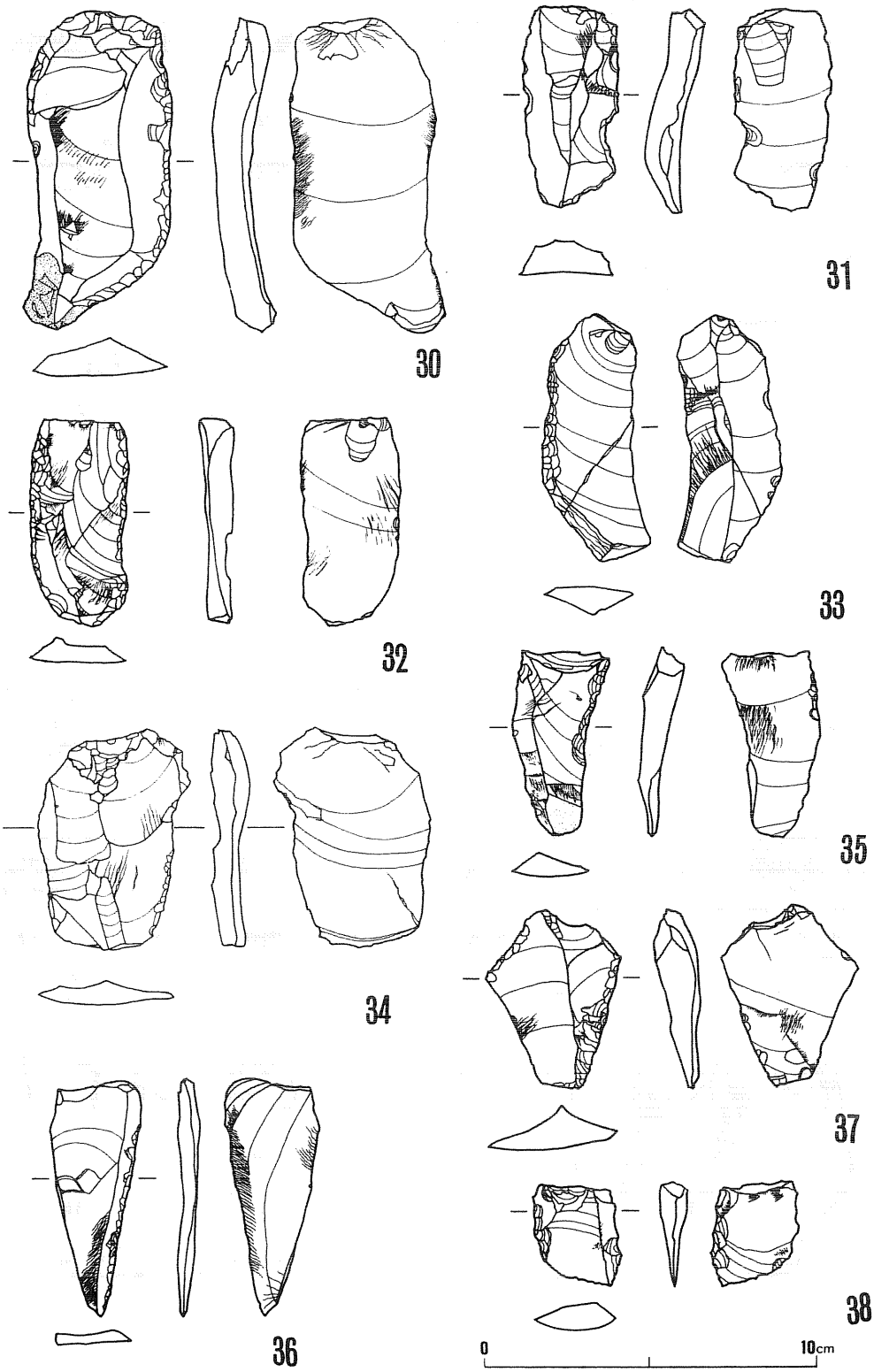
第81図　遺構外出土石器（1）



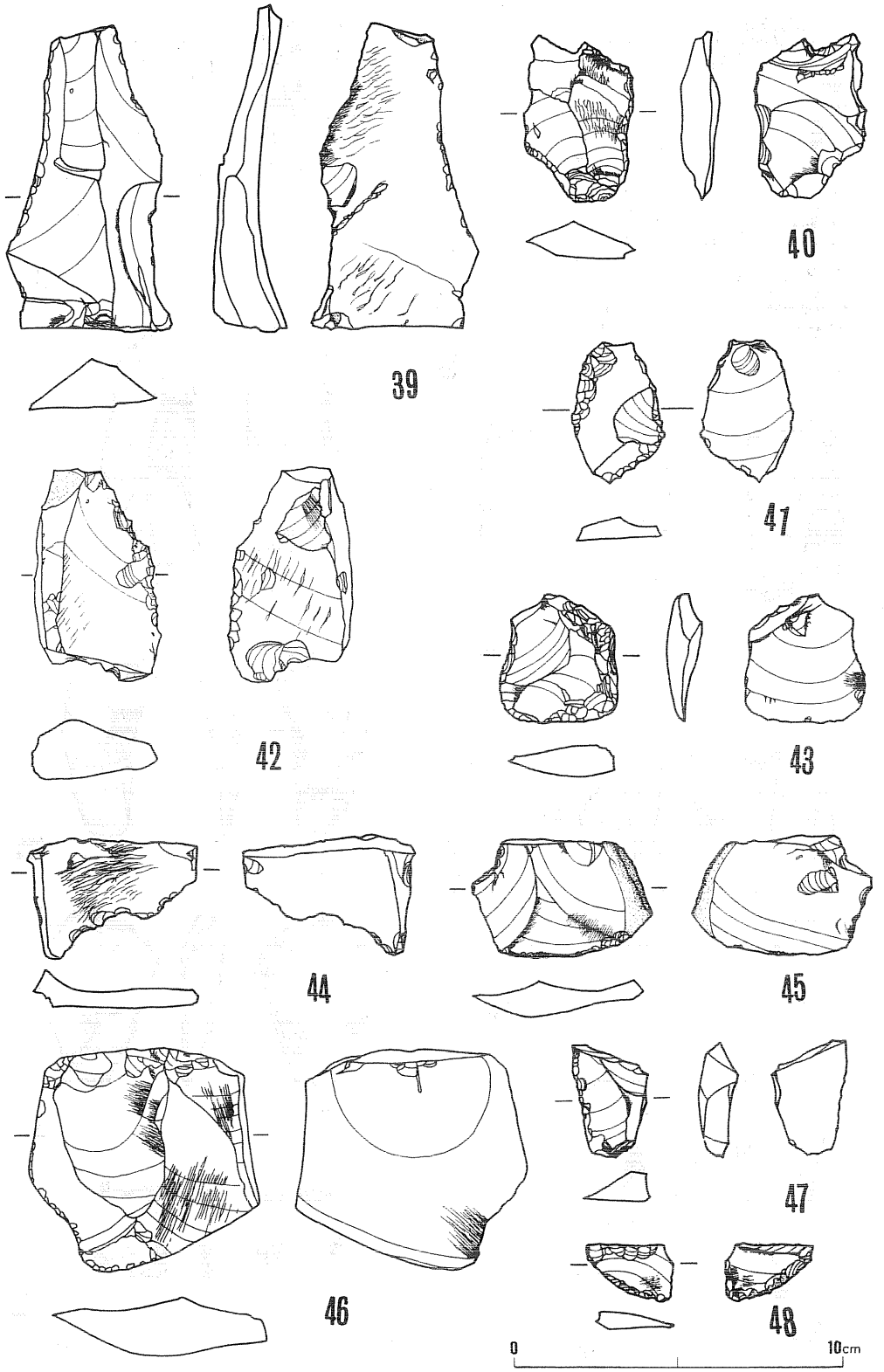
第82図　遺構外出土石器（2）



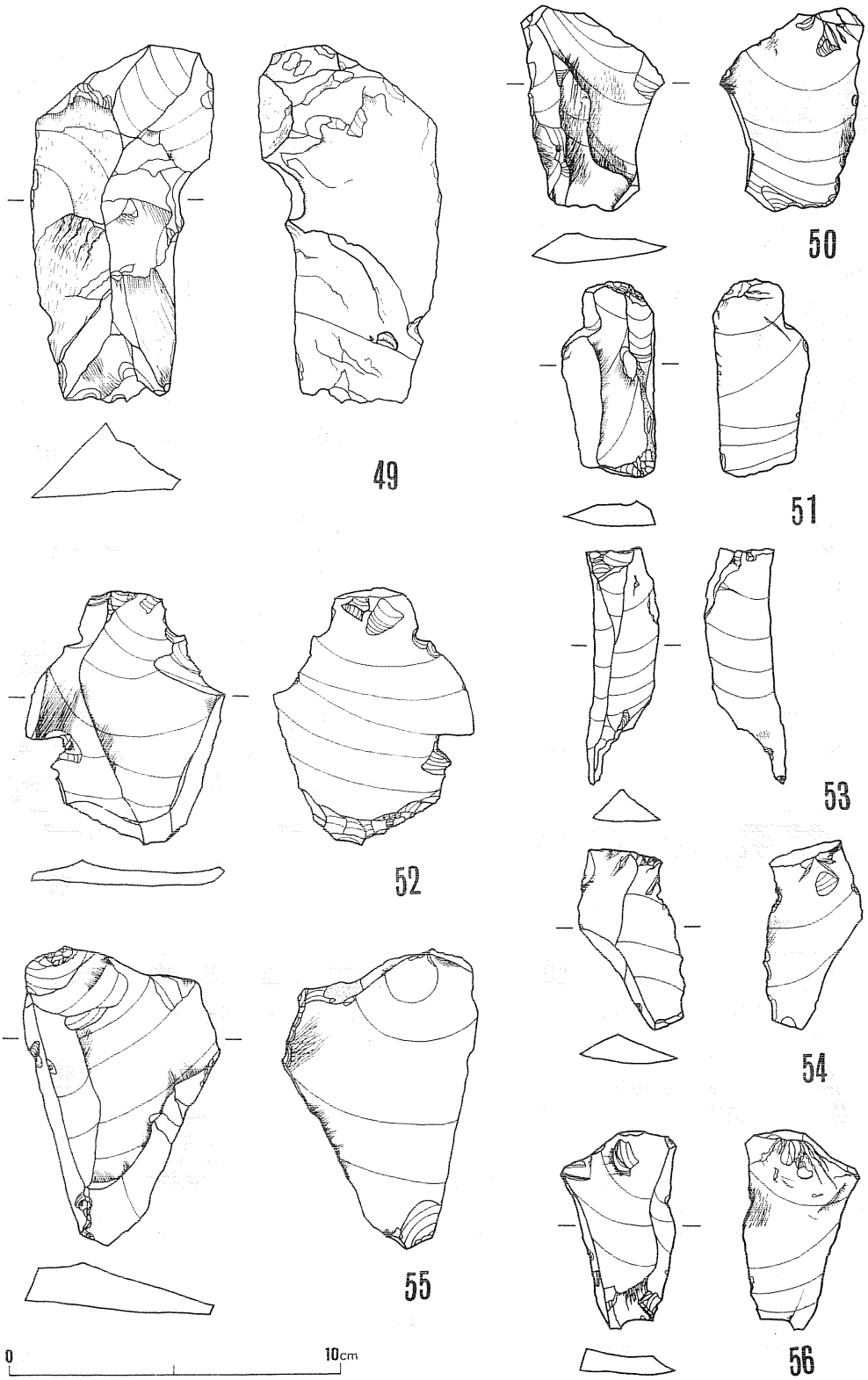
第83図　遺構外出土石器（３）



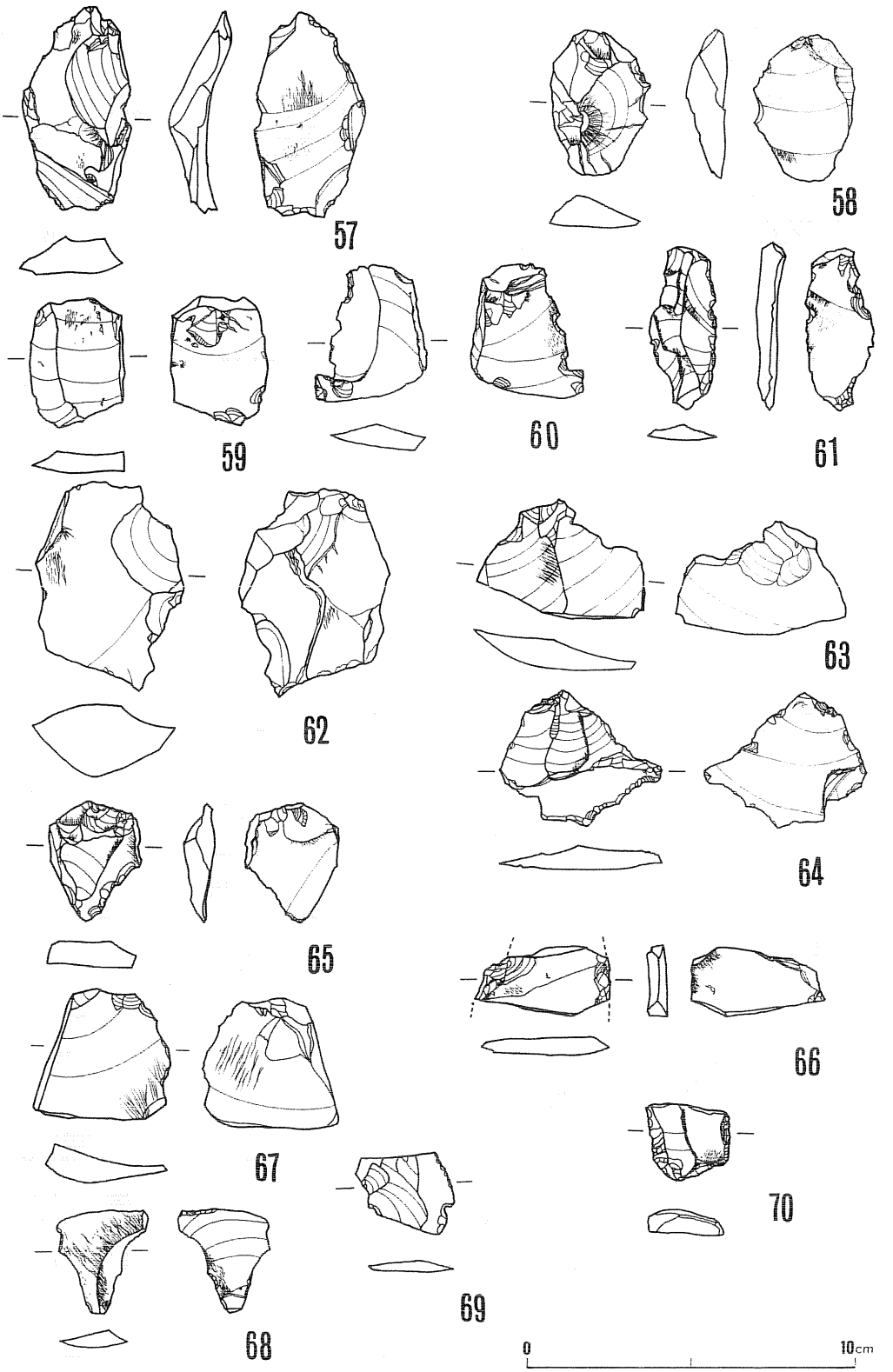
第84図　遺構外出土石器（4）



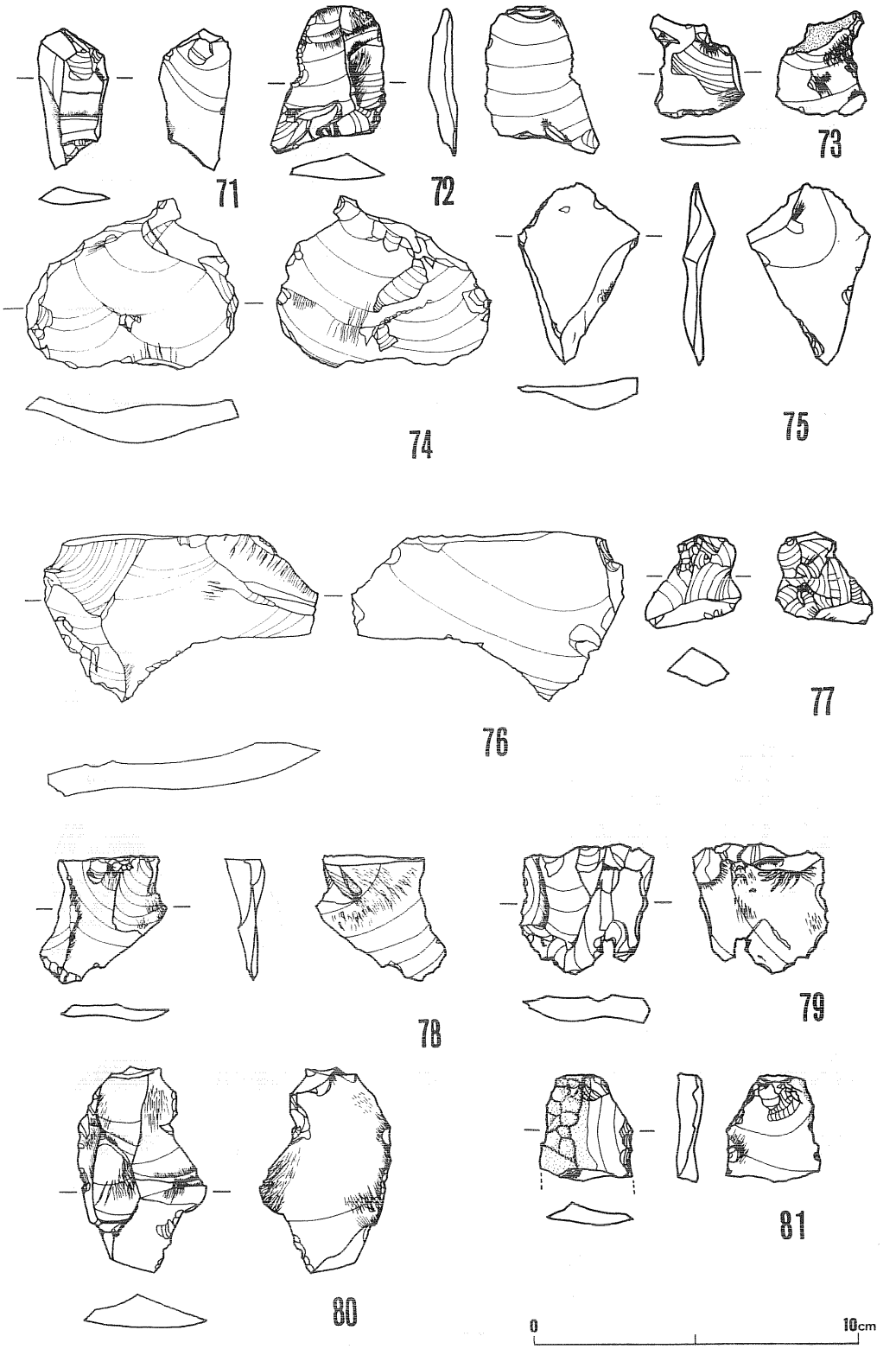
第85図　遺構外出土石器（5）



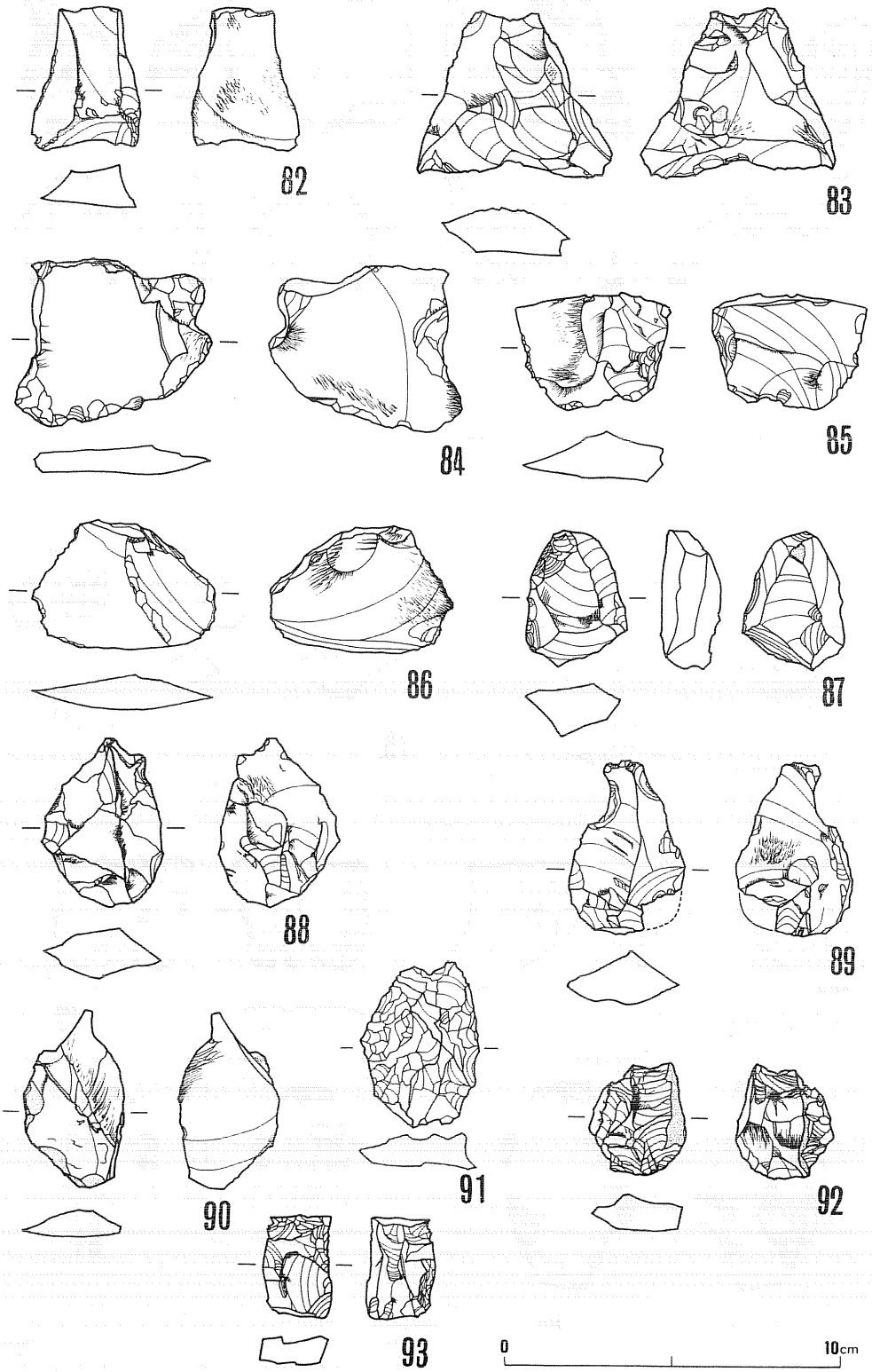
第86図　遺構外出土石器（6）



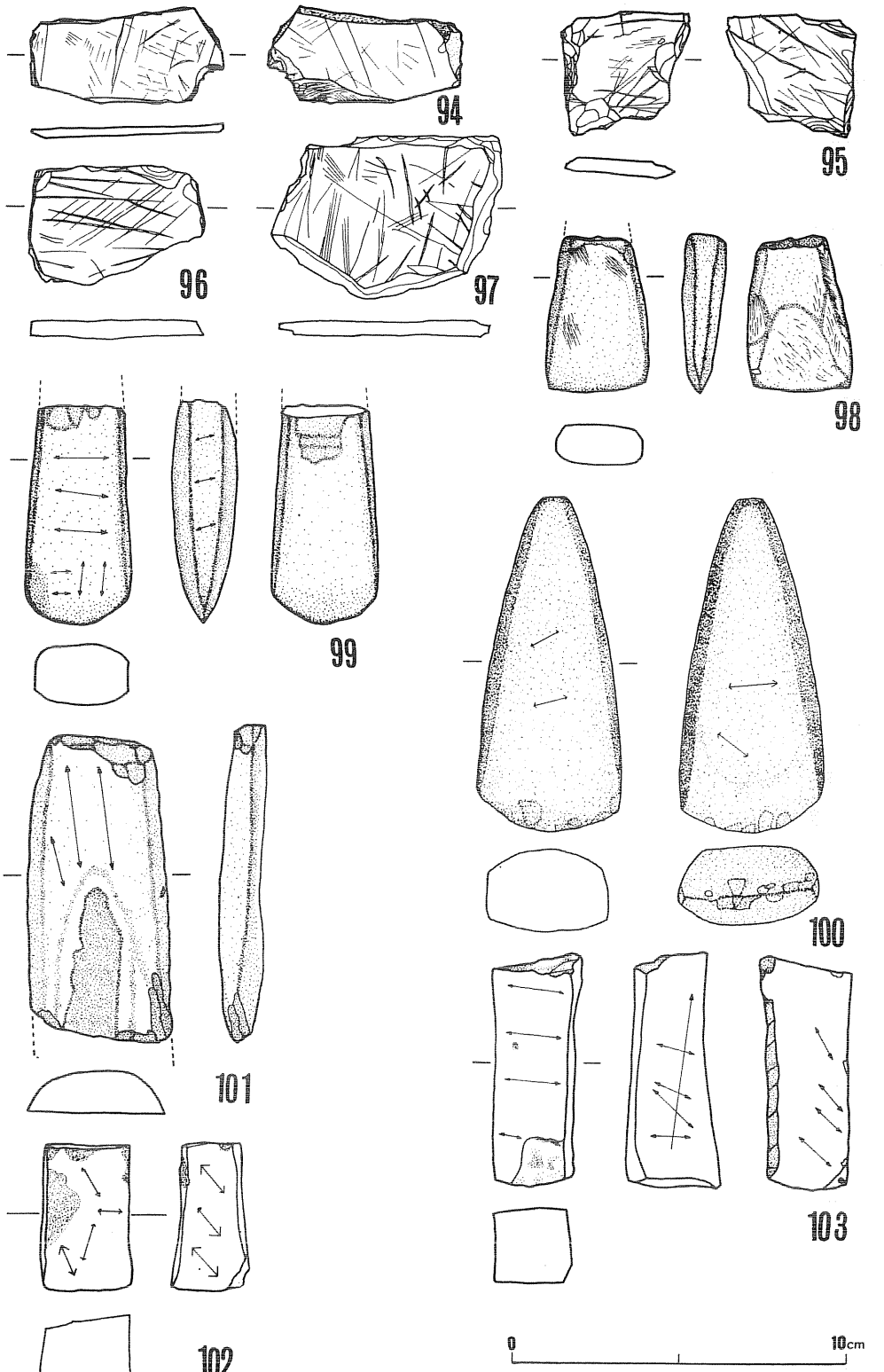
第87図　遺構外出土石器（7）



第88図　遺構外出土石器（8）



第89図　遺構外出土石器（9）



第90図　遺構外出土石器（10）

6. まとめ

飛鳥平遺跡から検出された遺構は、縄文時代竪穴住居跡5棟、平安時代竪穴住居跡8棟、土壙22基、埋甕2基、焼土遺構1基、溝1条である。

縄文時代の竪穴住居跡は、ＳＩ038の中期以前のものから、中期末の石組複式炉をもつＳＩ037、039、後期のＳＩ036、後期末の土器埋設石組炉をもつＳＩ002がある。この中で地域性が強いとみられるのは、中期末の石組複式炉をもつ竪穴住居跡である。秋田県内における中期末のいわゆる複式炉を持つ住居跡は、梨の木塚遺跡や内村遺跡等に例があるように、県南においてはいわゆる上原型の土器埋設石組複式炉を持つものが大部分である。これに対して、県北においては黒森山麓竪穴群第4号住居跡にみられるように、石組複式炉を持つものが多い。土器型式においてはどちらも後期終末のものが出土しており、地域性の違いによるものと考えられる。

平安時代の竪穴住居跡を細分すれば、

1. 壁溝を有し、柱穴の明確なもの……ＳＩ003、ＳＩ009、ＳＩ013
2. 壁溝を有し、柱穴が不明確もしくはないもの……ＳＩ004、ＳＩ011
3. 壁溝・柱穴ともにないもの……ＳＩ012、ＳＩ035、ＳＩ041

の3タイプに区分される。これらの住居跡はタイプ別にみてみると、法量、カマドの形態等に共通するところが多くみられる。

土壙は22基検出されているが、形態から次のように分類される。平面形により、1：ほぼ円形を呈するもの、2：楕円形もしくは隅丸長方形を呈するもの、3：不定形を呈するものの3タイプに、断面形により、a：あまり深さのないもの、b：やや深さのあるもの、c：フラスコ状を呈するもの、d：不定形を呈するものの4タイプに分けてみると

1－a……SK **008**、017、**024**

1－b……SK **014**、**015**、**016**、**018**、**021**、065

1－c……SK **020**、**025**、027、029、066

2－b……SK 033、**045**、059

2－d……SK **043**、

3－a……SK 022

3－b……SK 031、**046**、028

となる。ゴシック体が遺物を出土した土壙である。1タイプのものは半分以上のものが遺物を出土している。SK 024出土の炭化材を^{14}C測定したところ、1,140±80 yB・P・という値が出ており、1タイプのものは縄文、平安の時代を問わず存在していたことがわかる。また、

1－bタイプのものはほとんどが遺物を出土し、特にSK014、016などからはまとまった遺物が出土した。SK022から出土した後期の蓋付切断土器は秋田県内ではまれなものである。青森県や岩手県内で出土したものと同様、十腰内式土器の文化圏のものと思われる。

その他、遺構外の遺物としては、縄文時代草創期の爪形文土器が出土している。八戸市内の鴨平(2)遺跡からも爪形文土器が出土しているが、文様構成・胎土・出土層位等に差異がみられる。(註) 後期の土器としては、十腰内式土器が多く出土しており、十腰内文化圏の遺跡といえよう。

註：青森県埋蔵文化財調査センター所報　第1号，1982年。

発掘調査参加者　（鳥居平遺跡、飛鳥平遺跡）

浅石竹次郎、浅利雄造、阿部金太郎、阿部国松、阿部藤次郎、阿部安五郎、阿部理一、安保徹、川又吉弥、木村省三郎、工藤伊代治、斉藤五十二、佐藤吉男、田中勇吉、田村勝弥、津江広、平野隆、美濃山次好、山本富恵、浅石キガ、浅石サキ、浅石サト、浅石ミサ、浅石幸枝、浅利イネ子、阿部キン、阿部順子、阿部弘子、安保ヨシ、井上シズエ、金沢良子、川又リサ、神田フジエ、児玉ミツエ、斉藤イエ、佐藤末子、佐藤スミ、佐藤ミツ、高田チオ、田中スミ、綱木ミヨ、中野ヨシ子、奈良ミワ、成田ウメ、成田笑里子、成田ヒサ、根本キヌ、根本スエ、畠山サカエ、畠山ハル、花ノ木トキ、間藤美代、宮沢イサエ、柳沢照子、山口久子、山本エツヨ、山本真紀子、渡辺愛子（50音順）

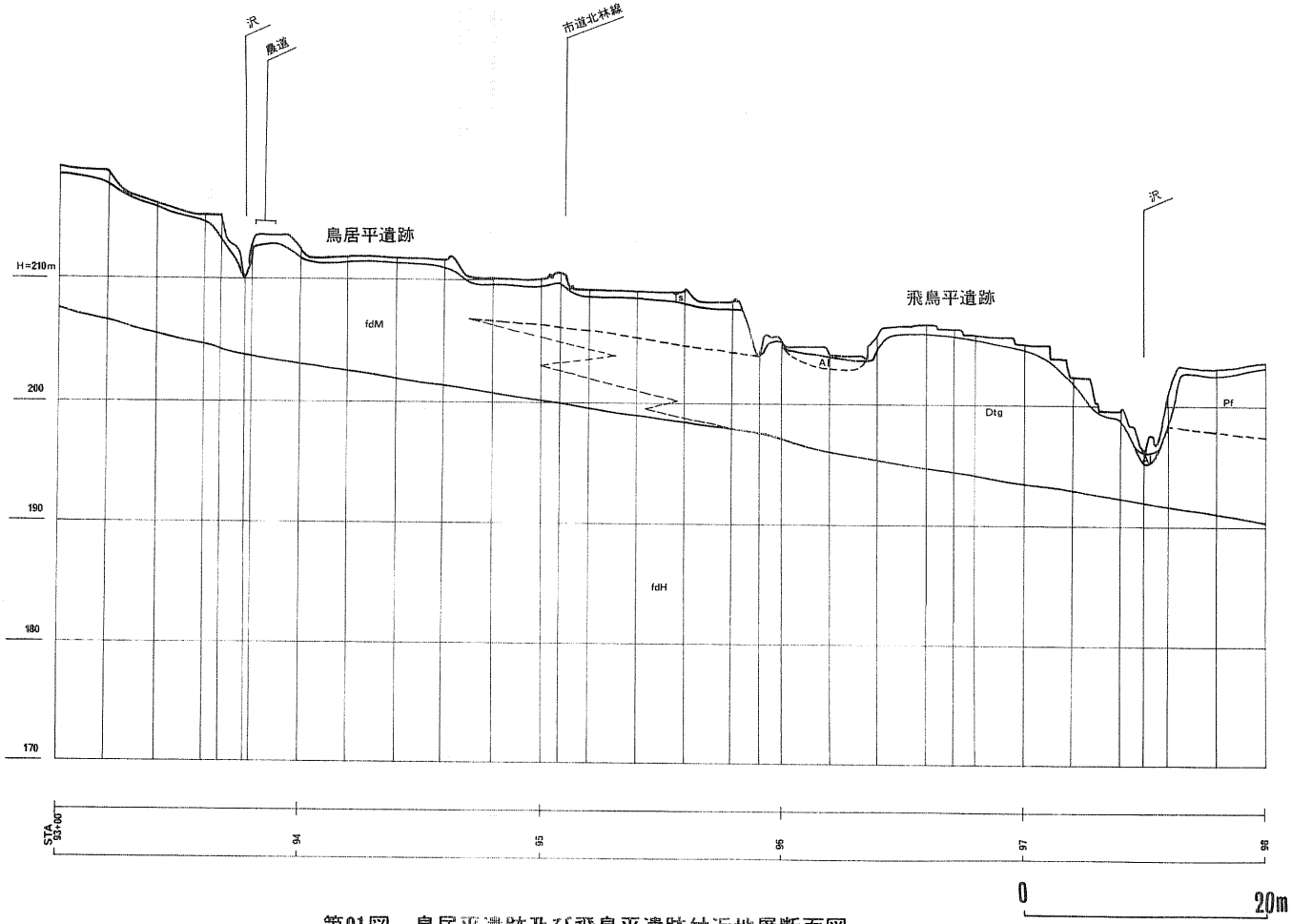
測定結果報告書

C－14試料7個の測定結果がでましたのでご報告します。

当方のコード	依頼者のコード	C－14年代
N－4137	SI001	1,240±　75 y B. P.（　1,210±　70 y B. P.）
N－4138	SI012	790±　75 y B. P.（　765±　70 y B. P.）
N－4139	SI037	3,900±　75 y B. P.（　3,790±　60 y B. P.）
N－4140	SI024	1,140±　80 y B. P.（　1,100±　75 y B. P.）
N－4141	SI039	3,930±　95 y B. P.（　3,820±　90 y B. P.）
N－4142	SI002 埋設土器内	3,120±　80 y B. P.（　3,030±　75 y B. P.）
N－4143	SI002 地山内	13,100±115 y B. P.（12,800±110 y B. P.）
N－4144	SI002 床面炭化材	3,230±　65 y B. P.（　3,140±　65 y B. P.）

年代は^{14}Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（ years B．P．）として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので、^{14}C年代がこの範囲に含まれる確率は約70%です。この範囲を2倍に拡げますと確率は約95%となります。なお^{14}C年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。

日本アイソトープ協会



第91図　鳥居平遺跡及び飛鳥平遺跡付近地層断面図

第15表　鳥居平遺跡及び飛鳥平遺跡付近地層断面図説明表

地質時代		地層名	記号 平面図	記号 断面図	地形区分	記事
第四紀	沖積層	表　土		Ts		盛土を含む。
		沖積層	Al	Ac	沖積面	粘土，礫混じり粘性土。鳥越面（シラス台地）を開析する沖積面に分布。STA 168＋85地点では5m程度の厚さがあり，N値は0～2である。分布範囲はSTA 161＋00～STA 162＋10，STA 164＋50～STA 172＋00付近である。
				As		砂，砂質土。上記の区間の基底部に1m以内の厚さで分布し，ゆるい状態にある。
				Ag		礫，玉石，転石。寺野沢，歌内川，浦志内川および黒沢川などの川底に分布。
		崖錐性堆積物	Ad	Ad	谷沿い谷頭部の沖積面	STA 130＋30～STA 133＋00間の谷頭部に分布。礫混じり粘性土が3m～4m程度の厚さで分布している。
		新期扇状地堆積物	fdL		新期扇状地	砂礫，粘土。低位段位面および沖積面を覆って分布。国道282号線大里付近に小規模にみられる。
		低位河岸段丘堆積物	fdL		沖積面	砂礫，粘土。米代川沿いに分布。標高135m～155mの平坦面を形成。
	洪積世		fd	fd	低位河岸段丘面	砂，砂礫，粘土。米代川および支流沿いに分布。N値は小さく，締り程度はゆるい。
		軽石流堆積物	Pf	Pf_2 ～ Pf_1	鳥越面	十和田火山起源の軽石質火山灰の二次堆積物（軽石流堆積物）。標高150m～200m前後の平坦面（鳥越面）を形成。STA 145＋20～STA 164＋08間に分布。一般に言われているシラスと同質のものと考えられる。土性はシルト。粘土等の細粒分を多くまじえるが、N値は浅部は小さいが比較的良くしまっている。

第四紀	洪積世	中位段丘堆積物	湖沼堆積物	fdM	ldc	中位段丘面	古い凹地に堆積。ＳＴＡ 113＋70～ 115＋20間に堆積（黒沢川付近）。腐植物を混じえた粘土（亜角～角礫混入）ldc ，および砂，砂礫lgより成る。粘土はＮ＝10～25と硬質。砂礫は薄層として分布。
					ldg		
			古期崖錐性堆積物		Dtc		古い崩壊土砂，土石流堆積物。中期扇状地堆積物とは指交関係をなす。Dtｃ：礫混じり粘性土～砂質土。礫は角礫。ＳＴＡ 100付近の地表下８～９ｍ以深に堆積。Ｎ値は30～502 硬質。Dtg：砂礫の粘土分を若干含み，礫間はよく締っている。Ｎ値は40以上。
					Dtg		
			中期扇状地堆積物		fdM		標高およそ250ｍ以下に分布。歌内川，浦志内川および黒沢川などの古い扇状地で特に歌内川のものは明瞭な扇状地地形を残している。地層は砂礫層が主で、砂質土および粘性土が地表付近に認められる。ＳＴＡ 116＋06～123＋35間は切土の対象となるが、その他の区間は盛土および構造物の対象地盤となる。
		高位段丘堆積物		fdH	fdH－c	高位段丘面	地層は粘土。粘性土（ fdH －Ｃ），礫混じり粘性土（fdH －cg），砂礫（fdH－ｇ），砂質土（fdH － Ｓ）および有機土（ fdH －pt ）の薄層などがある。fdH－cg，fdH －ｇは歌内川　浦志内川，黒沢川などから多量の土砂が供給された時期の堆積物と推定され，これに対し fdH －ｃ，fdH －pt，fdH－ｓなどは河川からの土砂の供給が少ない時期に湖沼性の湿地に堆積した地層と考えられる。歌内川付近の高位段丘は、地表下５～７ｍ程度は粘性土が多く、下部は密な礫層が分布。浦志内川、黒沢川付近の高位段丘は砂礫（または礫）。礫混じり粘性土・粘土・粘性土の互層で構成。fdH －ｃのＮ値は歌内川付近ではB_1－５では 地表下11ｍ付近までは３～７程度であり黒沢川右岸では深度に関係なく４～10程度である。
					fdH－cg		
					fdH－pt		
					fdH－ｓ		
					fdH－g		

第三紀	中新世	第三紀層	Y－tf	Y－tf Ter		八幡平～湯瀬地区は湯瀬含礫凝灰岩が分布する（Y－tf ）。また既往調査のB_1－18では泥岩が確認され岩質区分をすれば軟岩に分類されよう。（Ter ）

日本道路公団作成「土性図」による。

主要参考文献

青森市螢沢遺跡発掘調査団『螢沢遺跡発掘調査報告書』1979。

青森県教育委員会『中の平遺跡発掘調査報告書』1979。

青森県教育委員会『三内遺跡発掘調査報告書』1978。

青森県教育委員会『泉山遺跡発掘調査報告書』1976。

秋田県教育委員会『塚の下遺跡発掘調査報告書』1979。

秋田県教育委員会『梨の木塚遺跡発掘調査報告書』1979。

秋田県教育委員会『片符沢遺跡Ⅰ発掘調査報告書』1980。

秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ』1981。

岩木山刊行会『岩木山』1968。

大迫町教育委員会『立石遺跡発掘調査報告書』1979。

葛西励「十腰内Ⅰ式土器の編年的細分」『北奥古代文化第11号』1979。

斉藤尚己・沼山源喜治「東北地方の合口埋甕遺構について」『北奥古代文化第6号』1974。

鈴木道之助『図録石器の基礎知識』第3巻縄文，柏書房，1981。

仙台市教育委員会『山口遺跡発掘調査報告書』1981。

十和田町教育委員会『黒森山麓縄文期竪穴群』1971。

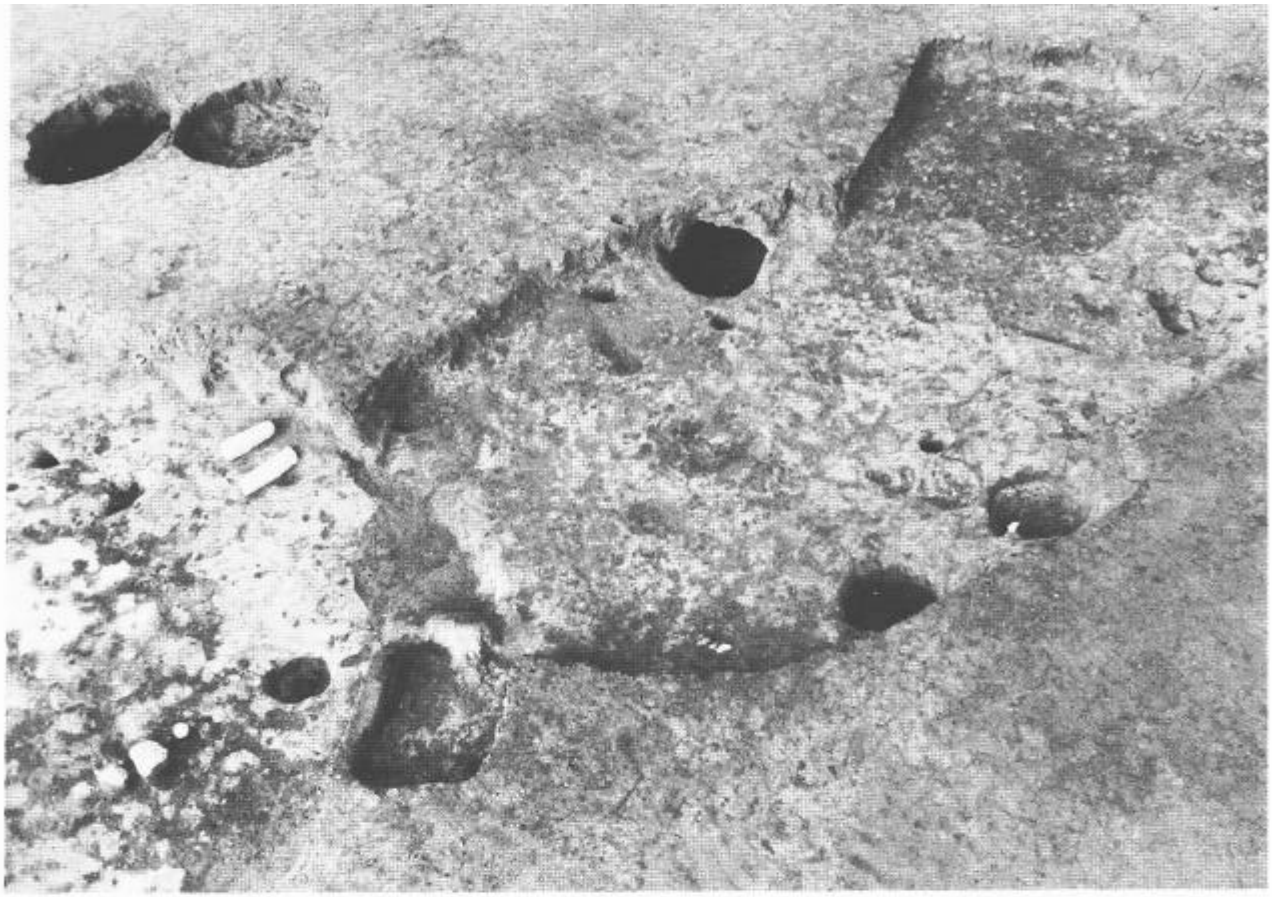
成田滋彦「青森県の土器『縄文文化の研究』第4巻縄文土器Ⅱ，雄山閣，1981。

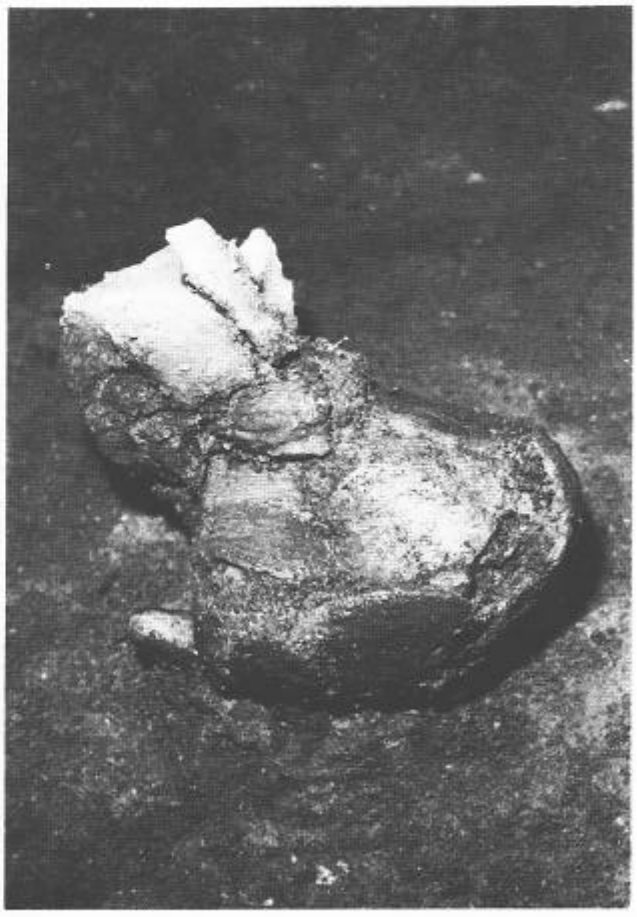
野口義磨編『縄文土器大系』第3巻後期，講談社，1981。

本宮町教育委員会『上原遺跡概報』1970。

図版1　飛鳥平遺跡航空写青　（上が北）

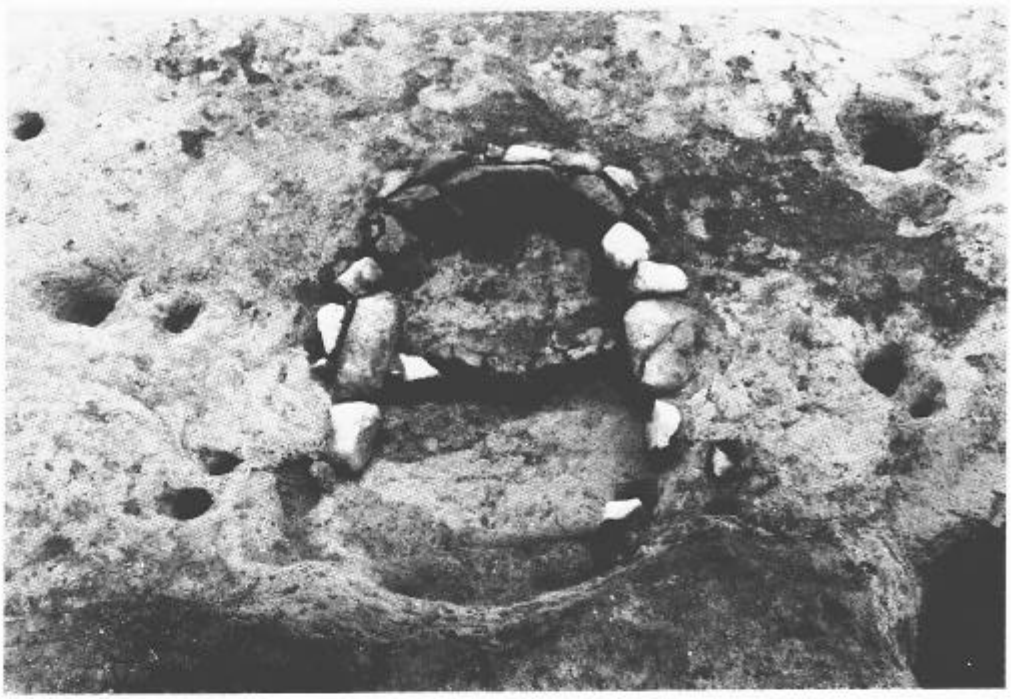
図版２　（上）　飛鳥平遺跡遠景　調査前　（東▶西）
　　（下）　飛鳥平遺跡近景　（東南▶北西）

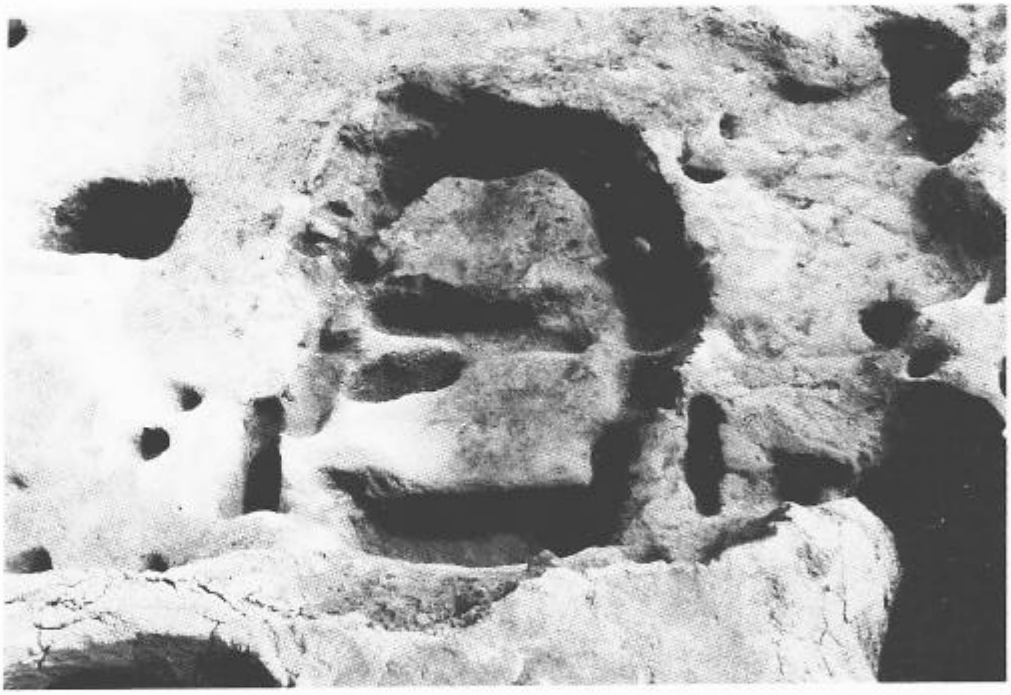




図版 3　（上）　SI 036 竪穴住居跡　（南▶北）
　　（下）　SI 036 竪穴住居跡土器出土状況

図版 4　SI 037 竪穴住居跡　（上）（東▶西）
（下）（南▶北）





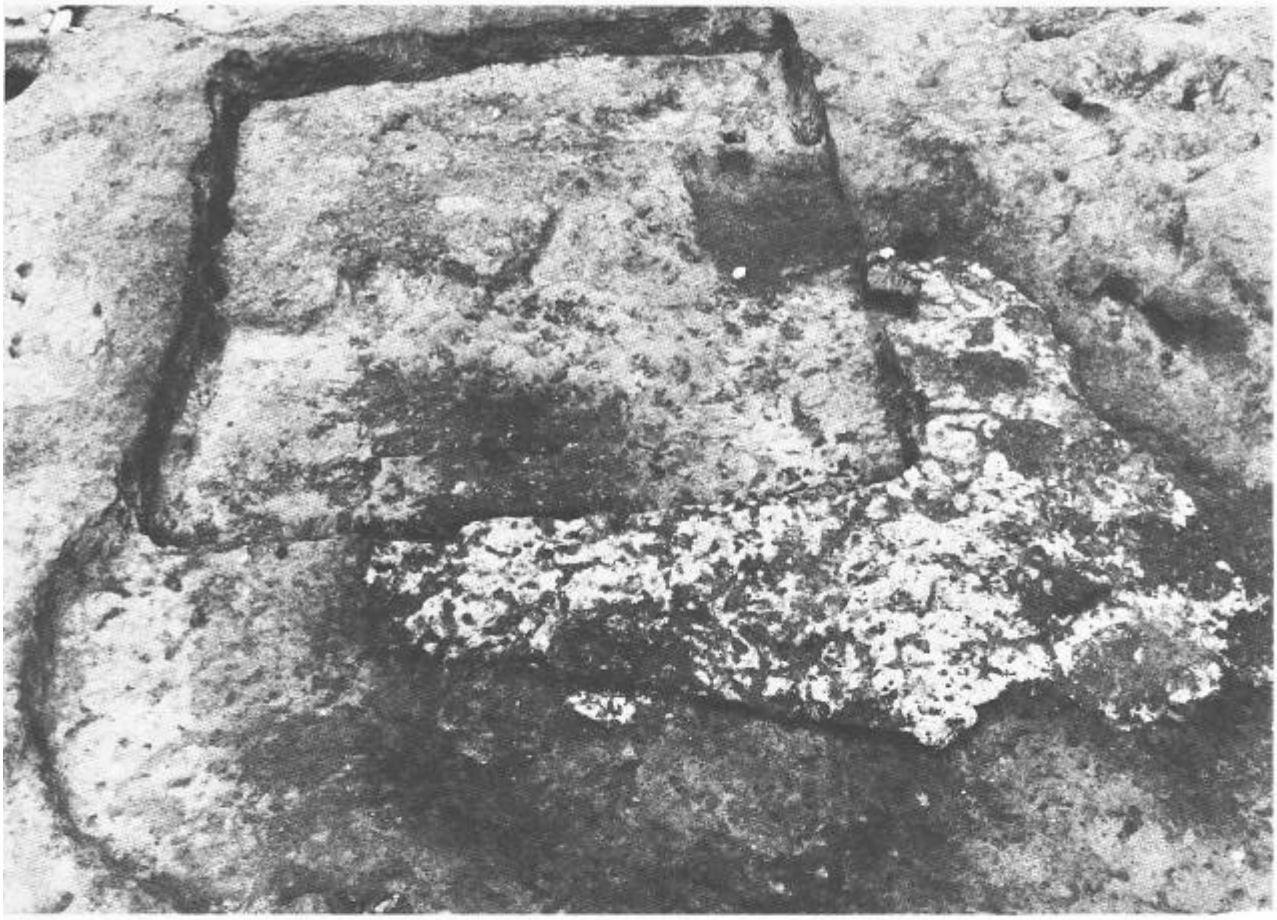
図版 5

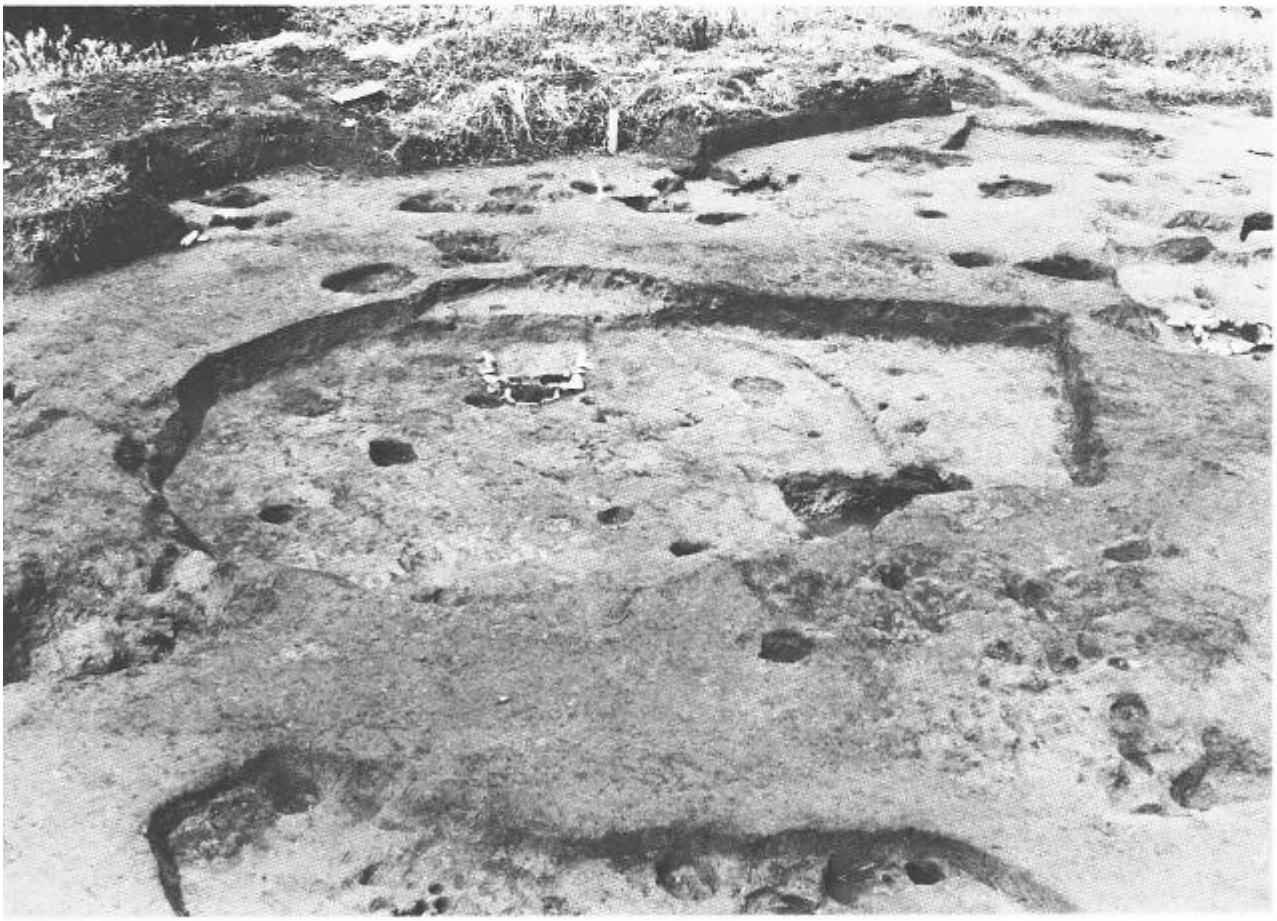
SI 037 竪穴住居跡

（上） 複式炉 （西▶東）

（中） 炉石除去後

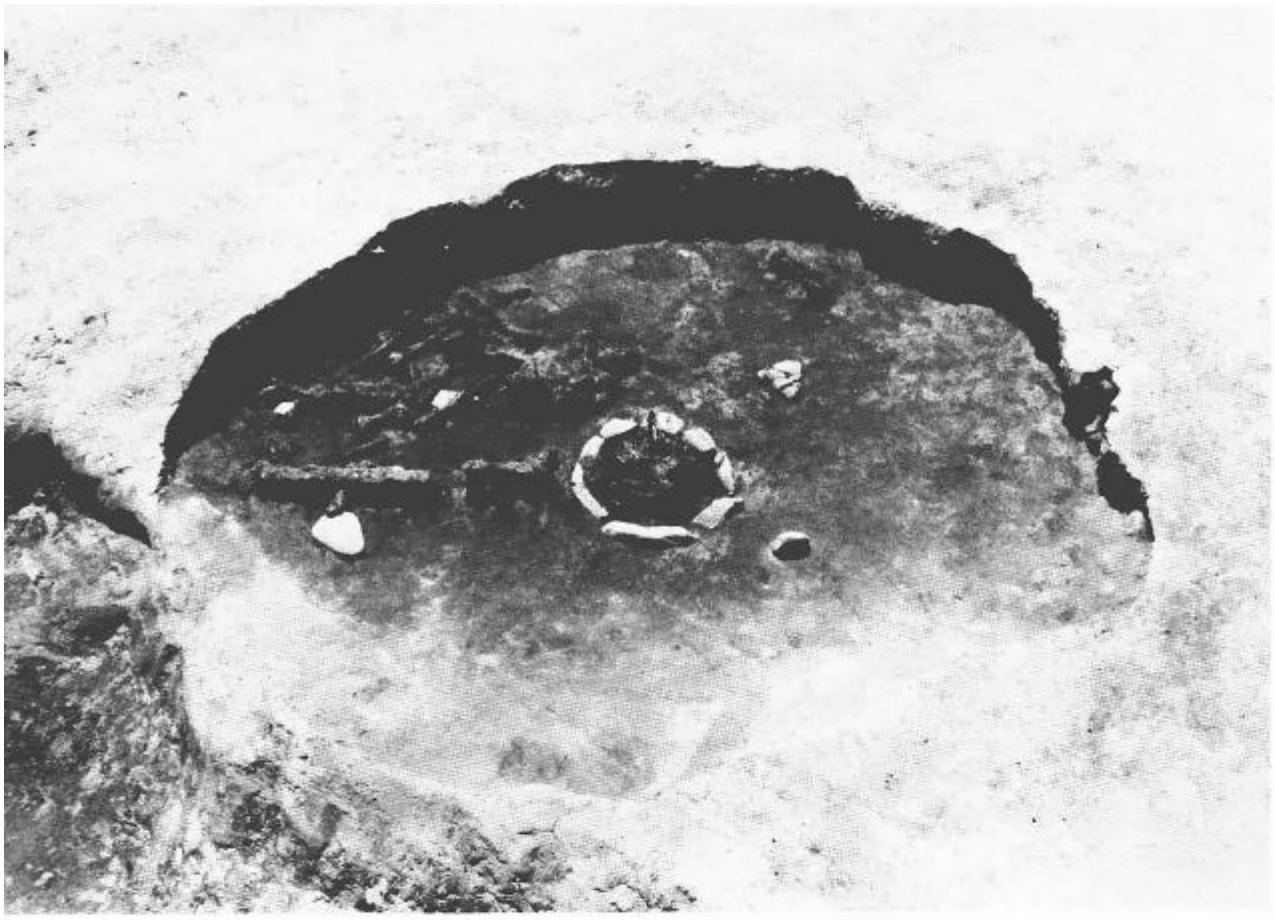
（下） 骨片出土状態

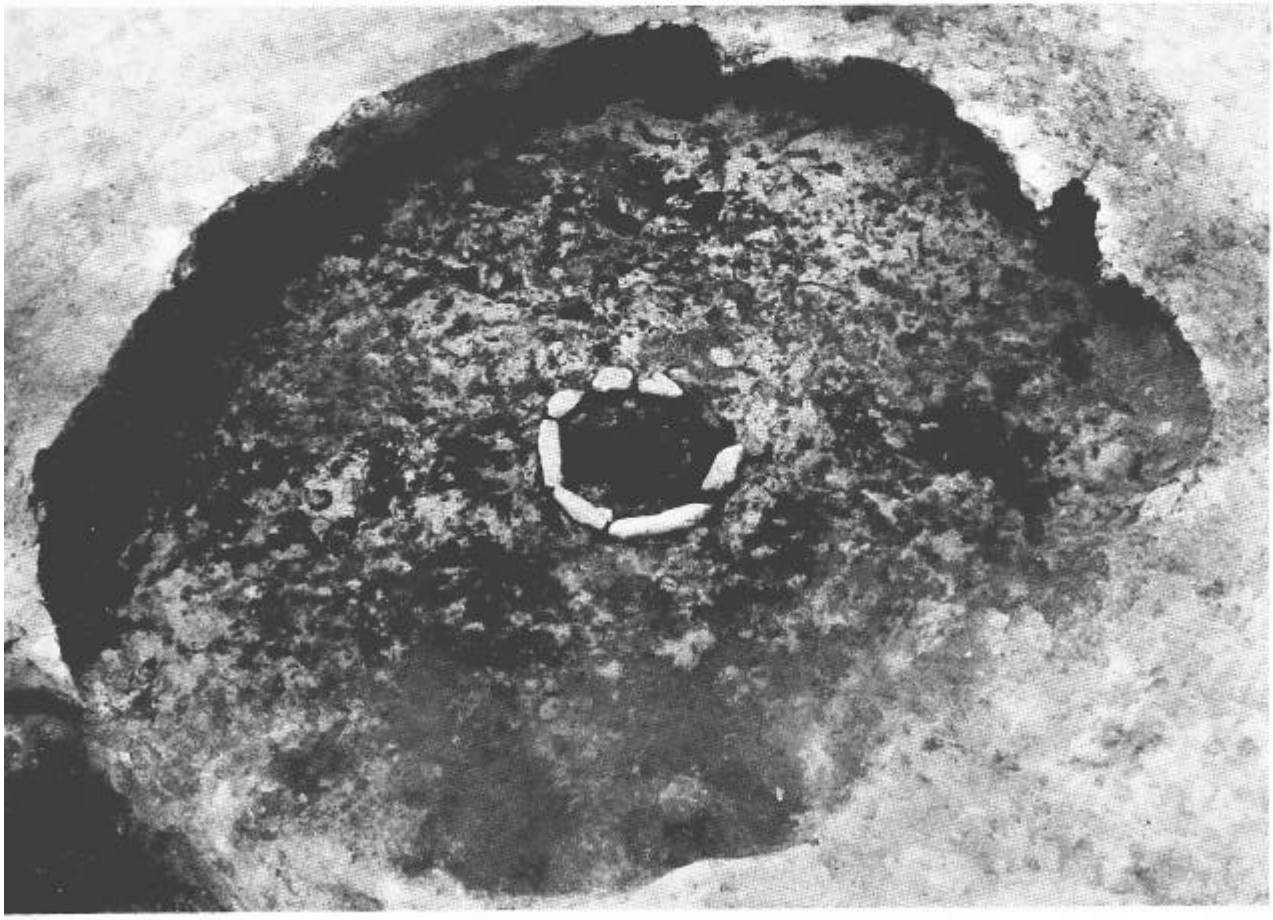




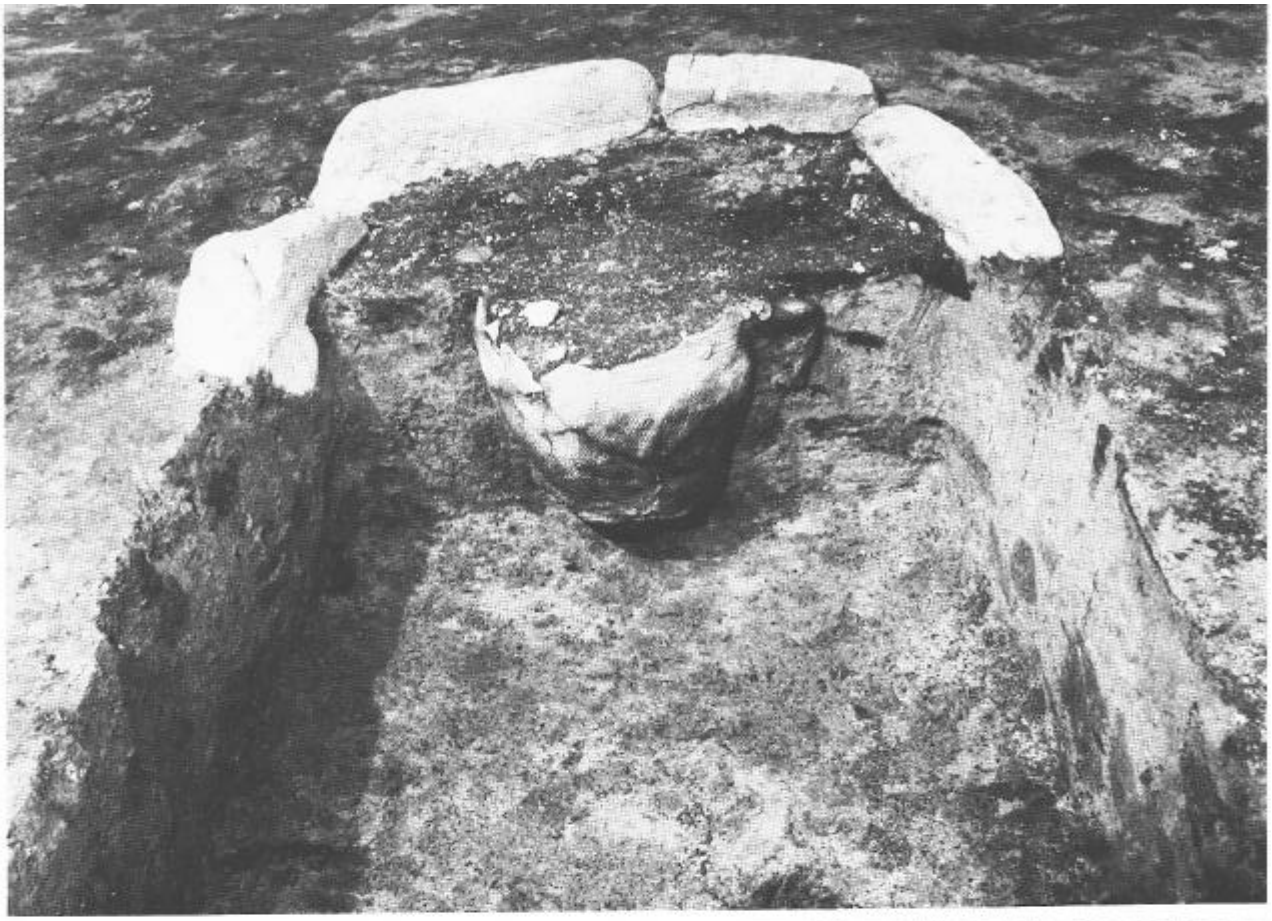
図版 6　SI 039 竪穴住居跡　（上）　確認面　（西▶東）
（下）　掘り下げ後　（南▶北）

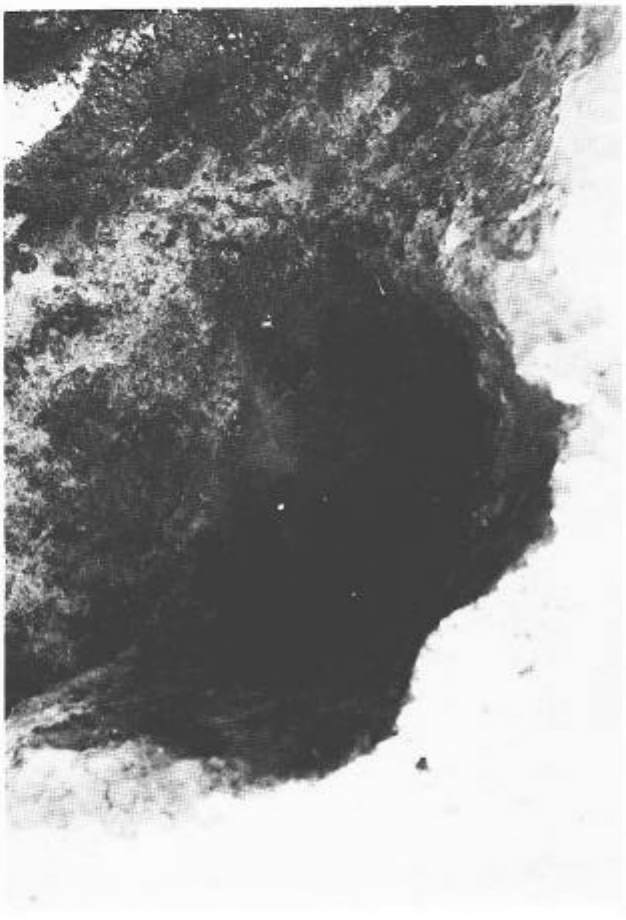
図版 7
SI 039 竪穴住居跡
（上） 複式炉 （北▶南）
（中） 複式炉 （東▶西）
（下） 骨片出土状態



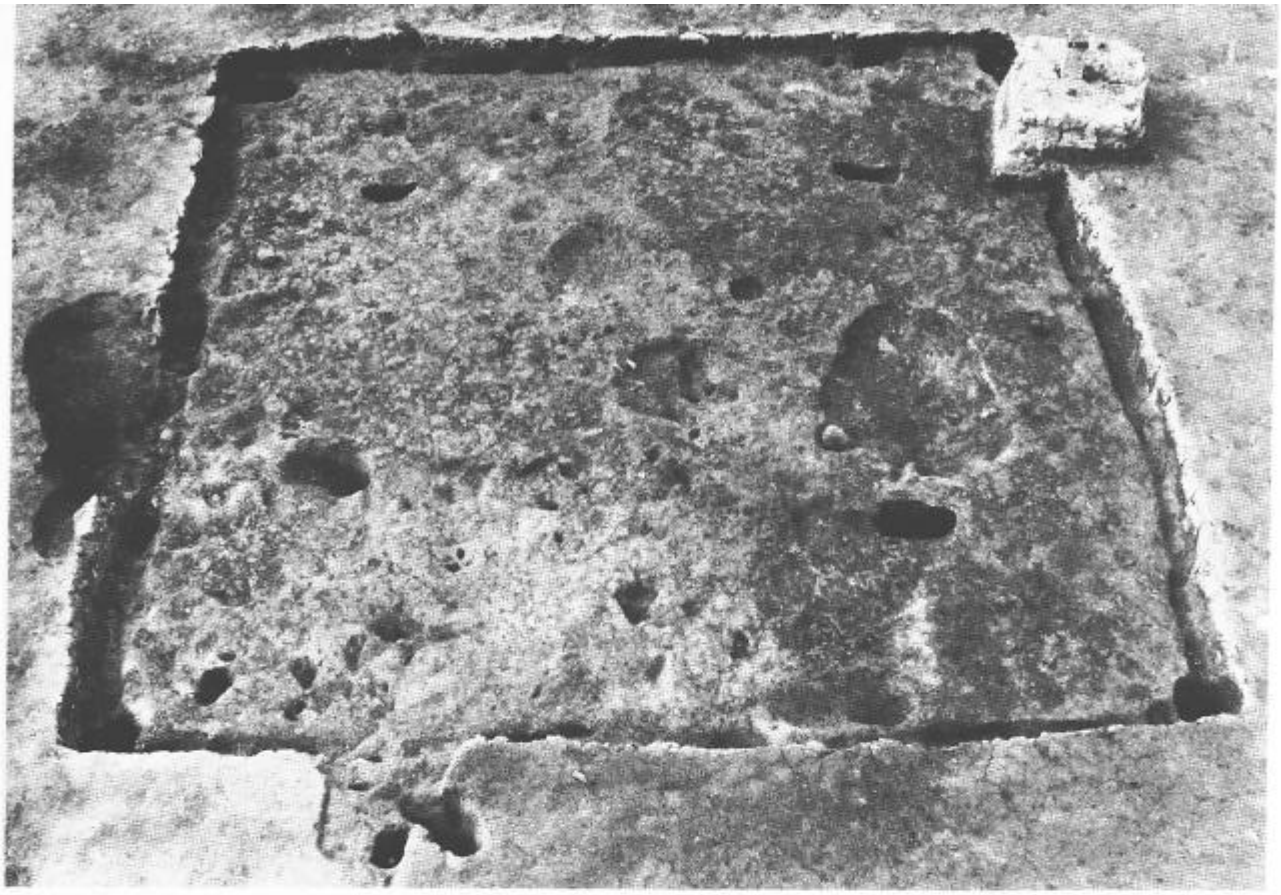


図版 8　SI 002 竪穴住居跡　（上）　炭化材出土状態　（西▶東）
（下）　掘り下げ後　（西▶東）

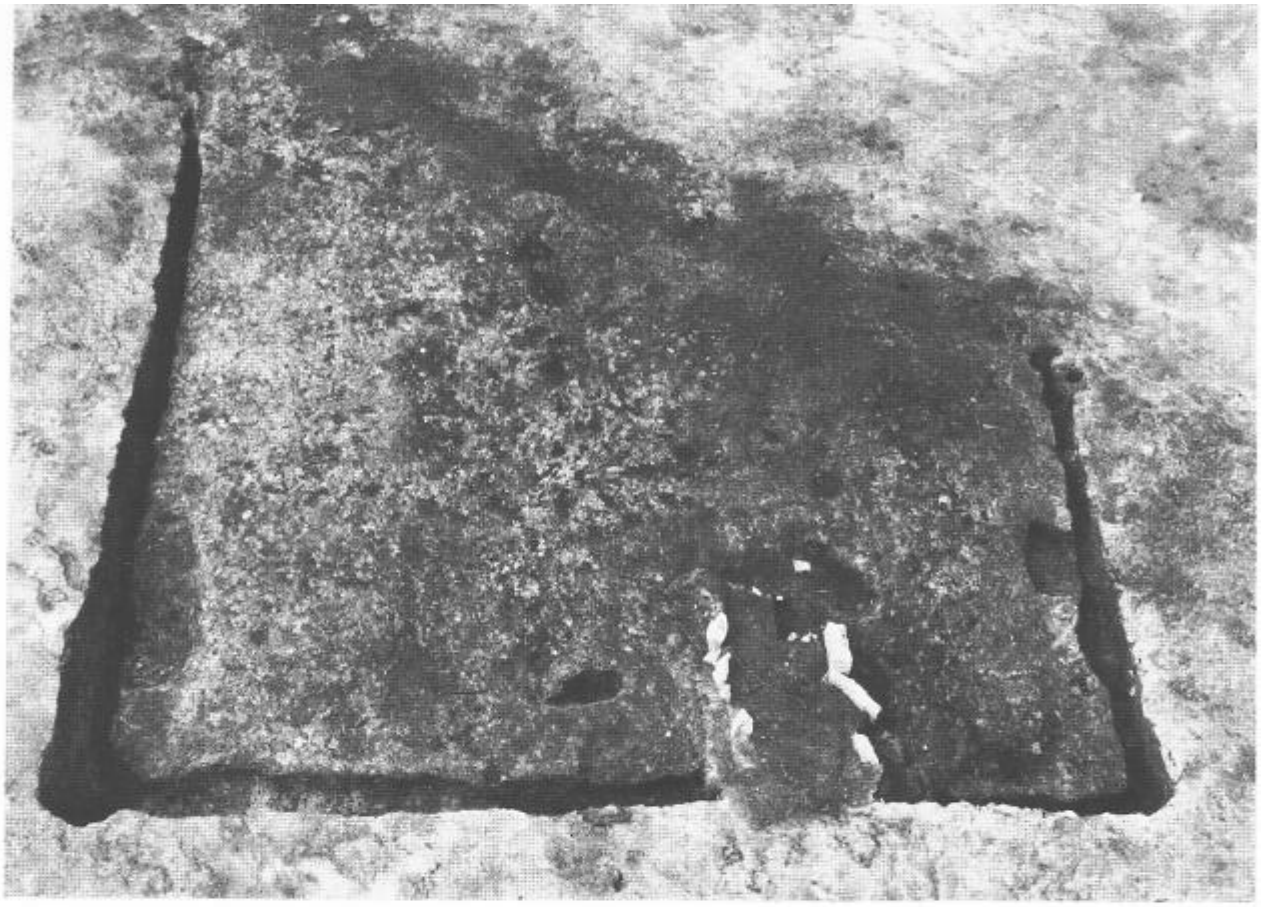


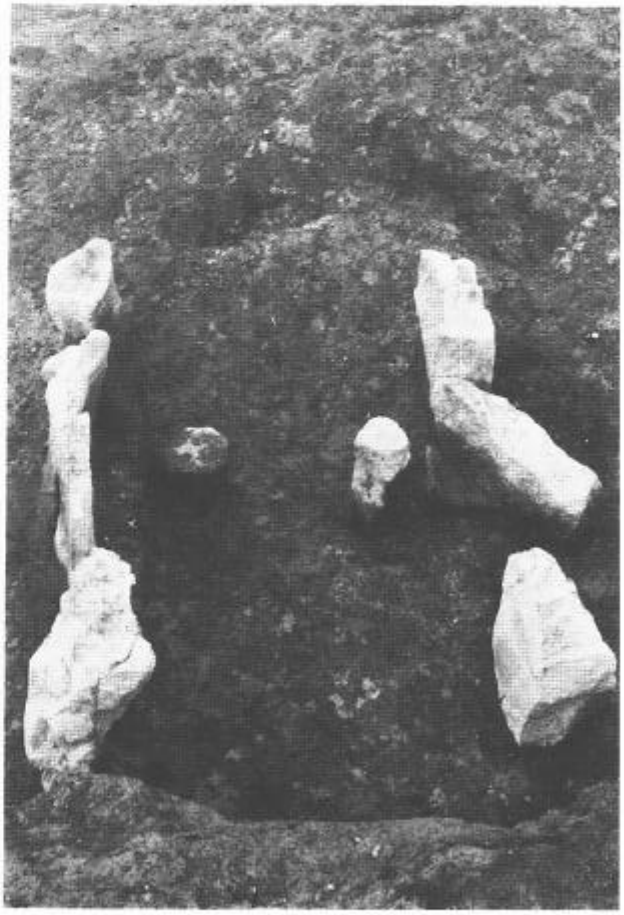


図版 9　SI 002 竪穴住居跡　（上）　炉半截図　（南▶北）
（下）　遺物出土状態

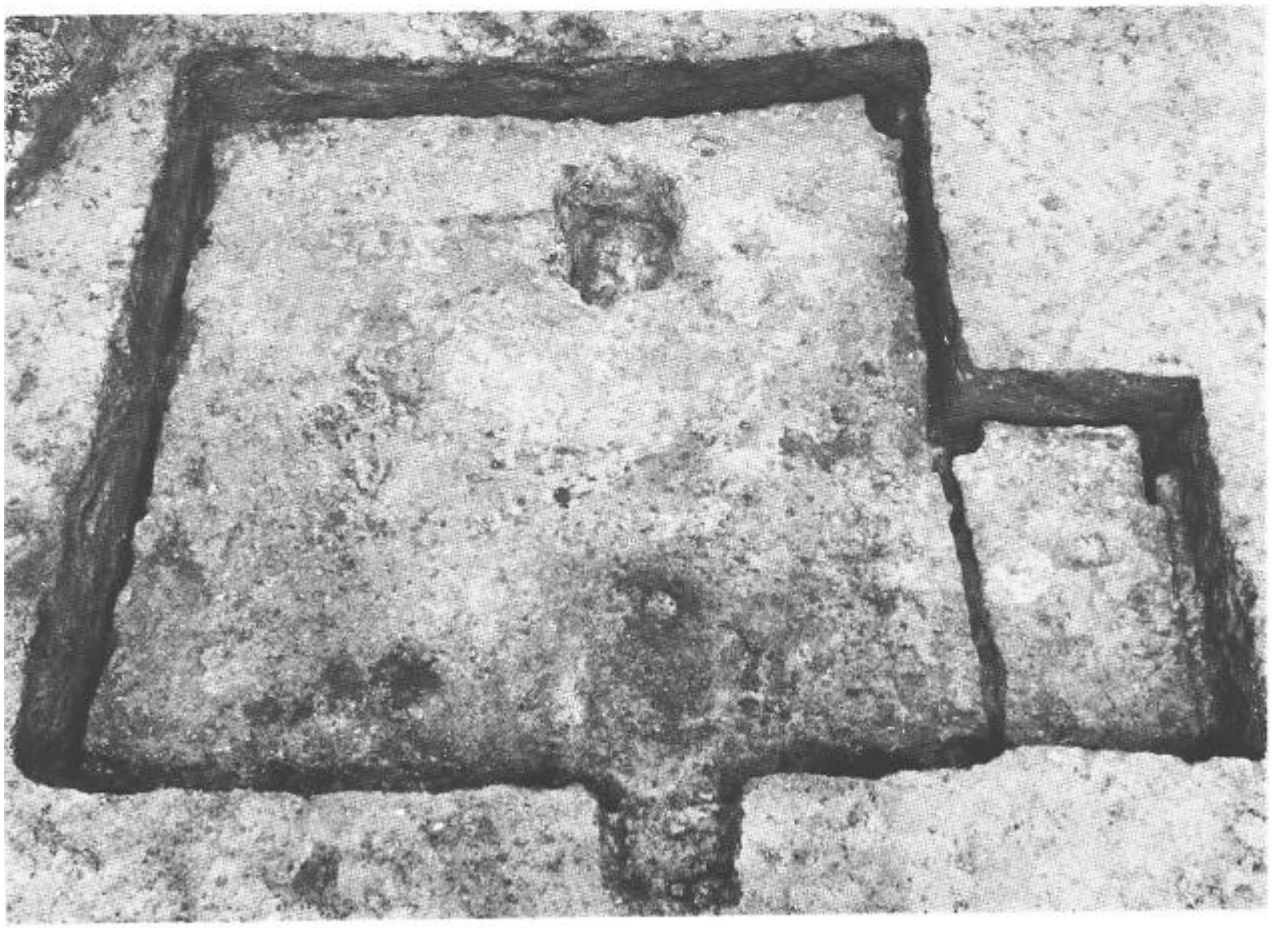


図版10　SI 003 竪穴住居跡　（上）（南▶北）
（下）（東▶西）





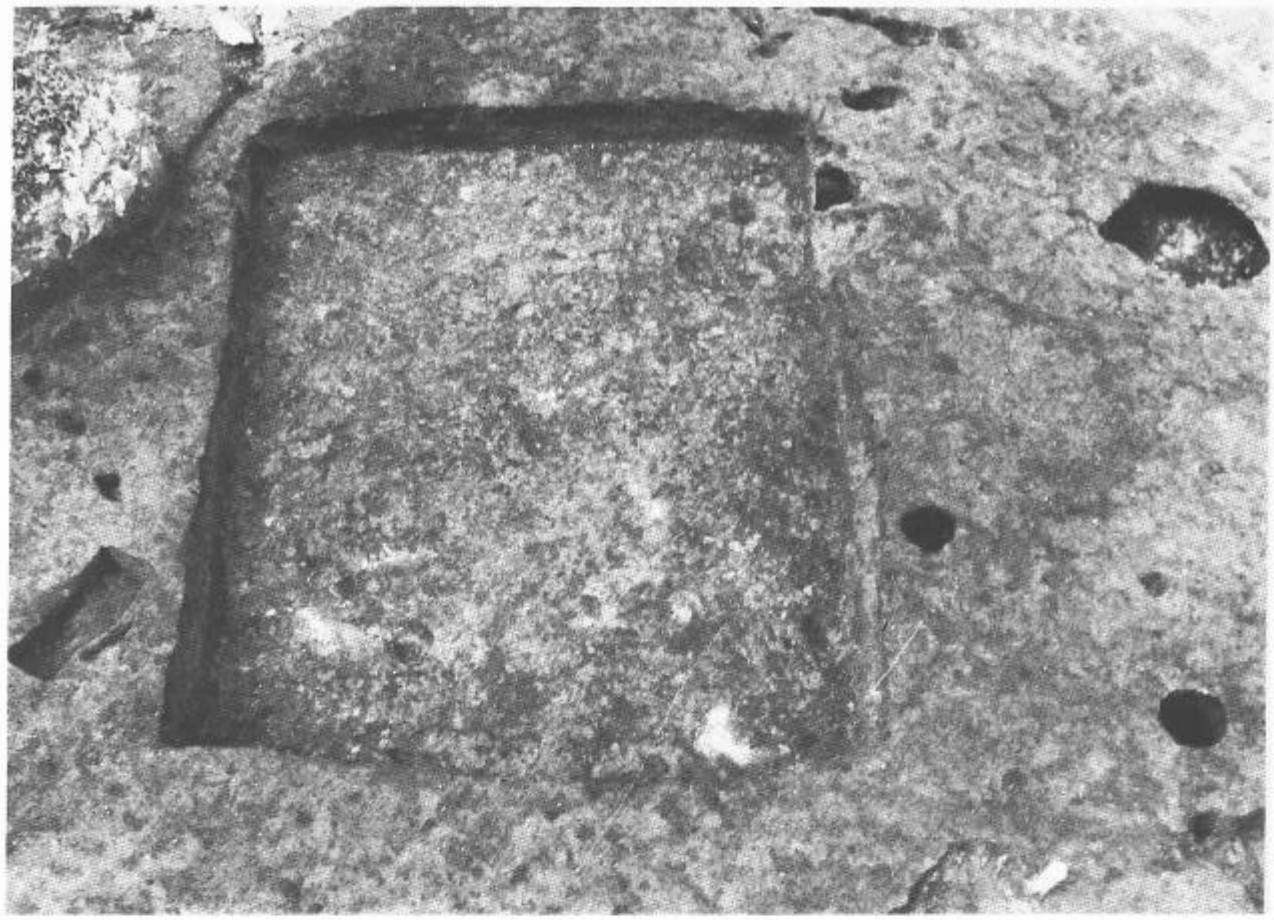
図版11　SI 004 竪穴住居跡　（上）　全体図　（南▶北）
（下左）　カマド　（北▶南）
（下右）　カマド　（南▶北）



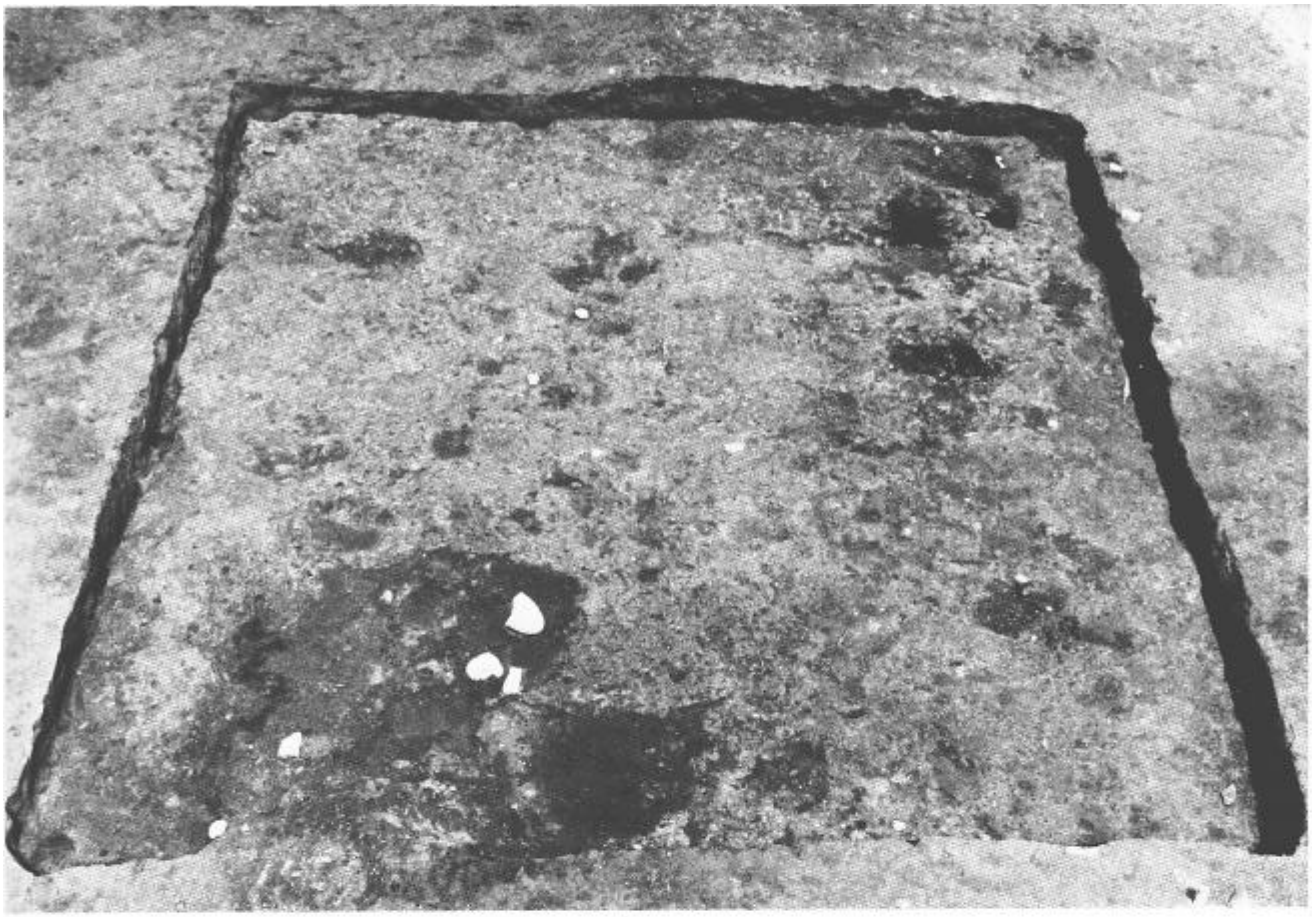
図版12　SI 009 竪穴住居跡　（南▶北）

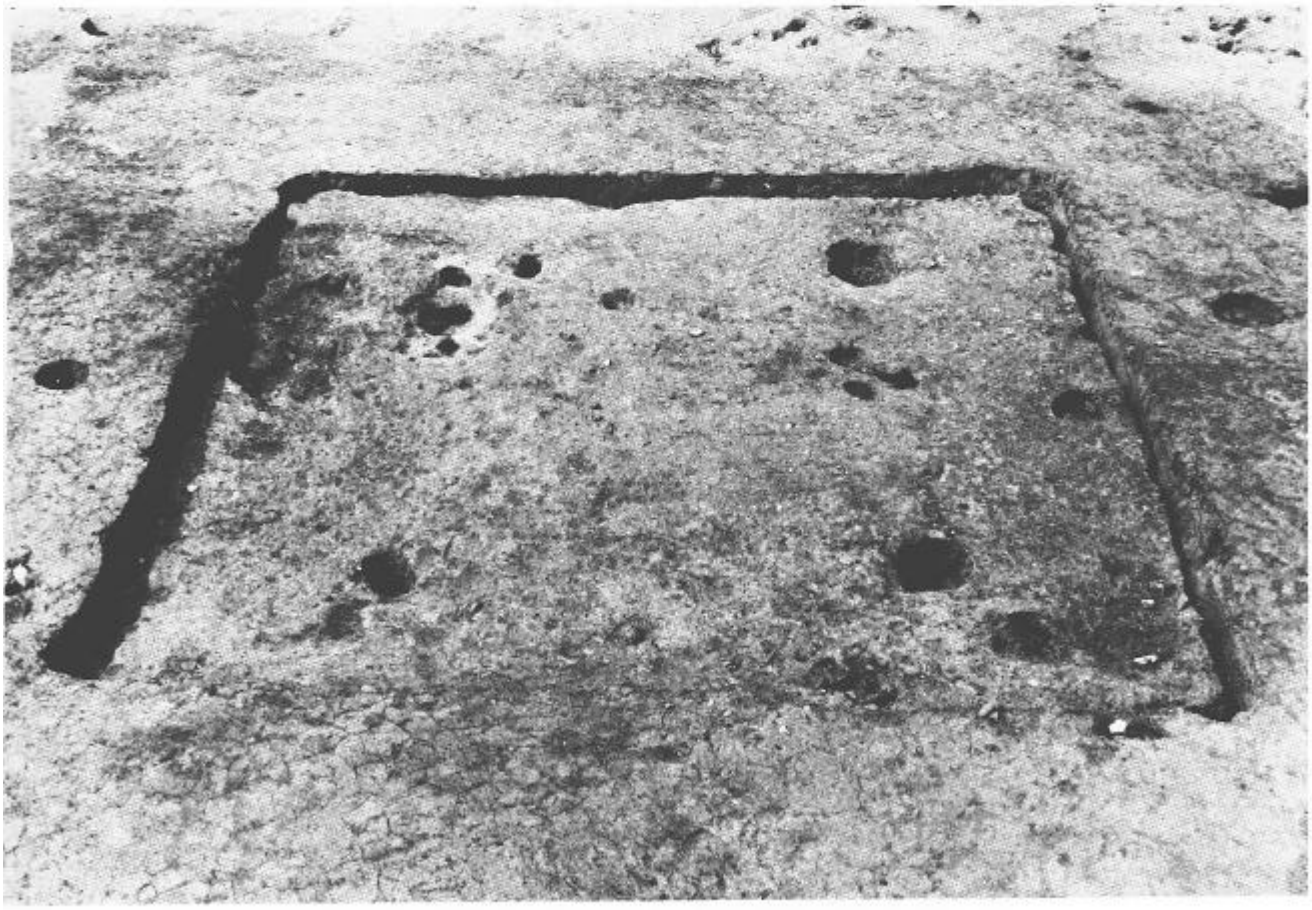
図版13　SI 011 竪穴住居跡　（上）　全体図　（南▶北）
（下左）　カマド　（北▶南）
（下右）　骨片出土状態

図版14　SI 012竪穴住居跡　（上）　炭化材出土状態　（南▶北）
（下）　掘り下げ後　（南▶北）



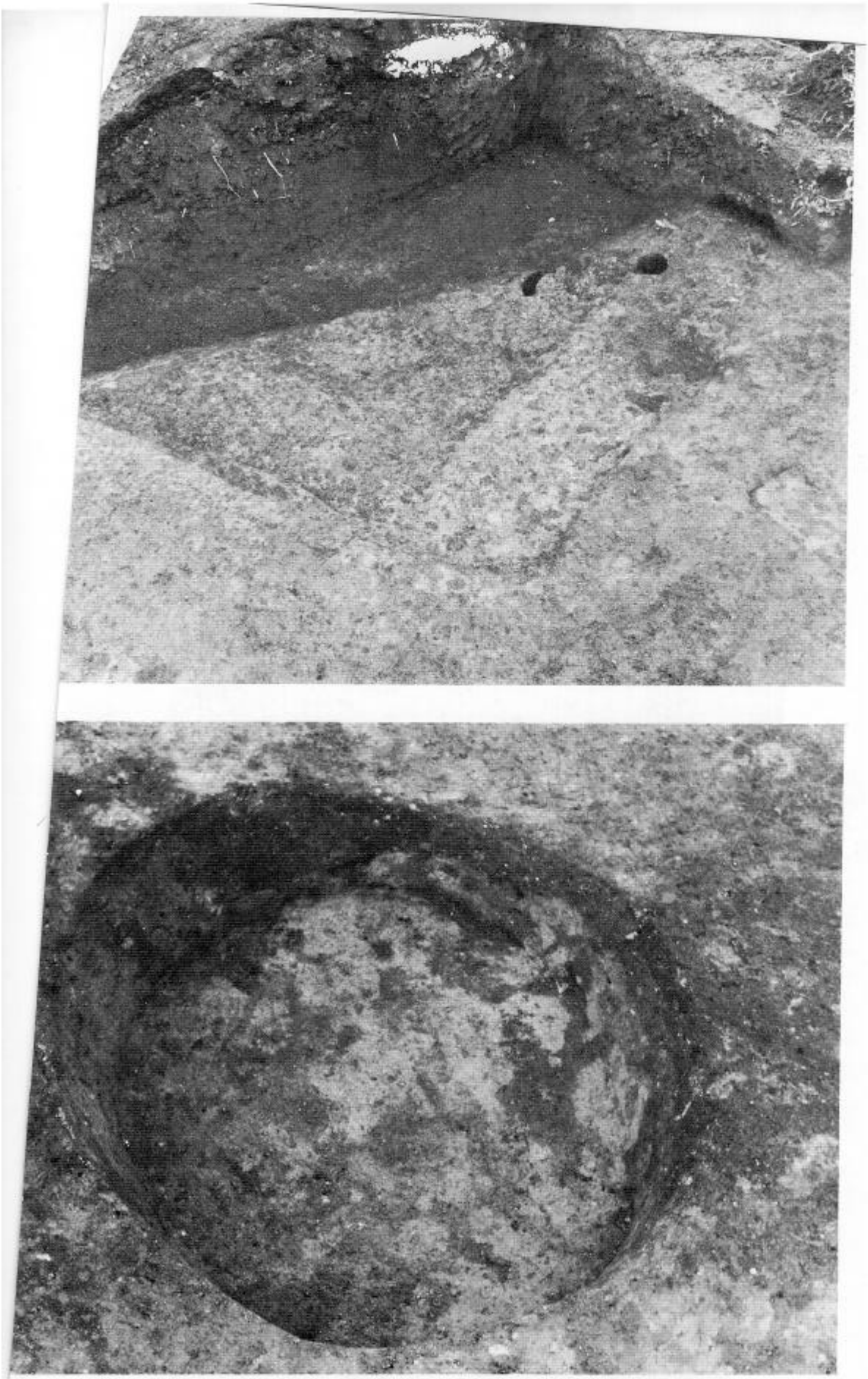
図版15　SI 012 竪穴住居跡　（上）　完掘後　（南▶北）
（下左）　カマド　（西▶東）
（下右）　カマド　（東▶西）





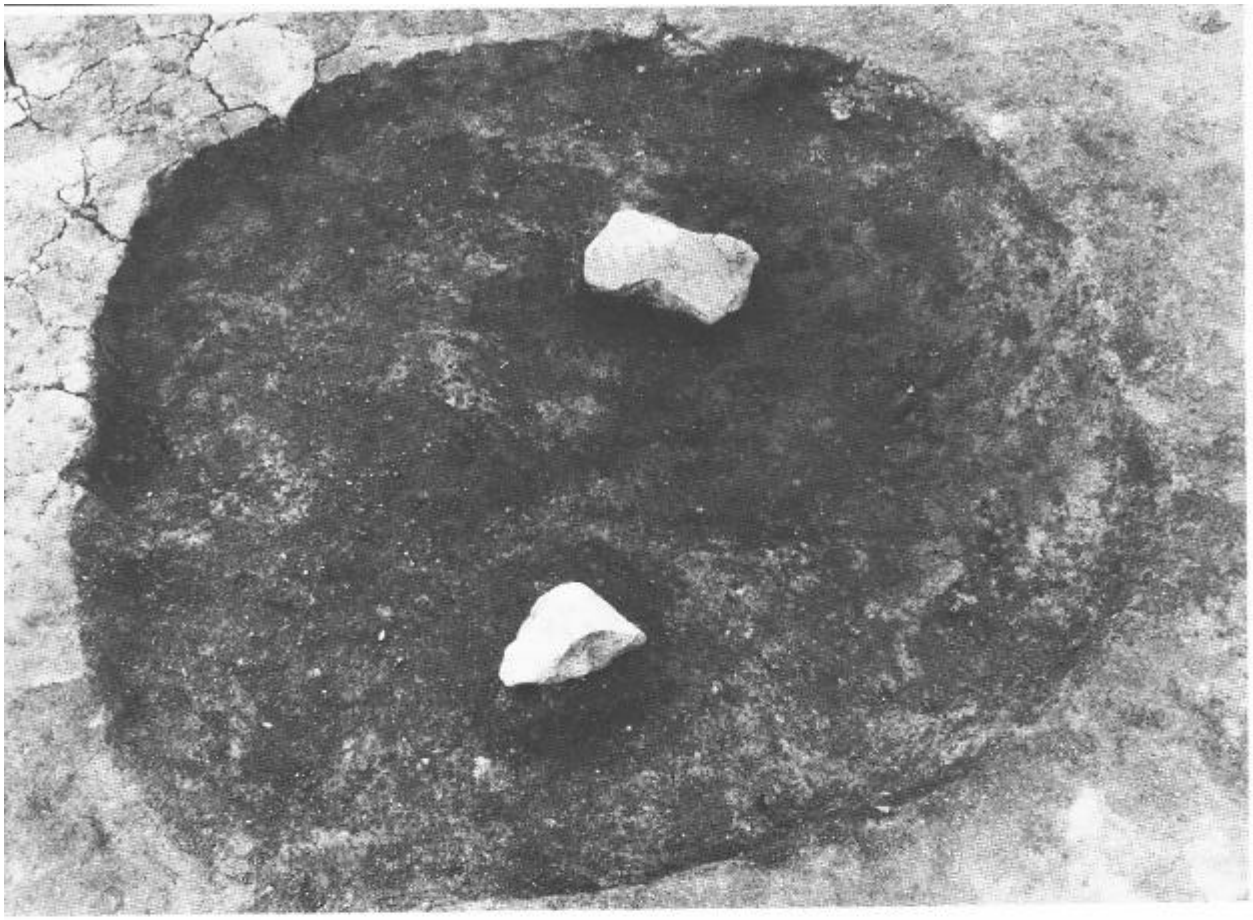
図版16　SI 013 竪穴住居跡　（上）（南▶北）
（下）（東▶西）

図版17
SI 035 竪穴住居跡
(上)全体図 (東▶西)
(下) カマド (北▶南)

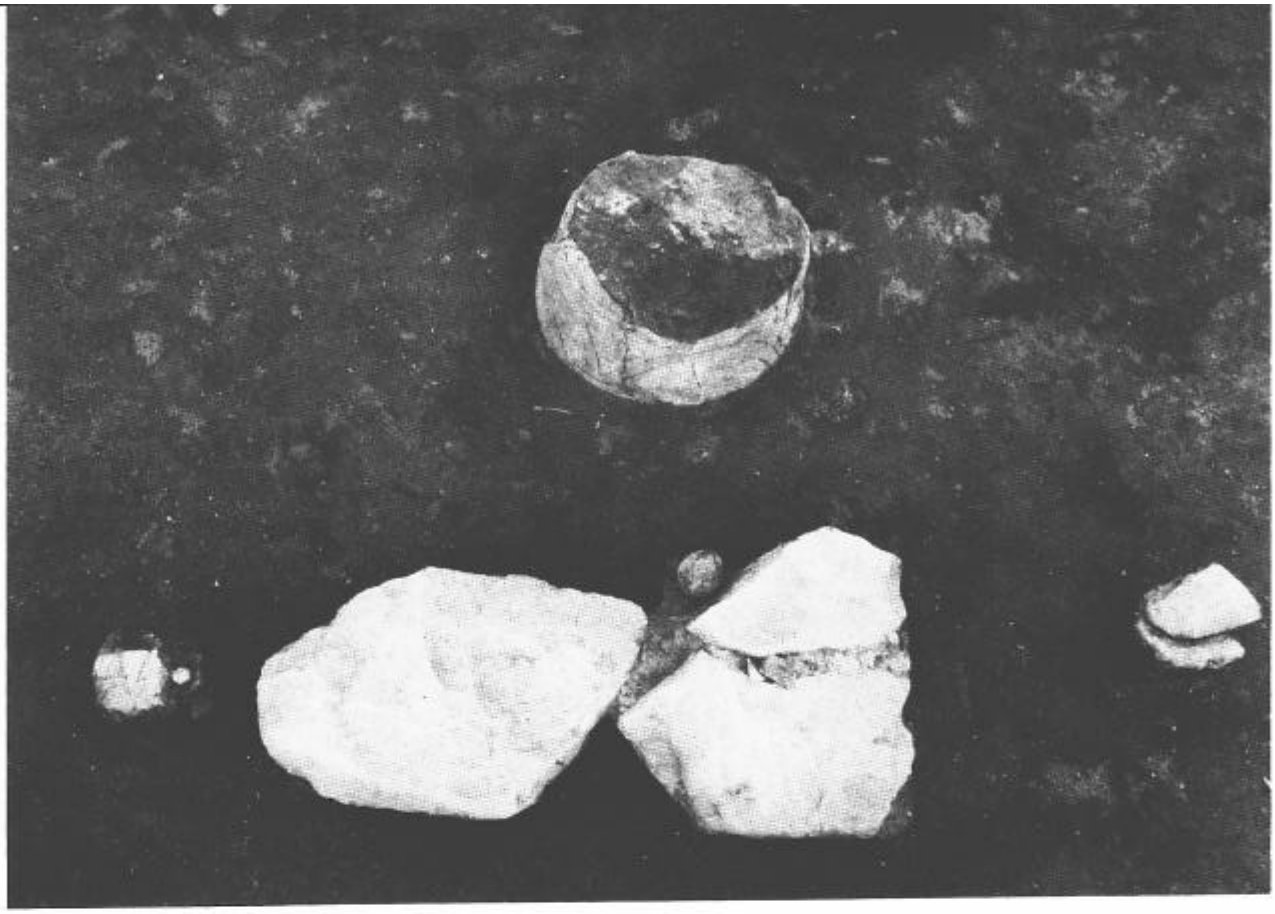


図版18　（上）　SI 041 竪穴住居跡　（南▶北）
　　（下）　SK 008 土壙　（北▶南）

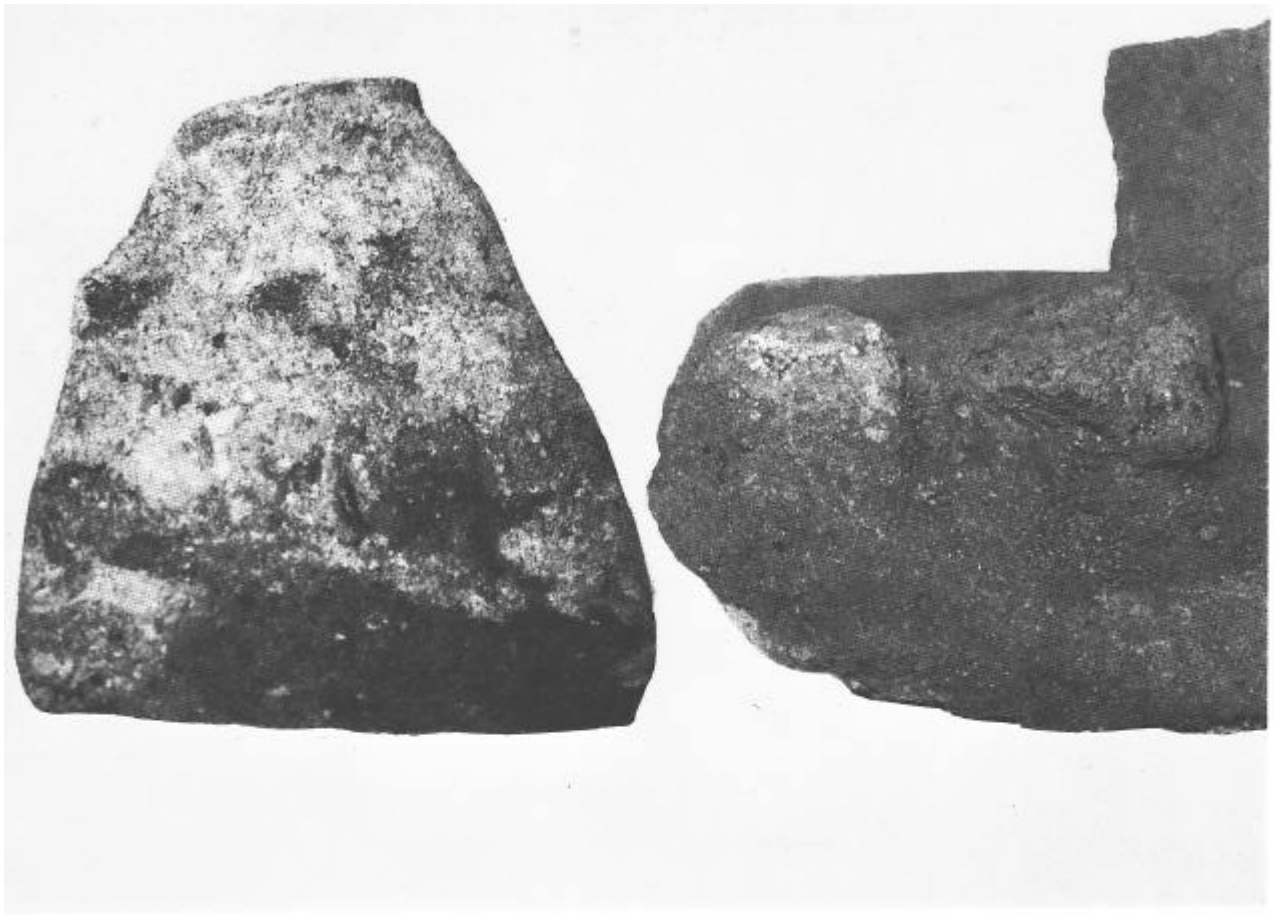
図版19　（上）　SK 014 土壙　（南▶北）
　　（下）　SK 016 土壙　（北▶南）



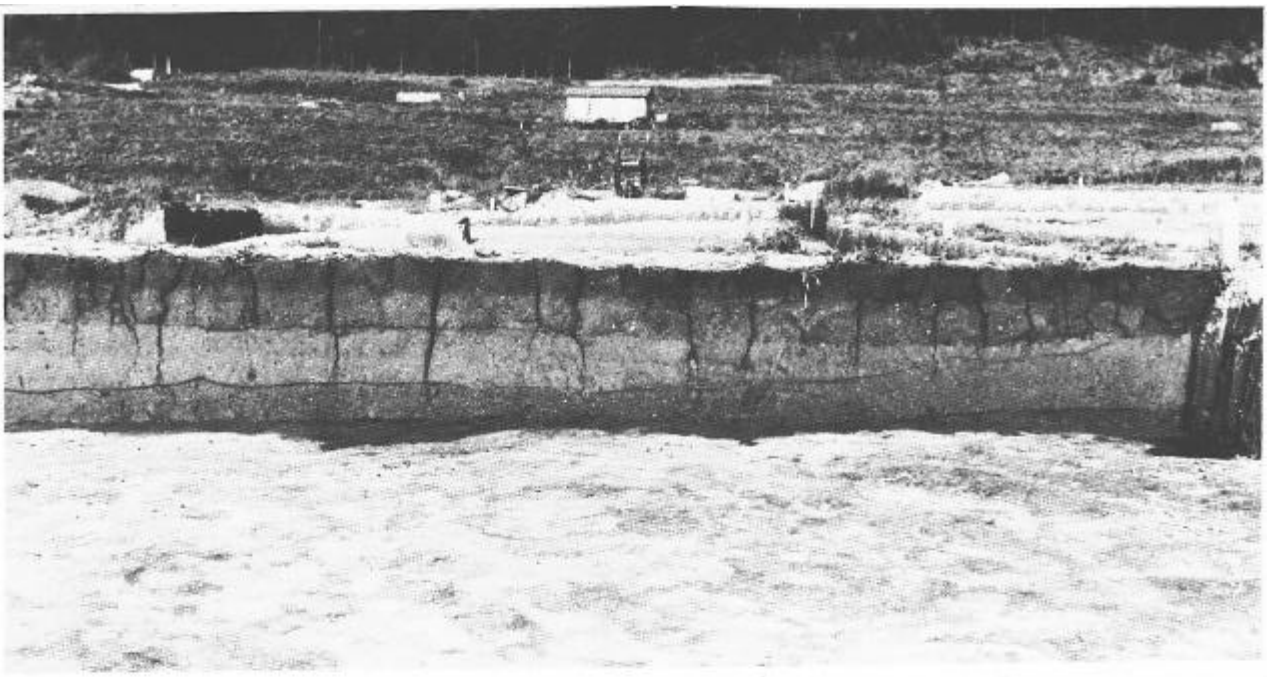
図版20　（上）　SK 017 土壙　（北▶南）
　　（下）　SXF 040 焼土遺構　（東▶西）



図版21　SX 010 埋甕　（上）　検出面　（東▶西）
（下）　半截後　（南▶北）

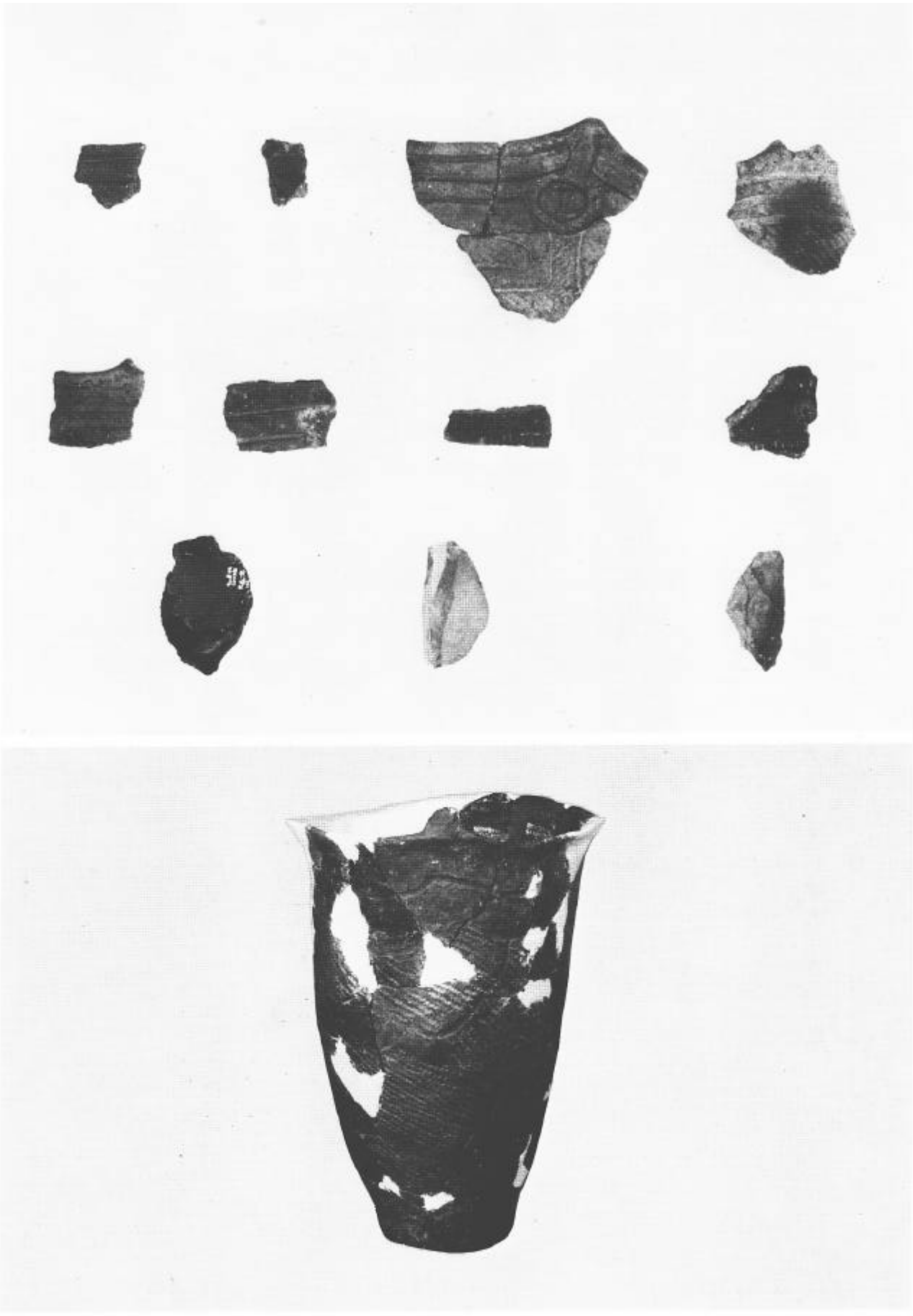


図版22　（上）　SX 010 埋甕　土器半截後
　　（下）　SX 019 埋甕　（南▶北）

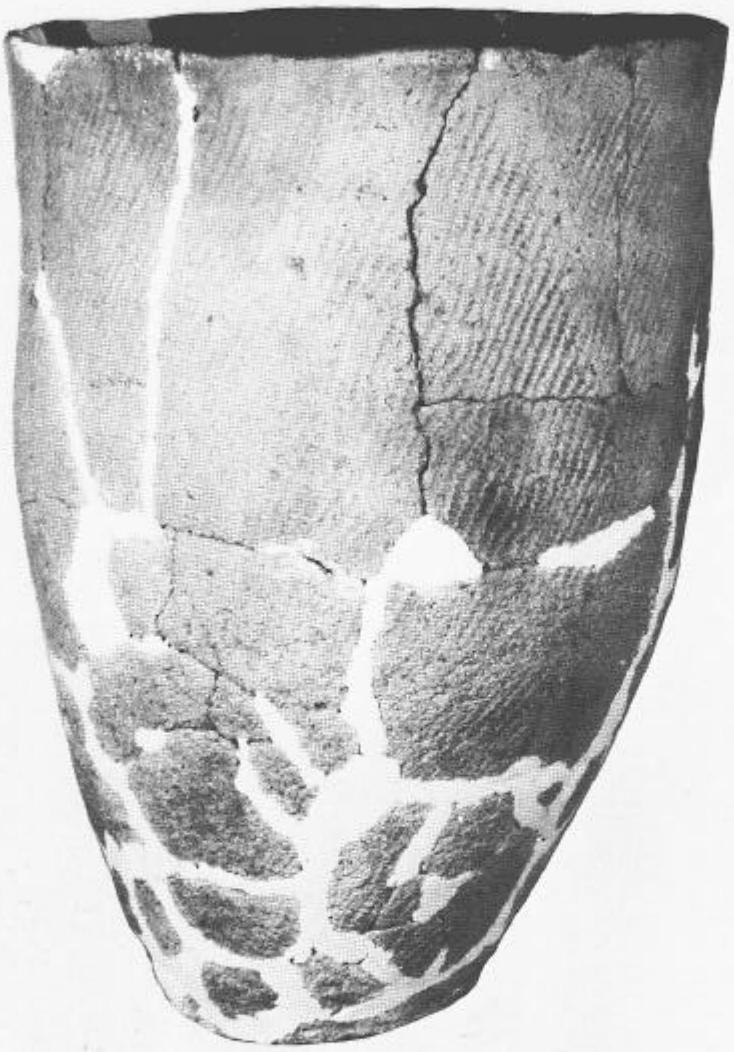


図版23
（上） 遺跡層位
（西▶東）
（下） SD 001 溝
（西▶東）

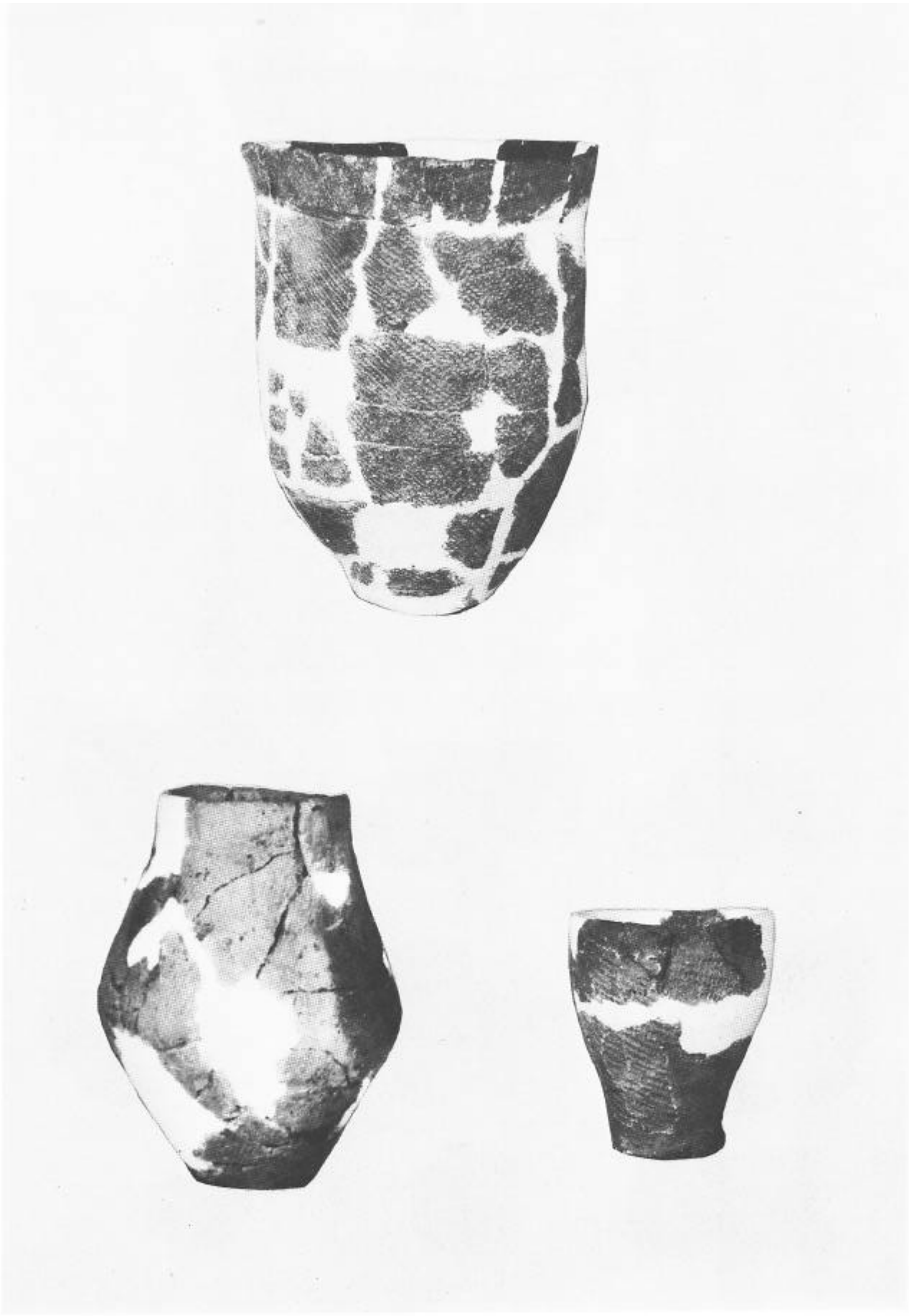
図版24　SI 036 竪穴住居跡出土遺物（１）



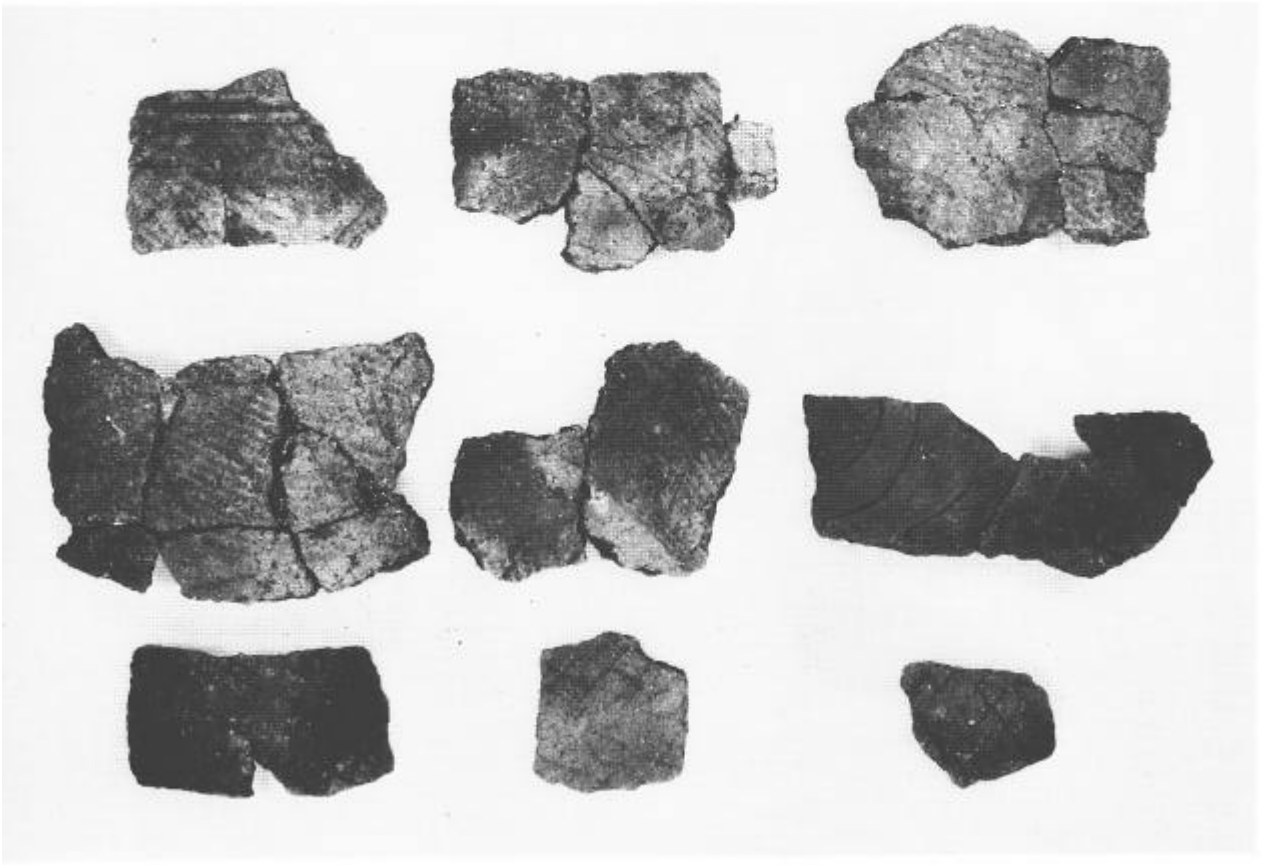
図版25　（上）　SI 036 竪穴住居跡出土遺物（２）
　　（下）　SI 037 竪穴住居跡出土遺物（１）



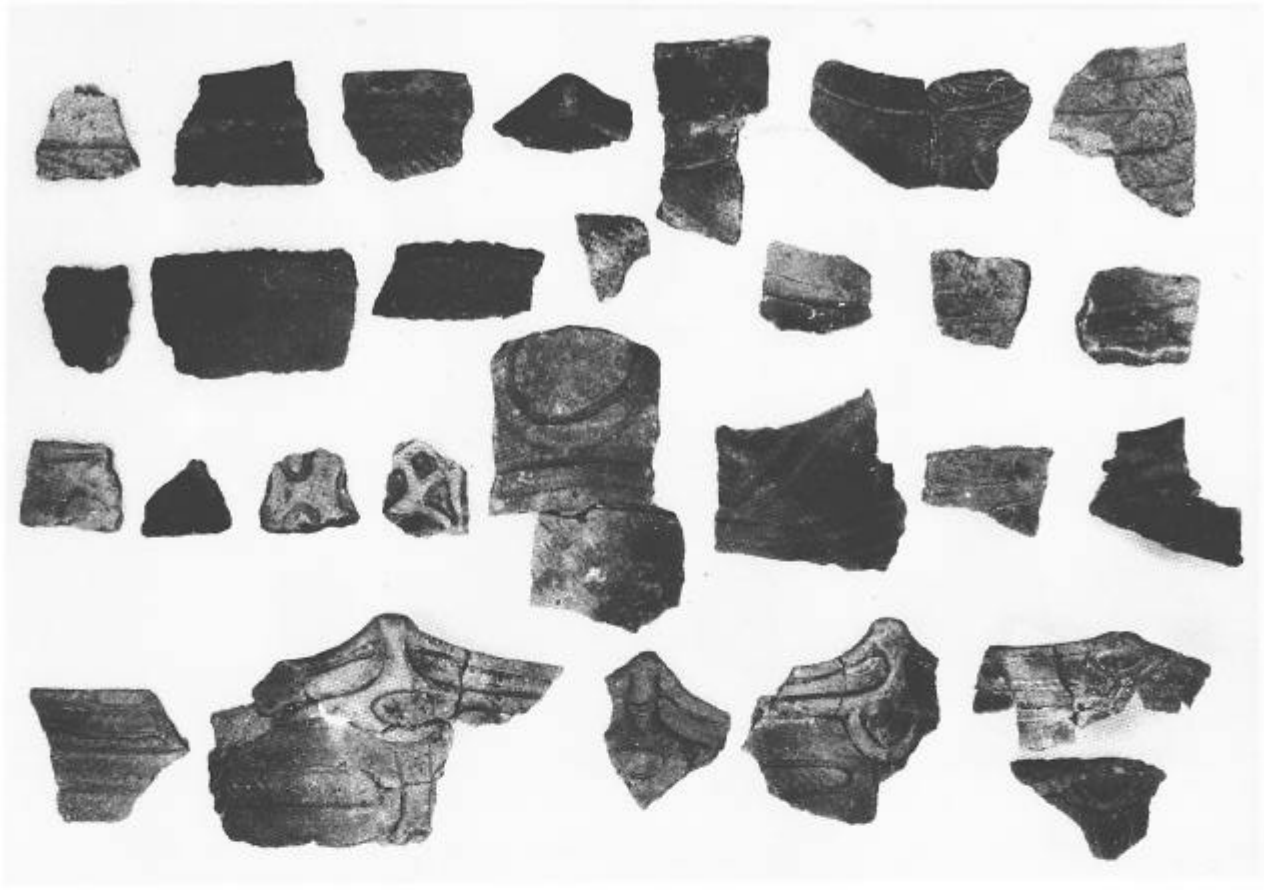
図版26　SI 037 竪穴住居跡出土遺物(2)

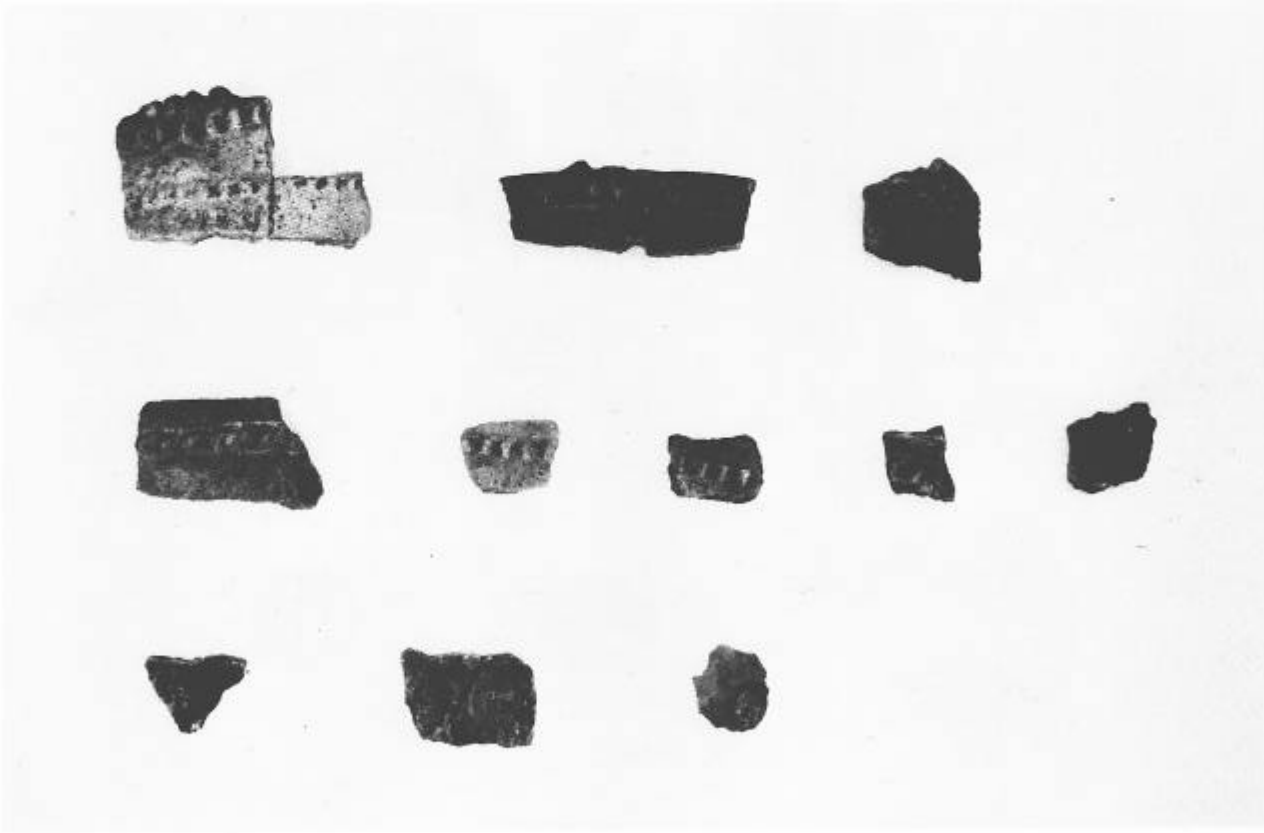


図版27　SI 037 竪穴住居跡出土遺物(3)

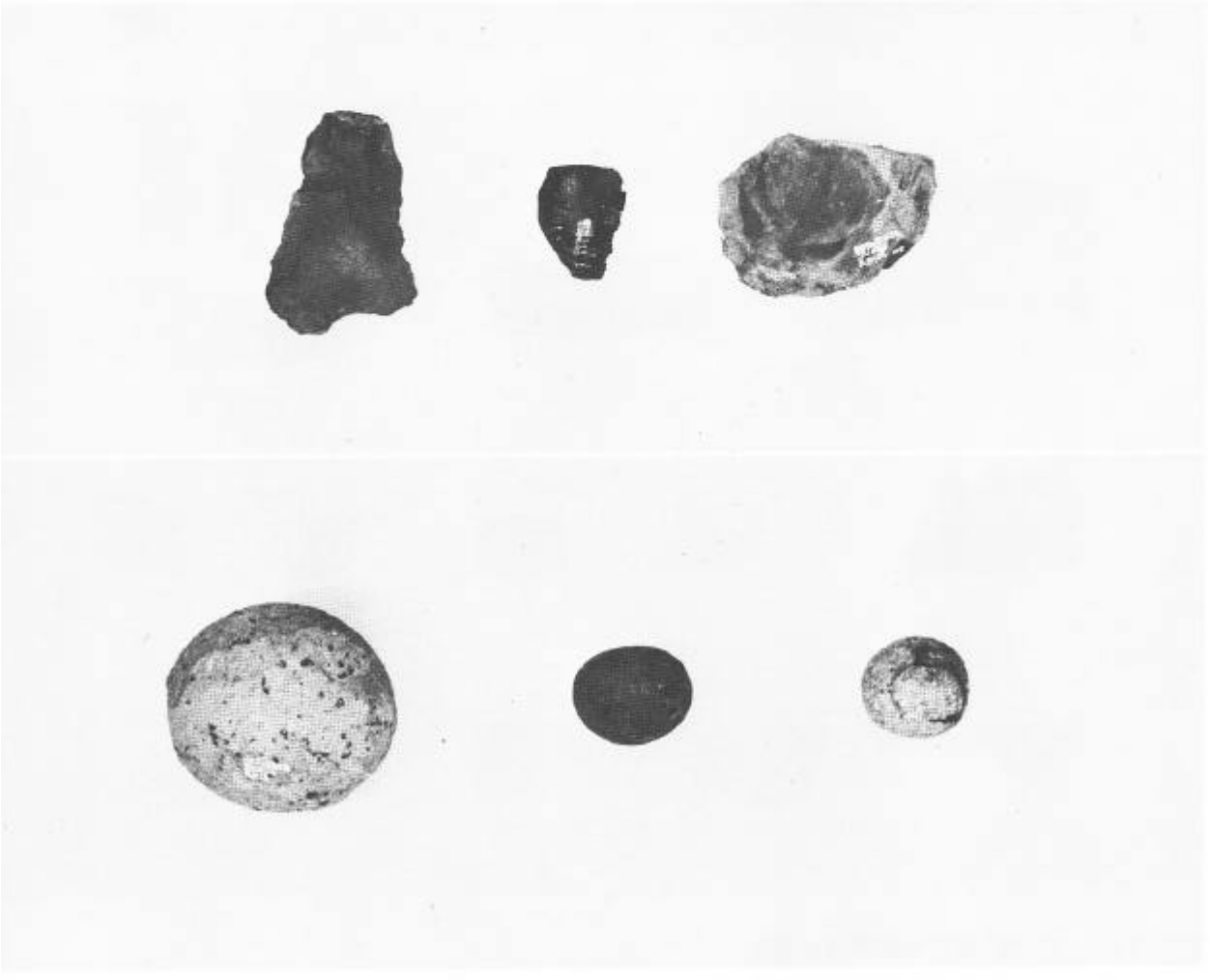


図版28　SI 037 竪穴住居跡出土遺物(4)

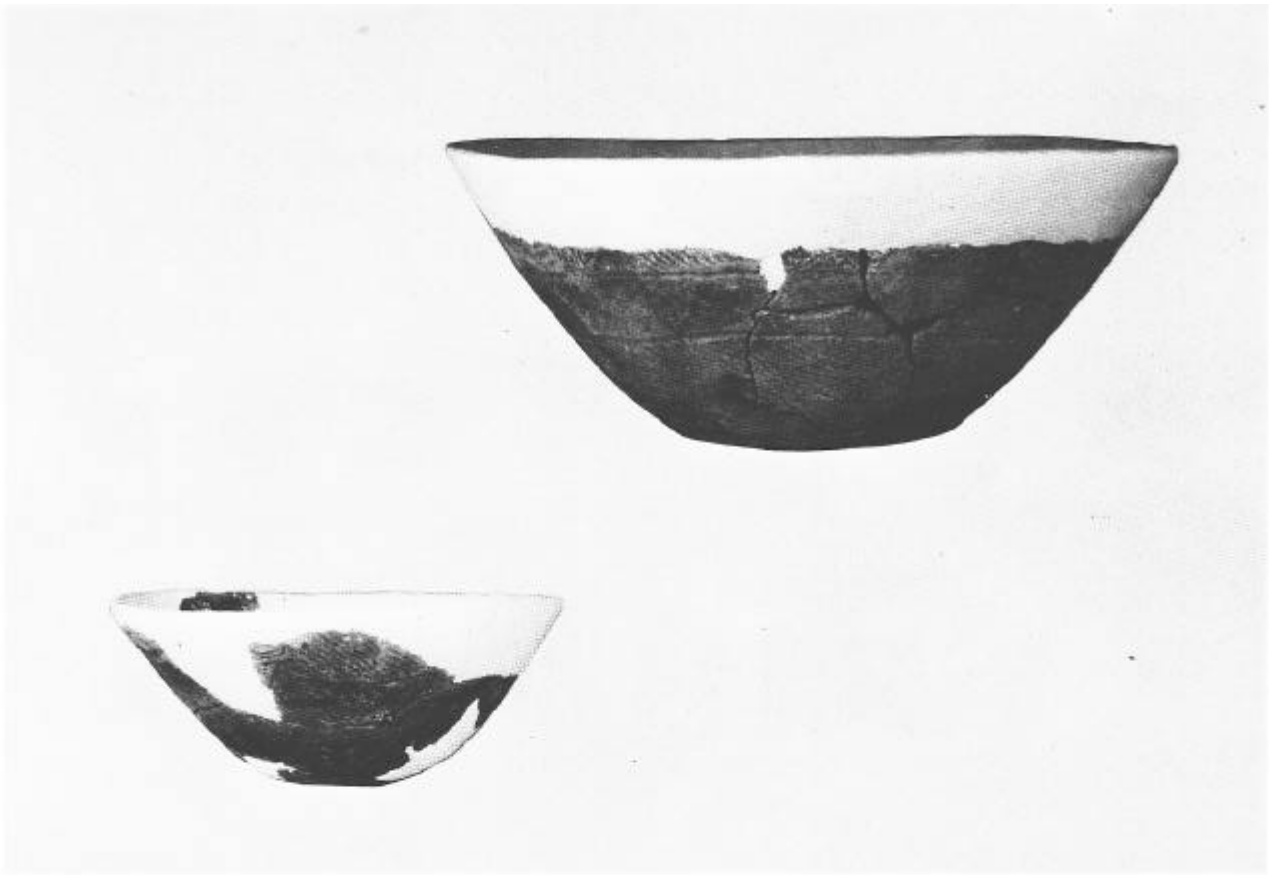


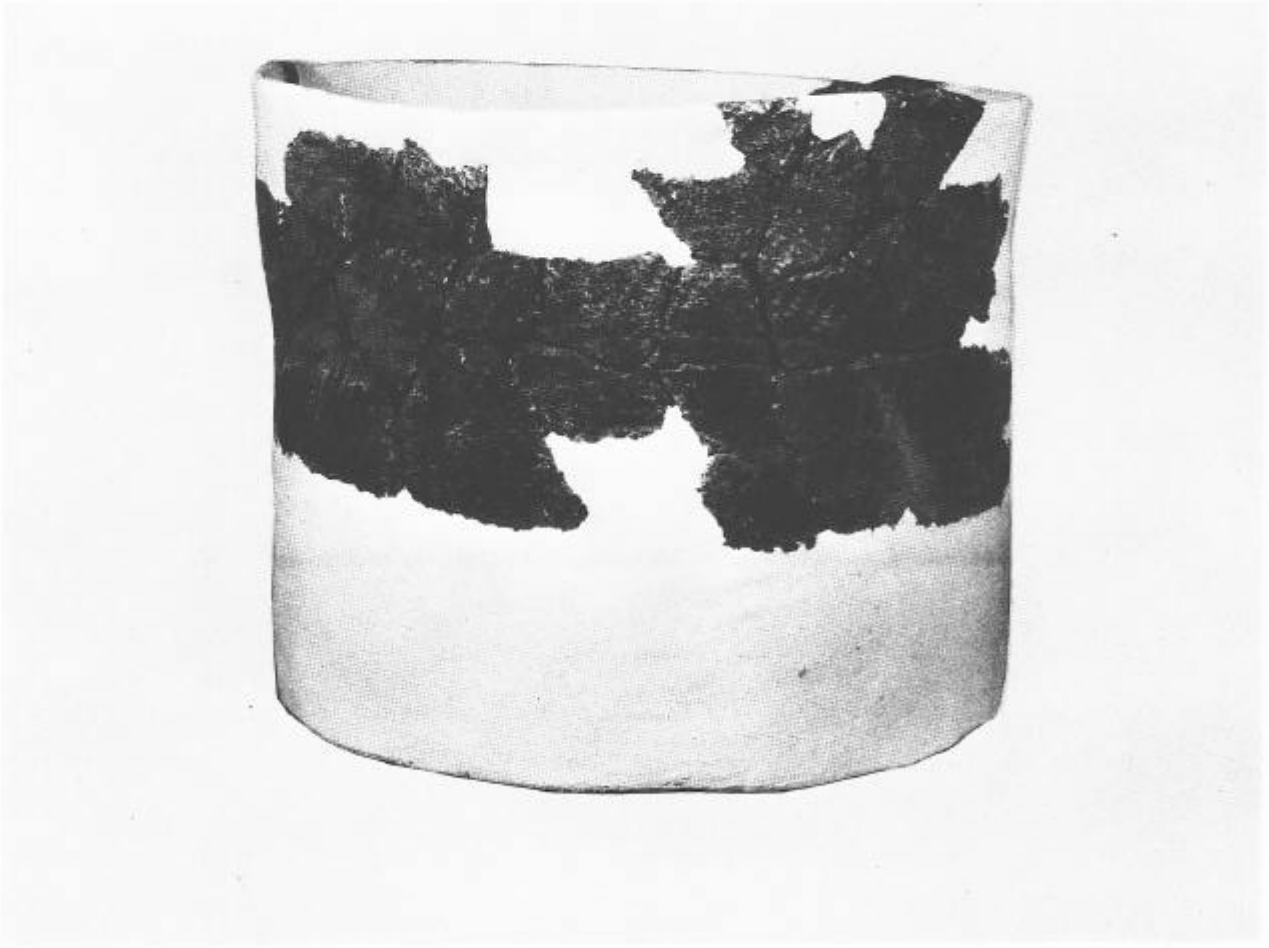


図版29　（上）　SI 037 竪穴住居跡出土遺物（５）
　　（下）　SI 037 竪穴住居跡出土遺物（６）

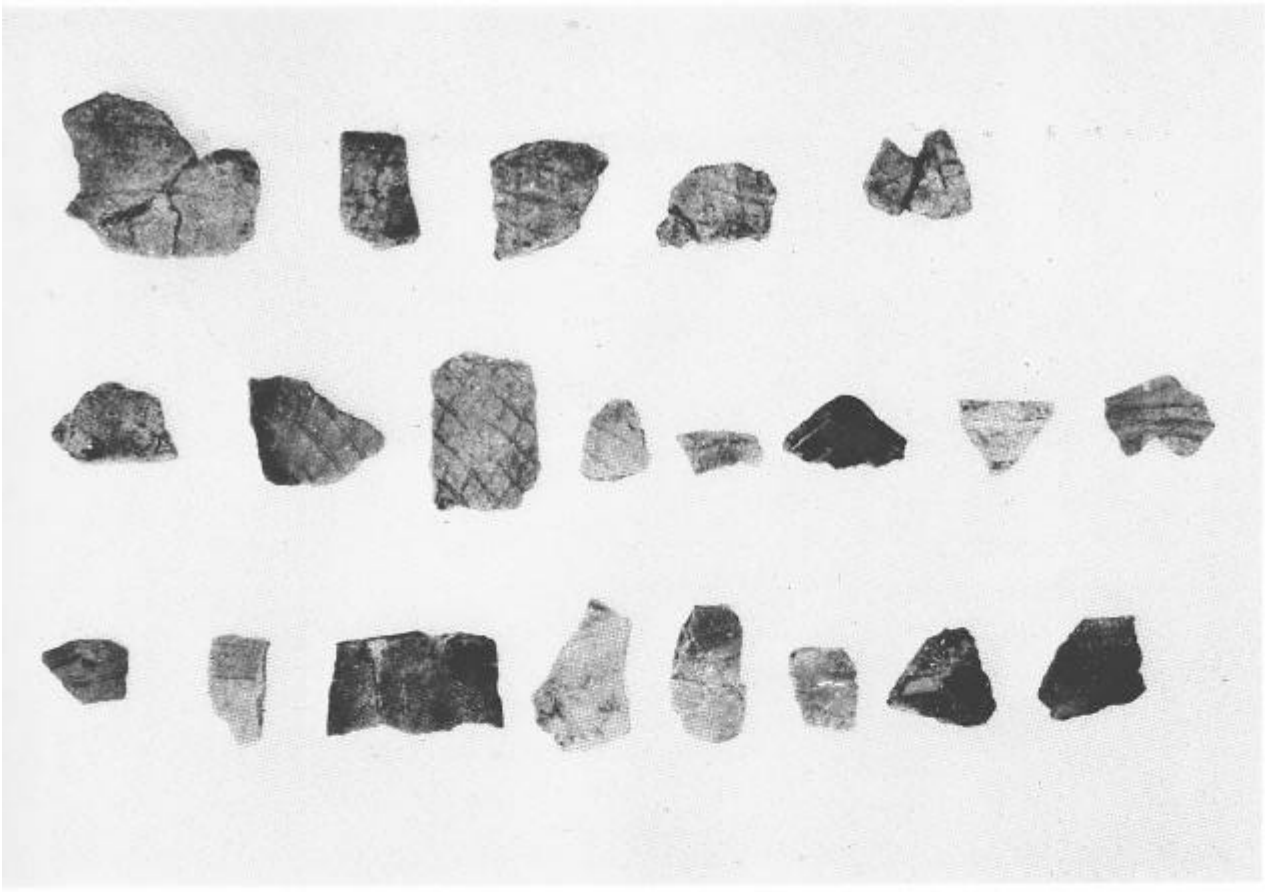


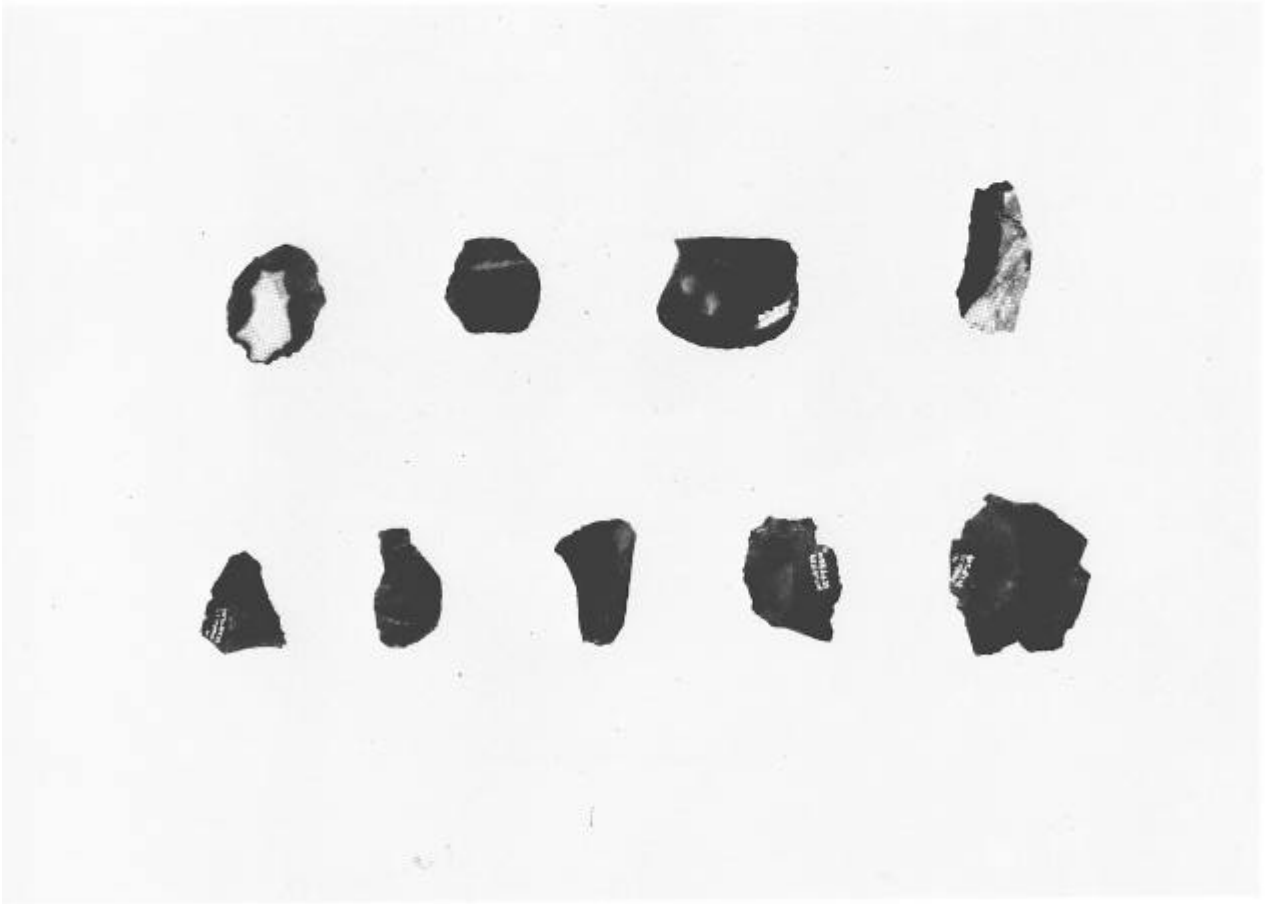
図版30　（上）　SI 037 竪穴住居跡出土遺物（７）
　　（下）　SI 037 竪穴住居跡出土遺物（８）





図版31　（上）　SI 038 竪穴住居跡出土遺物
　　（下）　SI 039 竪穴住居跡出土遺物(1)その 1

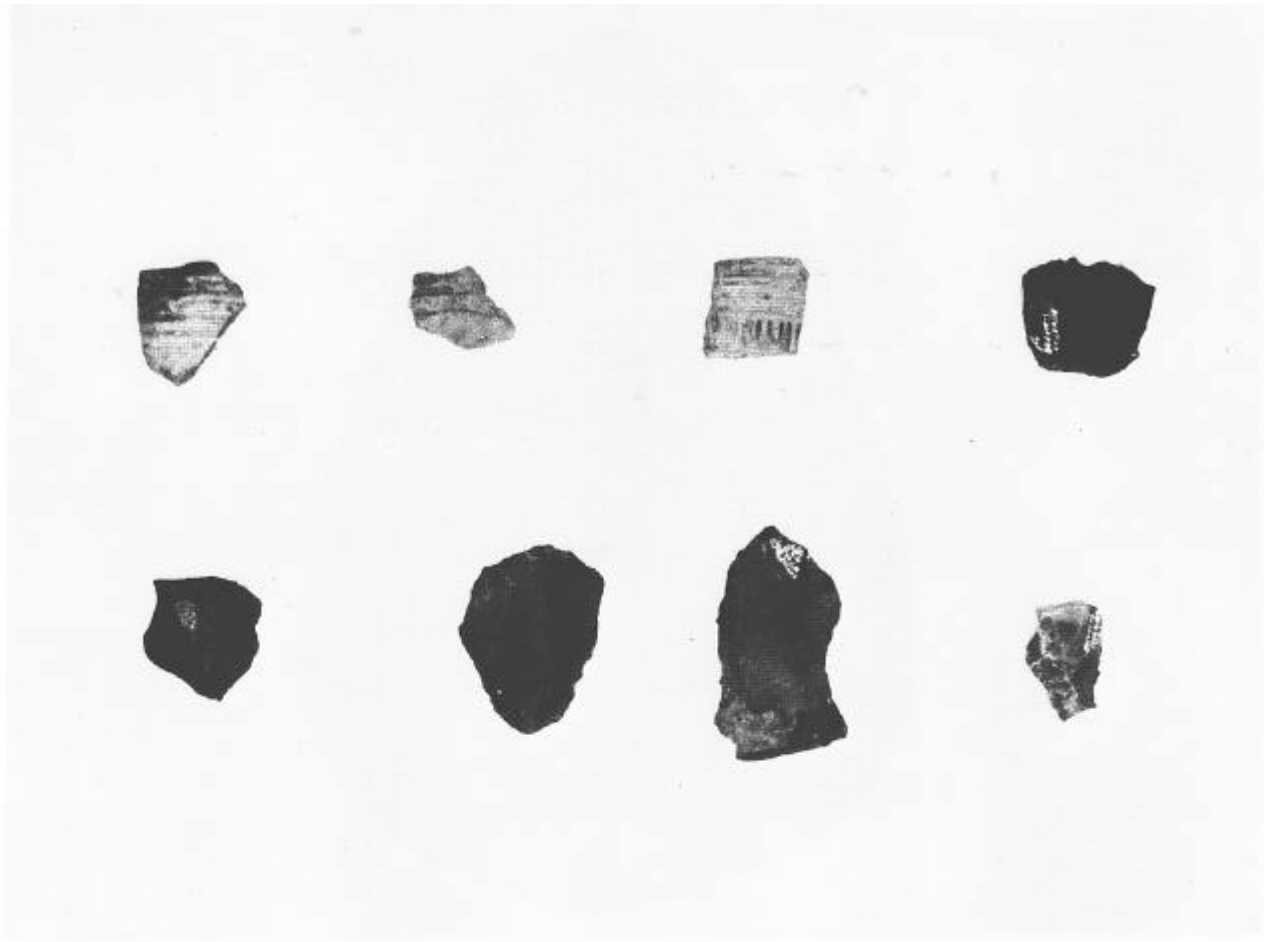




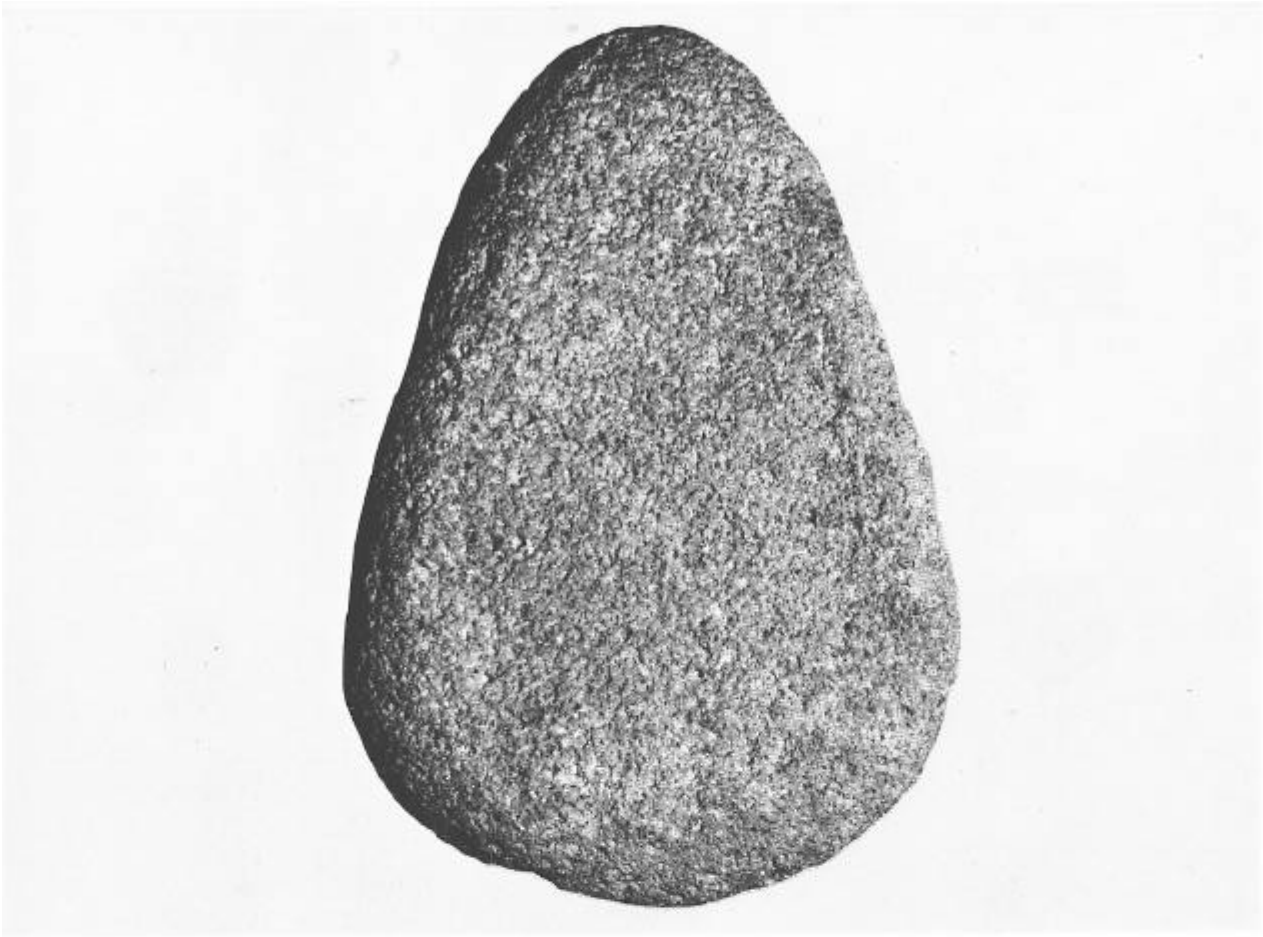
図版32　（上）　SI 039 竪穴住居跡出土遺物(1)その 2
　　（下）　SI 039 竪穴住居跡出土遺物（2）

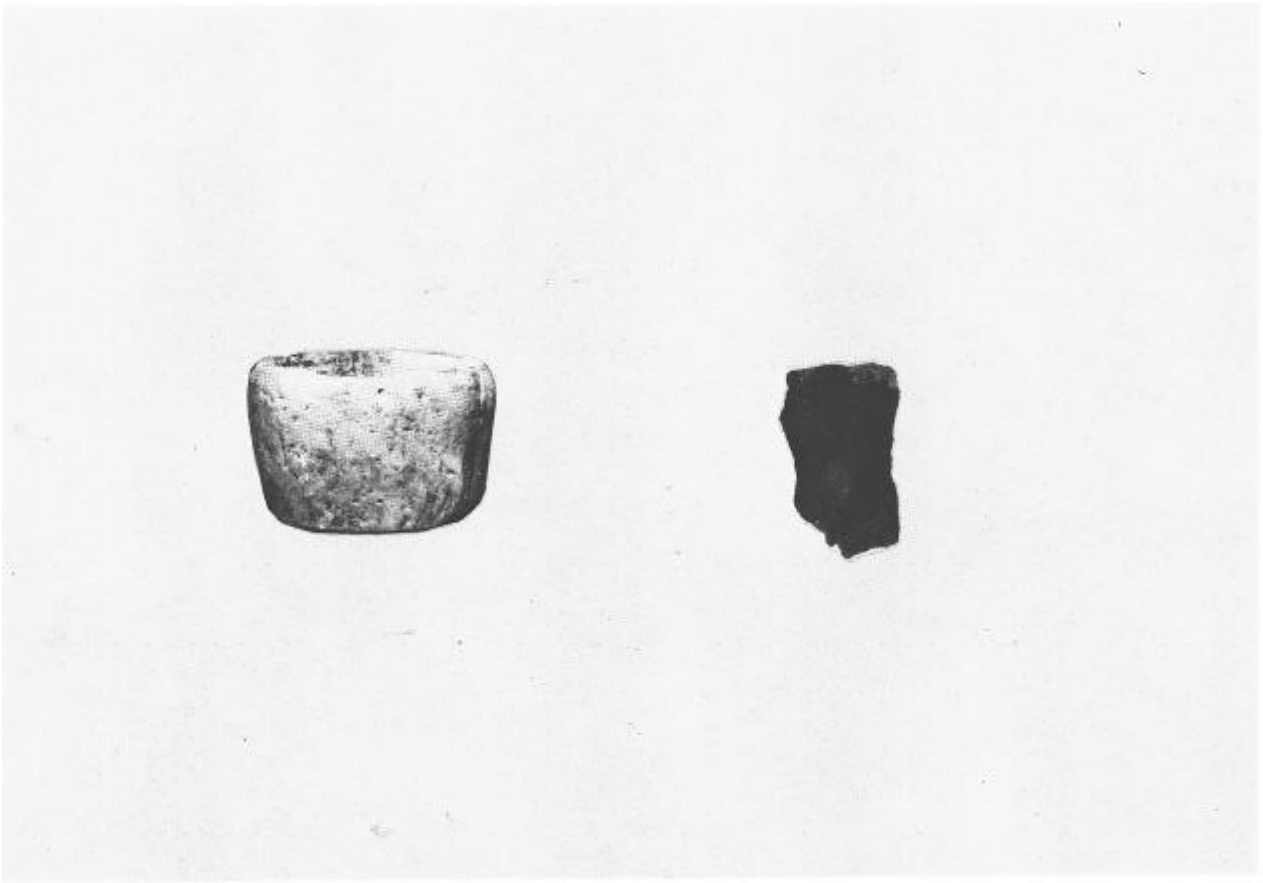
図版33　SI 002 竪穴住居跡出土遺物(1)

図版34　SI 002 竪穴住居跡出土遺物(2)

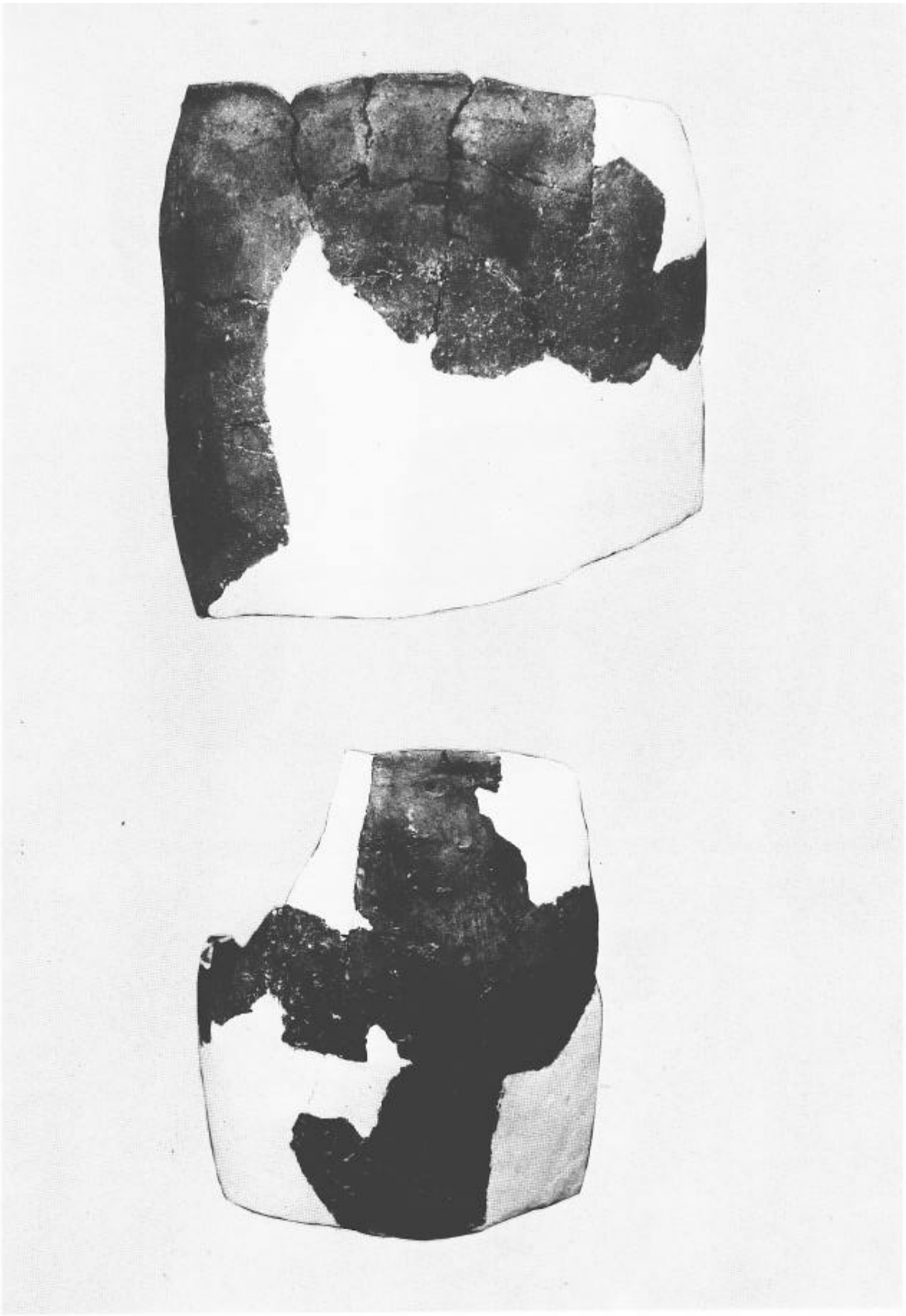


図版35　SI 002 竪穴住居跡出土遺物(3)その 1

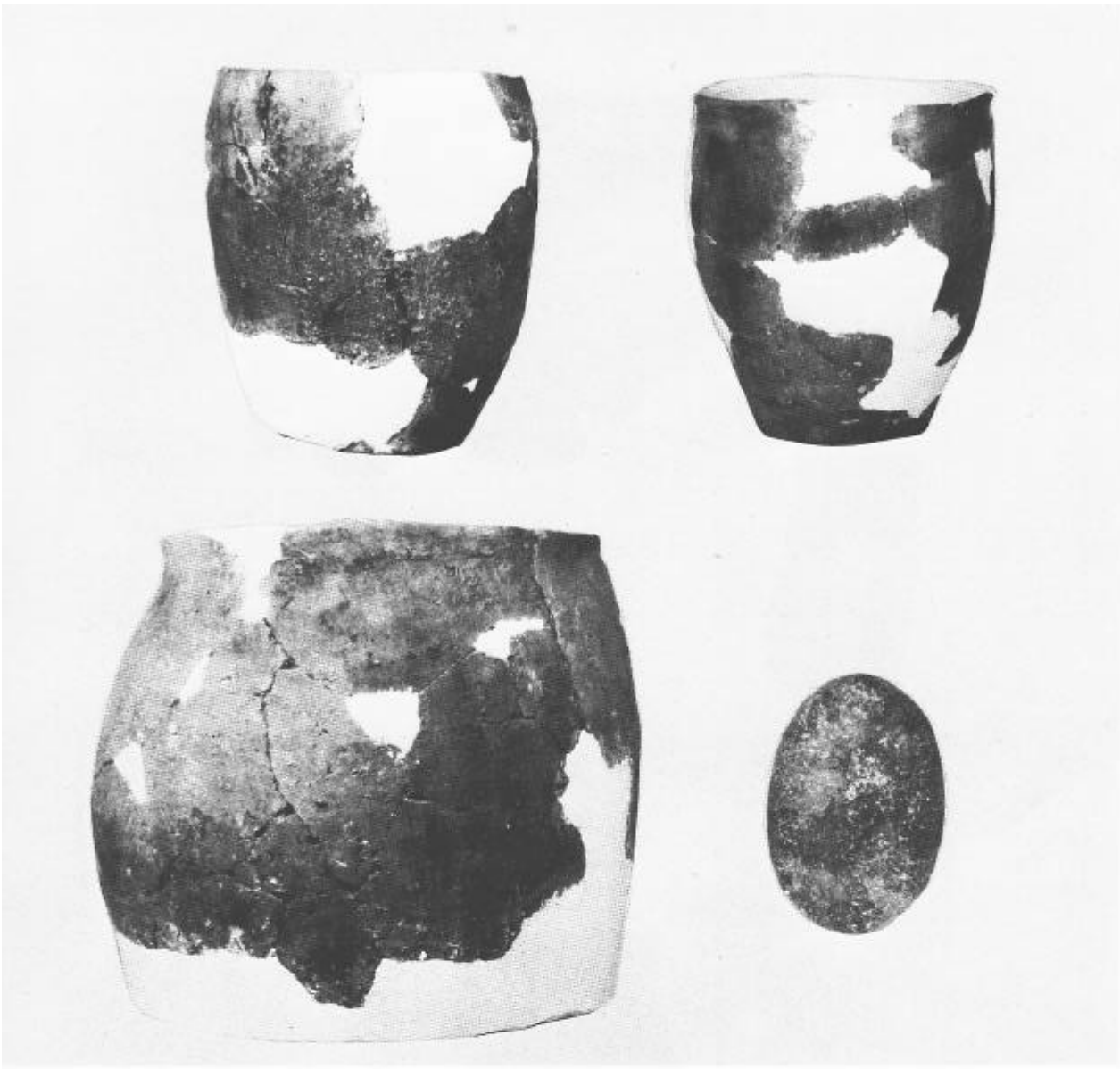




図版36　（上）　SI 002 竪穴住居跡出土遺物（３）その２
　　（下）　SI 003 竪穴住居跡出土遺物その１

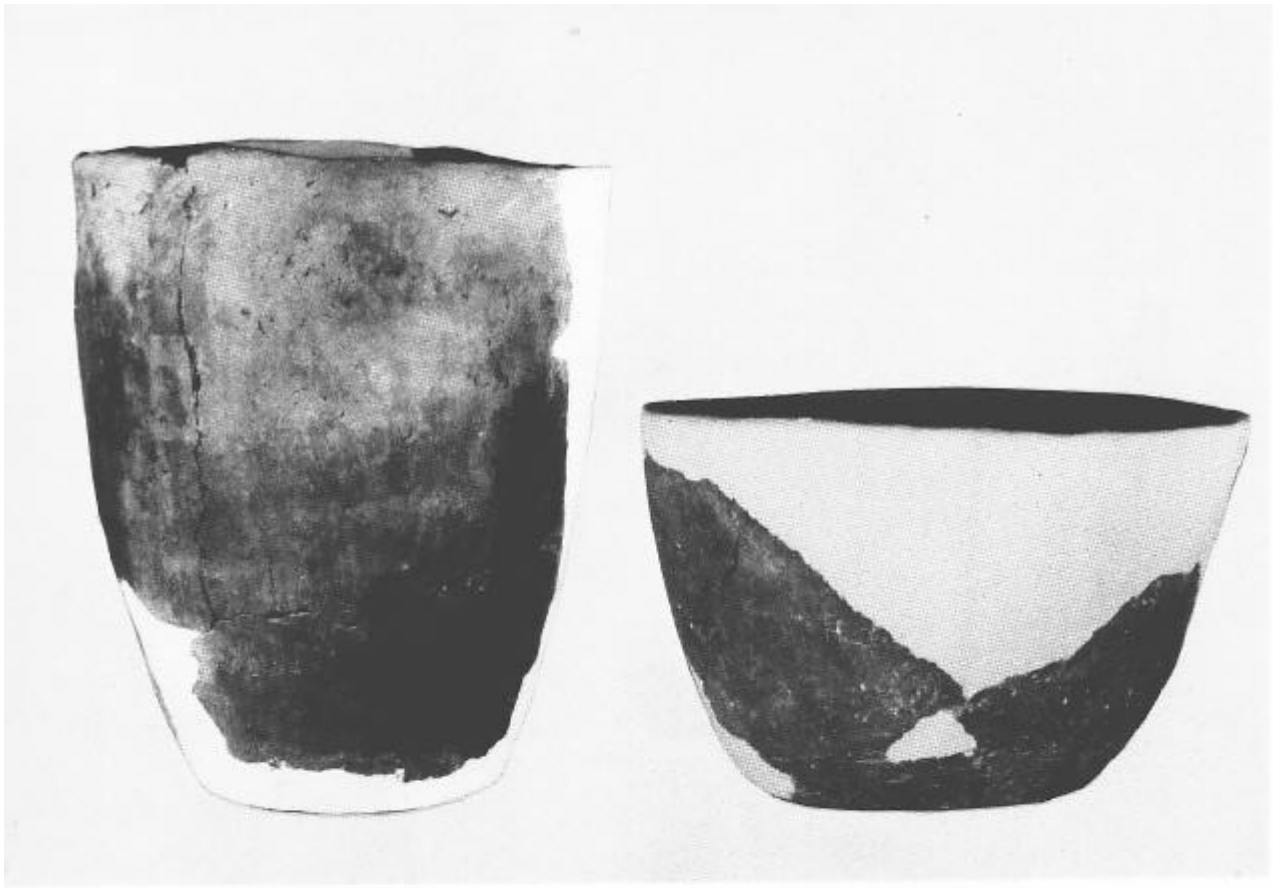


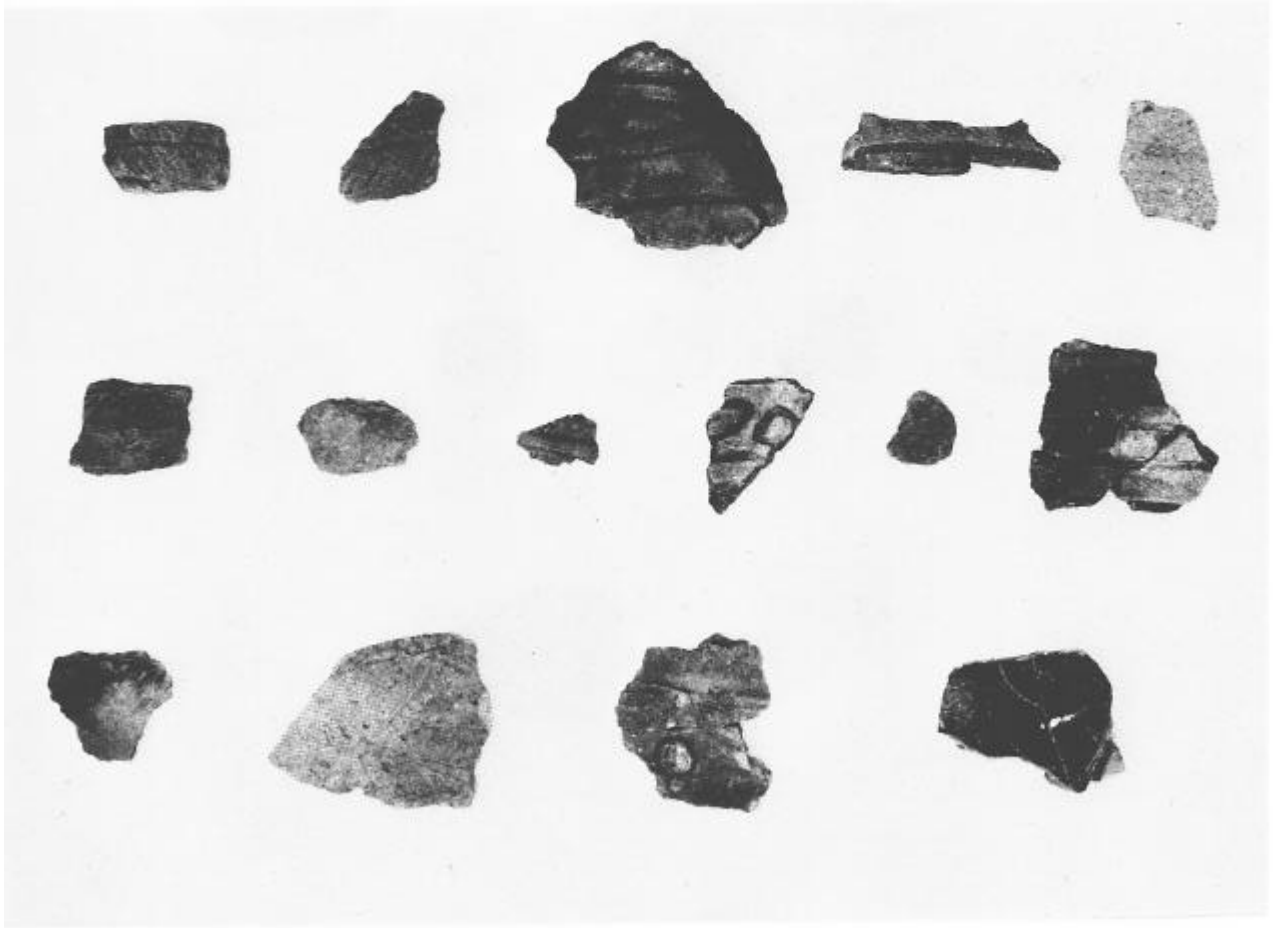
図版37　SI 003 竪穴住居跡出土遺物その 2



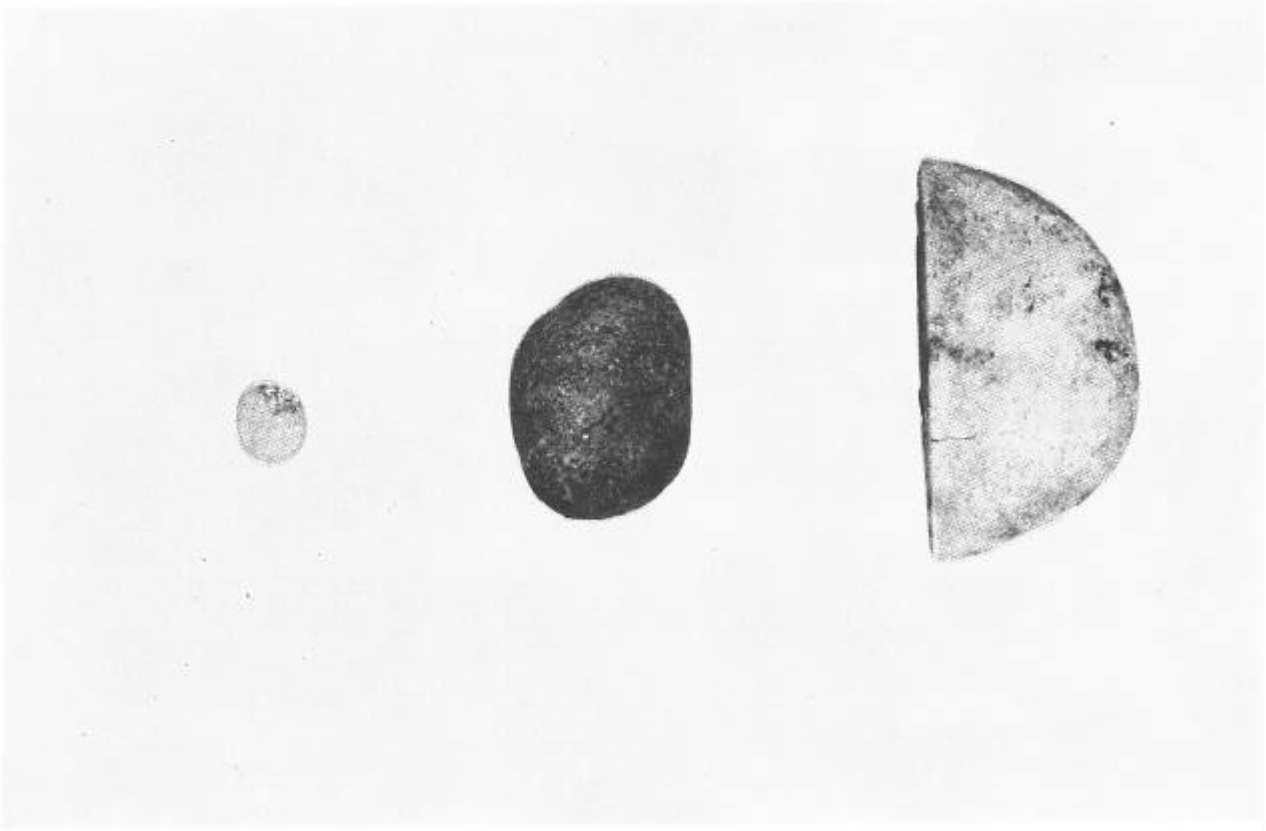
図版38　SI 004 竪穴住居跡出土遺物

図版39　SI 009 竪穴住居跡出土遺物

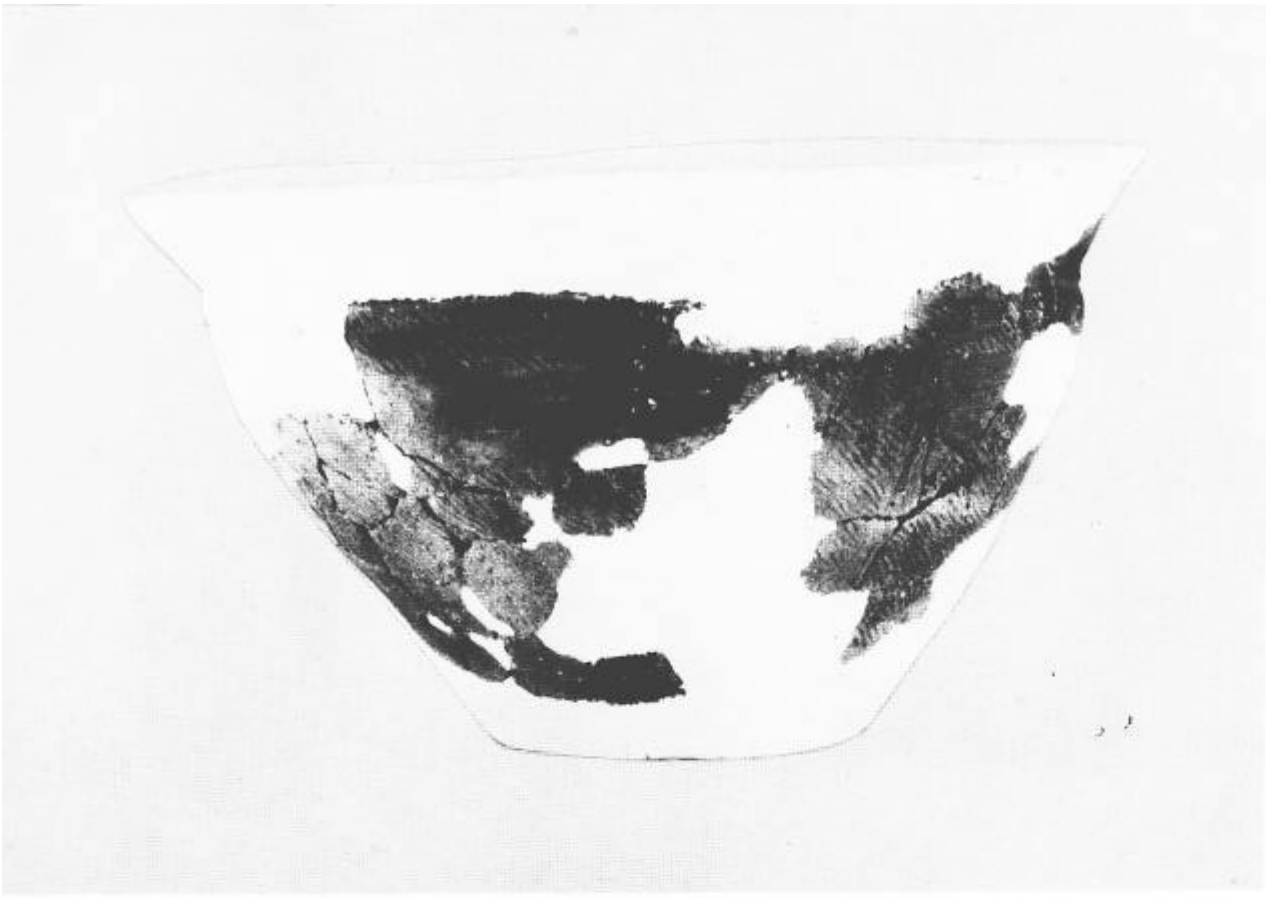


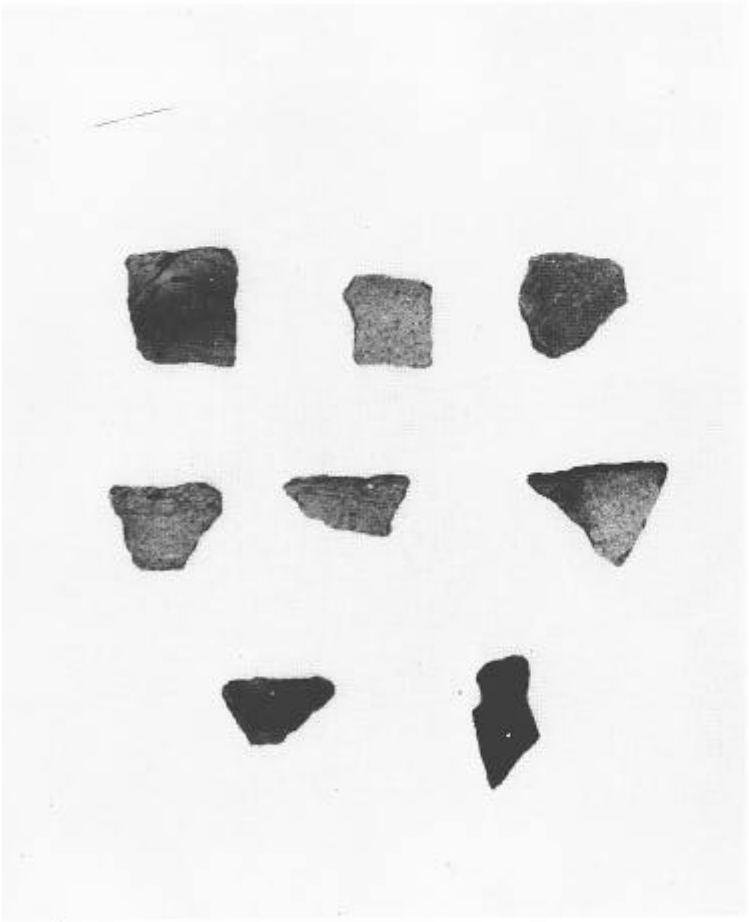


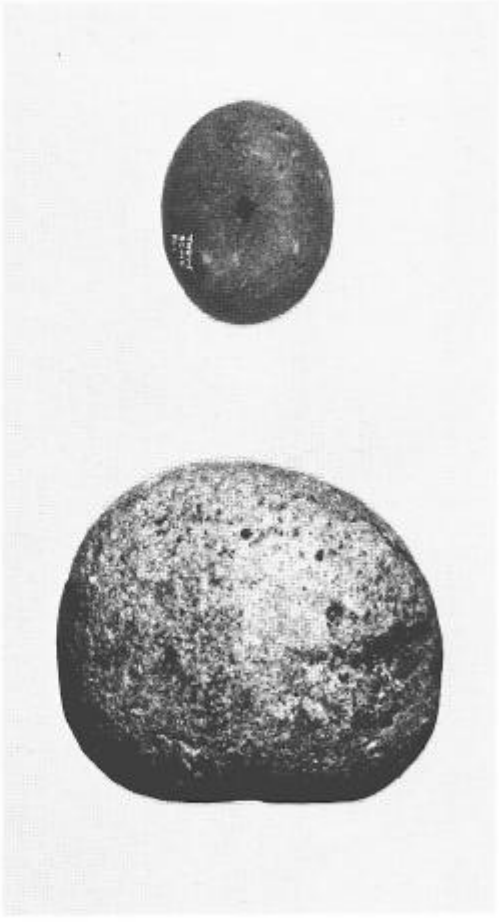
図版40　SI 011 竪穴住居跡出土遺物(1)



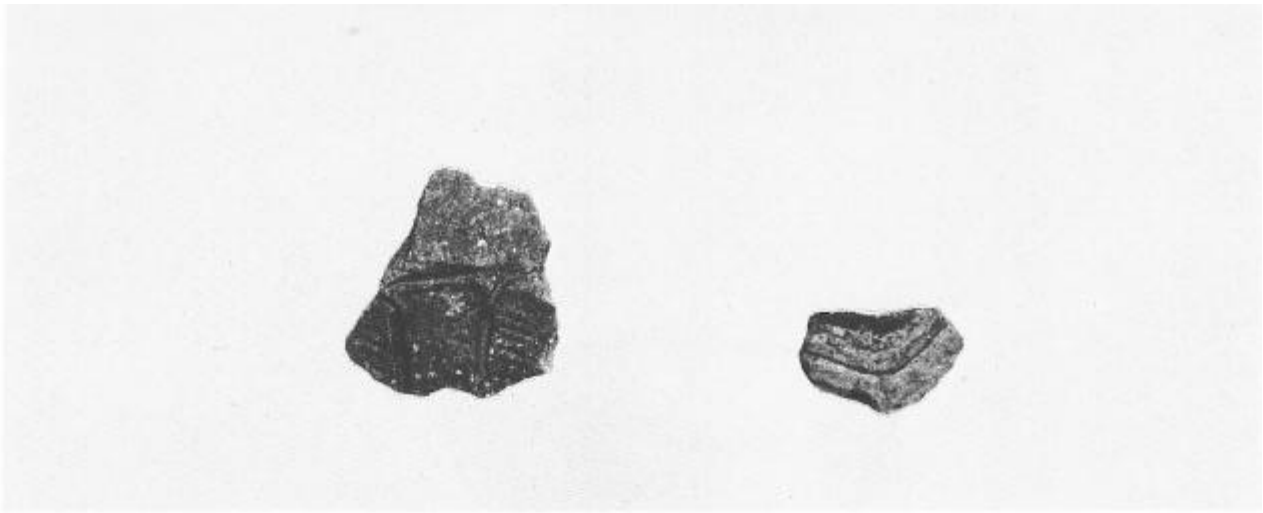
図版41　（上）　SI 011 竪穴住居跡出土遺物（２）
　　（下）　SI 011 竪穴住居跡出土遺物（３）

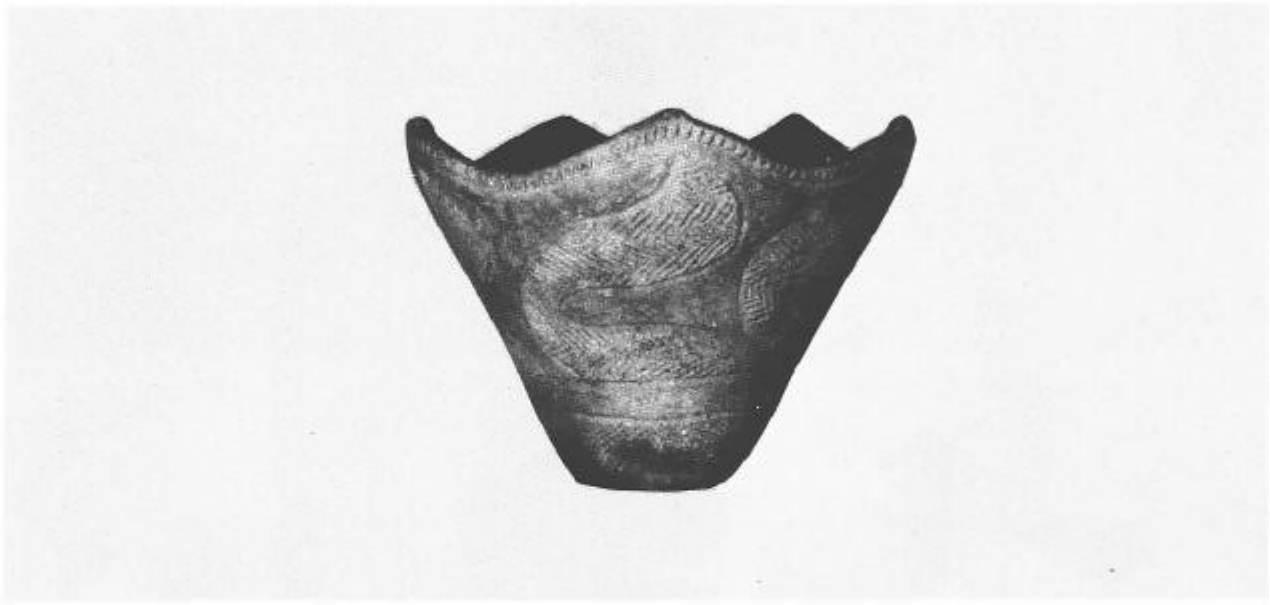




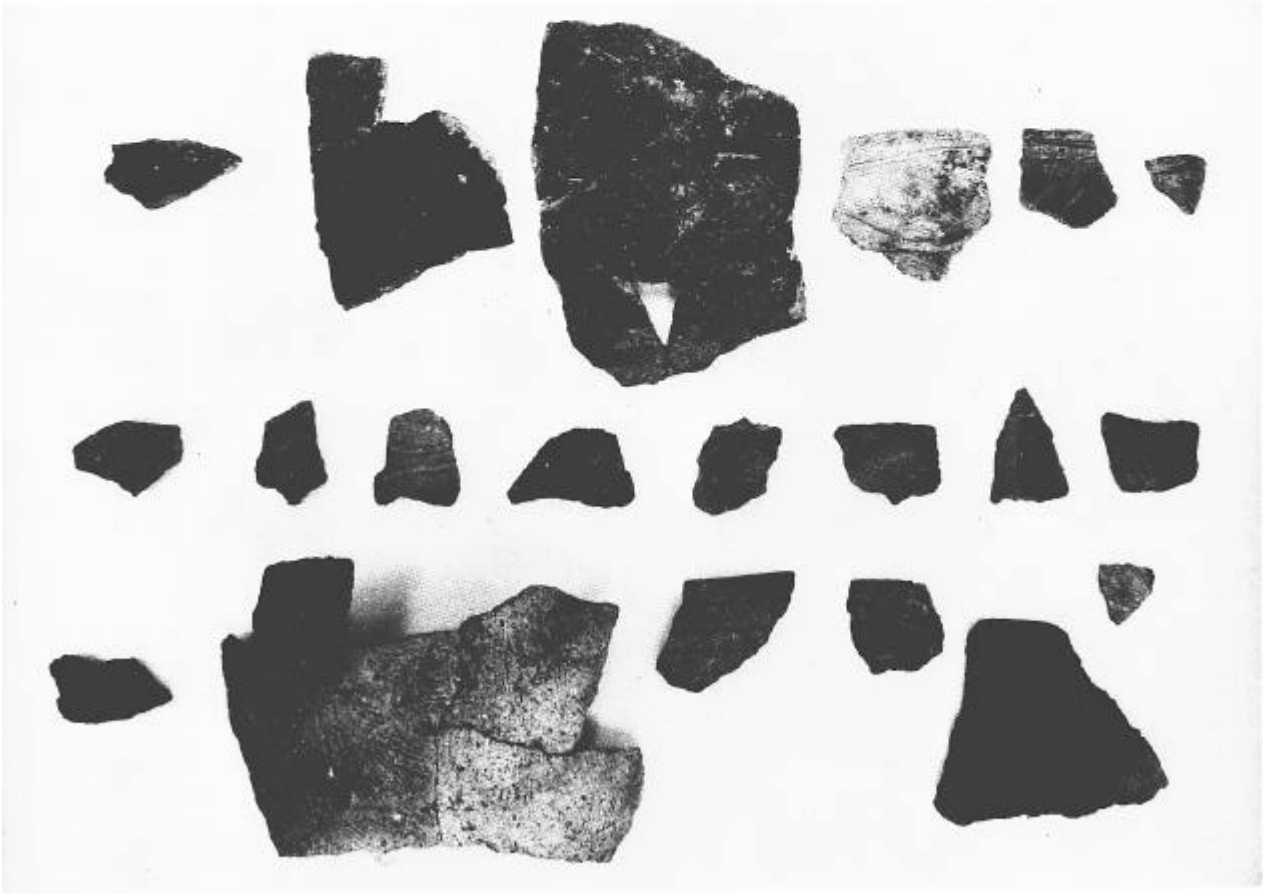


図版42　SI 012 竪穴住居跡出土遺物





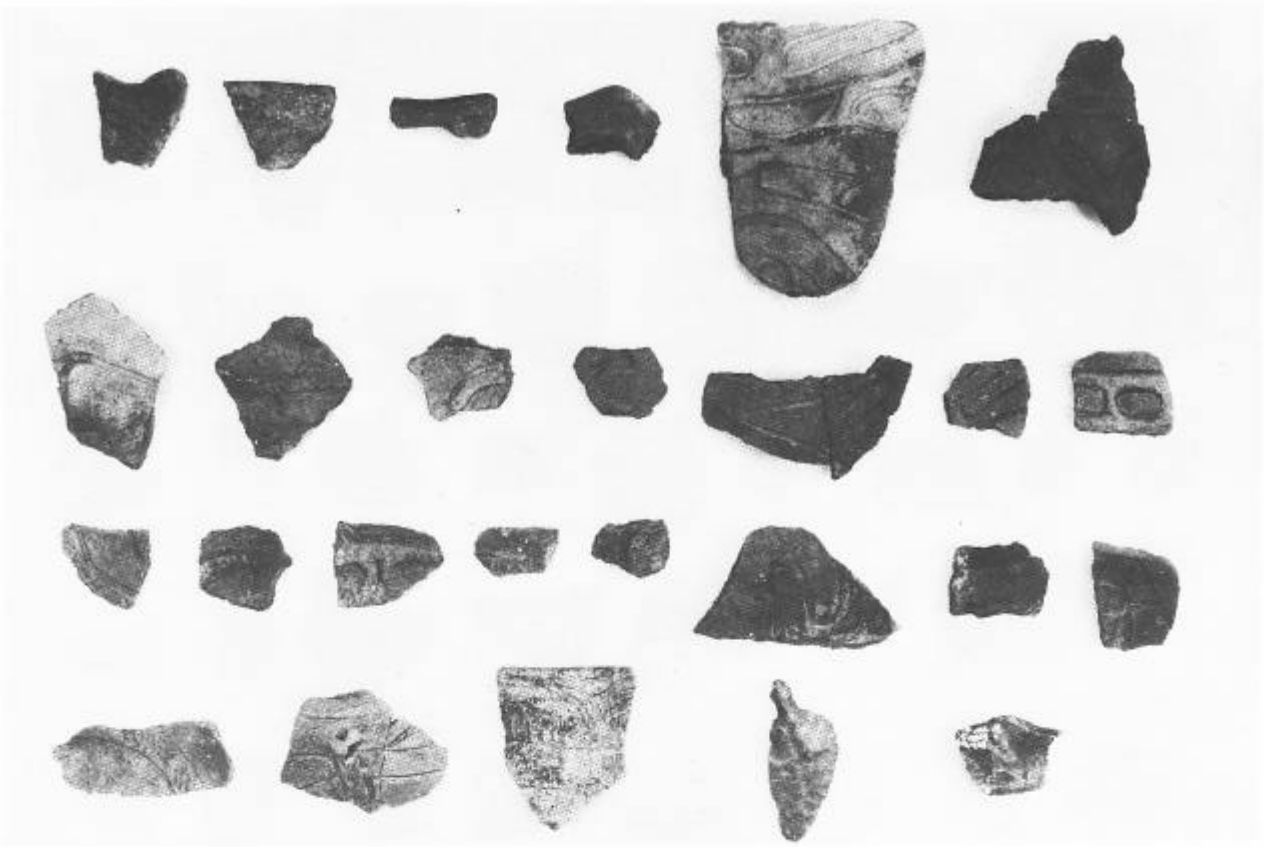
図版43　（上）　SI 035 竪穴住居跡出土遺物
（中）　SK 014 土壙出土遺物
（下）　SK 022 土壙出土遺物

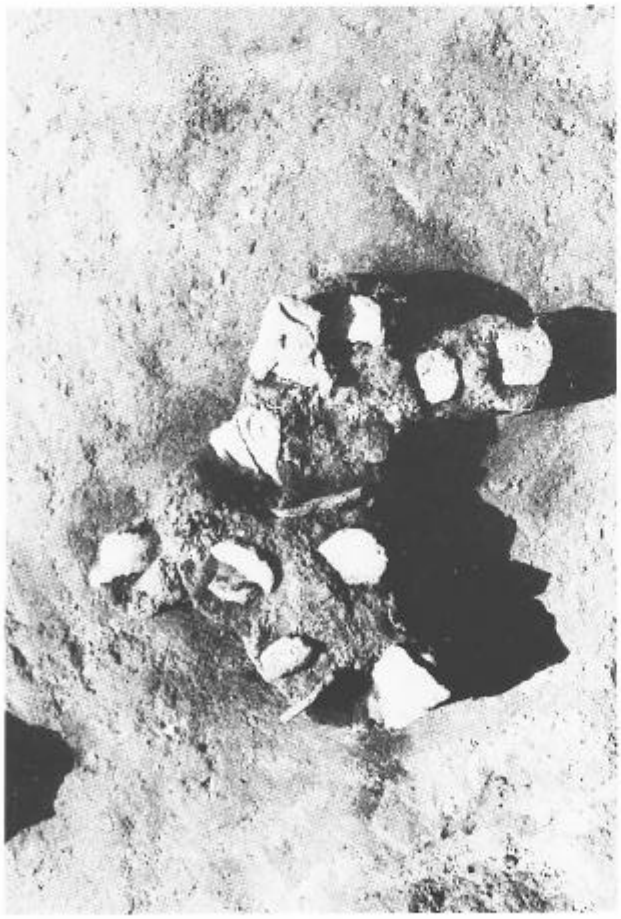


図版44　（上）　SK 043 土壙出土遺物
　　（下）　土壙内出土遺物

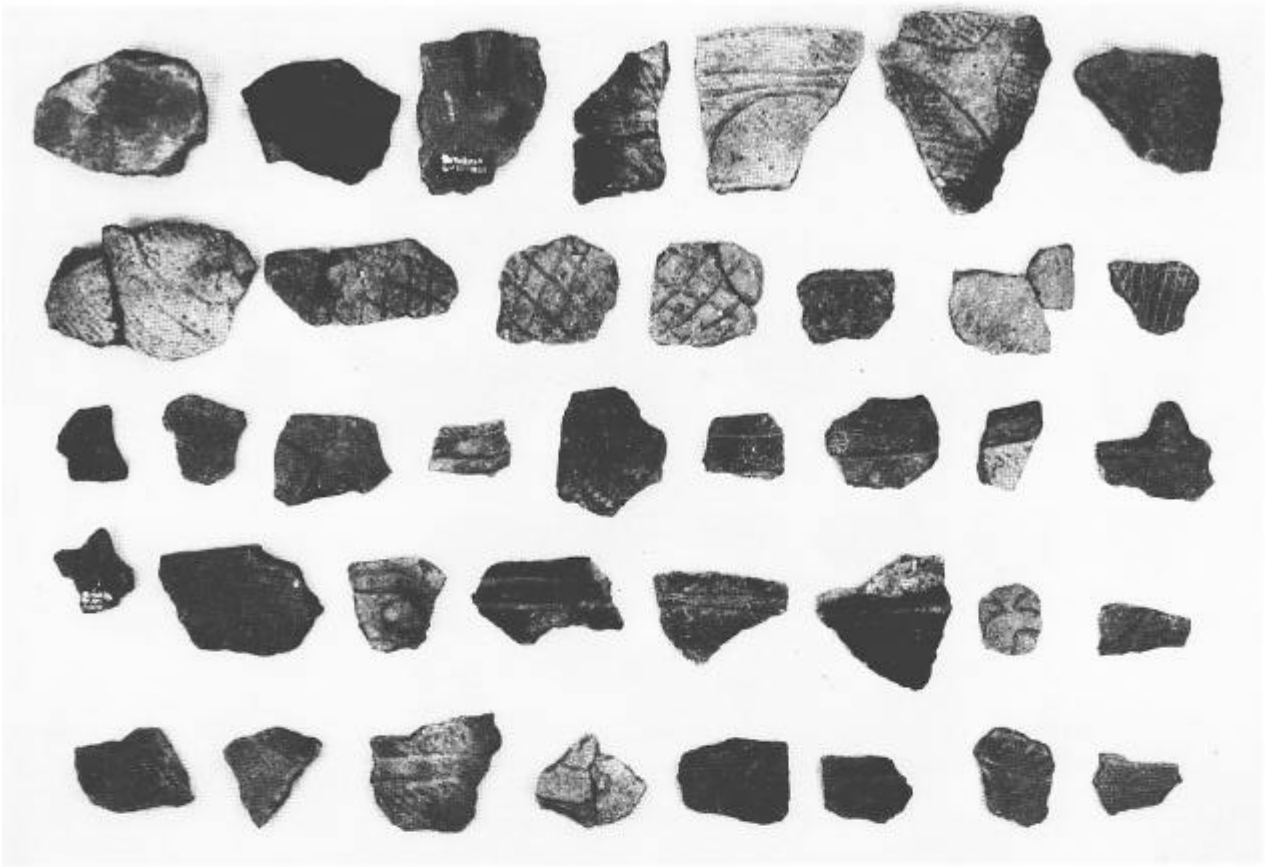
図版45　SX 010 埋甕

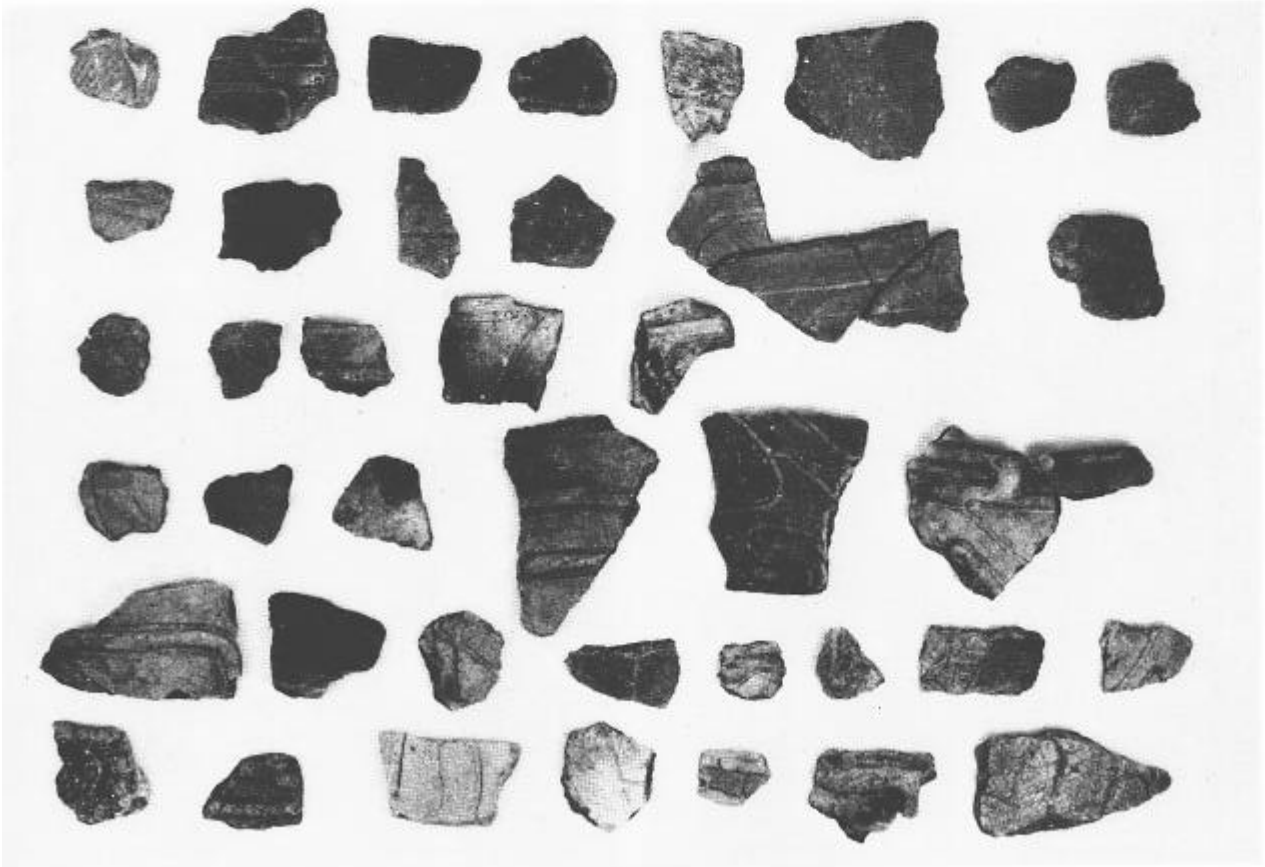
図版46　SX 019 埋甕



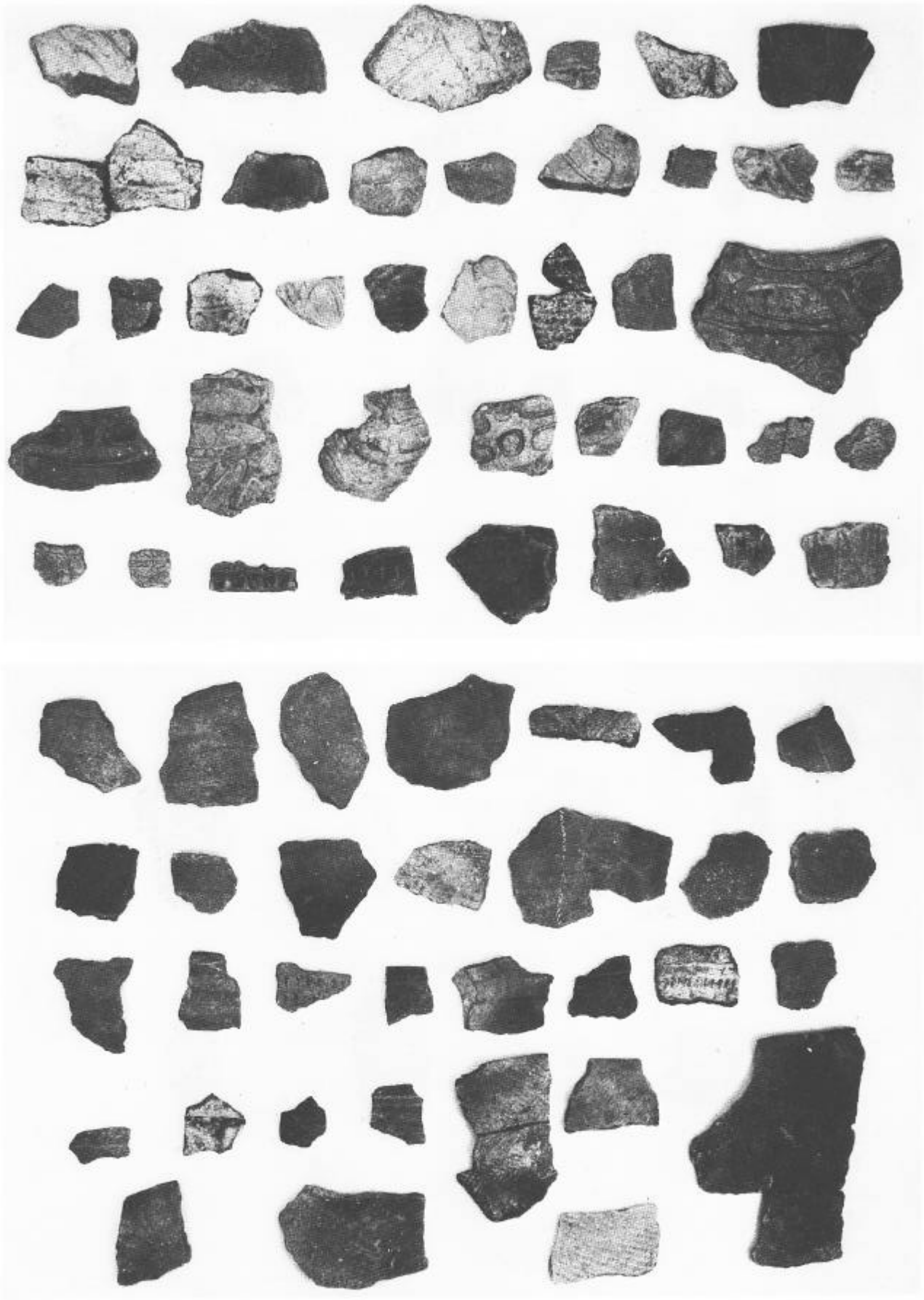


図版47　（上）　SD 001 溝出土遺物
（下）　遺構外土器出土状態　（左）　8－J　（右）　11－I



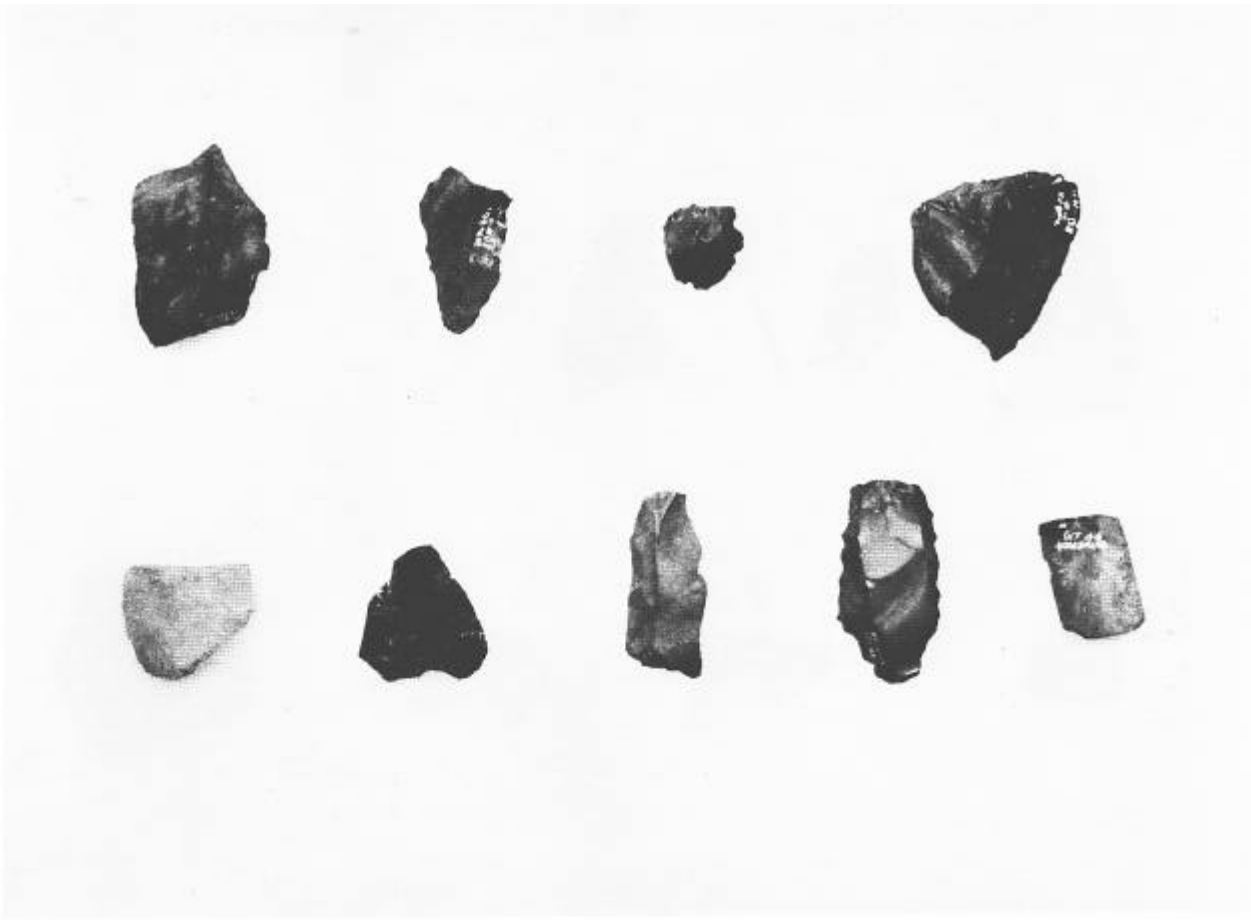


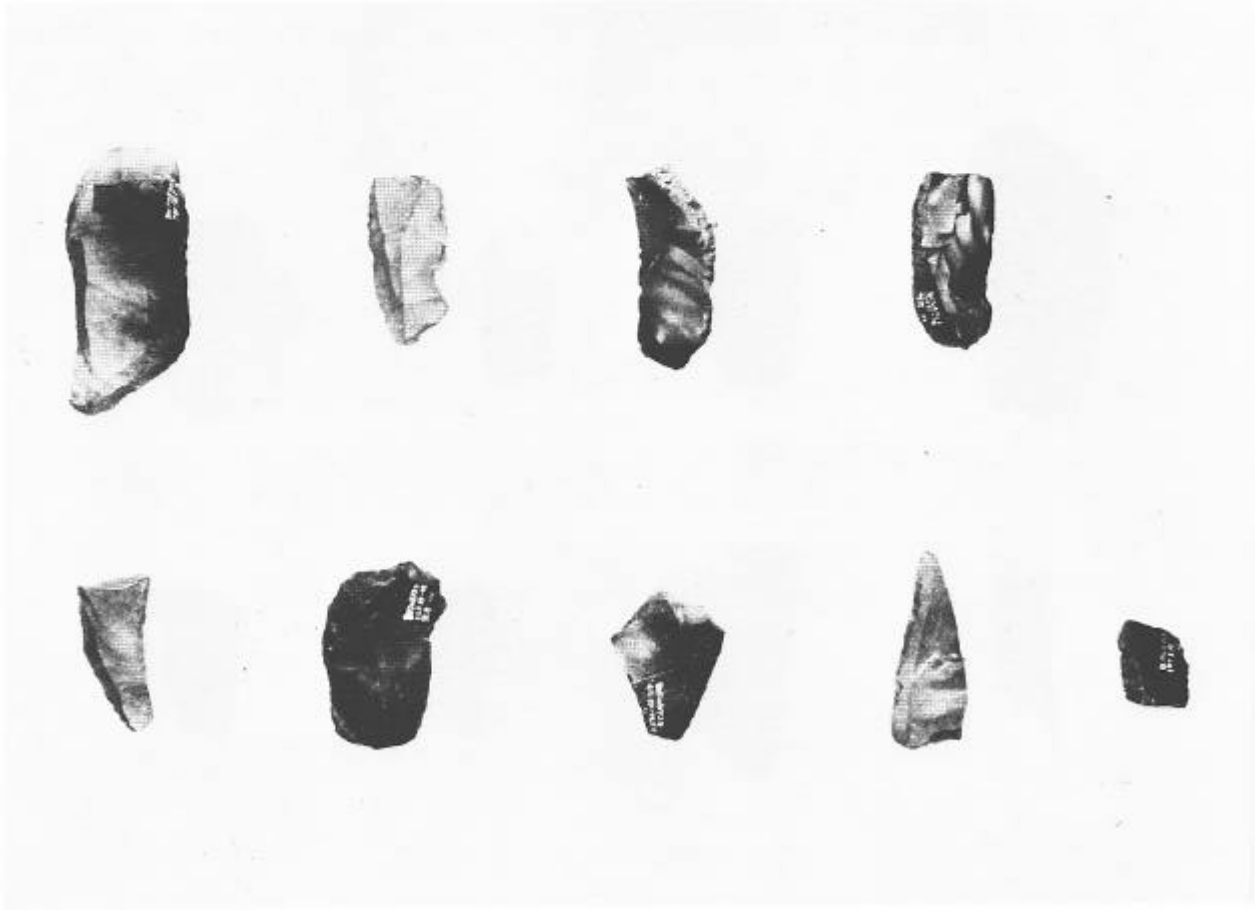
図版48　（上）　遺構外出土土器（１）
　　（下）　遺構外出土土器（２）



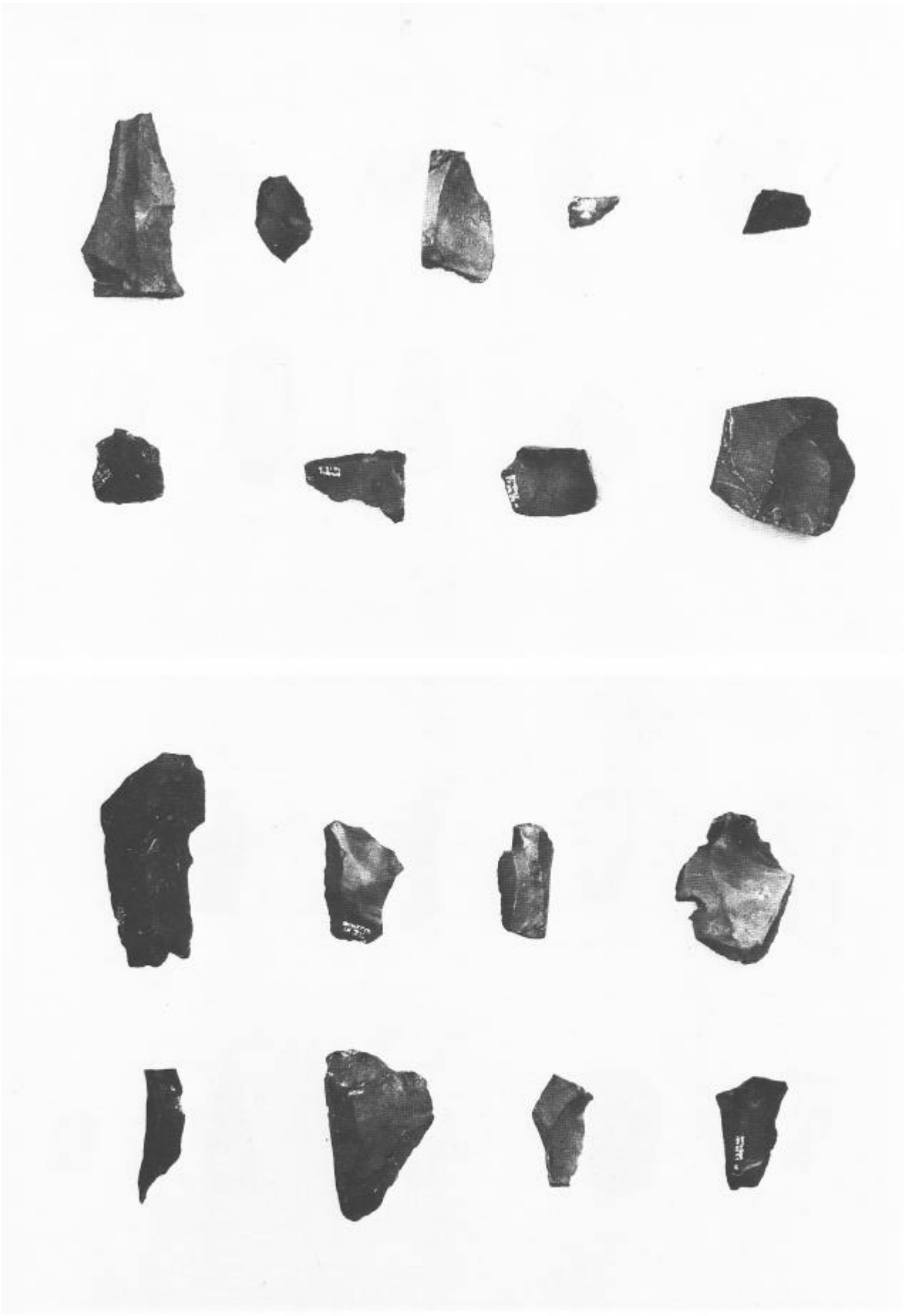
図版49　（上）　遺構外出土土器（３）
　　（下）　遺構外出土土器（４）

図版50　（上）　遺構外出土石器（１）
　　（下）　遺構外出土石器（２）

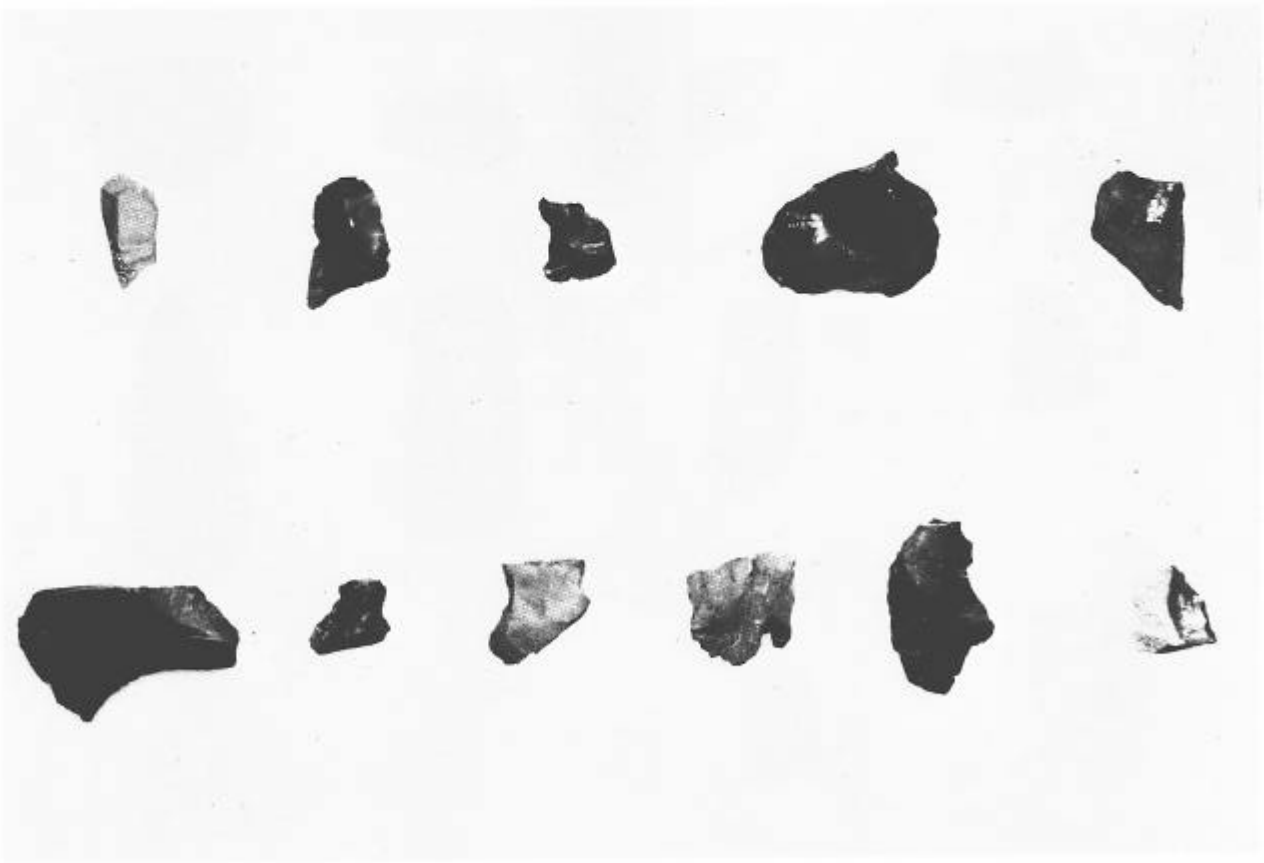




図版51　（上）　遺構外出土石器（３）
　　（下）　遺構外出土石器（４）



図版52　（上）　遺構外出土土器（５）
　　（下）　遺構外出土土器（６）



図版53　（上）　遺構外出土石器（７）
　　（下）　遺構外出土石器（８）

図版54　（上）　遺構外出土石器（９）
　　（下）　遺構外出土石器(10)

図版55　発掘調査風景

北の林Ⅰ遺跡

遺跡番号	No.9
所在地	鹿角市八幡平字北の林65他
調査期間	昭和55年4月16日～10月25日
発掘予定面積	6,000㎡
発掘調査面積	7,200㎡

1　遺跡の概観

北の林Ⅰ遺跡は秋田県鹿角市八幡平字北の林65他に所在する。この地は国鉄花輪線陸中大里駅の南東１㎞の地点で、北緯40度９分35秒、東経140度48分25秒、標高200～205ｍである。

花輪盆地の東側には四角岳（1.003ｍ）、独鈷森（836ｍ）などの急峻な山容の奥羽背梁山脈が走る。遺跡地背後の北林（804ｍ）はこの前衛的位置にあり、山麓から西方米代川の北流する花輪盆地にかけては、緩傾斜の沢目に区切られたいくつかの扇状もしくは舌状の台地が発達している。遺跡地はこの北林の西麓の一舌状台地で三段の平坦面から成り、調査区は舌端部の一番低い平坦面で地形学的には鳥越段丘と呼ばれる所である。リンゴの栽培された畑地と雑木林からなり、沢をはさんで南に飛鳥平遺跡（遺跡番号№８）、北に北の林Ⅱ遺跡（遺跡番号№10）が隣接する。

2　調査の方法

グリッドは遺跡の調査対象区域に設定されている東北縦貫自動車道の路線中心杭ＳＴＡ98とＳＴＡ98＋40の２基点を結ぶ直線及びその延長線を基準にし、これに直交する線を設け５ｍ×５ｍのものを設定した。グリッドの呼称は東西軸にアラビア数字で１～22、南北軸にアルファベットで北からＡ～Ｑを付し、５－Ａグリッドの如く両者の組合せにし、グリッド北東隅の交点をグリッド名称とした。

発掘調査によって確認された遺構にはその性格ごとに確認順に通し番号を付し、実測図作成は簡易遣り方測量に依った。

3　調査経過

発掘調査は昭和55年４月16日から10月25日まで実施した。

４月16日～18日までは発掘器材の搬入とプレハブ設置作業。翌19日から25日までは遺跡に至る農道とプレハブ脇の駐車場の整備、そして発掘予定地の雑草、雑木の刈払、焼却作業を行う。25日～28日にかけてプレハブ前庭部の黒色土部分と、土棄場に予定していた台地南縁の沢目にトレンチを入れて遺構の有無を調査したが、縄文土器細片の出土にとどまる。25日東邦技術によるグリッド杭打ちが開始され、26日には栗沢、松岡両補佐員遺跡背後の北林に登山、俯瞰撮

影を行う。

5月7日調査区北西隅3Fグリッドで、平安時代と考えられる竪穴住居跡1棟地山面で確認。その後16日までに6棟の住居跡、2基の土壙の検出が追加された。遺構の確認はすべて地山面で、縄文土器をはじめとする遺物は上面の黒色土からの出土である。5月26日小豆沢館調査区の工事期日がせまり、重複遺構が多いため補佐員実測応援に出発。29日遺構全輪郭確認のため粗掘区のベルト除去を開始す。竪穴住居跡はすべて方形で、南壁にカマドを持つ。

6月7日には検出住居跡11棟となり、24日更に2棟が追加される。25日文化課富樫泰時学芸主事が来跡視察。28日より検出住居跡の発掘に入る。

7月22日調査区東端の上部平坦面との境域から、南北に走る溝状遺構を検出。その後も竪穴住居跡の検出は相次ぎ、台地全面に分布することが確実となる。

8月8日SI 016から直刀出土。12日払田柵跡調査事務所船木義勝学芸主事と小西秀典主事視察。28日県立博物館庄内昭男主事、鈴木秋良補佐員、花田孝夫補助員追加契約発掘調査遺跡が決定したため応援に来跡、直ちに住居跡発掘と実測に従事する。

9月1日能代事務所熊谷太郎文化財主事、佐々木金正補助員応援に来跡。翌日、下乳牛遺跡の調査に移行。鉄刀の発見のあったSI 016住居跡は焼失家屋であり、材質鑑定資料の遺存炭化材の取り上げを開始す。10日調査専問指導員の国学院大学助教授小林達雄先生視察し指導くださる。11日県政ニュース取材。16日調査顧問国立奈良文化財研究所長坪井清足先生視察し、指導くださる。24日遺跡中央ベルトの土層図完成。27日プレハブの撤去が終わり、発掘器材を次の発掘予定地である猿ケ平I遺跡へ搬入開始。

10月3日作業員は次の発掘遺跡猿ケ平I遺跡へ移動。補佐員と実測従事作業員はテントに残って遺構の実測を継続。21日調査区西縁で新たに縄文時代竪穴住居跡2棟検出、すぐ発掘に入る。23日各遺構の実測完了。24日好天の下に遺跡全景等の撮影を終え、残存発掘器材を撤収して調査を終了する。

4　遺跡の層位

遺跡はほぼ平坦であり、基本的層位は10ライン、Hラインのセクションから観察すると、次のように分層される。

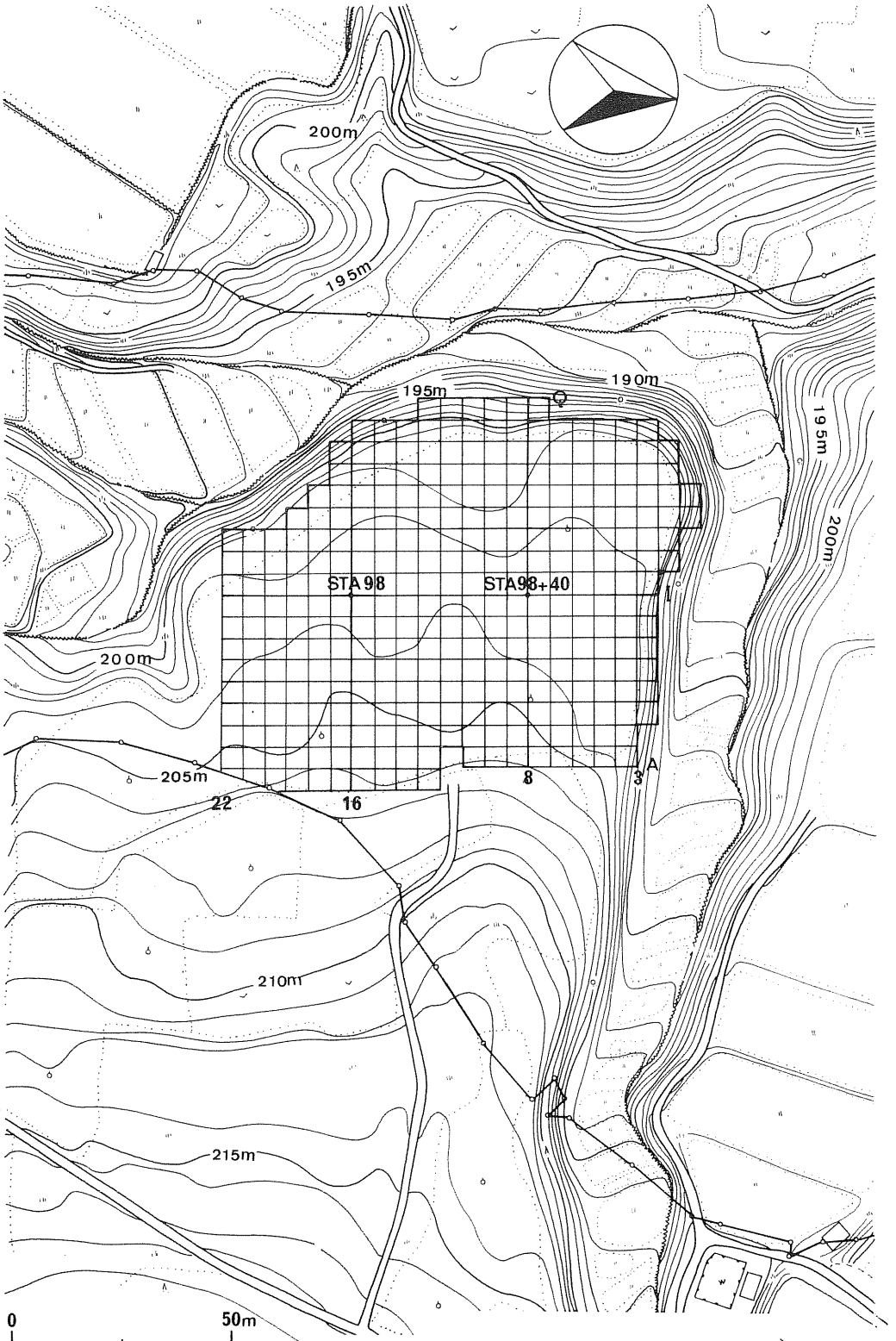
第一層　　暗褐色土　（耕作土である。）

第二層　　黒色土

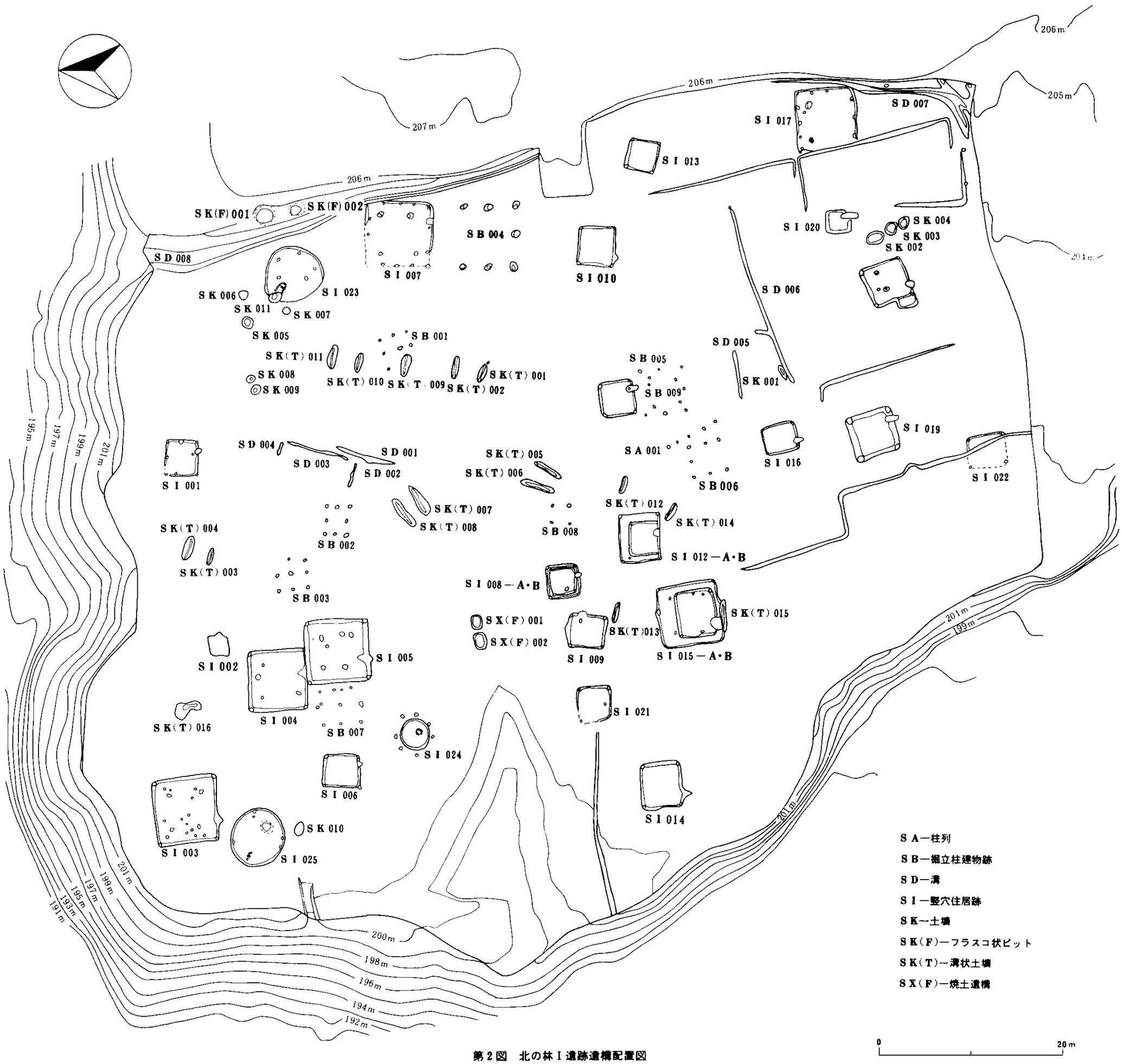
第三層　　黄褐色土で、地山を構成している火山削屑物である。調査区南半分では水田を

営んだ際の削平平坦面が4段認められる。

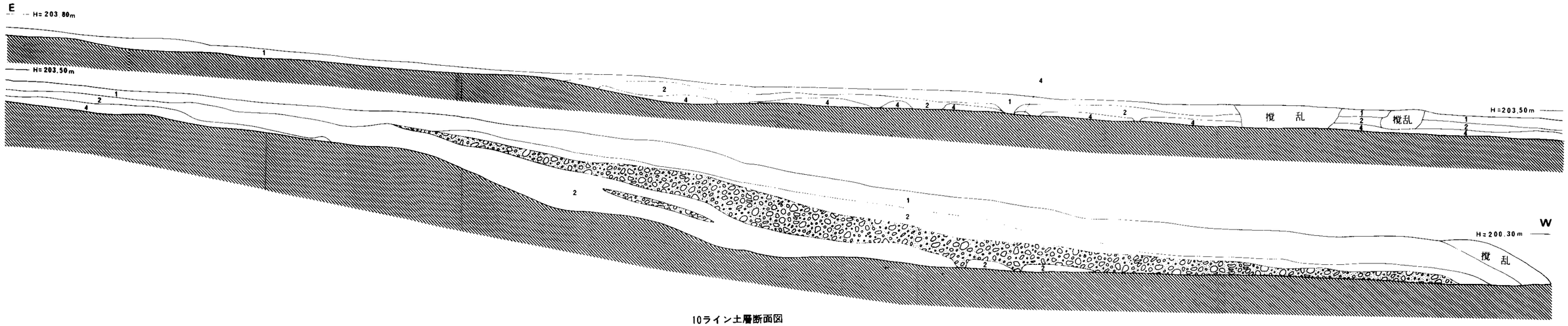
基本的層位は以上の如くであるが、部分的に第二層中に大湯浮石の堆積層が認められた。縄文時代、平安時代の遺物は第一層からも出土するが、遺構の確認面は調査区中央大湯浮石堆積部分の一棟以外はすべて第三層地山面である。


200m
195m
190m
195m
195m
200m
STA 98
STA 98+40
200m
205m
22
16
8
3
A
210m
215m
0
50m

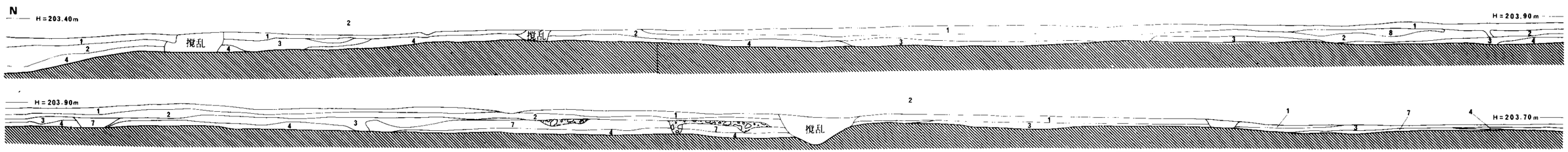
第1図　グリッド配置図



第2図　北の林Ⅰ遺跡遺構配置図



10ライン土層断面図

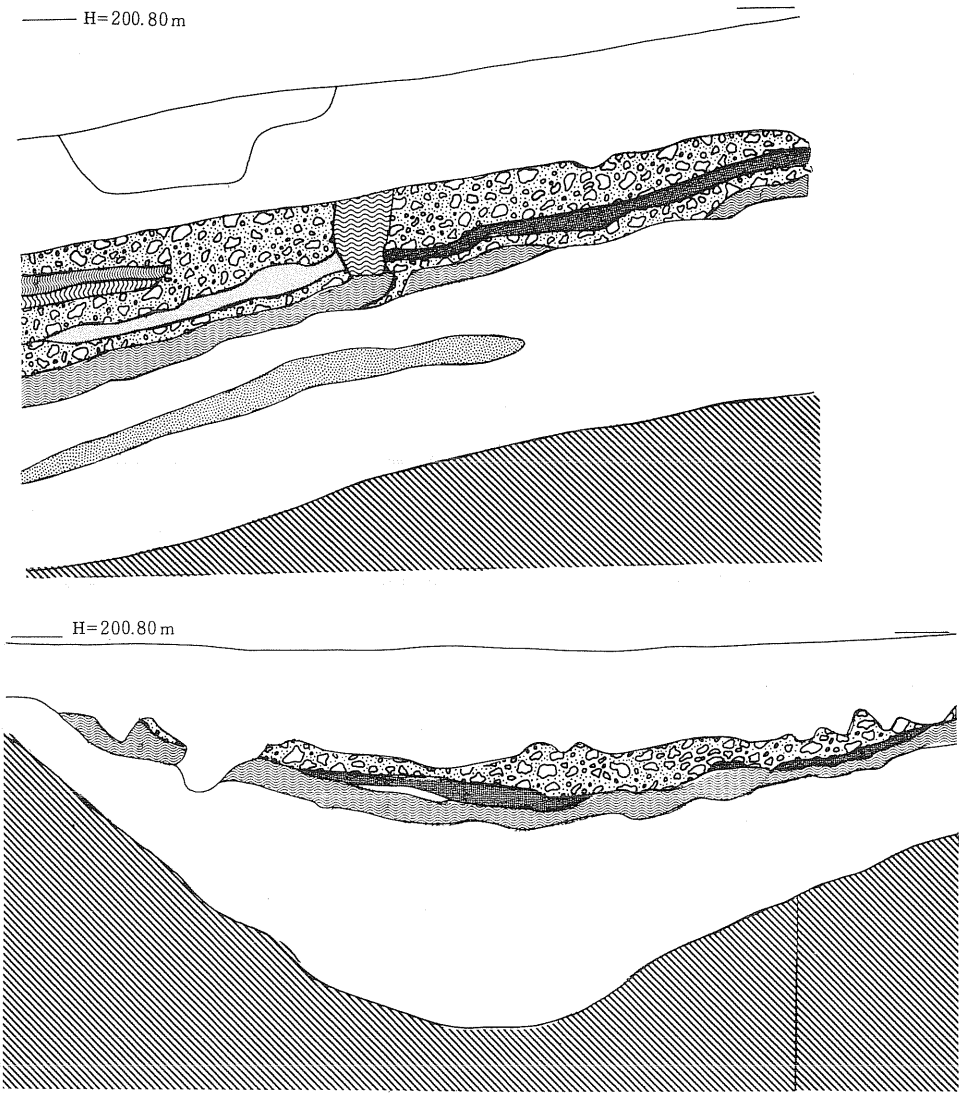


Hライン土層断面図

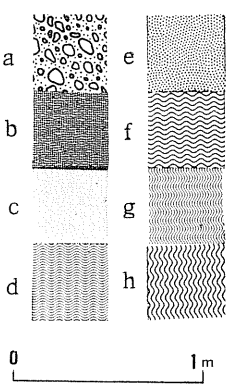
層	土色	備考
1	10YR 3/1 暗褐色	粘性：弱
2	10YR 3/2 黒褐色	黄褐色土多量混入
3	10YR 3/2 黒褐色	粘性：強。黄褐色土粒子少量混入
4	10YR 3/1 褐 色	粘性：強
5	10YR 3/2 黒褐色	暗赤褐色土粒子少量混入
6	10YR8/1 灰白色	浮石層。粘性：弱
7	10YR 3/1 黒 色	粘性：弱。暗褐色土粒子少量混入。
8	10YR 3/2 黒褐色	粘性：弱。暗赤褐色土粒子多量混入

0 4m

第3図 土 層 図

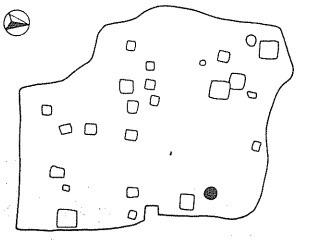


層	土　　色	備　　考
a	10 Y R 4/6 褐色	ブロック状に灰白色粒子混入
b	10 Y R 6/6 明黄褐色	粘性：強
c	10 Y R 8/1 灰白色	下部が黄橙色浴びる。
d	10 Y R 2/2 黒褐色	粘性：弱。黄色土粒子微量混入
e	10 Y R 2/3 黒褐色	粘性：弱。黄色、白色土粒子少量混入
f	10 Y R 2/2 黒褐色	粘性：弱。黄色土粒子少量混入
g	10 Y R 4/6 褐色	礫状の浮石微量混入
h	10 Y R 4/6 褐色	硬度：強。にぶい黄褐色浮石多量混入



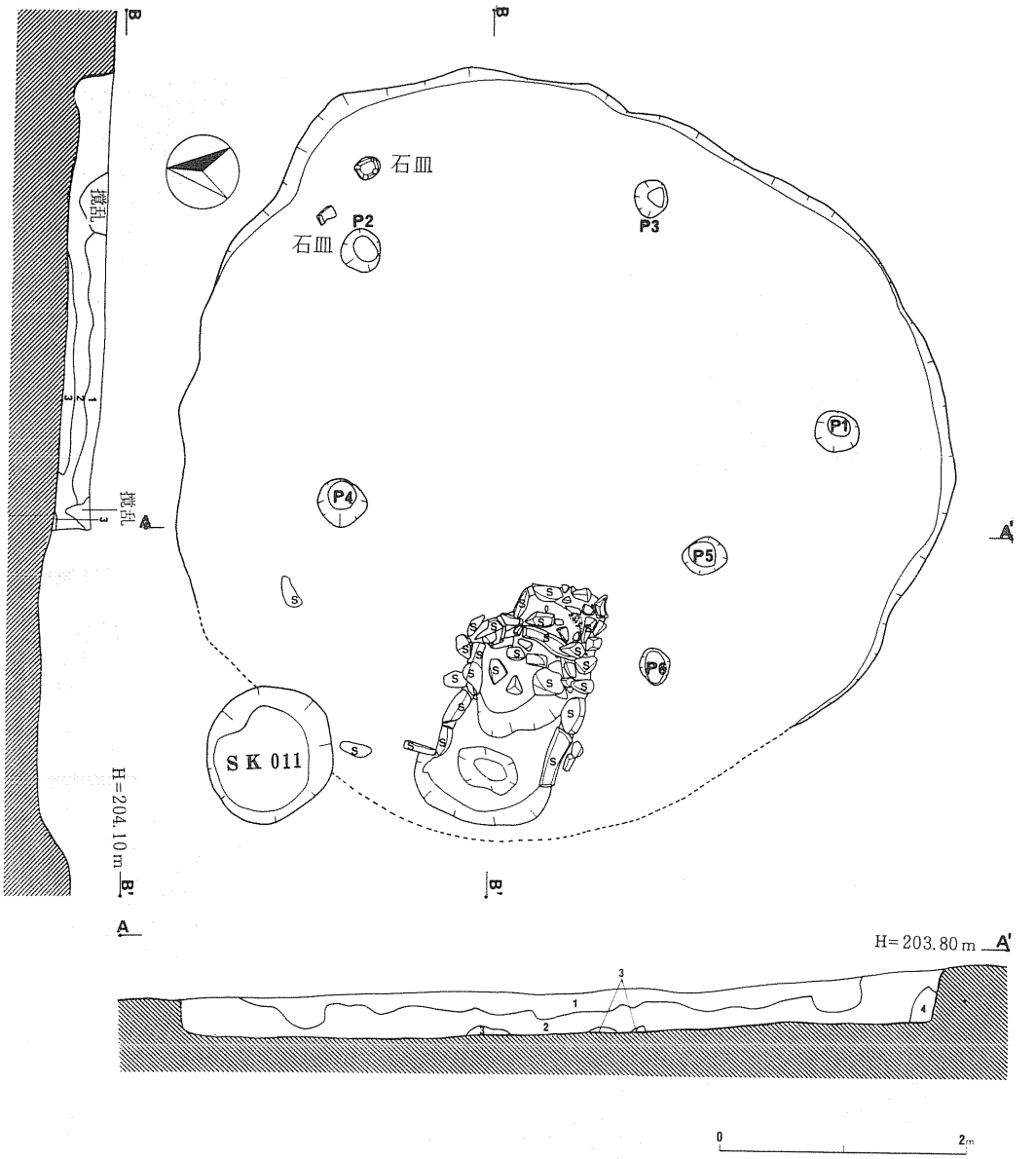
第4図　浮石堆積図

第　1　表		遺構の位置	
遺構名	ＳＩ023		
検出地区	5－B、5－C 6－B、6－C		
挿図番号	5、6		
図版番号	10		



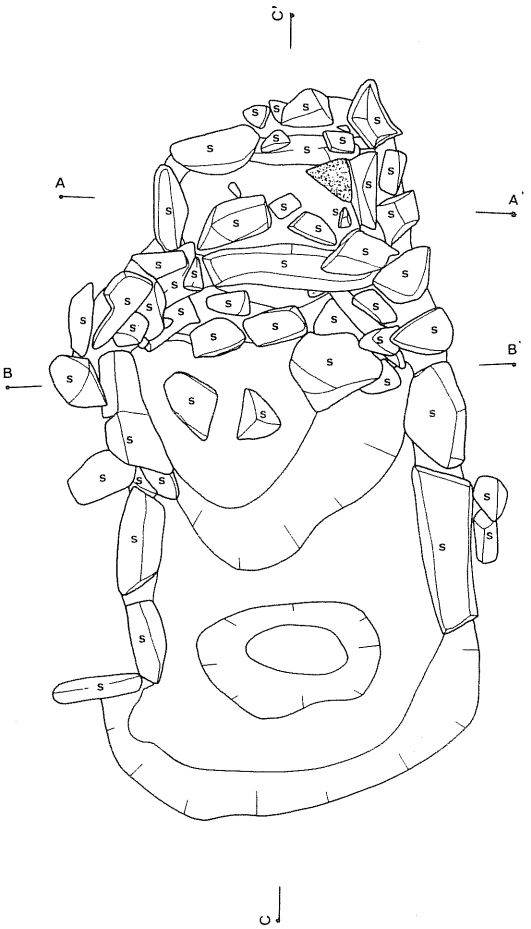
法量				
	長軸	631 cm	短軸	626 cm
	壁高	0～45 cm	面積	33.0 ㎡
	形態	円形	主軸方向	N－69°－W

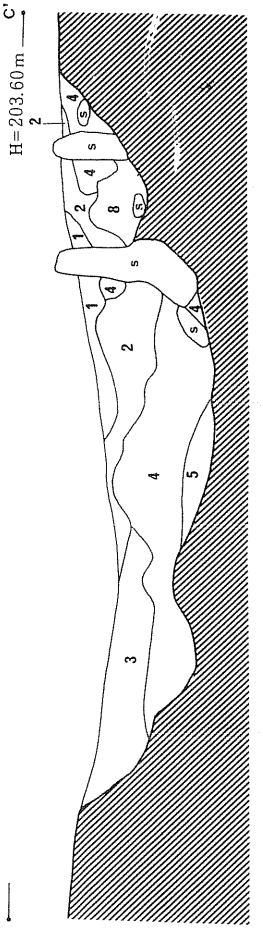
確認	地山上面で確認した。
壁	地山面がゆるやかに傾斜を示すため、東側壁は45cmと良好に存在し、床面よりほぼ垂直に立ち上がる。 西側壁は、確認できなかった。
床面	平坦で、全体的に堅くしまっている。
ピット	床面にP_1～P_6を確認した。 P_1（53）P_2（64）P_3（60）P_4（55）P_5（27）P_6（45）
炉	炉は床面西側に設置され、58コの扁平な自然石を使用した石組複式炉である。 石組部と開口部は明確に区分され、開口部は「コ」の字状に自然石が組まれ、底部にも自然石が敷かれる。又、石組部と開口部をしきる石は非常に多くの火熱をうけて赤褐色に変色している。又、石組部も開口部全体と比べ火熱をうけている。
遺物とその出土状態	縄文土器、石皿
備考	ＳＫ011と重複している。

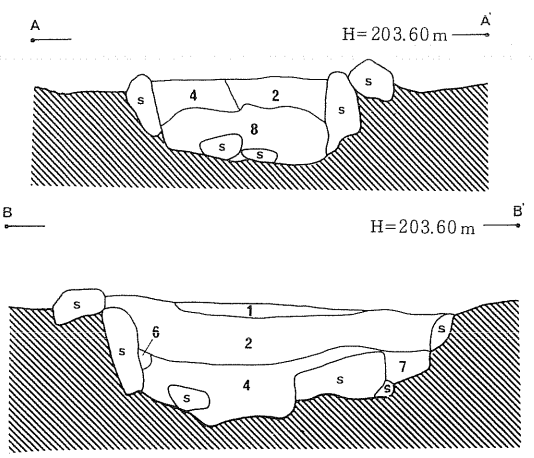


層	土　　色	備　　考
1	10YR 2/1 黒色	炭化物、浮石少量混入。焼土粒子混入。
2	7.5YR 3/3 暗褐色	炭化物、焼土混入。
3	10YR 4/6 褐色	炭化物、微量混入。
4	10YR 3/4 暗褐色	焼土少量混入。炭化物、褐色粒子混入。

第5図　ＳＩ023竪穴住居跡実測図



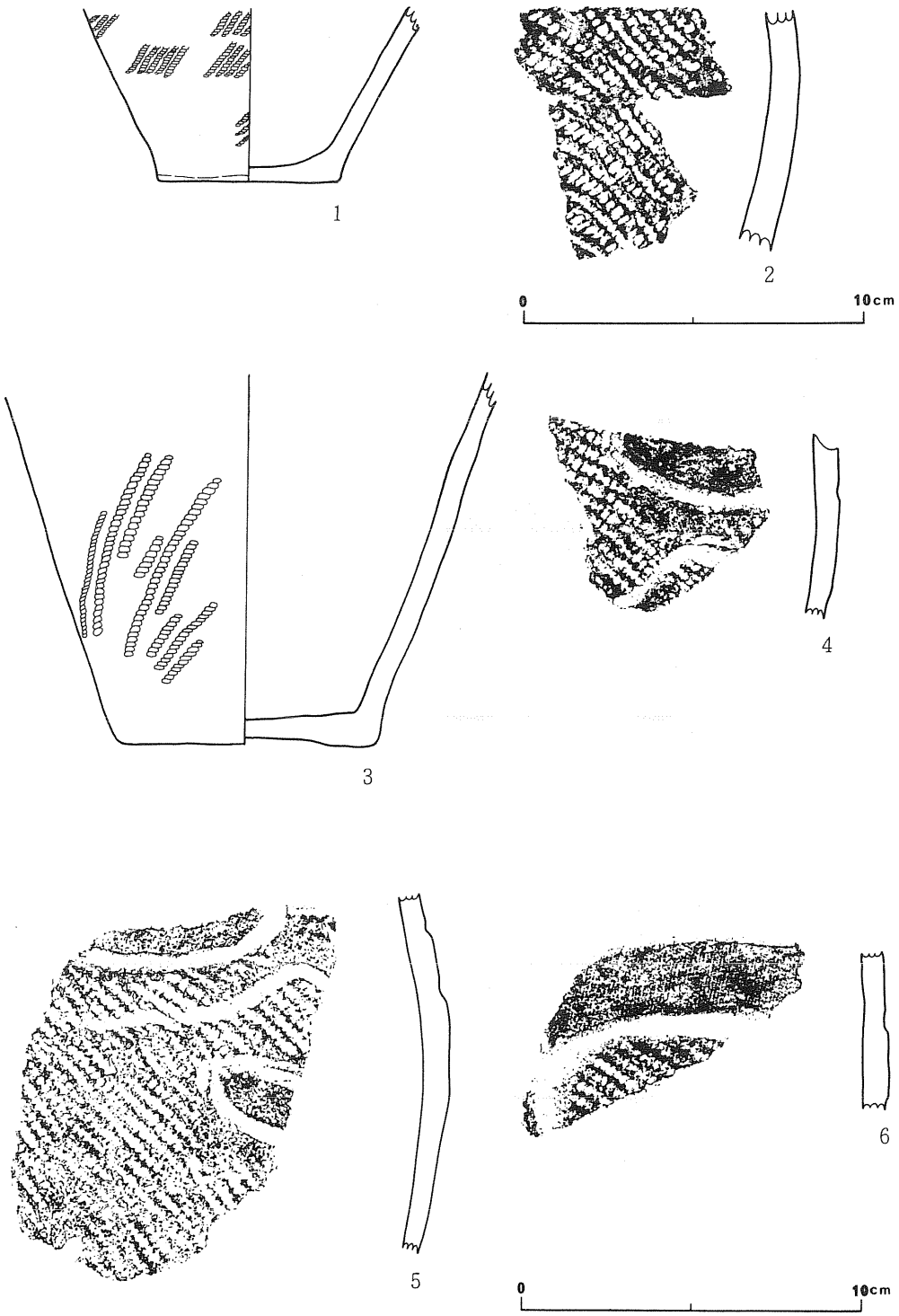




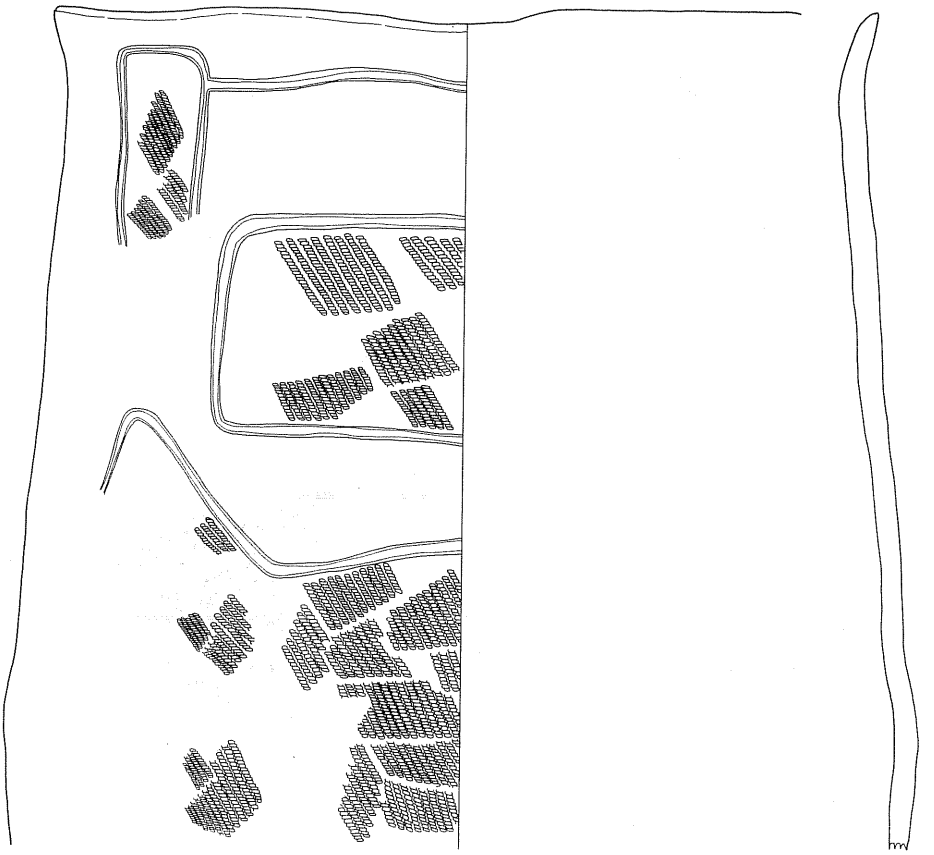
0 1m

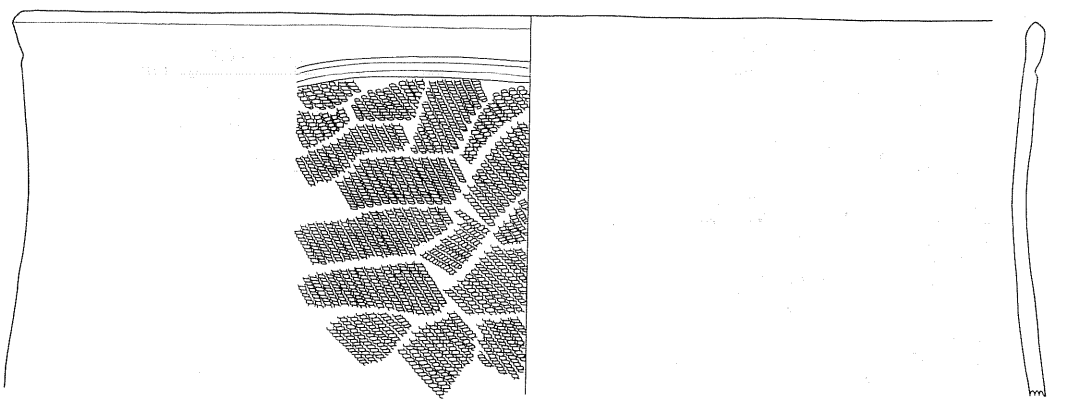
層	土　色	備　考
1	10YR 3/1 黒色	粘性：弱。炭化物、黄褐色土粒子、微量混入。
2	10YR 3/2 黒褐色	粘性：弱。炭化物、黄褐色土粒子、微量混入。
3	10YR 3/2 黒褐色	粘性：弱。炭化物、黄褐色土粒子、微量混入。
4	10YR 3/3 暗褐色	硬度：強。粘性：弱。炭化物、黄褐色土粒子、微量混入。
5	10YR 3/4 暗褐色	粘性：弱。粗砂多量混入。
6	10YR 4/6 暗褐色	粘性：弱。黒褐色粒子微量混入。
7	10YR 1.7/1 黒色	粘性：弱。暗赤色土粒子、微量混入。粗砂多量混入。
8	7.5YR 5/6 明褐色	炭化物微量混入。暗褐色ブロック少量混入。

第6図　S I 023竪穴住居跡複式炉実測図



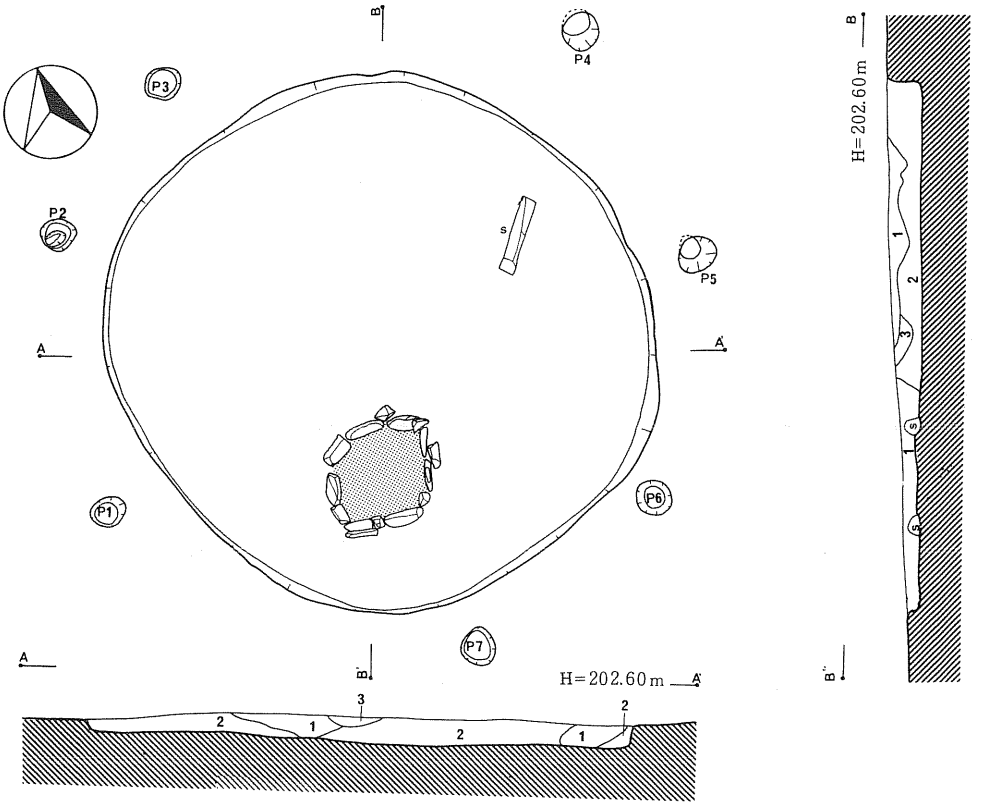
第7図　ＳＩ023・025竪穴住居跡出土土器（1）



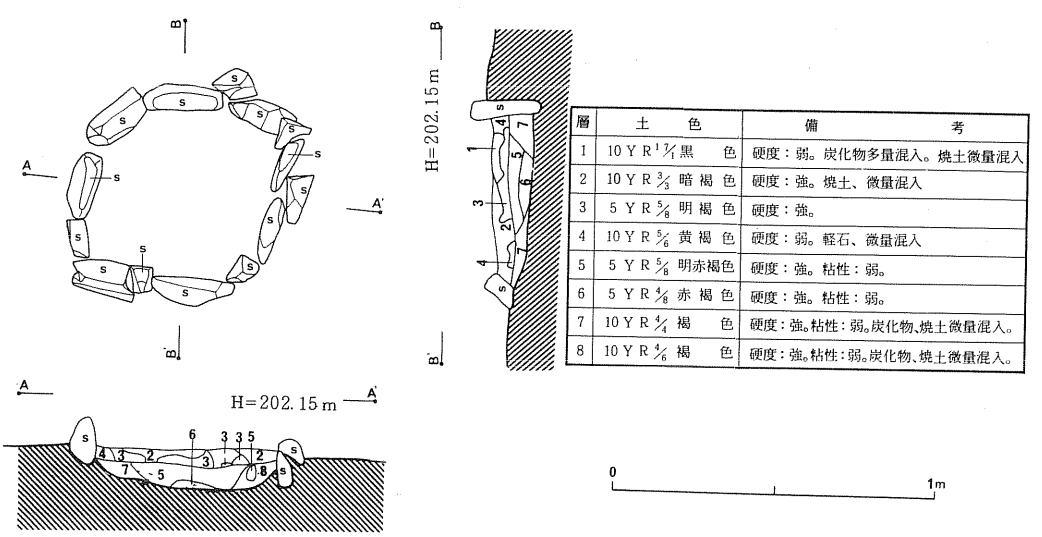


0 10cm

第8図　ＳＩ025竪穴住居跡出土土器（2）

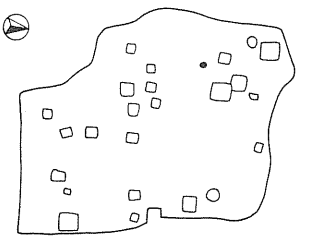


層	土色	備考
1	10YR 3/2 黒褐色	硬度：強。炭火物、黄褐色粒子、微量混入
2	10YR 3/4 褐色	硬度：強。炭化物、黄褐色土、微量混入
3	10YR 3/6 褐色	硬度：強。炭化物微量混入



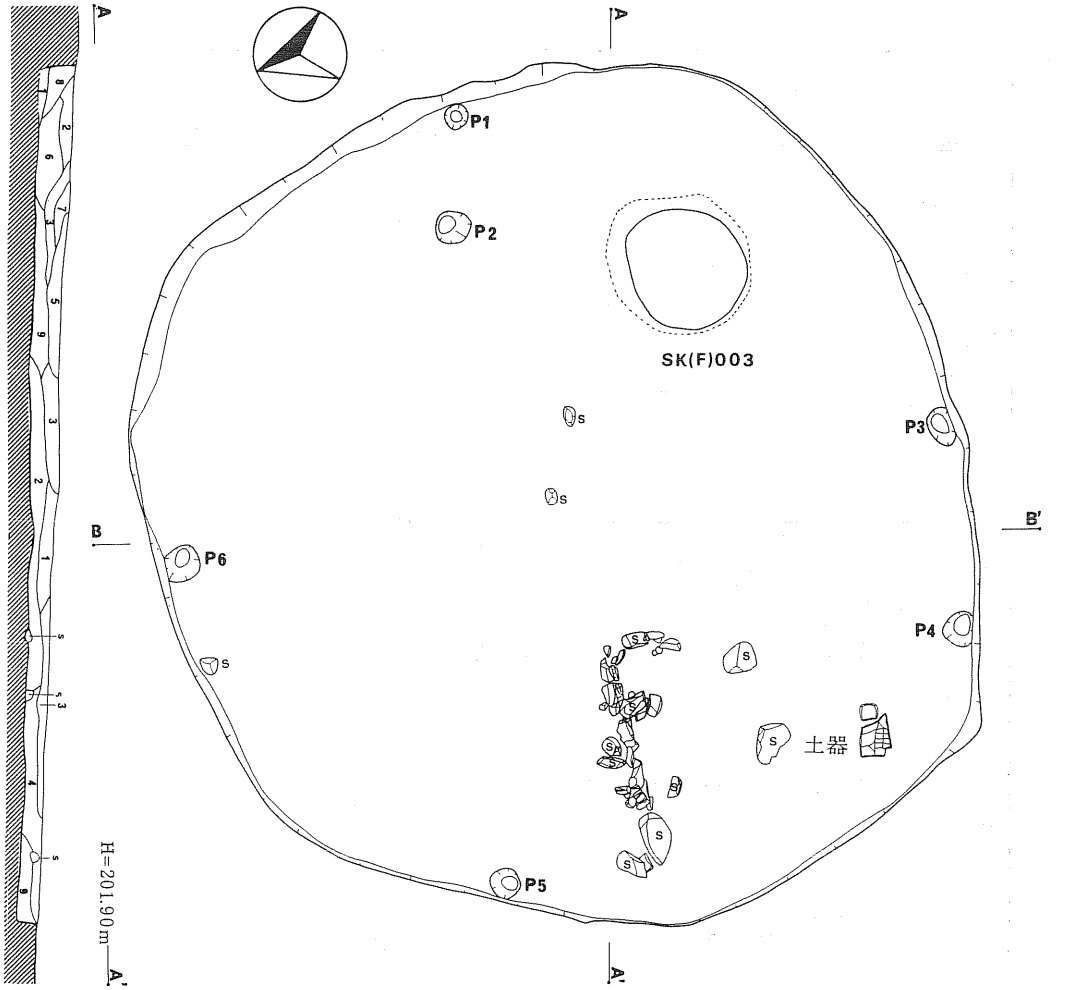
層	土色	備考
1	10YR 1.7/1 黒色	硬度：弱。炭化物多量混入。焼土微量混入
2	10YR 3/3 暗褐色	硬度：強。焼土、微量混入
3	5YR 5/8 明褐色	硬度：強。
4	10YR 5/6 黄褐色	硬度：弱。軽石、微量混入
5	5YR 5/8 明赤褐色	硬度：強。粘性：弱。
6	5YR 4/8 赤褐色	硬度：強。粘性：弱。
7	10YR 4/4 褐色	硬度：強。粘性：弱。炭化物、焼土微量混入。
8	10YR 4/6 褐色	硬度：強。粘性：弱。炭化物、焼土微量混入。

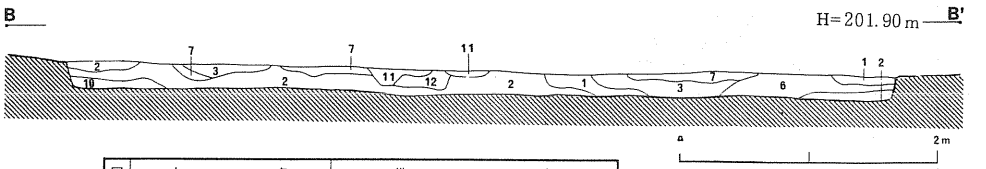
第9図　ＳＩ024竪穴住居跡および石組炉実測図

第　2　表		遺構の位置	
遺構名	SI 024		
検出地区	7－L、8－L 7－M、8－M		
挿図番号	9		
図版番号	11		

法量	長軸	351 cm	短軸	324 cm
	壁高	5～22 cm	面積	8.8 ㎡
	形態	円形	主軸方法	

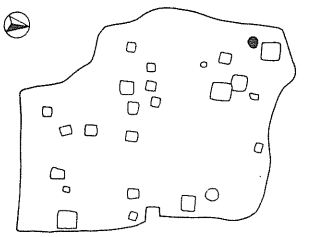
確認	地山上面で確認された。
壁	ほぼ垂直に立ち上がり、北東壁から、南西壁に移行するほど低くなる。
床面	平坦で西側のみ堅くしまっているが、大部分はやや軟弱である。
ピット	住居跡外周に P_1～ P_7を検出した。 P_1(15) P_2(12) P_3(70) P_4(24) P_5(47) P_6(30) P_7(14)
炉	住居跡の南西部に設置されており、床面を10cmほど鍋底状に掘り込み、15コの扁平な自然石を円形に組んでいる。 内部には焼土が全体にみられ、厚さ10cmを測る。
遺物とその出土状態	出土しなかった。
備考	





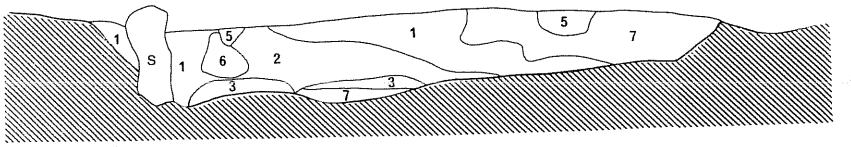
層	土色	備考
1	10YR 6/6 明黄褐色	炭化物微量混入
2	10YR 5/8 黄褐色	炭化物、黄橙色の軽石微量混入。
3	10YR 5/3 にぶい黄褐色	炭化物、黄褐色土粒子、橙色土粒子微量混入。
4	10YR 4/3 にぶい黄褐色	炭化物、黄褐色土粒子、橙色土粒子微量混入。
5	10YR 2/1 黒色	硬度：弱。粘性：弱。炭化物、黄橙色の軽石微量混入。
6	10YR 4/6 褐色	硬度：強。粘性：弱。炭化物、ロームブロック、微量混入。
7	10YR 2/3 黒色	硬度：弱。粘性：弱。炭化物、黄褐色土粒子、橙色土粒子混入。
8	10YR 1.7/1 黒色	硬度：強。粘性：弱、ロームブロック、微量混入。
9	10YR 5/6 黄褐色	硬度：強。粘性：弱。炭化物、ロームブロック、微量混入。
10	10YR 6/6 明黄褐色	硬度：強。粘性：弱。炭化物微量混入。
11	10YR 3/2 黒褐色	硬度：弱。粘性：弱、黄橙色の軽石微量混入。
12	10YR 4/4 褐色	硬度：弱。粘性：弱。炭化物、黄橙色の軽石微量混入。

第10図　S I 025 竪穴住居跡実測図

第　3　表		遺構の位置	
遺構名	ＳＩ025		
検出地区	3－N、3－O 4－N、4－O		
挿図番号	10—11		
図版番号	12		

法量				
長　軸	725 cm	短　軸	675 cm
壁　高	11～35 cm	面　積	35.4 ㎡
形　態	楕円形	主軸方向	N　92°　E

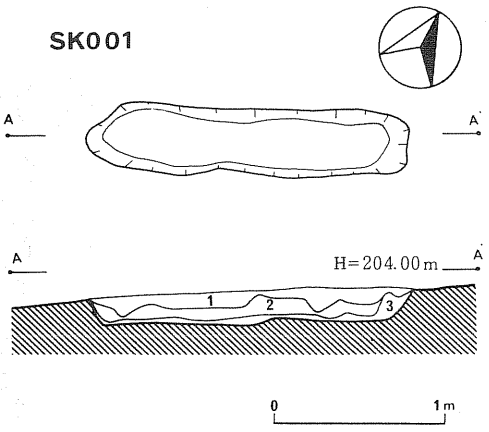
確　認	地山上面で確認された。
壁	残存状態は良く、床面より11～35cmを有し、ほぼ垂直に立ち上がる。
床　面	ほぼ平坦で全体的に軟弱である。
ピット	住居跡内壁際に P_1～P_6 を検出した。 P_1（34）　P_2（17）　P_3（36）　P_4（33）　P_5（25）　P_6（25）
炉	西側寄りに位置する。 北側半分のみ残存するもので、その形態からみて、石組炉と考えられる。 残存する石組部分は34コの扁平な自然石によって組まれている。
遺物とその出土状態	縄文土器
備　考	住居跡東寄りにＳＫ（Ｆ）003が重複する。 新旧関係は、土層断面より判断してＳＫ（Ｆ）003→ＳＩ025の順である。

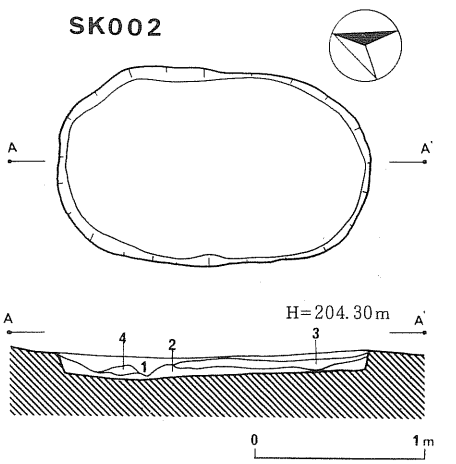


層	土　　色	備　　考
1	10 Y R 1/3 にぶい黄褐色	炭化物微量、黄褐色粒子微量混入。
2	10 Y R 1/4 褐　色	炭化物微量、黄褐色粒子微量混入。
3	10 Y R 5/4 にぶい黄褐色	黄褐色粒子微量混入。
4	10 Y R 1/6 褐　色	粘性：弱。
5	10 Y R 3/3 暗褐色	炭化物微量、黄褐色粒子微量混入。
6	10 Y R 3/4 暗褐色	炭化物微量、黄褐色粒子微量混入。
7	7.5 Y R 6/6　橙　色	粘性：強。炭化物微量混入。
8	10 Y R 5/6 黄褐色	粘性：強。
9	10 Y R 6/4 にぶい黄褐色	粘性：強。

0　　2m

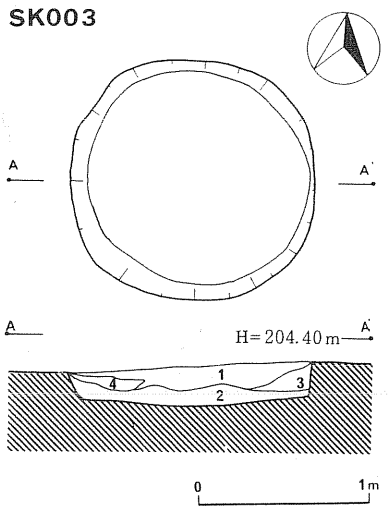
第11図　S I 025 竪穴住居跡炉実測図

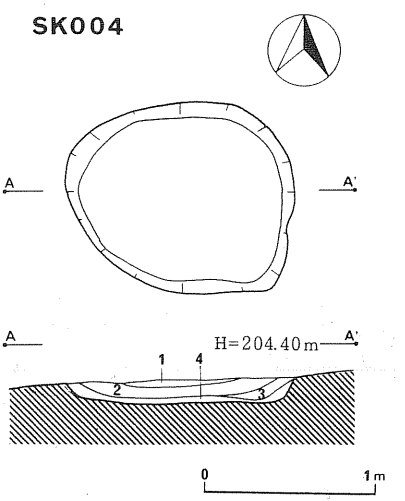




層	土色	備考
1	10YR 3/1 黒色	粘性：弱。浮石少量混入
2	10YR 3/1 黒色	粘性：弱。浮石微量混入
3	10YR 3/2 黒褐色	黄褐色土粒子微量混入

層	土色	備考
1	10YR 3/2 黒褐色	粘性：弱。炭化物微量、黄褐色土粒子微量混入
2	10YR 4/6 褐色	粘性：弱。
3	10YR 4/4 褐色	粘性：弱。
4	10YR 3/4 暗褐色	粘性：弱。炭化物微量、黄褐色土ブロック状に少量混入





層	土色	備考
1	10YR 3/2 黒褐色	粘性：弱。炭化物微量、黄褐色土粒子微量混入
2	10YR 3/3 暗褐色	粘性：弱。炭化物微量、黄褐色土粒子微量混入
3	10YR 3/2 黒褐色	粘性：弱。炭化物微量、黄褐色土粒子少量混入
4	10YR 3/4 暗褐色	粘性：弱。炭化物微量、黄褐色土ブロック状に少量混入。

層	土色	備考
1	10YR 3/3 黒褐色	粘性：弱。炭化物微量、黄褐色土粒子微量混入
2	10YR 3/3 暗褐色	粘性：弱。炭化物微量、黄褐色土粒子微量混入
3	10YR 4/6 褐色	粘性：弱
4	10YR 3/4 暗褐色	粘性：弱。炭化物微量、黄褐色土ブロック状に少量混入。

第12図　SK001・002・003・004土壙実測図

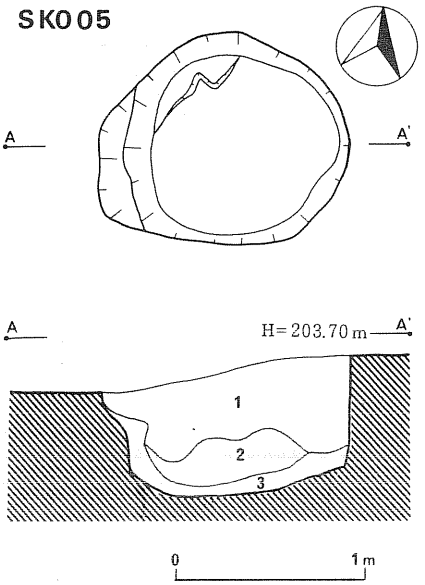
第4表	遺構名	SK001	出土地区	16—F	挿図番号	12	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形—長楕円形、断面形—台形			
	187 cm	40cm	20cm	主軸方位	NE ⟷ SW			
出遺土物								
備考								

第5表	遺構名	SK002	出土地区	18—C、19—C	挿図番号	12	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形—小判形、断面形—台形			
	180 cm	112 cm	13cm	主軸方位	N ⟷ S			
出遺土物								
備考								

第6表	遺構名	SK003	出土地区	19—C	挿図番号	12	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形—円形、断面形—台形			
	141 cm	140 cm	24cm	主軸方位	⟷			
出遺土物								
備考								

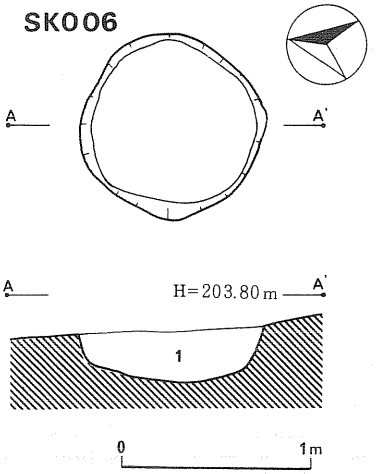
第7表	遺構名	SK004	出土地区	19—C	挿図番号	12	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形—円形、断面形—台形			
	131 cm	110 cm	15cm	主軸方位	⟷			
出遺土物								
備考								

SK005



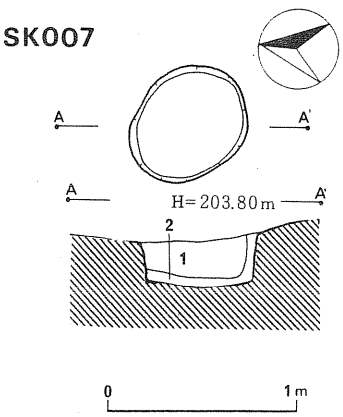
層	土色	備考
1	10YR 2/2 黒褐色	粘性：弱。炭化物微量、黄褐色土粒子微量混入
2	10YR 4/4 褐　色	粘性：弱。黄褐色土粒子及ブロック少量混入
3	10YR 3/2 黒褐色	粘性：弱。黄褐色土粒子微量混入

SK006



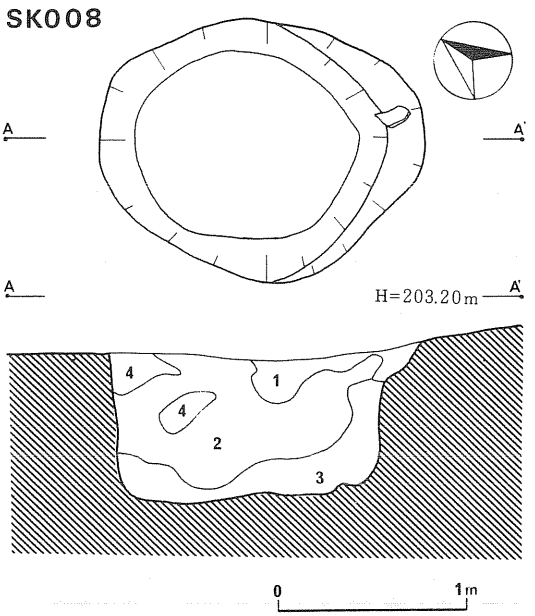
層	土色	備考
1	10YR 2/2 黒褐色	炭化物微量黄褐色土粒子少量混入

SK007



層	土色	備考
1	10YR 3/1 黒　色	炭化物微量、黄褐色土粒子微量混入
2	10YR 5/6 黄褐色	

SK008



層	土色	備考
1	10YR 1.7/1 黒　色	炭化物微量、黄褐色土粒子微量混入
2	10YR 2/2 黒褐色	炭化物微量、黄褐色土粒子微量混入
3	10YR 2/3 黒褐色	粘性：弱、炭化物微量、黄褐色土粒子微量混入
4	10YR 2/3 黒褐色	粘性：弱、炭化物微量、黄褐色土粒子微量混入

第13図　SK 005 ・ 006 ・ 007 ・ 008 土壙実測図

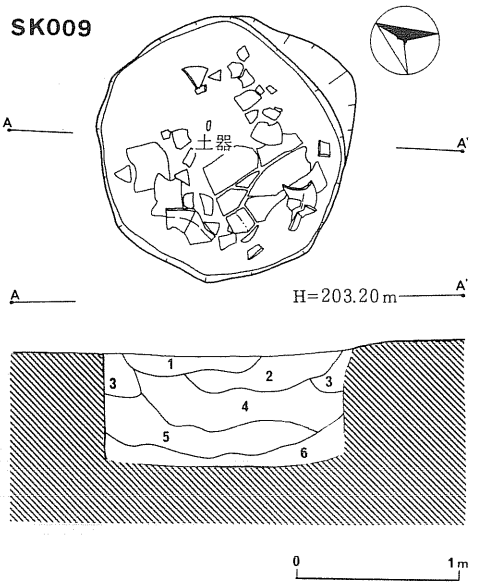
第8表	遺構名	SK005	出土地区	5－C、5－D	挿図番号	13	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形―楕円形、断面形―箱形			
	132cm	111cm	68cm	主軸方位	←→			
出遺土物								
備考								

第9表	遺構名	SK006	出土地区	5－C	挿図番号	13	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形―円形、断面形―鍋底形			
	98cm	96cm	28cm	主軸方位	←→			
出遺土物								
備考								

第10表	遺構名	SK007	出土地区	6－C	挿図番号	13	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形―円形、断面形―箱形			
	61cm	60cm	25cm	主軸方位	←→			
出遺土物								
備考								

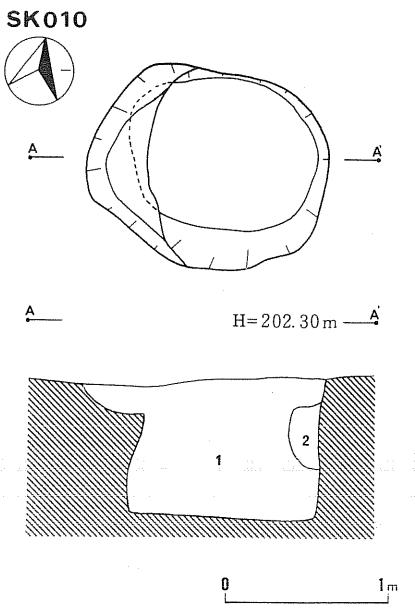
第11表	遺構名	SK008	出土地区	5－E	挿図番号	13	図版番号	13
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形―楕円形、断面形―台形			
	78cm	67cm	40cm	主軸方位	←→			
出遺土物								
備考								

SK009



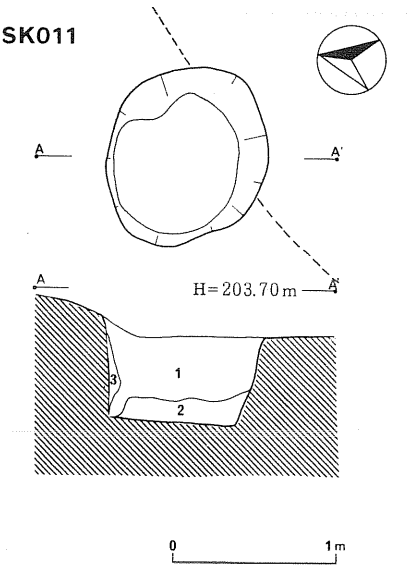
層	土色	備考
1	10YR 1.7/1 黒色	炭化物微量　黄褐色土粒子微量混入
2	10YR 3/2 黒褐色	炭化物微量　黄褐色土粒子微量混入
3	10YR 3/3 黒褐色	粘性：弱 炭化物微量、黄褐色土粒子微量混入
4	10YR 3/3 黒褐色	粘性：弱 炭化物微量、黄褐色土粒子微量混入
5	10YR 3/4 暗褐色	
6	10YR 5/6 黄褐色	

SK010



層	土色	備考
1	10YR 3/4 暗褐色	粘性：弱　褐色土がブロック状に少量混入
2	10YR 5/6 黄褐色	粘性：弱

SK011



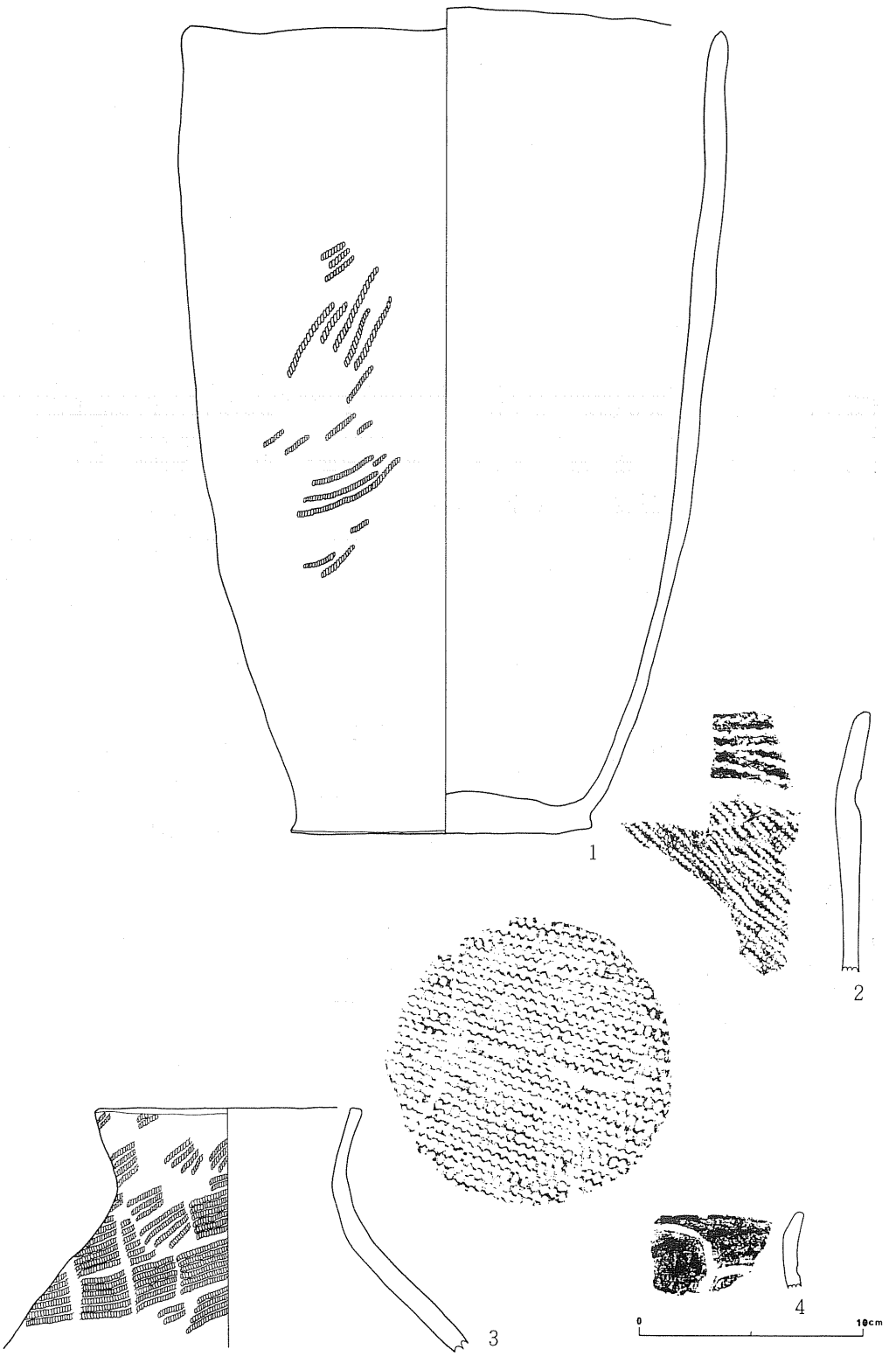
層	土色	備考
1	10YR 3/2 黒褐色	粘性：弱 炭化物微量、黄橙色の軽石及粒子微量混入
2	10YR 3/3 暗褐色	黄褐色土ブロック状に少量混入
3	10YR 5/6 黄褐色	

第14図　S K 009 ・ 010 ・ 011 土壙実測図

第12表	遺構名	ＳＫ009	出土地区	5－E	挿図番号	14	図版番号	13
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形―円形、断面形―箱形			
	81cm	78cm	34cm	主軸方位	←→			
出遺土物								
備考								

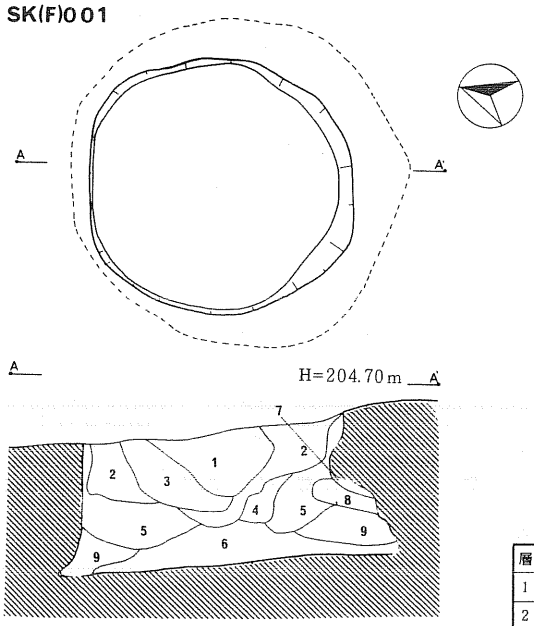
第13表	遺構名	ＳＫ010	出土地区	5－N	挿図番号	14	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形―楕円形、断面形―箱形			
	148 cm	123 cm	84cm	主軸方位	←→			
出遺土物	覆土中より縄文土器（後期）が出土した。							
備考								

第14表	遺構名	ＳＫ011	出土地区	5－B	挿図番号	14	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形―楕円形、断面形―台形			
	116cm	97cm	54cm	主軸方位	ＮＥ←→ＳＷ			
出遺土物								
備考	ＳＩ023竪穴住居跡北西壁部分を切って構築している。							



第15図　ＳＫ001・010土壙出土土器

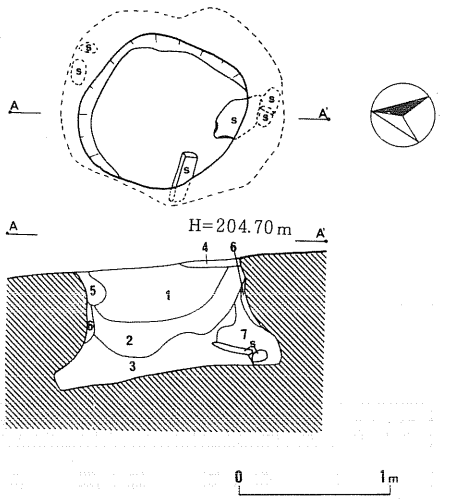
SK(F)001



0 1m

層	土　色	備　考
1	10YR 1/1 黒色	褐色土粒子微量、炭化物微量混入
2	10YR 3/2 黒褐色	褐色土粒子、灰黄褐色土粒子微量、炭化物少量混入
3	10YR 2/2 黒褐色	褐色土粒子微量、炭化物微量混入
4	10YR 3/4 暗褐色	褐色土粒子微量、炭化物微量混入
5	10YR 4/6 褐色	粘性：弱　暗褐色土（第4層）微量、炭化物微量混入
6	10YR 3/3 暗褐色	粘性：弱　褐色土粒子及黄褐色土粒子微量、炭化物微量混入
7	10YR 5/4 にぶい黄褐色砂礫	粘性：弱
8	10YR 5/3 にぶい黄褐色	にぶい黄褐色砂礫土（第7層）微量、炭化物微量混入
9	10YR 5/6 黄褐色砂質	暗褐色土粒子（第6層）微量混入

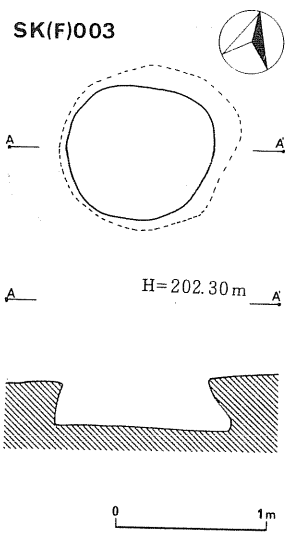
SK(F)002



0 1m

層	土　色	備　考
1	10YR 3/2 黒褐色	粘性：弱　褐色土粒子微量、炭化物微量混入
2	10YR 2/3 黒褐色	粘性：中強　褐色土粒子微量、炭化物微量混入
3	10YR 3/1 黒褐色	粘性：中強　褐色土粒子及黄褐色土粒子少量混入
4	10YR 3/2 黒褐色	粘性：弱　黄褐色土粒子微量混入
5	10YR 3/4 暗褐色	粘性：弱　黄　色土粒子微量、炭化物微量混入
6	10YR 5/6 黄褐色	粘性：弱　明黄褐色砂質土粒子微量混入
7	10YR 5/6 黄褐色	暗褐色土粒子少量混入

SK(F)003



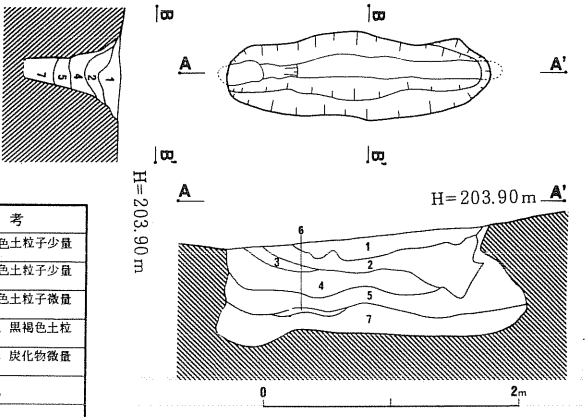
第16図　SK（F）001・002・003 フラスコ状ピット実測図

第15表	遺構名	SK(F)001	出土地区	5－A	挿図番号	16	図版番号	14
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形－円形、断面形－フラスコ状			
	185 cm	167 cm	88cm	主軸方位	ＮＥ ⟷ ＳＷ			
出遺土物								
備考								

第16表	遺構名	SK(F)002	出土地区	6－A	挿図番号	16	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形－不整円形、断面形－フラスコ状			
	113 cm	100 cm	70cm	主軸方位	Ｎ ⟷ Ｓ			
出遺土物								
備考								

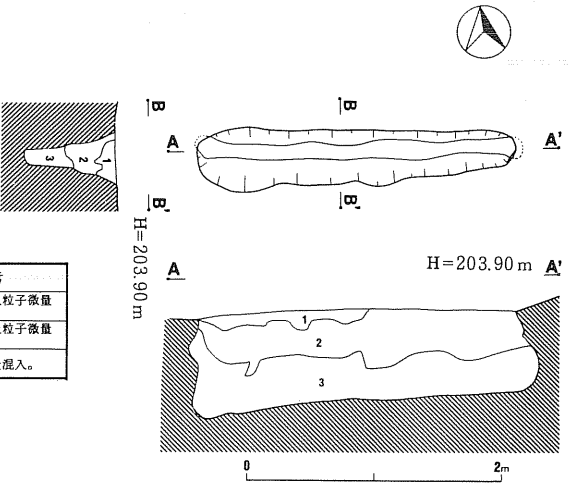
第17表	遺構名	SK(F)003	出土地区	4－N	挿図番号	16	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形－円形、断面形－フラスコ状			
	100 cm	89cm	28cm	主軸方位	⟷			
出遺土物								
備考	ＳＩ 025竪穴住居跡床に存在するもので、本遺構が古い。							

SK(T)001



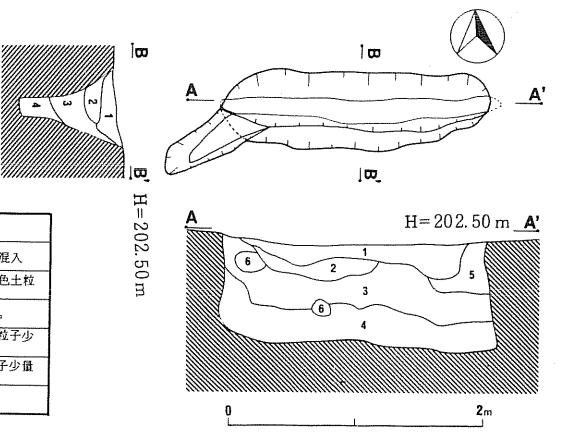
層	土　　色	備　　考
1	10YR 2/2 黒褐色	粘性：強。炭化物微量混入、黄褐色土粒子少量混入。
2	10YR 2/1 黒　色	粘性：強。炭化物微量混入、黄褐色土粒子少量混入。
3	10YR 3/1 黒褐色	粘性：強。炭化物微量混入、黄褐色土粒子微量混入。
4	10YR 2/3 黒褐色	粘性：強。黄褐色土粒子少量混入、黒褐色土粒子微量混入。
5	10YR 3/3 暗褐色	粘性：強。黄褐色土粒子多量混入、炭化物微量混入。
6	10YR 1.7/1 黒　色	粘性：強。黄褐色土粒子微量混入。
7	10YR 4/6 褐　色	粘性：強。炭化物微量混入。

SK(T)002



層	土　　色	備　　考
1	10YR 1.7/1 黒　色	粘性：強。炭化物微量混入、黄褐色土粒子微量混入。
2	10YR 3/2 黒褐色	粘性：弱。炭化物微量混入、黄褐色土粒子微量混入。
3	10YR 4/6 褐　色	粘性：強。第2層の黒褐色土粒子少量混入。

SK(T)003



層	土　　色	備　　考
1	10YR 3/1 黒　色	粘性：弱。褐色土粒子（10YR 4/6）少量混入
2	10YR 3/2 黒褐色	粘性：黒色土粒子（第1層）少量、黄褐色土粒子微量混入。
3	10YR 3/3 暗褐色	褐色土粒子少量、黄褐色土粒子少量混入。
4	10YR 4/6 褐　色	暗褐色土粒子（第3層）少量、黄褐色土粒子少量混入。
5	10YR 3/4 暗褐色	黒色土粒子（第1層）微量、黄褐色土粒子少量混入。
6	10YR 1.7/1 黒　色	粘性：弱。

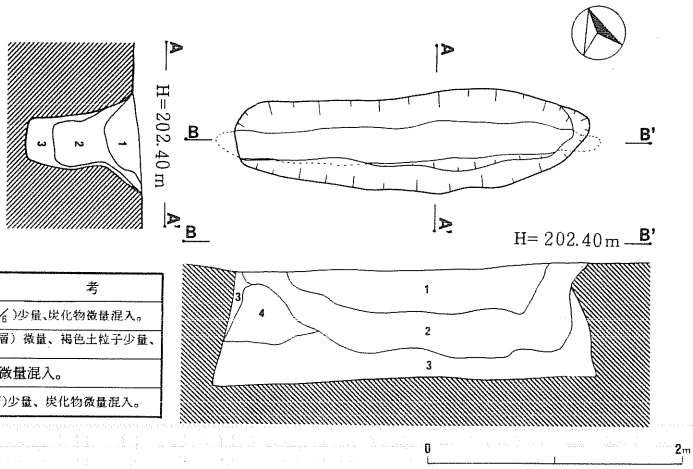
第17図　SK（T）001・002・003 溝状土壙実測図

第18表	遺構名	SK(T)001	出土地区	10—E	挿図番号	17	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形—長楕円形、断面形—「Y」字形			
	205cm	70cm	77cm	主軸方位	E ⟷ W			
出遺土物								
備考	北側2.4mの所にSK(T)002が平行して存在する。							

第19表	遺構名	SK(T)002	出土地区	9—E	挿図番号	17	図版番号	16
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形—長小判形、断面形—「V」字形			
	248cm	44cm	80cm	主軸方位	E ⟷ W			
出遺土物								
備考	南側2.4mの所にSK(T)001が平行して存在する							

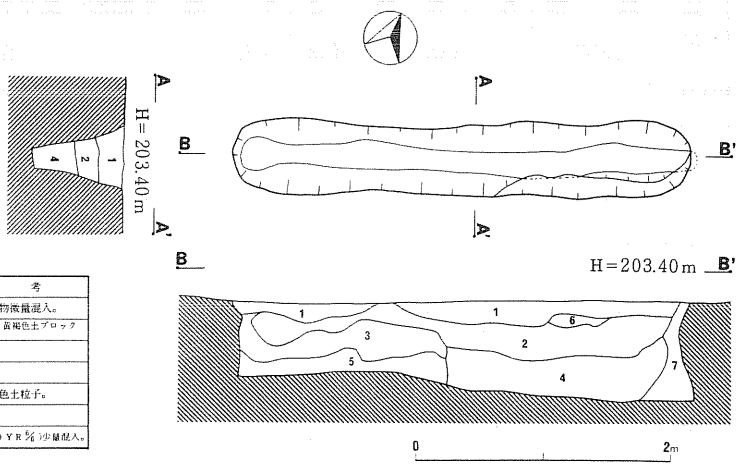
第20表	遺構名	SK(T)003	出土地区	3—H、3—I	挿図番号	17	図版番号	16
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形—長楕円形、断面形—「Y」字形			
	210cm	60cm	85cm	主軸方位	NW ⟷ SE			
出遺土物								
備考	1.8m北東側にSK(T)004が平行して存在する。							

SK(T)004



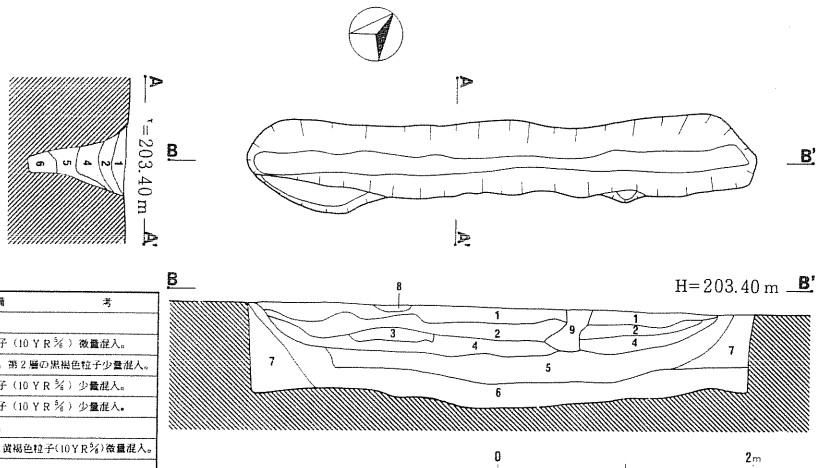
層	土　色	備　考
1	10YR 3/1 黒色	褐色土粒子(10YR 5/6)少量、炭化物微量混入。
2	10YR 3/3 暗褐色	黒褐色土粒子（第1層）微量、褐色土粒子少量、炭化物微量混入。
3	10YR 5/6 黄褐色	粘性：弱。炭化物微量混入。
4	10YR 4/6 褐色	暗褐色土粒子(第2層)少量、炭化物微量混入。

SK(T)005



層	土　色	備　考
1	10YR 2/1 黒色	黄褐色土粒子少量。炭化物微量混入。
2	10YR 2/2 黒褐色	黄褐色土粒子（10YR 5/6）黄褐色土ブロック（10YR 5/8）少量混入。
3	10YR 3/3 暗褐色	黄褐色土粒子少量混入。
4	10YR 3/3 暗褐色	黄褐色土粒子少量混入。
5	10YR 5/8 黄褐色	粘性：強。第3層の暗褐色土粒子。
6	10YR 3/2 黒褐色	黄褐色土粒子少量混入。
7	10YR 3/1 黒褐色	粘性：強。明黄褐色土粒子(10YR 6/6)少量混入。

SK(T)006



層	土　色	備　考
1	10YR 2/2 黒褐色	
2	10YR 3/1 黒褐色	黄褐色粒子（10YR 5/6）微量混入。
3	10YR 5/6 黄褐色	粘性：強。第2層の黒褐色粒子少量混入。
4	10YR 3/2 黒褐色	黄褐色粒子（10YR 5/6）少量混入。
5	10YR 3/3 暗褐色	黄褐色粒子（10YR 5/6）少量混入。
6	10YR 5/6 黄褐色	粘性：強。
7	10YR 3/4 暗褐色	粘性：弱。黄褐色粒子(10YR 5/6)微量混入。
8	10YR 6/6 明黄褐色(ブロック)	
9	10YR 5/4 褐色（ブロック）	

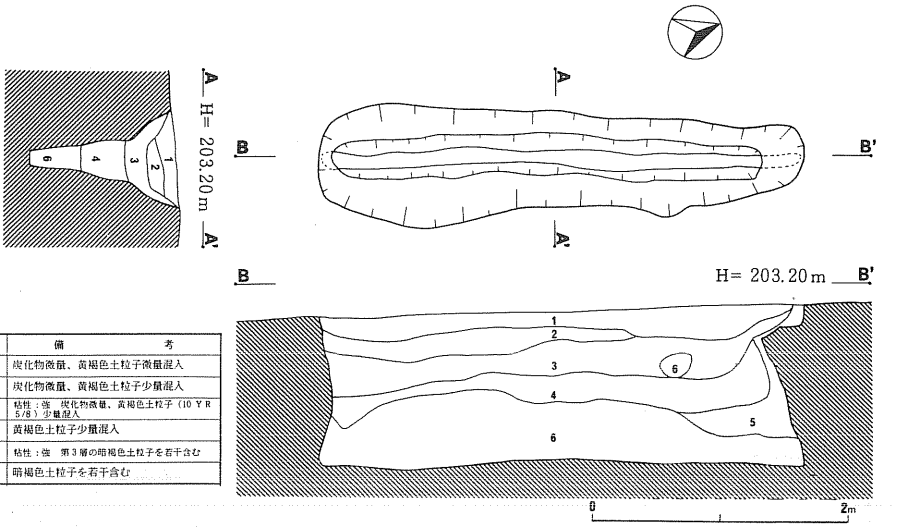
第18図　ＳＫ（Ｔ）004・005・006溝状土壙実測図

第21表	遺構名	SK(T)004	出土地区	3—H	挿図番号	18	図版番号	16
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形—長楕円形、断面形—「Y」字形			
	275cm	77cm	85cm	主軸方位	NE ⟷ SW			
出遺土物								
備考	1.8m南西側にSK(T)003が平行して存在する。							

第22表	遺構名	SK(T)005	出土地区	11—G、11—H 8—G、8—H	挿図番号	18	図版番号	15
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形—長小判形、断面形—「Y」字形			
	357cm	58cm	80cm	主軸方位	SW ⟷ NE			
出遺土物								
備考	2mほど北側にSK(T)006が平行して存在する。							

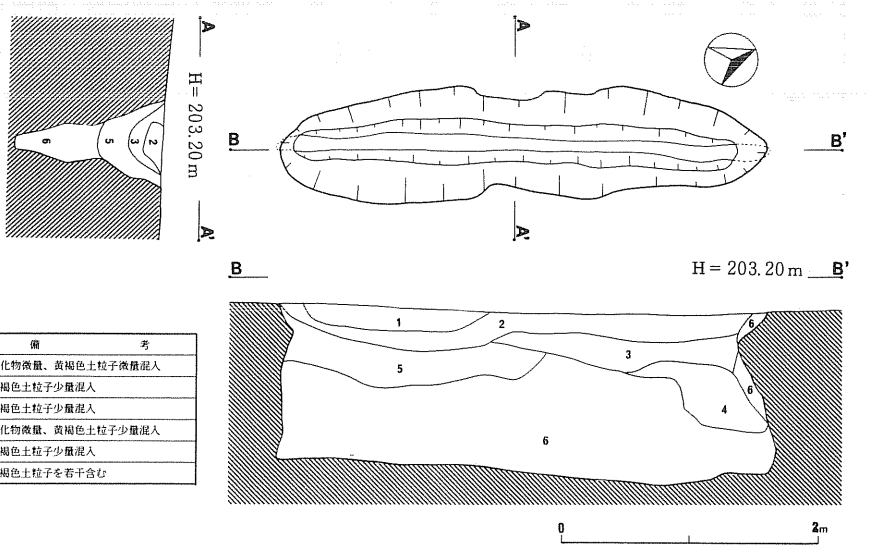
第23表	遺構名	SK(T)006	出土地区	10—H、11—H	挿図番号	18	図版番号	15
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形—長小判形、断面形—「Y」字形			
	398cm	55cm	80cm	主軸方位	SW ⟷ NE			
出遺土物								
備考	2mほど南側にSK(T)005が平行して存在する。							

SK(T)007



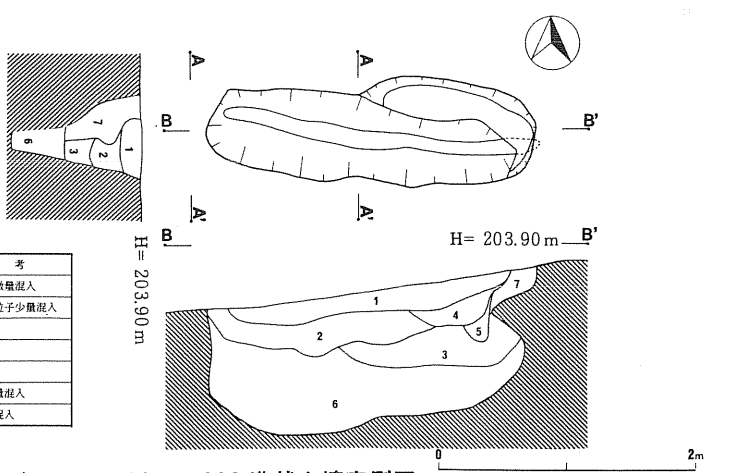
層	土色	備考
1	10YR 2/2 黒褐色	炭化物微量、黄褐色土粒子微量混入
2	10YR 2/1 黒色	炭化物微量、黄褐色土粒子少量混入
3	10YR 3/3 暗褐色	粘性：強　炭化物微量、黄褐色土粒子（10YR 5/8）少量混入
4	10YR 3/4 暗褐色	黄褐色土粒子少量混入
5	10YR 3/6 黄褐色	粘性：強　第3層の暗褐色土粒子を若干含む
6	10YR 3/4 褐色	暗褐色土粒子を若干含む

SK(T)008



層	土色	備考
1	10YR 2/2 黒褐色	炭化物微量、黄褐色土粒子微量混入
2	10YR 1.7/1 黒色	黄褐色土粒子少量混入
3	10YR 2/2 黒褐色	黄褐色土粒子少量混入
4	10YR 3/3 暗褐色	炭化物微量、黄褐色土粒子少量混入
5	10YR 3/4 暗褐色	黄褐色土粒子少量混入
6	10YR 3/4 褐色	暗褐色土粒子を若干含む

SK(T)009



層	土色	備考
1	10YR 1.7/1 黒色	炭化物微量、黄褐色土粒子微量混入
2	10YR 3/3 暗褐色	炭化物微量、第1層黒色土粒子少量混入
3	10YR 3/4 褐色	粘性：弱　粗砂を多く含む
4	10YR 2/2 黒褐色	炭化物微量混入
5	10YR 3/3 暗褐色	炭化物微量混入
6	10YR 5/6 明黄褐色	粘性：強　黒褐色土粒子微量混入
7	10YR 5/4 黄褐色	粘性：弱　黒色土粒子微量混入

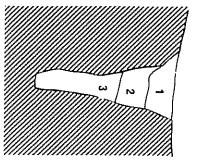
第19図　SK（T）007・008・009溝状土壙実測図

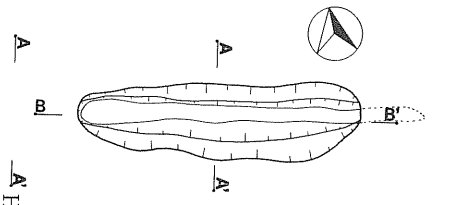
第24表	遺構名	SK(T)007	出土地区	8－G、8－H	挿図番号	19	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形－長小判形、断面形－「Y」字形			
	375 cm	95cm	118 cm	主軸方位	NE ⟷ SW			
出遺土物								
備考								

第25表	遺構名	SK(T)008	出土地区	8－H	挿図番号	19	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形－長楕円形、断面形－「Y」字形			
	376 cm	89cm	130 cm	主軸方位	NE ⟷ SW			
出遺土物								
備考								

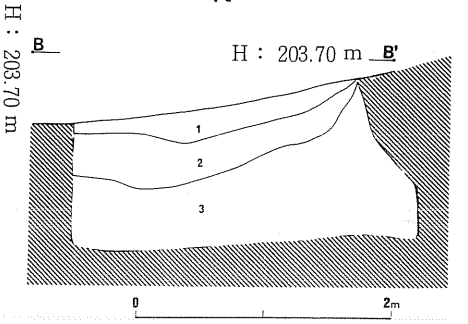
第26表	遺構名	SK(T)009	出土地区	8－E	挿図番号	19	図版番号	16
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形－長楕円形、断面形－「V」字形			
	256 cm	82cm	105 cm	主軸方位	E ⟷ W			
出遺土物								
備考								

SK(T)010

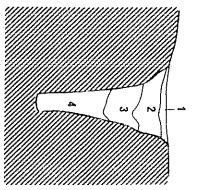


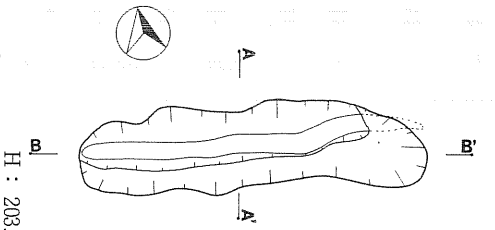


層	土色	備考
1	10YR 1.7/1 黒色	炭化物微量、黄褐色粒子微量混入
2	10YR 2/3 黒褐色	粘性：弱　炭化物微量、黄褐色土粒子少量混入
3	10YR 3/4 暗褐色	粘性：弱　細砂多量混入

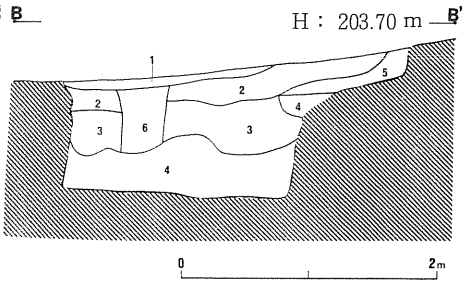


SK(T)011

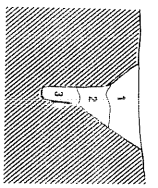


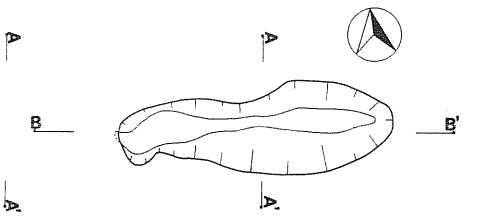


層	土色	備考
1	10YR 3/1 黒色	炭化物微量混入
2	10YR 3/2 黒褐色	炭化物微量、黄褐色土粒子微量混入
3	10YR 3/1 黒褐色	粘性：弱　炭化物微量、黄褐色土粒子少量混入
4	10YR 3/3 黒褐色	炭化物微量、黄褐色土粒子少量混入
5	10YR 5/6 黄褐色	黒褐色土粒子微量混入
6	7.5YR 2.5/1 黒色	炭化物微量、黄褐色土粒子微量混入

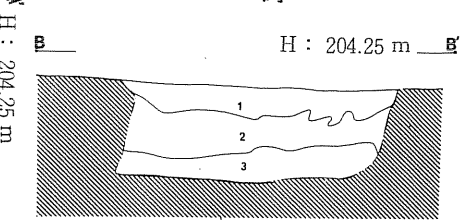


SK(T)012





層	土色	備考
1	10YR 3/2 黒褐色	粘性：弱　炭化物微量、黄褐色土粒子少量混入
2	10YR 3/3 暗褐色	炭化物微量混入　黄褐色土粒子少量混入
3	10YR 5/6 黄褐色	



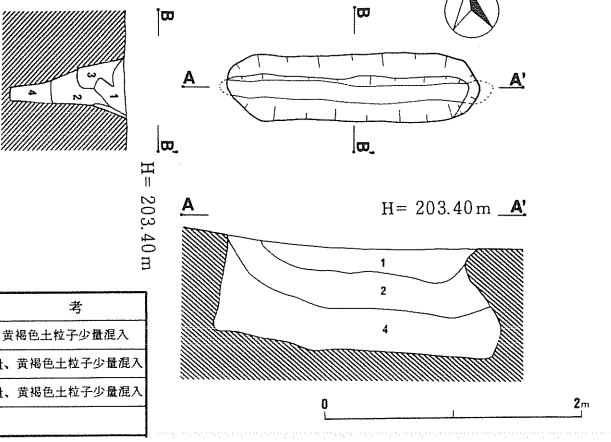
第20図　SK（T）010・011・012 溝状土壙実測図

第27表	遺構名	SK（T）010	出土地区	7－D、7－E	挿図番号	20	図版番号	16
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形－長楕円形、断面形－「Y」字形			
	222 cm	60cm	122 cm	主軸方位	E ⟷ W			
出遺土物								
備考	2.4 mほど北側にSK（T）011が平行して存在する。							

第28表	遺構名	SK（T）011	出土地区	6－D、7－D 6－E、7－E	挿図番号	20	図版番号	16
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形－不整形、断面形－「Y」字形			
	270 cm	65cm	108 cm	主軸方位	E ⟷ W			
出遺土物								
備考	2.4 mほど南側にSK（T）011が平行して存在する。							

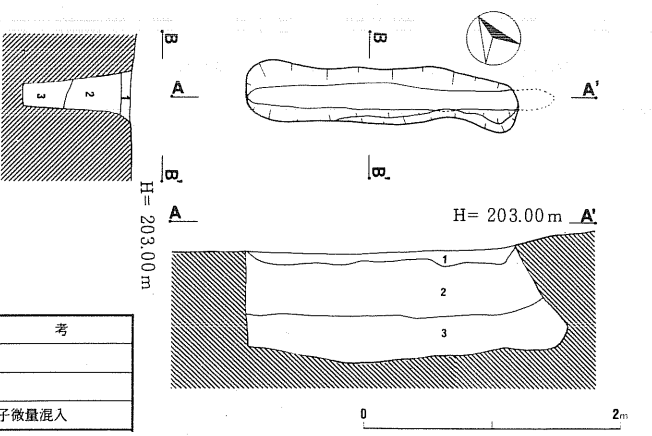
第29表	遺構名	SK（T）012	出土地区	12－H、13－H	挿図番号	20	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形－不整形、断面形－「Y」字形			
	214 cm	73cm	75cm	主軸方位	E ⟷ W			
出遺土物								
備考								

SK(T)013



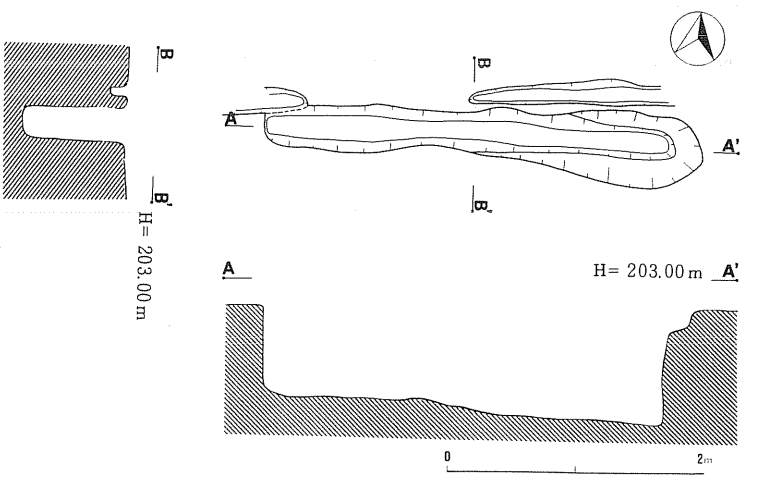
層	土色	備考
1	10YR 1.7/1 黒色	粘性：弱　炭化物微量、黄褐色土粒子少量混入
2	10YR 3/2 黒褐色	第1層の黒色土粒子少量、黄褐色土粒子少量混入
3	10YR 3/4 暗褐色	第1層の黒色土粒子微量、黄褐色土粒子少量混入
4	10YR 5/6 黄褐色	粘性：強

SK(T)014



層	土色	備考
1	10YR 3/2 黒褐色	黄褐色土粒子微量混入
2	10YR 3/1 黒褐色	黄褐色土粒子少量混入
3	10YR 4/6 褐色	粘性：強　黒褐色土粒子微量混入

SK(T)015



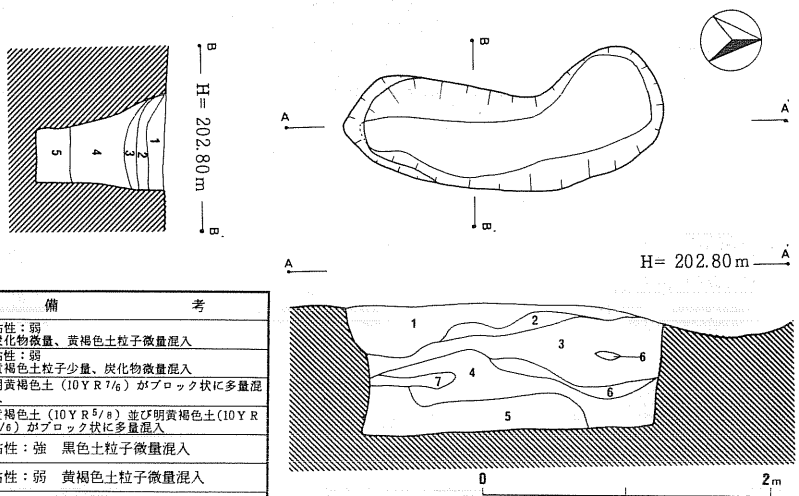
第21図　SK（T）013・014・015溝状土壙実測図

第30表	遺構名	SK(T)013	出土地区	12—J、12—K	挿図番号	21	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形—長小判形、断面形—「Y」字形			
	197cm	54cm	80cm	主軸方位	E ⟷ W			
出遺土物								
備考								

第31表	遺構名	SK(T)014	出土地区	13—I、13—H 14—I、14—H	挿図番号	21	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形—長小判形、断面形—「Y」字形			
	224cm	42cm	86cm	主軸方位	SE ⟷ NE			
出遺土物								
備考								

第32表	遺構名	SK(T)015	出土地区	14—K	挿図番号	21	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形—長小判形、断面形—「U」字形			
	342cm	60cm	94cm	主軸方位	E ⟷ W			
出遺土物								
備考	SI015—Bによって切られる。							

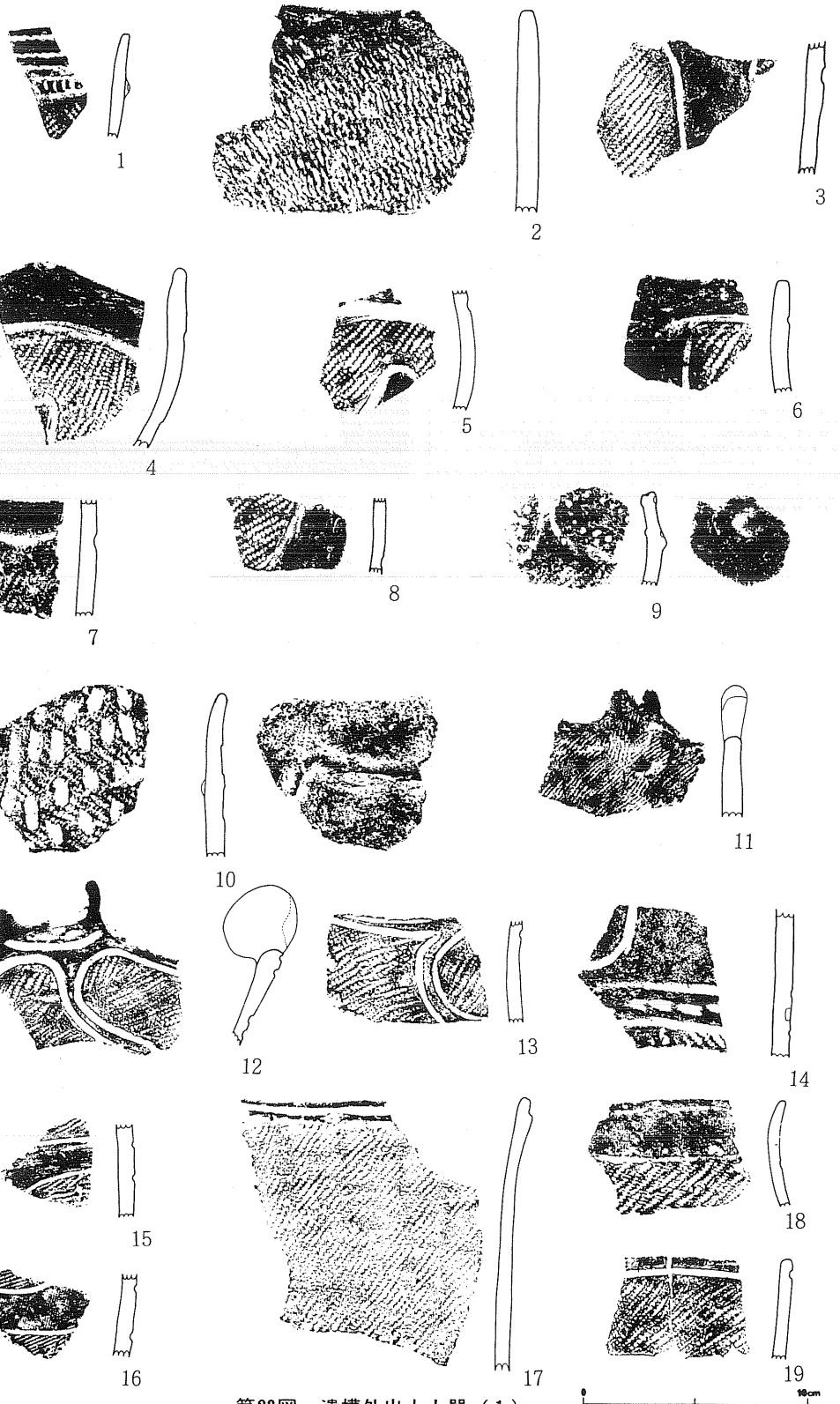
SK(T)016



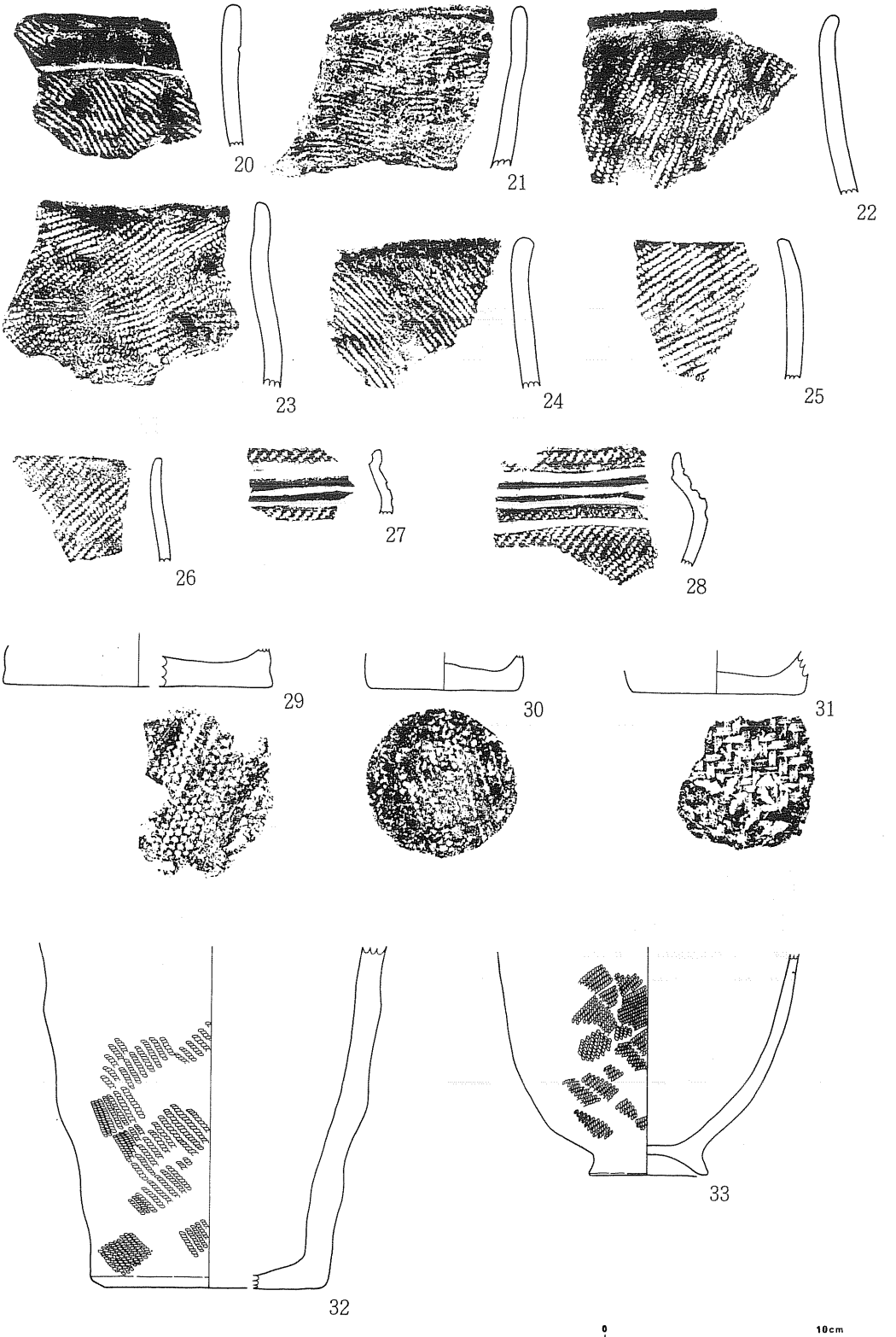
層	土色	備考
1	10YR 1/1 黒色	粘性：弱 炭化物微量、黄褐色土粒子微量混入
2	10YR 2/3 黒褐色	粘性：弱 黄褐色土粒子少量、炭化物微量混入
3	10YR 4/6 褐色	明黄褐色土（10YR 7/6）がブロック状に多量混入
4	10YR 6/6 明黄褐色	黄褐色土（10YR 5/8）並び明黄褐色土(10YR 7/6）がブロック状に多量混入
5	10YR 5/3 にぶい黄橙色	粘性：強　黒色土粒子微量混入
6	10YR 3/1 黒色	粘性：弱　黄褐色土粒子微量混入
7	10YR 5/6 黄褐色	

第22図　SK（T）016 溝状土壙実測図

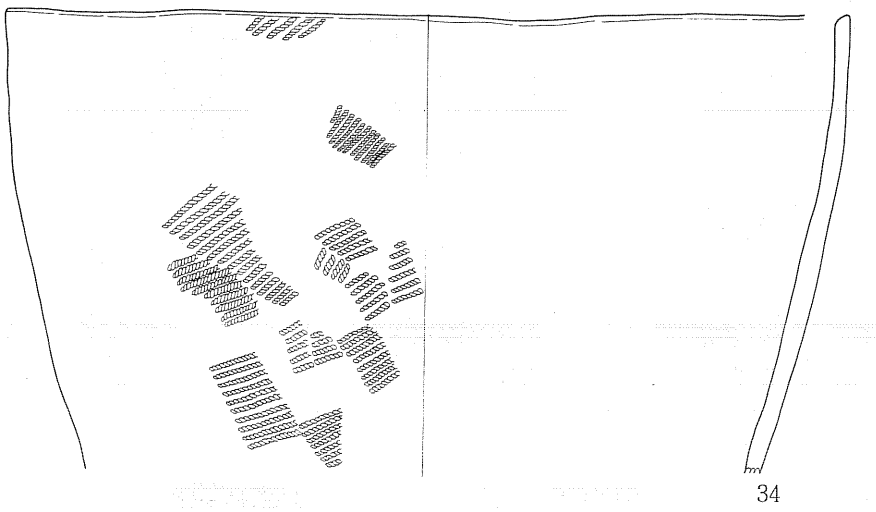
第33表	遺構名	SK(T)016	出土地区	2—K、2—L 3—K、3—L	挿図番号	22	図版番号	
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形—弓形、断面形—台形			
	222 cm	70cm	88 cm	主軸方位	N ⟷ S			
出遺土物								
備考								



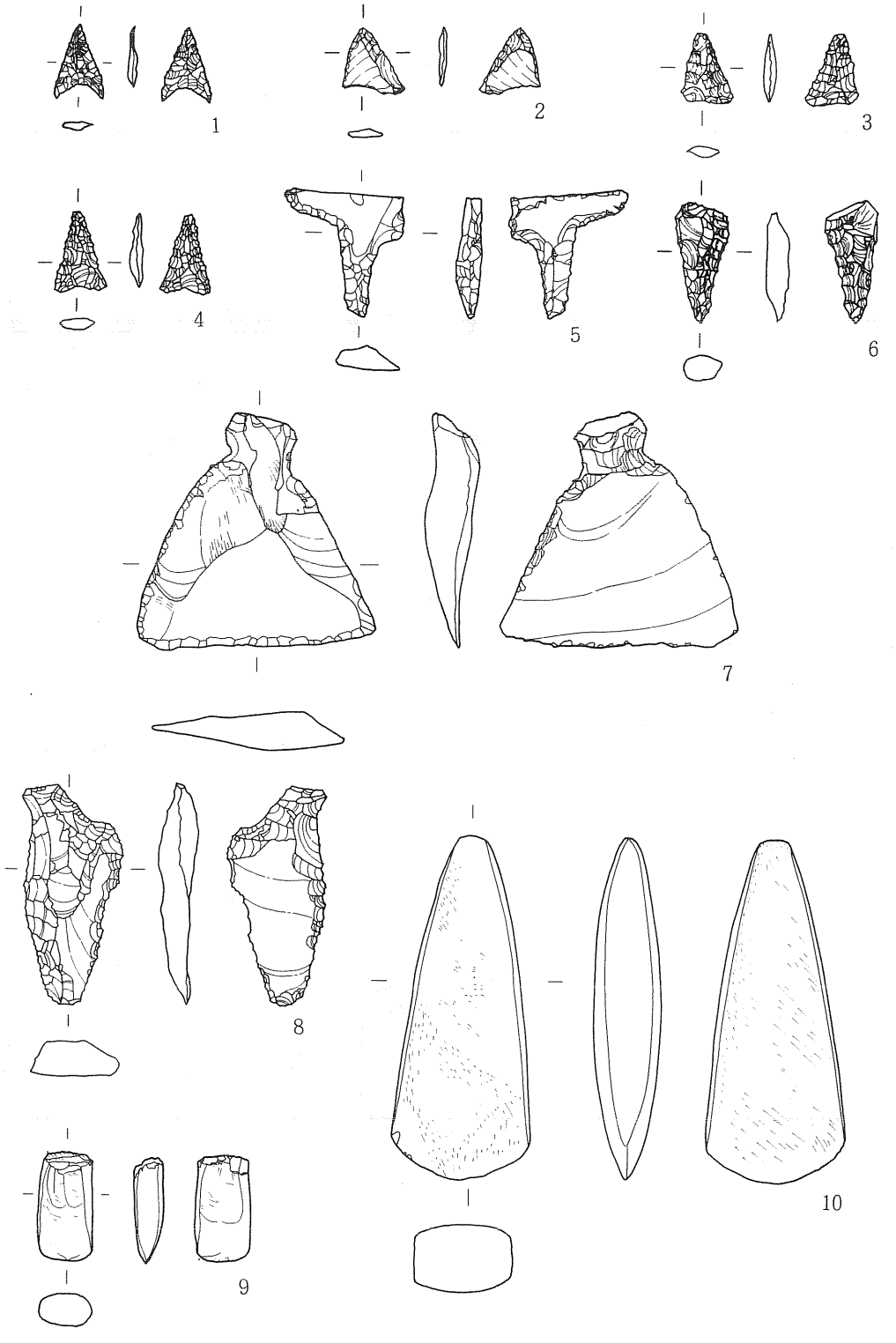
第23図　遺構外出土土器（1）



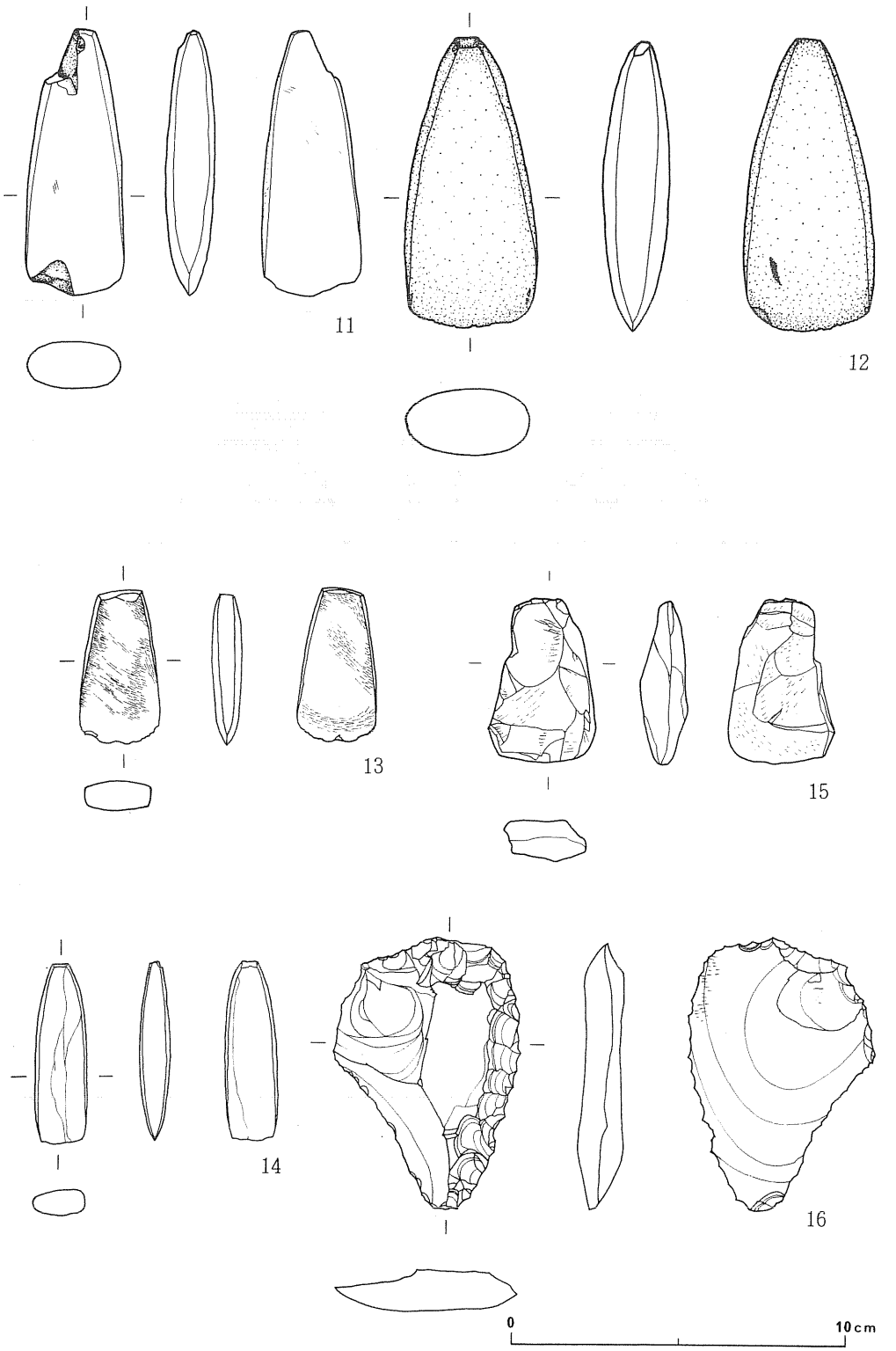
第24図　遺構外出土土器（2）



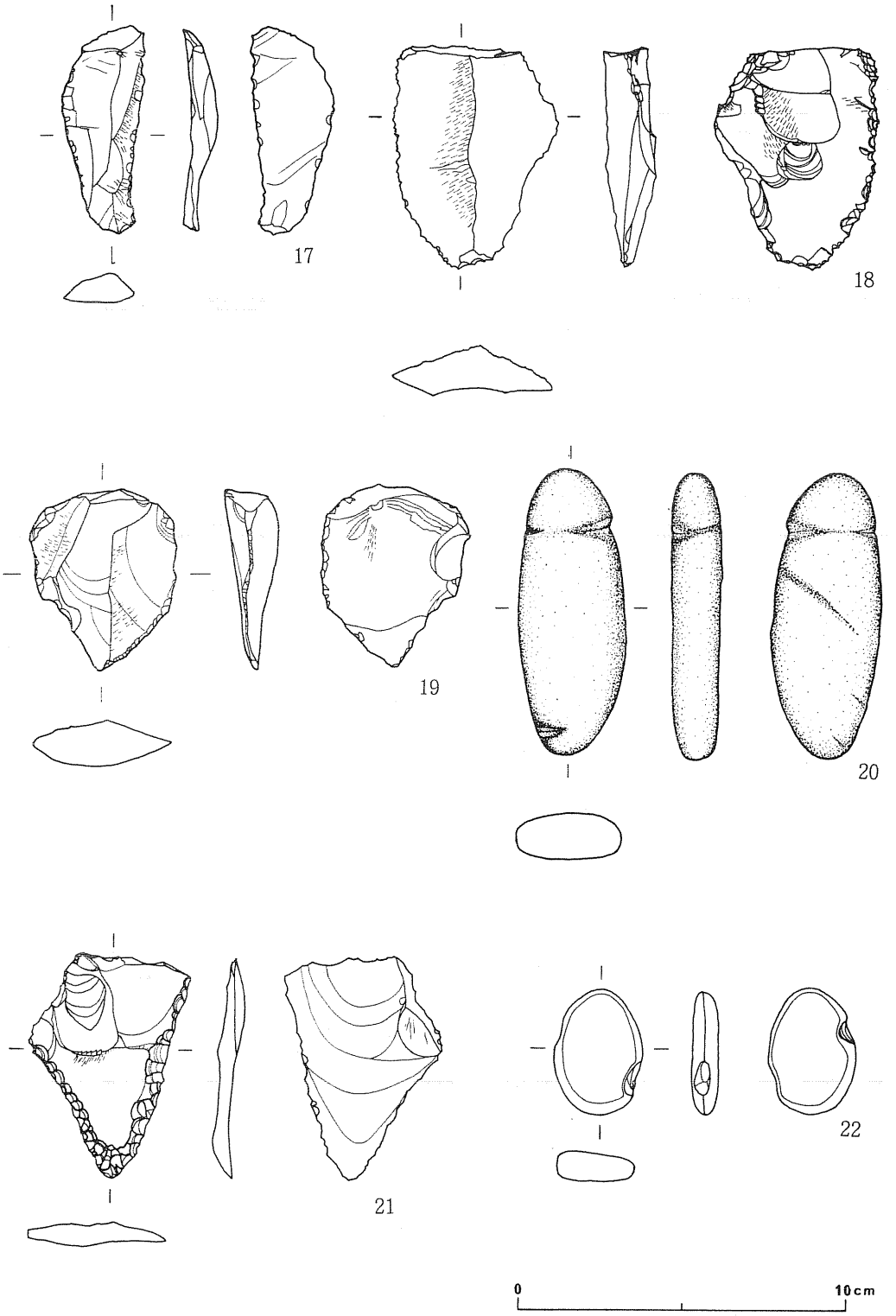
第25図　遺構外出土土器（3）



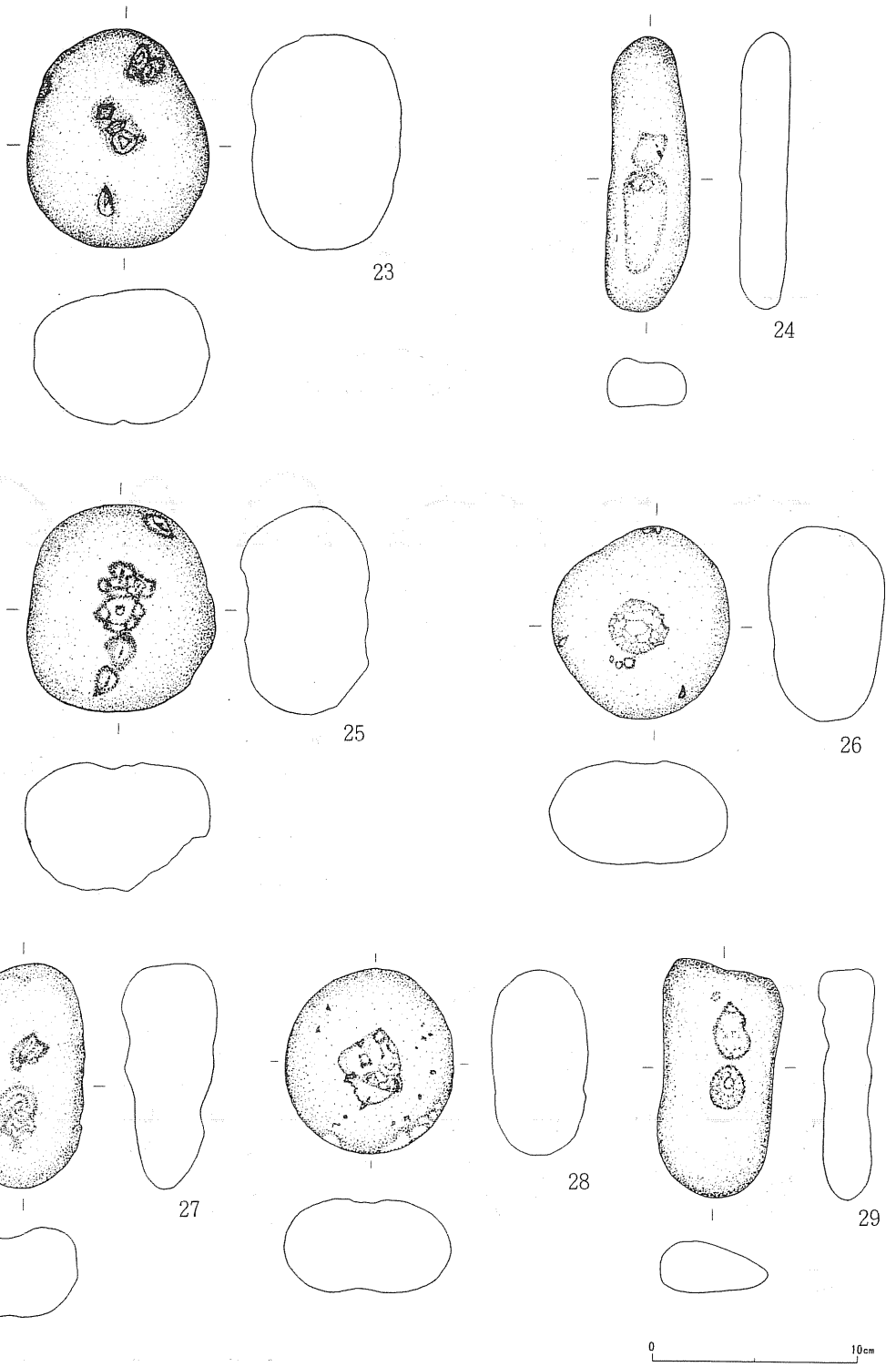
第26図　遺構内・外出土石器（1）



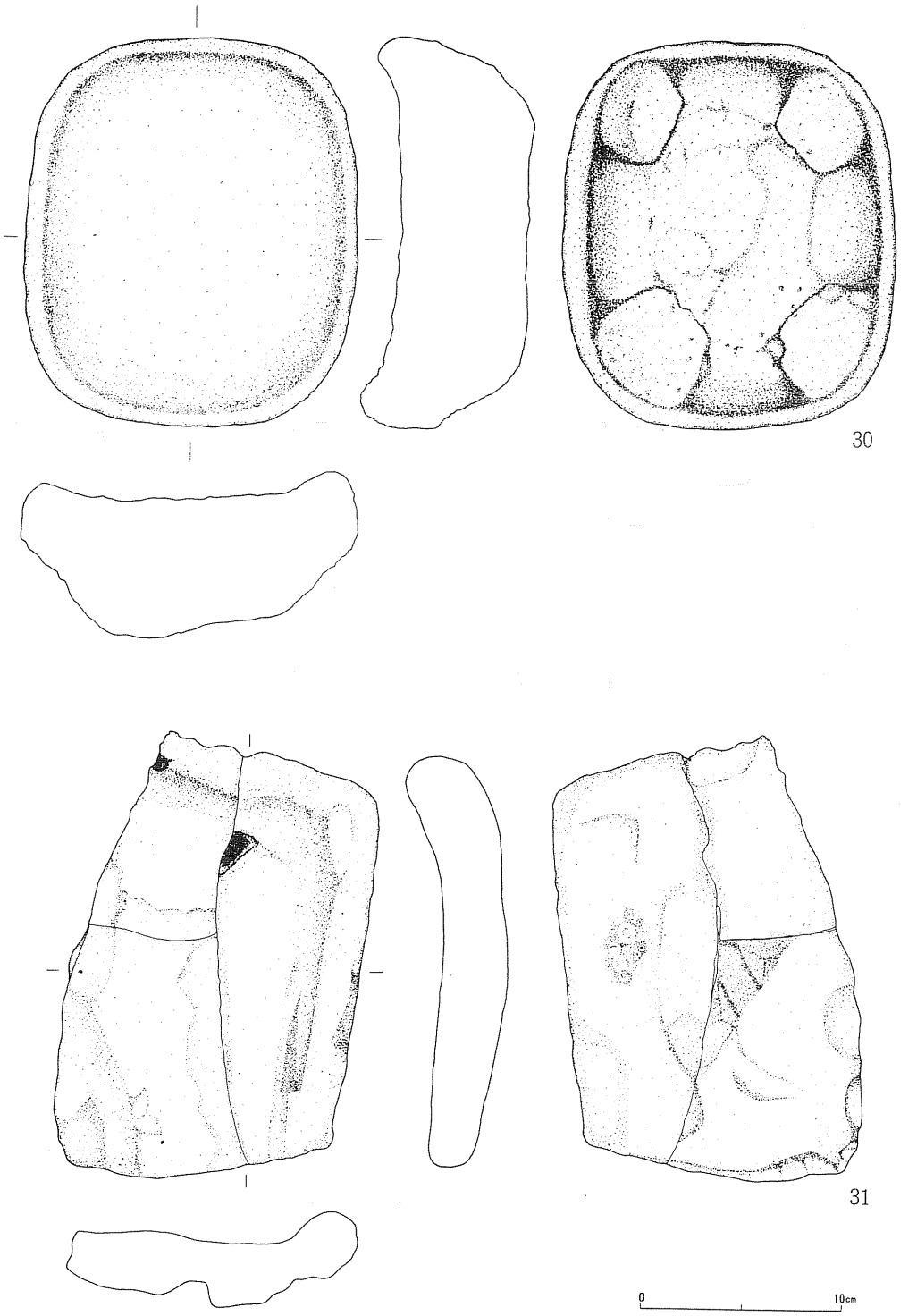
第27図　遺構内・外出土石器（2）



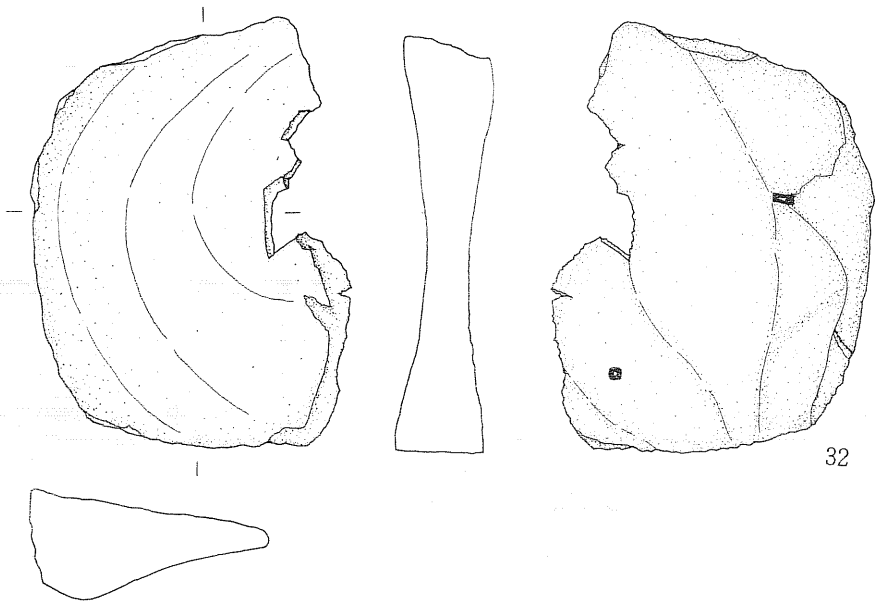
第28図　遺構内・外出土石器（3）



第29図　遺構内・外出土石器（4）



第30図　遺構内・外出土石器（5）



第31図　遺構内・外出土石器（6）

第34表　遺構内・外出土土器観察表 (1)

挿図番号	拓番	出土地点	RP番号	層位	部位	外面 文様	外面 色調	内面 調整	内面 色調	器厚(mm)	胎土	焼成	備考
7－1		SI023			底部	RL縄文	黒褐 10YR3/1	横位	にぶい黄橙 10YR7/4	6	密	良好	
2	240 241	SI023			胴部	LR縄文縦位回転	黒褐 7.5YR3/1	横位	暗赤褐 2.5YR3/2	8	石英・長石 密	良好	外面スス付着
3		SI025			底部	RL縄文縦位回転	灰黄褐 10YR5/2		にぶい黄橙 10YR7/3	10	密	良好	
4	244	SI025	一括		胴部	LR縄文縦位回転→沈線→磨消	にぶい黄褐 10YR5/3	斜位	灰黄褐 10YR5/2	8	石英・長石 密	良好	
5	243	SI025	13		胴部	LR縄文縦位回転→沈線	灰黄褐 10YR5/2	横位	灰褐 7.5YR5/2	8	石英・長石 密	良好	
6	242	SI025	14		胴部	LR縄文縦位回転→沈線→磨消	灰褐 7.5YR5/2	縦位	にぶい褐 7.5YR5/3	7	石英・長石 密	良好	
8－7		SI025			口縁部	LR縄文縦位回転→沈線	明黄褐 10YR5/8	横位	橙 7.5YR7/6	10	密	やや良	
8		SI025			口縁部	LR縄文縦位回転→沈線	灰黄褐 10YR5/2	横位	にぶい黄 10YR7/4	7	密	良好	
15－1		SK009			完形	LR縄文縦位回転　底部一網代痕	明褐 7.5YR5/6	横位	明褐 7.5YR5/6	10	密	良好	
2	221	SK001			口縁部	RL縄文横位回転	灰褐 5YR5/2	横位→縦位	にぶい赤褐 5YR5/3	10	石英・長石・雲母 密	良好	
3		SK010			口縁部	LR縄文	橙 5YR6/6	横位	橙 5YR6/6	9	密	良好	
4	209	SK010			口縁部	LR縄文横位回転→沈線→磨消	赤 10R5/8	横位	赤 10R5/0	7	石英・長石・雲母 密	良好	
23－1	213	5－P			口縁部	LR縄文横位縦位回転→隆帯（縄文圧痕）→LR縄文圧痕	にぶい褐 7.5YR5/4	斜位	にぶい橙 7.5YR5/4	7	石英・長石 密	良好	
2	211				口縁部	L撚糸縦位回転	灰褐 5YR5/2	斜位	にぶい赤褐 5YR5/4	10	石英・長石・雲母 密	良好	
3	203	9－I			胴部	RL縄文縦位回転→沈線→磨消	にぶい赤褐 5YR5/3	縦位	にぶい赤褐 5YR5/4	8	石英・長石・雲母 密	不良	
4	217	10－L	一括		口縁部	RL縄文縦位回転→沈線→磨消	にぶい赤褐 5YR5/3	斜位	にぶい赤褐 5YR5/3	7	石英・長石・雲母 密	良好	
5	222	10－L			胴部	LR縄文縦位回転→沈線→磨消	黒褐 7.5YR3/1	横位	褐灰 7.5YR4/1	8	石英・長石・雲母 密	良好	
6	200	13－B			口縁部	RL縄文縦位回転→沈線	明赤褐 5YR5/6	横位	にぶい赤褐 5YR5/4	8	石英・長石・雲母 密	良好	
7	223	10－L	一括		胴部	RL縄文縦位回転→沈線	にぶい褐 7.5YR5/4	縦位	褐灰 7.5YR4/1	8	石英・長石・雲母 密	良好	
23－8	212	10－L	854		胴部	RL縄文縦位回転→沈線	褐灰 7.5YR4/1	斜位	黒褐 7.5YR3/1	6	石英・長石・雲母 密	良好	

第35表　遺構内・外出土土器観察表 (2)

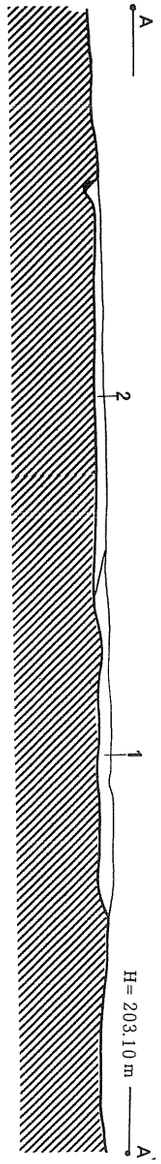
挿図番号	拓番	出土地点	RP番号	層位	部位	外面 文様	外面 色調	内面 調整	内面 色調	器厚 (mm)	胎土	焼成	備考
23－9	226	9－0			口縁部	LR縄文横位回転→隆帯（刺突）	にぶい褐 7.5YR5/3	隆線	にぶい褐 7.5YR5/3	8	石英・長石・雲母 粗	不良	
10	205	9－N			口縁部	LR縄文縦位回転→沈線→刺突	にぶい橙 5YR5/4	隆線→横位	にぶい褐 7.5YR5/3	10	石英・長石 密	良好	
11	204	12－F	528		口縁部	L縄文横位回転，山形突起（刻目あり）	にぶい黄橙 10YR7/3	横位	黒褐 10YR3/1	6	石英・長石 密	良好	
12	293	20－J			口縁部	LR縄文→沈線→磨消	にぶい褐 10YR5/4	横位	灰褐 10YR4/2	9	密	良好	
13	216	20－J			胴部	LR縄文横位回転→沈線	にぶい赤褐 5YR5/3	横位→斜位	褐灰 5YR4/2	6	石英・長石・雲母 密	良好	外面スス付着
23－14	208	13－E	562		胴部	LR縄文縦位回転→沈線→刺突	橙 5YR5/6	縦位	橙 7.5YR5/6	8	石英・長石・雲母	良好	
15	224	14－H			胴部	LR縄文横位回転→沈線→磨消	にぶい褐 7.5YR5/4	横位	明赤褐 2.5YR5/6	7	石英・長石・雲母 密	良好	
16	210	6－G			胴部	LR縄文横位回転→沈線→磨消	明赤褐 2.5YR5/6	横位	暗赤褐 2.5YR3/1	8	石英・長石・雲母 密	良好	
17	228	12－C			口縁部	RL縄文縦位回転→沈線	灰褐 7.5YR5/2	横位→縦位	灰褐 5YR5/2	7	石英・長石 密	良好	外面スス付着
18	235	6－E	701		口縁部	RL縄文縦位回転→沈線	にぶい褐 7.5YR5/4	横位	にぶい褐 7.5YR5/2	7	石英・長石 密	良好	
19	234	20－J			口縁部	LR縄文横位回転→沈線	にぶい褐 5YR5/4	横位	にぶい赤褐 5YR5/3	6	石英・長石 密	良好	
24－20	219	10－N			口縁部	L縄文縦位回転→沈線	黒褐 5YR3/1	横位	灰褐 5YR4/2	7	石英・長石・雲母 密	良好	
21	232	20－J			口縁部	LR縄文斜位回転	黒褐 5YR5/1	横位	灰褐 5YR4/2	9	石英・長石 密	良好	
22	233	10－0			口縁部	RL縄文縦位回転	にぶい赤褐 2.5YR5/4	横位	橙 5YR5/6	9	石英・長石・雲母 密	良好	外面スス付着
23	230	5－E			口縁部	LR縄文横位回転	にぶい褐 7.5YR5/3	横位	にぶい褐 5YR5/4	9	石英・長石 密	良好	外面スス付着
24	229	9－0			口縁部	RL縄文縦位回転	灰黄褐 10YR5/2	横位→斜位	灰褐 7.5YR5/2	9	石英・長石・雲母 密	良好	
25	227				口縁部	LR縄文横位回転	にぶい橙 7.5YR5/4	横位→縦位	にぶい赤褐 5YR5/4	7	石英・長石・ 密	良好	
26	231	SK010			口縁部	LR縄文縦位回転	にぶい橙 7.5YR5/4	横位→縦位	にぶい赤褐 2.5YR5/3	5	石英・長石・雲母 密	良好	内外面スス付着
27	201	15－G			口縁部	LR縄文横位回転→平行沈線	にぶい橙 5YR6/4	沈線→横位	にぶい橙 5YR6/4	5	石英・長石・雲母 密	良好	
28	225	15－G			口縁部	LR縄文横位回転→平行沈線	にぶい橙 7.5YR5/4	沈線→横位	にぶい橙 7.5YR7/4	6	石英・長石・雲母 密	良好	

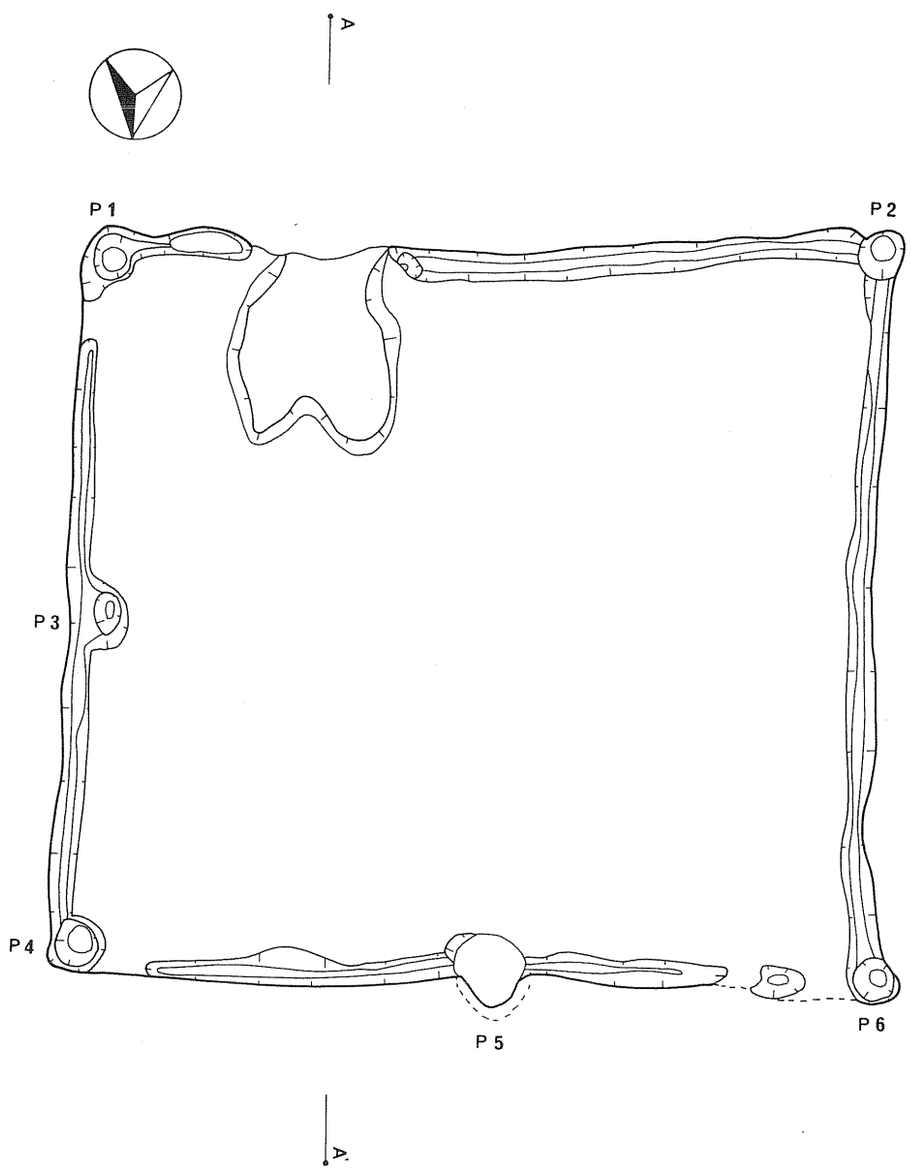
第36表　遺構内・外出土土器観察表 (3)

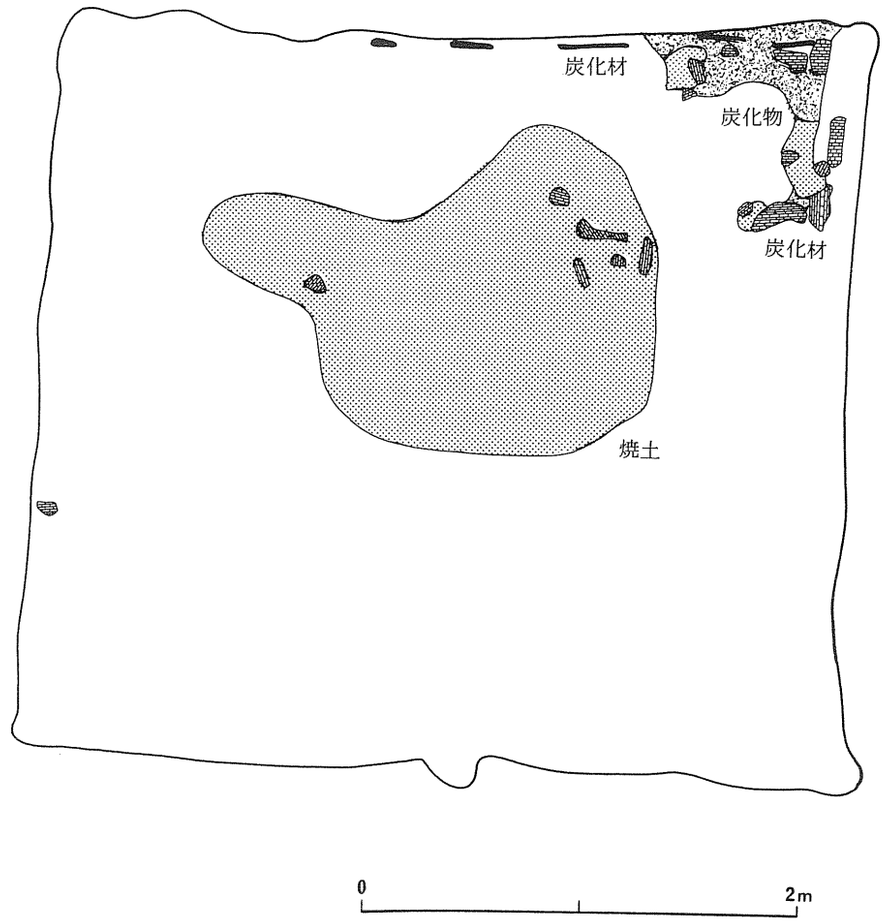
挿図番号	拓番	出土地点	PR番号	層位	部位	外面		内面		器厚(mm)	胎土	焼成	備考
						文様	色調	調整	色調				
24－29	207	4－L			底部	網代痕	にぶい黄褐 10YR 7/3		にぶい橙 7.5YR 7/3	13	石英・長石・雲母 密	良好	
30	206	5－G	一括		底部	網代痕	にぶい赤褐 5YR 5/4		明赤褐 2.5YR 5/6	9	石英・長石 密	良好	
31	215	11－C	917		底部	網代痕	灰褐 5YR 5/2		にぶい赤褐 5YR 5/4	8	石英・長石・雲母 密	良好	
32		3－0			底部	LR縄文縦位回転	にぶい橙 7.5YR 7/4		にぶい黄橙 10YR 6/3	14	石英・長石 密	良好	
33		20－J			底部	LR縄文横位回転	にぶい褐 7.5YR 5/4		黒 7.5YR 2/1	7	石英・長石 密	良好	
34		7－下			口縁部	LR縄文横位回転、RL縄文縦位回転	にぶい黄橙 10YR 7/4	横位	黄橙 10YR 5/8	9	石英・長石 密	良好	
35		9－J			口縁部	LR縄文横位回転	橙 7.5YR 7/6	横位	橙 7.5YR 6/6	12	石英・長石 密	良好	
43－7	251	SI 005			胴部	RL縄文縦位回転→沈線	黒褐 10YR 3/1	横位	にぶい黄褐 10YR 4/3	6	石英・長石 密	良好	
60－8	218	SI 011			胴部	RL縄文横位回転→沈線→刺突	にぶい橙 10YR 6/4	横位	にぶい橙 10YR 6/4	8	石英・長石 密	良好	
9	237	SI 011			胴部	LR結果縄文縦位回転（末端結果）	にぶい橙 7.5YR 6/4	斜位	にぶい橙 7.5YR 6/4	10	石英・長石 密	良好	
66－14	249	SI 014	52		胴部	RL縄文縦位回転→沈線→磨消	にぶい赤褐 5YR 4/3	横位	にぶい褐 7.5YR 6/3	7	石英・長石 密	良好	
78－5	236	SI 019			口縁部	LR縄文横位回転→沈線→磨消	褐灰 7.5YR 5/2	横位	灰褐 7.5YR 5/2	7	石英・長石 密	良好	

第37表　遺構内・外出土石器観察表

図版番号	挿図番号	名称	出土地区	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
40—1	26—1	石鏃	SI006	2.0	1.5	0.3	0.5	頁岩	
2	2	石鏃	SI013	2.3	(1.3)	0.3	0.7	頁岩	
3	3	石鏃	7—D	(2.0)	(1.7)	0.3	0.8	頁岩	
4	4	石鏃	6—C	2.4	1.5	0.3	0.9	頁岩	
5	5	石錐	SI013	3.7	3.5	0.8	5.6	頁岩	
6	6	石錐	6—E	3.6	1.5	0.7	3.5	頁岩	
7	7	石匙	SI019	6.9	7.1	1.5	40.3	頁岩	
8	8	石匙	5—I	6.5	2.8	1.0	18.5	頁岩	
9	9	磨製石斧	SI001	(3.2)	1.6	0.9	(8.9)	凝灰岩	
10	10	磨製石斧	SI005	10.3	4.1	2.0	116.0	凝灰岩	
11	27—11	磨製石斧	SI008	7.0	3.0	1.5	55.1	凝灰岩	
12	12	磨製石斧	6—G	8.7	3.9	2.1	105.0	安山岩	
13	13	磨製石斧	6—C	4.6	2.3	0.8	15.0	凝灰岩	
14	14	磨製石斧	6—G	5.3	1.6	0.9	12.2	凝灰岩	
15	15	石箆	11—F	4.9	3.1	1.2	22.0	泥岩	
16	16	掻器	SI004	6.3	2.4	0.8	10.8	泥岩	
17	28—17	掻器	6—C	6.8	4.2	0.6	18.2	泥岩	
18	18	掻器	6—E	6.6	4.9	1.4	44.1	頁岩	
19	19	掻器	表採	5.7	4.4	0.5	30.4	泥岩	
20	20	掻器	6—L	8.0	5.5	1.3	57.3	泥岩	
41—21	21	岩偶	10—N	8.7	3.2	1.4	37.2	凝灰岩	
22	22	石錘？	5—M	3.8	2.7	0.7	12.5	頁岩	
23	29—23	凹石	SI025	10.7	8.8	6.5	910.0	安山岩	
24	24	凹石	SI022	13.4	4.0	2.3	220.0	安山岩	
25	25	凹石	18—G	10.0	9.1	5.6	740.0	安山岩	
26	26	凹石	17—E	9.2	8.6	4.8	610.0	安山岩	
27	27	凹石	6—E	10.9	6.5	4.3	430.0	安山岩	
28	28	凹石	12—L	8.8	8.1	4.2	430.0	安山岩	
29	29	凹石	17—E	11.2	5.9	2.5	240.0	安山岩	
30	31—32	石皿	SI023	16.8	12.5	4.2	770.0	凝灰岩	
31	30—30	石皿	SI023	19.2	16.3	5.8	2,460.0	安山岩	
32	30—31	石皿	9—D	20.2	14.4	3.2	1,200.0	凝灰岩	

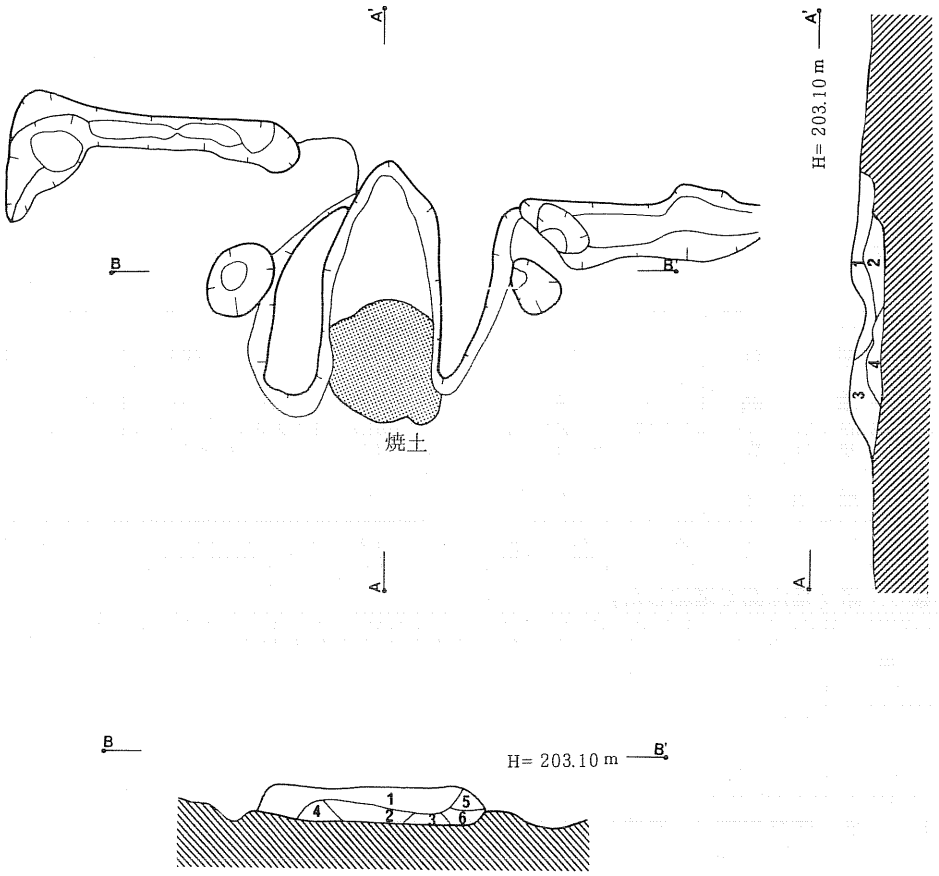






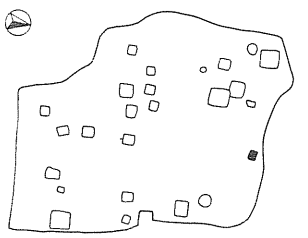
層	土　　色	備　　考
1	10YR 2/1 黒　色	シルト質
2	10YR 2/1 黒　色	シルト質、黄褐色ブロック少量混入。

第32図　ＳＩ001 竪穴住居跡実測図



層	土　　色	備　　考
1	5 Y R 3/6 明赤褐色	硬度：弱。粘性：弱。炭化物、橙色粒子微量混入。
2	2.5 Y R 3/4 赤褐色	硬度：弱。粘性：弱。炭化物微量混入。
3	5 Y R 3/3 暗赤褐色	硬度：弱。粘性：弱。炭化物、赤褐色粒子微量混入。
4	7.5 Y R 5/6 明褐色	粘性：弱。
5	5 Y R 3/4 極暗赤褐色	粘性：弱。炭化物微量混入。
6	5 Y R 5/6 明赤褐色	硬度：弱。粘性：弱。炭化物微量混入。

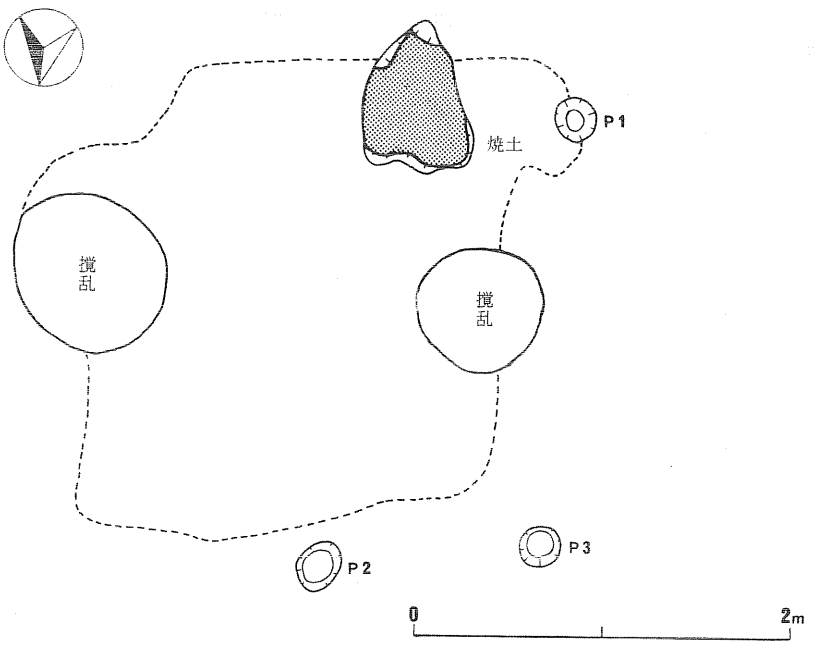
第33図　S I 001 竪穴住居跡カマド実測図

第　38　表		遺構の位置	
遺構名	ＳＩ001		
検出地区	3－F、3－G		
挿図番号	32、33		
図版番号	18		

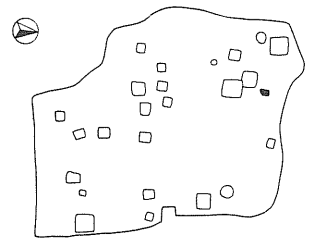
法量	cm	北　壁	東　壁	南　壁	西　壁
	壁　長	387	335	361	345
	壁　高	4	5	—	6
	壁溝幅	7～14	9～13	8～13	8～18
	壁溝深	4	20	—	11

形態	方　形	面　積	12.6 ㎡	主軸方向	N－0°

確　認	地山面で確認した。
壁	南壁を除き、各壁とも4～6㎝で床面より立ち上がる。
床　面	平坦で堅くしまっている。
壁　溝	南壁を除いて壁溝と思われる掘り込みを確認した。 南壁と西壁一部には焼失した際に生じたと思われる炭化物が認められた。
ピット	各コーナーと、北側、東側壁溝中に2ケ所、計6ケ所検出した。 P_1(13)　P_2(20)　P_3(20)　P_4(14)　P_5(54)　P_6(20) P_1～P_4が本住居跡の柱穴であろう。
付　設	
カマド	位置：南壁の東寄り　素材：粘　土 住居跡全体が耕作による削平をうけたため、カマドの残存状態は良くない。 袖は明褐色粘土により作られている。煙道は段をもち、ゆるやかに立ち上がる。
遺物とその出土状態	縄文土器、土師器甕、鉄滓
備　考	耕作のため、殆んど削平された焼失住居跡である。



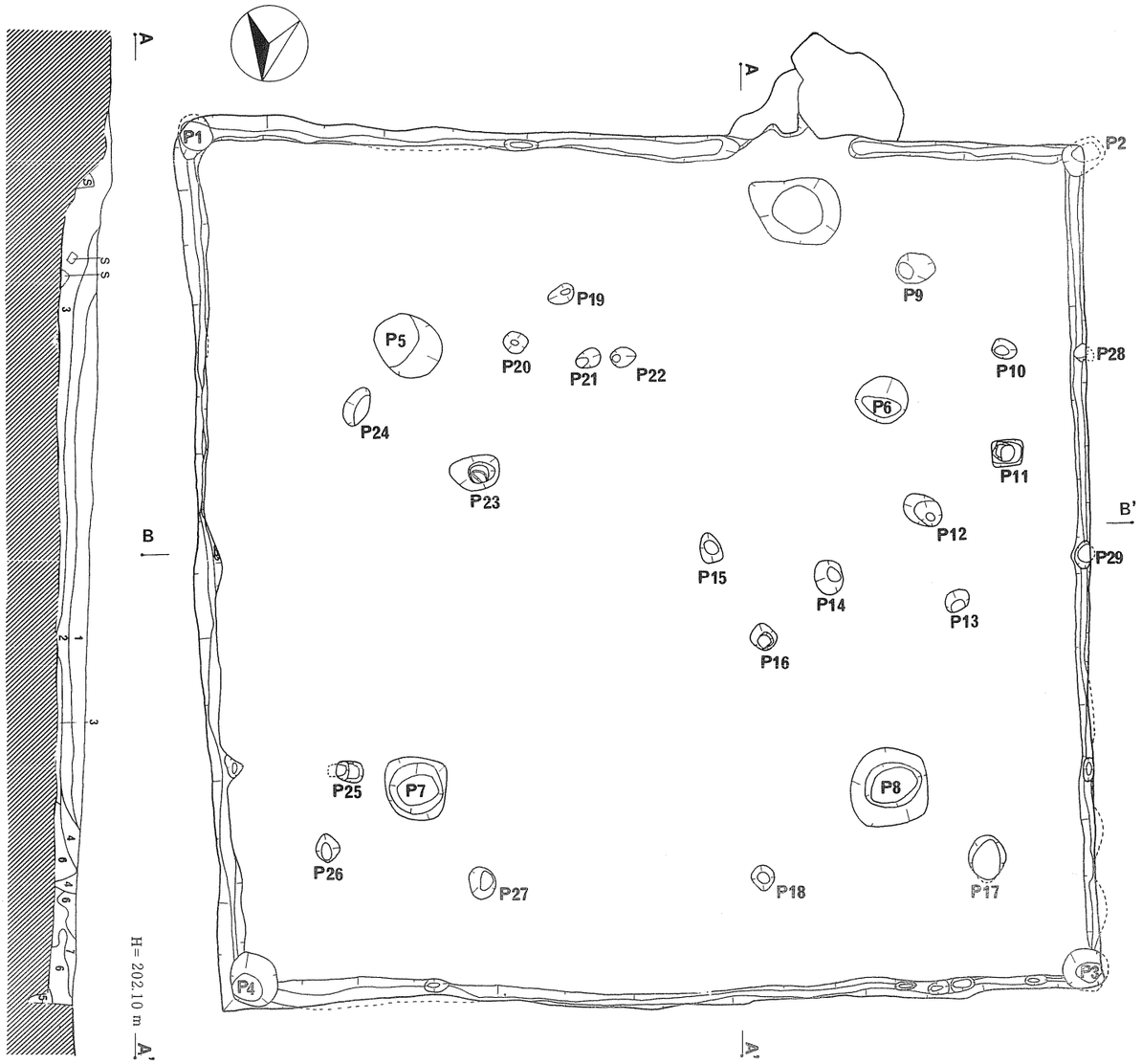
第34図　ＳＩ002 竪穴住居跡実測図

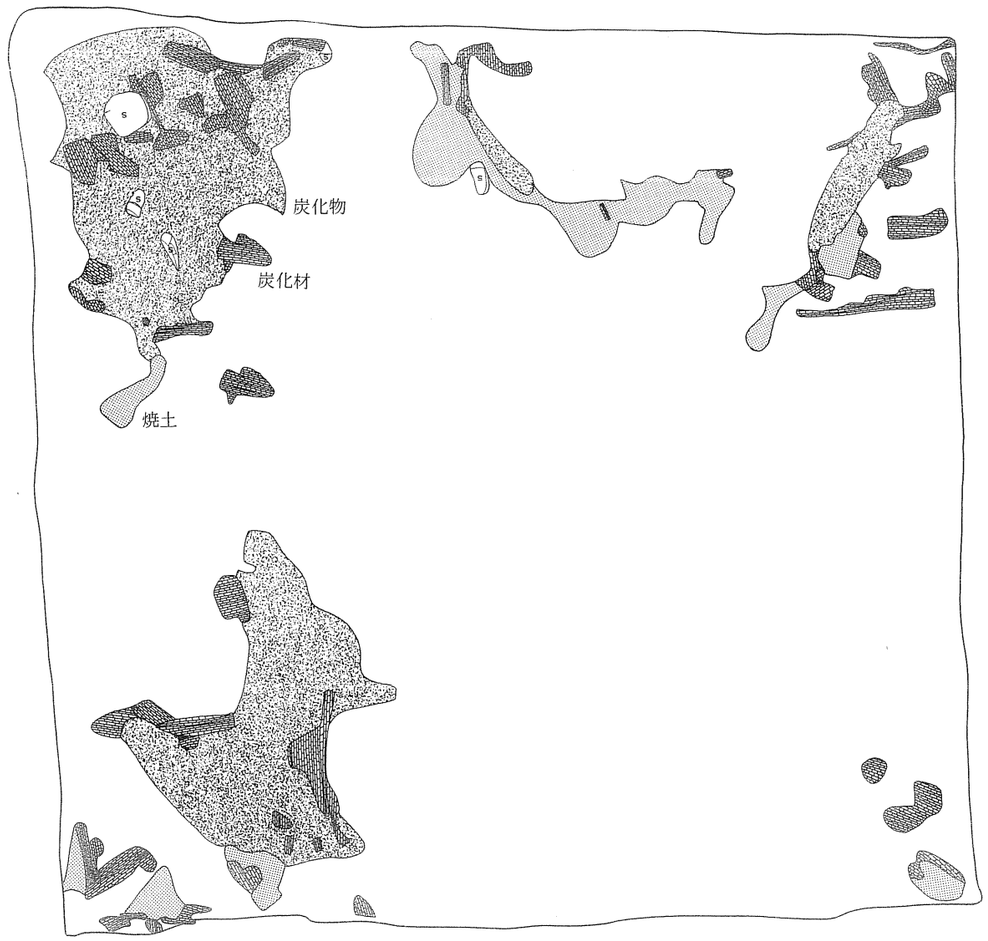
第 39 表		遺構の位置	
遺構名	ＳＩ002		
検出地区	3－J、4－J 3－K、4－K		
挿図番号	34		
図版番号			

法量	cm	北壁	東壁	南壁	西壁
	壁長	（205）	（242）	（194）	（230）
	壁高	—	—	—	—
	壁溝幅	—	—	—	—
	壁溝深	—	—	—	—

形態	不整方形	面積	（5.5）㎡	主軸方向	

確認	地山面で確認した。
壁	確認できなかった。
床面	削平され、住居跡中央部を確認したにとどまったが、残存部分は、堅くしまっている。
壁溝	確認できなかった。
ピット	P_1～P_3を確認した。 P_1（14） P_2（4.5） P_3（7）
付設	
カマド	位置：南壁　素材：不明 残存状態は、非常に悪く、燃焼部焼土のみ確認した。
遺物とその出土状態	
備考	削平されて床面とカマドの一部と考えられる焼土の検出のみであろう。

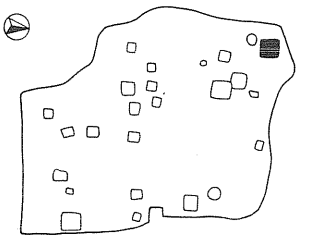




層	土色	備考
1	7.5 Y R 3/1 黒色	浮石、黄褐色粒子微量混入。
2	7.5 Y R 1.7/1 黒色	浮石、黄褐色粒子微量混入。
3	7.5 Y R 3/1 黒褐色	黄褐色粒子微量混入。
4	7.5 Y R 3/1 黒色	粘性：弱。炭化物、浮石、黄褐色粒子微量混入。
5	10Y R 4/4 暗褐色	粘性：弱。浮石微量混入。

層	土色	備考
6	10Y R 4/3 にぶい黄褐色	炭化物、浮石、黄褐色微量混入。
7	10Y R 3/3 暗褐色	粘性：弱。炭化物、浮石、黄褐色土粒子微量混入。
8	10Y R 3/3 暗褐色	硬度：強。粘性：弱。浮石微量混入。
9	10Y R 3/3 黒褐色	硬度：強。炭化物、黄褐色粒子微量混入。
10	10Y R 3/3 暗褐色	粘性：弱。黄褐色土粒子微量混入。

第35図　ＳＩ003 竪穴住居跡および炭化物出土状況実測図

第 40 表		遺構の位置	
遺構名	S I 003		
検出地区	2－M、3－M 2－N、3－N		
挿図番号	35、36		
図版番号	19		

法量	cm	北壁	東壁	南壁	西壁
	壁長	686	695	697	650
	壁高	17～41	41～48	33～47	15～26
	壁溝幅	8～20	5～22	11～20	8～13
	壁溝深	13～27	18～26	22～33	21～31

形態	方形	面積	47.2 ㎡	主軸方向	N－3°－W

確認	地山面で確認した。
壁	西側はもろく、他は堅い。 垂直である。
床面	平坦で堅い。カマド前面に焼土あり、3コーナーが、炭化物で覆われている。
壁溝	カマド部分を除き、同一幅、深さで住居跡内を一巡する。
ピット	各コーナーにP_1～P_4、対角線上にP_5～P_8、床面及び壁溝内にP_9～P_{29}が存在する。 主柱穴は、P_5～P_8、P_1～P_4は補助的役割をもつものであろう。 P_1(60) P_2(72) P_3(61) P_4(63) P_5(64) P_6(57) P_7(81) P_8(67) P_9(21) P_{10}(32) P_{11}(36) P_{12}(40) P_{13}(30) P_{14}(28) P_{15}(34) P_{16}(50) P_{17}(34) P_{18}(27) P_{19}(19) P_{20}(19) P_{21}(13) P_{22}(8) P_{23}(49) P_{24}(28) P_{25}(35) P_{26}(38) P_{27}(34) P_{28}(40) P_{29}(35)
付設	

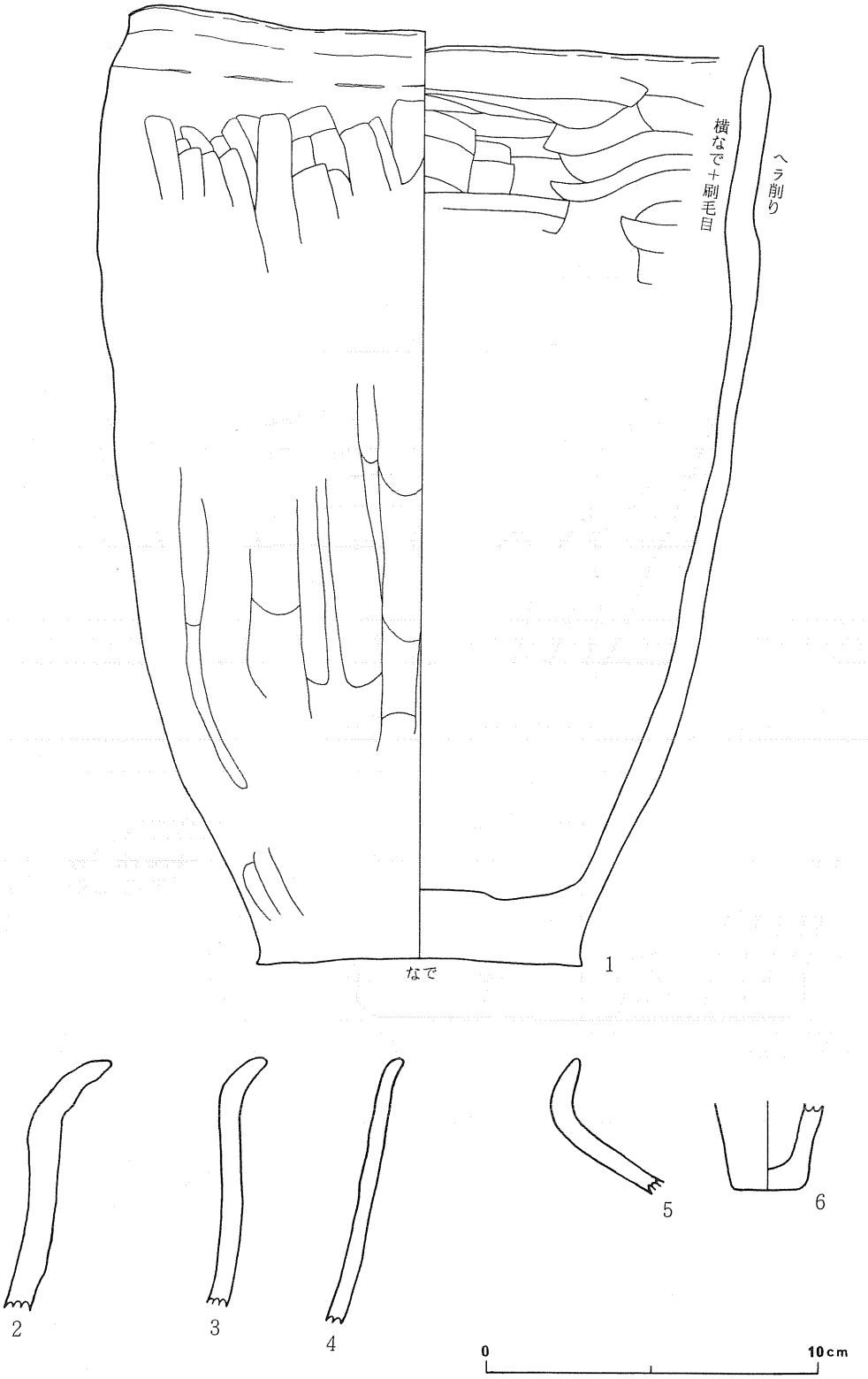
カマド	位置	南壁の西側寄り	素材	自然石、粘土
	木根により西側の一部が破壊されている。 袖部芯材に自然石を使用している。煙道は短く、壁を斜に掘込んでいる。			

遺物とその出土状態	縄文土器、土師器甕、須恵器、砥石、鉄滓
備考	焼失家屋であろう。

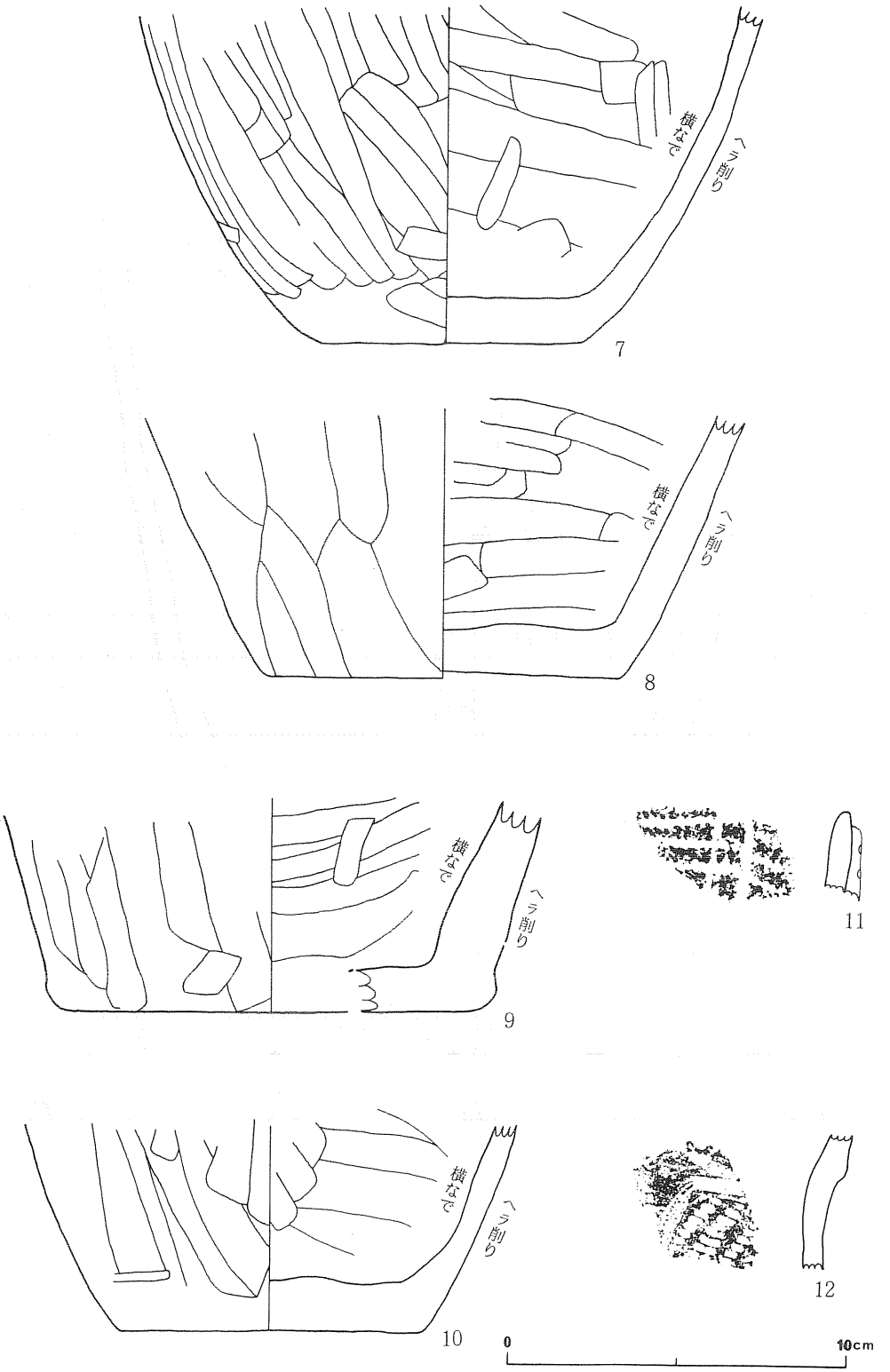
層	土色	備考
1	10YR 3/4 暗褐色	
2	10YR 3/2 黒褐色	
3	7.5YR 5/4 褐色	
4	10YR 5/3 にぶい黄褐色	
5	10YR 5/4 褐色	炭化物微量混入。
6	10YR 3/3 暗褐色	炭化物微量混入。
7	10YR 3/4 暗褐色	炭化物少量混入。
8	5YR 5/4 にぶい赤褐色	
9	5YR 3/3 暗赤褐色	
10	10YR 2/2 黒褐色	浮石微量混入。
11	7.5YR 5/6 明褐色	
12	10YR 3/4 暗褐色	

層	土色	備考
13	7.5YR 5/4 褐色	黄褐色粒子微量混入。
14	10YR 3/4 暗褐色	炭化物微量混入。
15	7.5YR 3/3 暗褐色	炭化物微量混入。
16	7.5YR 5/6 暗褐色	炭化物微量混入。
17	10YR 5/6 褐色	
18	10YR 3/4 暗褐色	炭化物微量混入。
19	10YR 2/3 黒褐色	
20	10YR 5/6 黄褐色	炭化物微量混入。
21	7.5YR 3/4 暗褐色	
22	7.5YR 3/4 暗褐色	
23	5YR 5/6 明赤褐色	
24	2.5YR 5/6 明赤褐色	

第36図　S I 003 竪穴住居跡カマド実測図



第37図　ＳＩ003 竪穴住居跡出土土器（1）



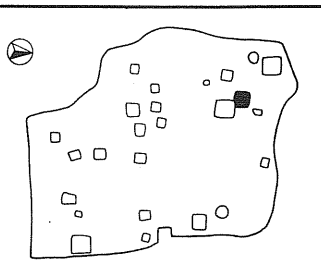
第38図　ＳＩ003 竪穴住居跡出土土器（２）

SI005

SI004

層	土色	備考
1	10YR 2/1 黒色	硬度：弱。粘性：弱。黄褐色粒子、浮石微量混入。
2	10YR 3/2 黒褐色	硬度：強。粘性：弱。炭化物、浮石微量混入。
3	10YR 3/3 暗褐色	炭化物、浮石、黄褐色ブロック微量混入。
4	10YR 3/3 暗褐色	硬度：弱。粘性：弱。浮石少量混入。炭化物微量混入。
5	10YR 3/4 暗褐色	粘性：弱。炭化物、浮石微量混入。
6	10YR 3/3 黒褐色	炭化物、浮石微量混入。黄褐色ブロック少量混入。
7	10YR 5/6 黄褐色	炭化物、浮石微量混入。

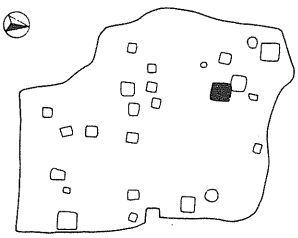
第39図　ＳＩ004・005竪穴住居跡実測図

第 41 表		遺構の位置	
遺構名	ＳＩ004		
検出地区	4－K、4－L 5－K、5－L		
挿図番号	39、40		
図版番号	20		

法量	cm	北壁	東壁	南壁	西壁
	壁長	626	608	625	615
	壁高	42～43	50～52	33	32～42
	壁溝幅	13～26	15～29	13～20	10～24
	壁溝深	15～19	10～12	15	8～10

形態	方形	面積	39.9 ㎡	主軸方向	N－2°－W

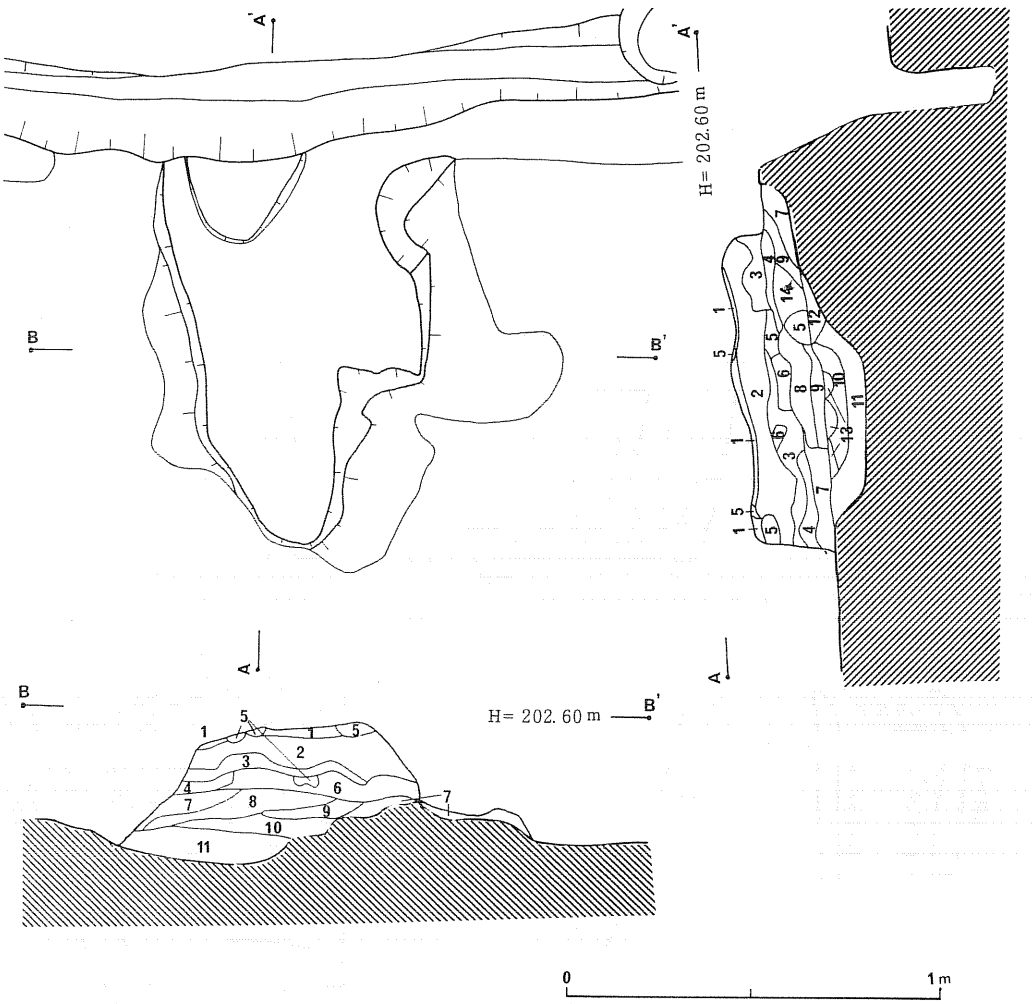
確認	地山面で確認した。
壁	垂直でやや軟弱である。 南側の一部が破壊されている。
床面	貼床しているため、やや軟弱であるが、平坦である。 カマド付近は堅い。
壁溝	カマド部分を除いて、同一幅、深さで四壁に沿い、一巡する。
ピット	各コーナー部にP_1～P_4、床面にP_5～P_9が存在する。 P_1(30) P_2(32) P_3(33) P_4(37) P_5(10) P_6(34) P_7(26) P_8(33) P_9(22)
付設	
カマド	位置：南壁の中央よりやや東側　素材：粘土 煙道部は5号住居跡によって破壊されている。
遺物とその出土状態	縄文土器、土師器甕、須恵器長頸壺、鉄滓
備考	5号住居跡と重複するが、カマドの煙道部が破壊されており、4号住居跡が古い。

第 42 表		遺構の位置	
遺構名	ＳＩ005		
検出地区	5－J、5－K、6－J 6－K、7－J、7－K		
挿図番号	39、42		
図版番号	20		

法量	cm	北壁	東壁	南壁	西壁
	壁長	648	650	638	674
	壁高	24～62	60～61	64	50～53
	壁溝幅	12～38	17～24	17～30	15～23
	壁溝深	18～24	16～22	15	12～16

形態	方形	面積	44.3 ㎡	主軸方向	N－3°－W

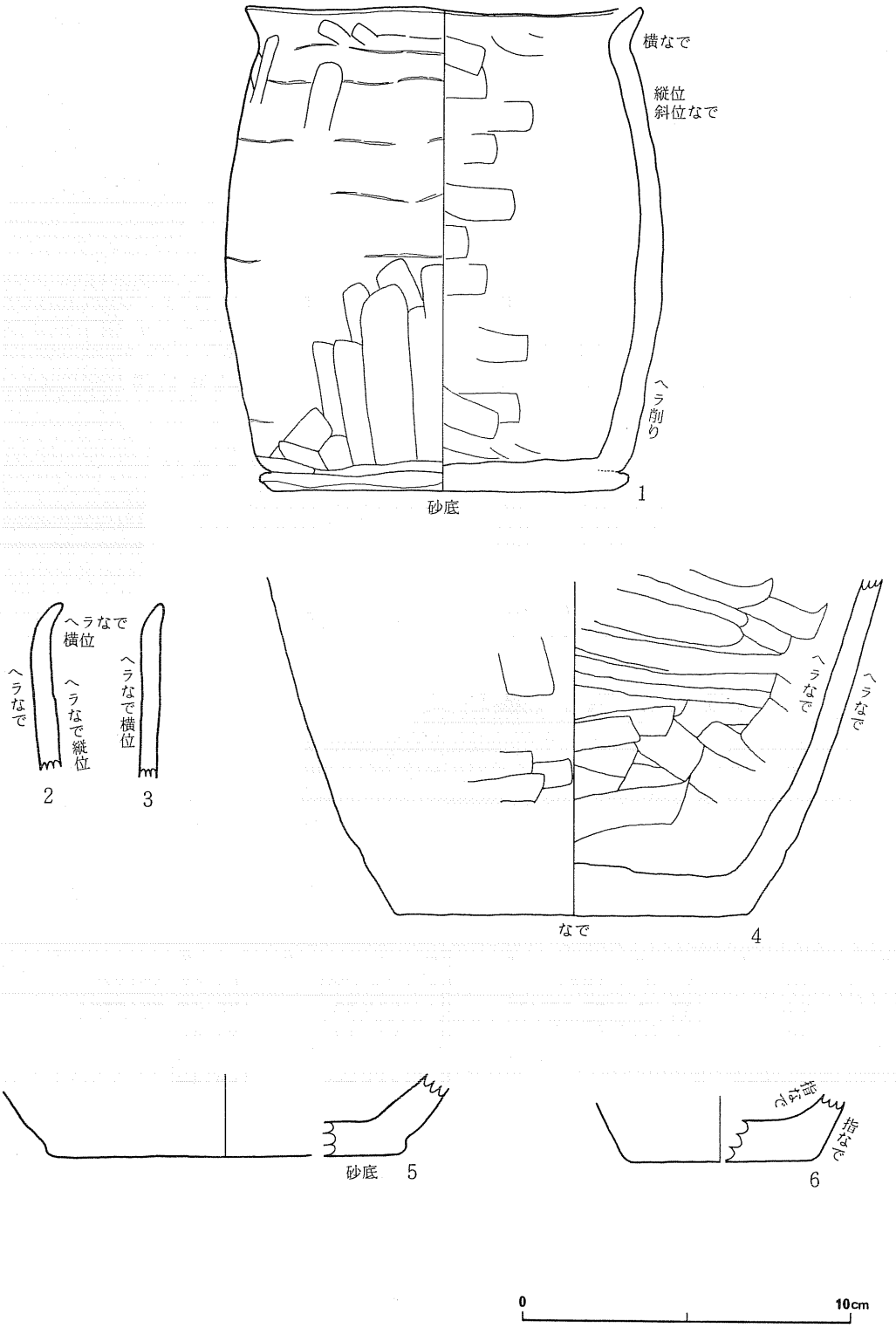
確認	地山面で確認した。
壁	全体的に壁の掘込みは深くしっかりとしたつくりである。
床面	ゆるやかな凹凸を示し、堅くしまっているが壁に近づくにつれ軟弱になる。
壁溝	カマド部分を除き、同一幅、深さで住居跡内を一巡する。
ピット	各コーナーにP_1～P_4、対角線上にP_5～P_8及び床面にP_9～P_{10}を検出した。 P_1～P_8が本住居跡の柱穴であろう。 P_1(37) P_2(51) P_3(36) P_4(55) P_5(36) P_6(54) P_7(60) P_8(48) P_9(42) P_{10}(27)
付設	
カマド	位置：南壁の西側寄り　素材：粘土 残存状態は良好、袖部は粘土でつくられている。燃焼部ほぼ中央部にコブシ大の石を支脚として使用している。 煙道は、壁とともに垂直に立ち上がる。
遺物とその出土状態	縄文土器、土師器坏、甕、鉄滓
備考	



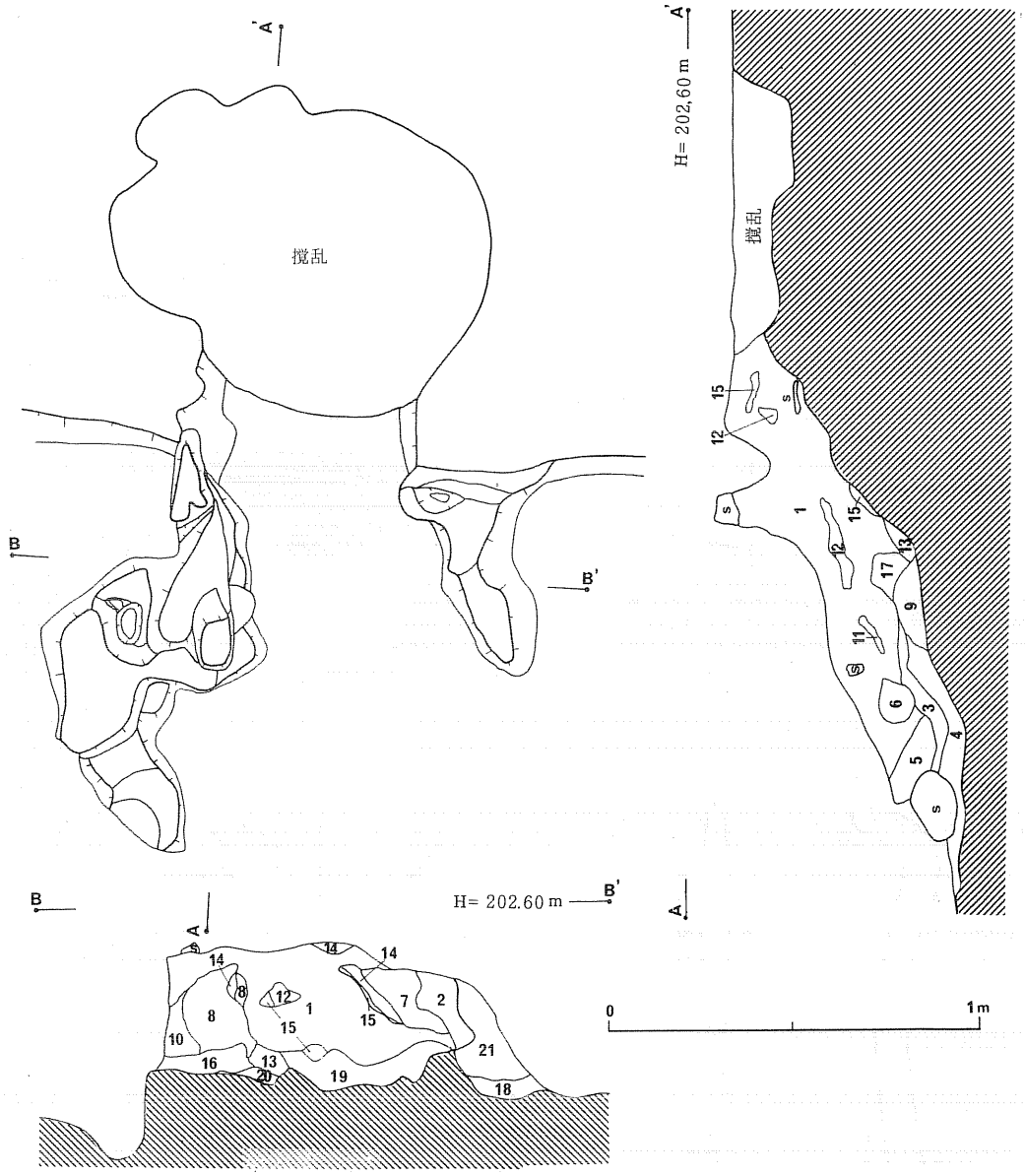
層	土色	備考
1	10YR 3/2 黒褐色	粘性：弱。浮石少量混入。
2	10YR 3/2 黒褐色	粘性：中弱。浮石微量、黄褐色土粒子微量混入。
3	10YR 3/2 黒褐色	粘性：中弱。黄褐色土粒子微量 焼粘土微量混入。
4	10YR 2/1 黒色	粘性：中弱。黄褐色土粒子微量混入。
5	10YR 5/4 にぶい黄褐色	
6	10YR 4/4 にぶい黄褐色	粘性：中強。焼粘土微量、浮石微量混入。
7	7.5YR 4/4 褐色	焼粘土微量混入。

層	土色	備考
8	7.5YR 5/6 明褐色	粘性：中弱。焼粘土微量混入。
9	10YR 4/6 褐色	粘性：中強。焼粘土微量混入。
10	5YR 6/6 橙色	粘性：弱。
11	5YR 5/6 明赤褐色	粘性：中弱。
12	5YR 4/6 赤褐色	粘性：中弱。
13	7.5YR 6/6 橙色	粘性：弱。
14	7.5YR 4/4 褐色	浮石微量、焼粘土微量混入。

第40図　S I 004 竪穴住居跡カマド実測図



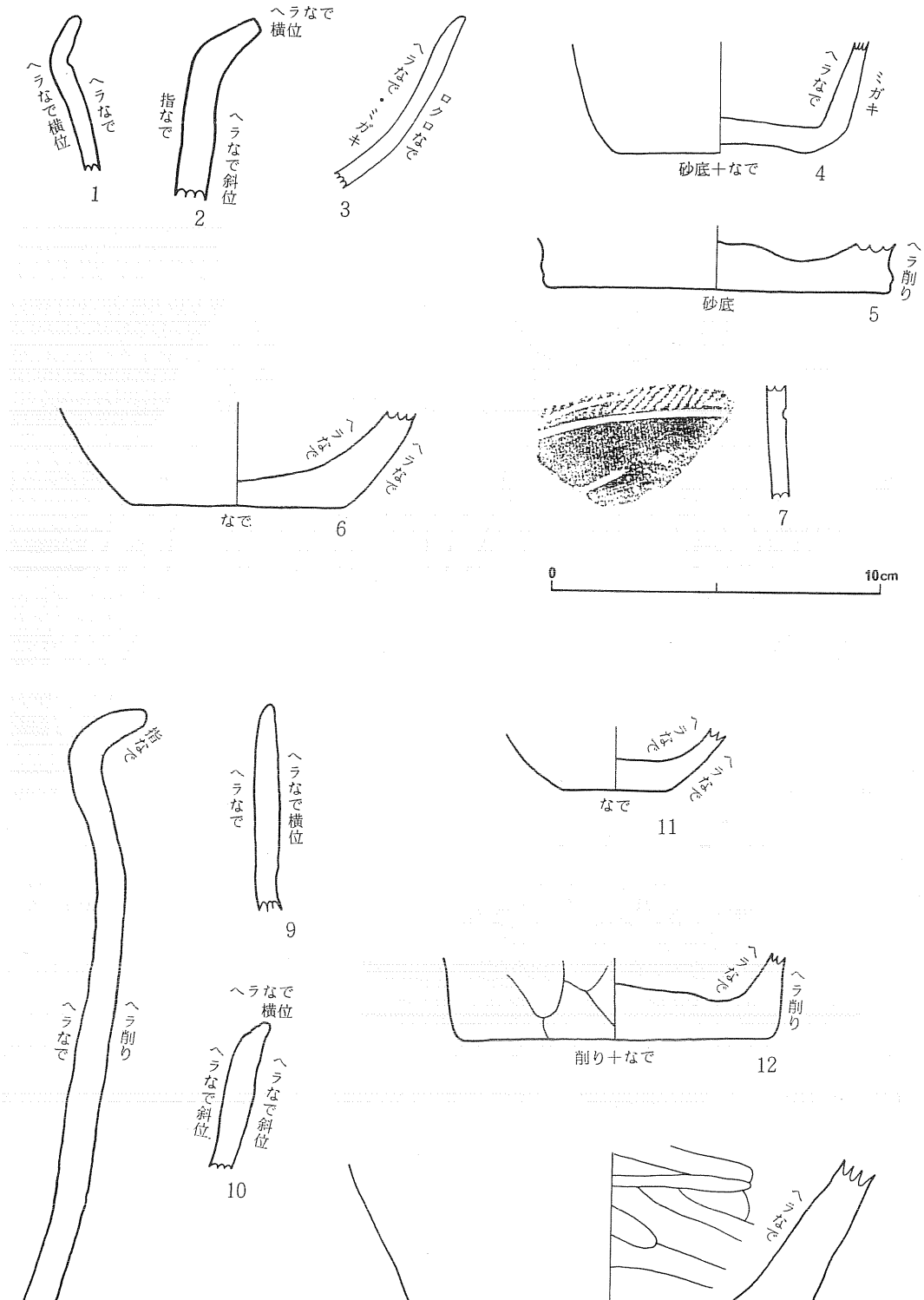
第41図　S I 004 竪穴住居跡出土土器



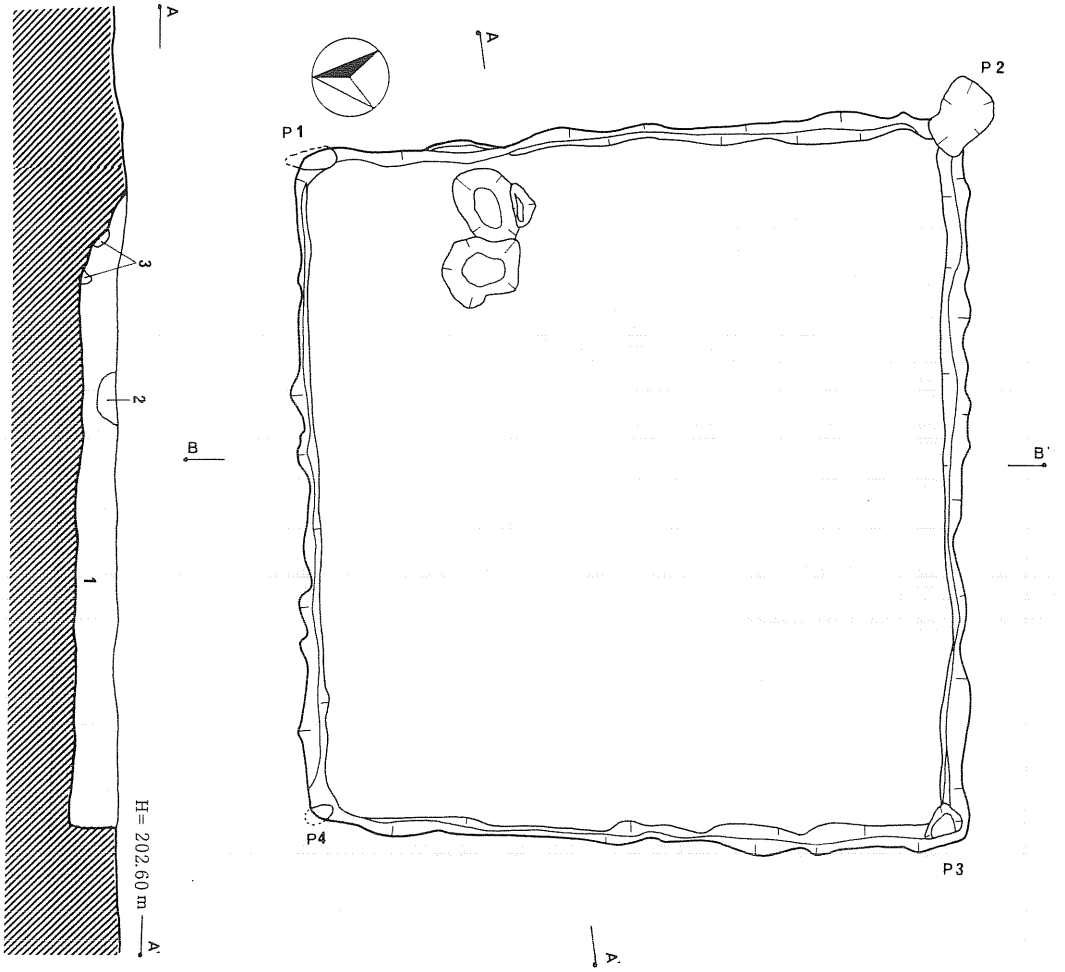
層	土色	備考
1	10YR 3/2 黒褐色	粘性：弱。褐色粘土少量混入。
2	10YR 3/2 黒褐色	粘性：弱。硬度：弱。
3	10YR 3/3 暗褐色	粘性：弱。焼土粒子多量混入。
4	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘性：強。明赤褐色焼土粒子少量混入。
5	10YR 4/6 褐色	粘性：強。
6	10YR 5/6 黄褐色	粘性：強。
7	7.5YR 4/6 褐色	粘性：弱。
8	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘性：強。
9	5YR 4/6 赤褐色	粘性：強。
10	10YR 5/4 褐色	粘性：弱。
11	5YR 4/6 赤褐色	粘土。

層	土色	備考
12	10YR 3/2 黒褐色	黄褐色粘土及赤褐色粘土多量混入。
13	7.5YR 5/4 褐色	褐色粘土及明褐色粘土混入。
14	7.5YR 4/6 褐色	粘土。
15	5YR 3/6 暗赤褐色	粘土。
16	10YR 3/2 黒褐色	粘性：強。炭化物微量混入。
17	10YR 5/4 褐色	明赤褐色焼土少量混入。
18	10YR 3/2 黒褐色	粘性：弱。
19	10YR 3/2 黒褐色	黒色土粒子混入。
20	10YR 4/6 褐色	粘性：強。黄褐色土及黒色土少量混入。
21	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘性：強。赤褐色焼土微量、にぶい黄褐色粘土混入。

第42図　S I 005 竪穴住居跡カマド実測図

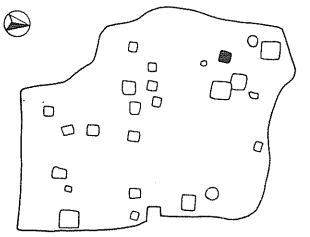


第43図　ＳＩ005・006竪穴住居跡出土土器



層	土色	備考
1	10YR 3/4 暗褐色	硬度：弱。粘性：強。黄褐色土、浮石微量混入。
2	10YR 2/2 黒褐色	硬度：弱。粘性：強。黄褐色土粒子、浮石微量混入。
3	7.5YR 5/6 明褐色	硬度：弱。粘性：強。暗褐色粘土微量混入。

第44図　S I 006 竪穴住居跡実測図

第 43 表		遺構の位置	
遺構名	ＳＩ006		
検出地区	5－M、5－N 6－M、6－N		
挿図番号	44、45		
図版番号	21		

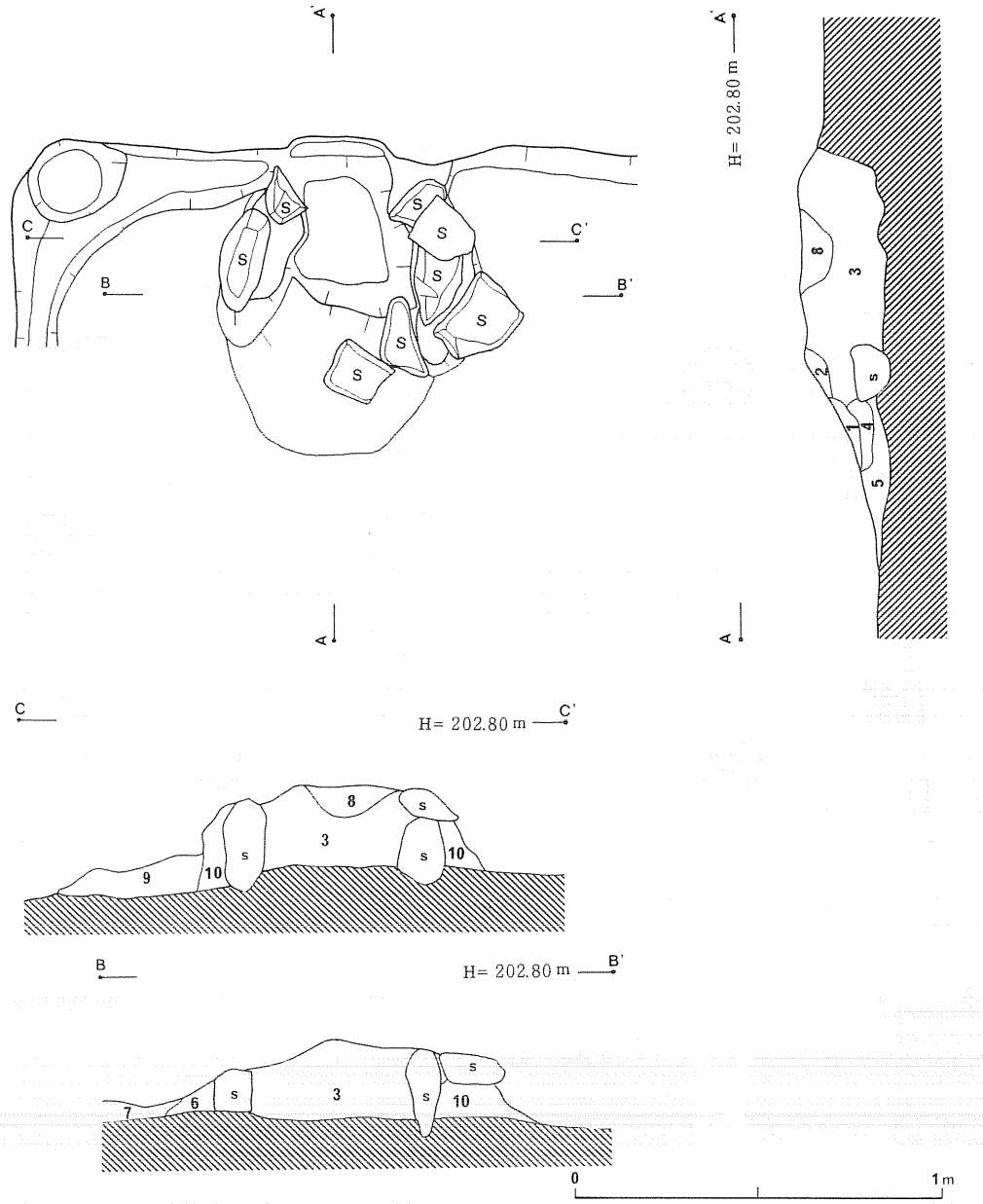
	cm	北壁	東壁	南壁	西壁
法量	壁長	347	353	350	373
	壁高	23～26	23～29	8～16	10～17
	壁溝幅	7～18	6～10	6～17	7～15
	壁溝深	4～10	9～21	7～14	6～15

形態	方形	面積	13.6 ㎡	主軸方向	N－1°－W

確認	地山面で確認した。
壁	南、北壁は他よりも若干浅くなっており、床面よりやや外反ぎみに立ち上がる。
床面	全体的に堅くしまっている。
壁溝	断面形は「V」字状を呈し、同一幅、深さで住居跡内を一巡する。
ピット	各コーナーに、P_1～P_4が存在し、これらが柱穴であろう。 P_1(31) P_2(30) P_3(29) P_4(28)
付設	

カマド	位置	南側の東側寄り	素材	石、粘土
	煙道は短く、壁を斜に掘り込んでいる。			

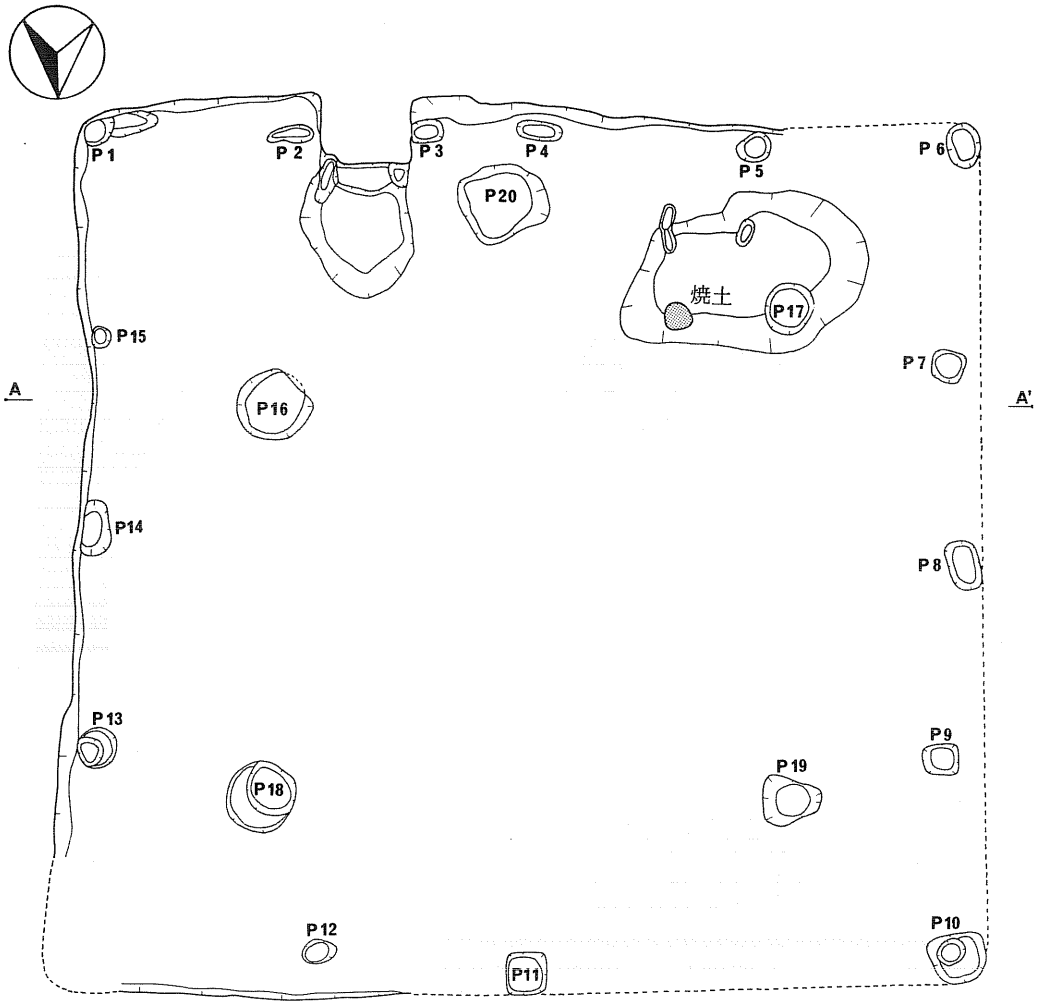
遺物とその出土状態	縄文土器、土師器甕
備考	



層	土色	備考
1	10YR 3/4 黒褐色	硬度：強。焼土、黄褐色粒子微量混入。
2	10YR 3/2 黒褐色	黄褐色粒子微量混入。
3	10YR 3/3 黒褐色	黄褐色粒子微量混入。
4	10YR 3/4 暗褐色	硬度：強。炭化物粒子微量混入。
5	10YR 3/4 暗褐色	

層	土色	備考
6	10YR 3/4 暗褐色	
7	7.5YR 5/4 にぶい赤褐色	焼土。
8	10YR 3/3 黒褐色	
9	10YR 5/6 褐色	焼土微量混入。
10	10YR 5/4 褐色	

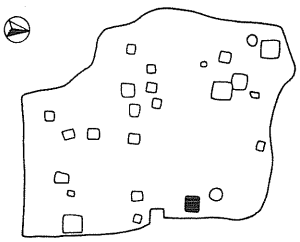
第45図　ＳＩ006 竪穴住居跡カマド実測図



層	土色	備考
1	10YR 3/3 暗褐色	硬度：強。黄色ブロック。
2	10YR 3/3 暗褐色	硬度：強。浮石、黄色砂質ブロック微量混入。
3	10YR 3/2 黒褐色	硬度：強。浮石、黄色砂質ブロック微量混入。
4	10YR 3/2 黒褐色	硬度：強。浮石、炭化物微量混入。
5	10YR 2/1 黒色	黄色粒子微量混入。

層	土色	備考
6	10YR 3/2 黒褐色	粘性：弱。黄色砂質ローム、浮石微量混入。
7	10YR 3/2 黒褐色	黄色粒子微量混入。
8	10YR 3/2 黒褐色	硬度：弱。粘性：弱。黄色粒子少量混入。
9	10YR 3/2 黒褐色	黄色粒子多量混入。
10	10YR 5/6 黄褐色	硬度：弱。褐色土混入。

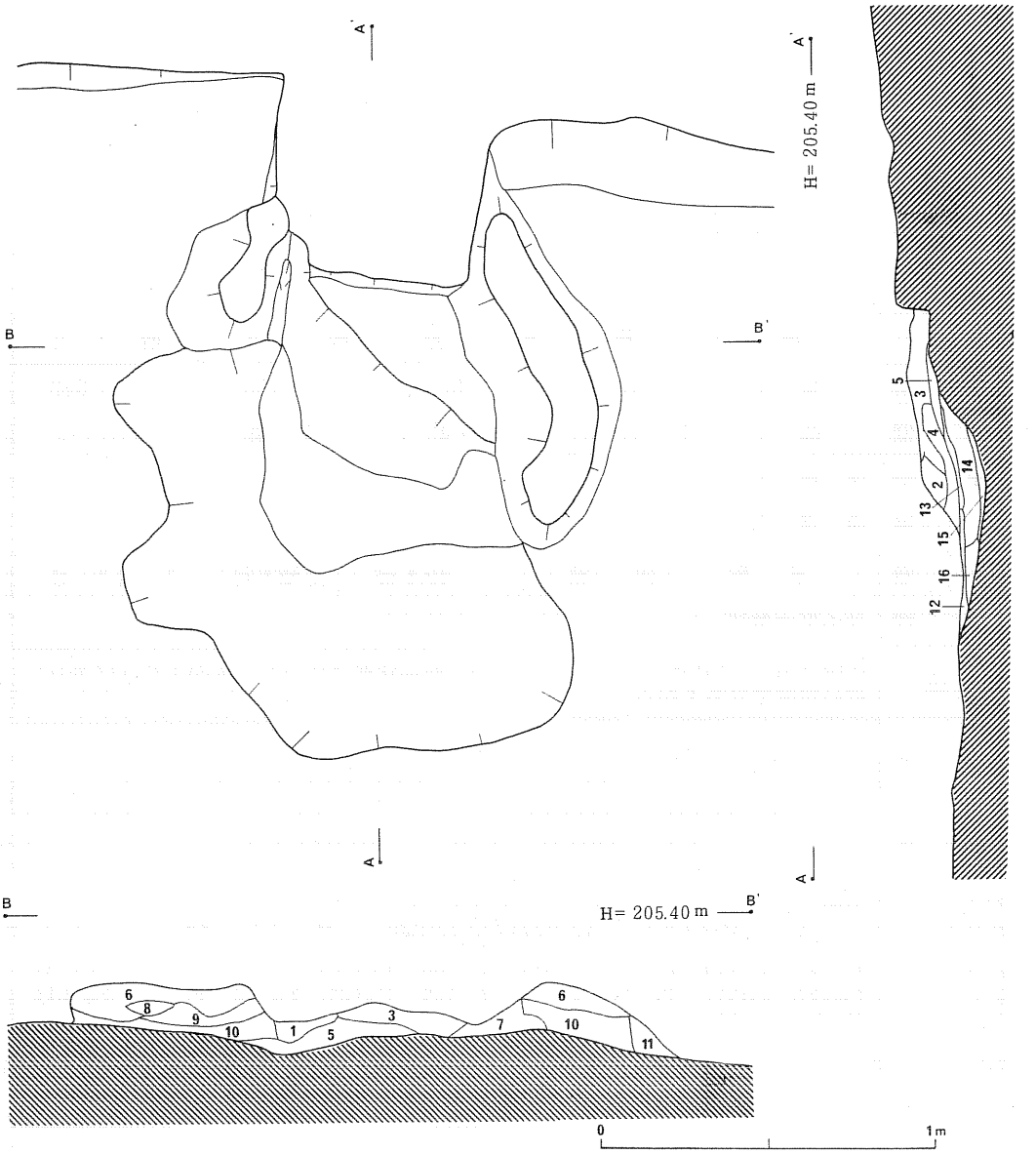
第46図　S I 007 竪穴住居跡実測図

第 44 表		遺構の位置	
遺構名	ＳＩ007		
検出地区	8－A、8－B 9－A、9－B		
挿図番号	46、47		
図版番号	21		

法量	cm	北壁	東壁	南壁	西壁
	壁長	740	680	700	680
	壁高	0～13	0～40	0～38	—
	壁溝幅	—	—	—	—
	壁溝深	—	—	—	—

形態	方形	面積	49.4 ㎡	主軸方向	N－1°－E

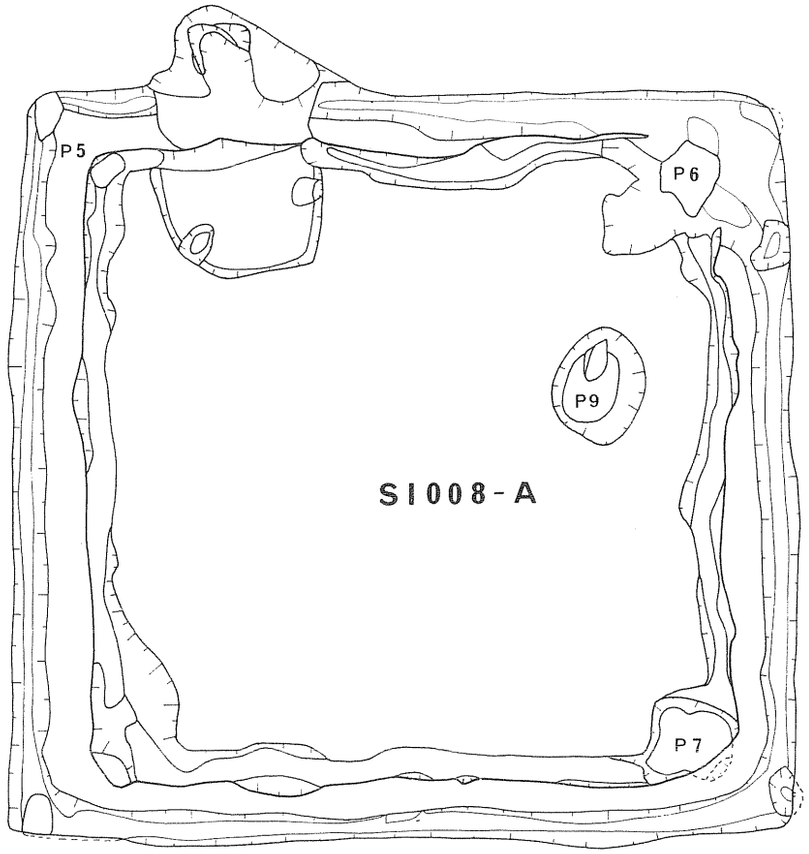
確認	地山面で確認した。
壁	西側と南の一部が削平されているため、残存状態は悪いが、床面よりほぼ垂直に近い角度で立ち上がる。
床面	平坦で堅いが西側は削平されている。
壁溝	
ピット	四壁に沿いP_1～P_{15}が存在し、対角線上にP_{16}～P_{19}が存在する。 P_{16}～P_{19}は主柱穴、P_1～P_{15}は補助的な役割のPitであろう。 P_1(36) P_2(15) P_3(23) P_4(43) P_5(36) P_6(28) P_7(30) P_8(21) P_9(23) P_{10}(30) P_{11}(31) P_{12}(30) P_{13}(20) P_{14}(34) P_{15}(24) P_{16}(72) P_{17}(51) P_{18}(61) P_{19}(55) P_{20}(11)
付設	
カマド	位置：南壁の東側寄り　素材：粘土 南壁の東側の住居跡内に凸状に張り出した部分に構築されている。袖部は、粘土により作られているが、東側袖先端部は崩壊している。燃焼部の平面形は、不整形であるが、鍋底状に掘り込まれており、その内部に焼土が認められた。 煙道は、張り出し部の壁とともに垂直に近い角度で立ち上がる。
遺物とその出土状態	鉄滓
備考	東側一部がＳＤ008により削除されている。ＳＤ008より古い。

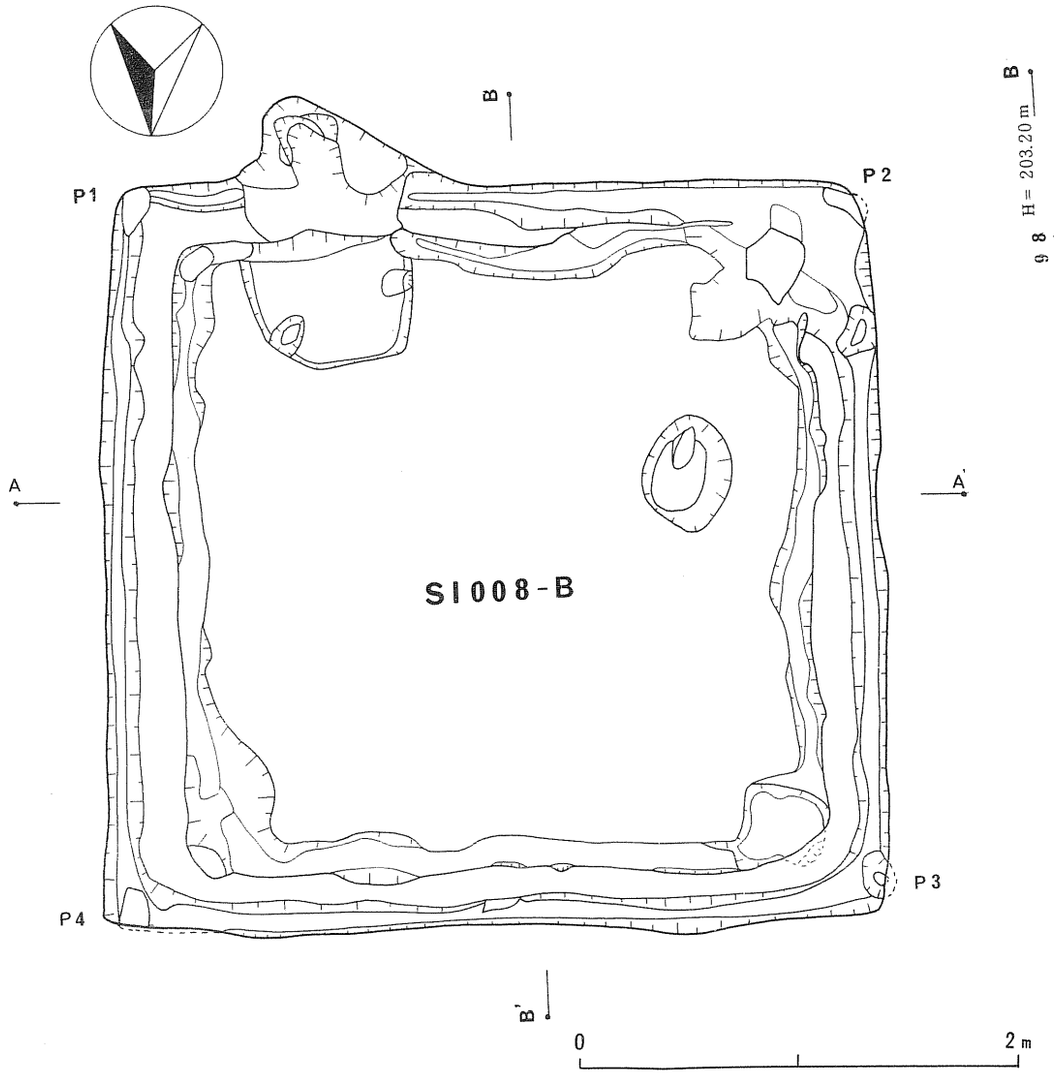


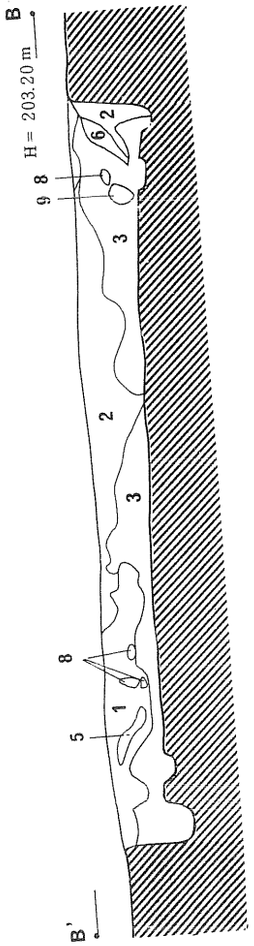
層	土　　色	備　　考
1	7.5 Y R 4/4 褐色	焼土微量混入。
2	7.5 Y R 5/8 明褐色	
3	7.5 Y R 4/4 褐 色	硬度：強。粘性：強。
4	2.5 Y R 4/8 赤褐色	
5	5 Y R 4/8 赤褐色	硬度：強。粘性：強。
6	7.5 Y R 3/4 褐色	
7	7.5 Y R 3/6 褐色	硬度：強。粘性：強。
8	7.5 Y R 2/1 黒色	硬度：強。粘性：強。

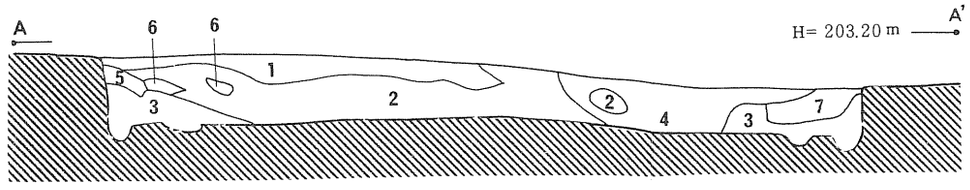
層	土　　色	備　　考
9	10 Y R 3/4 暗褐色	
10	7.5 Y R 2/2 黒褐色	
11	10 Y R 3/4 暗褐色	
12	5 Y R 3/3 極暗褐色	硬度：強。
13	5 Y R 4/6 赤褐色	硬度：弱。粘性：弱。
14	2.5 Y R 4/8 赤褐色	硬度：強。粘性：強
15	5 Y R 3/6 暗赤褐色	硬度：強。粘性：強
16	5 Y R 4/6 赤褐色	硬度：強。粘性：強。

第47図　S I 007 竪穴住居跡カマド実測図





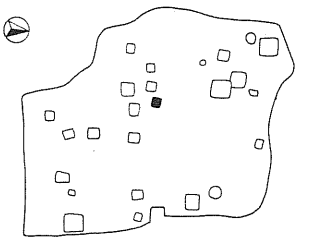




層	土色	備考
1	10YR 3/3 暗褐色	粘性強。黄褐色土少量混入。炭化物、浮石微量混入
2	10YR 3/2 黒褐色	粘性：強。黄褐色土、炭化物少量混入。浮石微量混入。
3	10YR 4/6 褐色	硬度：弱。粘性：強。暗褐色土多量混入。
4	10YR 3/2 黒褐色	硬度：弱。粘性：弱。黄褐色微量混入。
5	10YR 3/2 黒褐色	硬度：弱。粘性：強。浮石多量混入。

層	土色	備考
6	10YR 3/4 暗褐色	浮石、黄褐色土粒子多量混入。
7	10YR 4/4 褐色	硬度：弱。粘性：強。炭化物微量混入。
8	10YR 2/1 黒色	硬度：弱。粘性：強。黄褐色土粒子微量混入。
9	10YR 5/6 黄褐色	硬度：弱。粘性：強。暗褐色土、炭化物微量混入。

第48図　ＳＩ００８－Ａ・Ｂ竪穴住居跡実測図

第　45　表		遺構の位置	
遺構名	ＳＩ008－A		
検出地区	11－J		
挿図番号	48、49		
図版番号	22		

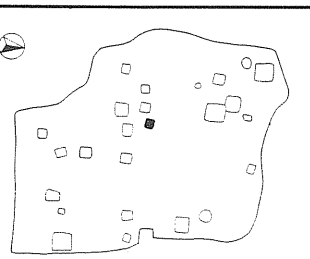
法量	cm	北　壁	東　壁	南　壁	西　壁
	壁　長	277	281	285	280
	壁　高	5～11	7～13	11～22	5～7
	壁溝幅	10～15	10～16	8～23	10～19
	壁溝深	13～19	16～18	8～12	4～11

形態	方　形	面　積	8.4 ㎡	主軸方向	N－5°－W

確　認	ＳＩ008－B住居跡の床面で確認した。
壁	壁高は5～22cmとやや低いがしっかりとしたつくりで、床面からやや外反ぎみに立ち上がる。
床　面	貼床が施されており、平坦で堅くしまっている。
壁　溝	四壁ともほぼ同一幅、深さで一巡する。
ピット	各コーナー部にP_5～P_8が存在し、床面にP_9、これが本住居跡の柱穴であろう。 P_5(21)　P_6(26)　P_7(5)　P_8(4)　P_9(15)
付　設	

カマド	位置	南壁の東側寄り	素材	不　明
	ＳＩ008－B住居跡のカマドと重複するため確認できなかった。			

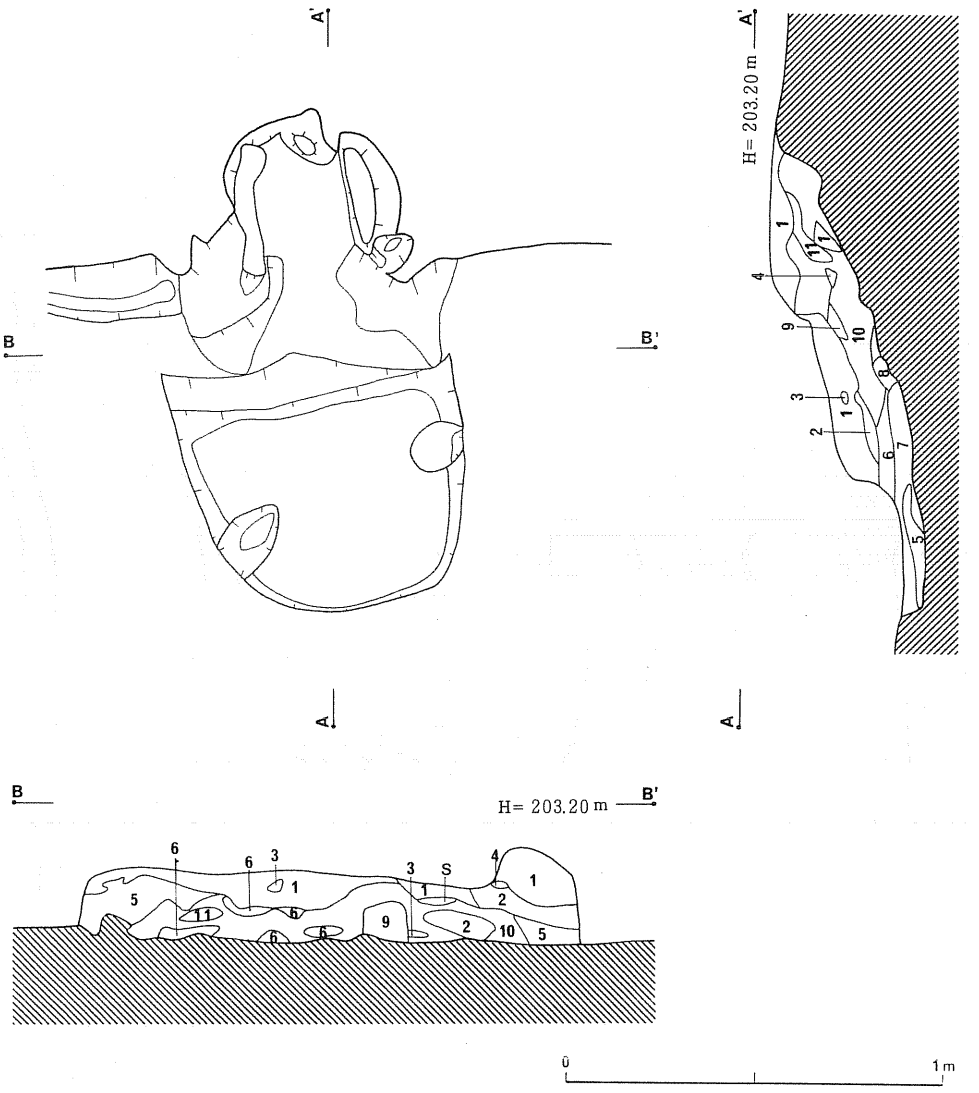
遺物とその出土状態	
備　考	

第 46 表		遺構の位置	
遺構名	ＳＩ008－B		
検出地区	11－Ｉ、11－Ｊ		
挿図番号	48		
図版番号	22		

	cm	北　壁	東　壁	南　壁	西　壁
法量	壁　長	352	333	337	328
	壁　高	26～35	30～49	16～30	22～24
	壁溝幅	8～18	10～15	9～21	13～20
	壁溝深	10～19	9～19	2～18	14～18

形態	方形	面積	12.1 ㎡	主軸方向	N－5°－W

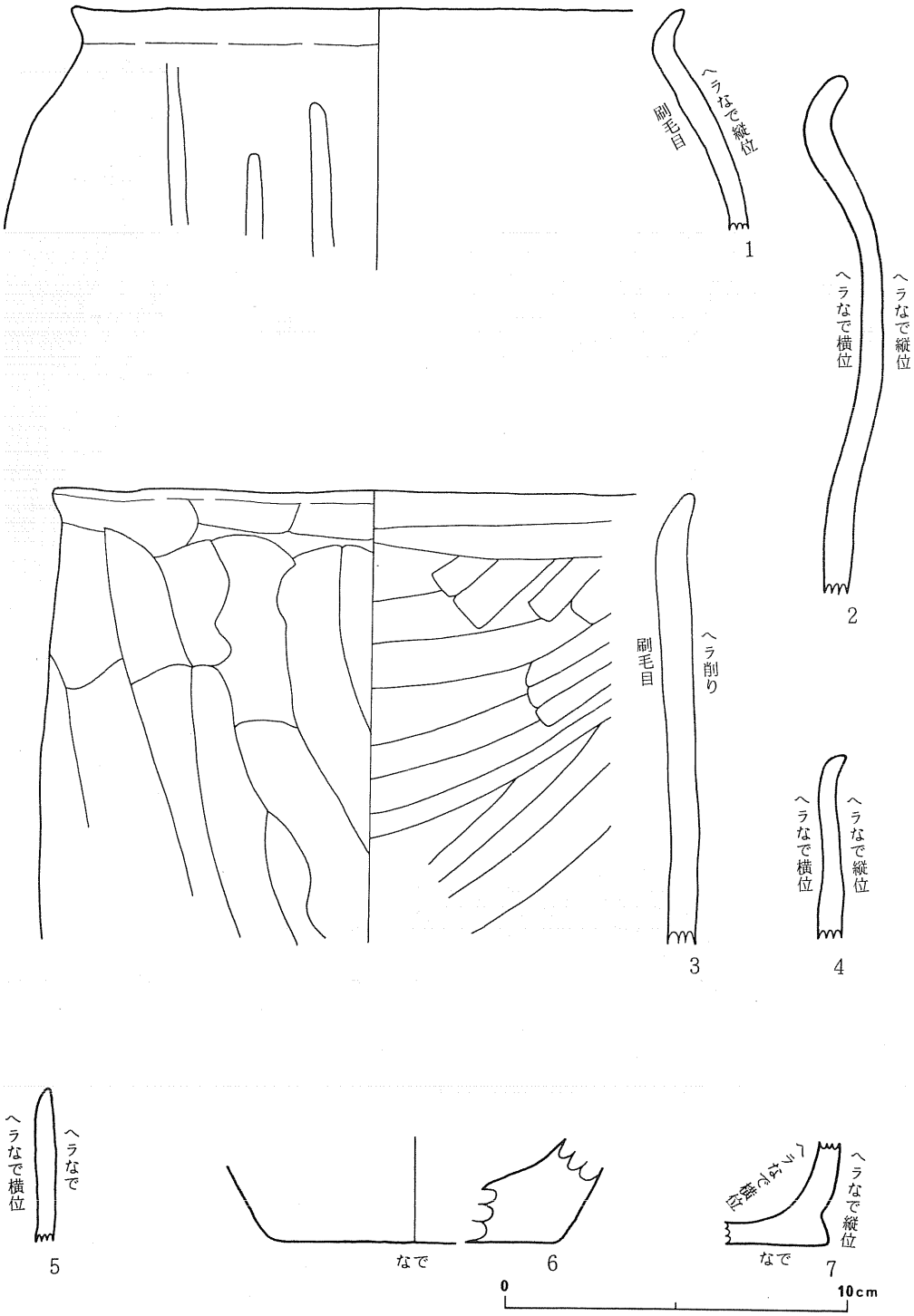
確認	地山面で確認した。
壁	地山面がゆるやかに南西方向へ傾斜するため、南、西壁は低いが、いずれもしっかりとした作りで、床面より垂直に近い角度で立ち上がる。
床面	本住居跡構築の際、ＳＩ008－A住居跡内に貼り床を施して使用しており、堅くしまっている。
壁溝	ほぼ同一幅、深さで住居跡内を一巡する。
ピット	各コーナーにP_1～P_4の柱穴が存在する。 P_1(28)　P_2(46)　P_3(42)　P_4(40)
付設	
カマド	位置：南壁中央東寄り　素材：粘土 残存状態は良い。袖部は粘土を使用しているもので、袖東側は若干崩壊している。煙道は50cmを計りゆるやかに壁外に立ち上がる。
遺物とその出土状態	土師器甕、鉄滓
備考	ＳＩ008－Aと重複するが、ＳＩ008－Aは本住居跡床面で確認されたもので新旧関係は、ＳＩ008－A→ＳＩ008－Bの順である。



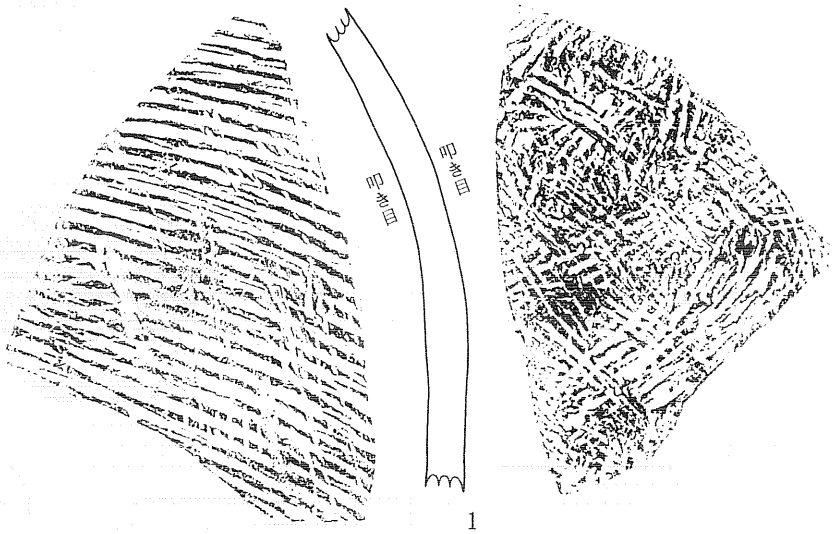
層	土　　色	備　　考
1	10YR 3/4 暗褐色	硬度：弱。粘性：弱。炭化物、黄褐色粒子微量混入。
2	10YR 3/2 黒褐色	硬度：弱。黄褐色粒子微量混入。
3	10YR 5/8 黄褐色	硬度：強。
4	7.5YR 4/3 褐色	硬度：弱。粘性：強。焼土微量混入。
5	10YR 3/3 暗褐色	硬度：弱。黄褐色粒子、炭化物微量混入。
6	5YR 4/4 にぶい赤褐色	硬度：弱。粘性：強。暗褐色土微量混入。

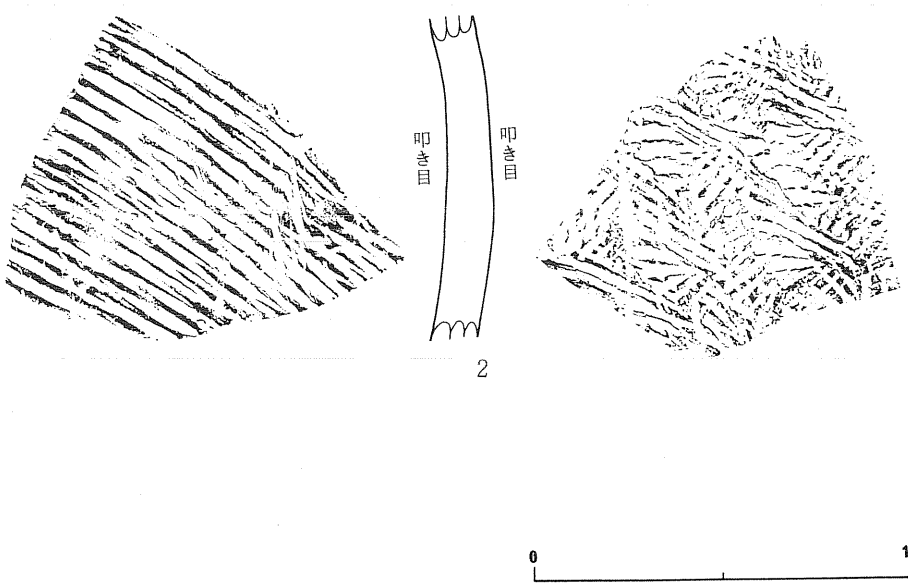
層	土　　色	備　　考
7	5YR 4/8 赤褐色	硬度：弱。粘性：強。
8	5YR 5/6 赤褐色	硬度：弱。粘性：強。
9	7.5YR 6/6 橙色	硬度：弱。粘性：強。
10	10YR 3/4 暗褐色	炭化物、黄褐色粒子微量混入。
11	5YR 3/4 極暗赤褐色	硬度：強。

第49図　ＳＩ008 —Ａ竪穴住居跡カマド実測図

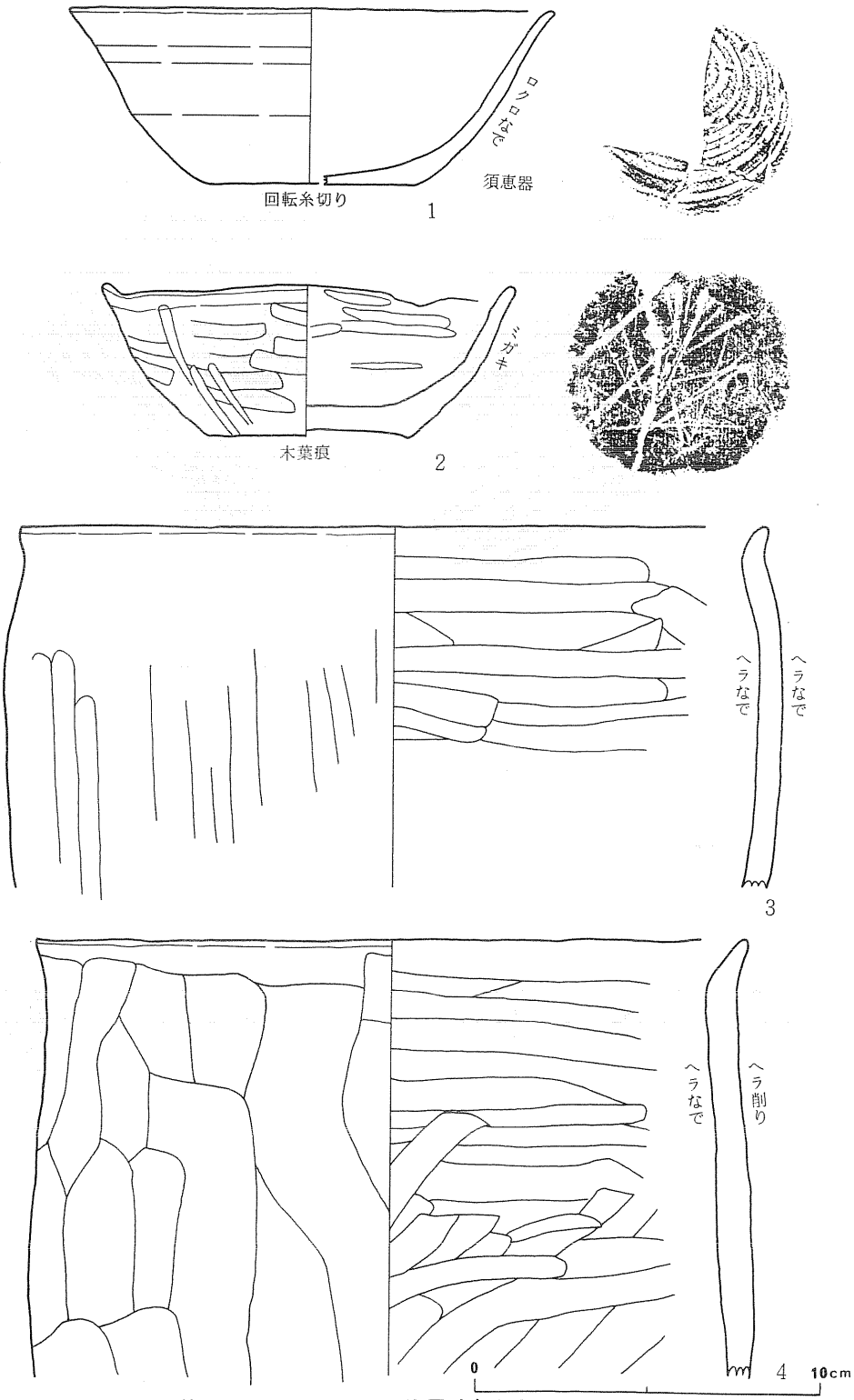


第50図　ＳＩ007・008竪穴住居跡出土土器

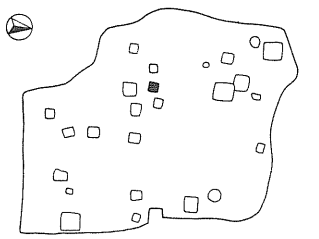




第51図　ＳＩ008－Ｂ・009竪穴住居跡出土土器



第52図　ＳＩ009 竪穴住居跡出土土器

第 47 表		遺構の位置	
遺構名	SI 009		
検出地区	11－K、12－K		
挿図番号	53、54		
図版番号	22		

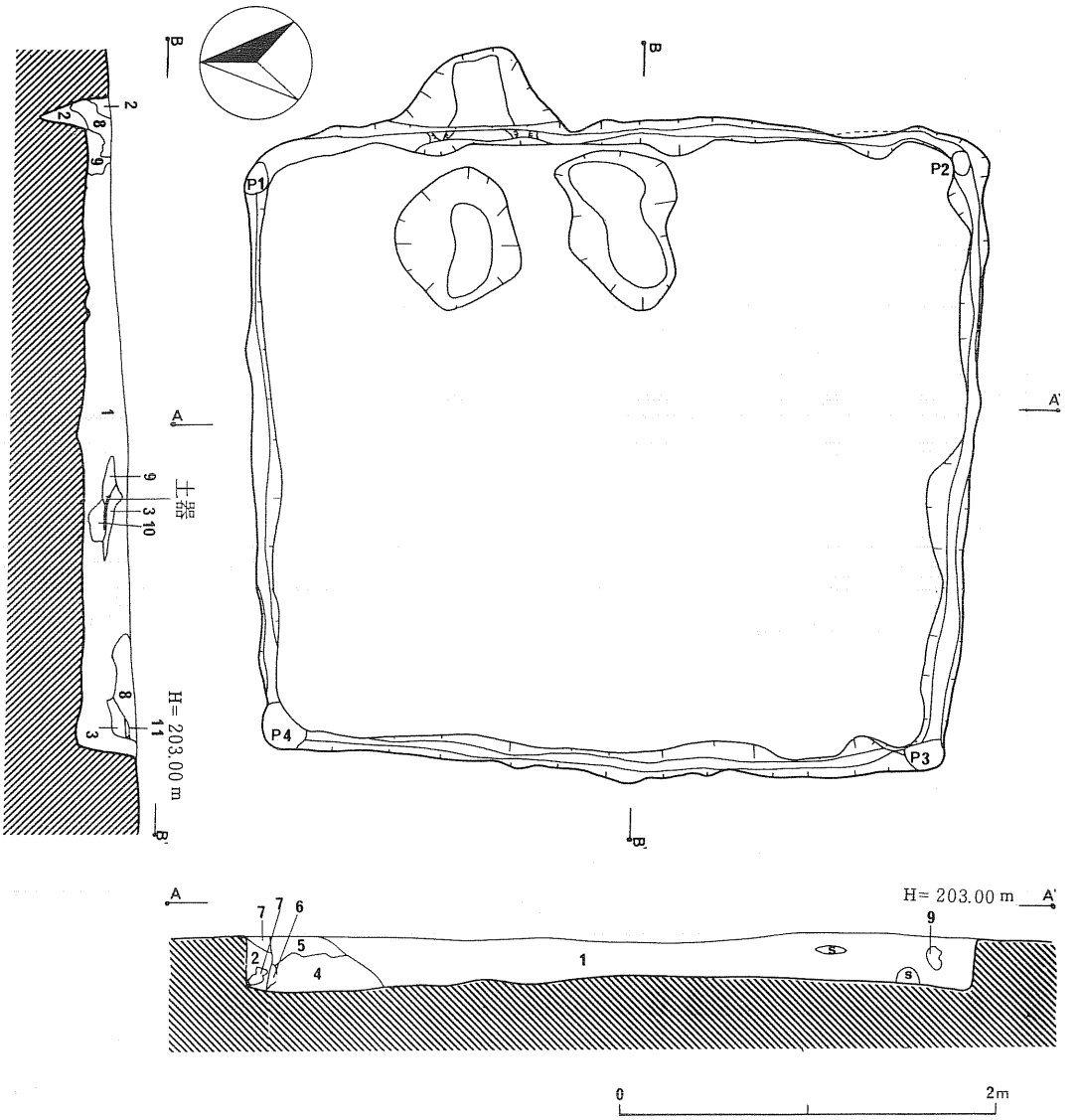
法量	cm	北壁	東壁	南壁	西壁
	壁長	302	392	328	357
	壁高	27	11	27	30
	壁溝幅	7～16	5～19	5～23	6～18
	壁溝深	—	—	—	—

形態	長方形	面積	13.4 ㎡	主軸方向	N－91.5°－E

確認	地山上面で確認した。
壁	残存状態は良く11～30cmの壁高を有し、床面より垂直に立ち上がる。
床面	若干の凹凸があり、軟弱である。
壁溝	壁溝幅、深さともほぼ同一の数値を示し、壁に沿い住居跡内を一巡する。
ピット	各コーナーにP_1～P_4が存在し、いずれも壁柱穴である。 P_1(28) P_2(25) P_3(31) P_4(26)
付設	

カマド	位置	東壁の北側寄り	素材	粘土、石
	残存状態は良好である。袖は、自然石を芯材として使用し、それに粘土を貼りつけて作り出している。 煙道は45cmを計り、ゆるやかに壁外に立ち上がる。			

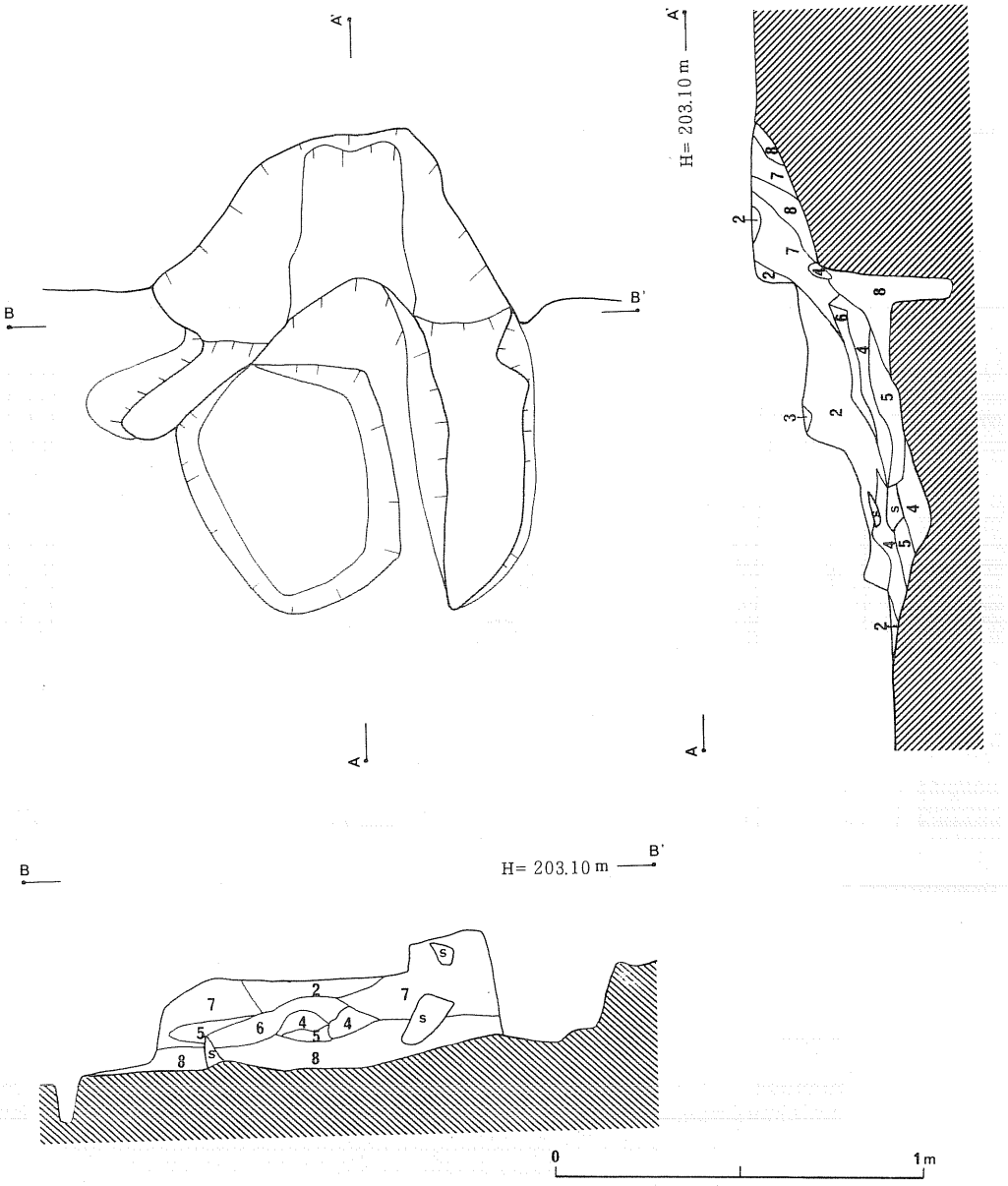
遺物とその出土状態	縄文土器、土師器坏、甕、須恵器甕
備考	



層	土色	備考
1	10YR 2/3 黒褐色	硬度：弱。粘性：強。焼土、炭化物、浮石、黄褐色土粒子微量混入。
2	10YR 3/4 暗褐色	粘性：強。砂粒多量混入。黄褐色土粒子微量混入。
3	10YR 2/2 黒褐色	硬度：弱。粘性：強。炭化物、黄褐色土粒子微量混入。
4	10YR 3/3 暗褐色	硬度：弱。浮石、炭化物、黄褐色土微量混入。
5	10YR 3/4 暗褐色	粘性：強。黄褐色土粒子、多量混入。炭化物微量混入。
6	10YR 3/2 黒褐色	硬度：弱。粘性：強。黄褐色土少量混入。

層	土色	備考
7	10YR 3/2 黒褐色	硬度：弱。粘性：強。浮石、炭化物黄褐色土微量混入。
8	10YR 3/2 黒褐色	硬度：弱。粘性：強。炭化物、黄褐色土粒子微量混入。
9	7.5YR 4/6 褐色	硬度：強。粘性：弱。焼土
10	10YR 7/4 にぶい黄橙	硬度：強。粘性：強。炭化物微量、暗褐色土少量混入。
11	10YR 7/6 明黄褐色	硬度：弱。粘性：強。浮石微量混入。

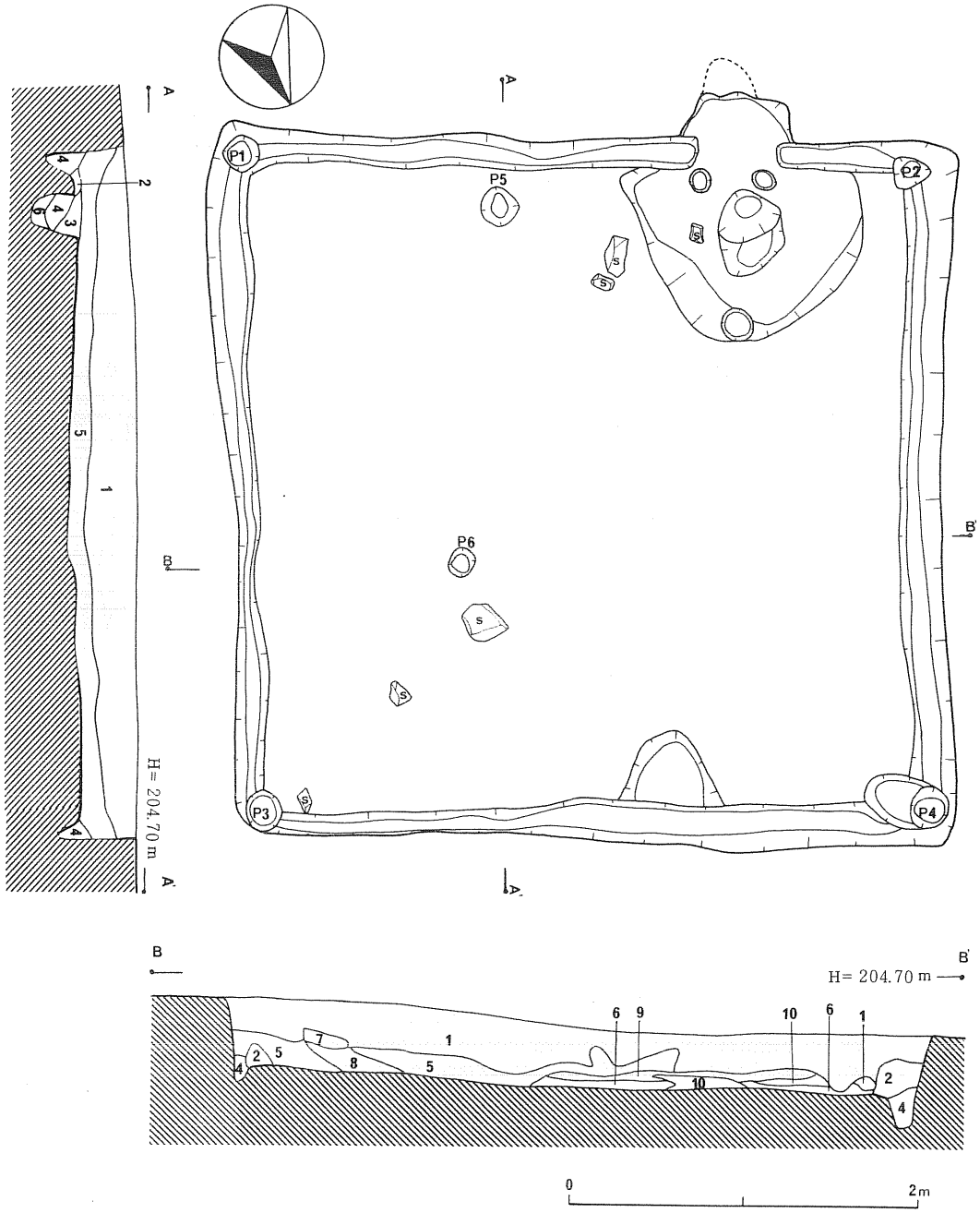
第53図　S I 009 竪穴住居跡実測図



層	土色	備考
1	10YR 2/3 黒褐色	硬度：弱、浮石、炭化物、黄褐色粒子微量混入。
2	10YR 3/2 黒褐色	硬度：弱、粘性：強、炭化物、黄褐色粒子微量混入。
3	5YR 4/6 明赤褐色	粘性：強。醵微量混入。
4	5YR 5/8 明赤褐色	硬度：強。

層	土色	備考
5	7.5YR 5/6 明褐色	醵微量混入。
6	10YR 5/6 黄褐色	粘性：強。
7	10YR 5/6 明黄褐色	硬度：強。粘性：強。
8	10YR 2/3 黒褐色	硬度：弱、粘性：強、炭化物、黄褐色粒子微量混入。

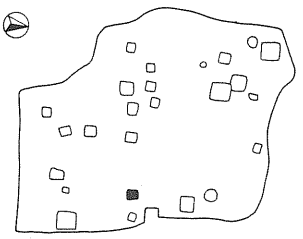
第54図　ＳＩ009 竪穴住居跡カマド実測図



層	土色	備考
1	10YR 3/1 黒褐色	硬度：弱。褐色粒子、炭化物、焼土微量混入。
2	10YR 3/1 黒褐色	硬度：弱。褐色粒子、多量混入。炭化物微量混入。
3	7.5YR 3/2 黒褐色	炭化物、焼土微量混入。
4	10YR 2/1 黒色	硬度：弱。褐色粒子、炭化物微量混入。
5	10YR 3/2 黒褐色	炭化物、褐色粒子混入。

層	土色	備考
6	5YR 2/1 黒褐色	炭化物、焼土、褐色粒子微量混入。
7	5YR 3/2 暗赤褐色	粘性：弱。焼土、炭化物混入。
8	7.5YR 2/1 黒色	炭化物多量混入。
9	10YR 2/1 黒色	硬度：弱。炭化物多量混入。焼土少量混入。
10	5Y 3/2 オリーブ黒色	焼土、褐色粒子微量混入。

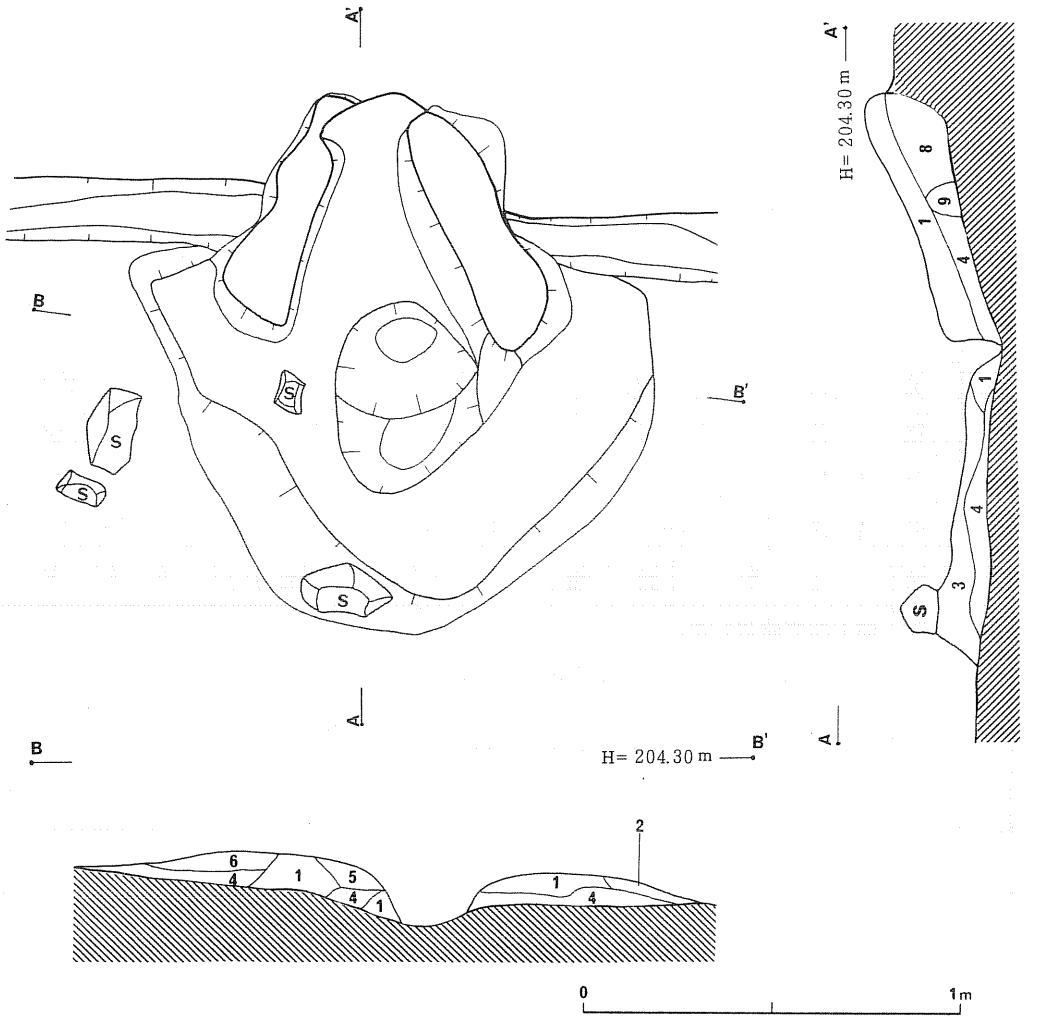
第55図　S I 010 竪穴住居跡実測図

第 48 表		遺構の位置	
遺構名	ＳＩ010		
検出地区	12—Ｂ、12—Ｃ 13—Ｂ、13—Ｃ		
挿図番号	55、56		
図版番号	23		

法量	cm	北壁	東壁	南壁	西壁
	壁長	395	396	417	400
	壁高	26～29	29～38	25～29	29～33
	壁溝幅	6～20	9～27	15～20	22～26
	壁溝深	10～14	11～13	8～10	15～21

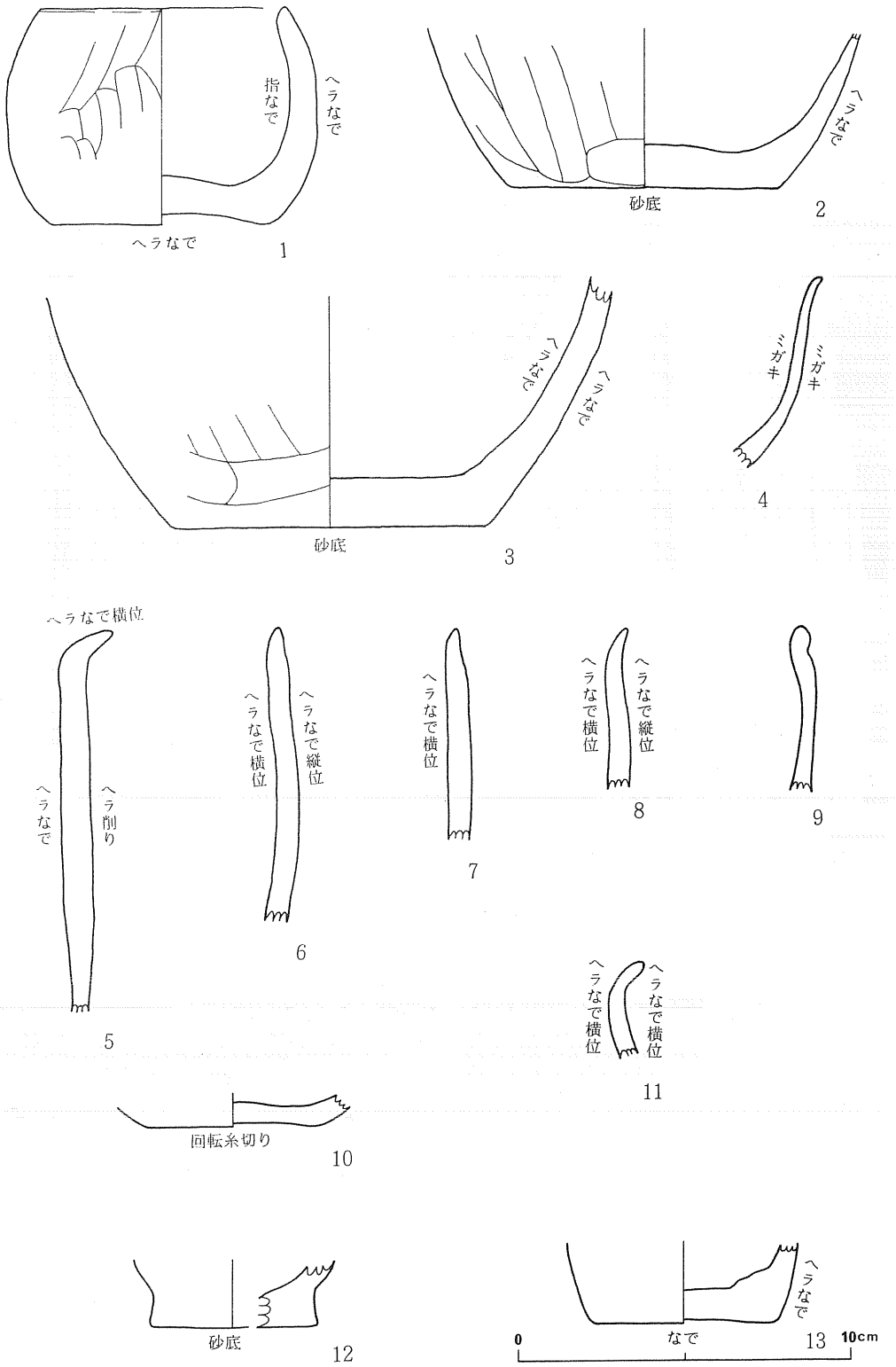
形態	方形	面積	16.7㎡	主軸方向	N—5°—E

確認	地山面で確認した。
壁	壁高は25～33cmを有し、存在状態は良好である。 壁は、床面より垂直に立ち上がる。
床面	若干の凹凸を示すが、堅くしまっている。
壁溝	壁溝幅６～26cm、深さ８～21cmと数値にばらつきを見せるが四壁に沿い住居跡内を一巡する。
ピット	各コーナー部４コ、床面に２コの計６コを検出した。 本住居跡の柱穴は、P_1～P_4 の柱穴であろう。 P_1（20） P_2（23） P_3（25） P_4（33） P_5（５） P_6（15）
付設	
カマド	位置：南壁の西側寄り　素材：粘土 残存状態は悪く、袖部は確認できなかった。 煙道は壁外に張り出しており、ほぼ垂直に立ち上がる。
遺物とその出土状態	縄文土器、土師器埦、甕
備考	

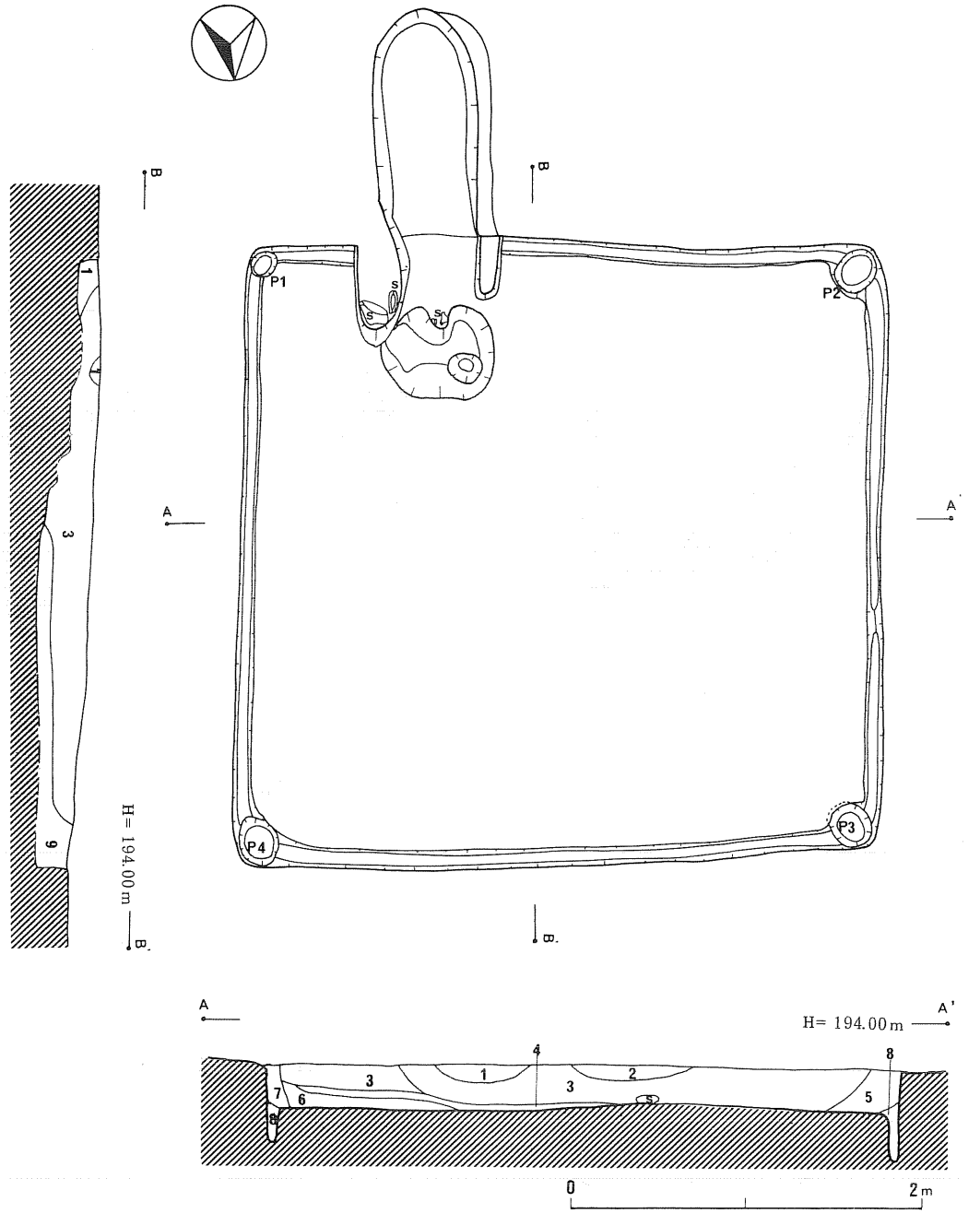


層	土　　色	備　　考
1	5 Y R 4/6 赤褐色	炭化物少量混入。
2	10Y R 3/6 褐色	硬度：強。炭化物少量混入。
3	7.5 Y R 4/6 赤褐色	硬度：弱。炭化物少量混入。
4	7.5 Y R 3/2 黒褐色	硬度：弱。炭化物少量混入。
5	5 Y R 4/6 赤褐色	炭化物少量混入。
6	7.5 Y R 3/1 黒色	炭化物、黄褐色土少量混入。
7	7.5 Y R 4/6 褐色	硬度：強。粘性：強。炭化物微量混入。

第56図　S I 010 竪穴住居跡カマド実測図



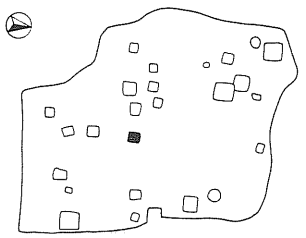
第57図　ＳＩ010竪穴住居跡出土土器



層	土色	備考
1	10YR 3/1 黒色	硬度：弱。粘性：弱。
2	10YR 3/1 黒褐色	硬度：弱。粘性：弱。黄色粘土粒多量混入
3	10YR 3/1 黒褐色	硬度：弱。粘性：弱。黄色粘土粒微量混入
4	10YR 1.7/1 黒色	粘性：弱。
5	10YR 5/2 灰黄褐色	硬度：弱。黄色ブロック粘土微量混入。

層	土色	備考
6	10YR 3/1 黒褐色	粘性：弱。浮石多量混入。
7	10YR 5/1 褐灰色	硬度：弱。粘性：弱。
8	10YR 5/1 褐灰色	硬度：弱。粘性：弱。黄褐粘土ブロック微量混入。
9	10YR 3/1 黒褐色	黄色粘土粒、浮石微量混入。

第58図　ＳＩ011竪穴住居跡実測図

第 49 表		遺構の位置	
遺構名	SI011		
検出地区	12—F、13—F		
挿図番号	58、59		
図版番号	23、24		

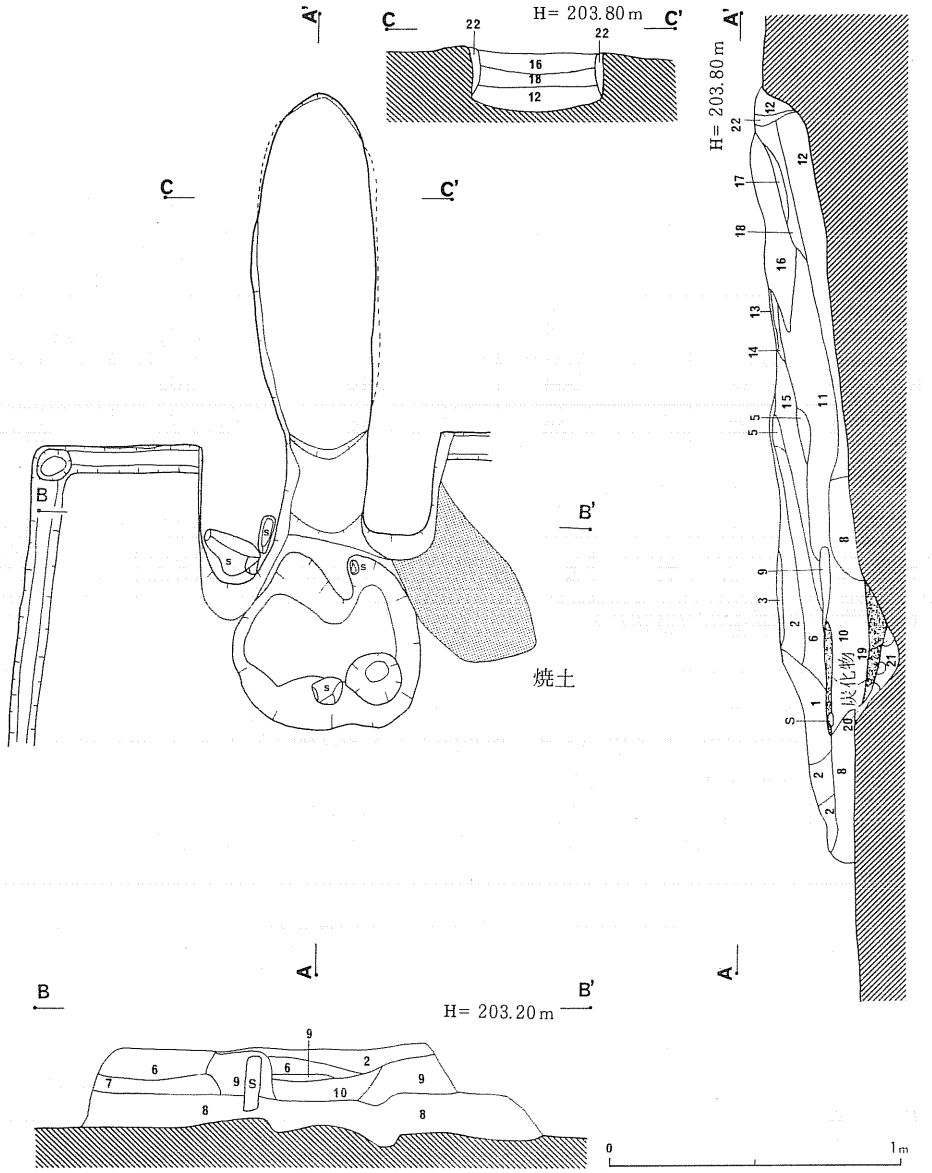
法量	cm	北壁	東壁	南壁	西壁
	壁長	364	348	360	344
	壁高	23	24～38	24～26	24～34
	壁溝幅	9～13	8～12	8～11	7～12
	壁溝深	7	5～25	13～16	13～22

形態	方形	面積	14.0 ㎡	主軸方向	N—7.5°—W

確認	黒色土中で確認した。
壁	いずれの壁も、しっかりとした作りで23～38cmを計り、床面よりほぼ垂直に立ち上がる。
床面	貼床が施され平坦である。住居跡内中央部は堅くしまるが、壁に近づくにつれ軟弱になる。
壁溝	カマド部分を除きほぼ同一幅、深さで住居跡内を一巡する。
ピット	各コーナー部壁溝内に P_1～P_4 の柱穴が存在する。 P_1(20) P_2(30) P_3(30) P_4(28)
付設	

カマド	位置	南壁の東側寄り	素材	粘土、石
	残存状態は非常に良い。袖部は扁平な自然石を芯材として、それに粘土を貼りつけてつくられている。燃焼部は、鍋底状に掘り込んである。 煙道は142cmを計り、ゆるやかに壁外へ立ち上がる半地下式のものである。			

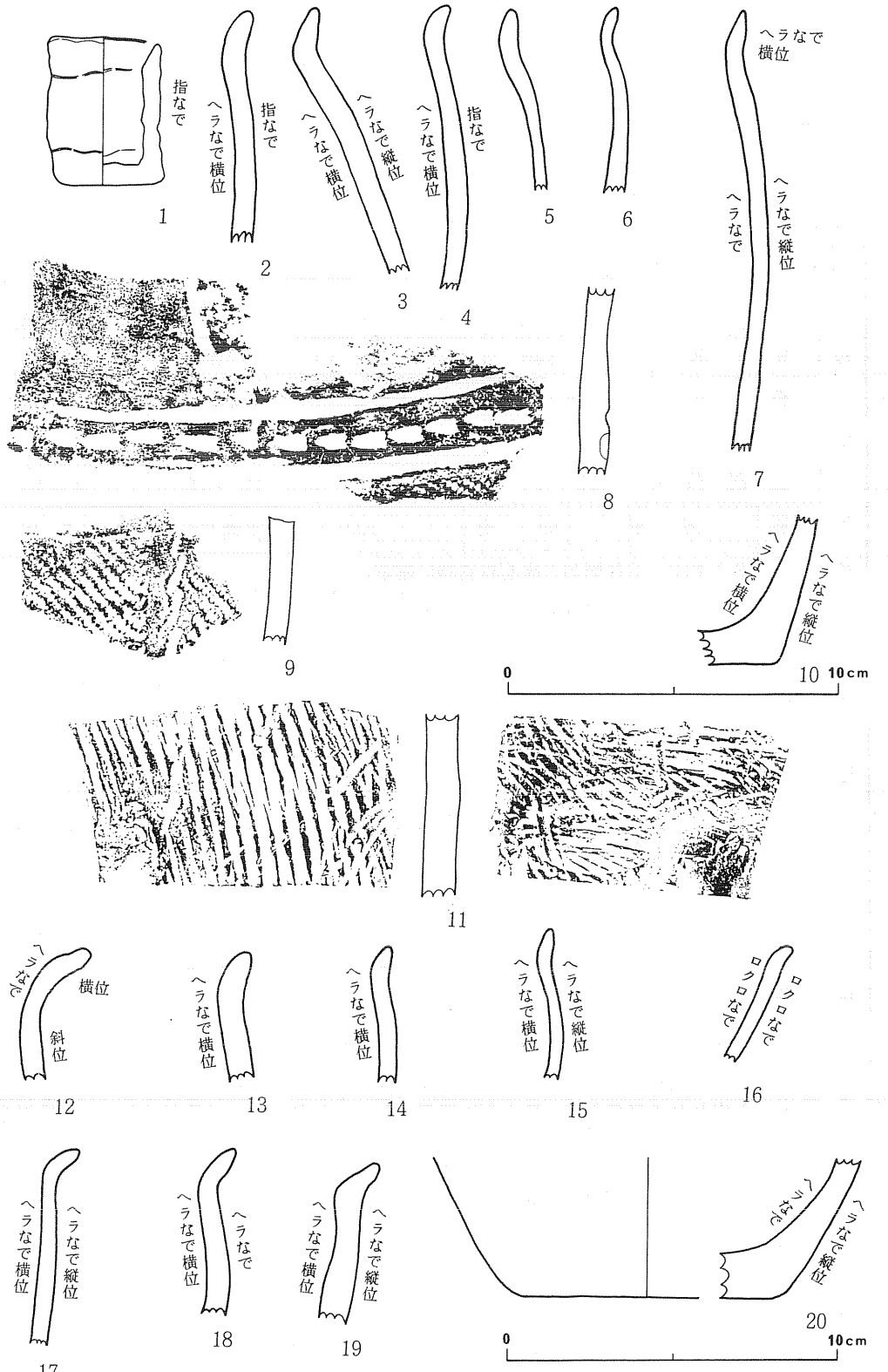
遺物とその出土状態	縄文土器片、土師器甕
備考	



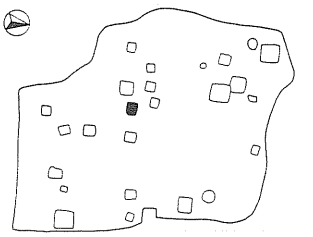
層	土色	備考
1	7.5 Y R 3/1 黒褐色	硬度：弱。粘性：弱。
2	7.5 Y R 3/3 暗褐色	硬度：弱。粘性：弱。浮石、黄色粘土粒子微量混入。
3	5 Y R 3/1 黒褐色	硬度：弱。粘性：弱。
5	7.5 Y R 6/4 にぶい橙色	粘性：強。
6	10 Y R 4/3 にぶい黄褐色	硬度：弱。
7	10 Y R 2/1 黒色	浮石微量混入。
8	10 Y R 3/1 黒褐色	粘性：弱。浮石少量混入。
9	7.5 Y R 6/4 にぶい橙色	粘性：強。焼土、炭化物微量混入。
10	7.5 Y R 5/6 明褐色	
11	10 Y R 5/4 褐色	硬度：弱。粘性：弱。

層	土色	備考
12	7.5 Y R 2/1 黒色	粘性：弱。
14	5 Y R 5/4 にぶい赤褐色	
15	2.5 Y R 4/8 赤褐色	
16	10 Y R 7/3 にぶい黄橙色	粘性：強。
17	10 Y R 5/4 にぶい黄橙色	
18	7.5 Y R 5/4 褐色	
19	10 Y R 3/1 黒褐色	硬度：弱。
20	10 Y R 3/1 明黄褐色	浮石微量混入。
21	10 Y R 5/8 明赤褐色	粘性：弱。
22	2.5 Y R 5/6 明赤褐色	赤化した粘土。

第59図　S I 011 竪穴住居跡カマド実測図



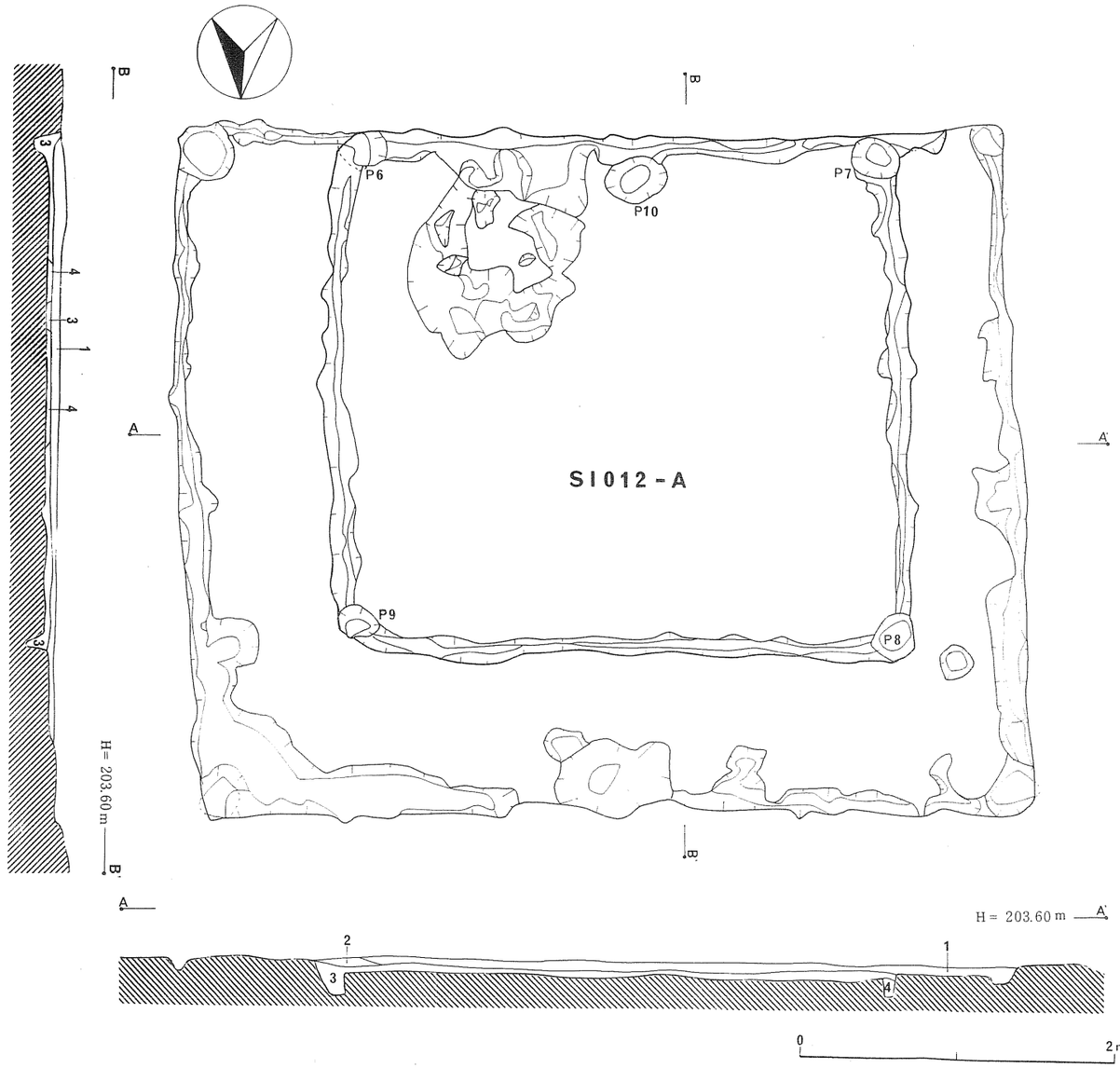
第60図　ＳＩ011・012竪穴住居跡出土土器

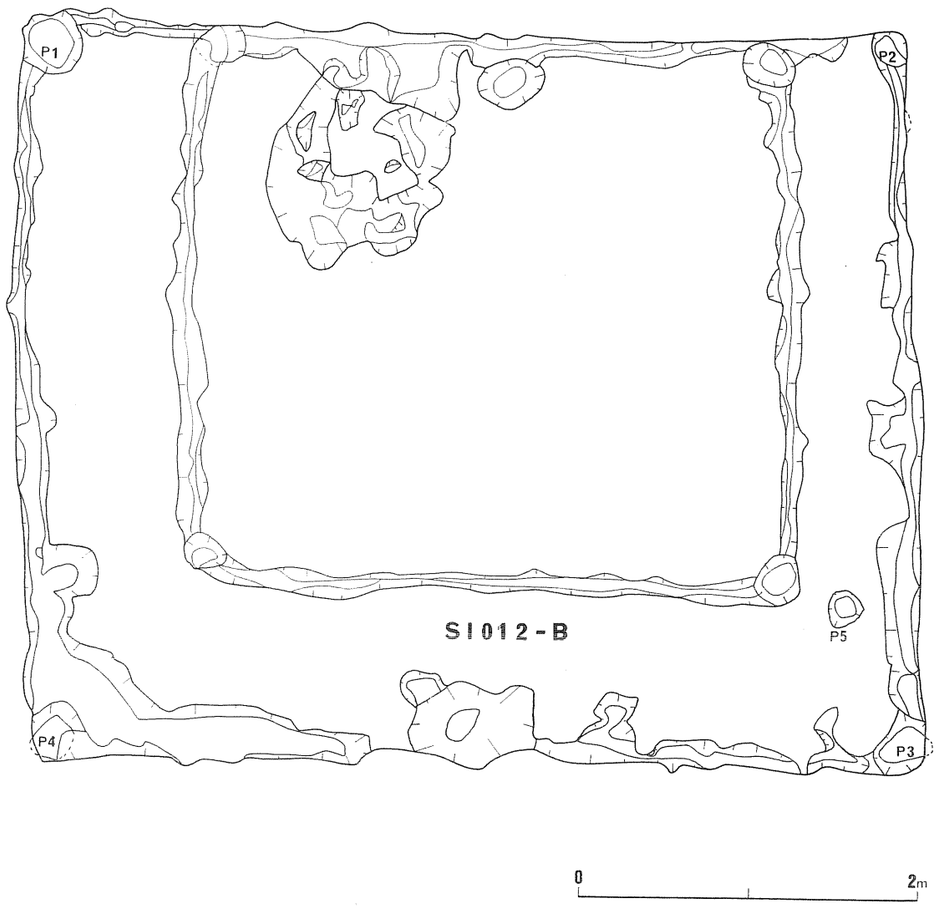
第 50 表		遺構の位置	
遺構名	ＳＩ012－A		
検出地区	12－Ⅰ		
挿図番号	61、62		
図版番号	24、25		

法量	cm	北壁	東壁	南壁	西壁
	壁長	348	312	351	315
	壁高	5～7	1～5	2～6	1～6
	壁溝幅	8～12	8～17	10～20	8～15
	壁溝深	10～14	1～12	10～15	9～16

形態	方形	面積	12.0 ㎡	主軸方向	N－1°－W

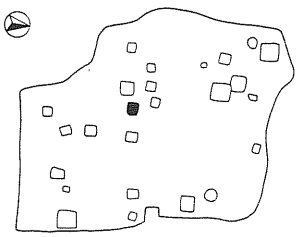
確認	ＳＩ012－B住居跡の床面精査時に確認した。
壁	ＳＩ012－B住居跡と重複するため、残存状態は悪く、1～7㎝の壁高を有する。
床面	10～20㎝ほどの厚さの貼床を施し、平坦で堅くしまっている。
壁溝	壁溝幅8～20㎝、深さ1～16㎝と若干の浅深は認められるが、四壁に沿い一巡する。
ピット	各コーナー及び、南壁中央部に P_5～P_9 の計5コの Pitを検出したが、P_5～P_8 が本住居跡の柱穴であろう。 P_6（50） P_7（10） P_8（40） P_9（36） P_{10}（8）
付設	
カマド	位置：南壁の東寄り　素材：粘土使用か石 カマド残存状態は悪い。袖部粘土は確認できなかったが、芯材として使用されたと思われる自然石が、地山面に設置されたかたちで2カ所確認できた。燃焼部奥が多くの熱をうけ赤みを帯びている。煙道は、壁とともに垂直に立ち上がる。カマドの位置から考えるとＳＩ012－B時期に再使用された可能性が考えられる。
遺物とその出土状態	縄文土器、土師器坏、甕、鉄滓
備考	





層	土　　色	備　　考
1	10YR 2/3 黒褐色	硬度：強。粘性：強。黄褐色土少量混入。小石微量混入。
2	10YR 5/8 黄褐色	硬度：強。
3	10YR 3/4 暗褐色	粘性：強。黄褐色土少量混入。
4	7.5YR 5/6 明褐色	硬度：強。粘性：弱。赤褐色土少量混入。礫微量混入。

第61図　ＳＩ012－Ａ・Ｂ竪穴住居跡実測図

第 51 表		遺構の位置	
遺構名	ＳＩ012－Ｂ		
検出地区	12－Ｉ、12－Ｊ 13－Ｉ、13－Ｊ		
挿図番号	61		
図版番号	25		

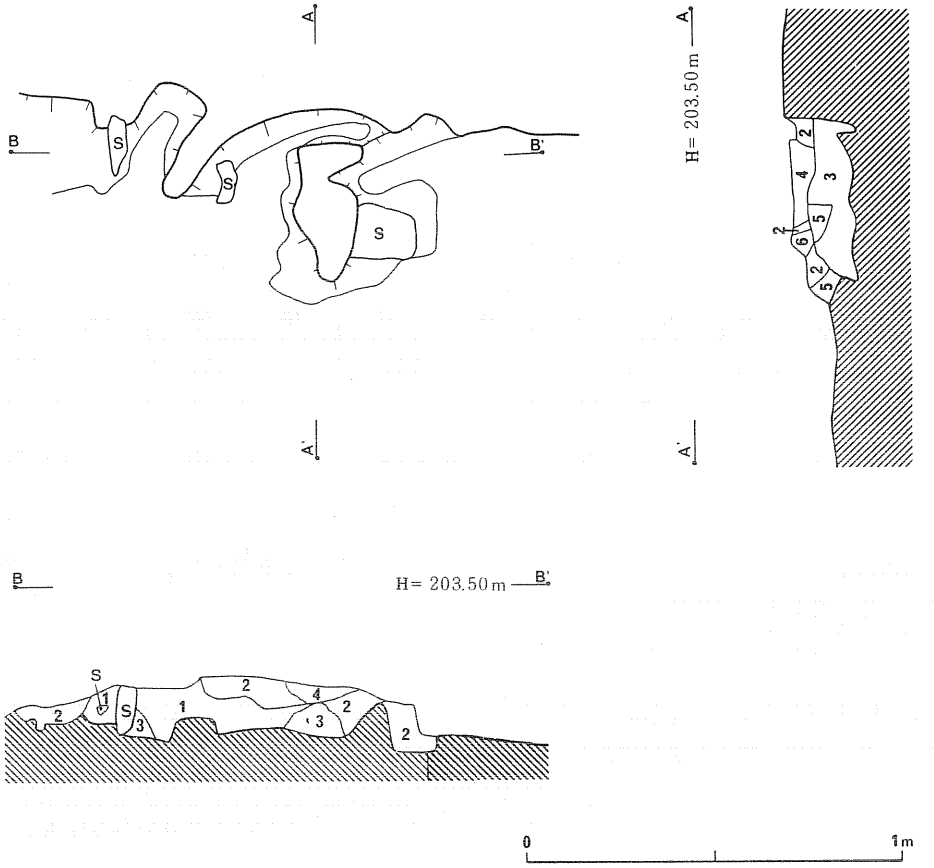
法量	cm	北壁	東壁	南壁	西壁
	壁長	521	440	518	435
	壁高	7～10	1～4	2～6	1～5
	壁溝幅	12～17	9～19	13～20	9～22
	壁溝深	2～5	2～5	10～15	8～9

形態	長方形	面積	22.6㎡	主軸方向	N－1°－W

確認	地山上面で確認した。
壁	壁の残存状態は悪く、1～10cmを有する。
床面	ＳＩ012－Ａ住居跡に貼床を施し、他は地山面を使用して床面を作り出している。平坦で堅くしまっており、カマド付近は著しい。
壁溝	壁に沿い一巡する。又、南壁溝は、ＳＩ012－Ｂ住居跡の壁溝を再度使用し、東西に延長している。
ピット	各コーナーに、P_1～P_4が確認され、これらが本住居跡の柱穴であろう。 P_1（35） P_2（20） P_3（40） P_4（36） P_5（10）
付設	

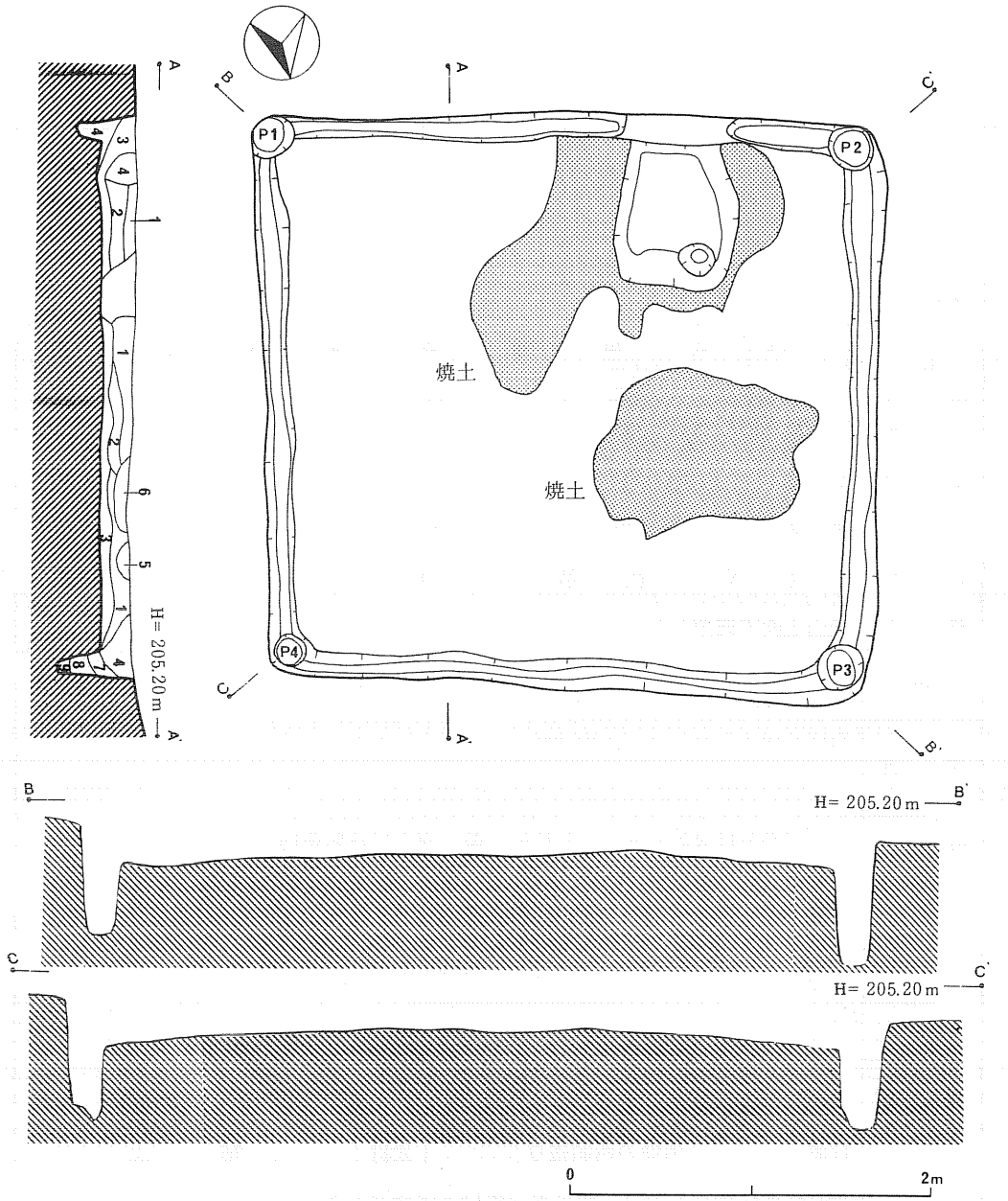
カマド	位置	南壁の中央やや東寄り	素材	粘土
	重複するＳＩ012－Ａ、Ｂ内にはカマドが一基しか確認されず、ＳＩ012－Ｂの時期にＳＩ012－Ａのカマドがひきつづき使用されたと思われる。			

遺物とその出土状態	縄文土器、土師器甕、須恵器
備考	



層	土　　色	備　　考
1	10YR 3/4 暗褐色	硬度：強。粘性：弱。黄褐色土、赤褐色土微量混入。
2	10YR 2/3 黒褐色	硬度：弱。粘性：弱。赤褐色土微量混入。
3	10YR 5/6 黄褐色	硬度：弱。粘性：強。暗褐色土少量混入。
4	7.5YR 5/6 明褐色	硬度：強。黄褐色土、赤褐色土微量混入。
5	10YR 3/4 褐色	粘性：強。黄褐色土、赤褐色土微量混入。
6	10YR 6/4 にぶい黄橙色	粘性：強。炭化物、黄褐色粒子微量混入。

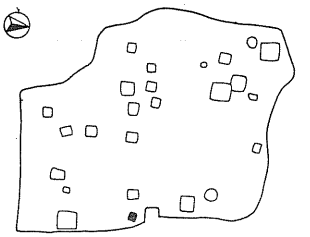
第62図　ＳＩ012－Ａ・Ｂ竪穴住居跡カマド実測図



層	土色	備考
1	10YR 3/2 黒褐色	硬度：強。粘性：弱。黄褐色土粒子少量混入、浮石微量混入。
2	10YR 1.7/1 黒色	硬度：弱。黄褐色土粒子少量混入、浮石微量混入。
3	10YR 3/1 黒色	硬度：弱。黄褐色土粒子、浮石、炭化物微量混入。
4	10YR 3/3 黒褐色	硬度：強。粘性：弱。黄褐色土粒子微量混入。浮石少量混入。
5	10YR 3/2 黒褐色	硬度：弱。粘性：弱。シルト質。黄褐色土粒子、浮石微量混入。

層	土色	備考
6	10YR 3/3 暗褐色	硬度：弱。粘性：弱。シルト質。浮石、炭化物微量混入。
7	10YR 5/6 黄褐色	粘性：弱。黄褐色土粒子、浮石微量混入。
8	10YR 3/4 暗褐色	硬度：弱。粘性：弱。黄褐色土粒子微量混入。
9	10YR 5/6 明黄褐色	硬度：弱。黄褐色土粒子微量混入。

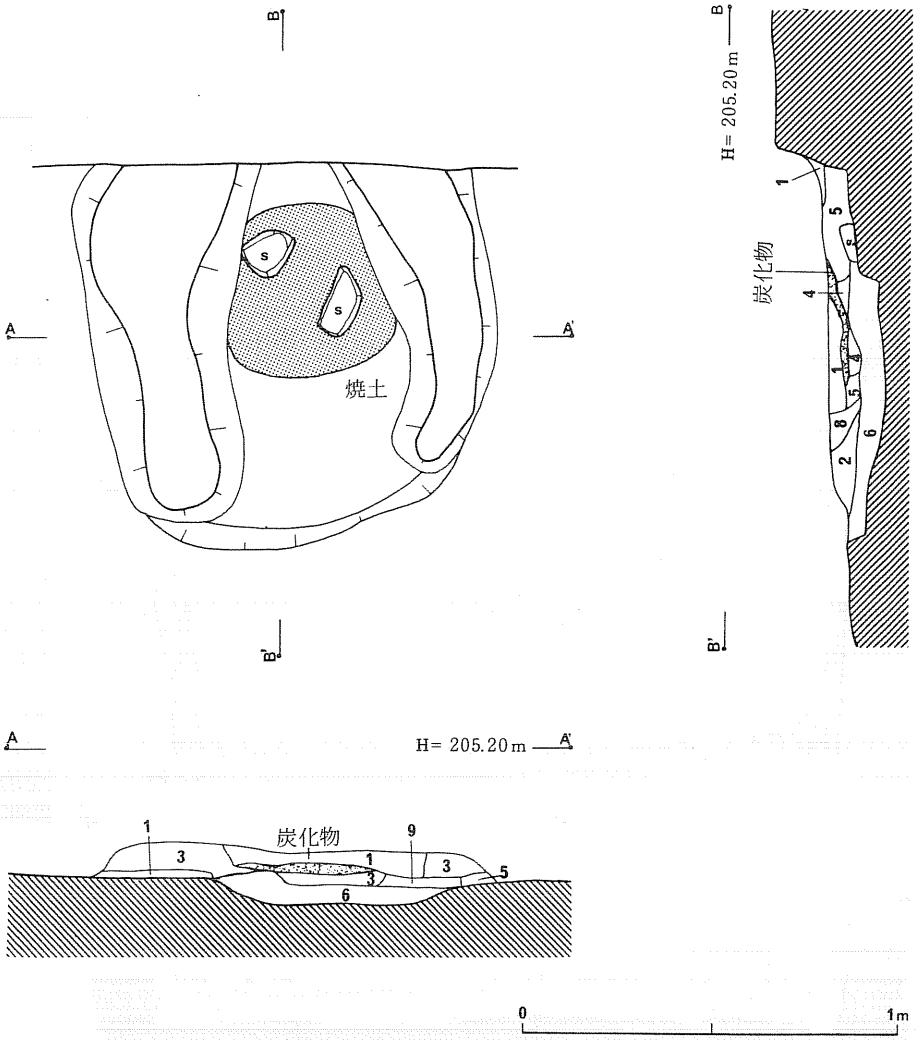
第63図　S I 013 竪穴住居跡実測図

第 52 表		遺構の位置	
遺構名	ＳＩ013		
検出地区	13—Ａ、14—Ａ		
挿図番号	63、64		
図版番号			

法量	cm	北壁	東壁	南壁	西壁
	壁長	322	302	343	314
	壁高	15	20	21	17
	壁溝幅	12～19	13～18	10～16	14～23
	壁溝深	35	27	26	32

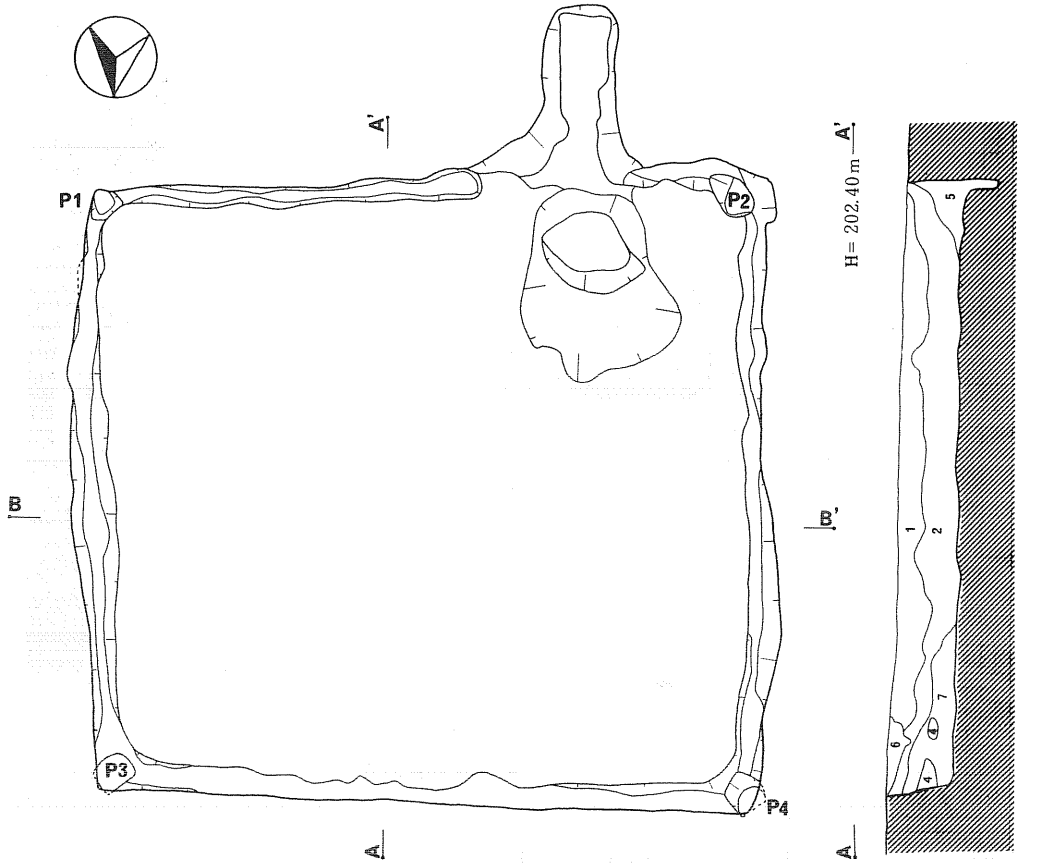
形態	方形	面積	10.8㎡	主軸方向	N—13°—E

確認	地山上面で確認した。
壁	四壁ともしっかりとした作りで、15～21cmの壁高を計り、床面よりほぼ垂直に立ち上がる。
床面	貼床が施されており、平坦で堅くしまっている。
壁溝	カマド部分は欠如するが、ほぼ同一幅、深さで住居跡内を一巡する。
ピット	各コーナー部の壁溝内にP_1～P_4の柱穴を有する P_1(43) P_2(52) P_3(42) P_4(37)
付設	
カマド	位置：南壁の西側寄り　素材：粘土 残存状態は良好であり、袖部及び燃焼部を確認できた。 袖は粘土により構築され、煙道は壁とともに立ち上がる。
遺物とその出土状態	
備考	



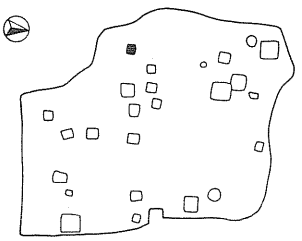
層	土　　色	備　　考
1	7.5 Y R $^{2}/_{1}$ 黒色	硬度：強。粘性：強。浮石、黄褐色土微量混入。
2	7.5 Y R $^{1}/_{2}$ 黒褐色	炭化物微量混入。
3	7.5 Y R $^{6}/_{4}$ にぶい橙色	硬度：強。粒性：強。赤褐色土少量混入。
4	7.5 Y R $^{7}/_{8}$ 黄橙色	粘性：強。
5	7.5 Y R $^{4}/_{6}$ 褐色	炭化物微量混入。
6	5 Y R $^{5}/_{8}$ 明赤褐色	
7	7.5 Y R $^{1.7}/_{1}$ 黒色	粘性：弱。浮石、黄褐色粒子微量混入。
8	7.5 Y R $^{3}/_{1}$ 黒褐色	炭化物、黒色粒子微量混入。
9	5 Y R $^{4}/_{8}$ 赤褐色	黒褐色粒子微量混入。

第64図　S I 013 竪穴住居跡カマド実測図



層	土　　色	備　　考
1	10YR 4/4 褐色	黄褐色粒子。炭化物微量混入。
2	10YR 4/6 褐色	硬度：弱。粘性：強。黄褐色土、炭化物微量混入。
3	10YR 5/6 褐色	
4	10YR 6/8 明黄褐色	硬度：弱。粘性：強。
5	10YR 4/4 褐色	
6	10YR 3/4 暗褐色	硬度：弱。黒褐色土、黄褐色土微量混入。
7	10YR 4/6 褐色	
8	10YR 4/3 にぶい黄褐色	硬度：弱。粘性：弱。暗褐色土微量混入。
9	10YR 7/4 にぶい黄橙色	

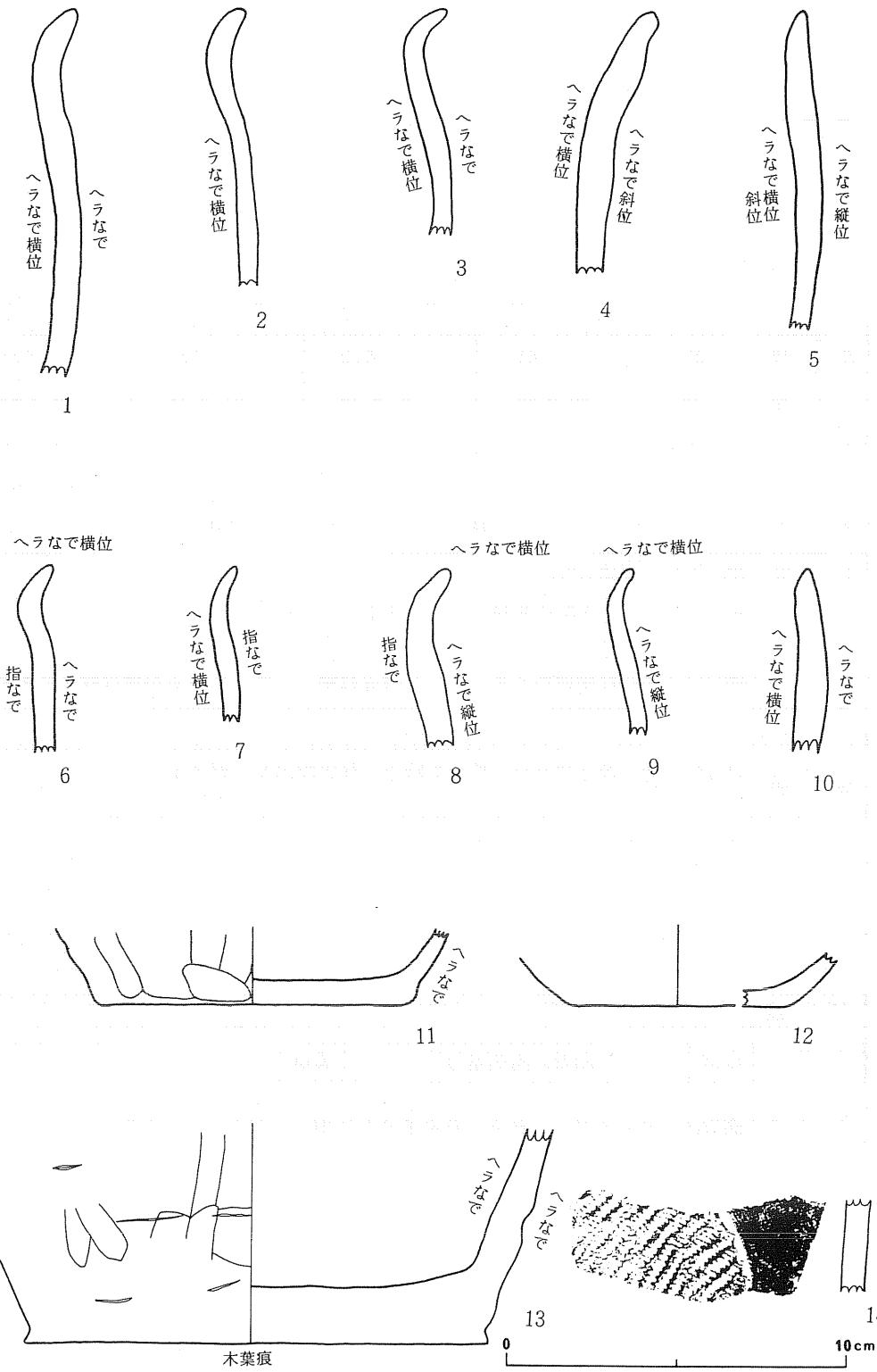
第65図　ＳＩ014竪穴住居跡実測図

第 53 表		遺構の位置	
遺構名	SI 014		
検出地区	12—N、12—O 13—N、13—O		
挿図番号	65		
図版番号	25		

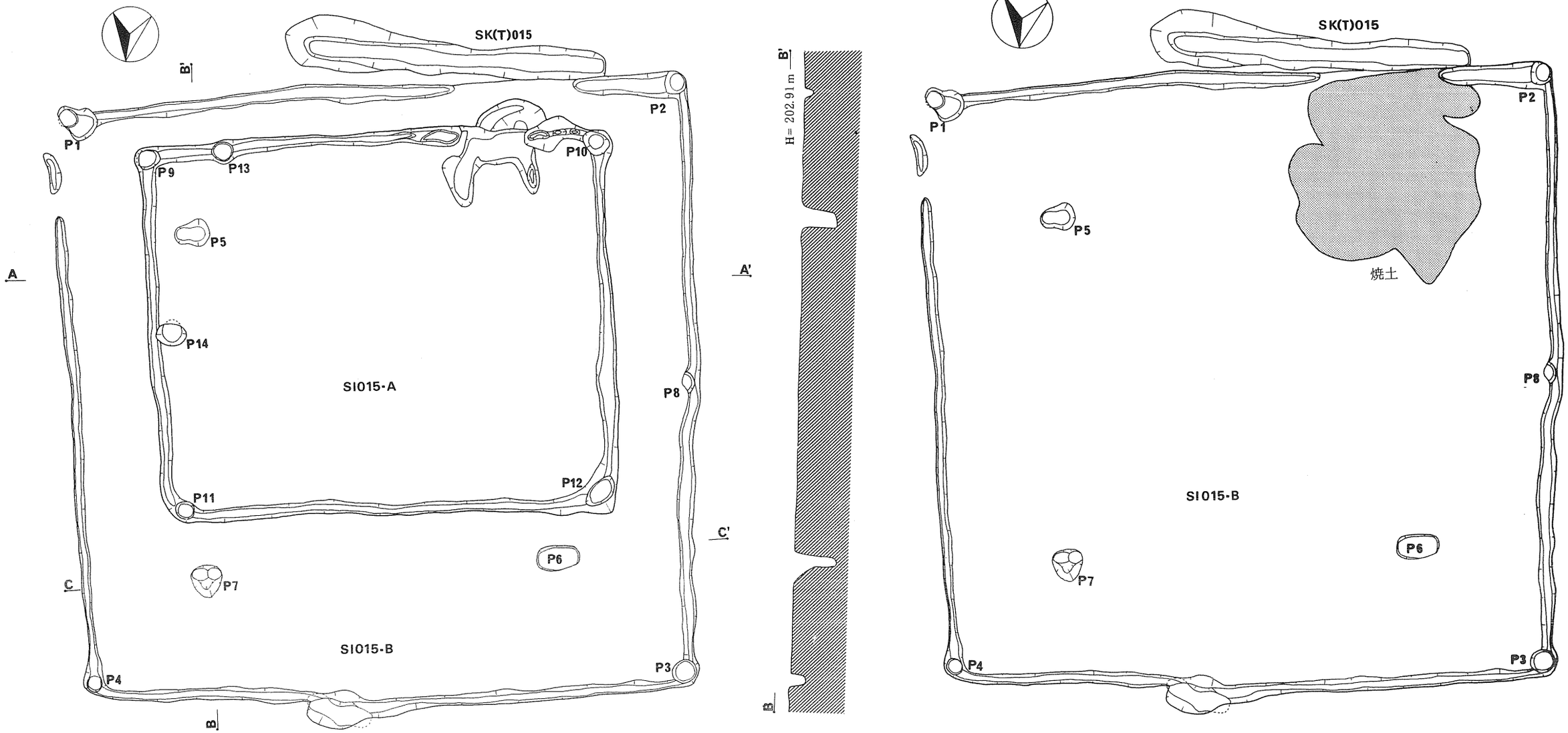
法量	cm	北壁	東壁	南壁	西壁
	壁長	446	415	462	437
	壁高	30～44	50～54	51～52	29～42
	壁溝幅	9～20	11～30	10～16	9～23
	壁溝深	18～31	12～21	12～21	13～23

形態	方形	面積	21.0 ㎡	主軸方向	N—13°—E

確認	地山上面で確認した。
壁	傾斜地のため住居跡北西部は、地山上面よりの掘り込みが浅い。 壁は、垂直又はわずかに内反しながら立ち上がる。
床面	西にゆるやかな傾斜を示す。カマド付近は堅くしまっているが他は軟弱である。
壁溝	ほぼ同一幅、深さでカマド部分を除き、住居跡内を一巡する。
ピット	各コーナー部に P_1～P_4 の壁柱穴が存在する。 P_1(38) P_2(46) P_3(36) P_4(45)
付設	
カマド	位置：南壁の西側寄り　素材：粘土 袖部の粘土は流出が激しく、基部を確認したのみである。 煙道は 165 cmを計り、床面よりゆるやかに地山上面まで立ち上がる。
遺物とその出土状態	縄文土器、土師器坏、甕、須恵器壺
備考	

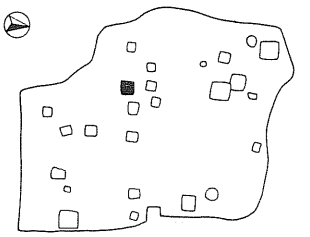


第66図　S I 014 竪穴住居跡出土土器



層	土　　色	備　　考
1	10YR 2/2 黒褐色	焼土粒子、褐色粒子少量混入。
2	10YR 3/3 暗褐色	炭化物少量混入。褐色粒子多量混入。
3	10YR 2/1 黒色	炭化物微量混入。褐色粒子少量混入。
4	10YR 3/2 黒褐色	褐色粒子少量混入。
5	5YR 4/8 赤褐色	炭化物少量混入。褐色粒子混入。
6	10YR 2/2 黒褐色	炭化物少量混入。褐色粒子多量混入。

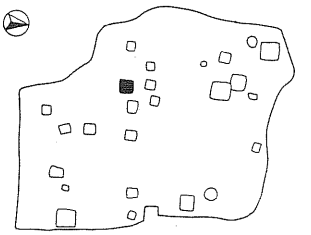
第67図　ＳＩ015－Ａ・Ｂ竪穴住居跡実測図

第 54 表		遺構の位置	
遺構名	ＳＩ015－A		
検出地区	13－Ｊ、13－K 14－Ｊ、14－K		
挿図番号	67		
図版番号	26		

	cm	北　壁	東　壁	南　壁	西　壁
法量	壁長	460	394	502	395
	壁高	—	—	0～5	—
	壁溝幅	11～15	11～16	8～27	8～21
	壁溝深	23～25	20～23	21	20～29

形態	方形	面積	19.9㎡	主軸方向	N－7°－W

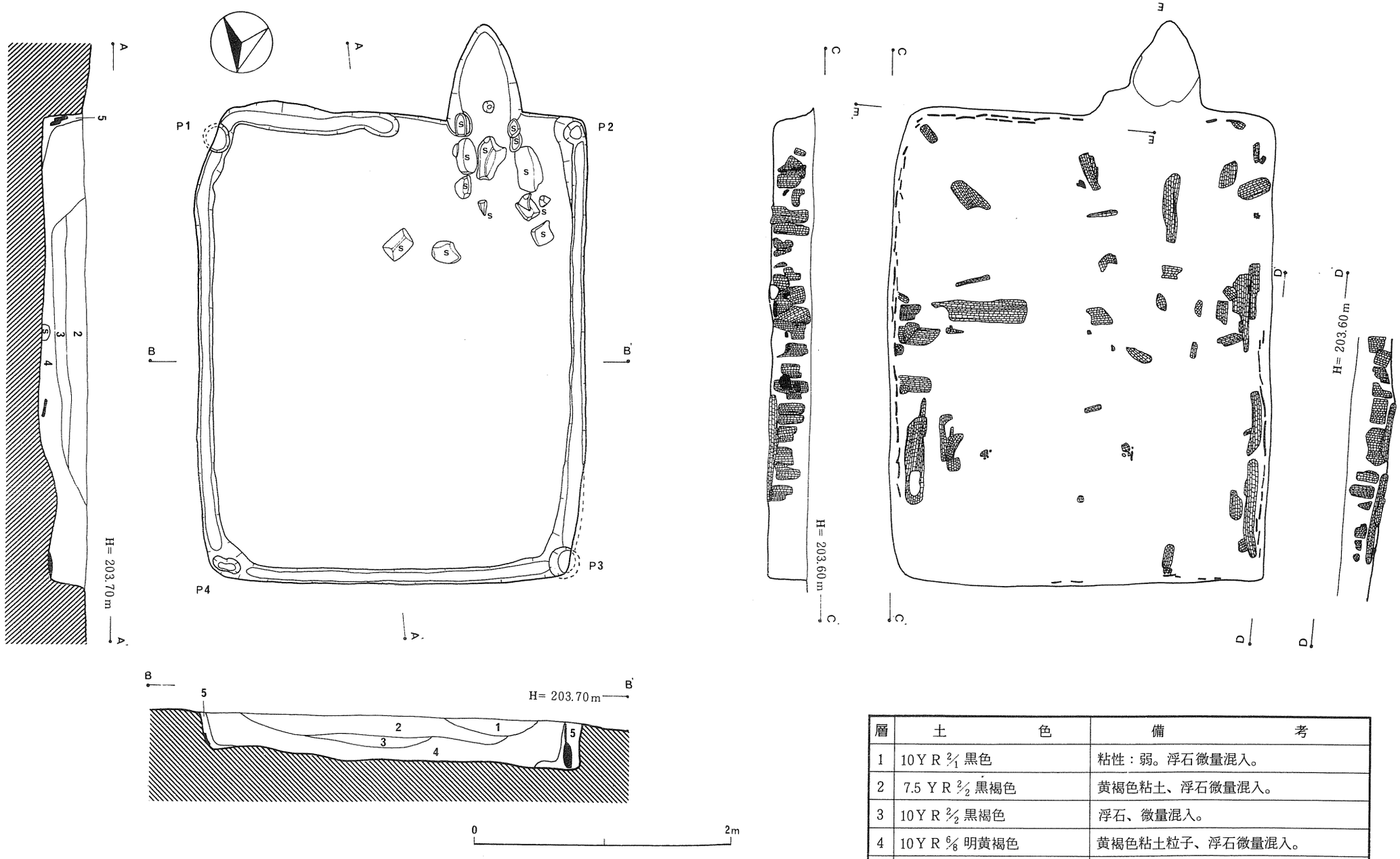
確認	ＳＩ015－B住居跡床面上で確認した。
壁	カマド周辺の壁を残すのみで、他は確認されなかった。
床面	
壁溝	カマド東側を除いて同一幅、深さで一巡する。
ピット	四壁溝によって作られている。各コーナー部にP_9～P_{12}が床面、壁溝内にP_{13}～P_{14}が存在する。 P_9(32)　P_{10}(42)　P_{11}(30)　P_{12}(38)　P_{13}(21)　P_{14}(21)
付設	
カマド	位置：南壁の西側寄り　素材：粘土 ＳＩ015－Bを拡張する際、本住居跡内に貼床を施していたため、僅かながら袖部、燃焼部焼土を確認できた。 燃焼部ほぼ中央に支脚と考えられるにぎり拳大の石を検出した。
遺物とその出土状態	縄文土器、土師器甕、須恵器
備考	本住居跡はＳＩ015－Bと重複しており、新旧関係は、ＳＩ015－A（旧）→ＳＩ015－B（新）である。なお、ＳＫ(Ｔ)015をも切っている。

第 55 表		遺構の位置	
遺構名	ＳＩ015－Ｂ		
検出地区	13－Ｊ、13－Ｋ 14－Ｊ、14－Ｋ		
挿図番号	67		
図版番号	26		

法量	cm	北壁	東壁	南壁	西壁
	壁長	642	625	665	650
	壁高	—	—	—	—
	壁溝幅	9～19	6～13	9～15	10～18
	壁溝深	15～33	10～15	4～20	17～26

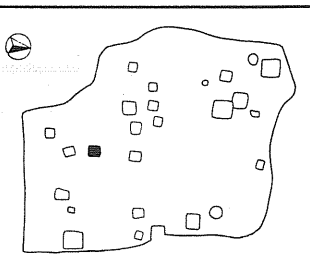
形態	方形	面積	43.6 ㎡	主軸方向	N－7°－W

確認	地山上面において、壁溝及びカマド焼土範囲を確認した。
壁	確認できなかった。
床面	
壁溝	カマド位置を除き、同一幅、深さで一巡する。
ピット	各コーナーにP_1～P_4、対角線上にP_5～P_7、西壁中央にP_8を確認した。 P_1(27) P_2(41) P_3(44) P_4(26) P_5(36) P_6(57) P_7(46) P_8(45)
付設	
カマド	位置：南壁の西側寄り　素材： 残存状態は非常に悪く、焼土範囲のみ確認できた。
遺物とその出土状態	
備考	本住居跡は水田耕作の為、床面直上まで削平されており、カマド、壁については観察できなかった。本住居跡は、ＳＩ015－Ａ、ＳＫ(Ｔ)003が重複、切合いをしており、新旧関係は、ＳＫ(Ｔ)003→ＳＩ015－Ａ→ＳＩ015－Ｂの順である。



第68図　ＳＩ016竪穴住居跡および炭化材出土状況実測図

層	土　　色	備　　考
1	10ＹＲ 2/1 黒色	粘性：弱。浮石微量混入。
2	7.5ＹＲ 2/2 黒褐色	黄褐色粘土、浮石微量混入。
3	10ＹＲ 2/2 黒褐色	浮石、微量混入。
4	10ＹＲ 6/8 明黄褐色	黄褐色粘土粒子、浮石微量混入。
5	10ＹＲ 2/1 黒色	硬度：弱。粘性：弱。炭化物、炭化材混入。

第 56 表		遺構の位置	
遺構名	ＳＩ016		
検出地区	16－Ｇ、16－Ｈ		
挿図番号	68、69		
図版番号	27、28、29、30		

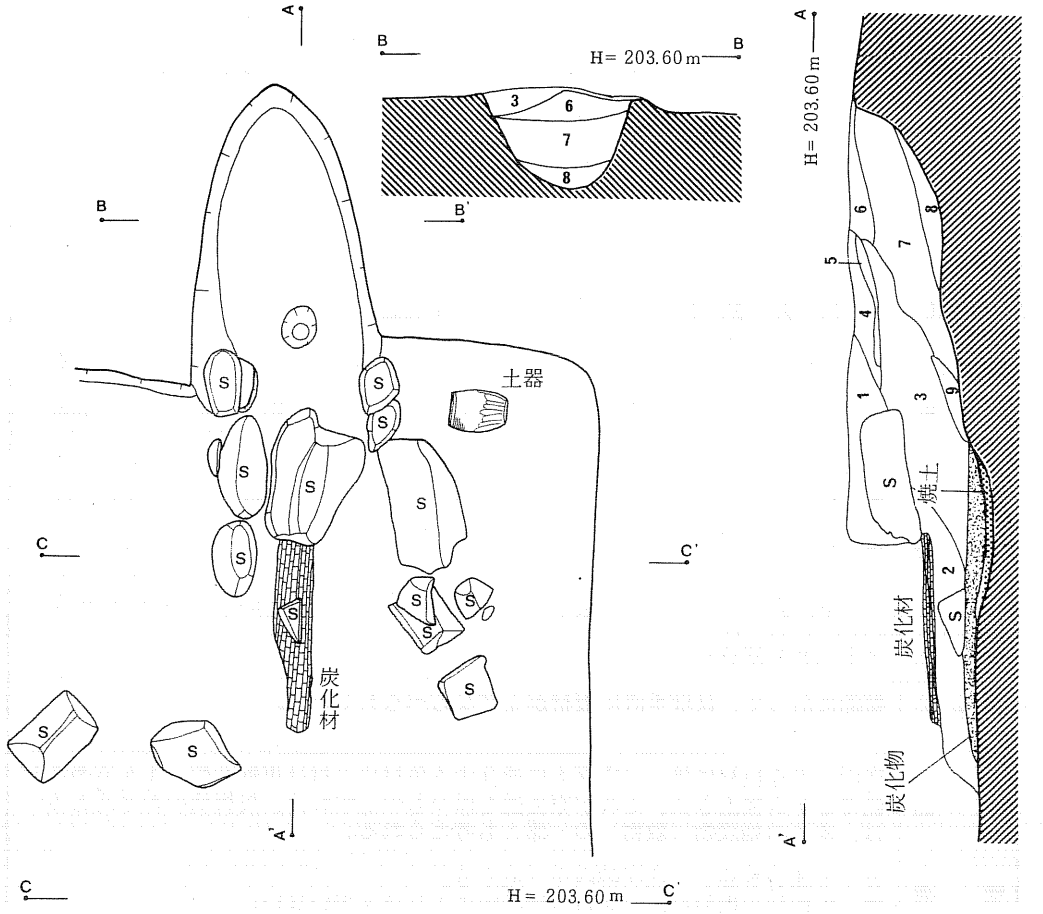
法量	cm	北壁	東壁	南壁	西壁
	壁長	274	361	273	350
	壁高	30～33	32～36	38	30～36
	壁溝幅	11～13	9～15	13～22	10～15
	壁溝深	29～44	30～32	21～23	30～33

形態	長方形	面積	10.9 ㎡	主軸方向	N－13°－W

確認	地山上面で確認した。
壁	壁面に沿って、ほぼ垂直に板材が立てならべられている。
床面	壁面に沿う板材に接して床面上に遺存する角材状の材は東壁北側で1ヶ所西壁北側で2ヶ所検出され、これが原位置を保つものとすれば、矢板状のおさえあるいは、床面の施設物（敷物）の一部とも考えられる。
壁溝	カマド部分を除き、住居跡内を一巡する。 尚、矢板状の板材は、いずれも壁溝内に入り込んでいない。
ピット	各コーナーにP_1～P_4を確認した。 P_1(39) P_2(49) P_3(59) P_4(42)
付設	

カマド	位置	南壁の西側寄り	素材	粘土、自然石
	残存状態は良好である。袖部は自然石を芯材とし、さらにそれらに粘土をはりつけてつくられる。天井部に使用したと思われる35cm大の石が燃焼部内に遺存していた。 煙道は85cmを有し、壁外へ出ていく半地下式のものである。			

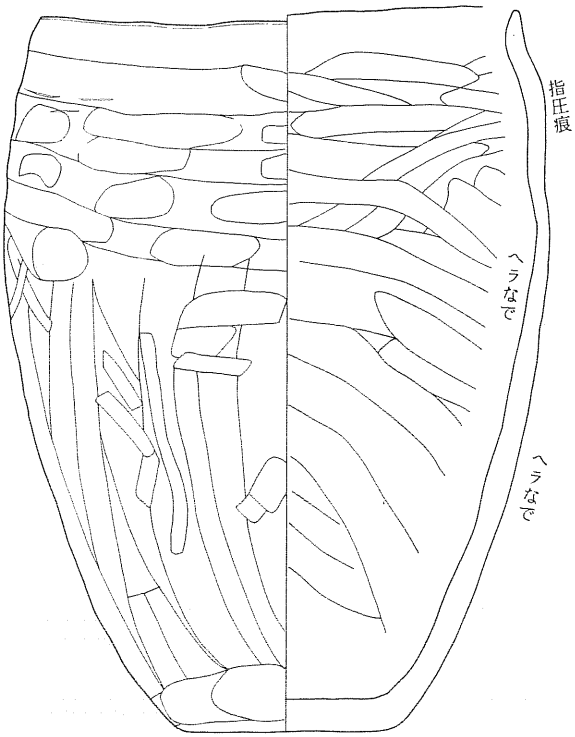
遺物とその出土状態	土師器甕、鉄滓、直刃
備考	焼失家屋と考えられる。



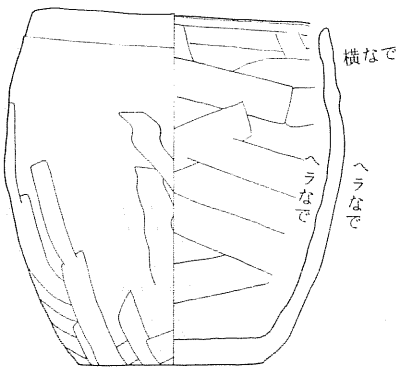
層	土色	備考
1	10YR 3/3 暗褐色	粘性：弱。浮石、黄色粒子微量混入。
2	10YR 4/4 褐色	黄色土、炭化物微量混入。
3	5YR 5/8 明赤褐色	硬度：強。粘性：弱。
4	10YR 6/6 明黄褐色	
5	10YR 3/1 黒褐色	
6	5YR 5/8 明赤褐色	硬度：弱。粘性：弱。炭化物微量混入。
7	10YR 3/1 黒褐色	硬度：弱。
8	10YR 3/1 黒褐色	褐色土少量混入。
9	10YR 5/6 黄褐色	硬度：弱。焼土、炭化物微量混入。

0 2m

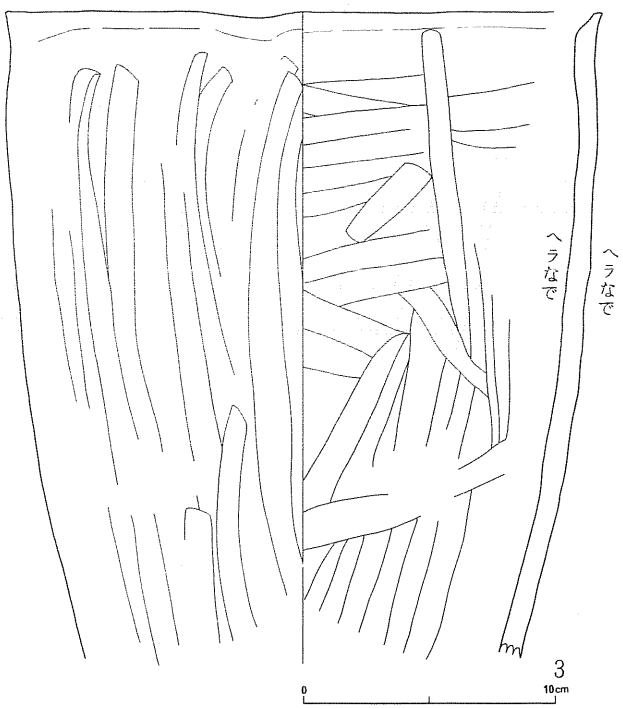
第69図　ＳＩ016竪穴住居跡カマド実測図



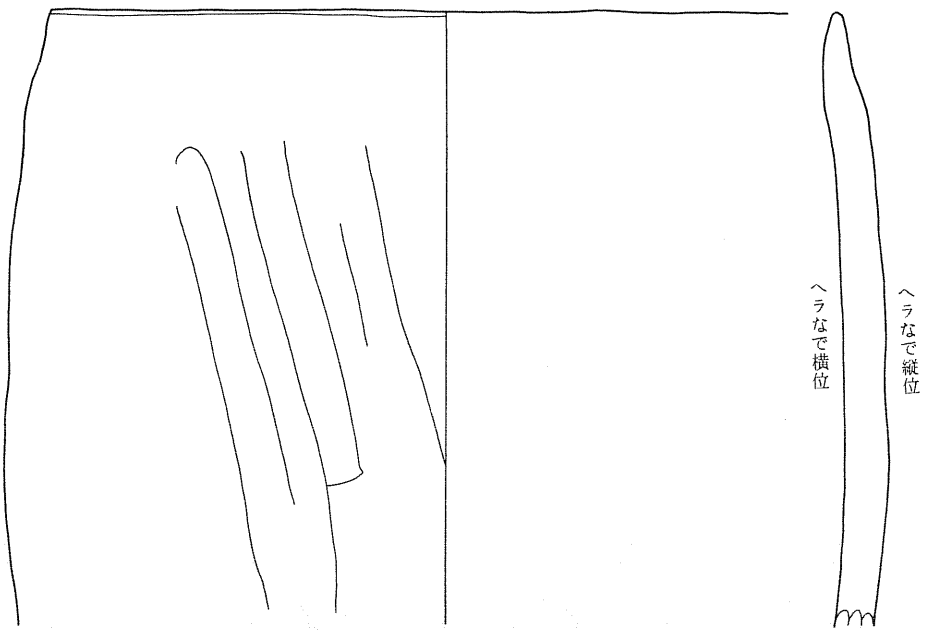
1

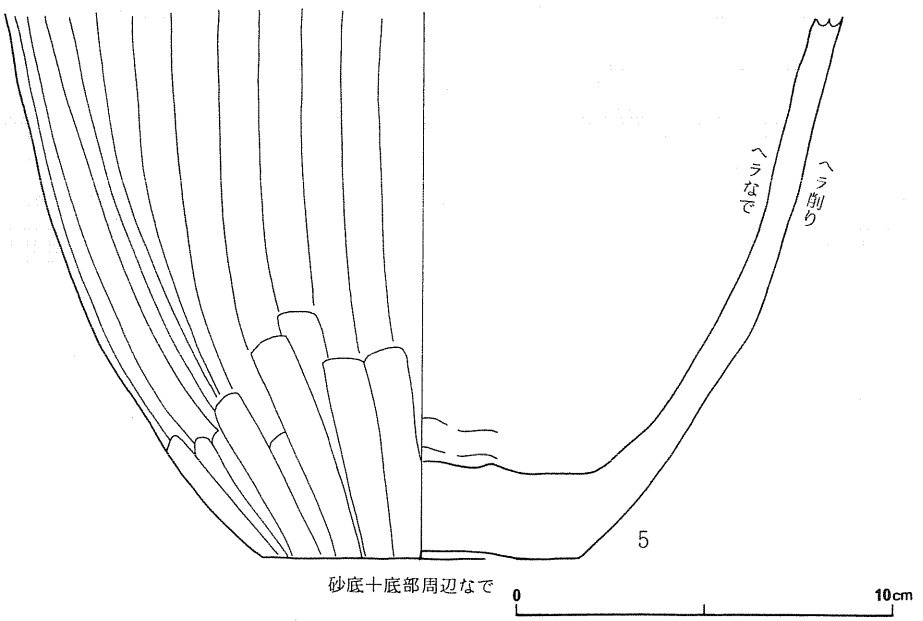


2

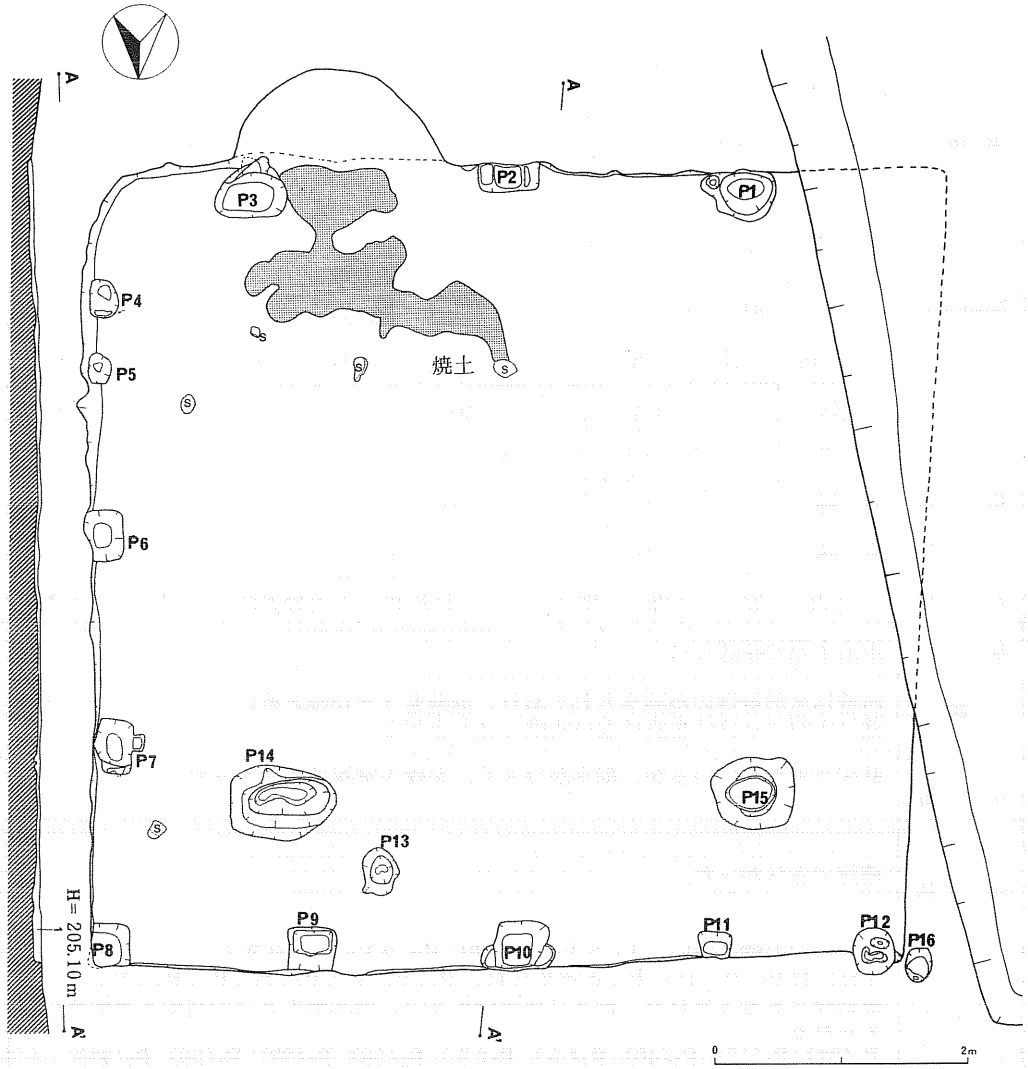


第70図　ＳＩ016竪穴住居跡出土土器（1）

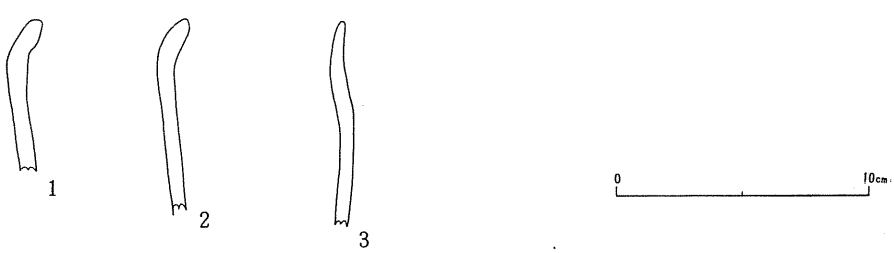




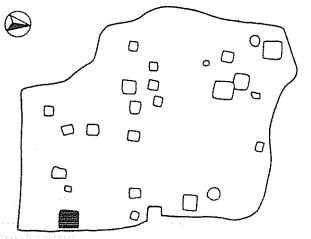
第71図　ＳＩ016竪穴住居跡出土土器（２）



層	土　　色	備　　考
1	10YR 2/1 黒色	浮石、炭化物微量混入。



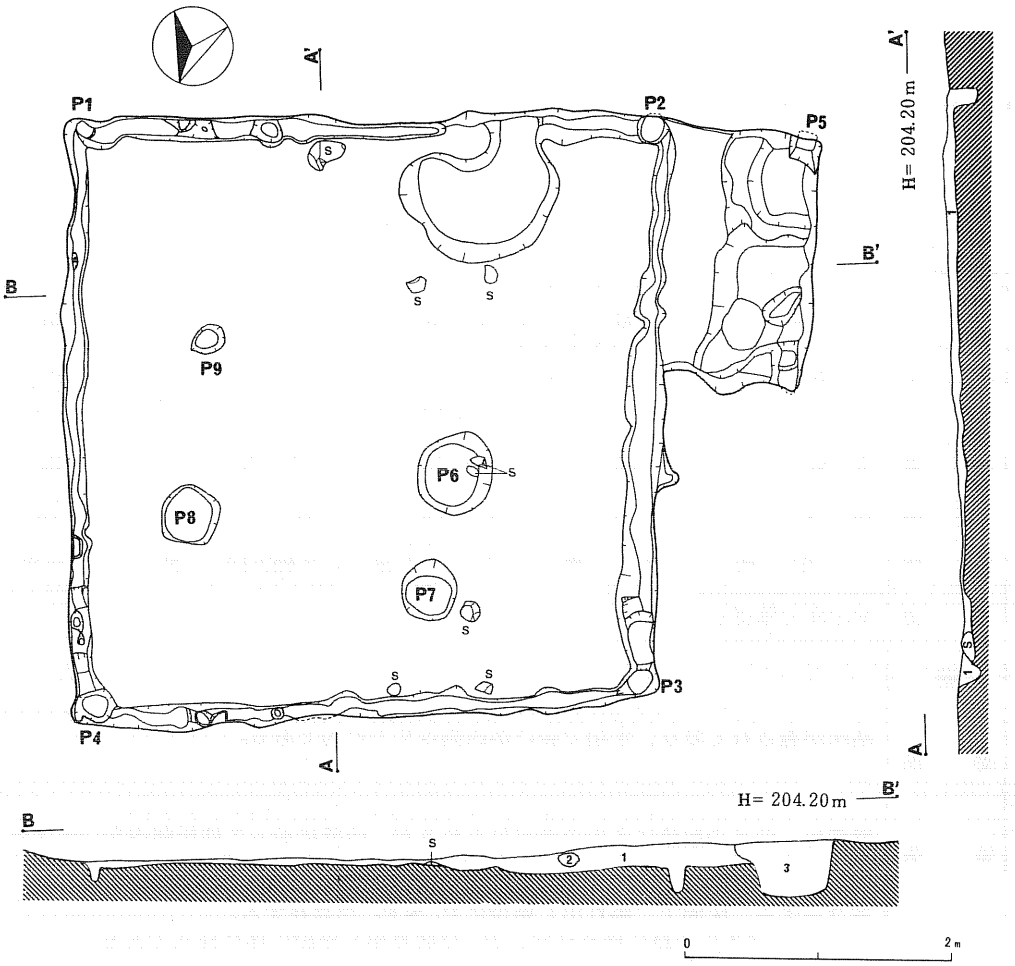
第72図　ＳＩ017竪穴住居跡および出土土器実測図

第 57 表		遺構の位置	
遺構名	SI017		
検出地区	17－A、17－Z 18－A、18－Z		
挿図番号	72		
図版番号	31		

法量	cm	北壁	東壁	南壁	西壁
	壁長	645	614	655	626
	壁高	0～10	10～18	3～10	—
	壁溝幅	—	—	—	—
	壁溝深	—	—	—	—

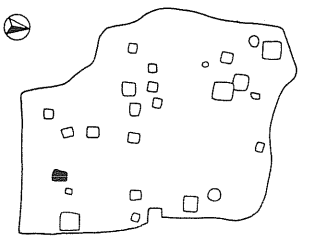
形態	方形	面積	41.8 ㎡	主軸方向	N－2°－E

確認	地山上面で確認した。
壁	西壁は水田耕作の為削平されており、他壁も3～18cmと低い。 壁は床面よりほぼ垂直に近い角度で立ち上がる。
床面	貼床が施されているが、削平がひどく、全体を掌握できなかった。
壁溝	確認できなかった。
ピット	住居跡内の壁に沿い、P_1～P_{12}、床面にP_{13}～P_{15}が存在する。 主柱穴はP_1、P_3、P_{14}、P_{15}と考えられ、P_2、P_4、P_6、P_7、P_8、P_9、P_{10}、P_{11}、P_{12}は補助柱穴と考えられる。柱穴は東西壁に4コ、南北壁に5コの対応する配置が考えられる。 P_1(34) P_2(12) P_3(40) P_4(5) P_5(5) P_6(59) P_7(39) P_8(56) P_9(41) P_{10}(35) P_{11}(23) P_{12}(21) P_{13}(5) P_{14}(65) P_{15}(60)
付設	
カマド	位置：南壁の東側寄り　素材：不明 カマドは抜根のため、燃焼部焼土のみを確認するにとどまった。
遺物とその出土状態	土師器甕
備考	



層	土　　色	備　　考
1	10YR 2/3 黒褐色	硬度：強。粘性：弱。炭化物、黄褐色土粒子、微量混入。
2	10YR 3/4 暗褐色	炭化物、黄褐色土微量混入。
3	10YR 3/2 暗褐色	硬度：強。粘性：弱。浮石、黄褐色土微量混入。

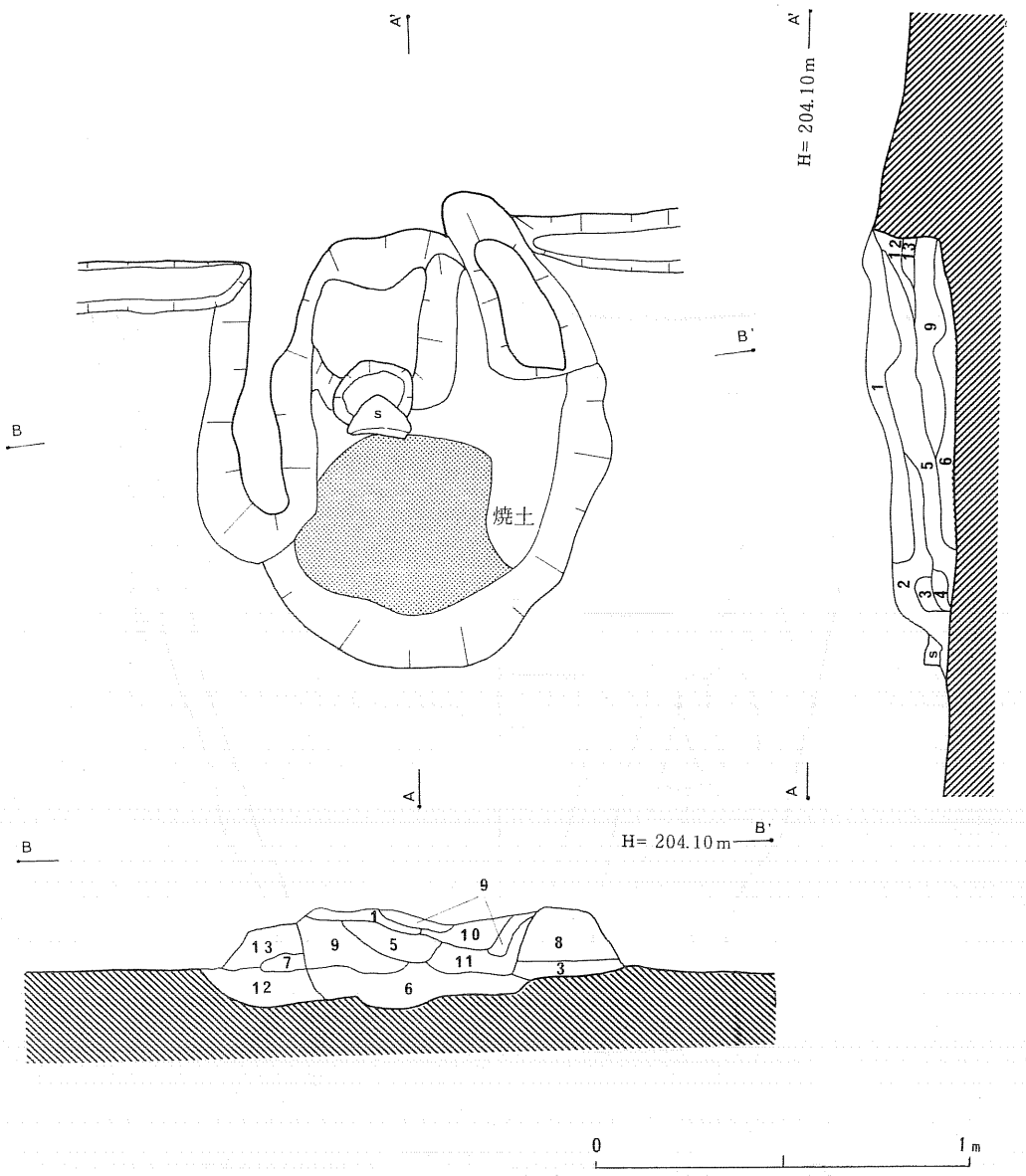
第73図　S I 018 竪穴住居跡実測図

第 58 表		遺構の位置	
遺構名	SI018		
検出地区	18－D、18－E 19－D、19－E		
挿図番号	73、74		
図版番号	31、32		

法量	cm	北東壁	南東壁	南西壁	北西壁
	壁長	451	450	431	437
	壁高	5～11	7～14	0～16	6～8
	壁溝幅	9～18	13～18	9～32	9～22
	壁溝深	8～23	8～20	10～26	16～25

形態	方形	面積	張り $\frac{20.0}{2.1}$ ㎡	主軸方向	N－21.5°－W

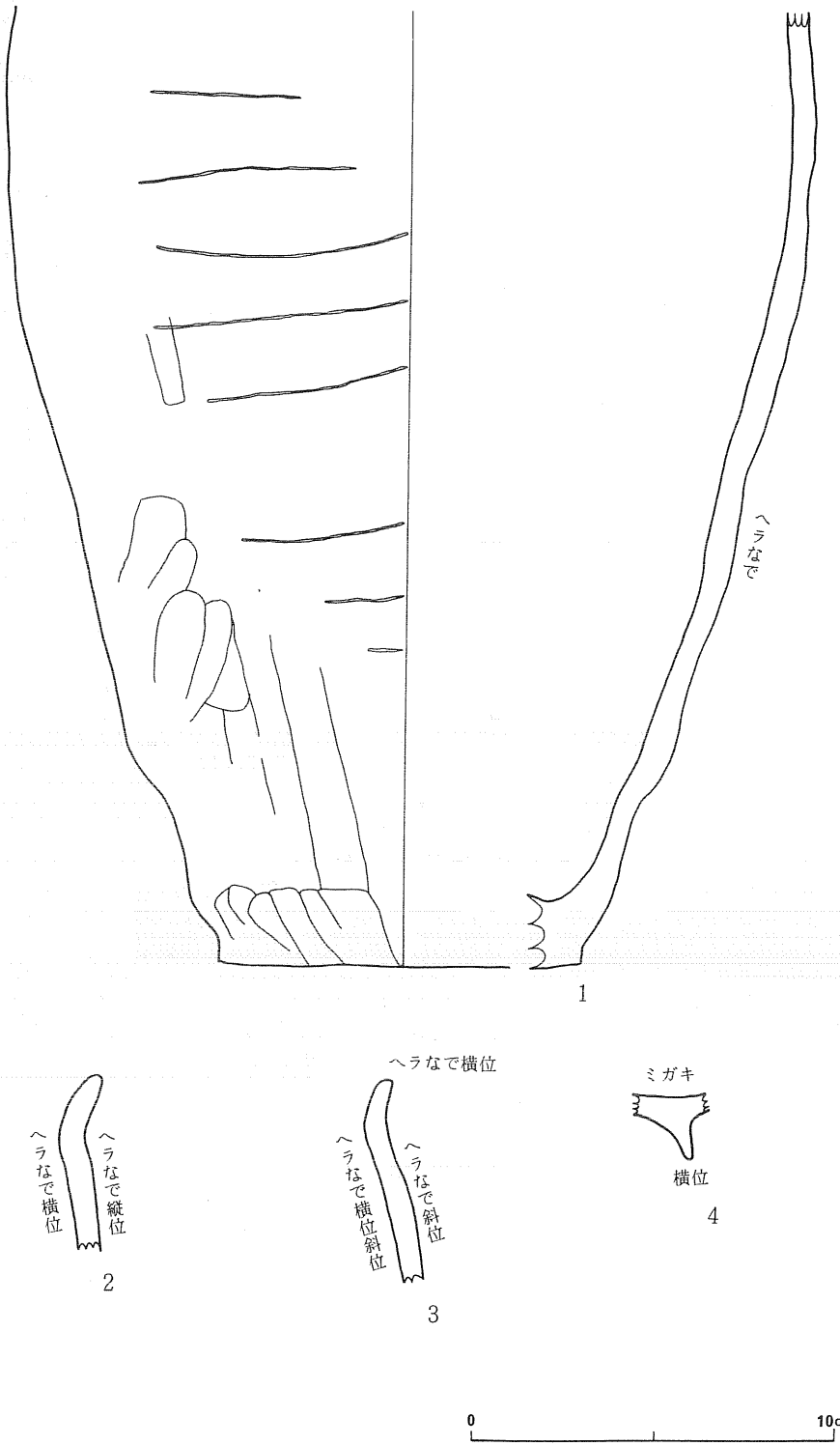
確認	地山面で確認した。
壁	
床面	貼床が施されており、平坦で堅いが西側はやや軟弱である。
壁溝	壁溝幅、深さの数値に多少の差が見られるが、四壁に沿って住居跡内を一巡する。
ピット	各コーナー、床面上、張り出し施設に P_1～P_9 が存在する。 P_1～P_4 は本住居跡に伴う柱穴、P_5 は張り出し施設に伴う柱穴である。 P_1(16) P_2(33) P_3(30) P_4(28) P_5(15) P_6(10) P_7(19) P_8(26) P_9(8)
付設	西壁南よりに長軸 170 cm、短軸 120 cm、深さ18～40cm、面積 2.1 ㎡の張り出し施設をもつ。
カマド	位置：南東壁の南西側寄り　素材：粘土 木根により煙道部が破壊されている。 燃焼部の床部に胴下半を欠く甕形の土師器を倒立させ、支脚として使用している。
遺物とその出土状態	縄文土器、土師器坏、甕、鉄滓
備考	



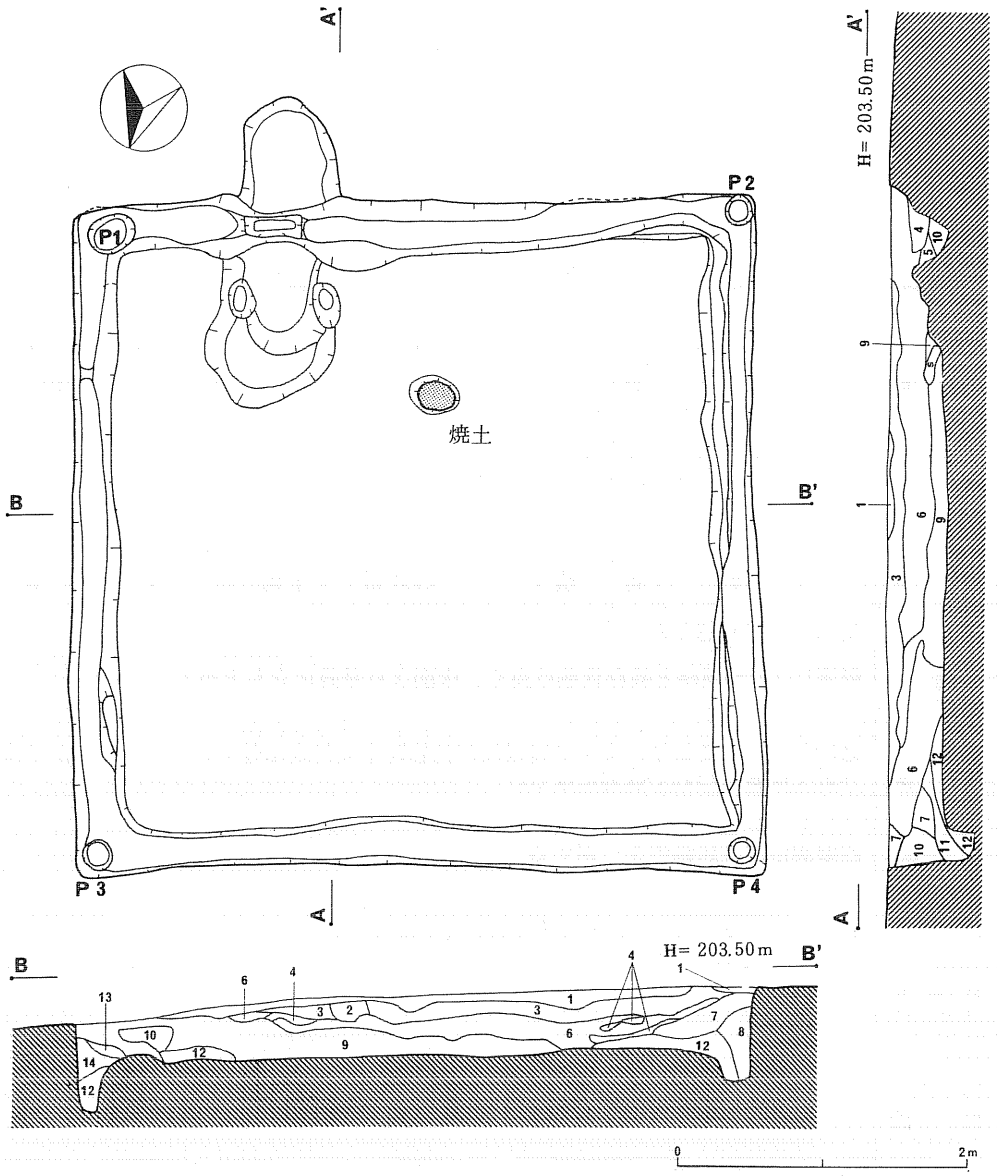
層	土色	備考
1	10YR 5/6 黄褐色	
2	10YR 3/3 黒褐色	焼土、浮石微量混入。
3	10YR 3/2 黒褐色	
4	10YR 4/4 褐色	焼土混入。
5	10YR 4/6 褐色	粘土層。焼土微量混入。
6	5YR 5/8 明赤褐色	
7	7.5YR 4/4 褐色	

層	土色	備考
8	7.5YR 5/6 明褐色	炭化物微量混入。
9	5YR 5/8 橙色	
10	7.5YR 2/2 黒褐色	明黄褐色粒子微量混入。
11	7.5YR 3/4 暗褐色	橙色粒子微量混入。
12	7.5YR 5/8 明褐色	
13	7.5YR 5/6 明褐色	

第74図　ＳＩ018竪穴住居跡カマド実測図



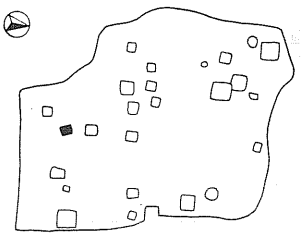
第75図　ＳＩ018竪穴住居跡出土土器



層	土色	備考
1	10YR 3/1 黒褐色	硬度：強。炭化物、焼土微量混入。
2	10YR 3/2 黒褐色	硬度：強。炭化物多量混入。焼土微量混入。
3	10YR 3/3 暗褐色	炭化物、焼土、浮石、褐色粒子微量混入。
4	10YR 3/1 黒色	炭化物、浮石少量混入。
5	10YR 3/2 黒褐色	炭化物、焼土混入。
6	7.5YR 3/2 黒褐色	炭化物、焼土、浮石多量混入。
7	10YR 3/4 暗褐色	炭化物褐色土混入。

層	土色	備考
8	10YR 3/4 暗褐色	炭化物黒色土混入。
9	10YR 3/3 黒褐色	炭化物、焼土、浮石混入。
10	10YR 3/4 暗褐色	炭化物、焼土、浮石、褐色土褐色粒子混入。
11	10YR 3/4 暗褐色	炭化物褐色粒混入。
12	10YR 5/6 褐色	硬度：強。粘性：強。炭化物微量混入。
13	10YR 3/4 暗褐色	炭化物、浮石、褐色粒子微量混入。
14	10YR 3/1 黒色	粘性：弱。炭化物、浮石混入。

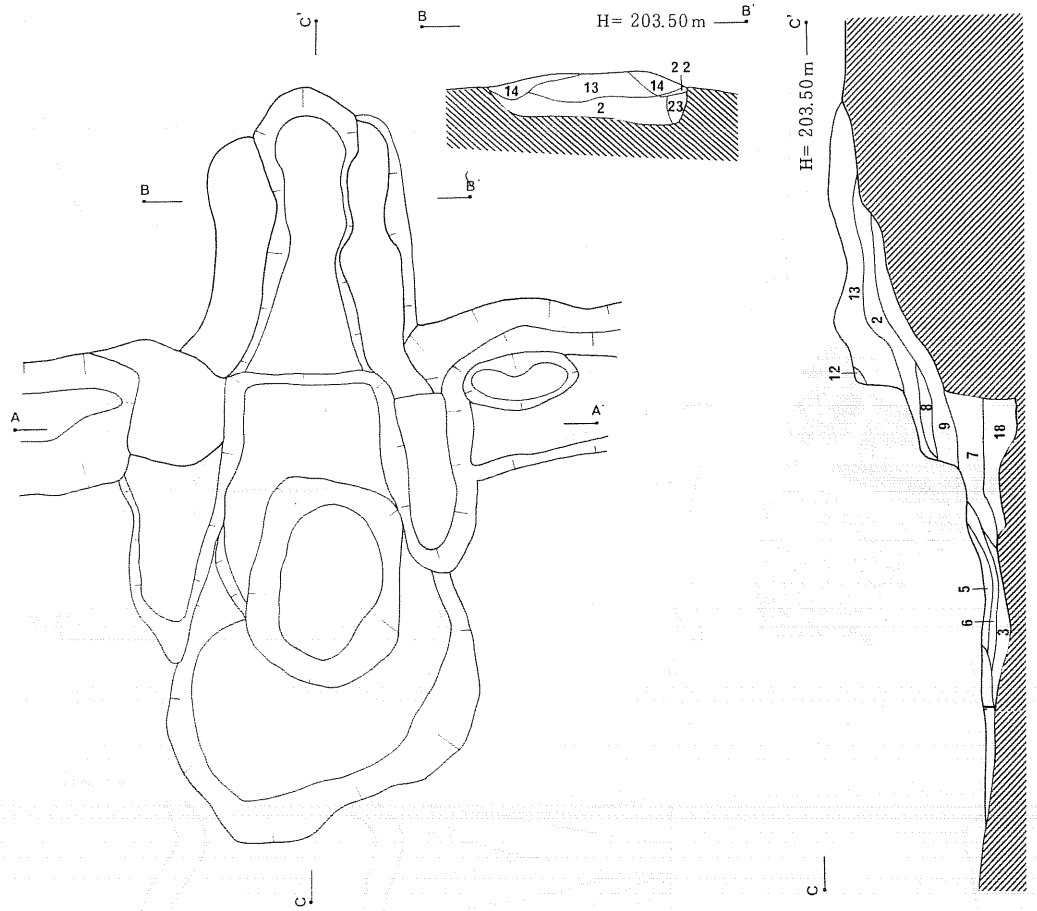
第76図　ＳＩ019竪穴住居跡実測図

第 59 表		遺構の位置	
遺構名	ＳＩ019		
検出地区	18－Ｇ、18－Ｈ 19－Ｇ、19－Ｈ		
挿図番号	76、77		
図版番号	32		

法量	cm	北　壁	東　壁	南　壁	西　壁
	壁　長	468	457	465	470
	壁　高	35～40	40～44	27～31	24～30
	壁溝幅	23～34	25～34	26～45	26～38
	壁溝深	20～23	21～29	49～52	24～45

形態	方　形	面積	22.0 ㎡	主軸方向	N－13°－W

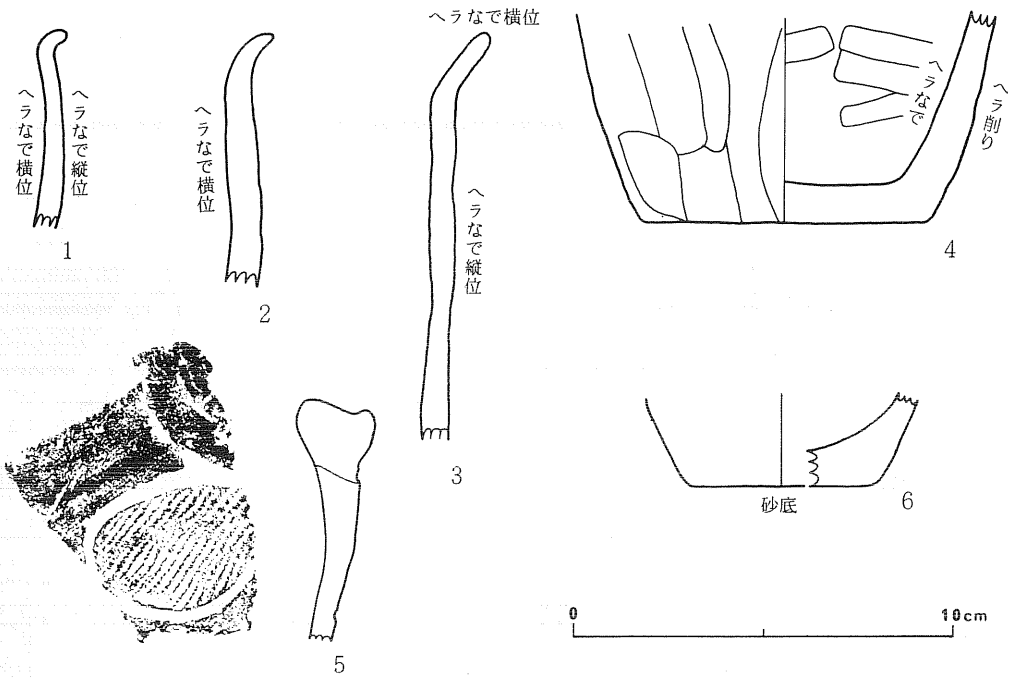
確認	地山上面で確認した。
壁	壁高は 24 ～44cmと残存状態は良く、床面より垂直に立ち上がる。
床面	貼床が施されており、カマド周辺及び住居跡中央付近は堅くしまっているが壁溝へ近くなるにつれて軟弱になる。
壁溝	四壁溝沿に住居跡内を一巡する。
ピット	各コーナー壁溝内に P_1 ～P_4 の壁柱穴を確認した。 P_1(36)　P_2(57)　P_3(31)　P_4(35)
付設	
カマド	位置：南東壁の北東側寄り　素材：粘土、自然石 カマドは壁溝構築後に作られたもので、溝への埋土中には、白色浮石の混入がみられた。袖部は自然石を芯材とし、それに粘質土を貼りつけている。 煙道は95cmを有し一度垂直に近い角度で立ち上がり、その後ゆるやかに上昇する半地下式のものである。
遺物とその出土状態	縄文土器、土師器甕、須恵器、鉄滓
備考	

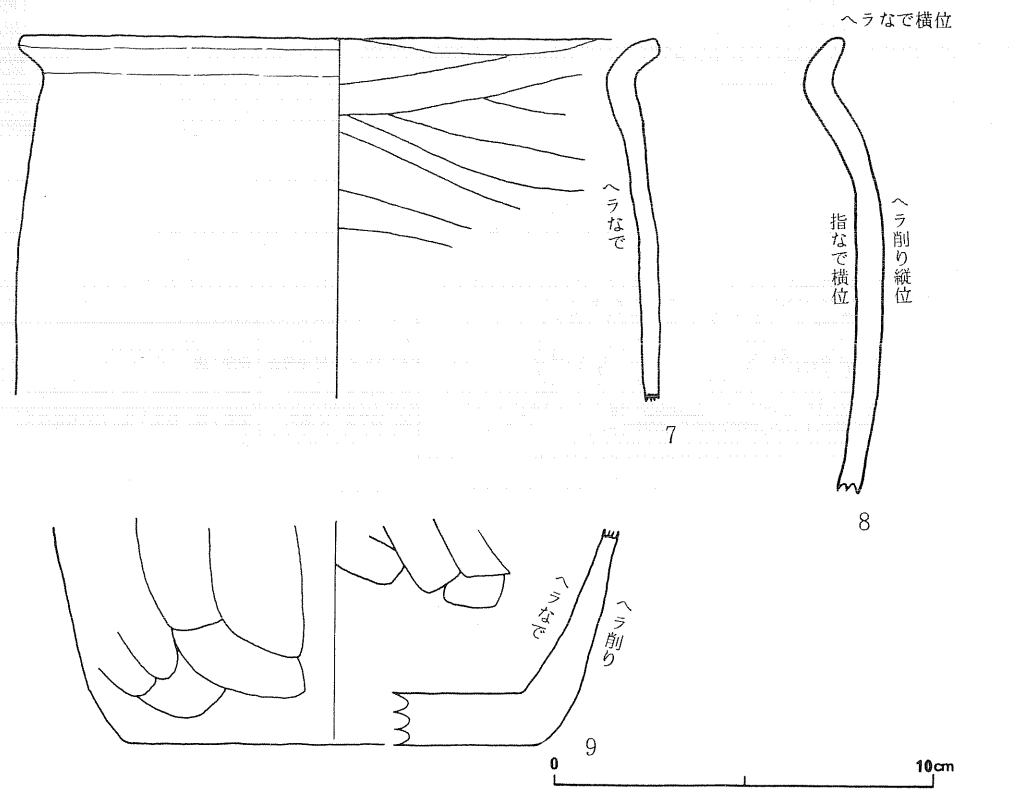


層	土　　色	備　　考
1	10YR 3/2 黒褐色	焼土粒子、炭化物、微量混入。
2	10YR 3/4 暗褐色	粘性：強。粘土、黒色粒子、混入。
3	10YR 4/6 褐色	硬度：強。粘性：強。
4	10YR 4/4 褐色	粘性：強。
5	10YR 5/6 黄褐色	粘性：強。焼土、粘土、地山混入。
6	5YR 5/6 橙色	硬度：強。粘性：弱。
7	10YR 3/3 黒褐色	粘性：強。褐色粒子混入。

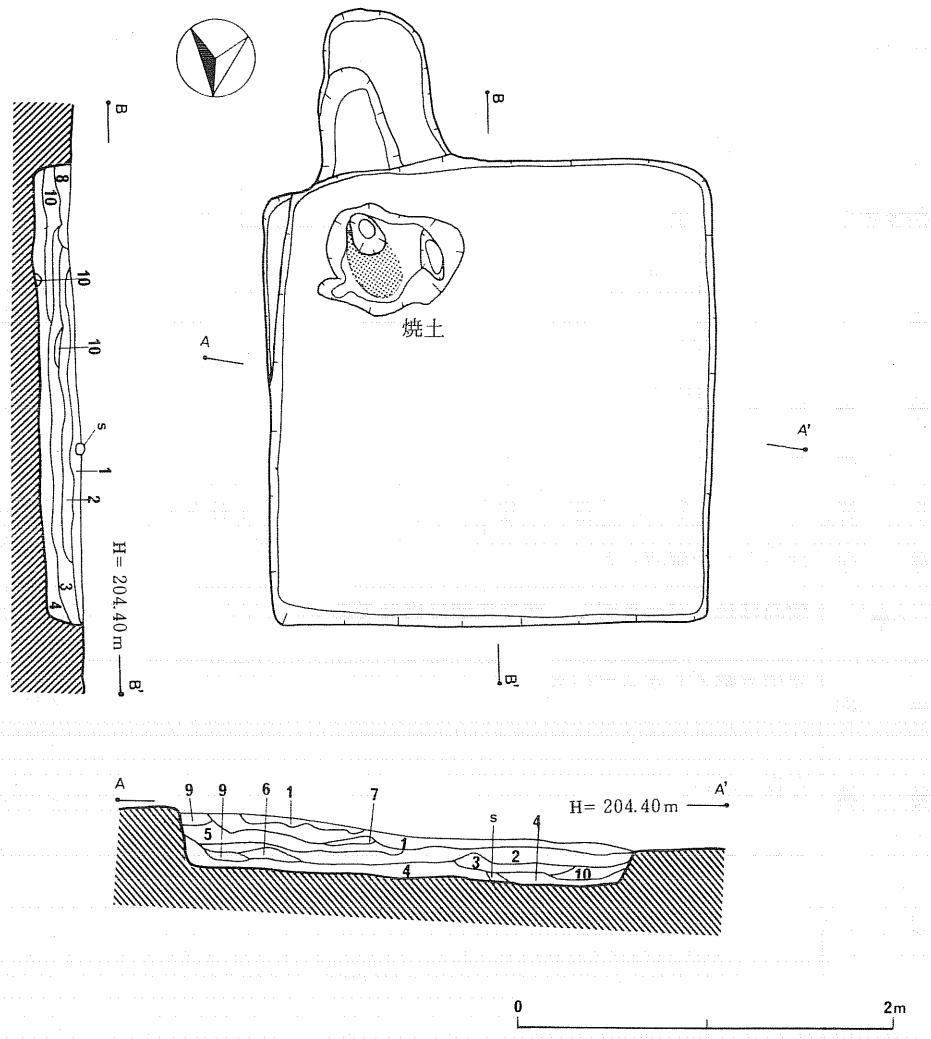
層	土　　色	備　　考
8	7.5YR 3/4 暗褐色	硬度：強。
9	10YR 3/1 黒色	硬度：強。粘性：強。焼土少量混入。
10	10YR 1.7/1 黒色	硬度：強。粘性：強。浮石微量混入。
11	10YR 5/6 黄褐色	粘土。
12	10YR 2/2 黒褐色	粘性：強。暗褐色土、褐色土微量混入。
13	10YR 4/6 褐色	粘土、黒色土、浮石混入。
14	10YR 3/1 黒色	粘性：強。浮石多量混入。
15	10YR 3/1 黒色	硬度：強。粘性：強。焼土、浮石少量混入。
16	10YR 3/4 暗褐色	硬度：強。粘性：強。焼土ブロック混入。
17	10YR 3/3 黒褐色	硬度：強。粘性：強。浮石微量混入。粘土少量混入。
18	10YR 3/3 暗褐色	粘性：強。焼土、褐色粘土混入。
19	10YR 5/6 黄褐色	硬度：強。粘性：強。
20	10YR 3/1 黒色	粘性：弱。浮石多量混入。
21	10YR 4/6 褐色	硬度：強。粘性：強。粘土質。

第77図　ＳＩ019竪穴住居跡カマド実測図





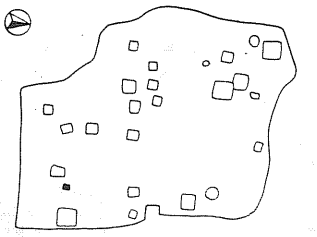
第78図　ＳＩ019・020竪穴住居跡出土土器



層	土色	備考
1	10YR 2/3 黒褐色	硬度：弱。粘性：弱。褐色粒子、炭化物、浮石微量混入。
2	10YR 2/1 黒色	粘性：弱。灰白色土粒子、炭化物、暗褐色粒子微量混入。
3	10YR 3/2 黒褐色	硬度：弱。粘性：弱。褐色土粒子、浮石微量混入。
4	10YR 1.7/1 黒色	硬度：弱。粘性：弱。褐色土粒子、浮石微量混入。
5	10YR 3/1 黒褐色	硬度：弱。粘性：弱。褐色土粒子、浮石微量混入。

層	土色	備考
6	7.5YR 1.7/1 黒色	硬度：弱。浮石微量混入。
7	7.5YR 2/1 黒色	硬度：弱。粘性：弱。炭化物少量混入。
8	10YR 3/4 暗褐色	浮石混入。
9	10YR 6/6 明黄褐色	硬度：弱。粘性：弱。浮石層。
10	10YR 7/3 にぶい黄橙色	硬度：弱。粘性：弱。浮石層。

第79図　ＳＩ020竪穴住居跡実測図

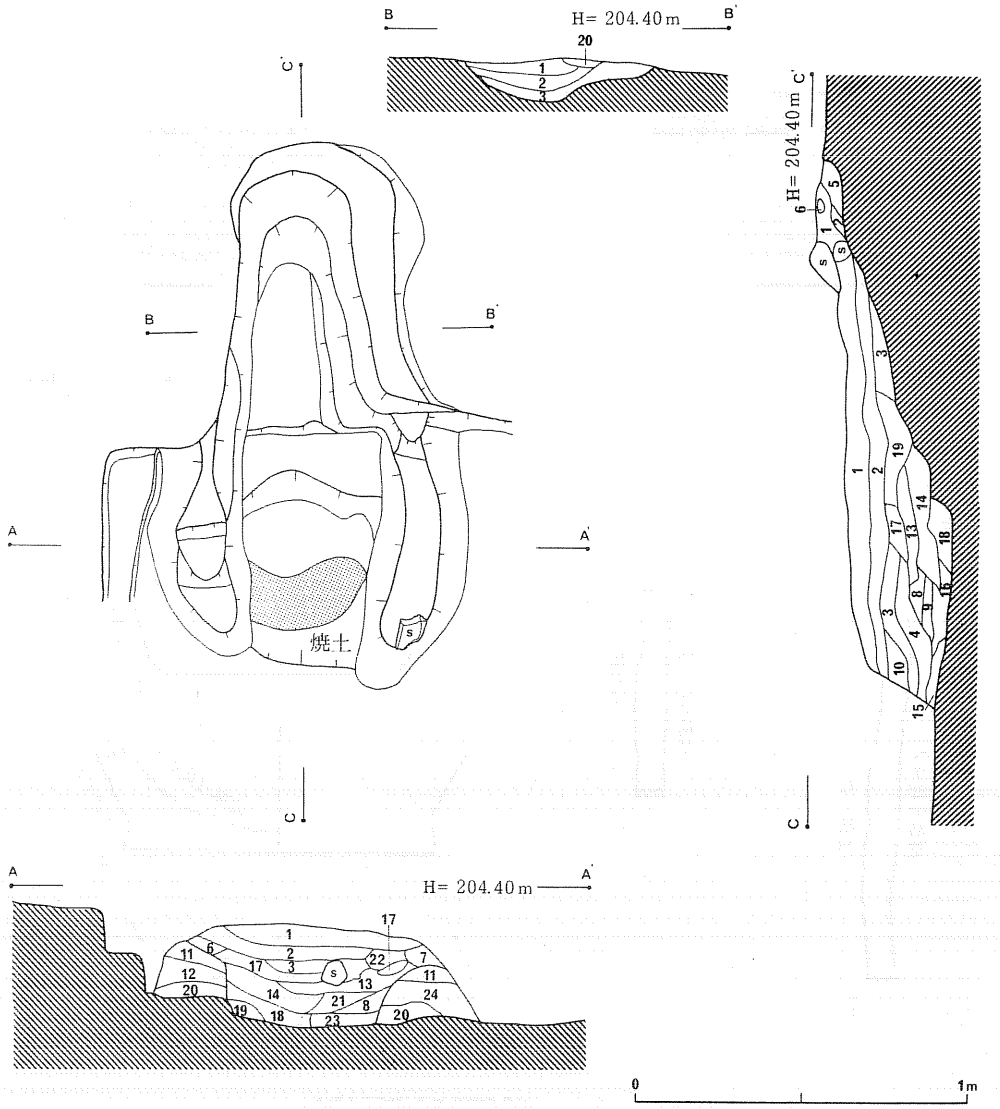
第 60 表		遺構の位置	
遺構名	ＳＩ020		
検出地区	18－Ｂ、18－Ｃ		
挿図番号	79、80		
図版番号	33		

法量	cm	北壁	東壁	南壁	西壁
	壁長	224	227	233	231
	壁高	21 ～ 27	30 ～ 31	18 ～ 20	16 ～ 20
	壁溝幅	—	—	—	—
	壁溝深	—	—	—	—

形態	方形	面積	6.0 ㎡	主軸方向	N－9°－W

確認	地山上面で確認した。
壁	壁高は16～31cmを有し、残存状態は良好である。
床面	平坦で竪くしまっている。
壁溝	存在しない。
ピット	存在しない。
付設	

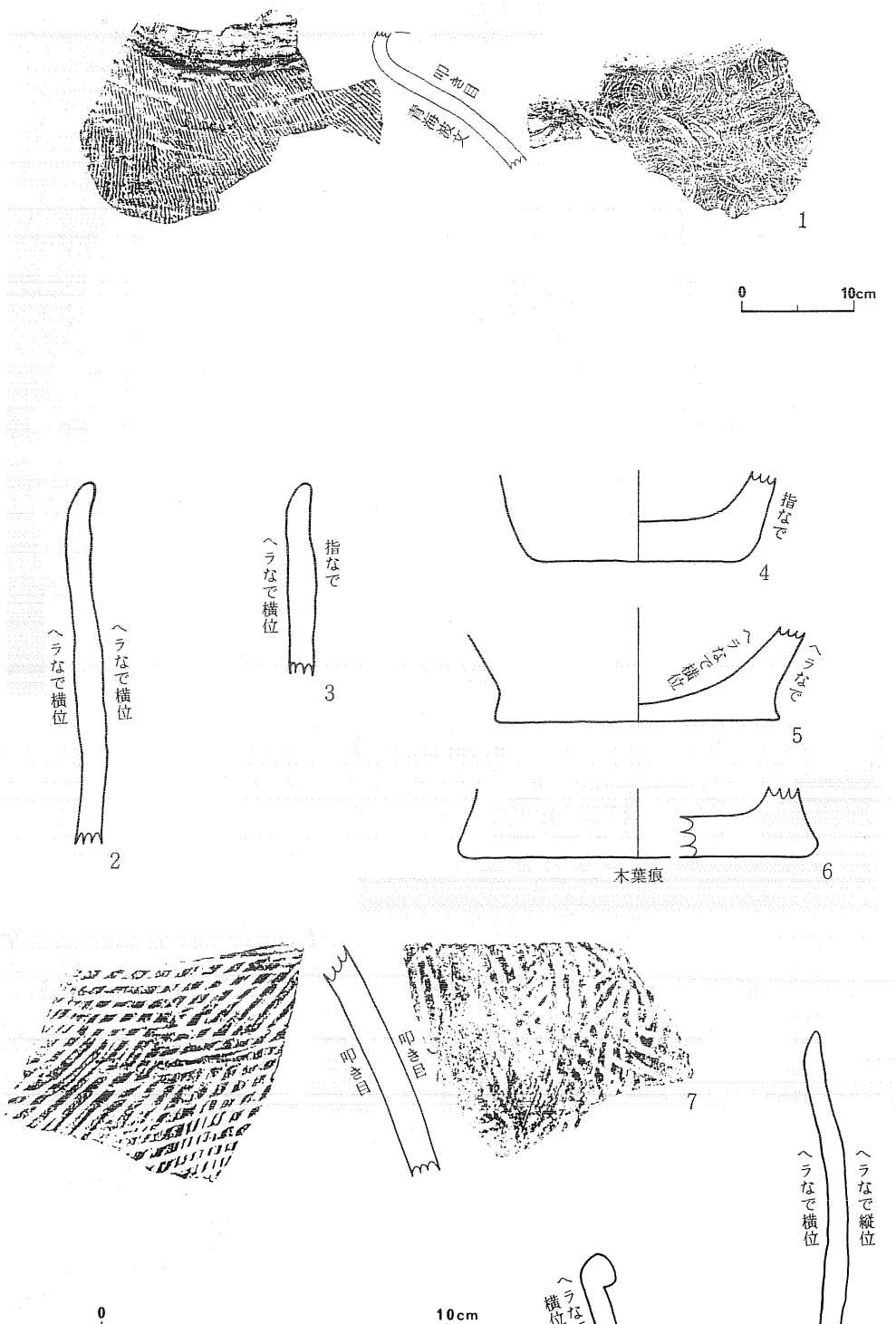
カマド	位置	南壁の東側寄り	素材	黒色土、粘土
	残存状態は良好、袖部は黒色土及び褐色粘土をかさね合せて作り出している。 燃焼部は鍋底状に掘り込まれており、焼土が堆積している。 煙道は 100 cmでゆるい段を有しながら壁外へ出る。			
遺物とその出土状態	縄文土器、土師器甕、須恵器甕			
備考				



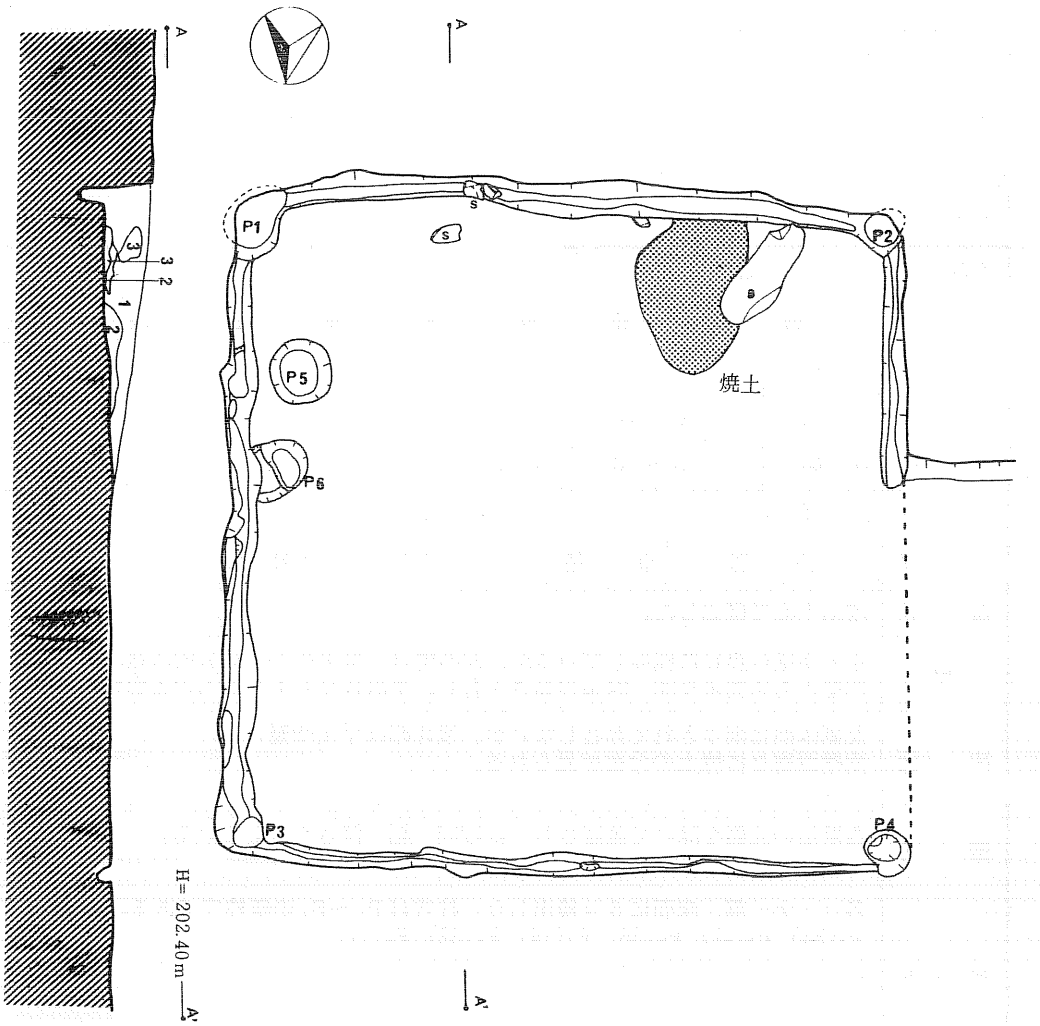
層	土色	備考
1	10YR 3/3 黒褐色	硬度：強。粘性：弱。黄褐色粒子、浮石微量混入。
2	10YR 3/2 黒褐色	硬度：弱。粘性：弱。浮石、黄褐色粒子微量混入。
3	7.5YR 3/2 黒褐色	粘性：弱。浮石粒子黄褐色粒子微量混入。
4	7.5YR 3/4 極暗褐色	粘性：弱。浮石、黄褐色粒子、炭化物微量混入。
5	7.5YR 4/4 褐色	硬度：強。粘性：強。
6	10YR 7/4 にぶい黄橙色	硬度：弱。粘性：弱。浮石層。
7	10YR 1.7/1 黒色	硬度：弱。
8	10YR 3/2 黒褐色	硬度：弱。粘性：弱。炭化物微量混入。
9	5YR 5/6 明赤褐色	硬度：強。粘土質。
10	7.5YR 3/4 暗褐色	硬度：弱。粘性：弱。浮石微量混入。
11	7.5YR 4/6 褐色	硬度：強。粘土質。
12	10YR 3/2 黒褐色	粘性：強。浮石、炭化物、黄褐色粒子微量混入。

層	土色	備考
13	5YR 5/6 明赤褐色	硬度：弱。粘性：弱。
14	7.5YR 3/4 暗褐色	硬度：弱。粘性：弱。炭化物微量混入。
15	7.5YR 1.7/1 黒色	炭化物微量混入。
16	2.5YR 4/6 赤褐色	硬度：弱。粘性：弱。炭化物微量混入。
17	5YR 4/6 赤褐色	粘土質。
18	7.5YR 5/6 明褐色	粘土質。
19	5YR 3/6 暗赤褐色	硬度：弱。炭化物微量混入。
20	7.5YR 5/6 明褐色	硬度：強。粘性：強。粘土。
21	5YR 4/6 赤褐色	粘土質。
22	10YR 2/1 黒色	硬度：弱。粘性：弱。浮石微量混入。
23	5YR 6/6 橙色	硬度：強。粘性：弱。粘土質。
24	10YR 3/2 黒褐色	粘性：強。褐色粒子微量、炭化物微量混入。

第80図　ＳＩ020竪穴住居跡カマド実測図

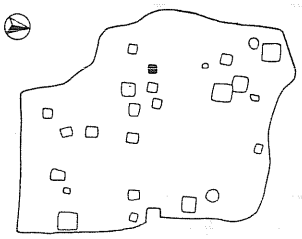


第81図　ＳＩ020・021・022竪穴住居跡出土土器



層	土色	備考
1	10YR 2/3 黒褐色	粘性：弱。炭化物、浮石、黄褐色ブロック微量混入。
2	10YR 2/1 黒色	粘性：弱。炭化物、黄褐色土粒子微量混入。
3	10YR 3/3 暗褐色	炭化物、暗褐色粘土微量混入。

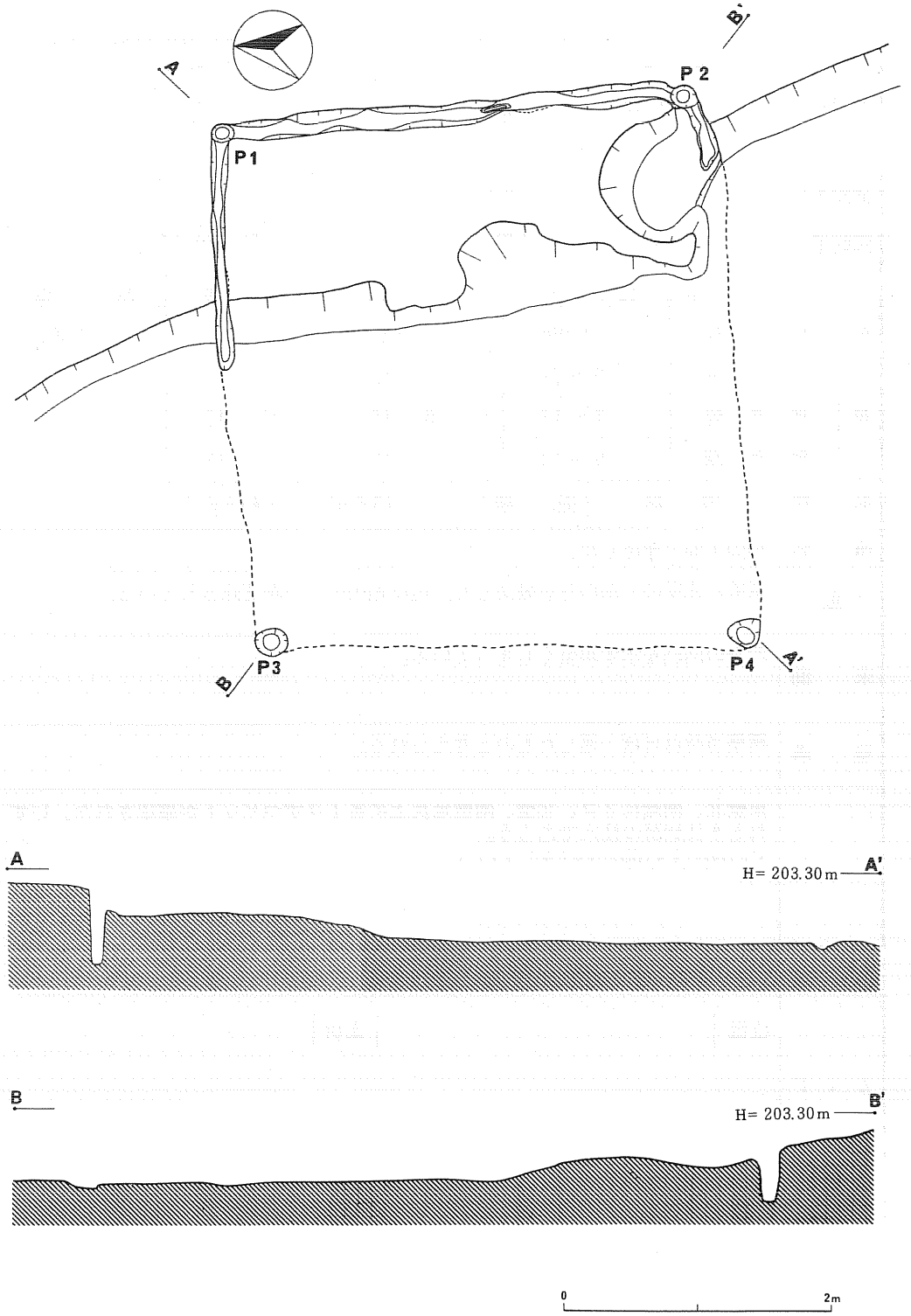
第82図　ＳＩ021竪穴住居跡実測図

第 61 表		遺構の位置	
遺構名	ＳＩ021		
検出地区	11－Ｌ、11－Ｍ 12－Ｌ、12－Ｍ		
挿図番号	82		
図版番号	33		

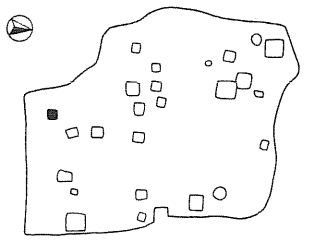
法量	cm	北壁	東壁	南壁	西壁
	壁長	364	340	352	334
	壁高	0～10	17～18	20～24	5～10
	壁溝幅	5～10	12～15	11～18	10～18
	壁溝深	1～3	9～12	18～50	4～8

形態	方形	面積	13.2 ㎡	主軸方向	

確認	地山上面で確認した。
壁	東・南壁は良好に残存しているが、北西壁は、削平のため部分的に残存しない。 四壁とも床面より20～24cmの高さを有し、垂直に立ち上がるものと思われる。
床面	北側床面は削平されて存在しないが、残存部は平坦で堅い。 南壁西寄りに焼土の分布が見られる。
壁溝	西壁沿の北側を除いて確認され、ほぼ同一幅、深さを有している。
ピット	各コーナー部、床面に６コ検出した。柱穴はP_1～P_4の壁柱穴である。 P_1(34) P_2(42) P_3(35) P_4(14) P_5(32) P_6(11)
付設	
カマド	位置 素材 不明
遺物とその出土状態	土師器甕、須恵器甕
備考	



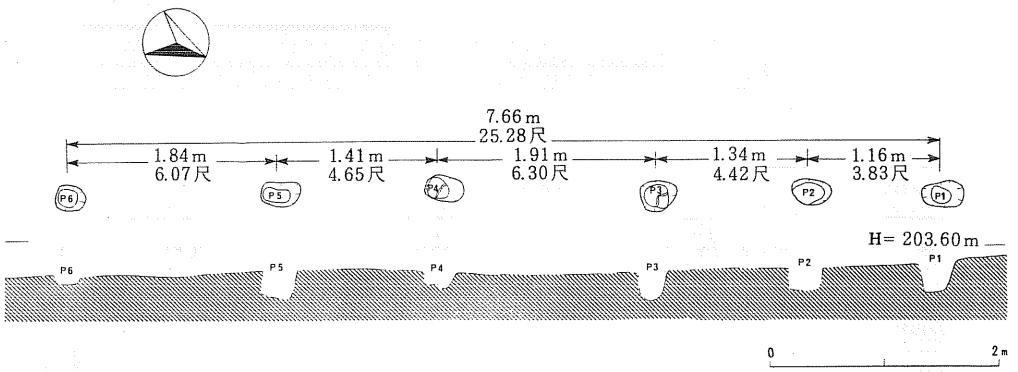
第83図　ＳＩ022 竪穴住居跡実測図

第　62　表		遺構の位置	
遺構名	ＳＩ022		
検出地区	20－H、21－H、		
挿図番号	83		
図版番号	34		

法量	cm	北　壁	東　壁	南　壁	西　壁
	壁　長	（396）	355	（423）	（367）
	壁　高	0～21	16	0～3	—
	壁溝幅	7～13	8～18	10～12	—
	壁溝深	5～12	17	8～13	—

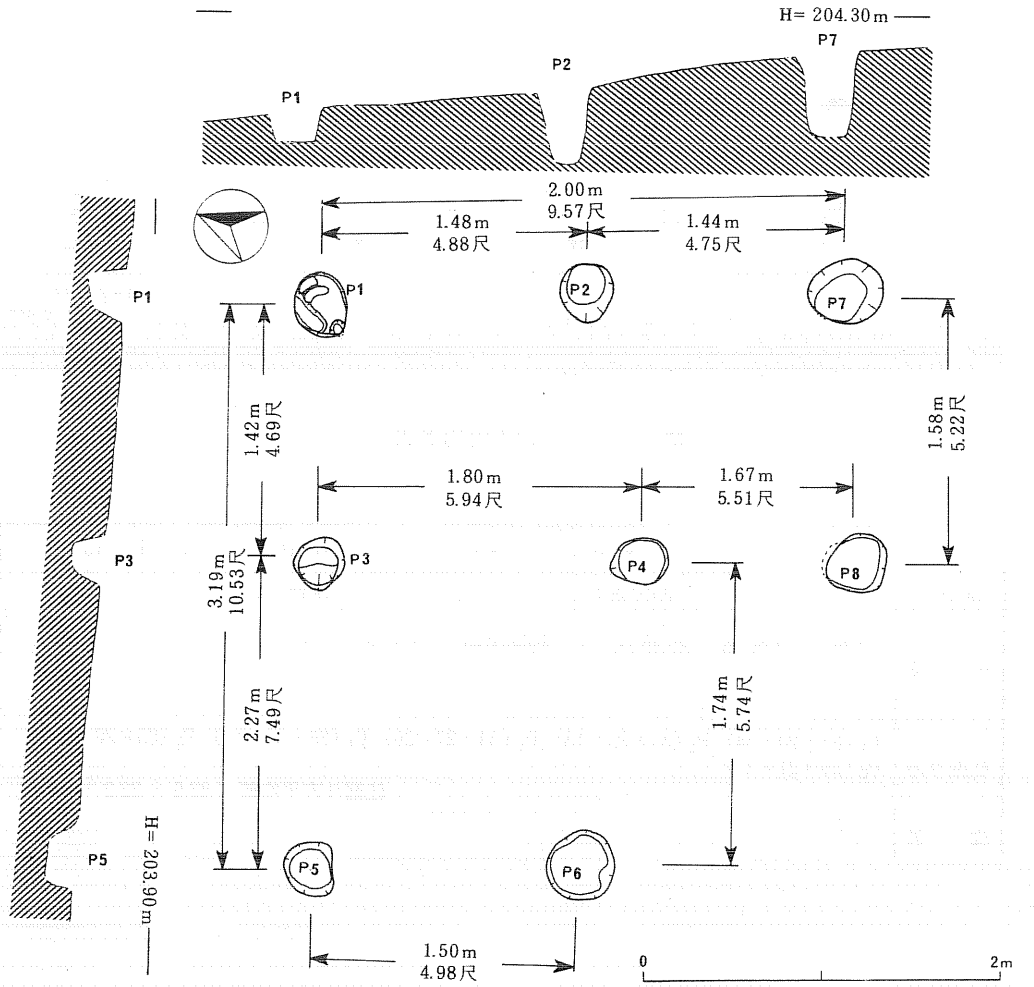
形態	方　形	面　積	15.6 ㎡	主軸方向	

確　認	地山上面で確認した。
壁	東壁と北壁の一部のみを確認した。他は地山削平の際切除されている。
床　面	若干の凹凸を示すが堅くしまっている。
壁　溝	構築当時はほぼ一巡したものと考えられる。
ピット	東壁北、南端に２コ、北壁、南壁延長上に各１コずつピットが確認された。いずれも本住居跡の柱穴であろう。 P_1（38）P_2（33）P_3（４）P_4（３）
付　設	
カマド	位置　　素材
遺物とその出土状態	土師器甕、鉄滓
備　考	



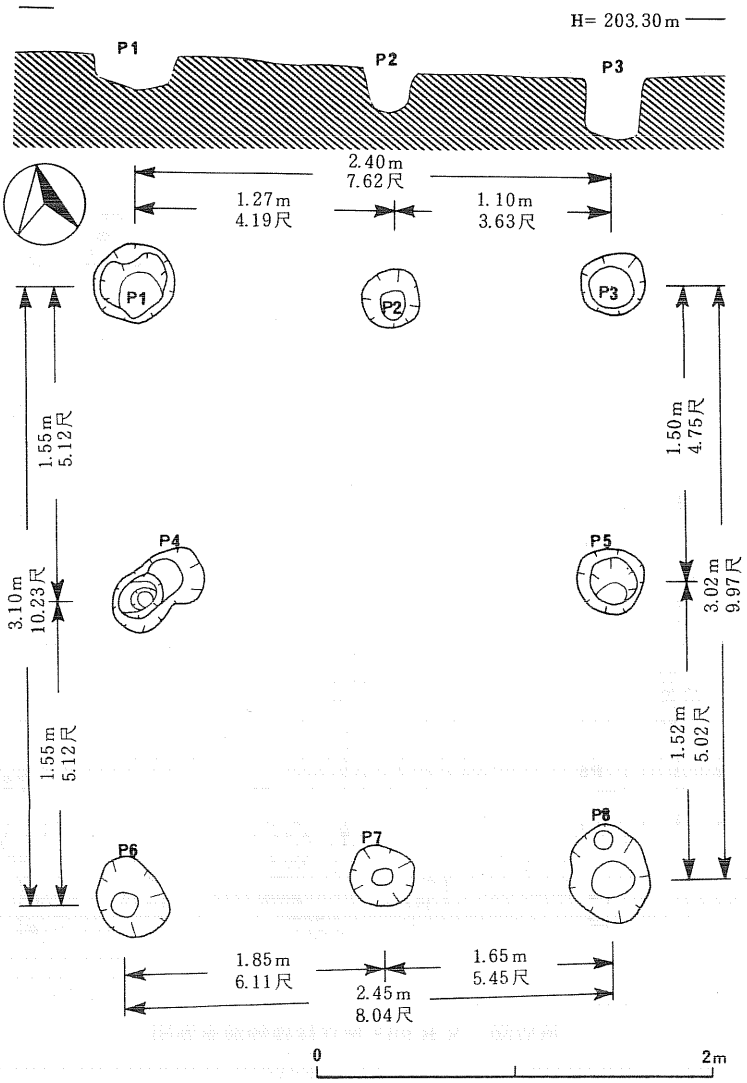
第84図　S A 001 柱列実測図

第　63　表		遺構名	S A 0 0 1	検出地区	14—H、15—H
挿図番号	84	図版番号	35	軸線方向	N—28°—W
規　模	5間　7.66 m　25.28 尺　柱間平均　1.53 m　5.01 尺				
柱掘り方	P_1 (37×20×34)　P_2 (35×23×18)　P_3 (34×27×29)　P_4 (35×22×14)　P_5 (35×20×22)　P_6 (25×21× 6) 柱掘り方平均値（33.5 × 22.2 × 20.5）				
備　考					



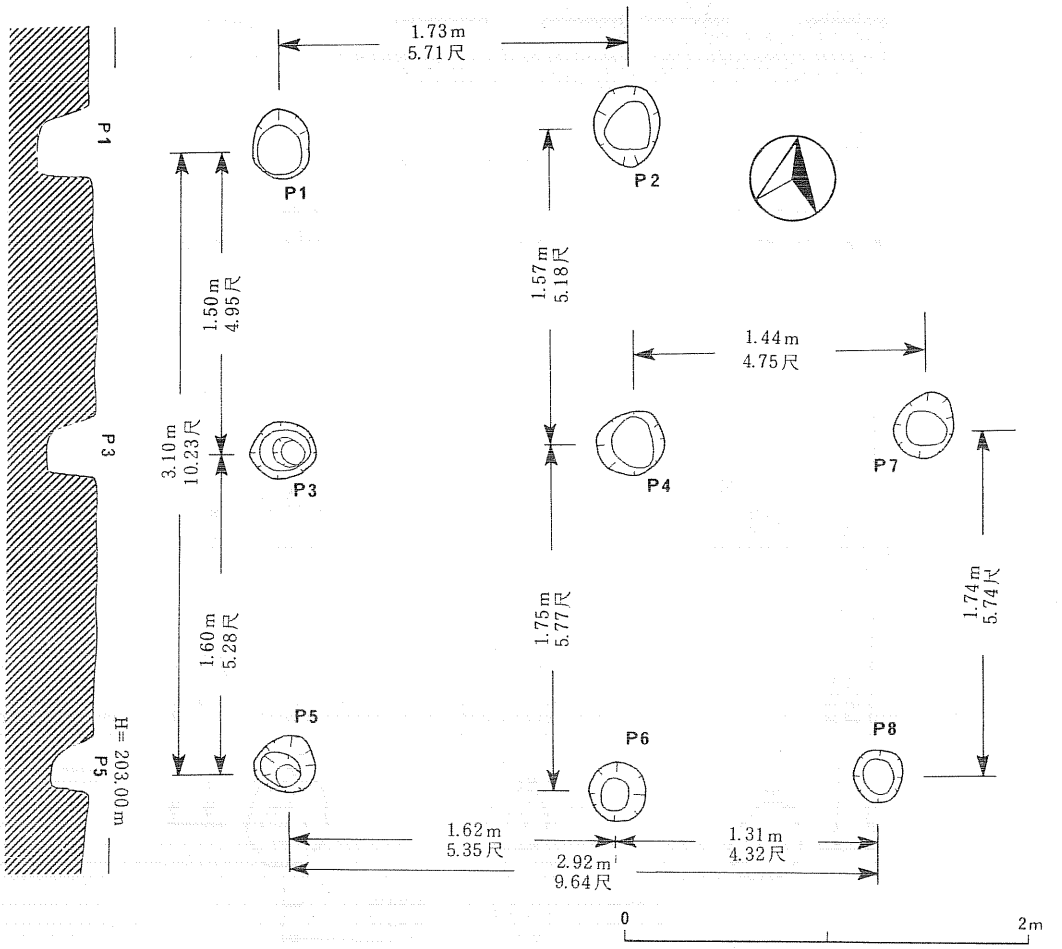
第85図　S B 001 掘立柱建物跡実測図

第　64　表		遺構名	S B 0 0 1	検出地区	5－L、6－L
挿図番号	85	図版番号		桁行方向	N－72°－E
規　模	桁行　2間　4.1 m　13.53尺　柱間平均　211.5 m　6.980尺 梁行　1間　2.3 m　7.46尺　柱間平均　209.3 m　6.909尺 庇　位置　東　1間　158 m　5.22尺				
柱掘り方	P_1（38×30×20）P_2（32×29×40）P_3（30×28×21）P_4（32×27×33）P_5（30×28×19） P_6（39×36）P_7（40×37×48）P_8（36×33×49） 柱掘り方平均値（34.6 × 31.0 × 32.8）				
備　考					



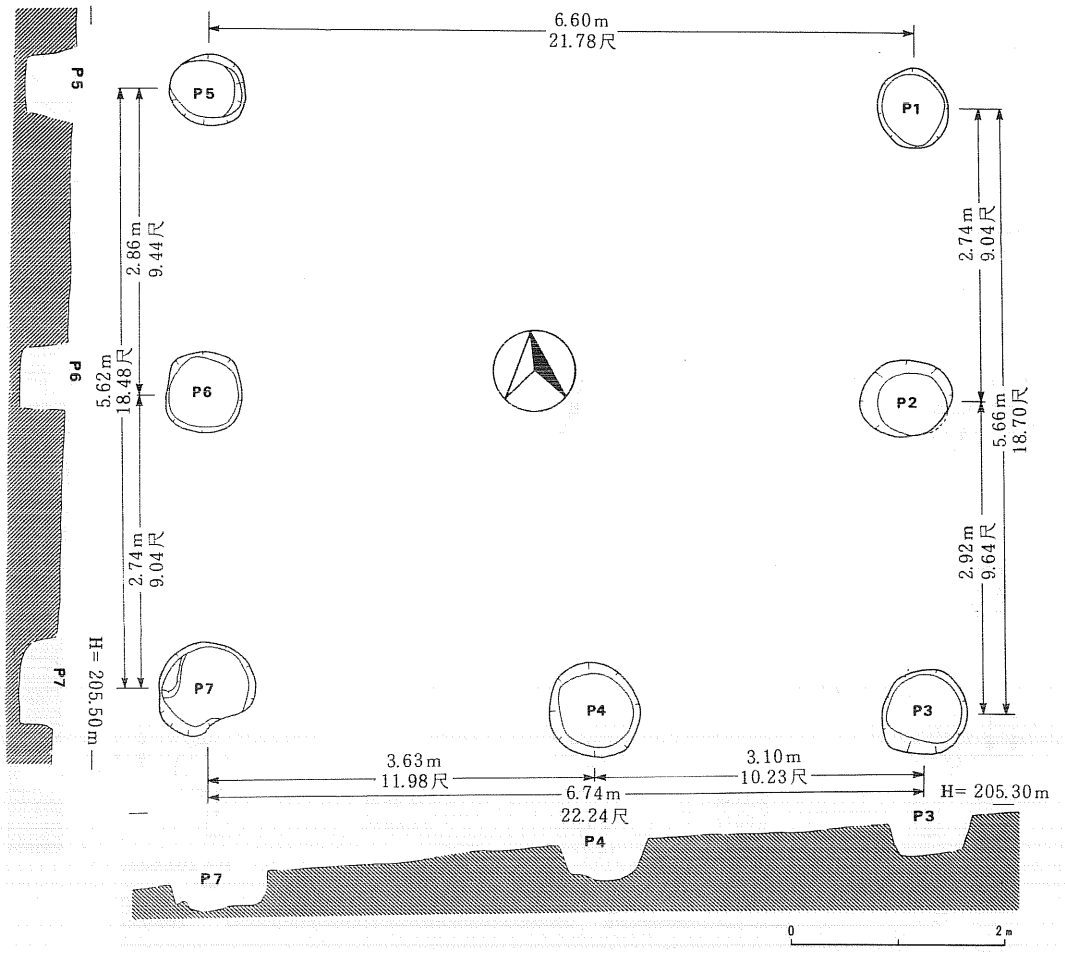
第86図　S B 002 掘立柱建物跡実測図

第　65　表		遺構名	S B 0 0 2	検出地区	6－H、7－H
挿図番号	86	図版番号		桁行方向	N－84°－W
規　模	桁行　2間　3.10 m　10.23尺　柱間平均　153.0 m　5.050尺 梁行　2間　2.45 m　8.09尺　柱間平均　146.75 m　4.843尺				
柱掘り方	P_1（42×40×19）P_2（31×30×22）P_3（32×32×34）P_4（50×30×14）P_5（34×34×30） P_6（42×43×22）P_7（33×33×18）P_8（51×41×20） 柱掘り方平均値（39.3 × 35.3 × 22.3）				
備　考					



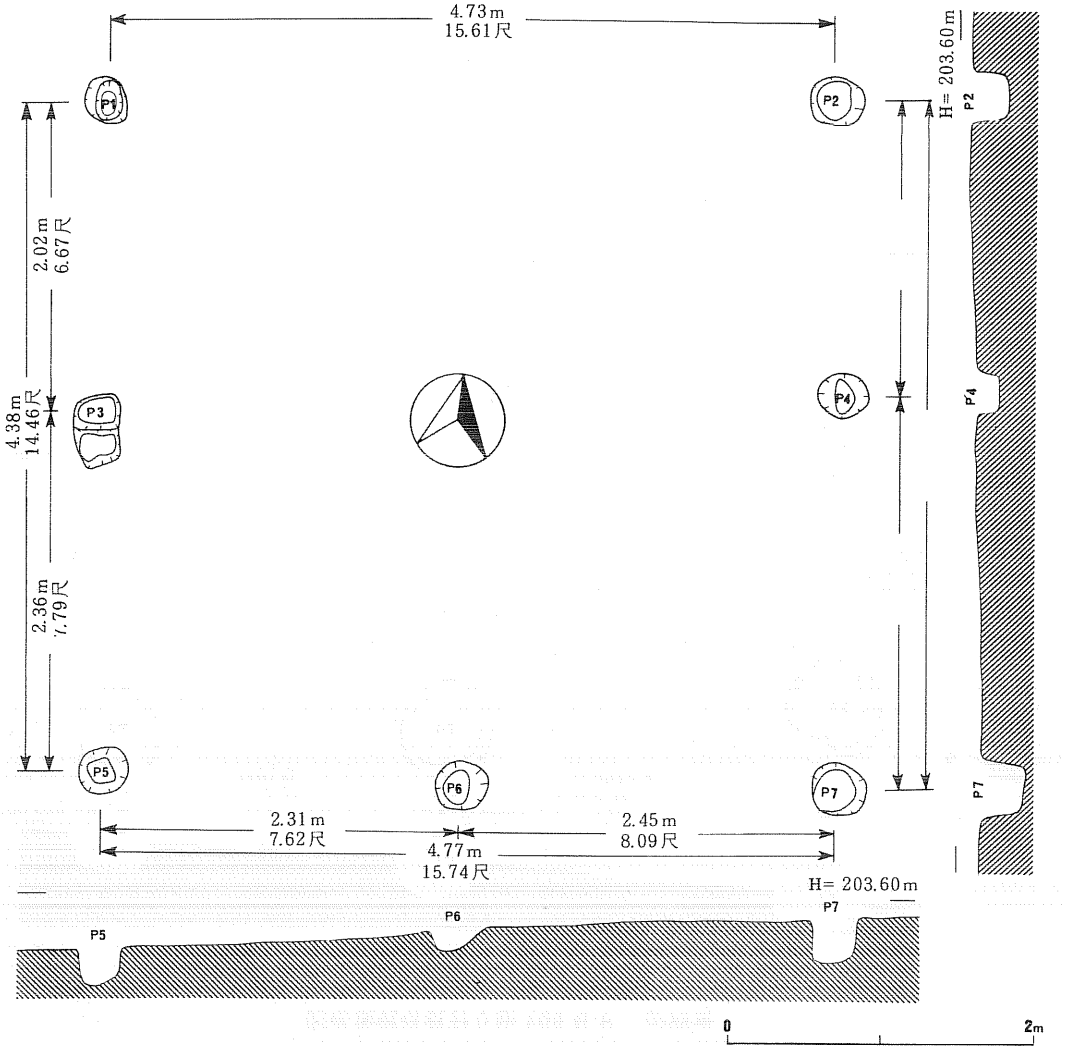
第87図　S B 003 掘立柱建物跡実測図

第　66　表		遺構名	S B 0 0 3	検出地区	5 — I
挿図番号	87	図版番号	34	桁行方向	N — 7.5 °— W
規　模	桁行　2間　3.10 m　10.23 尺　柱間平均　155.0 m　5.116 尺 梁行　1間　2.92 m　9.64 尺　柱間平均　167.7 m　5.534 尺 庇　位置　東　1間　1.44 m　4.75 尺				
柱掘り方	P_1 (35×28×26)　P_2 (41×31×19)　P_3 (32×28×22)　P_4 (33×30×21)　P_5 (30×29×19) P_6 (30×28×15)　P_7 (33×29×19)　P_8 (26×24× 8) 柱掘り方平均値 (32.5 × 22.7 × 18.6)				
備　考					



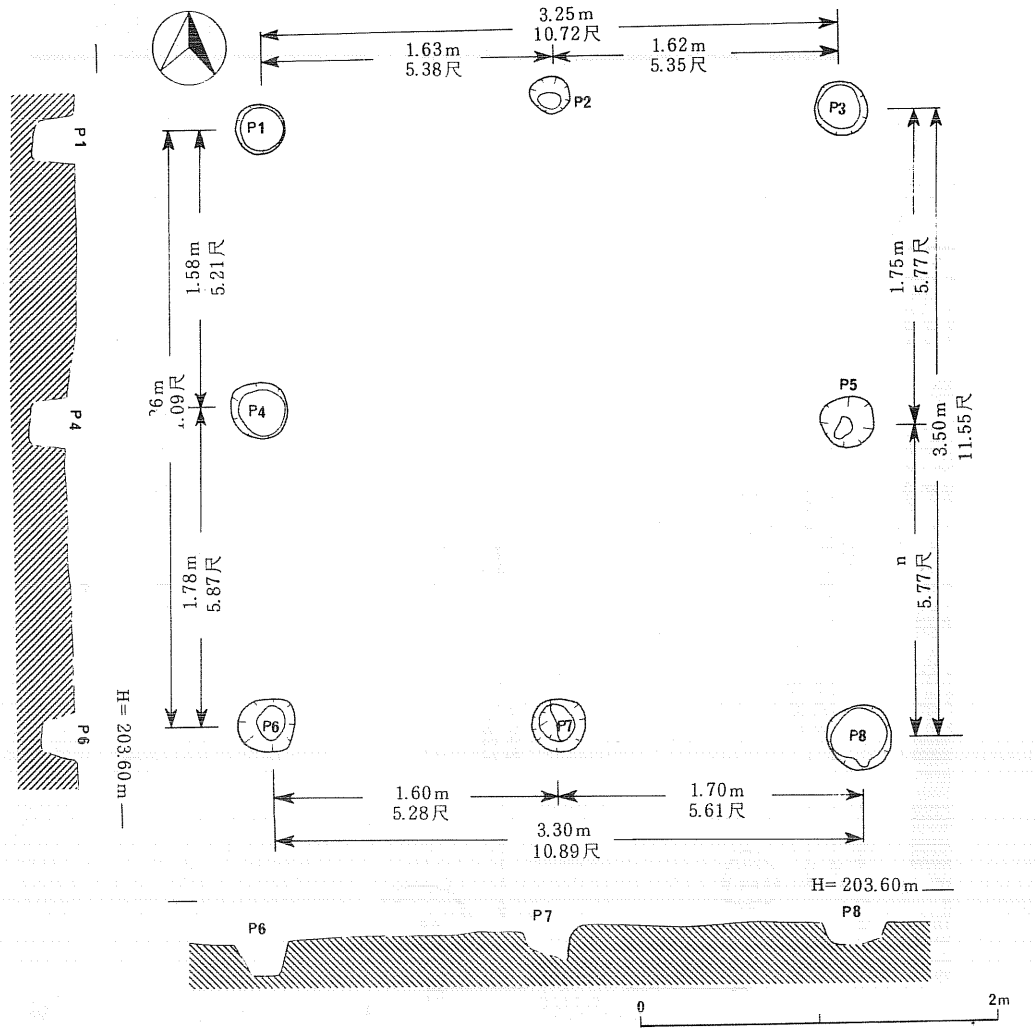
第88図　ＳＢ004 掘立柱建物跡実測図

第　67　表		遺構名	ＳＢ004	検出地区	10—A、B、C 11—A、B、C
挿図番号	88	図版番号		桁行方向	N—87°—W
規　模	桁行　2間　6.74 m　22.244尺　柱間平均　336.5 m　11.106尺 梁行　2間　5.66 m　18.680尺　柱間平均　281.5 m　9.290尺				
柱掘り方	P_1（74×65×　）P_2（88×72×　）P_3（82×78×　）P_4（87×87×　）P_5（73×67×　） P_6（76×72×　）P_7（96×77×　） 柱掘り方平均値（82.2 × 74.0 ×　）				
備　考					



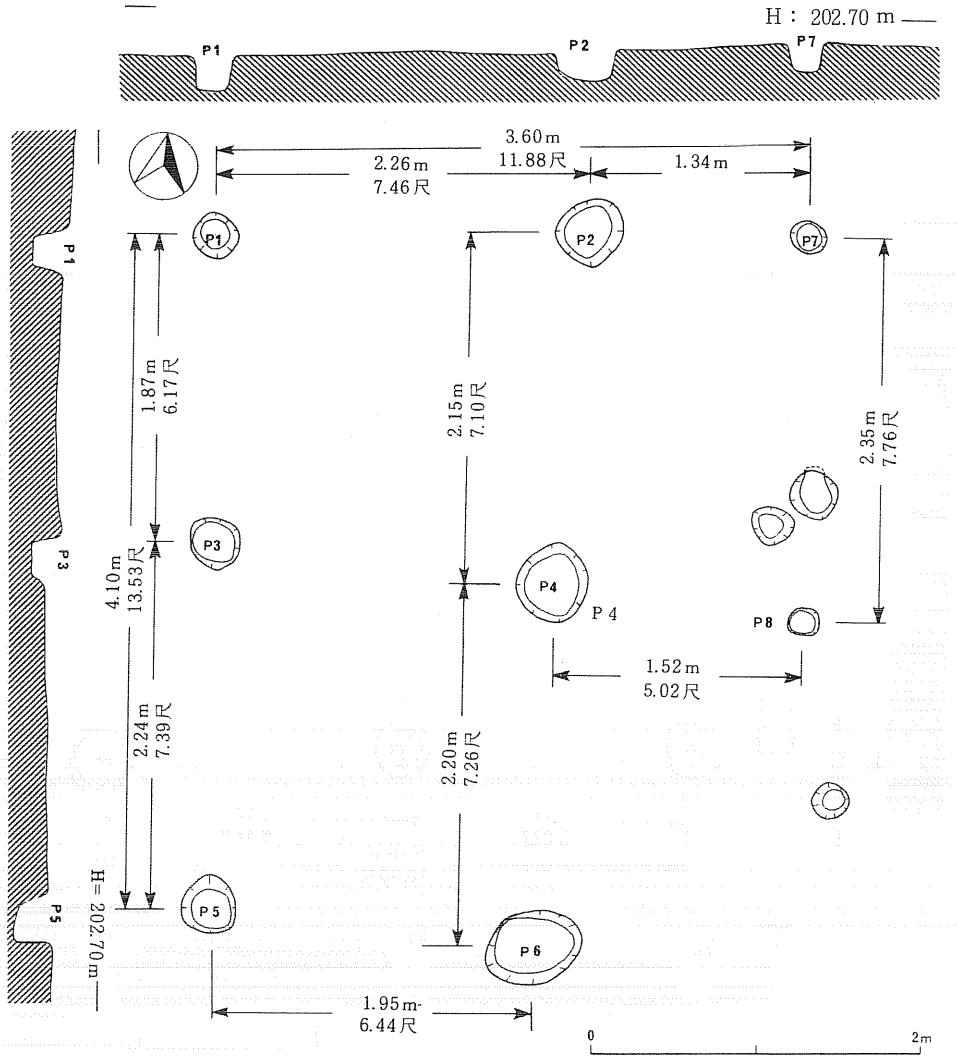
第89図　S B 005 掘立柱建物跡実測図

第　68　表		遺構名	S B 0 0 5	検出地区	13—G、13—F 14—G、14—F
挿図番号	89	図版番号	35	桁行方向	
規　模	桁行　2間　4.77 m　15.74 尺　柱間平均　2.38 m　7.85 尺 梁行　2間　4.54 m　14.98 尺　柱間平均　2.23 m　7.37 尺				
柱掘り方	P_1（32×26×26）P_2（34×34×24）P_3（30×23×26）P_4（34×31×16）P_5（32×30×33） P_6（35×33×16）P_7（35×35×30） 柱掘り方平均値（33.1 × 30.3 × 24.4）				
備　考					



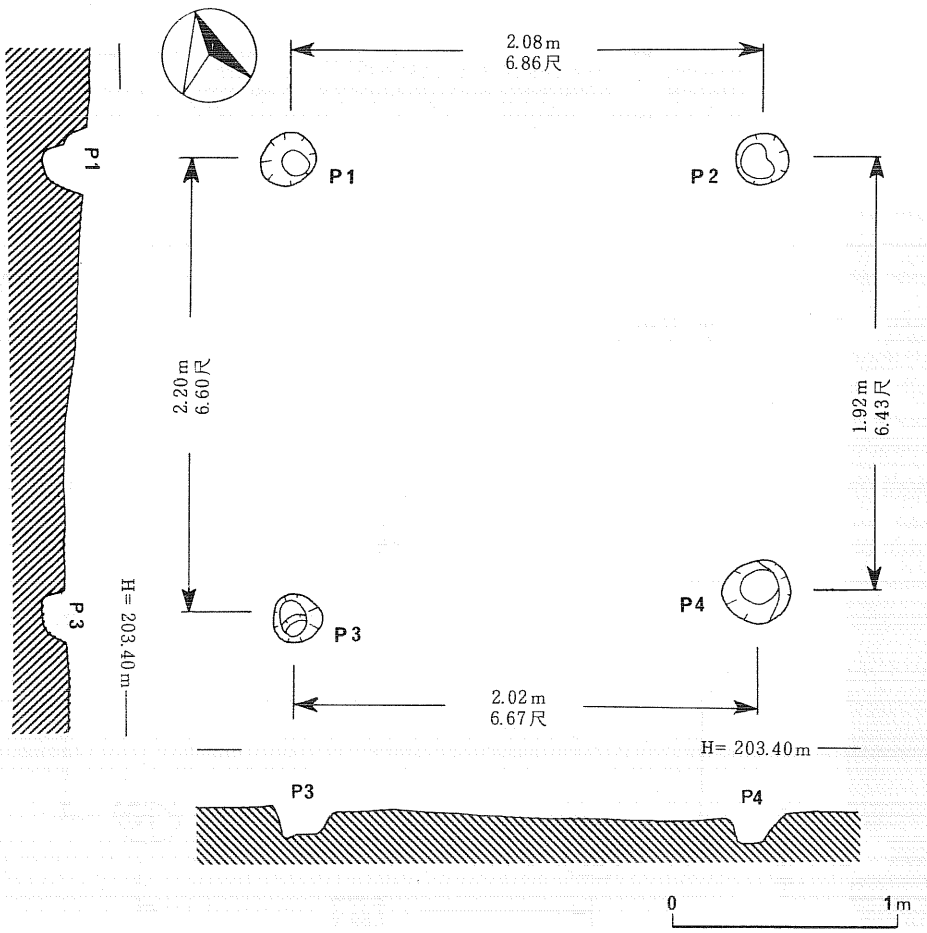
第90図　ＳＢ006 掘立柱建物跡実測図

第　69　表		遺構名	ＳＢ006	検出地区	14—G、H 15—G、H
挿図番号	90	図版番号	35	桁行方向	N—13.5°—W
規　模	桁行　2間　3.53 m　11.65尺　柱間平均　171.5 m　5.66尺 梁行　2間　3.25 m　10.73尺　柱間平均　163.7 m　5.40尺				
柱掘り方	P_1（29×28×22）P_2（23×20×　）P_3（30×29×17）P_4（31×30×20）P_5（29×28×16） P_6（32×30×19）P_7（30×30×20）P_8（38×35×13） 柱掘り方平均値（30.2 × 28.7 × 18.1）				
備　考					



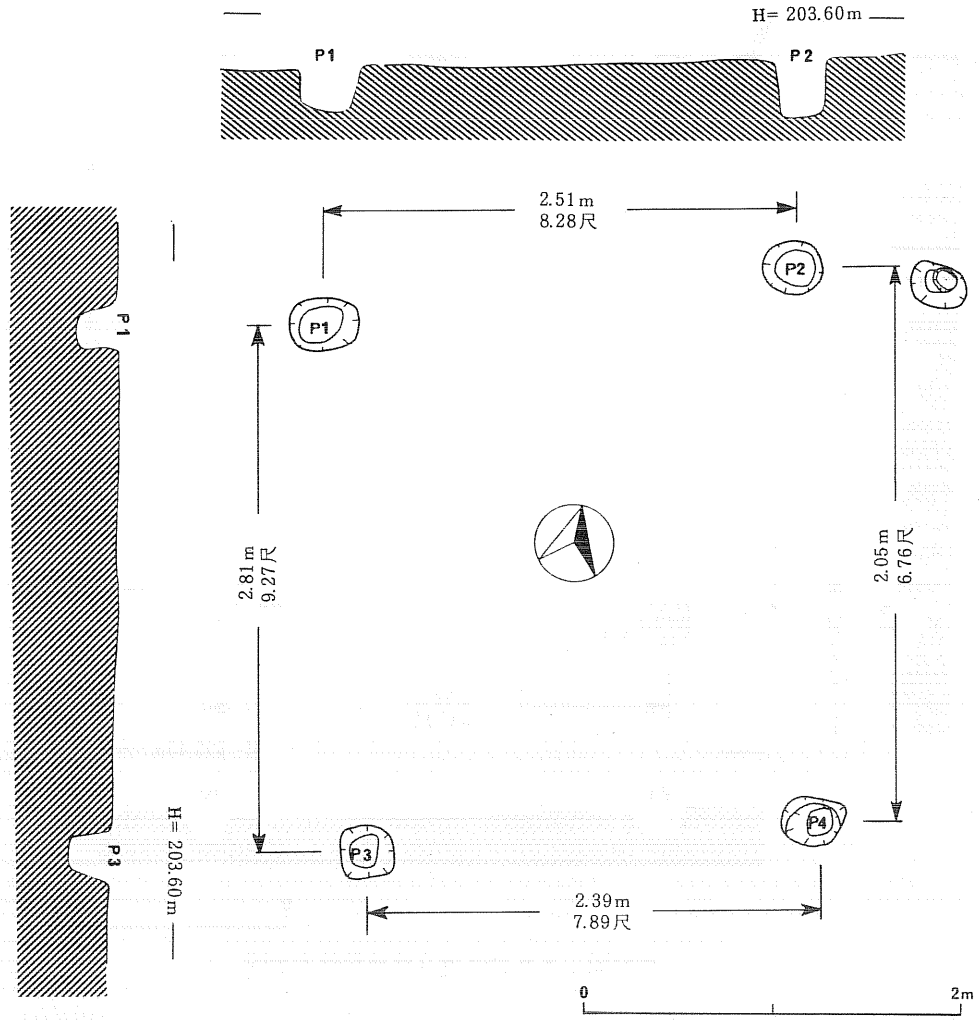
第91図　S B 007 掘立柱建物跡実測図

第　70　表		遺構名	S B 007	検出地区	5－L、6－L
挿図番号	91	図版番号		桁行方向	N－4°－W
規　模	桁行　2間　4.10 m　13.53尺　柱間平均　211.5 m　6.980尺 梁行　1間　2.26 m　7.46尺　柱間平均　209.3 m　6.909尺 庇　位置　東　間　235 m　7.76尺				
柱掘り方	P_1（28×26×19）P_2（41×37×25）P_3（32×30×7）P_4（50×42×34）P_5（36×32×20） P_6（60×44×38）P_7（23×20×17）P_8（19×16×14） 柱掘り方平均値（36.1 × 30.8 × 21.7）				
備　考					



第92図　S B 008 掘立柱建物跡実測図

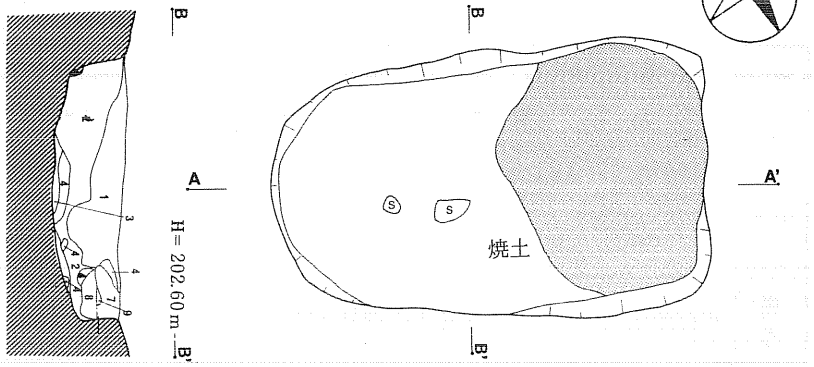
第　71　表		遺構名	S B 0 0 8	検出地区	11—H、I
挿図番号	92	図版番号		桁行方向	N—74.5°—W
規　模	桁行　1間　2.08 m　6.86 尺　柱間平均　206 m　6.80 尺 梁行　1間　1.92 m　6.34 尺　柱間平均　196 m　6.47 尺				
柱掘り方	P_1（24×23×22）P_2（23×22×12）P_3（30×24×12）P_4（23×21×14） 柱掘り方平均値（25 × 22.5 × 15）				
備　考					

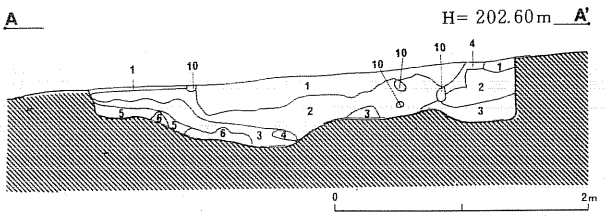


第93図　ＳＢ009 掘立柱建物跡実測図

第　72　表		遺構名	ＳＢ００９	検出地区	13—G、14—G
挿図番号	93	図版番号	35	桁行方向	
規　模	桁行　1間　2.95 m　9.74 尺　柱間平均　2.88 m　9.50 尺 梁行　1間　2.51 m　8.28 尺　柱間平均　2.45 m　8.09 尺				
柱掘り方	P_1（38×28×20）P_2（32×29×28）P_3（29×28×24）P_4（34×25×29） 柱掘り方平均値（33.6 × 27.5 × 25）				
備　考					

SX(F)001

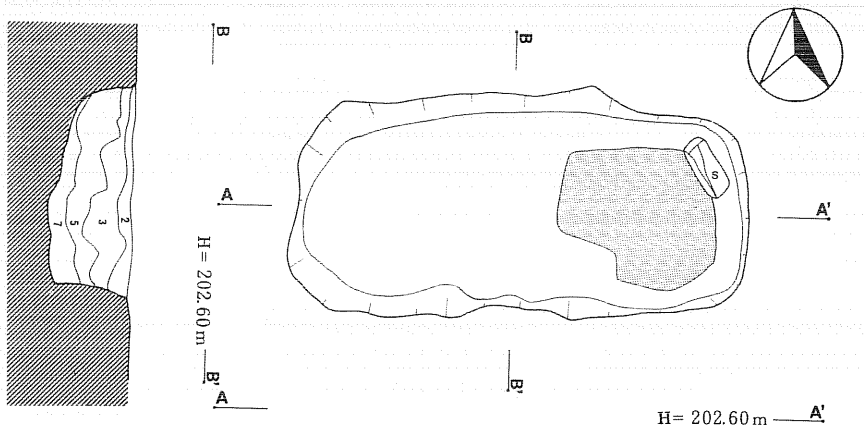


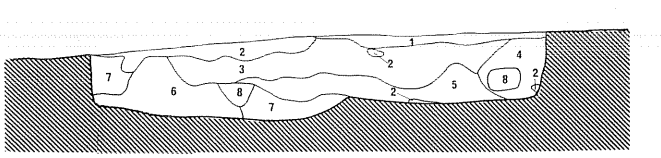


層	土色	備考
1	10YR 5/1 暗褐色	黄褐色土粒子微量混入。
2	10YR 5/2 黒褐色	粘性：強。黄褐色土粒子微量混入。
3	10YR 2/1 黒　色	粘性：強。褐色土微量炭化物微量混入。
4	10YR 4/6 褐　色	粘性：強。暗褐色土微量混入。
5	10YR 3/4 暗褐色	粘性：強。

層	土色	備考
6	10YR 5/6 黄褐色	粘性：強。
7	10YR 5/2 黒褐色	黄褐色土粒子少量混入。
8	10YR 3/2 黒褐色	粘性：強。黄褐色土微量混入。
9	5YR 7/3 浅黄色	粘性：弱。砂質。
10	10YR 1.7/1 黒色	

SX(F)002





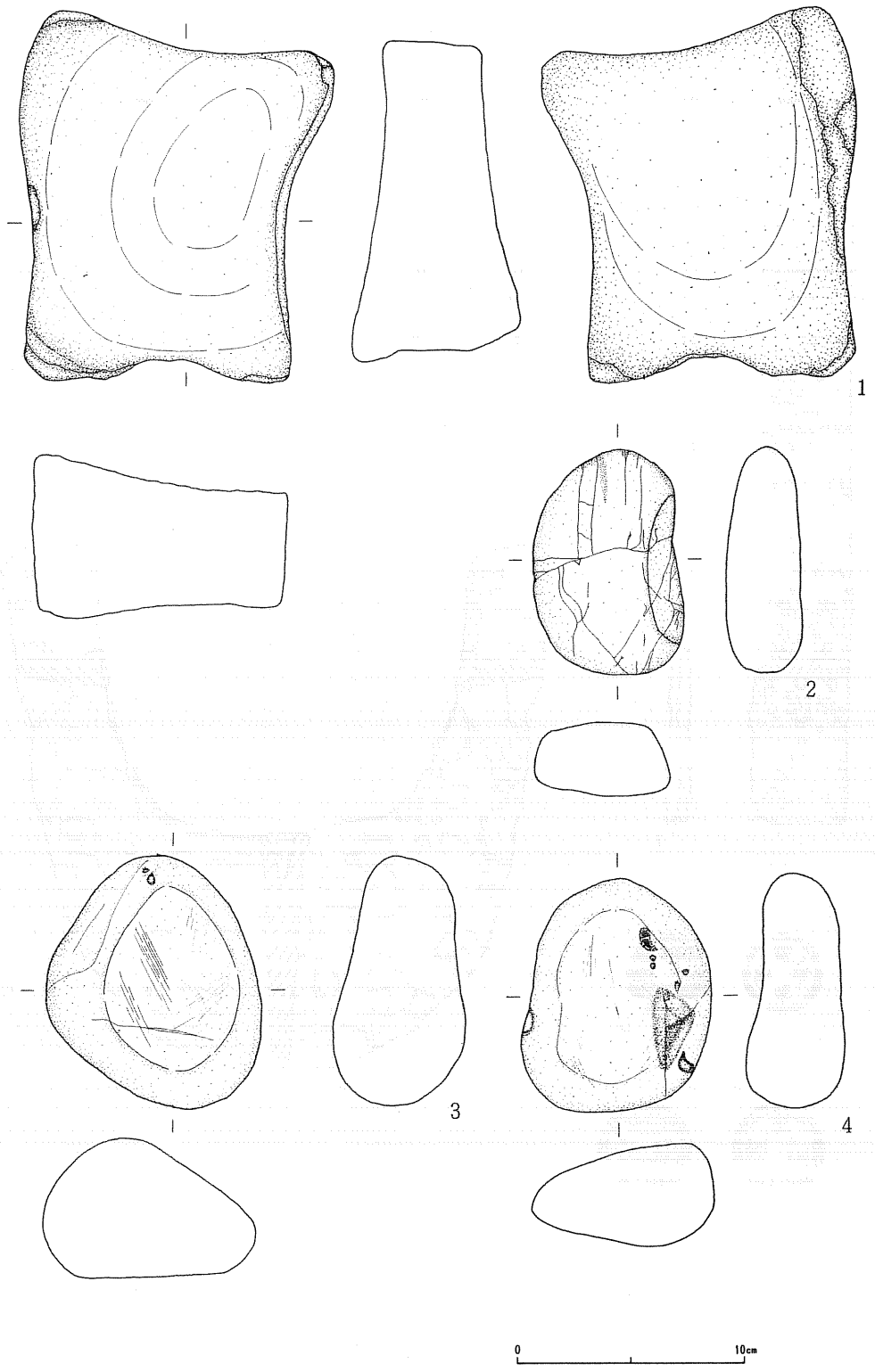
層	土色	備考
1	10YR 2/1 黒　色	硬度：弱。炭化物微量混入
2	10YR 5/4 にぶい黄褐色	浮石層。粘性：弱
3	10YR 2/2 黒褐色	炭化物微量混入。浮石微量混入
4	10YR 3/2 黒褐色	浮石少量混入

層	土色	備考
5	10YR 3/2 黒褐色	粘性：弱。浮石少量混入
6	10YR 3/2 黒褐色	粘性：強 炭化物微量、黄褐色土粒子微量混入
7	10YR 1.7/1 黒　色	粘性：強 炭化物微量、黄褐色土粒子微量混入
8	10YR 1.7/1 黒　色	浮石少量混入

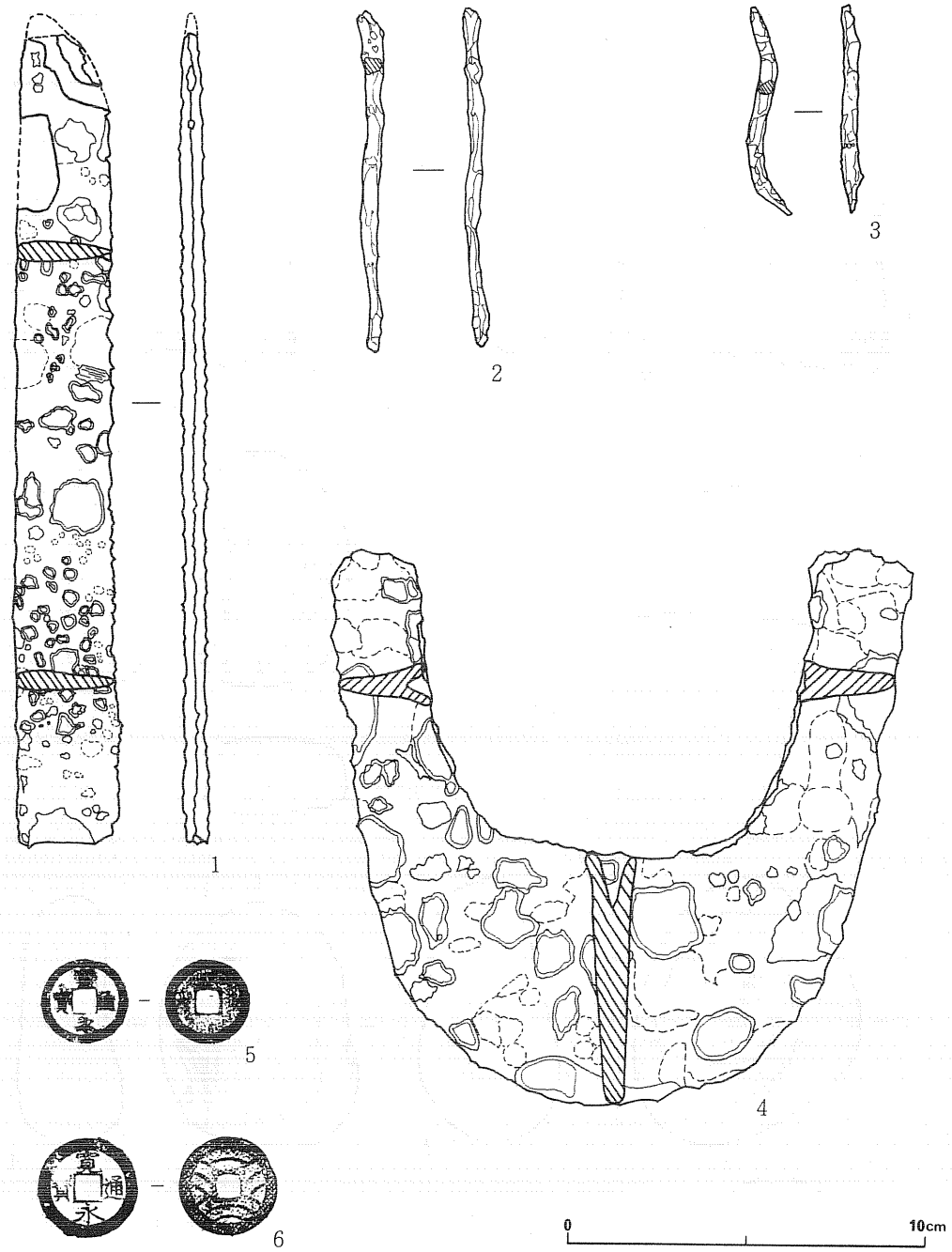
第94図　ＳＸ（Ｆ）001・002焼土遺構実測図

第73表	遺構名	SX(F)001	出土地区	9－J、9－K	挿図番号	94	図版番号	17
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形－小判形、断面形－箱形			
	169 cm	103 cm	27 cm	主軸方位	←→			
出遺土物								
備考	東側床面上に、焼土と黒色土の堆積が認められた。							

第74表	遺構名	SX(F)002	出土地区	9－K	挿図番号	94	図版番号	17
法量	長軸	短軸	深さ	形態	平面形－小判形、断面形－箱形			
	178 cm	91 cm	33 cm	主軸方位	←→			
出遺土物								
備考	東側床面に焼土を含む黒色土が堆積する。さらに、東壁付近に24cm大の川原石が存在する。							



第95図　歴史時代出土石器



第96図　歴史時代出土金属器・古銭

第75表　歴史時代石器観察表

図版番号	挿図番号	名称	出土地区	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石質	備考
42—1	95—1	砥石	SI003	16.2	13.4	8.6	1.820.0	安山岩	
2	2	砥石	SI011	9.9	6.0	3.2	420.0	流紋岩	
3	3	砥石	SI015	11.4	9.4	6.2	670.0	流紋岩	
4	4	砥石	SI001	10.2	7.9	4.5	300.0	流紋岩	

第76表　金属器観察表

図版番号	挿図番号	名称	出土地区	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	備考
42—5	96—1	直刀	SI016	（22.5）	2.6	0.5	床面直上
6	2	釘	表採	9.5	0.5	0.5	
7	3	釘	表採	5.9	0.4	0.4	
8	4	鍬先	表採	15.5	16.1	1.4	

第77表　古銭観察表

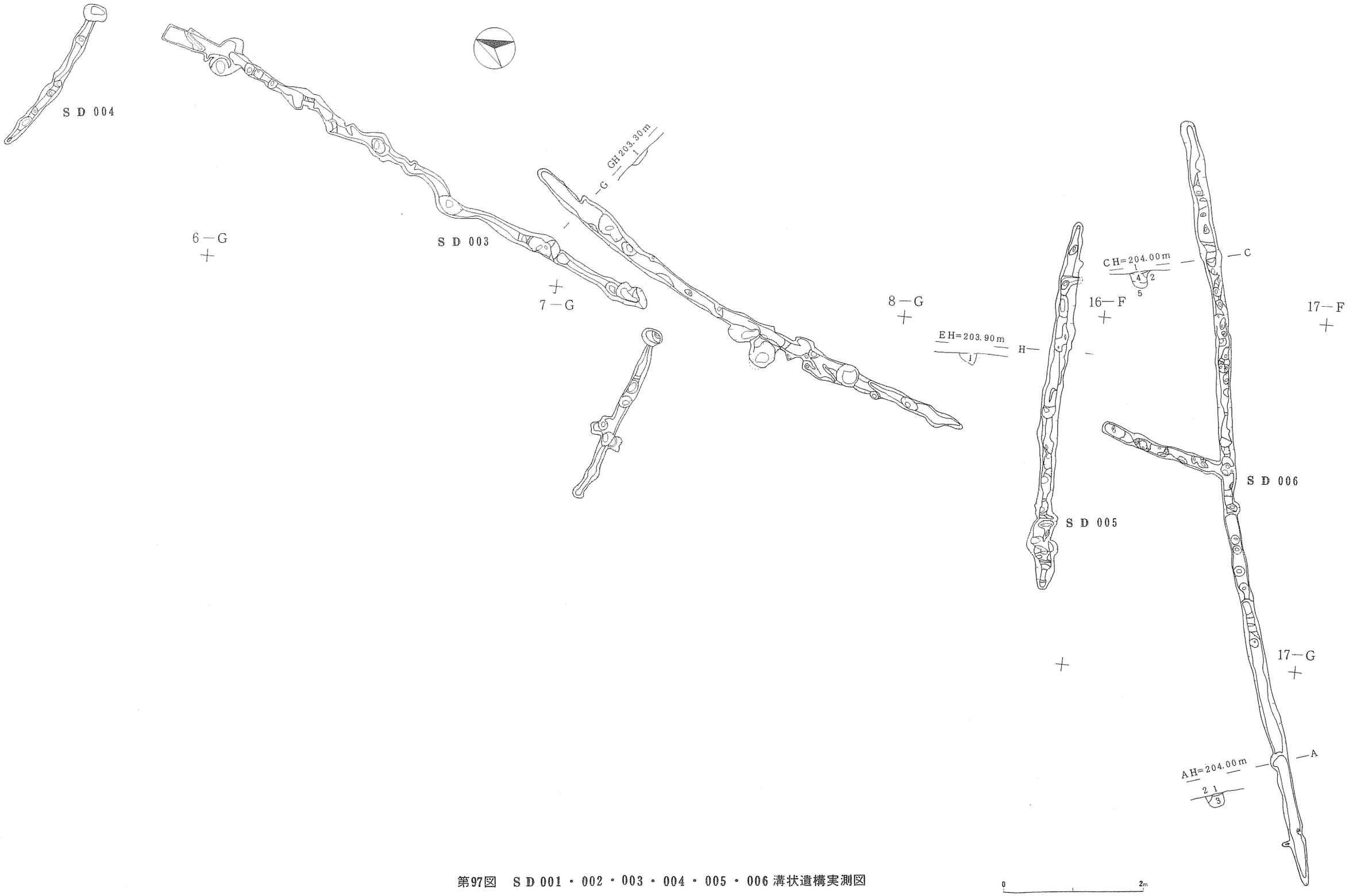
拓景番号	挿図番号	銭名	出土地区	初鋳年	備考
42—9	96—5	寛永通宝	表採	江戸1636年	
—10	—6	寛永通宝	表採	江戸1636年	

第 78 表		遺構名	SD001	検出地区	6－F、7－F 7－G、8－G
挿図番号	97	図版番号		走行方向	SE → NW
法量	長さ 2.68 m	幅	0.16 m	深さ	0.08 m
底部	水流による凹凸を有する。				
出土遺物					
備考					

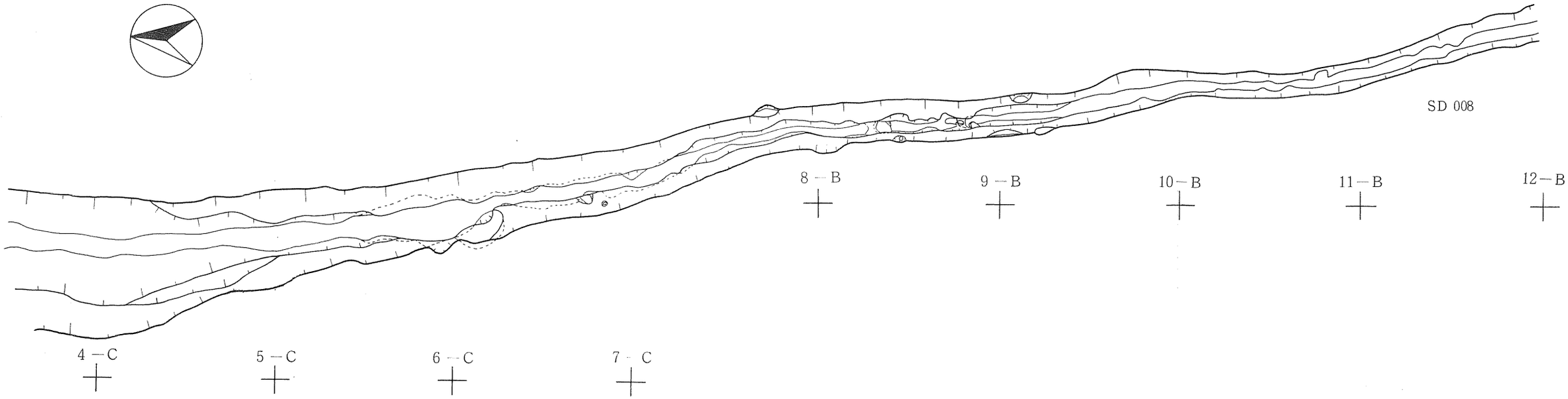
第 79 表		遺構名	SD002	検出地区	7－G
挿図番号	97	図版番号		走行方向	NE → SW
法量	長さ 7.06 m	幅	0.37 m	深さ	0.04 ～ 0.07 m
底部	水流による凹凸を有する。				
出土遺物					
備考					

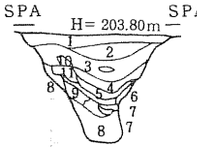
第 80 表		遺構名	SD003	検出地区	5－F、6－F 6－G、7－G
挿図番号	97	図版番号		走行方向	NE →
法量	長さ 6.95 m	幅	0.30 m	深さ	0.01 ～ 0.06 m
底部	激しい凹凸を示す。				
出土遺物					
備考	SD004が本溝に直交するかたちで接する。				

第 81 表		遺構名	SD004	検出地区	5－F
挿図番号	97	図版番号		走行方向	SE → NW
法量	長さ 2.40 m	幅	0.21 m	深さ	0.02 ～ 0.04 m
底部	底部は平坦であるが、水流によるピットが存在する。				
出土遺物					
備考	SD003に本溝が直交するかたちで接する。				

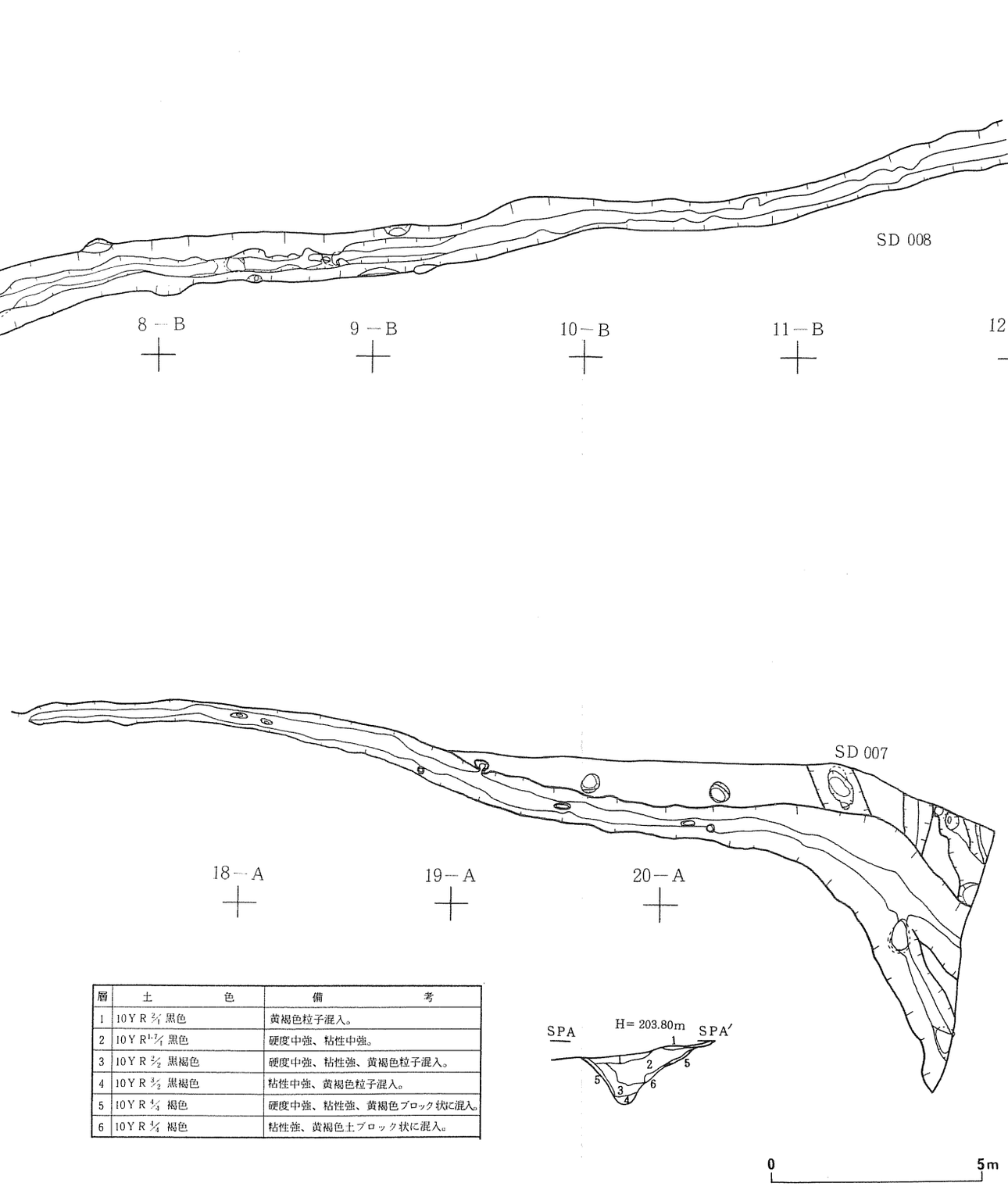


第97図　S D 001・002・003・004・005・006 溝状遺構実測図





層	土色	備考
1	10YR 3/2 黒褐色	白色軽石粒子混入。
2	10YR 3/1 黒色	硬度中弱、白色軽石粒子混入。
3	10YR 1.7/1 黒色	硬度中弱、白色軽石粒子混入。
4	10YR 3/2 黒褐色	硬度中、白色軽石粒子混入。
5	10YR 1.7/1 黒色	硬度中弱、
6	10YR 3/2 黒褐色	黄褐色火山灰粒子混入。
7	10YR 1.7/1 黒色	黄褐色火山ブロック状に混入。
8	10YR 5/6 明黄褐色	壁の崩落土。
9	10YR 5/8 明黄褐色	壁の崩落土。
10	10YR 3/3 黒褐色	浮石粒子混入。
11	10YR 3/2 黒褐色	黄褐色火山灰粒子混入。



層	土色	備考
1	10YR 3/1 黒色	黄褐色粒子混入。
2	10YR 1.7/1 黒色	硬度中強、粘性中強。
3	10YR 3/2 黒褐色	硬度中強、粘性強、黄褐色粒子混入。
4	10YR 3/2 黒褐色	粘性中強、黄褐色粒子混入。
5	10YR 3/4 褐色	硬度中強、粘性強、黄褐色ブロック状に混入。
6	10YR 3/4 褐色	粘性強、黄褐色土ブロック状に混入。

第98図　ＳＤ 007 ・ 008 溝状遺構実測図

第 82 表			遺構名	SD005	検出地区	15—E、15—F
挿図番号	97		図版番号		走行方向	E → W
法量	長さ	5.31 m	幅	0.45 m	深さ	0.10 ～ 0.21 m
底部	水流による凹凸を有する。					
出土遺物						
備考						

第 83 表			遺構名	SD006	検出地区	16—B、16—C、16—D 16—E、16—F
挿図番号	97		図版番号		走行方向	NE → SW
法量	長さ	21.32 m	幅	0.36 m	深さ	0.06 ～ 0.24 m
底部	水流による凹凸を有する。					
出土遺物						
備考	本溝西面で他溝一本が直交し、合流する。又、SK001が隣接する。					

第 84 表			遺構名	SD007	検出地区	17～21—Z 21—A
挿図番号	98		図版番号	36	走行方向	N → S
法量	長さ	23.35 m	幅	0.44 ～ 4.50 m	深さ	0.05 ～ 1.10 m
底部	平坦であるが、所々に水流によるピット状の凹を有する。					
出土遺物						
備考						

第 85 表			遺構名	SD008	検出地区	5～11—A 3～6—B
挿図番号	98		図版番号	36, 37	走行方向	S → N
法量	長さ	43.50 m	幅	1.10 ～ 3.70 m	深さ	
底部	平坦であるが、所々に水流によるピット状の凹を有する。					
出土遺物	土師器、縄文式土器が出土した。					
備考	台地北側の沢に落ち込む。					

遺構と遺物について

(1) 遺　構

竪穴住居跡について

ア、縄文時代

この時代の竪穴住居跡は3棟確認した。平面形はいずれも円形を基調とするもので、面積と付属施設から2分類される。

1つはＳＩ023、ＳＩ025の径6ｍ以上の比較的大型の住居跡で、中心より西側部分に石組複式炉を有するものである。ＳＩ023住居跡の開口部炉底には石が敷かれていた。柱穴は住居跡内に設けられている。

いま1つは径3ｍ程の小型の住居跡で、中心より南西に偏した位置に円形の石組炉を持つものである。柱穴は住居跡壁外に存在する。

前者は中期大木10式期、後者は土器の出土はなかったが、同期もしくはそれとあまり隔りの無い時期のものと考えられる。

イ、平安時代

平安時代の竪穴住居跡は22棟検出されたが、拡張の行なわれているものをも入れると延べ25棟になる。以下これらの竪穴住居跡を主軸方向、カマドの方向、面積から分類を試み、その特徴を見てみる。

カマドの中軸線を基準とした住居跡の主軸方向は、1例を除いてＮ－22°－ＷからＮ－13°－Ｅの間におさまり、統一性が窺える。このことはカマドの方向からも裏付けられる。すなわち、殆んどが南向きであるということである。カマド自体は南壁中央部よりややコーナーに寄った位置に設定されており、構築材は粘土のみのものと、粘土に芯材として石を使用しているものがある。煙道は壁際から直ぐ立ち上がるものと、半地下式の長いものがあるが、後者は1例だけである。

面積から見ると大きく2分類できる。ほぼ20㎡未満のものと、40㎡以上のものがそれである。柱穴位置とその関連でみると、前者は4隅に主柱穴を持つものであり、後者は住居内に4本と4隅に4本の主柱穴をもつもの、4隅とその間の壁に沿い方形または長方形の3本の柱穴のあるものに分けることができる。これら大小の住居跡は上屋構造の相違が考えられる。

一方、焼失家屋と考えられる住居跡も３棟確認されている。そのうちＳＩ016の住居跡は周壁の板材列をはじめ100点を越える数多くの炭化材の検出により焼失家屋と判断したもので、炭化材の形状は板状、角材状、杭状、さらに一部がタール状に変化したものなどがあった。しかし、この炭化材は床面からの検出は少なく、炭化物、焼土についても同様であった。このことから、この焼失家屋は焼失後にある程度床面に散在していた焼失材が除去整理された後廃棄されたものと理解され、埋土の炭化材は住居跡が廃棄された後二次的に入り込んだものと推定される。焼失家屋には焼失と同時に廃棄されるものと、ＳＩ016住居跡のように焼失直後の後始末を経て廃棄されるものがあることを指摘できるのである。

この住居跡の周壁においては、カマド部分と北壁東側、西壁南壁を除いて幅10～15㎝、厚さ１～1.5㎝程の板材を矢板状に一部は互い違いに重複させて配し一巡させている。板材は周壁に密着してではなく、数㎝程黒色の埋土を間にしており、周溝内には存在せず、床面レベルより上位までの遺存であるが、板材の検出位置および類列から板材は周溝内より建てていたものと考えられる。それに住居内に倒れ込んでいる炭化材の測定値から考えると、板材は床面より最底100㎝は地上高があったものと推定できる。また、周壁の板材の途切状況から出入口は北壁東コーナー付近（カマドすじ向側）に想定できる。

住居内からの出土土器は甕形の土師器が多い。これには表面に巻上痕を残すもの、荒い削り痕の見られるものがある。底部は砂底のもの、木葉痕のもの、ヘラ削りもしくはナデのものがあり、各住居内からこの種の特徴を有する土師器が出土している。重複や拡張の行われている住居跡は最高で二時期で住居跡の主軸方位はほぼ同一である。このことから、住居群は平安時代後半に営まれたものと考えられる。

掘立柱建物跡について

９棟検出した。柱穴の多くは埋土における浮石の含有により、２層黒色土中よりピットとして観察されていたが、建物跡と明確に確認できたのは地山上面であった。規模は桁行×梁行で１間×１間が２棟、２間×１間が３棟、２間×２間が４棟である。柱穴は円形であり、小さいもので径20㎝、大きいもので径70～80㎝であるが、径30～40㎝が一般的である。

住居跡との関連でみると、位置や方向からＳＢ004建物跡はＳＩ007住居跡の南どなり３ｍに、ＳＢ005、009建物跡もＳＩ011住居跡の南どなりに、さらにＳＢ007建物跡はＳＩ005住居跡の西どなりにそれぞれ数十㎝の間隔で併列している。これらから、建物跡は住居に付属するなんらかの施設、もしくは住居と同じ性格をもつものと思われる。

(2) 遺　物

土　　器

ア、縄文時代

縄文土器の出土は少くない。ここでは、遺構外の土器について述べてみたい。

第一群土器（第23図１・２）

円筒下層ｄ式に比定されるものである。地文に羽状縄文を施し、頸部には撚糸圧痕を付した低い隆帯で区画され、口縁部に４条の撚糸圧痕文をもつものである。更に撚糸文のみ施された胎土の荒い土器も、この期に近いものと思われる。いずれも胎土に植物性繊維の混入は見られない。

第二群土器

大木10式と考えられる土器である。

１類（第23図３～８）

地文に斜縄文を施し、沈線で区画された外側あるいは内側を磨消するものである。

２類（第23図９・10）

口縁部内面に「ノ」字状の隆線をもつもので、外面には、口縁部に低い隆帯を貼り付け、隆帯周縁と隆帯下の一部に竹管による円形刺突文を施したもの。斜縄文の地文に沈線で区画し、その内側に縦位の刺突文を充填したものがみられる。

第三群土器（第23図11～14）

後期中葉を中心とする時期のものと思われる。大小２個の断面円形の突起が１対となり、耳垂状を呈しているもので、口縁部以下は曲線的な磨消縄文が施されている。また山形突起の頂部に刻みの入るものもある。

第四群土器（第24図27・28）

大洞C_2式に比定されるものである。体部上半で逆「く」の字状に折れ曲り、口縁部で直立する浅鉢形を呈するものと思われる。斜縄文の地文に体部上半から頸部にかけて、３本の平行沈線を持ち、内面口縁部にも沈線が入る。

第五群土器（第23図17～19・第24図20～26・32・33）

縄文のみ施されたものと、口縁部に沈線が1本入るものをひとまとまりとした。胎土や条の細さ太さなどから、第一群～四群にわたるものを含んでいる。

イ、平安時代

出土土器には、土師器、須恵器がある。

土師器の器種は坏、高台付坏、埦、甕、手づくね土器などで、量的には圧倒的に甕が多い。

坏はロクロを使用しているものと使用していないものがあり、黒色処理については、いわゆる内黒と言われているものの他に、内外面黒色のもの、外面のみ黒色という例もある。底部については回転糸切りで無調整のもの、木葉痕の2種類が認められる。

高台付坏は1点のみの出土である。ロクロを使用しており、内面はヘラミガキの後黒色処理を施しているものである。

埦も出土は1点である。内湾して立ち上がる小形のもので、ロクロは使用していない。

甕のロクロ使用有無については確認が困難である場合が多く、断言は出来ないが未使用の方が多いようである。形態からみると、体部は一般的にほぼ直立もしくは内湾気味に立ち上がる長胴のものが多く、口縁部は①そのまま直立するもの、②内湾するもの、③緩く外反するもの、④「く」の字状に外反するもの、⑤ほぼ直角に折れるものなどがある。③④が比較的多く見られ、②がこれに続く。

調整は、器外面体部から頸部にかけてヘラケズリを施し、口縁部に横ナデを行うのが一般的である。ヘラケズリはほとんど例外なく下から上に施しており、巻上痕跡を残しているものが多い。内面の口縁部はほとんどが横ナデである。体部はナデのみのものと、ハケメとナデによるもので、出土例は前者が多く、後者には胎土に3～5ミリ程の小石、小礫を多く含んでいるのが観察できる。この後者の器内面にハケメとナデが併用されて入念に仕上げられているのは胎土に含まれる小石、小礫の大きさと量から生ずる間隙を防ぐためと考えられる。この種の胎土と器外面に巻上痕を残す土器は、県北部のいわゆる「館」と称される遺跡から多く出土しているものに類似する。

底部はいわゆる①砂底を呈しているもの、②ケズリあるいはナデを施しているもの、③木葉痕のものがある。①には周辺に二次的にナデを加えているものもあり、②は最終的にはナデ調整を意図したものと理解できる。おのおのの底部の出土率は順に6：3：1である。

須恵器の器種には坏と甕が見られる。両者とも出土量は少ない。坏は色調が土師器に近いにぶい橙色を呈している。底部は回転糸切り無調整で、底径／口径比が0.43を示し、内外ミガキで木葉痕の底部を持つ土師器坏と共伴する。甕は破片のみで、内外面とも叩き目を有するもの

と、内面に青海波文の見られるものがある。

石器・石製品

出土した石器には、石鏃、石錐、石匙、石篦、掻器、磨製石斧、石皿、凹石、砥石、石製品には岩偶がある。石鏃は全て無茎のもので、石皿は脚付とそうでないものがある。磨製石斧には、5センチ前後の研磨のいきとどいたミニチュアのものもみられる。凹石は円形のものと細長い形のものである。石製品の岩偶は、細長い川原石に刻みを入れたものである。

鉄製品・鉄滓・貨幣

出土した鉄製品は、直刀、鍬先、釘などで、鉄滓は平安時代の竪穴住居跡内外から比較的多く検出されている。寛永通宝二枚は粗掘の段階で耕作土中からの出土である。

6. まとめ

北の林Ⅰ遺跡は鹿角市八幡平字北の林に所在し、地形的には花輪盆地東側山地末端に形成された標高200ｍの鳥越段丘上に立地する縄文時代と平安時代の複合遺跡である。

縄文時代の遺構としては、石組複式炉を持つ中期末葉大木10式期の竪穴住居跡２棟、小型石組炉を持つ同期もしくは後期初頭の竪穴住居跡１棟、後期の土壙１基、以上の遺構に関係するＴピット16基とフラスコ状ピット３基がある。Ｔピットは２基一対をなすものである。

遺物としては前期円筒下層ｄ式、中期大木10式、後期中葉、晩期大洞C_2式の土器と石鏃、石錐、石匙、掻器、磨製石斧などの石器、岩偶の石製品である。

平安時代の遺構としては、竪穴住居跡22棟、掘立柱建物跡９棟、２条の大溝、柱列が検出された。この遺構とその周辺から土師器、須恵器、砥石、鉄刀、鉄滓の遺物が出土し、平安時代の後半に集落の形成されたことが判明した。土師器は甕形のものが多く、これには表面に巻上痕を残すもの、荒い削り痕のみられるものがあり、底部は砂底のもの、木葉痕のもの、ヘラ削りもしくはナデによるものがある。

竪穴住居跡は規模、施設、主軸の方向性に規則性が見られた。面積的には20㎡以下の一群と40㎡以上のものに大別され、周溝を有し、カマドは南壁に、主柱穴は小型のものは床四隅に、大型のものは床四隅の他に住居内に４本、４隅とその間の壁に沿い方形または長方形に３本設置されていた。火災にあった住居跡の１棟は、火災後あとかたずけを行ったらしく、住居床面に炭化材、木炭、生活器具がほとんど認められなかった。

竪穴住居跡内の放射性炭素年代測定結果報告

コード番号	試料コード	
N－4121	TW9キタISI 001	1070±75 y B.P.(1040±70 y B.P.)
N－4122	TW9キタISI 003	1010±75 y B.P.(980±70 y B.P.)
N－4123	TW9キタISI 016	1250±80 y B.P.(1220±80 y B.P.)

年代は^{14}Cの半減期5730年(カッコ内はLibbyの値5568年)にもとづいて計算され西暦1950年よりさかのぼる年数(yearsB.P.)として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので、^{14}C年代がこの範囲に含まれる確率は約70%です。この範囲を2倍に拡げますと確率は約95%となります。なお^{14}C年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。

日本アイソトープ協会

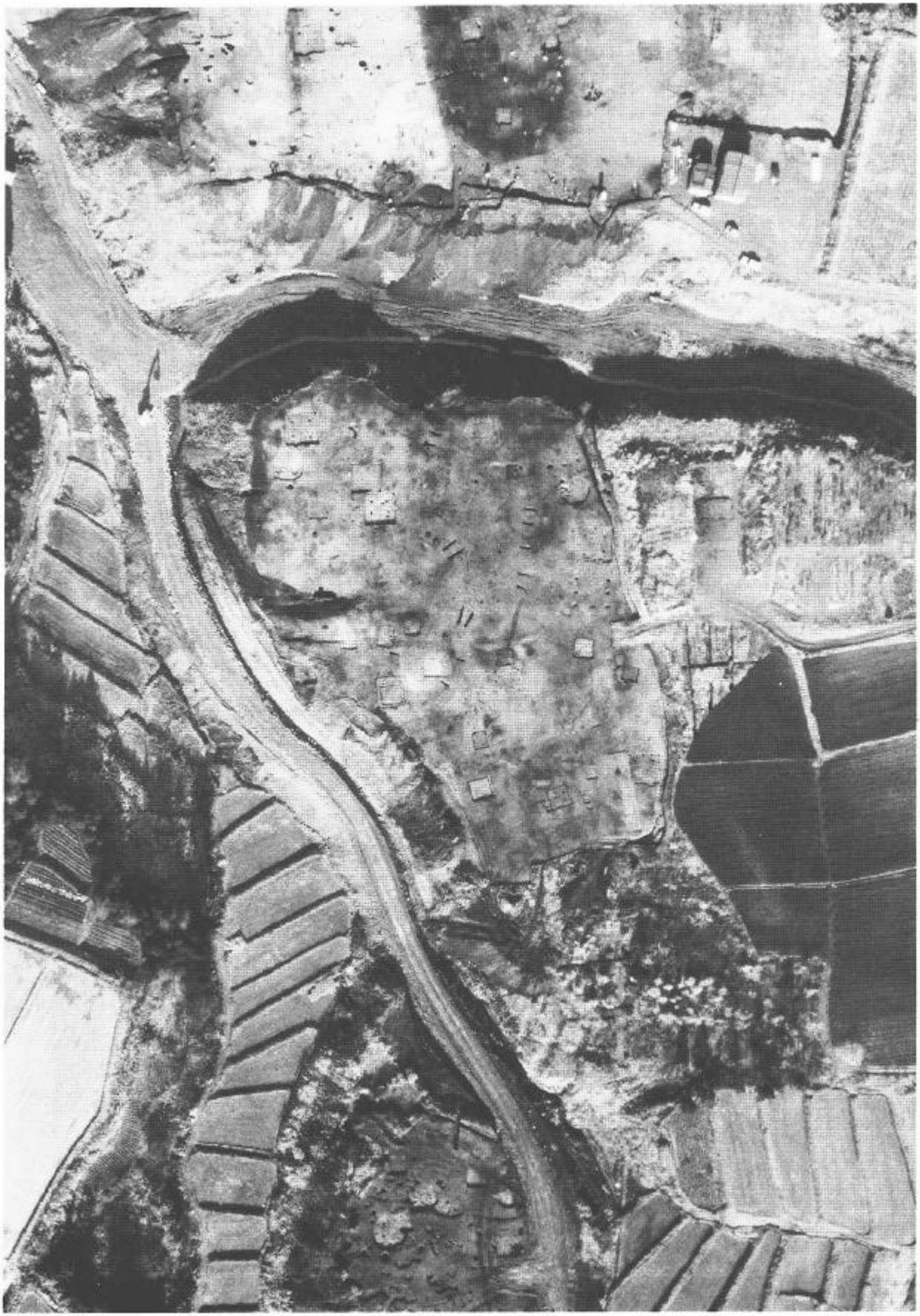
＜主要参考文献＞

奥山　潤　『柏田遺跡』　大館市教育委員会　1974年
村越　潔　『円筒土器文化』　1974年
中村　光一　『沼津貝塚保存・管理計画策定事業報告書』　石巻市教育委員会　1976年
桜田　隆　『三内遺跡』　青森県教育委員会　1978年
畠山　憲司　『谷地中「館」遺跡』　比内町教育委員会　1978年
富樫　泰時　「大湯浮石層と鹿角盆地の遺跡」『どるめん19号』　1978年
中村　良幸　『立石遺跡』　大迫町教育委員会　1979年
板橋　範芳　『大館市史　第1巻』　1979年
柳沢　清一　「大木10式土器の細分」『古代探叢』　1980年
鈴木道之助　『石器の基礎知識Ⅲ』　1981年

発掘調査参加者　（北の林Ⅱ遺跡）

浅石　三郎　浅石　松蔵　阿部善一郎　安保　富蔵　安保　富福　小田島政美
利部　修　金沢　武　川又　繁治　川又　忠治　田中慶太郎　兎沢　一三
成田　惣太　成田　与吉　畠山精次郎　松岡　武男　松岡　徳良

浅石　容子　阿部　チエ　阿部　テル　安保テイ子　石井ヨシエ　石川　リサ
稲垣　キワ　井上　ミヲ　金沢　ミキ　川村千鶴子　川又　ヨリ　金田一實津子
工藤　イネ　工藤　ミツ　工藤　ヤエ　佐藤　シミ　関　キワ　田中　タマ
津江　ミナ　成田　キヌ　成田　クニ　畠山　スエ　畠山千代美　畠山　トヨ
松岡　テイ　柳沢　テル　柳沢　敏江　（五十音順）

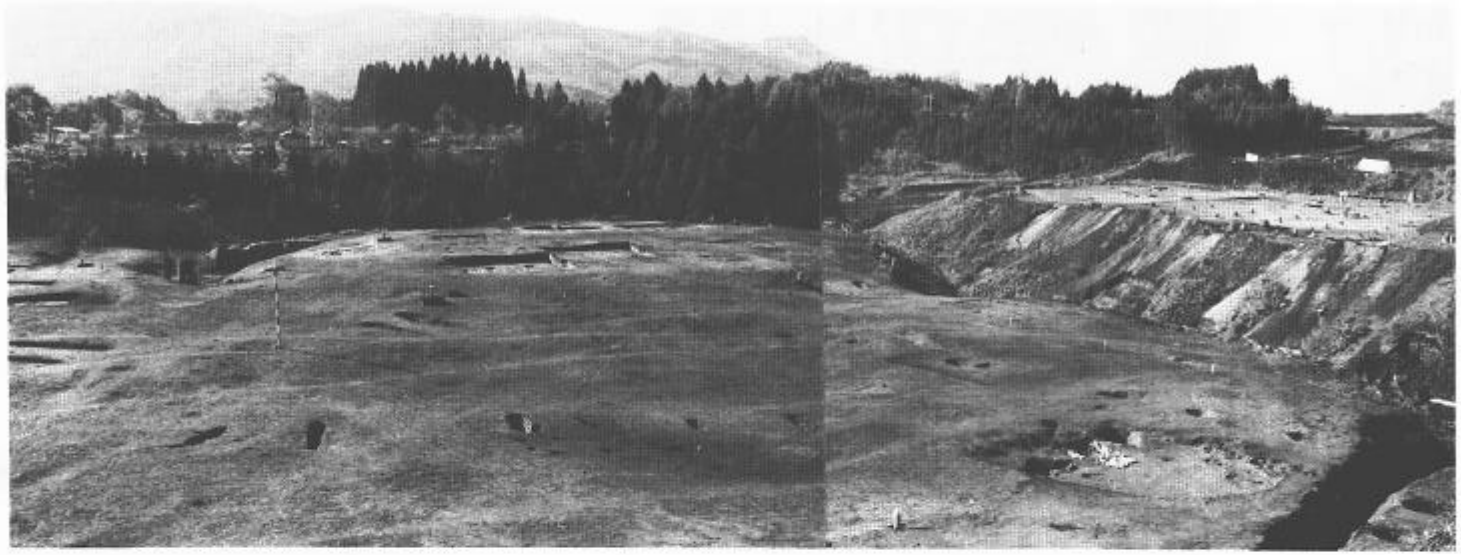


図版1　　空撮による遺跡全景

遺跡遠景（西▶東）

図版 2　　遺跡東の北林中腹から（東▶西）

図版3



発掘調査終了後　上（東南▶北西）下（北西▶東南）

遺跡遠景（飛鳥平遺跡から望む）

図版 4

遺跡近景（南▶北）

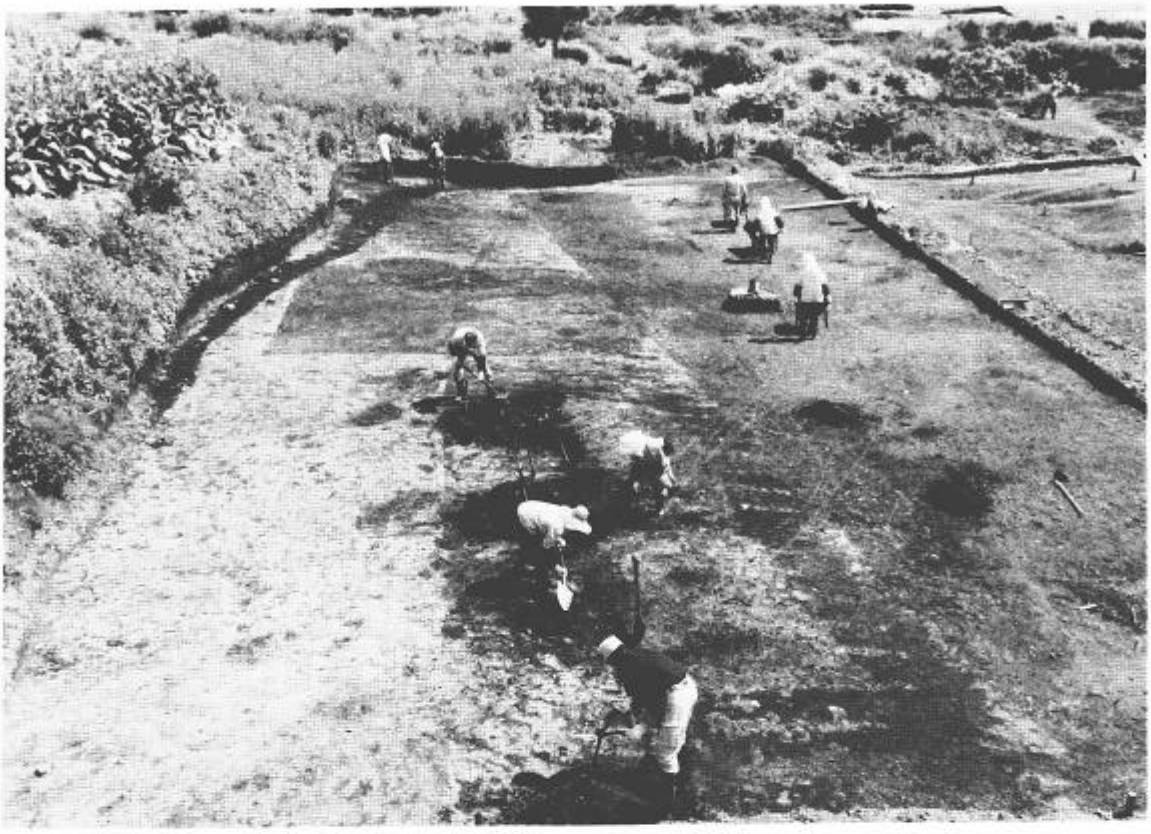
発掘調査前の遺跡北部のようす

図版5

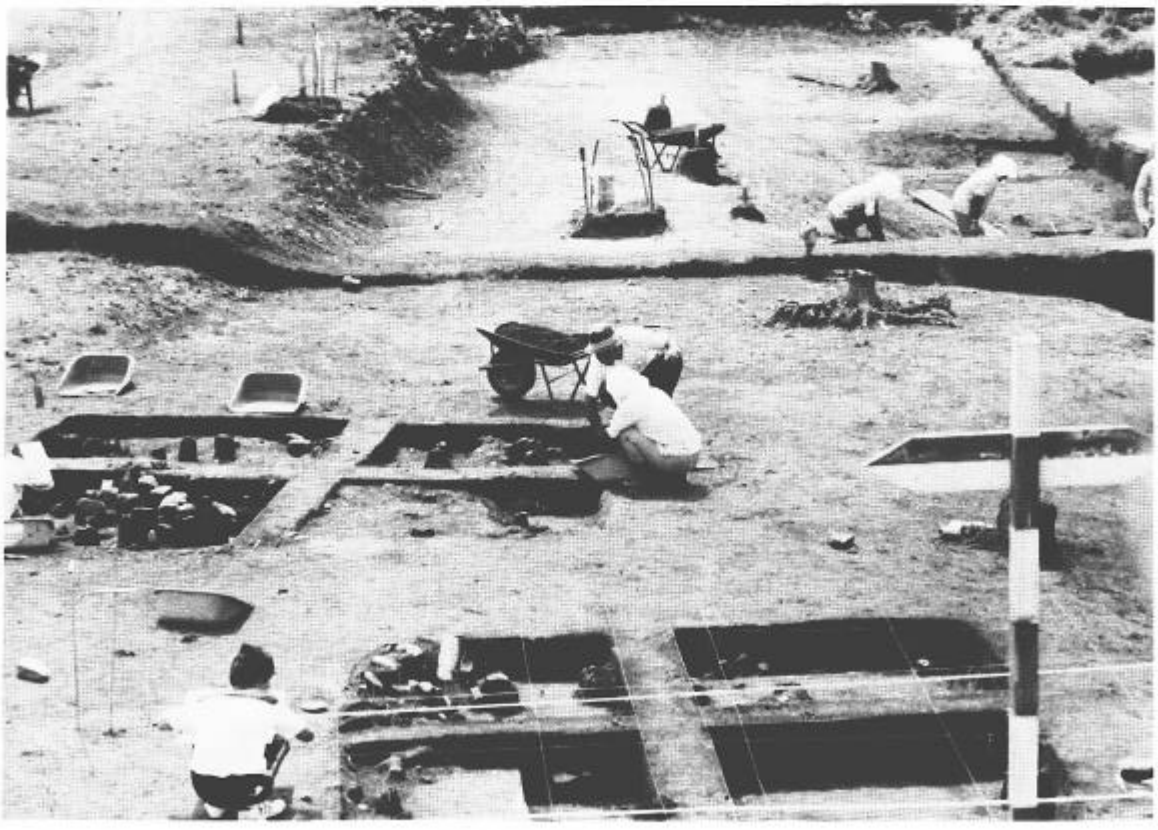
発掘調査前の遺跡南部のようす

調査風景

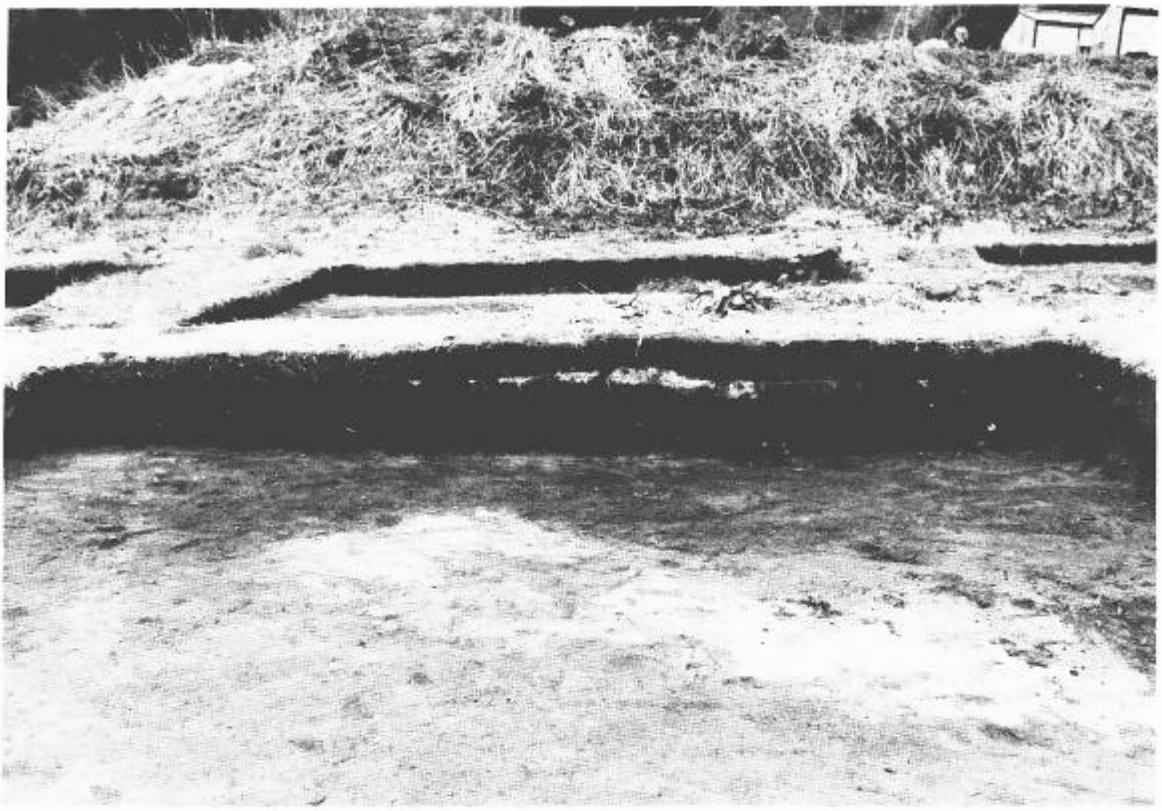
図版 6　　調査風景



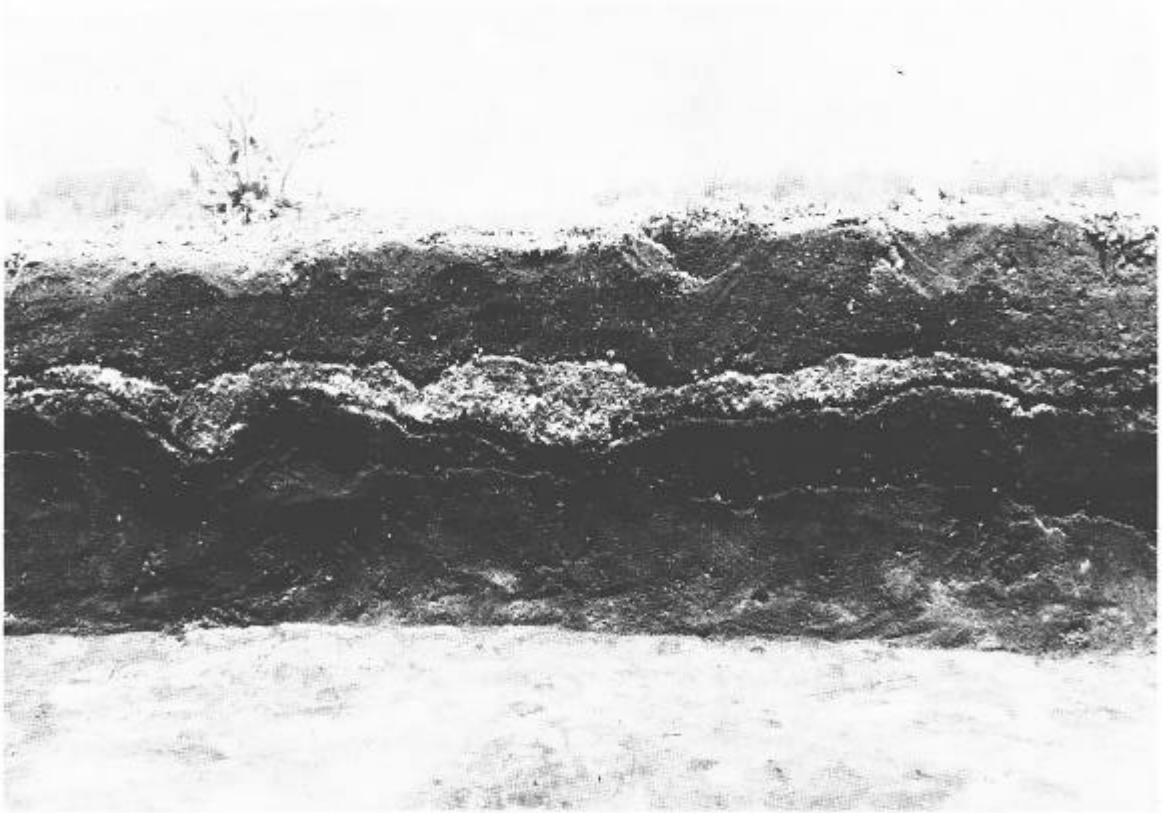
調査風景



図版 7　　調査風景



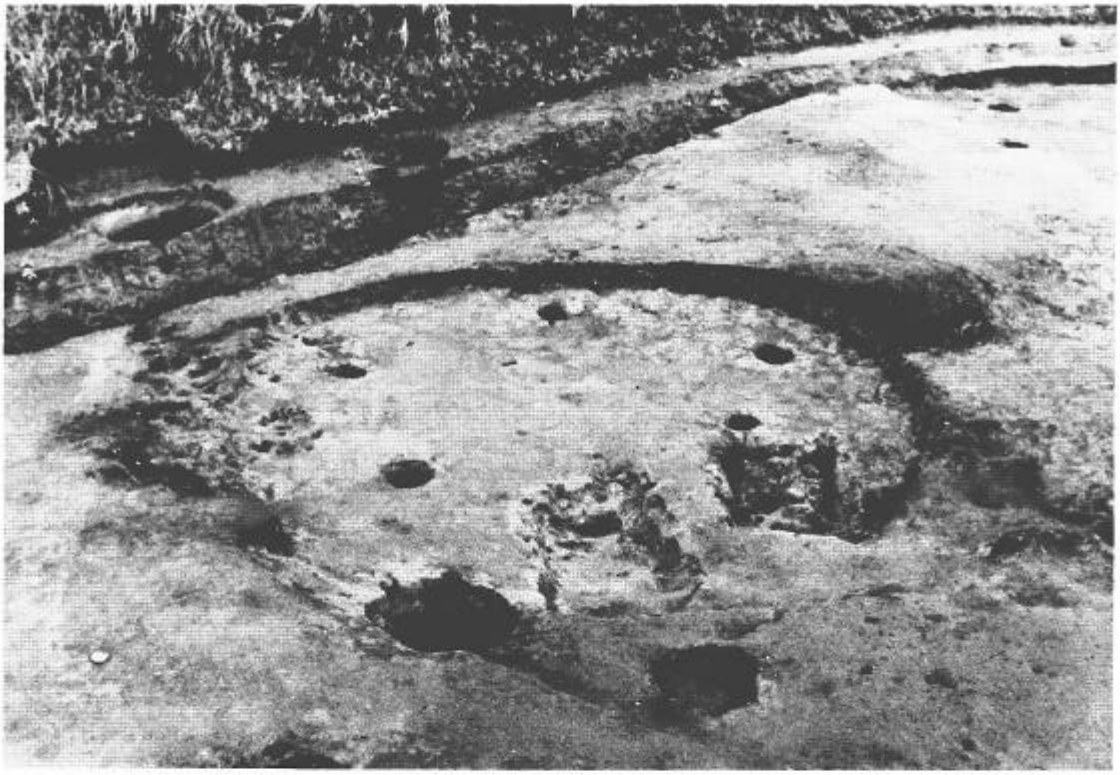
大湯浮石の散布状況



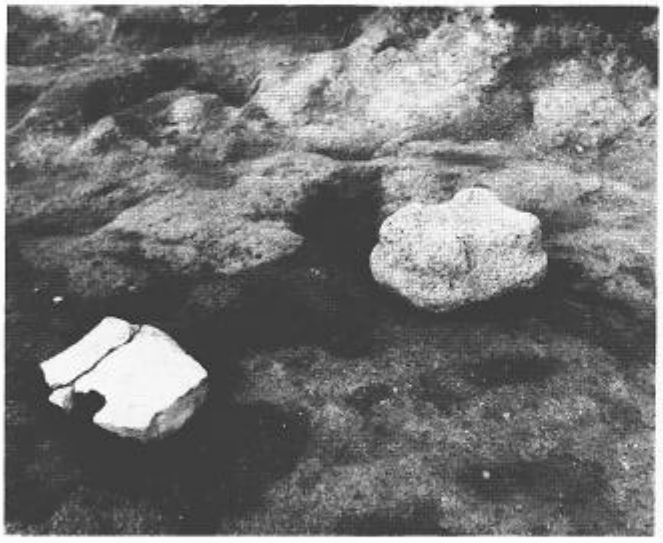
図版 8　　Hラインの土層

凹地における大湯浮石の堆積状況

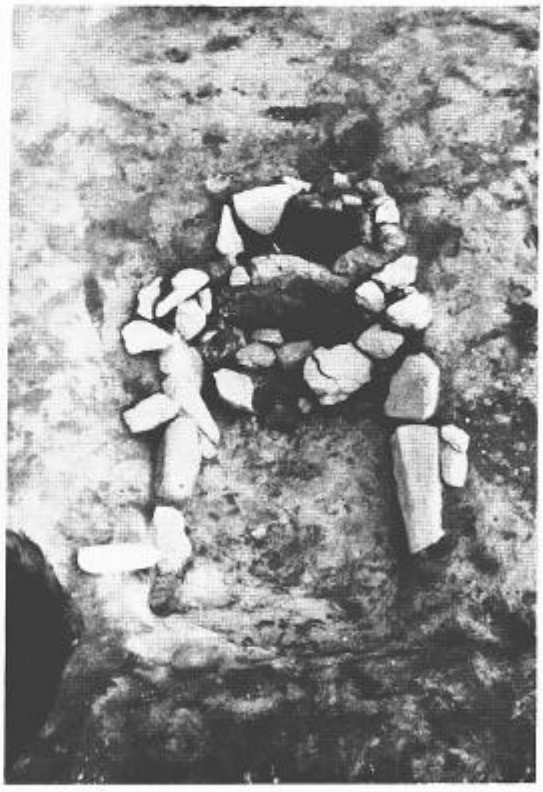
図版 9　　10ライン　傾斜面の大湯浮石堆積状況



SI 023竪穴住居跡（北西▶南東）

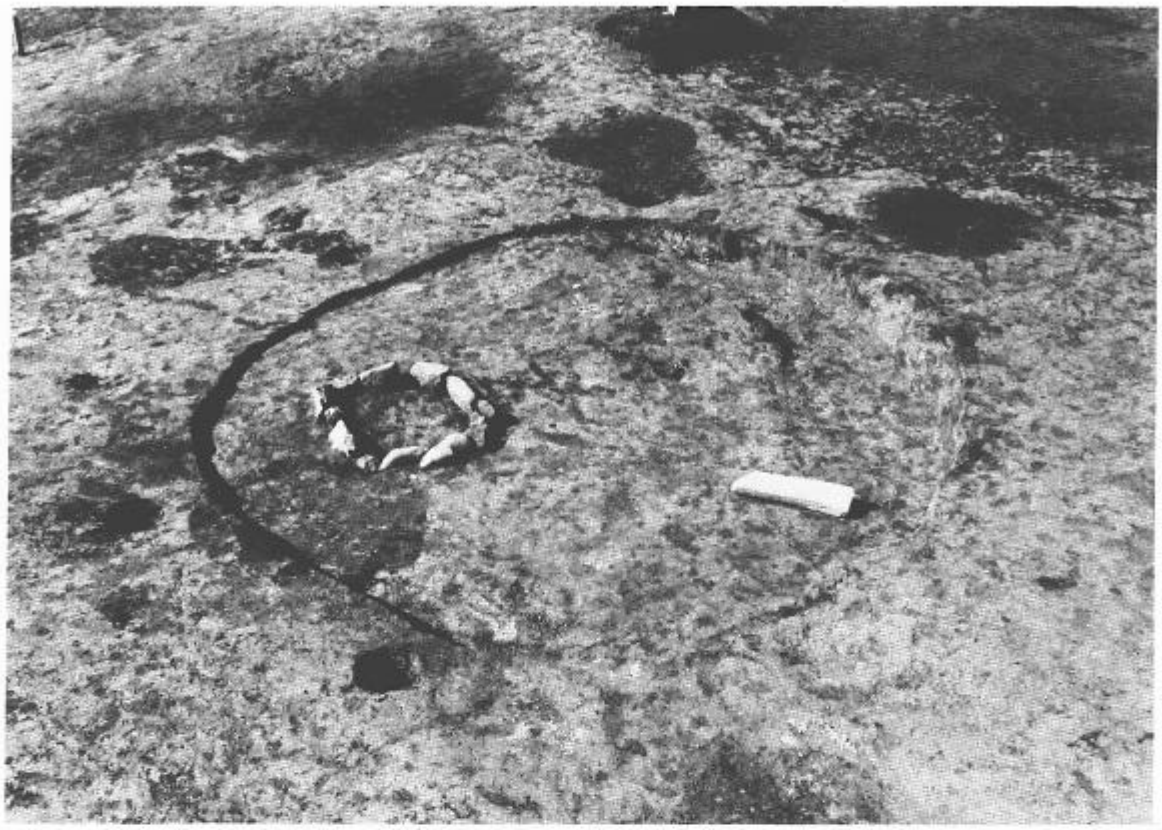


石皿出土状況

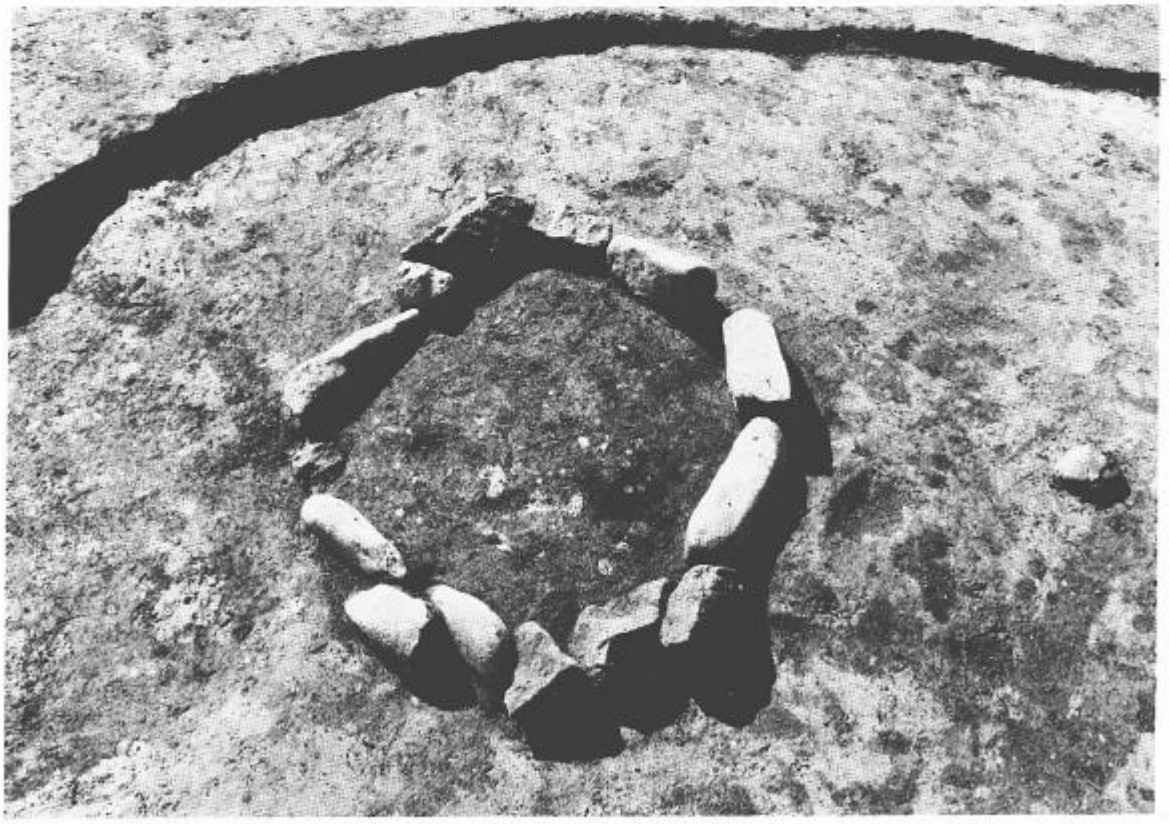


S I 023竪穴住居跡炉

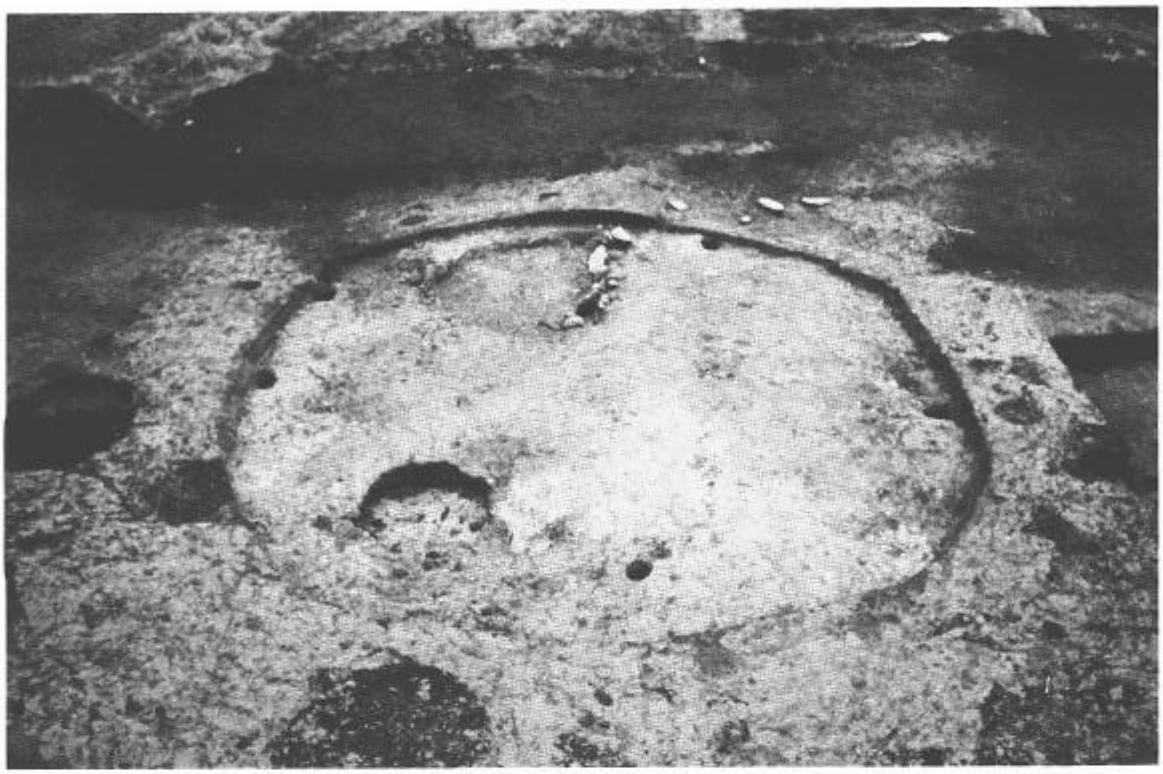
図版10



SI 024竪穴住居跡（東▶西）



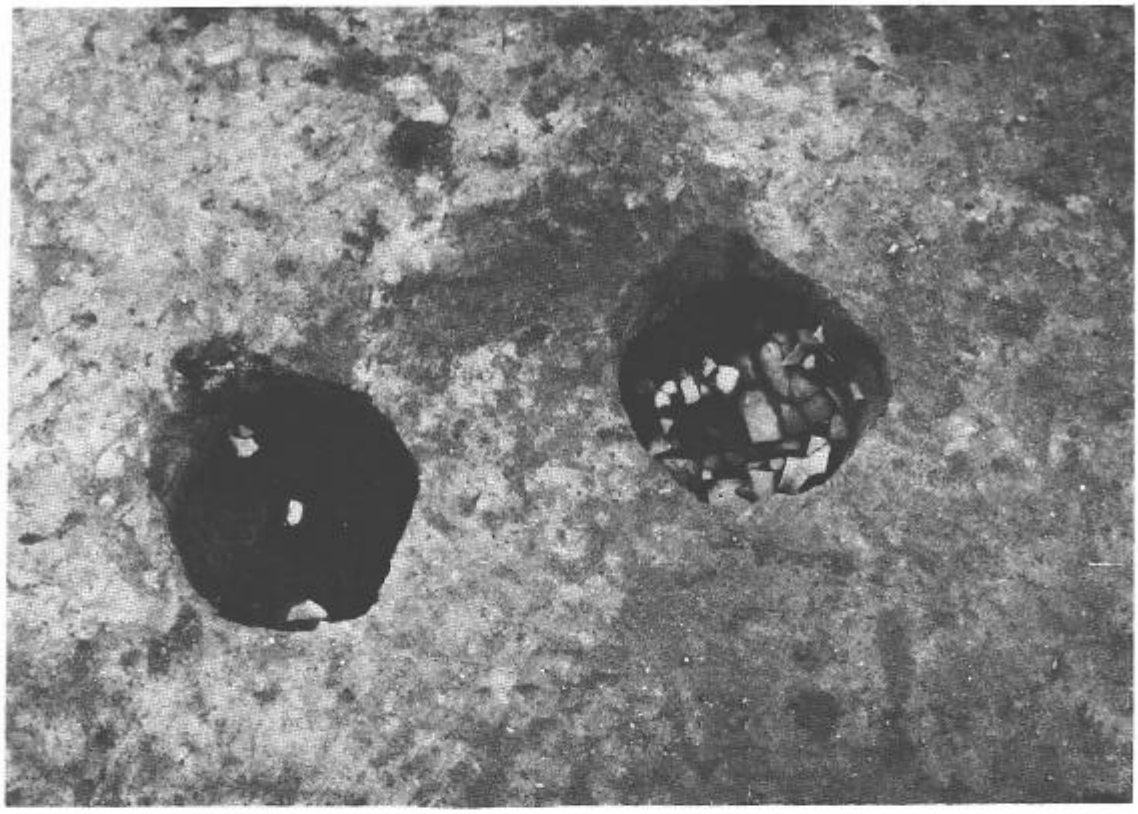
図版11　　SI 024竪穴住居跡　　石組炉



◀土器出土
状況

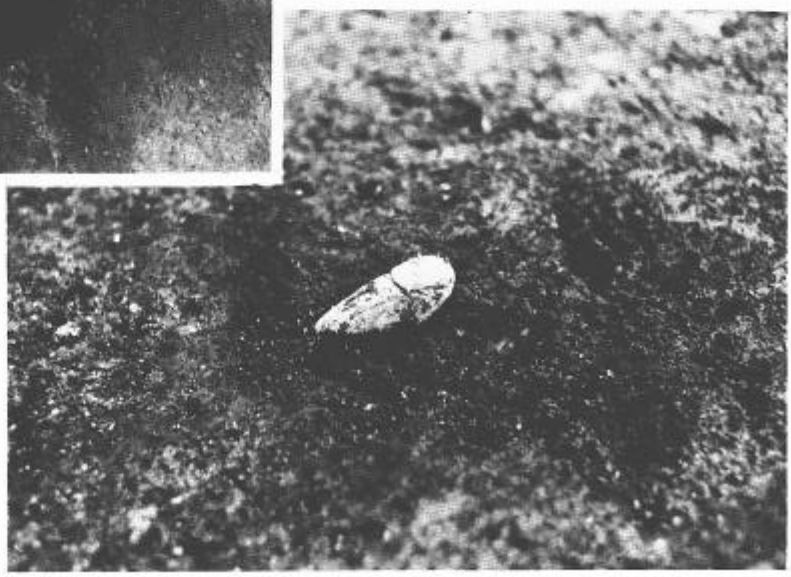
◀炉

図版12　　SI 025 竪穴住居跡（西▶東）



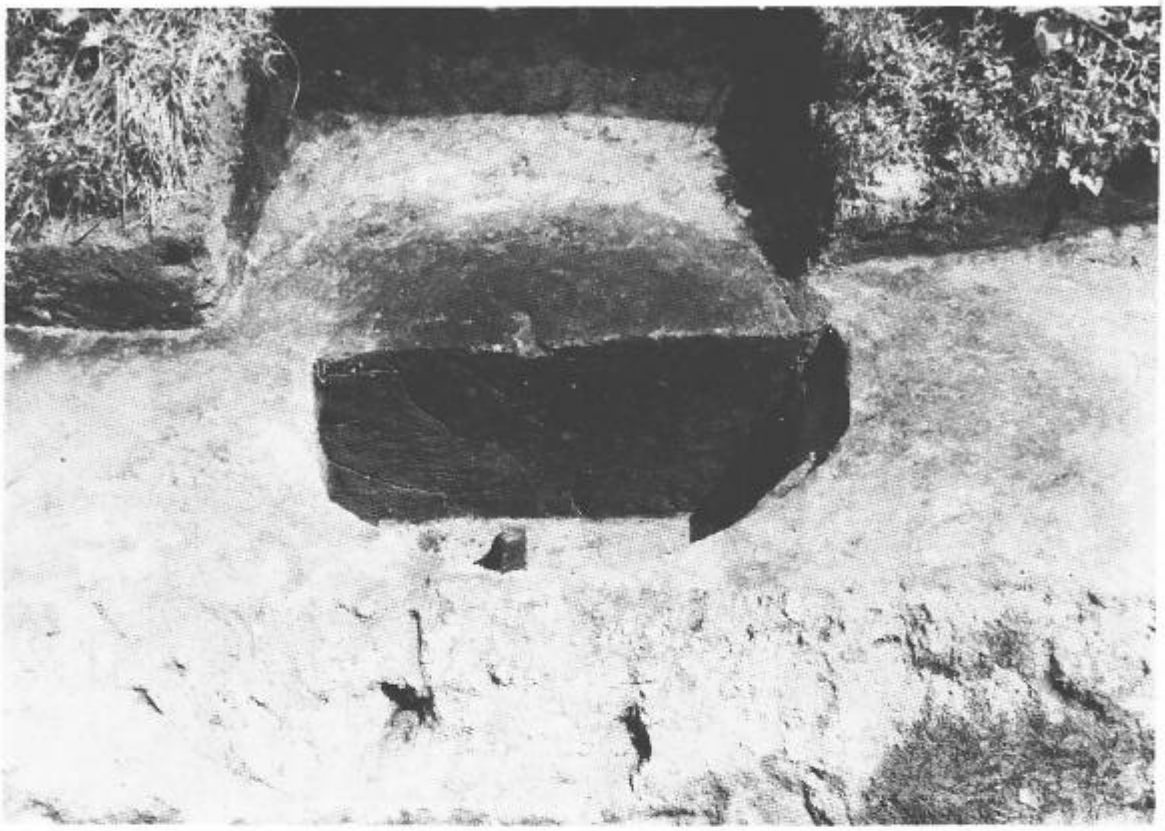
SK 008、009 土壙（北▶南）

▲ 凹石出土状況



岩偶▶

図版13

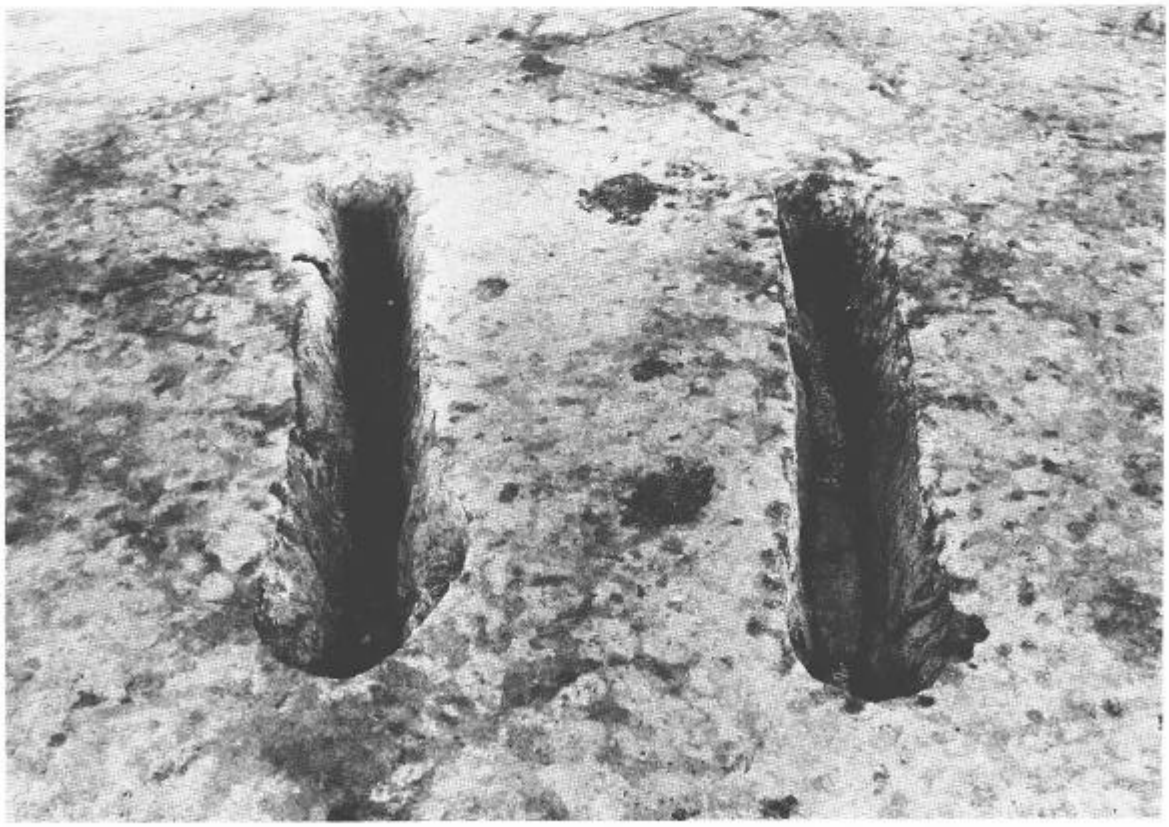


SK（F）001 フラスコ状ピット土層断面（西▶東）

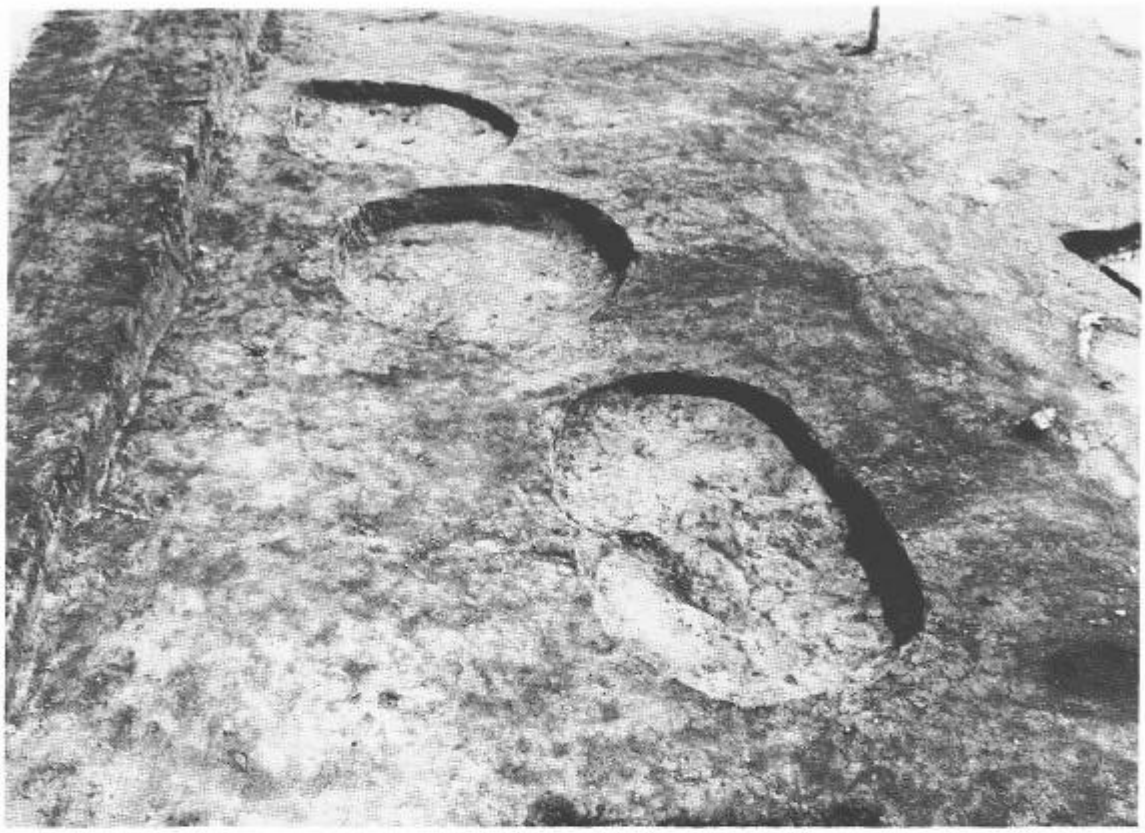
図版14　　SK（F）001 フラスコ状ピット（西▶東）

SK（T）002、009、010、011 溝状土壙（西▶東）

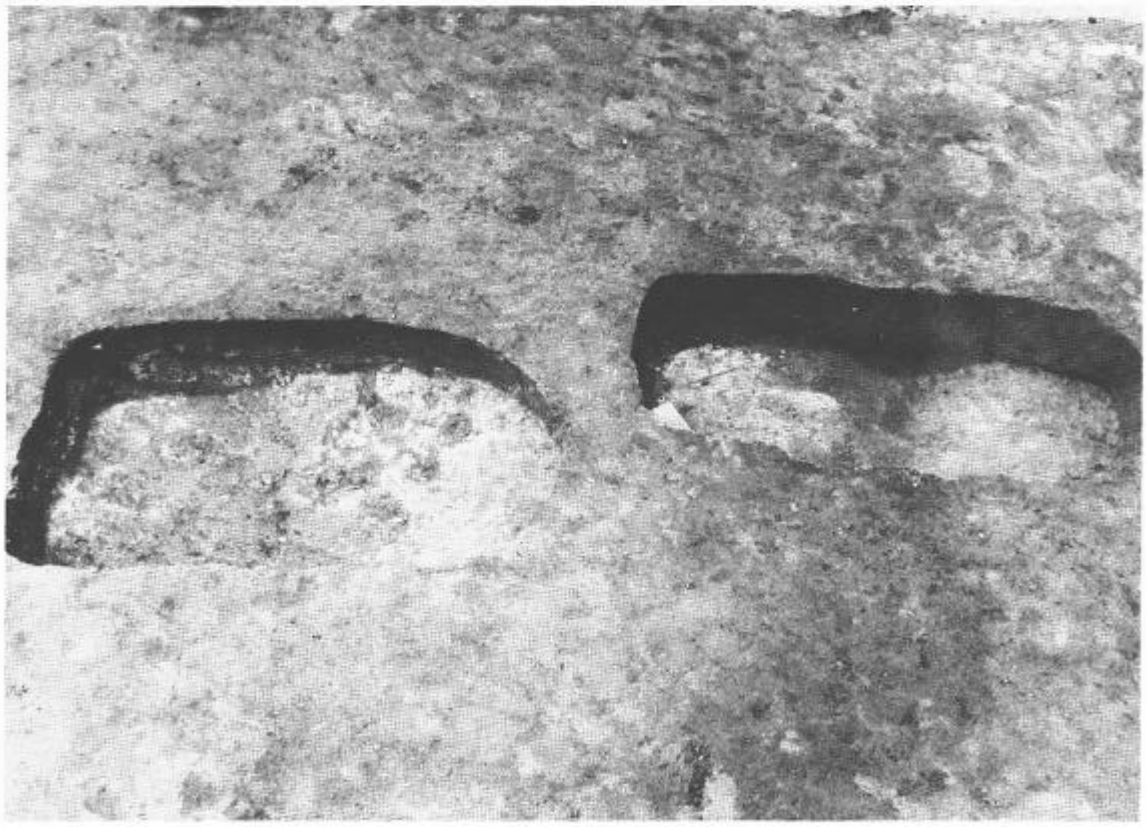
図版15　　SK（T）003、004 溝状土壙（東▶西）



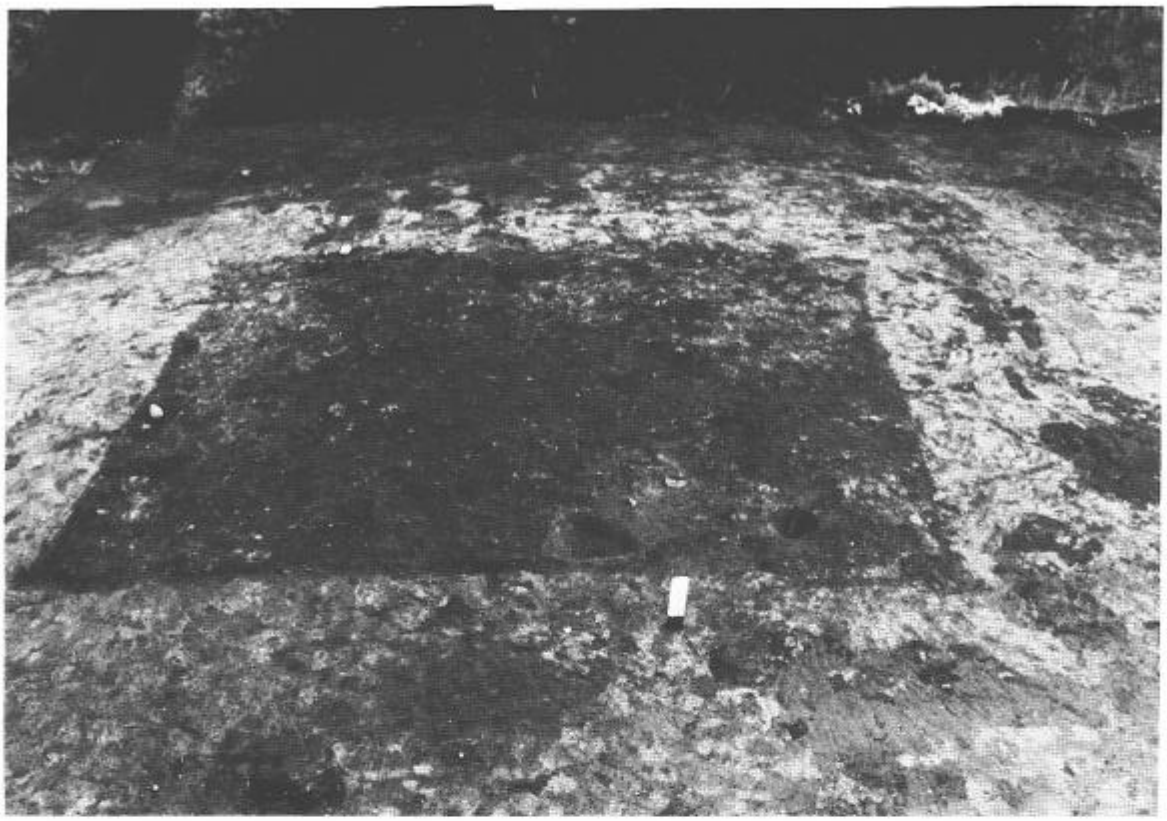
図版16　SK（T）005、006 溝状土壙（北▶南）上、確認状況・下　完掘状況



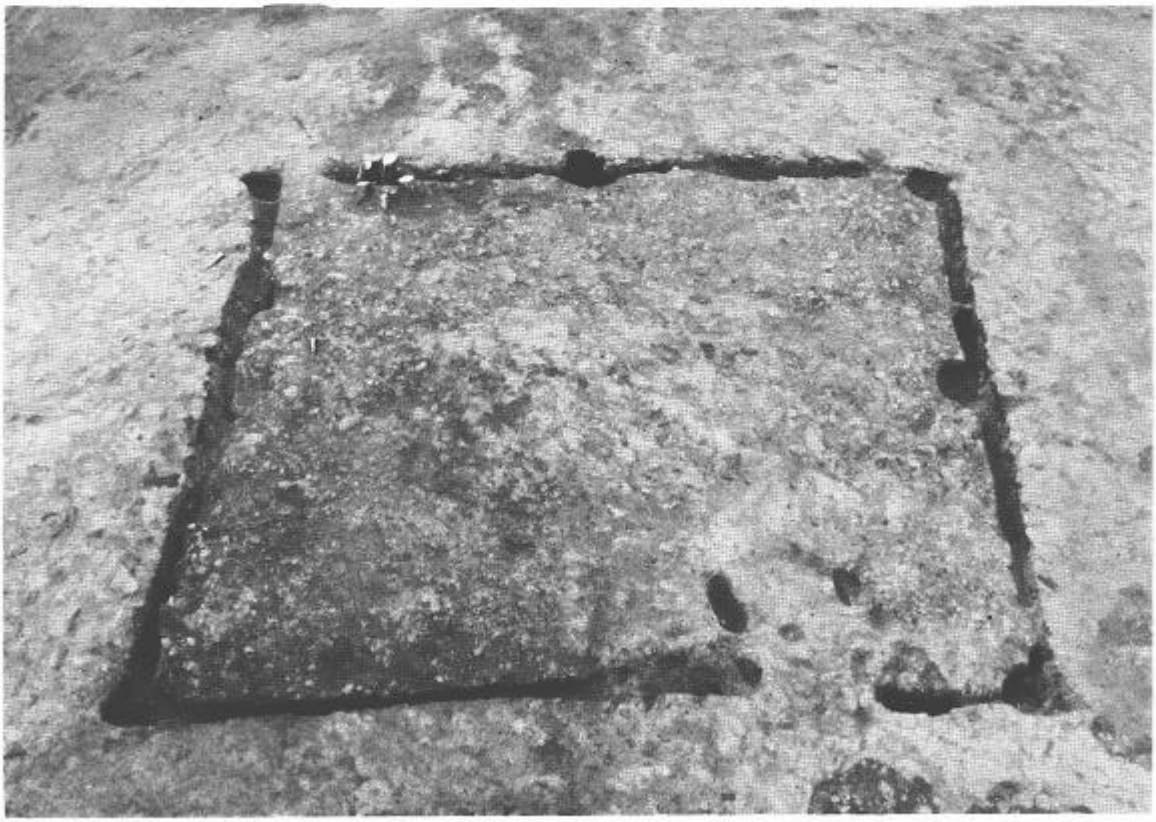
SK 002、003、004 土壙（北▶南）



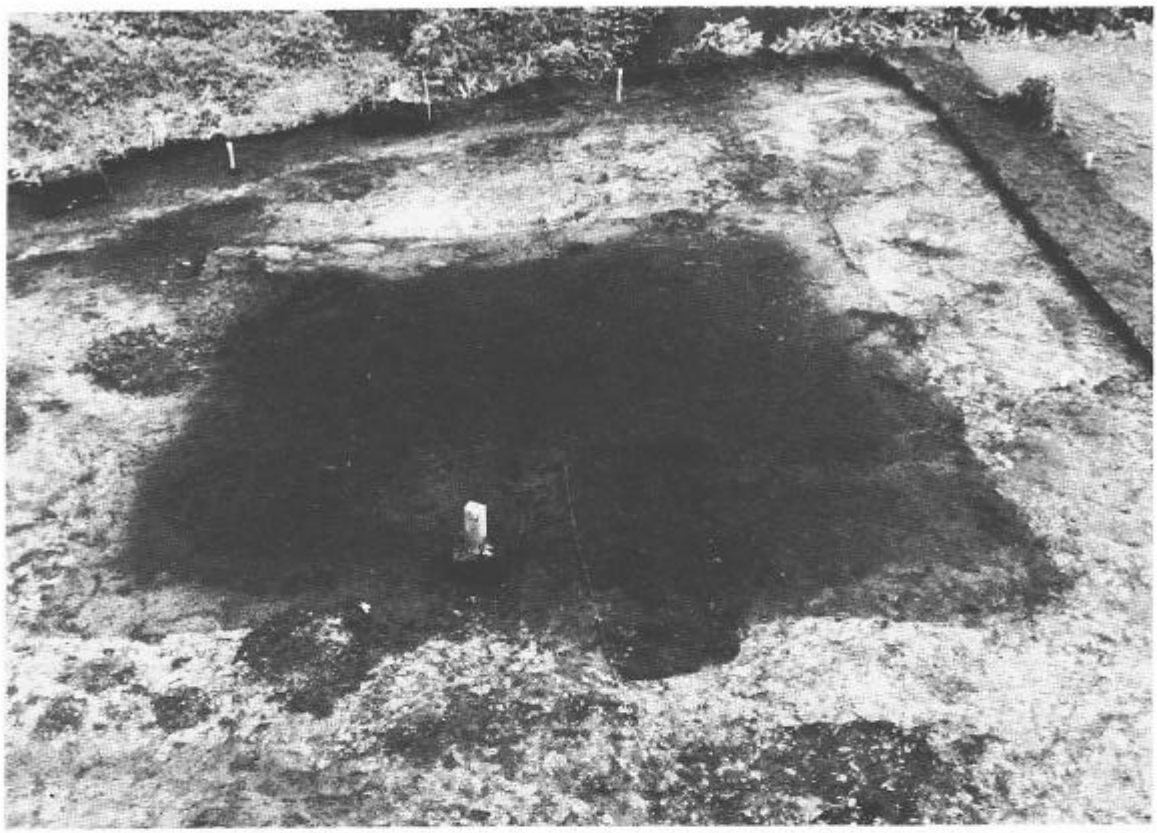
図版17　　SX（F）001、002 焼土遺構（南▶北）



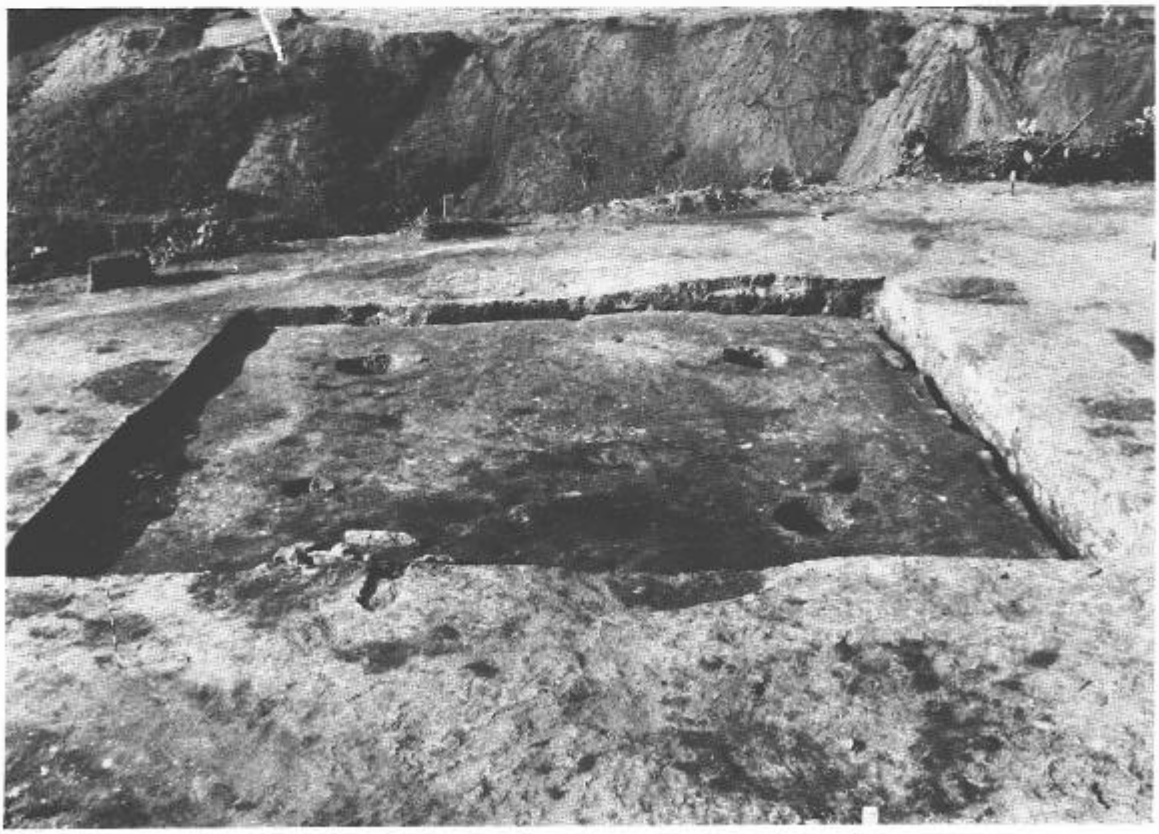
SI 001竪穴住居跡（南▶北）



図版18　　SI 001竪穴住居跡（南▶北）

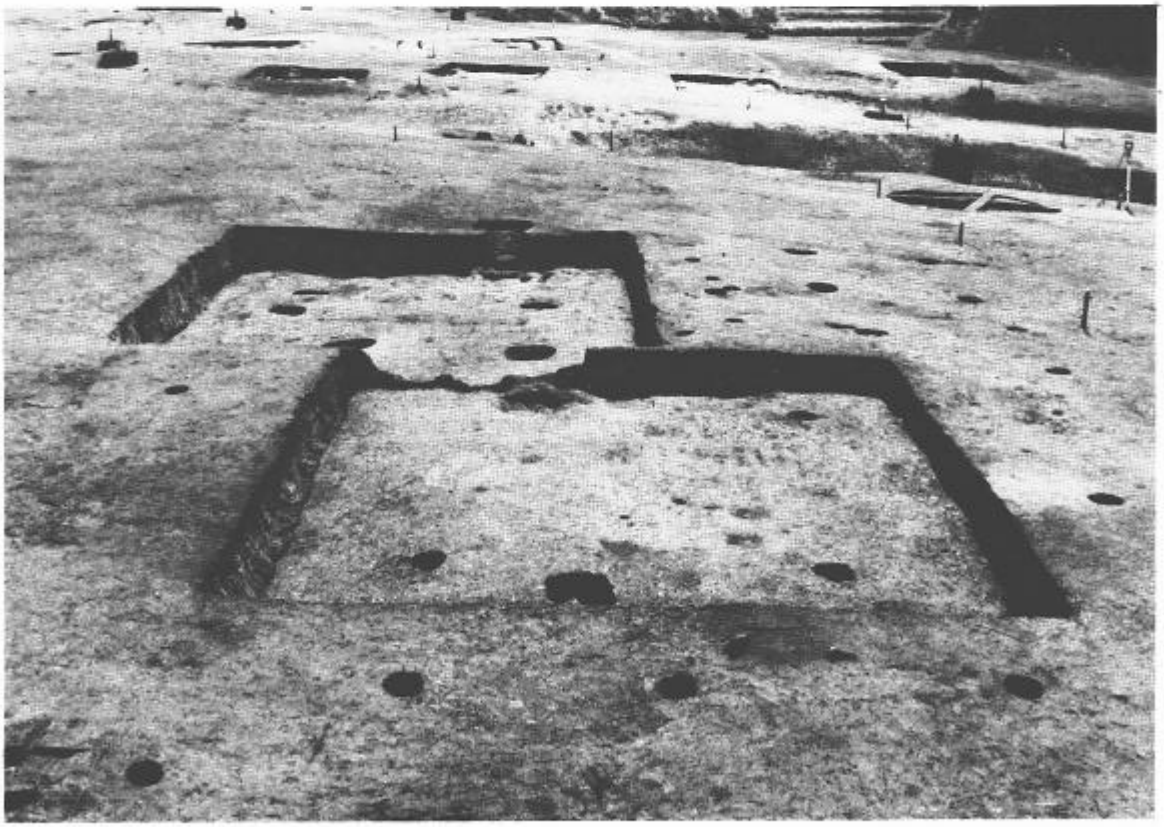


SI 003竪穴住居跡確認状況（南▶北）

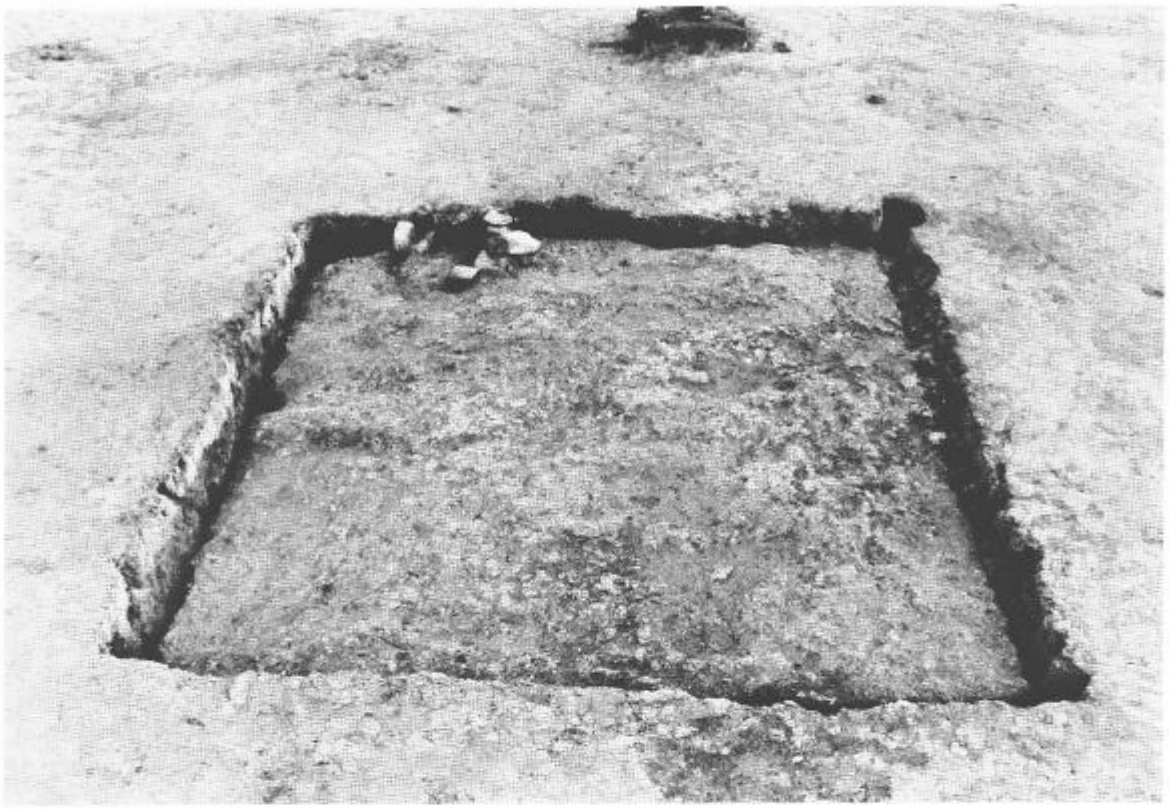


図版19　　SI 003竪穴住居跡（南▶北）

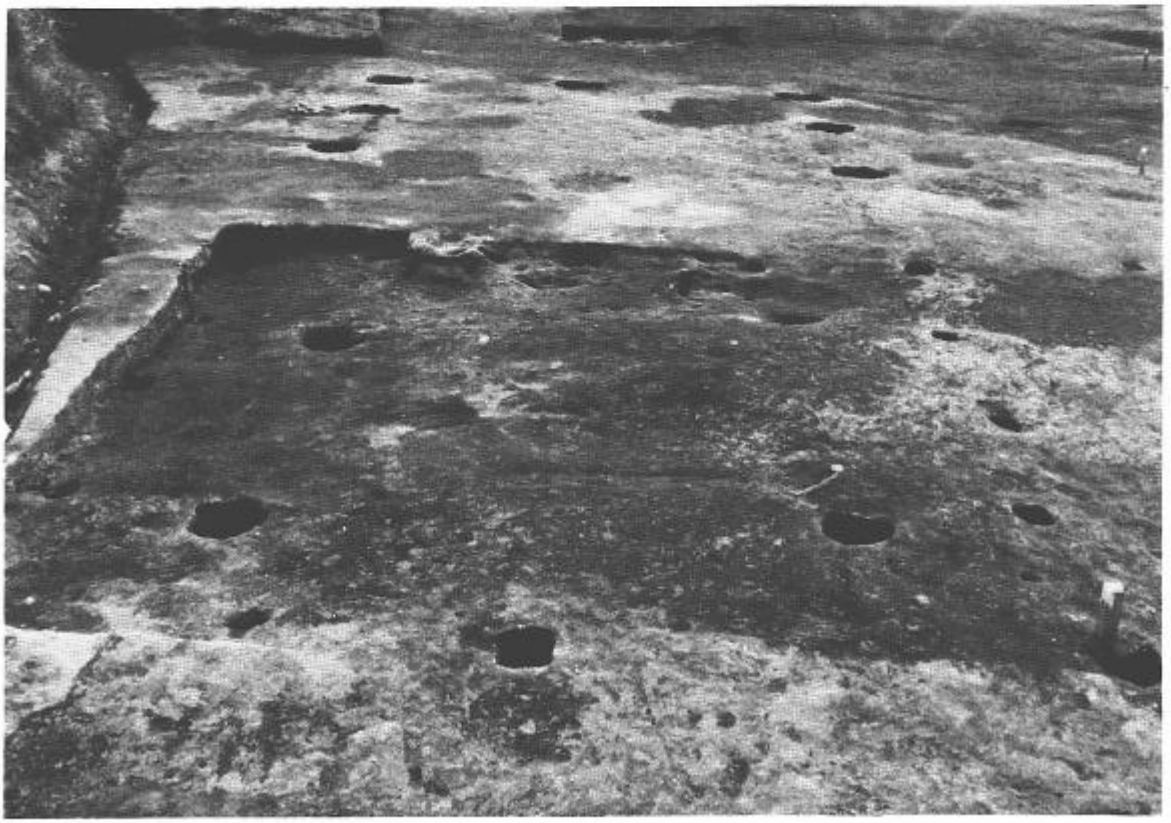
SI 004、005竪穴住居跡確認状況（北▶南）



図版20　　SI 004、005竪穴住居跡（北▶南）

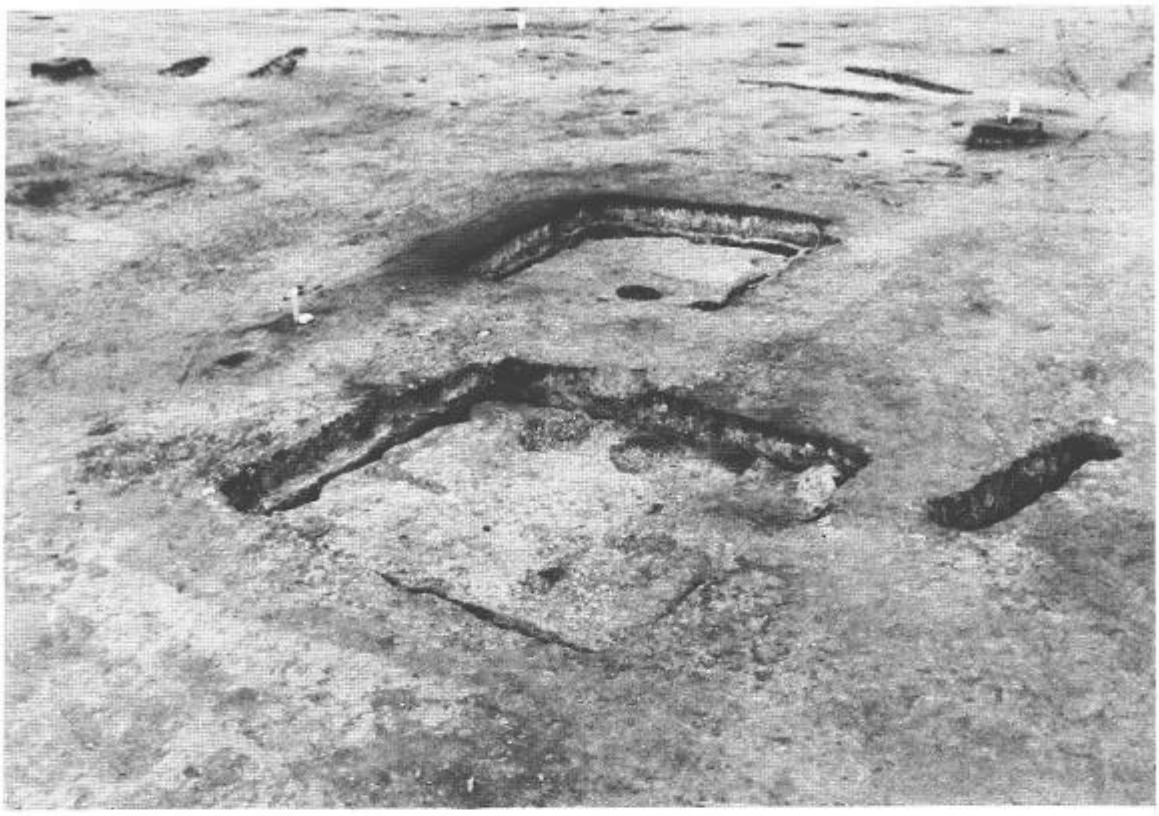


SI 006 竪穴住居跡（北▶南）

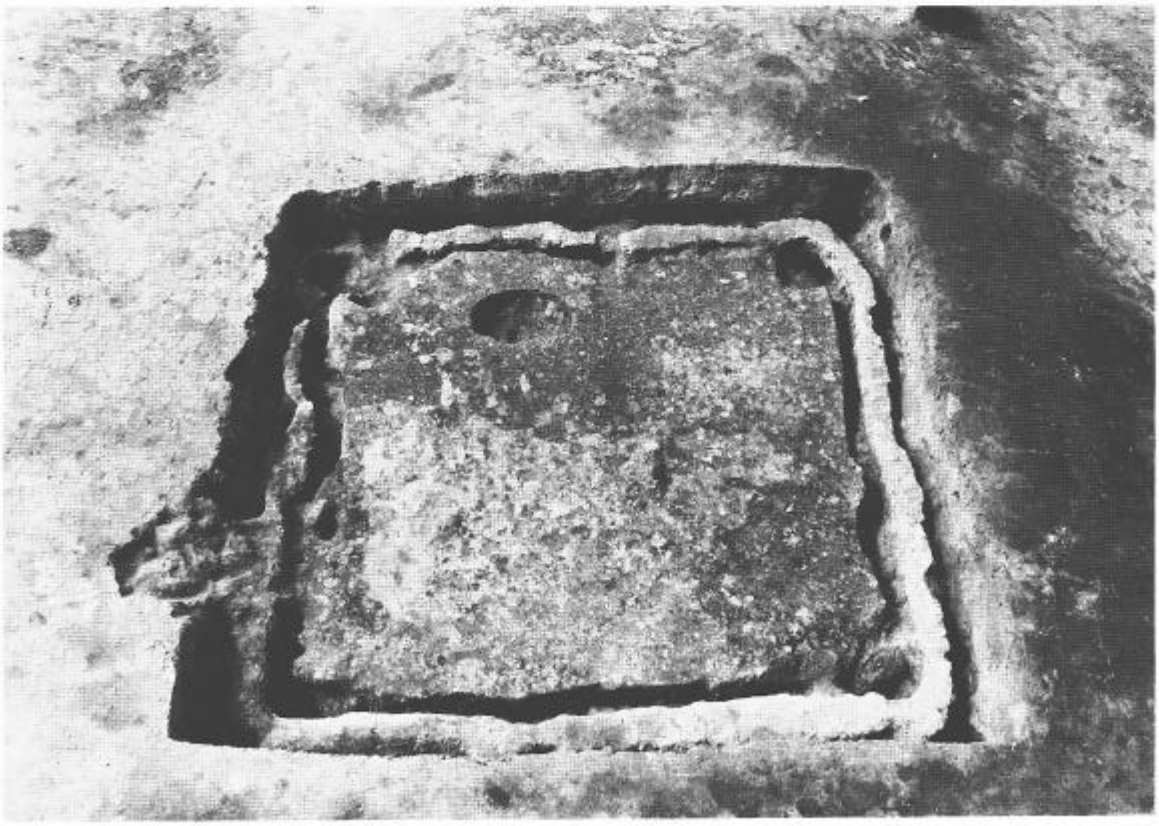


図版21

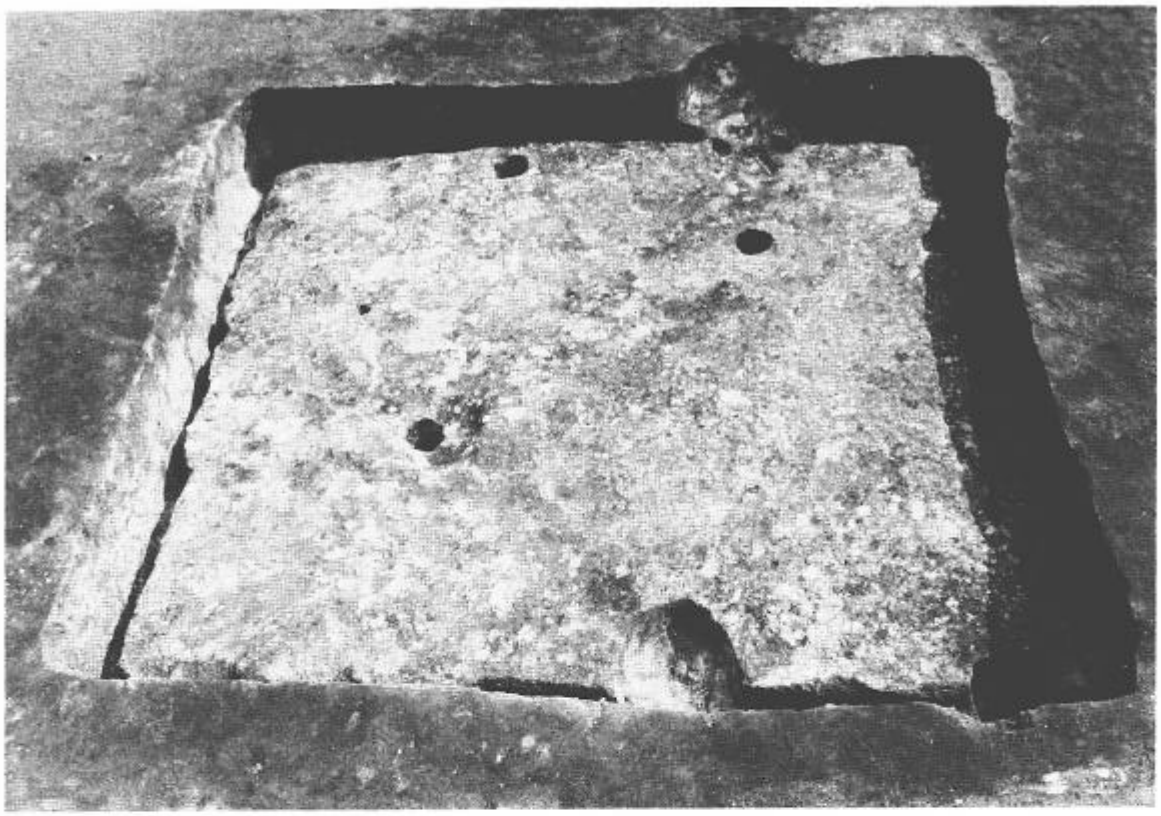
SI 007 竪穴住居跡（北▶南）



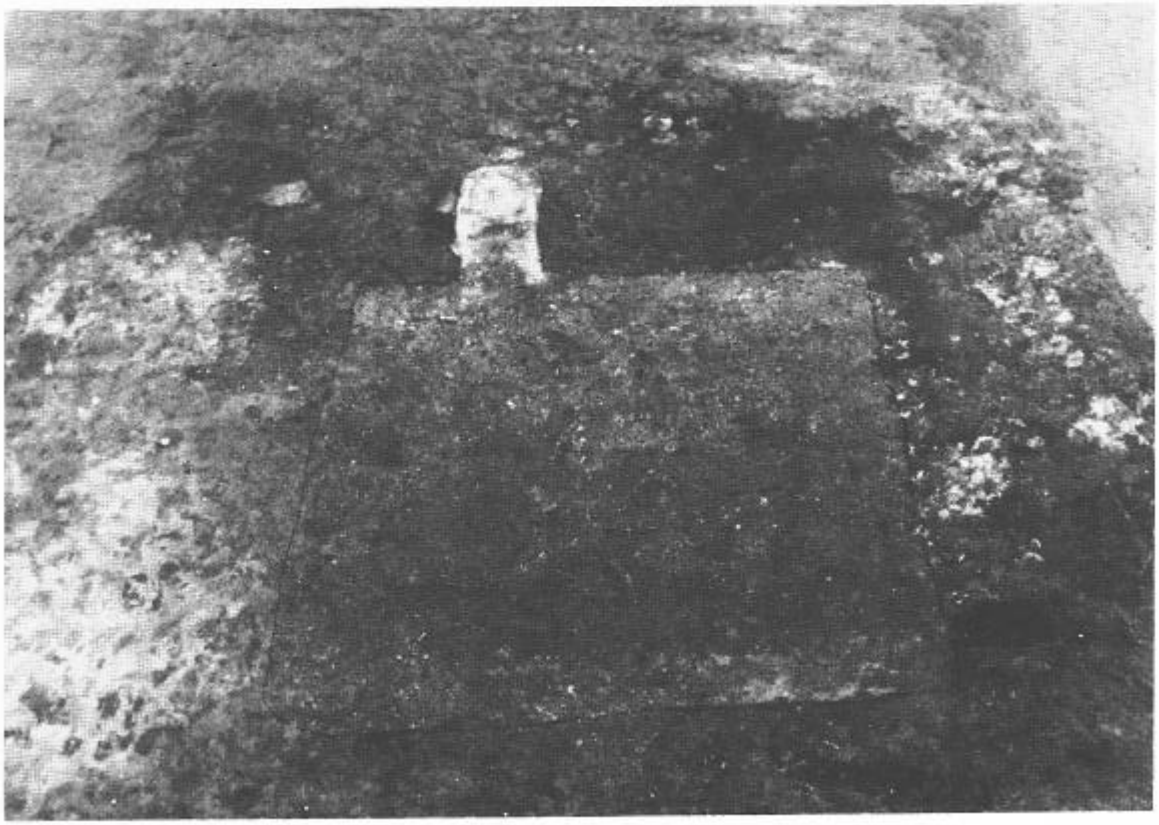
SI 008・009竪穴住居跡（西▶東）



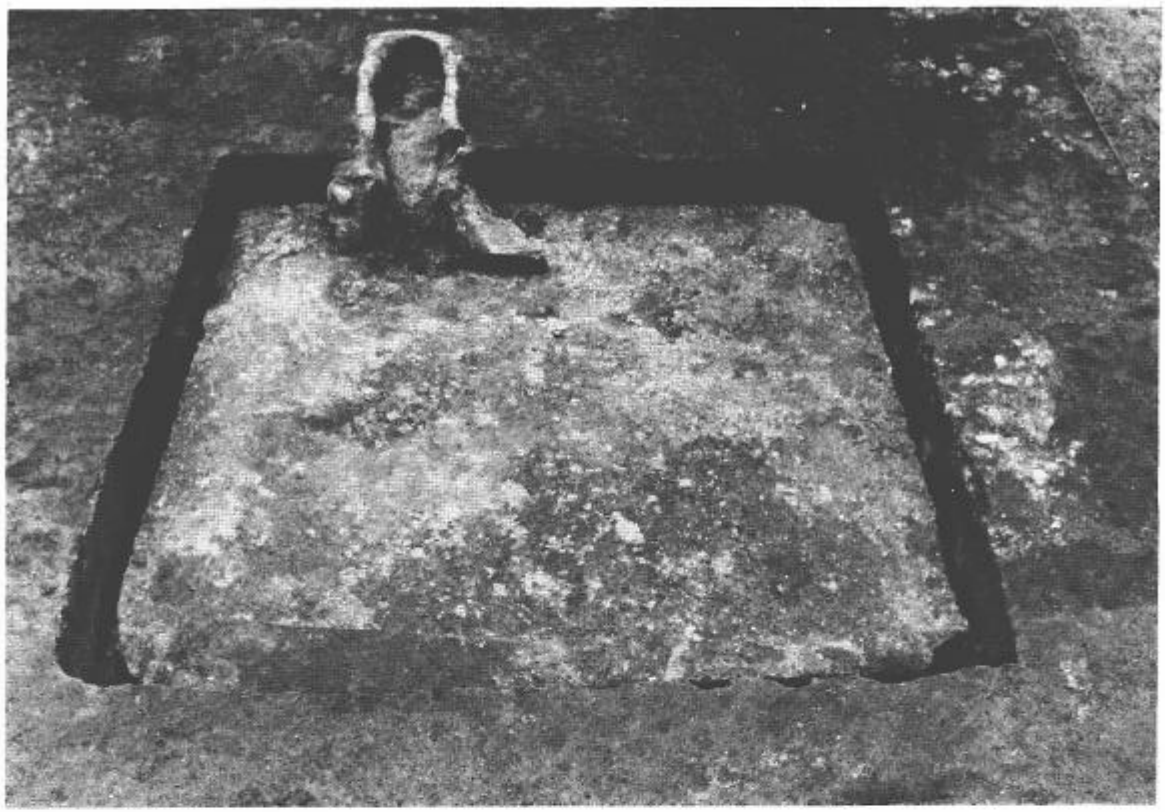
図版22　SI 009－A・B竪穴住居跡（北▶南）



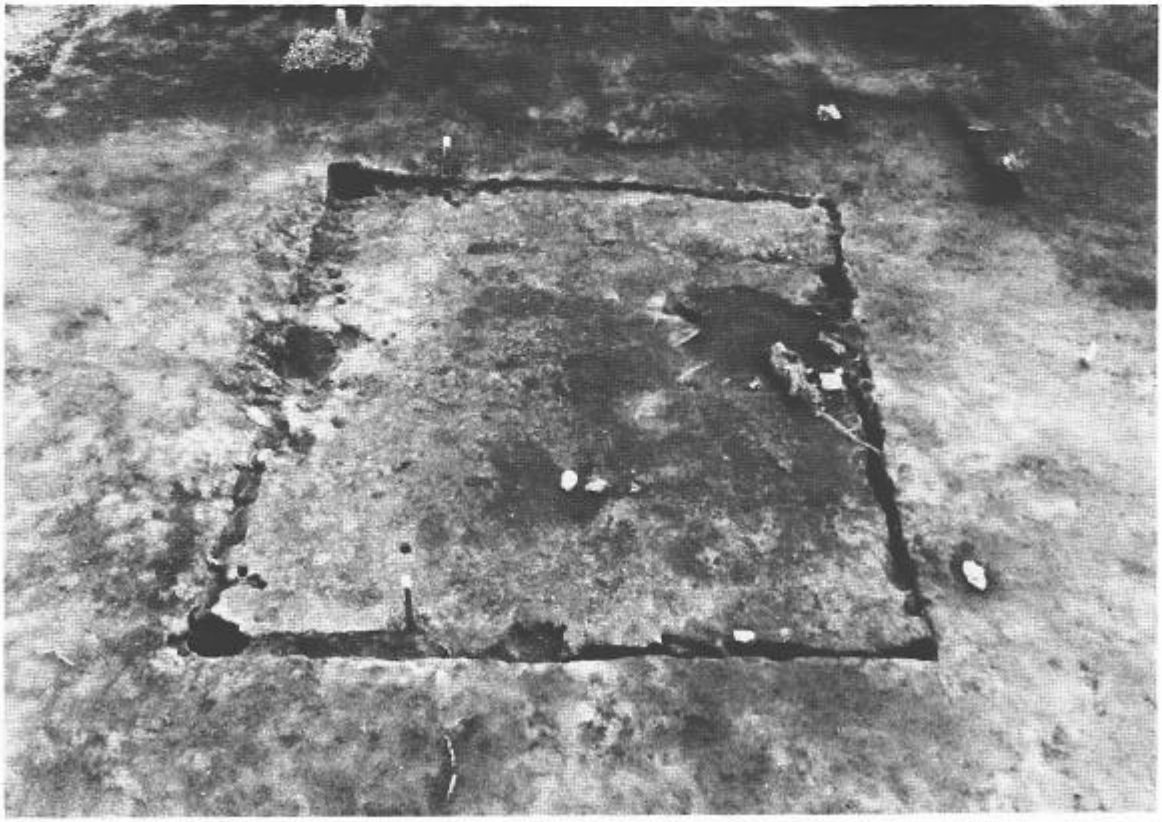
SI 010 竪穴住居跡（北▶南）



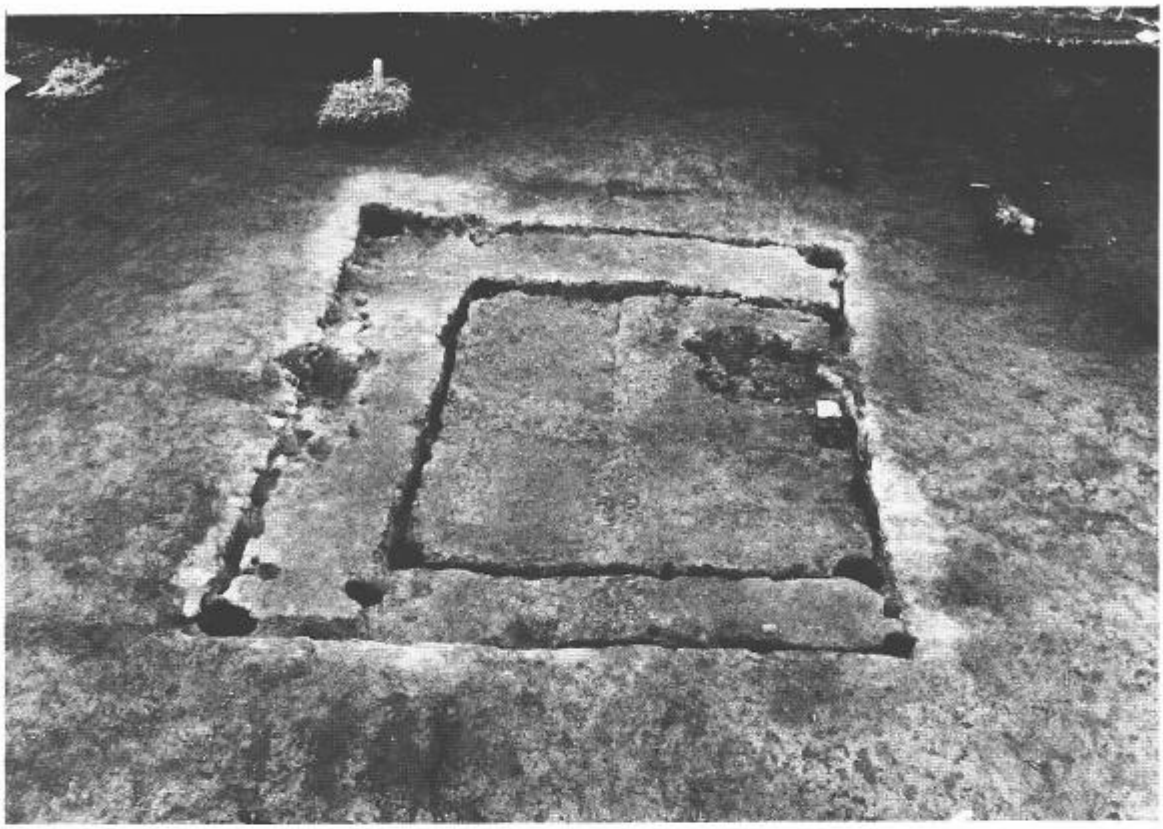
図版23　　SI 011竪穴住居跡確認状況（北▶南）



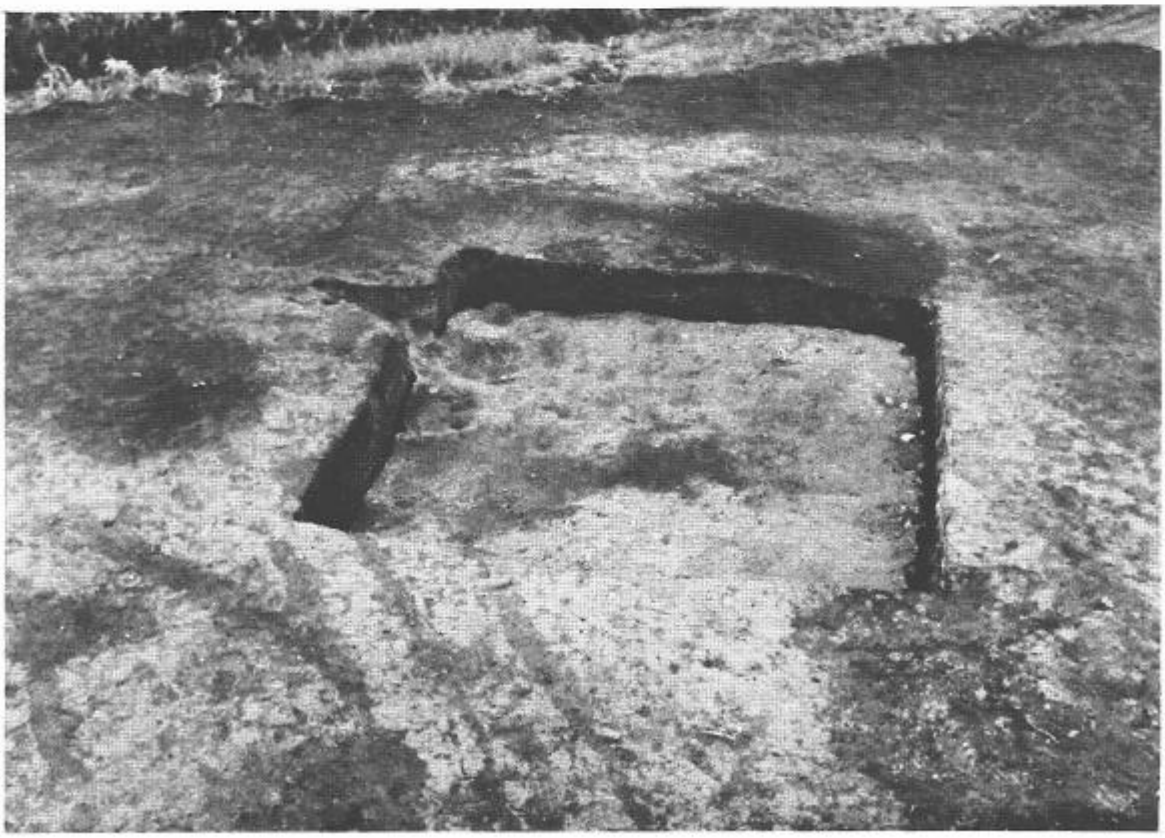
SI 011 竪穴住居跡（北▶南）



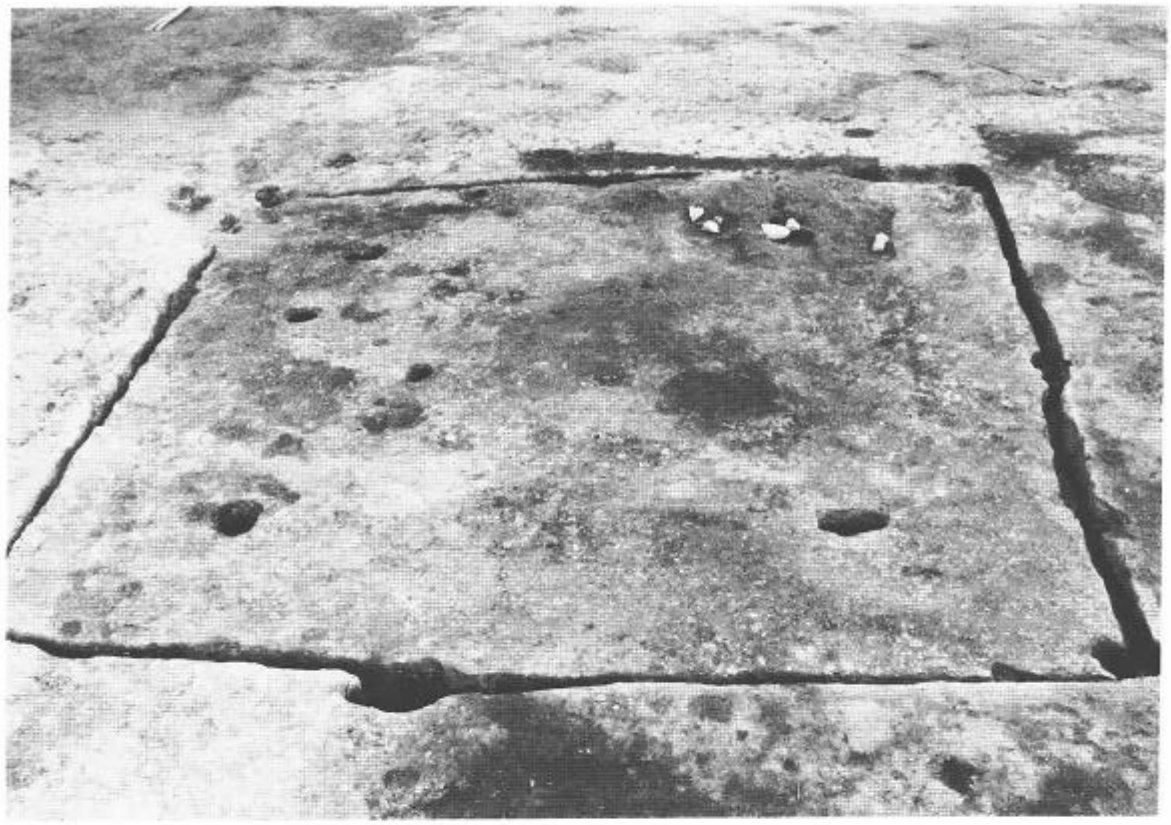
図版24　　SI 012－A竪穴住居跡（西▶東）



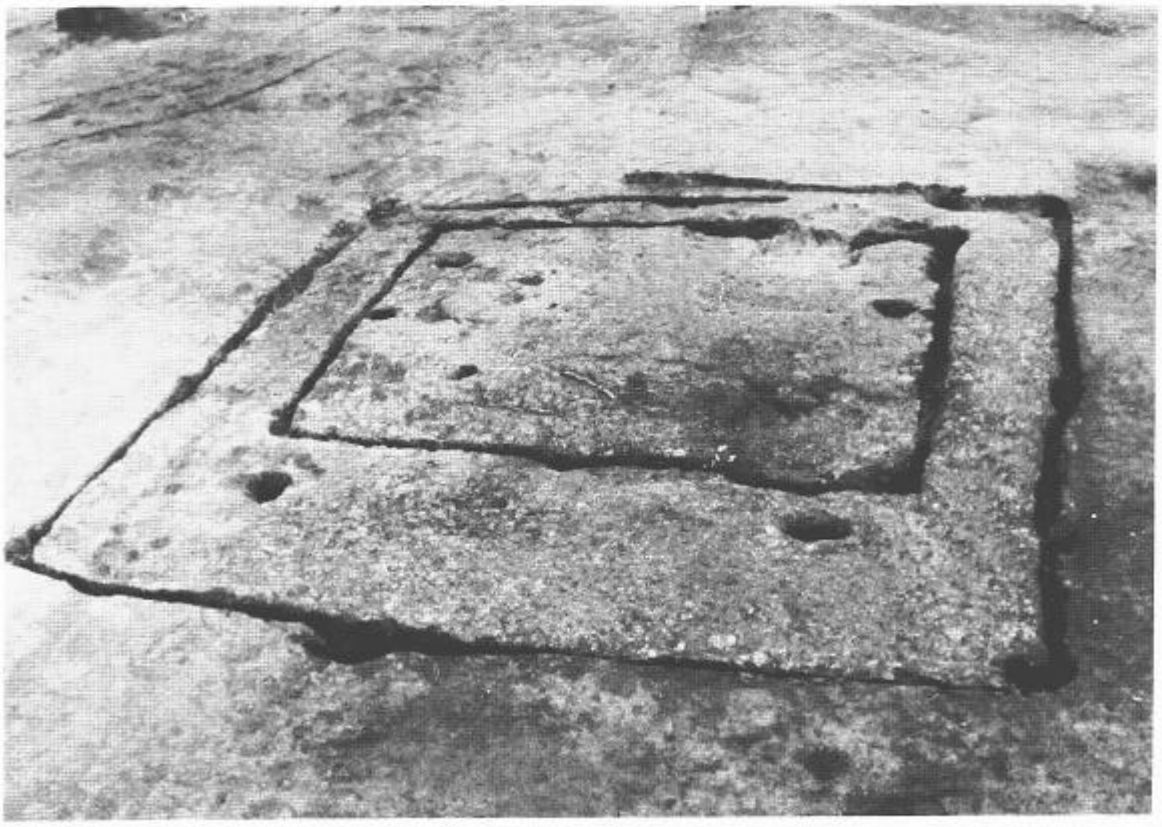
SI 012 A・B竪穴住居跡（西▶東）



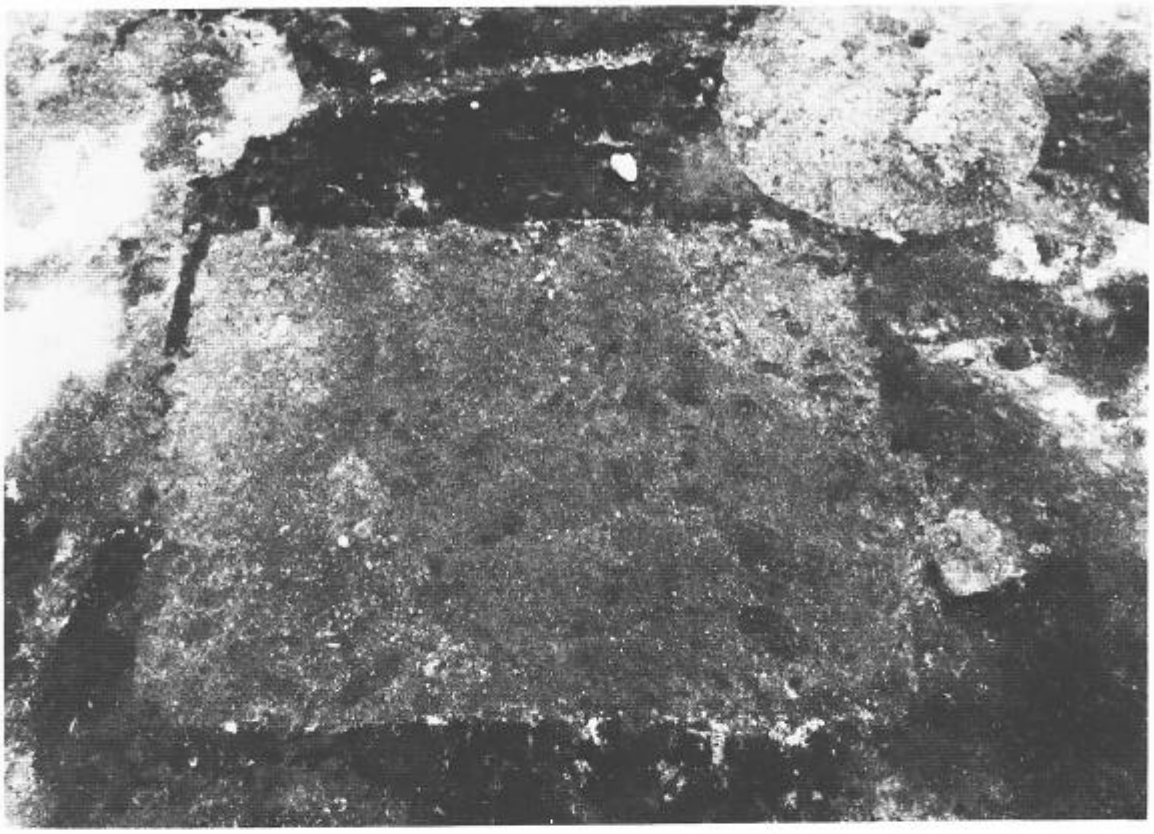
図版25　　SI 014 竪穴住居跡（東▶西）



SI 015 A竪穴住居跡（北▶南）



図版26　　SI 015 — A・B竪穴住居跡（北▶南）

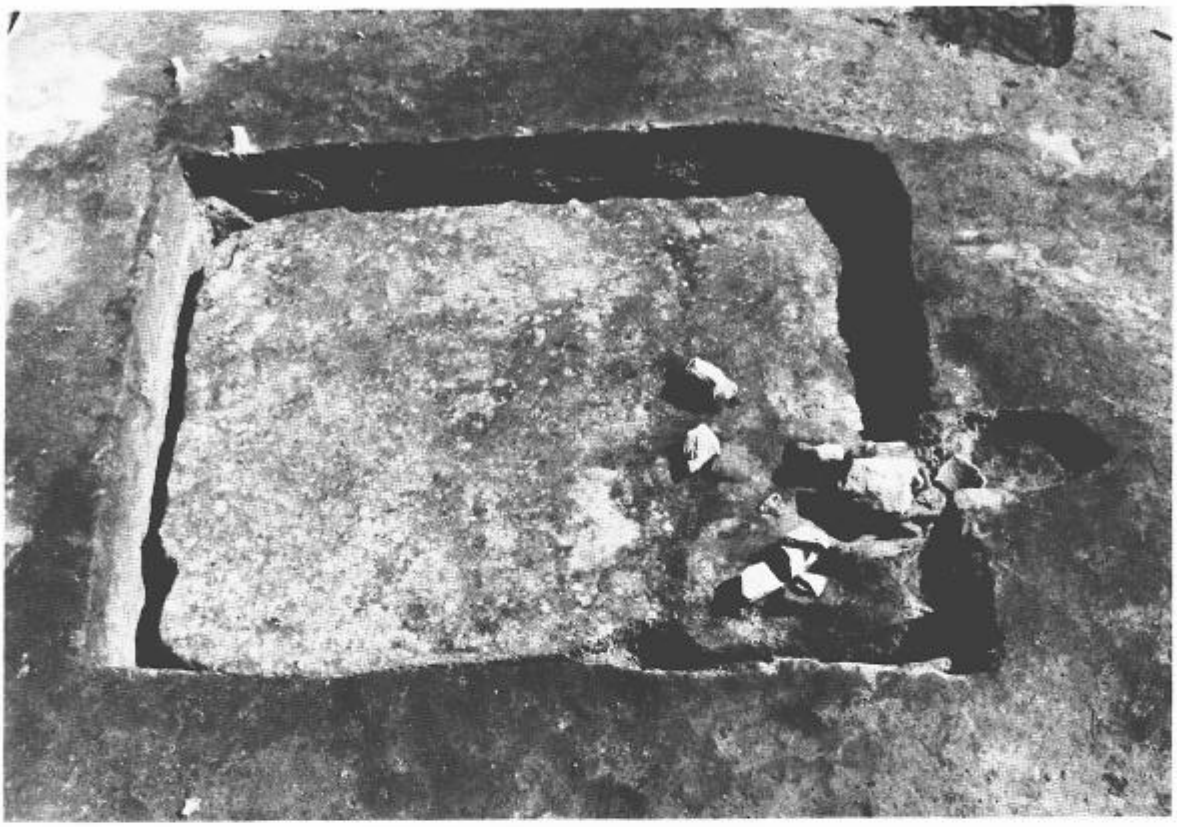


SI 016 竪穴住居跡確認状況（西▶東）

図版27　　SI 016 竪穴住居跡遺物出土状況（西▶東）

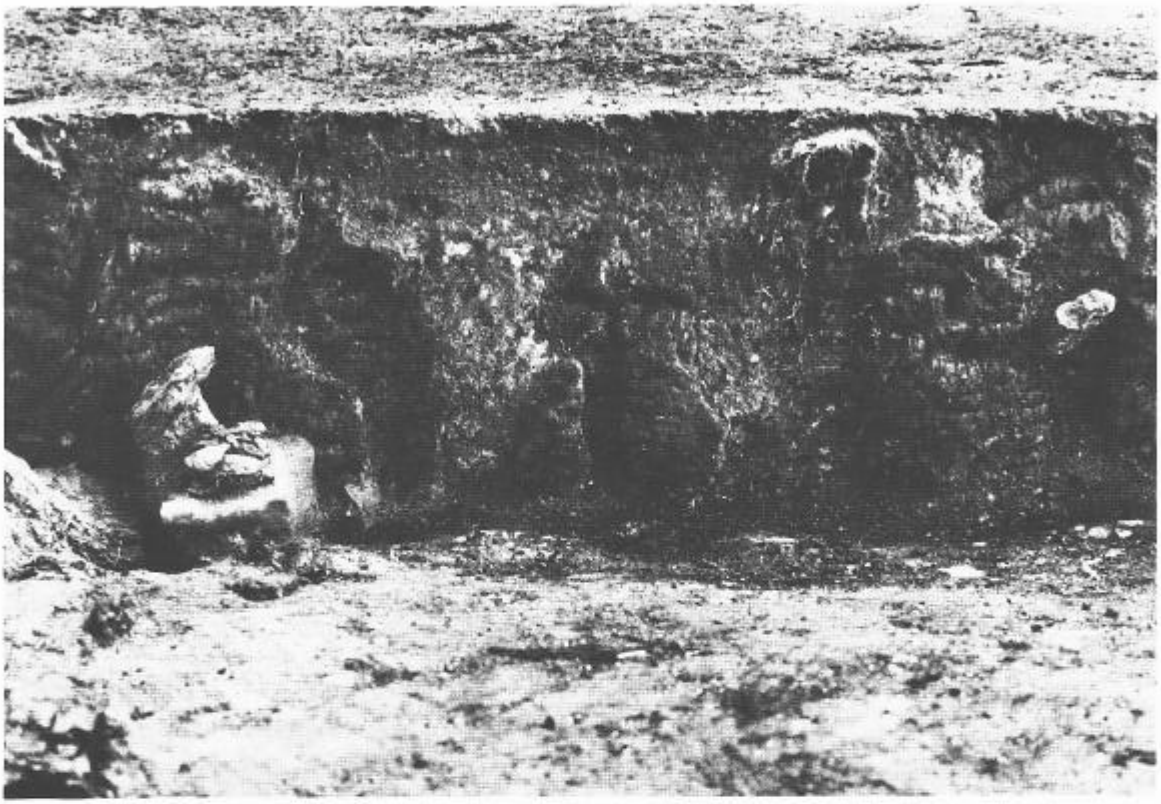
SI 016 竪穴住居跡覆土土層

図版28　　SI 016 竪穴住居跡東壁際の炭化材

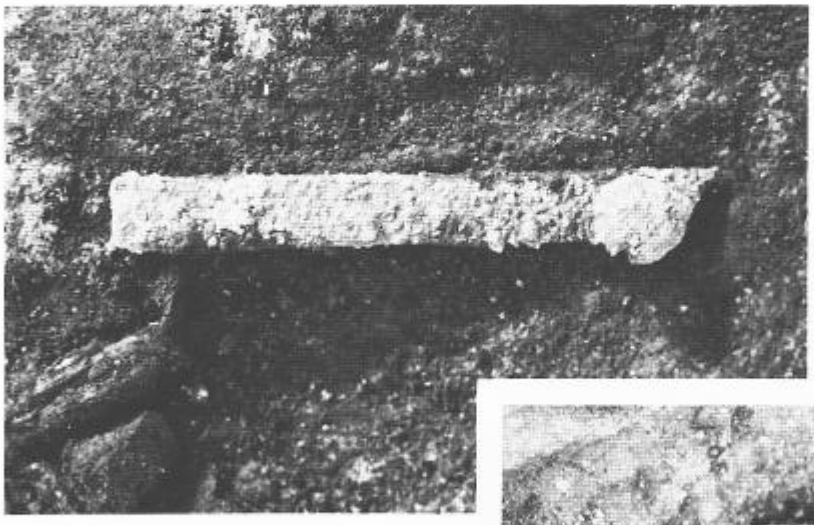


SI 016 竪穴住居跡（西▶東）

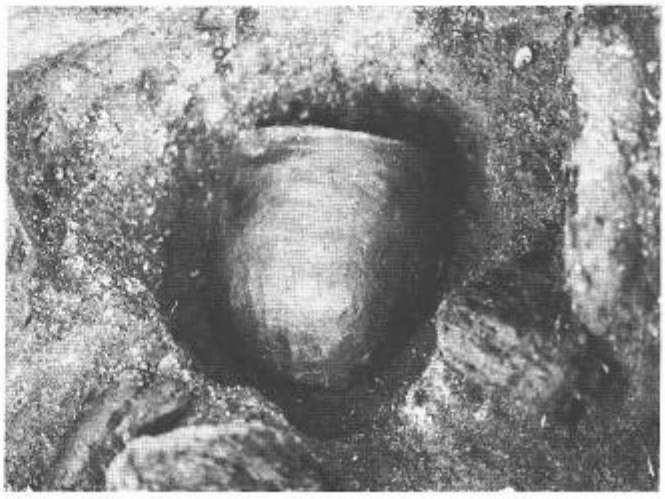
図版29　　SI 016竪穴住居跡カマド



▲壁際の炭化材

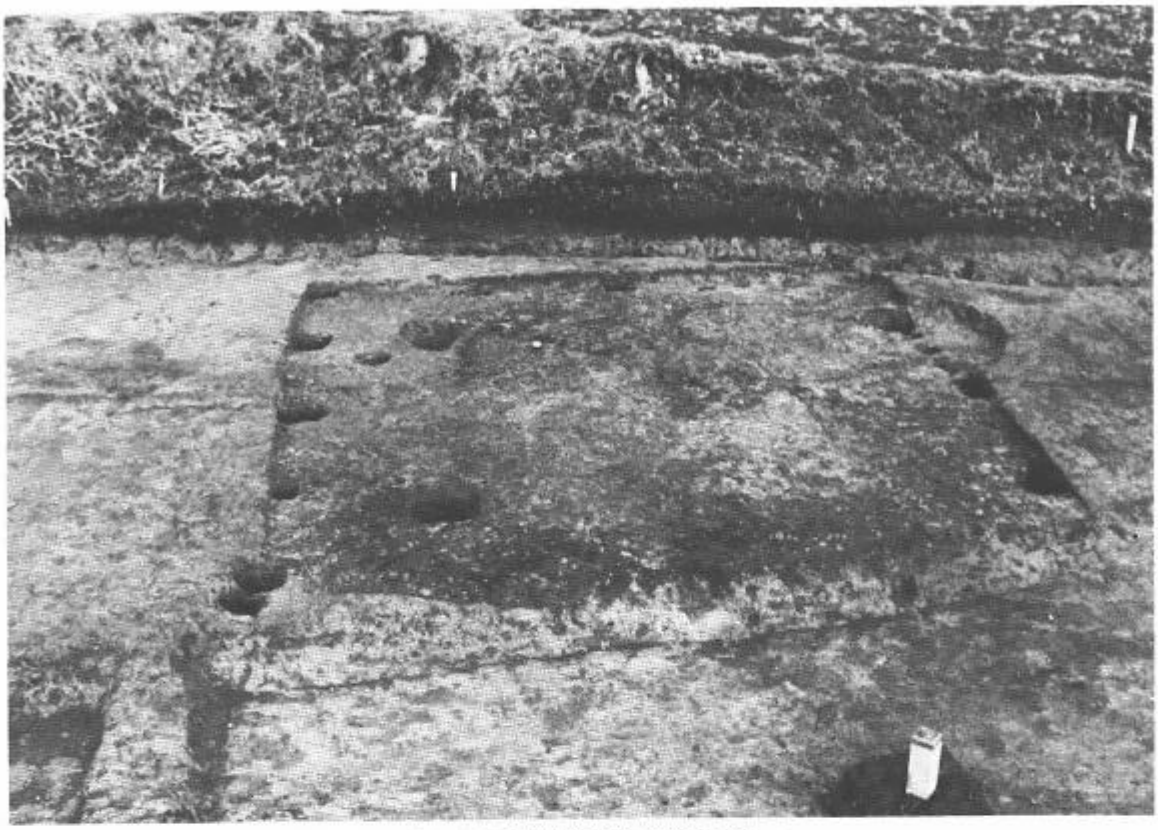


◀直刀

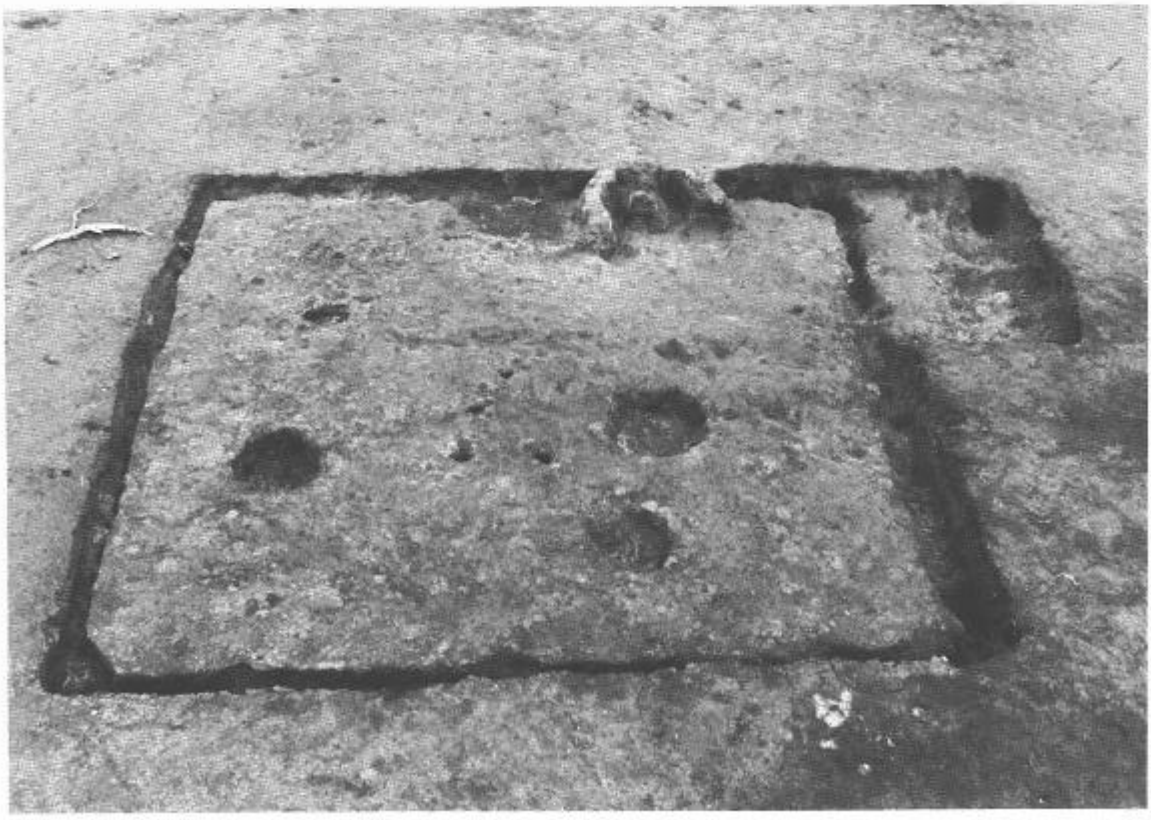


カマド脇で出土した土師器▶

図版30　　SI 016 竪穴住居跡、出土遺物、炭化材



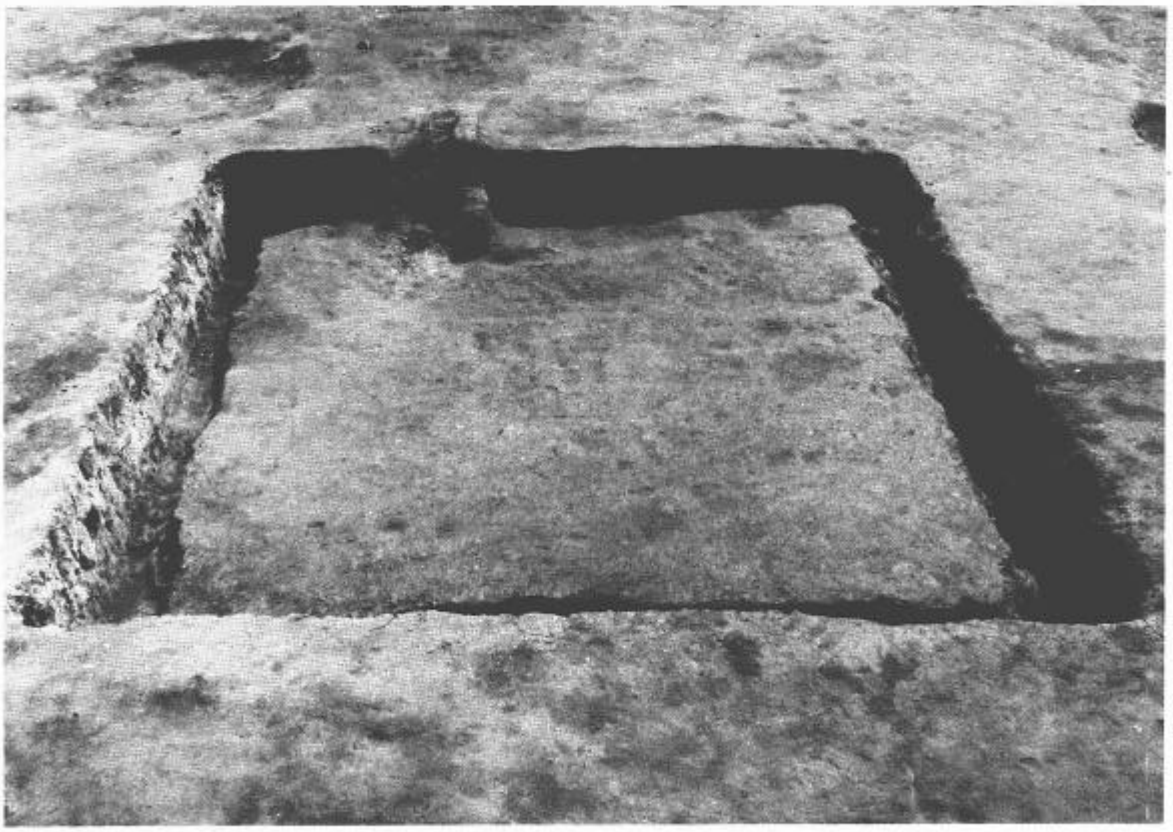
SI 017 竪穴住居跡（西▶東）



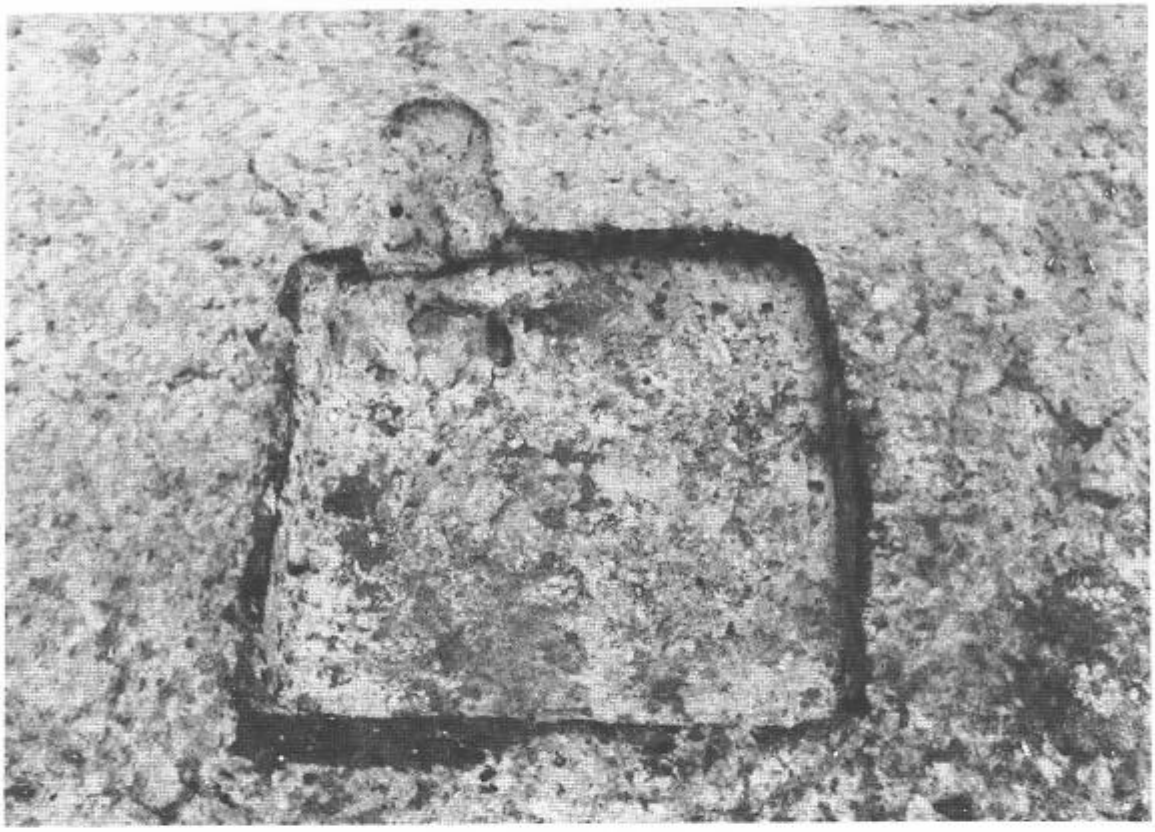
図版31

SI 018 竪穴住居跡（北▶南）

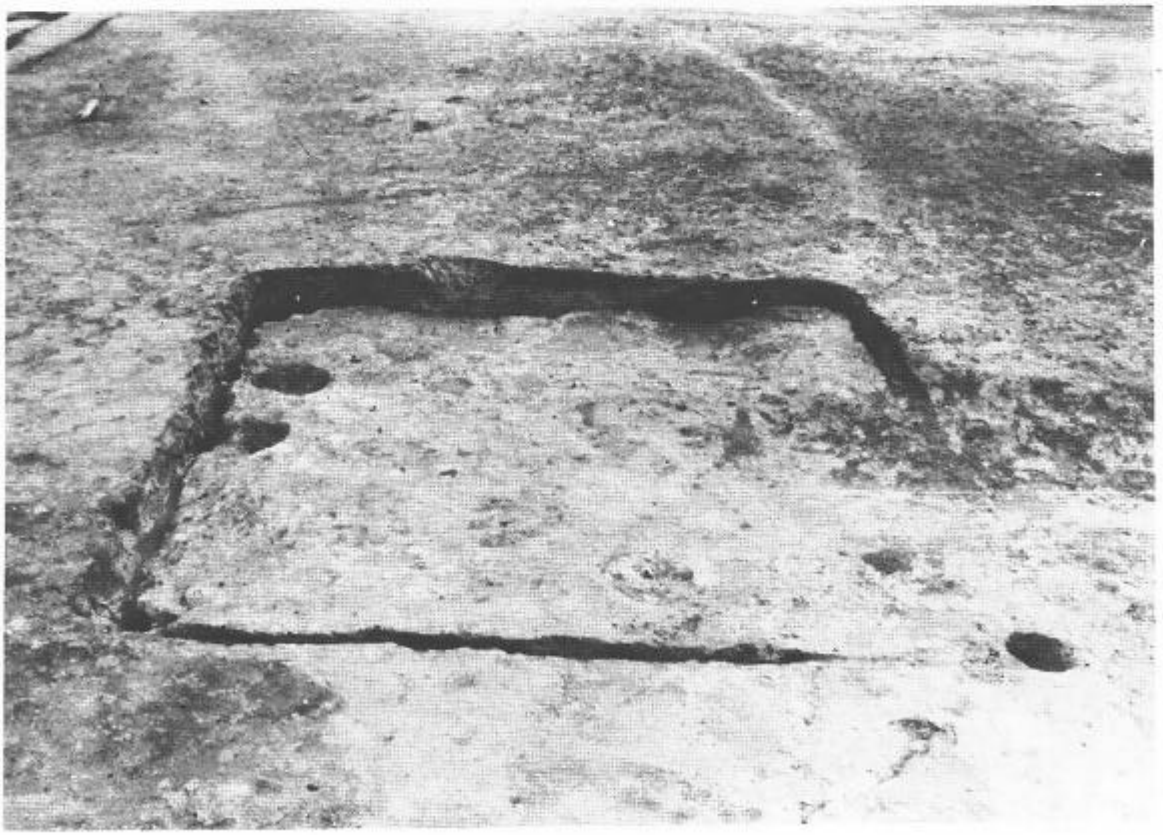
SI 018竪穴住居跡カマド



図版32　　SI 019竪穴住居跡（北▶南）



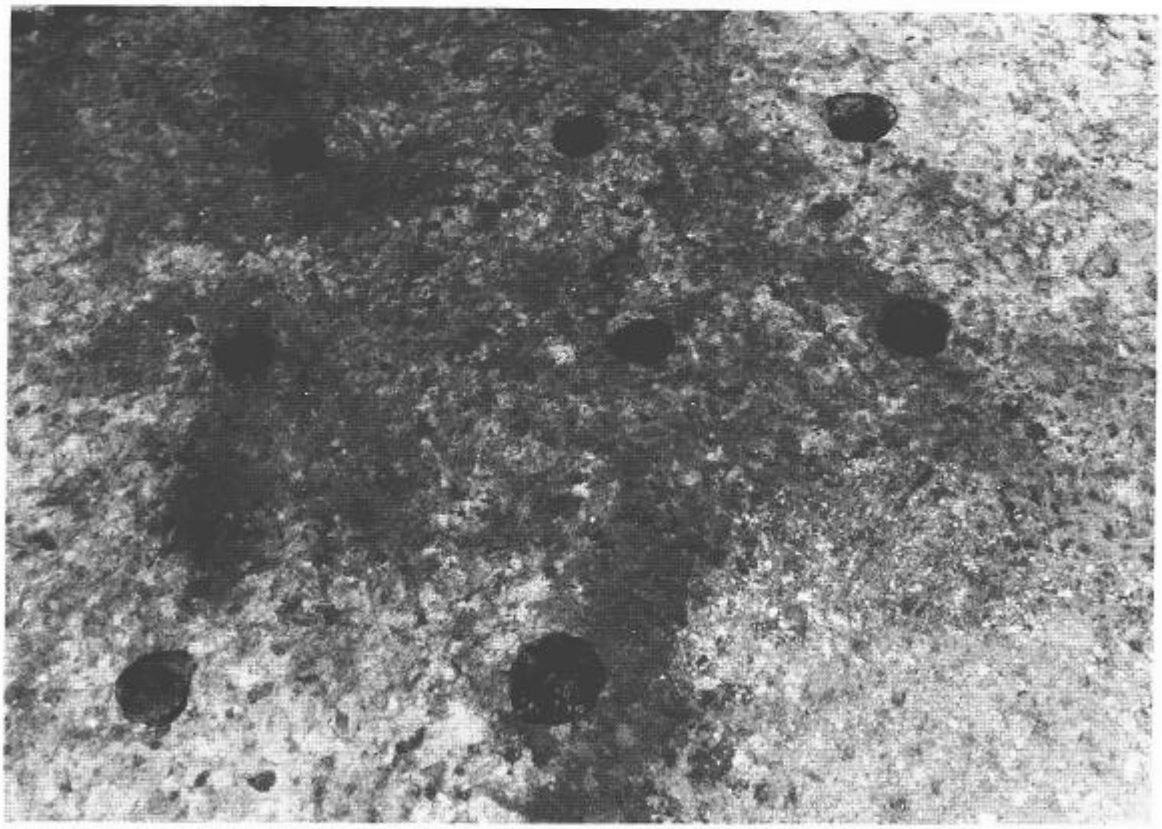
SI 020 竪穴住居跡（北▶南）



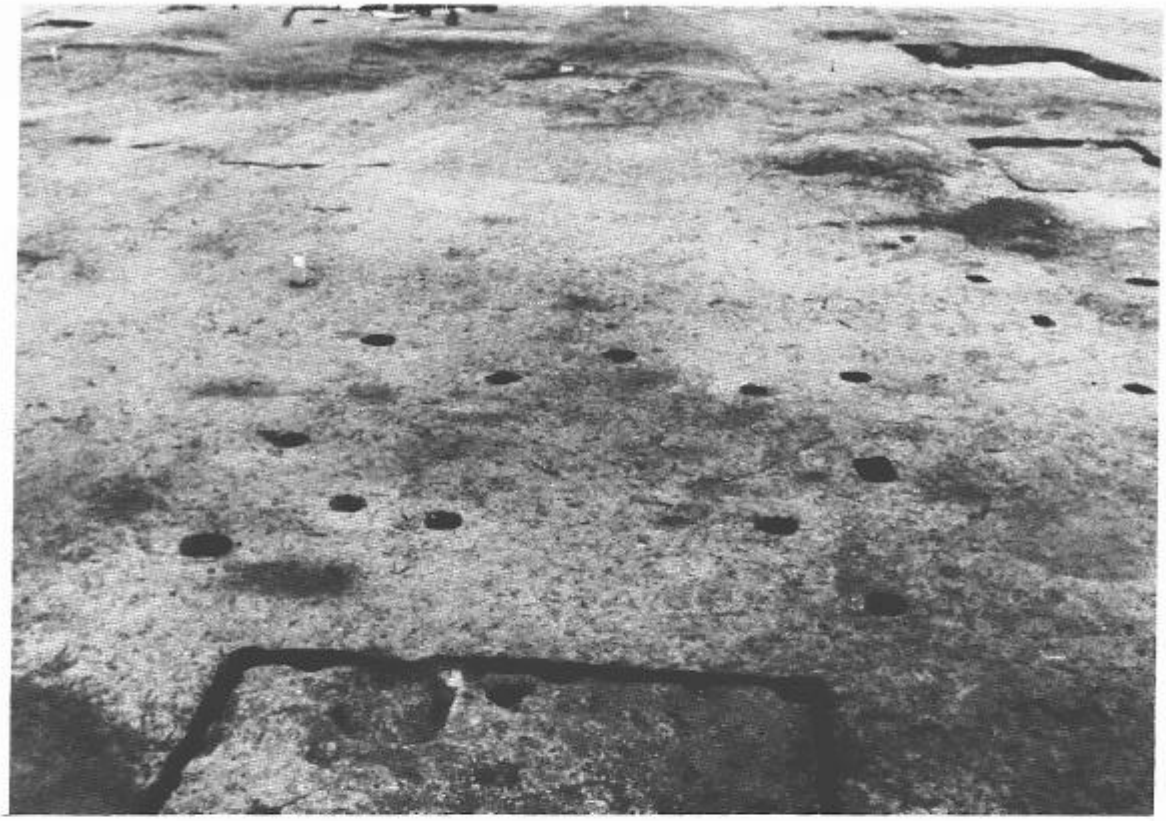
図版33

SI 021 竪穴住居跡（北▶南）

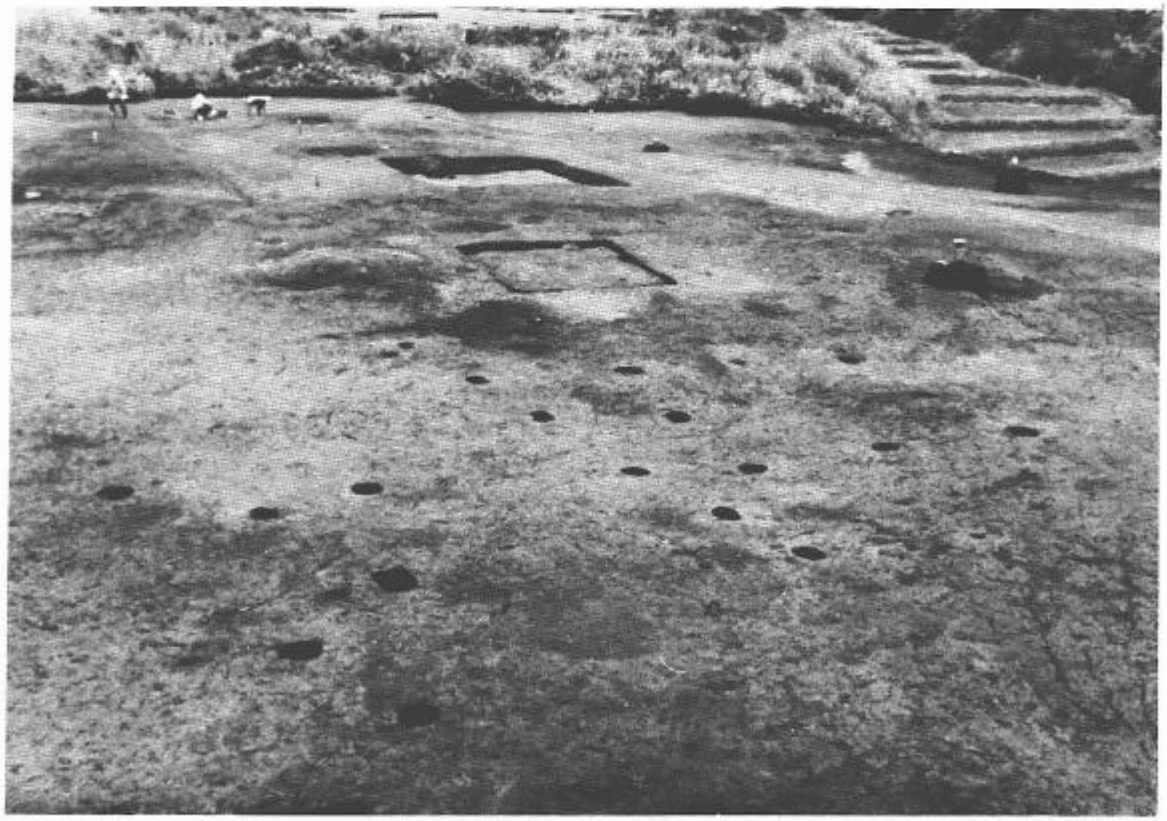
SI 022 竪穴住居跡（南▶北）



図版34　　SB 003 掘立柱建物跡（東▶西）



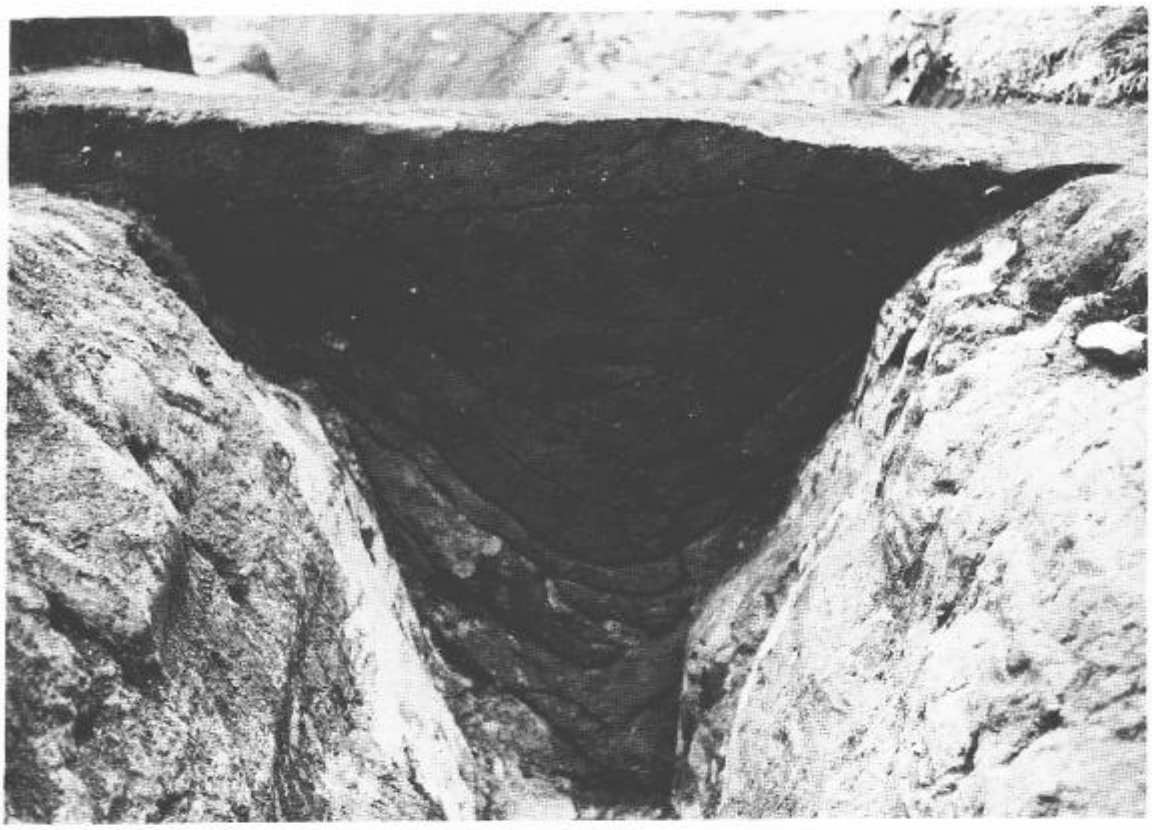
SB 005、009 掘立柱建物跡



図版35　SI 016、019 竪穴住居跡　SB 006 掘立柱建物跡　SA 001 柱列（北▶南）

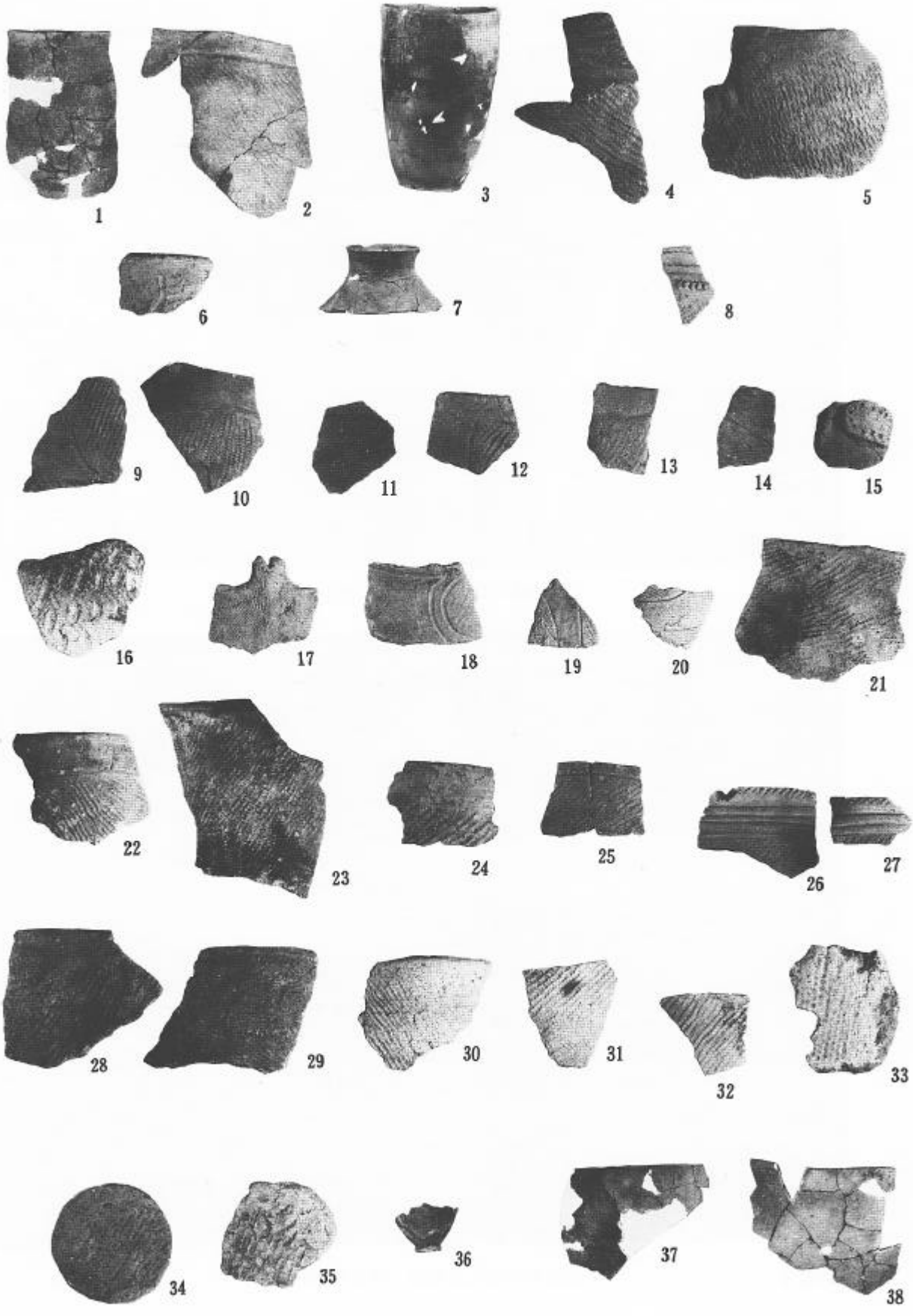
SD 007 溝状遺構（南▶北）

図版36　　SD 008 溝状遺構（北▶南）

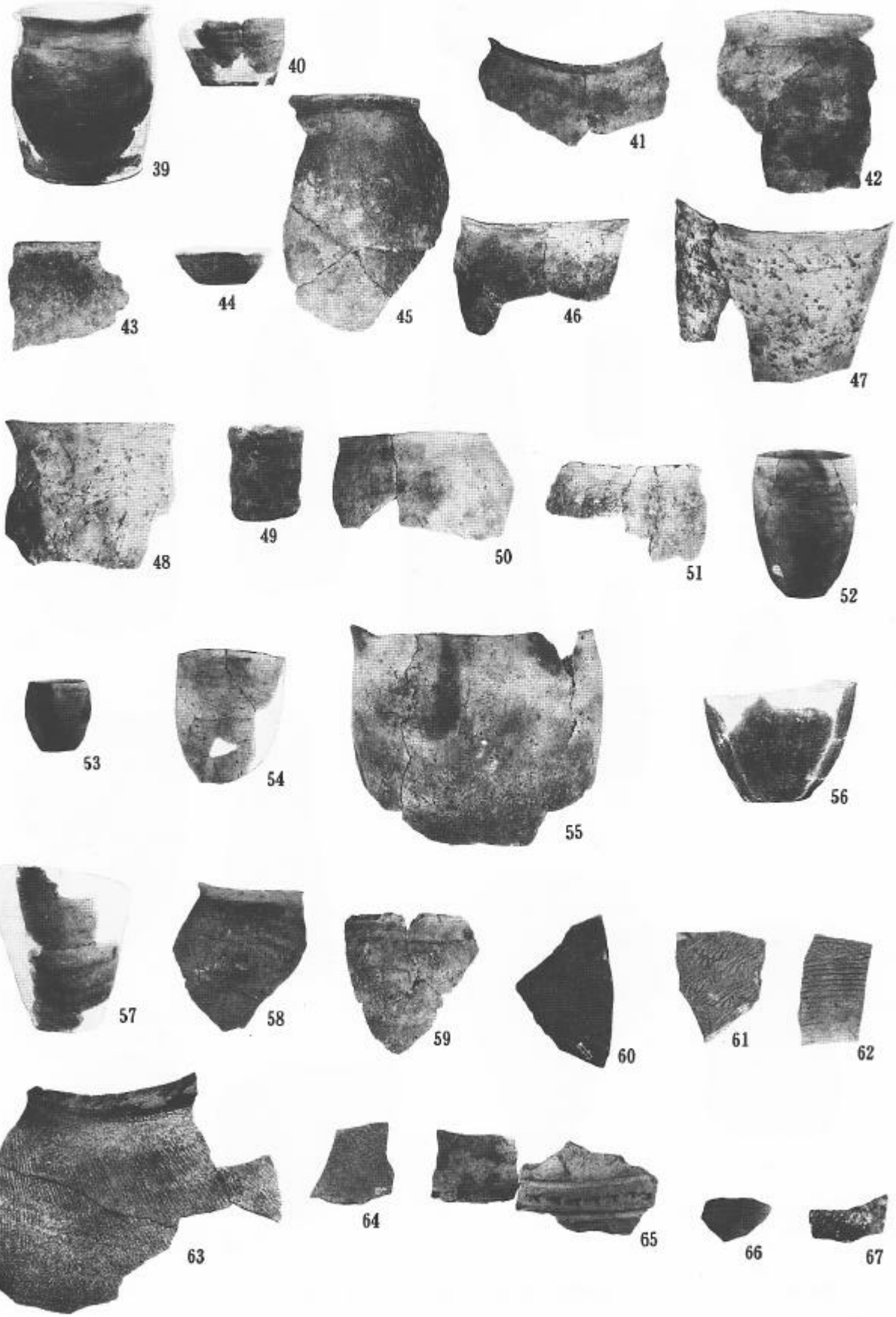


SD 008 溝状遺構の土層

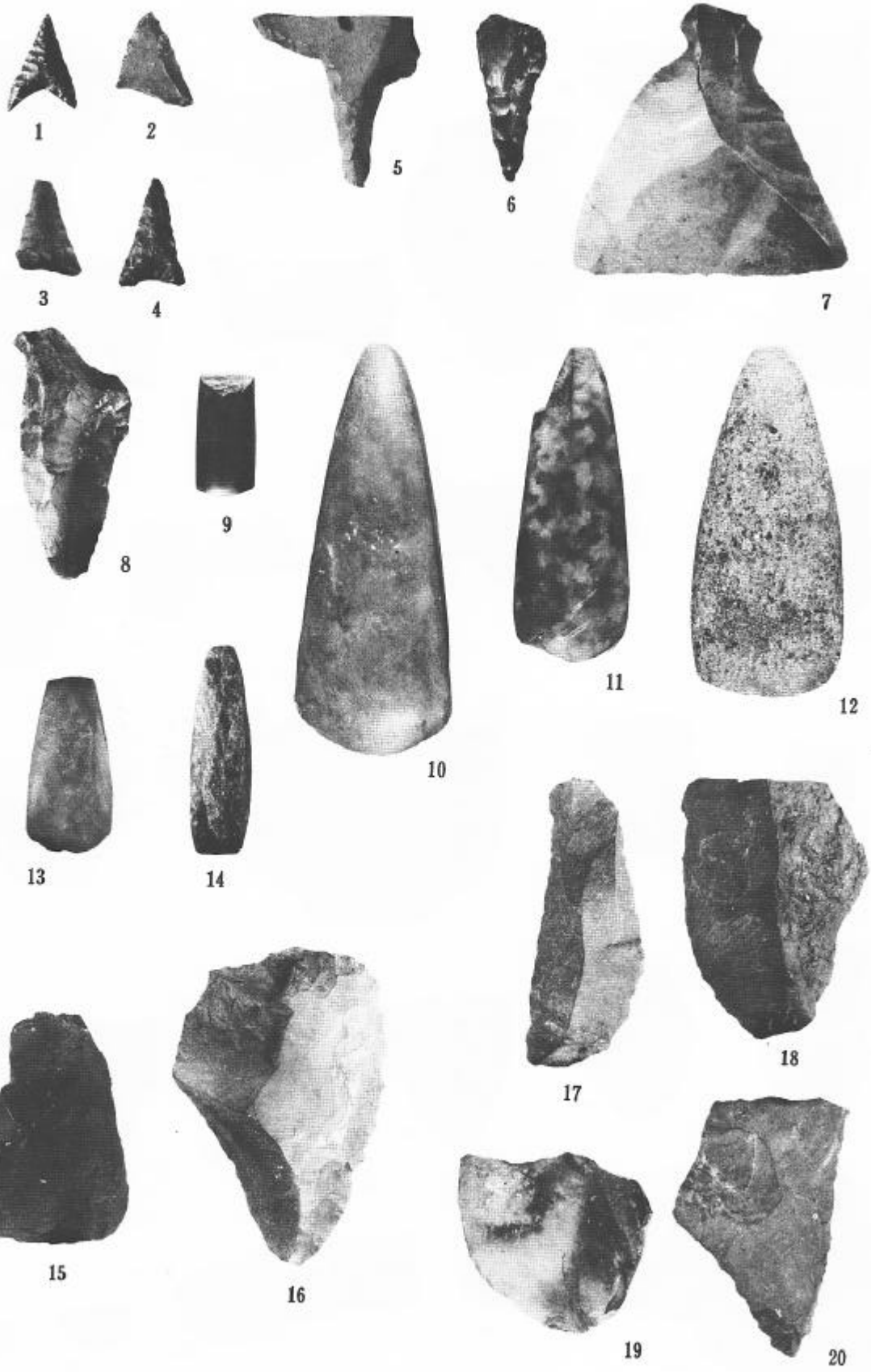
図版37　　遺跡中央部の住居跡・掘立柱建物跡



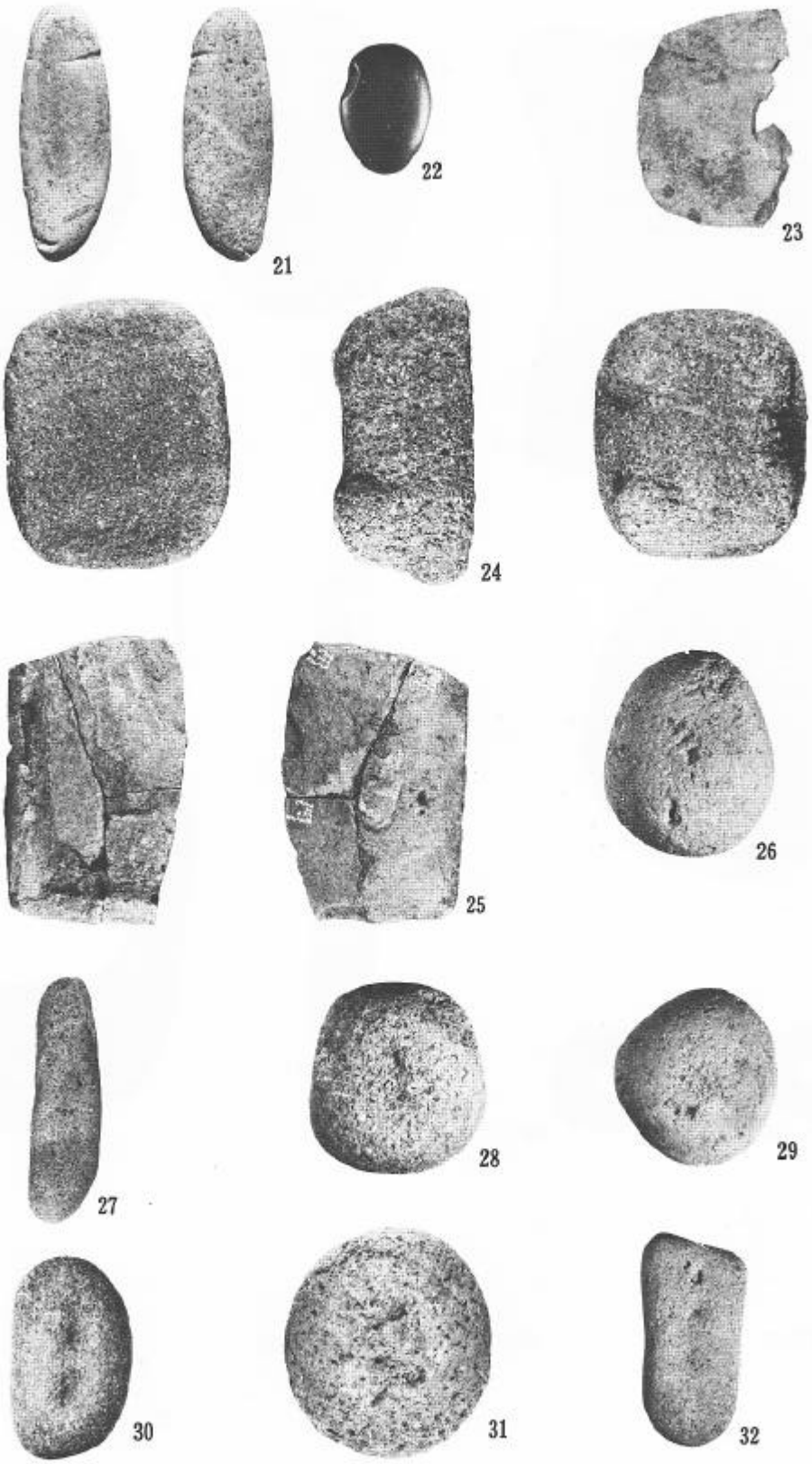
図版38　　遺構内・外出土土器(1)　　1～38



図版39　　遺構内・外出土土器（2）　　39～67

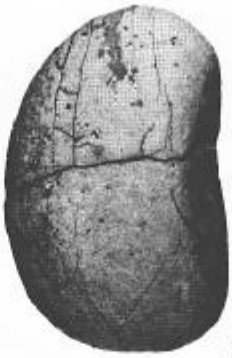


図版40　　遺構内・外出土土器（1）　1～20



図版41　遺構内・外出土土器（2）

1


2

3

4

15

6

17

18

19

10

図版42　　歴史時代石器、鉄器、古銭